
Infinite Sky

ショウゴ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

I n f i n i t e S k y

【Nコード】

N 7 6 0 6 Q

【作者名】

シヨウゴ

【あらすじ】

ISの二次創作でありがちな一夏以外にISが使える男のオリキヤラ主人公による作品です。

作者個人の嗜好でオリキヤラは最強ではありません。

文才がないので不定期更新になると思いますが、それでもよければよろしく願います。

01 入学と再会（前書き）

この作品はISの二次創作ではありがちな一夏以外に男でISを動かすことの出来るオリキャラを主人公にしたものです。

作者個人の嗜好でセシリアのオリキャラに対する初期好感度が高くなっています。

01 入学と再会

(なんで俺はここにいらんだらう?)

公立IS学園。10年ほど前に突如現れ、世界を震撼させたインフ
ニット・ストラトス 通称IS の操縦者を育成するた
めに創設されたこの学園は、本来なら男が入学することは不可能だ。
理由はいたって簡単。ISを操縦できるのは女性のみはずで、男
が触ったところでうんともすんとも言わず、動かすことなど出来な
い……………はずなのだ。

それどころかこのISが登場してからというものの、既存の戦闘兵
器は鉄屑同然となり、有事の際の防衛力はどれだけのIS操縦者を
保持しているかにシフト、
その影響もあって、最強の兵器を使える女性¹偉い存在という構図
があつという間に社会に浸透し、
世界中のあらゆる国が様々な女性優遇制度を追加していき、男の価
値は奴隷か純粋な労働力として扱われることが多くなり、完全に女
尊男卑の社会となった。

で、そのISの操縦者を育成するIS学園に男の俺、アルバート・
ウィルソンがいるのかというと、俺もISを動かすことが出来るか
らだ。

女性しか動かせないといっておきながら男が動かせてるだらうと思
った人たち、そのとおりである。

俺は世界で二人だけの『ISが操縦できる男性』の一人なのだ。

横目でそのもう一人の『ISを動かせる男』で、数年ぶりに会う友人、織斑一夏も俺と同じ様にこの状況に順応しきれていない。

周囲の女生徒から浴びせられる好奇心に満ちた視線は、俺と一夏に半分ずつの割合で注がれている。

その視線の針の筈に座っていると、教室の扉が開いて先生がやってくる。

「全員揃ってますねー。それじゃあSHRはじめますよー」

そう言うてにつこり微笑む副担任の山田真耶先生。

「それでは皆さん、一年間よろしくお願いしますね」

先生はそう言うが、クラス一同が異様な緊張感に包まれているため誰も返事をしない。

「じゃ、じゃあ自己紹介を出席番号順にお願いします。最初は…」

山田先生がそう言うて、自己紹介が始まるが、俺の名前は日本語表記で『あ』なのですぐに順番がやってくる。

「それじゃあ、次はアルバート君ですね」

俺は意を決して立ち上がり、周囲を見回す。四方八方からの視線に内心たじろぎながら、俺は自己紹介を始める。

「アルバート＝ウイルソンです。国籍はイギリスで、趣味は料理、レパートリーは洋食がメインですが、こう見えて父親が日本人なので一時期日本に住んでいた事もあり、一応和食も作れます。みなさ

ん、これから一年よろしくお願いします」

そう言っ頭を下げて、上げると、そのまま着席する。

俺の容姿は母方の祖父の容姿が隔世遺伝しているようで、顔立ちや髪と瞳の色は典型的な外国人っぽい金髪碧眼に、欧米人の同年代の平均身長からすれば少し低め、

同年代の日本人からすればちょっと高めという微妙なラインの身長をしている。

以前日本に住んでいた時はこの容姿が原因で一悶着あったのだが、それのおかげで一夏たちとも知り合えたので、そこまで気にはしていない。

「はい、ありがとうございます。それじゃあ次は…」

そう言っ山田先生が次の生徒に言いながらも、女子の視線の約半数は俺に注がれたまま、残りの半分が一夏に集中する。

その様子を見ながら、俺はこの学園に通う経緯を思い出していた。

その日、俺はイギリスの自宅近くにあるISSの研究所に勤務する母の元へ忘れた弁当を届けに行った。

俺の母は偶にこういったドジをする。忙しくない時は自分で取りに来るのだが、ここ数日は忙しかったようなので、取りに来る暇はないだろうと思い、

正規の手続きをとって研究所へ向かい、母の研究室に向かった。

研究所のスタッフさんたちも何度か来た事のある俺の事は覚えていてくれたようで、母の研究室の扉の前に立つと、インターホンのスイッチを押す。

「母さん、忘れてた弁当持ってきたよ」

「ああ、ありがとう。今開けるからちよっと待って」

そう言っしてしばし待つと、圧縮空気の抜ける音と共に扉が開く。

「ありがとう、アル」

「いいよ。それよりそれが新しいIS?」

入り口近くのデスクに弁当を置くと、部屋の奥には真新しい空色のISがたたずんでいた。この研究所で製作されたブルー・ティアーズやサイレント・ゼフィルスと似たデザインのそれは、女性専用ということを差し引いても十分かっこよかった。

「ねえ、少し触っていいかな?」

興味本位で製作者である母に聞くと、母は少し笑いながらこう言った。

「ふふつ、いいわよ。アルも珍しいわね、男でISが好きって」

「女性専用ってのが悔しいけど、かっこいいし、元はあの人を作っ

た物だからね」

日本に住んでいた頃に通っていた剣術道場の道場主一家のお姉さんが基礎理論を構築し、世界のあり方を根本から作り変えたISは、実際に動かす操縦者や整備員の人達はISの特性上女性で占められているが、

その兵装や新技術の開発レベルになってくると、だいたい男女比は半々になる。

なので、あのことが起きなければ、俺はハイスクールに普通に入学し、卒業後はその手の研究をしているカレッジに入学、ISの兵装や新技術の研究者になるつもりだった。

部屋の奥にあるISに触れた瞬間、頭の中にキインという金属音が響くと同時に頭の中にISに関する莫大な情報が流れ込んでくる。長年熟知した知識のように頭の中に流れ込んでくる情報を即座に理解、把握していき、それが終わった頃には、俺はISを纏ってその場に数センチ浮いていた。

「……は？」

「……………うそ……」

自分に起こった事を理解しきれずに呆然とする俺と、本来女性にしか扱えないISを起動させたわが子を呆然と見つめる母。

本来起こりえないそれが起こって1分もすると、母は頭の再起動が終わったようで、慌てて内線を研究所内のセクション全てにつないで人を集めて俺の事を調べ始めた。

研究所の職員の人達に言われるがまま、俺はISの装着と解除を繰

り返し、偶然でないことがわかると今度はスポンサーである本社の人達に話が飛び、本社の人達が俺のことを知ると次は政府に連絡が飛ぶといった具合にどんどんスケールが大きくなっていき、最終的には世界的ニュースとなつて俺の存在が世界中に報道され、同時に一夏の事も報道されてイギリスの自宅には世界中の様々な報道陣とIS関連企業の営業マン、おまけとばかりに遺伝子研究所の研究者がやってきて、

その対応に困っているとイギリス政府直属のネゴシエーターの人がやってきてあつという間にIS学園への入学が決まり、

それからは俺が起動させたIS『スカイ・ブレード』のシステム側では出来ないハード面での調整とフォーマットやフィッティング、基礎知識の学習、実稼動訓練、模擬戦などをしていたら、いつの間にか入学式の日を迎えていた。

そんな感じで今この場にいるのだが、俺がぼけーつとしている間だろうと自己紹介は続くのだが、一人あたりの時間が結構長かったようで、出席番号が早いであろう一夏の番がやっと回ってきたようだった。

「えー……えつと、織斑一夏です。よろしく願います」

そう言つて一礼する一夏だが、女子の視線は相変わらず注がれたままで、趣味やら興味のあることやら言えればいいものの、何を言えればいいのか迷っているらしい一夏は視線の圧力に屈してこう言った。

「……………以上です」

あんまりといえはあんまりな自己紹介にずっこける数名の女子生徒と、教室に入ってくる黒のスーツをピシッと着こなした女性教師。

「あ、あのー……」

意を決して一夏の後ろの女子が何かを言おうとした瞬間にそれは起きた。

スパァン！！

「いつ！！」

小気味のいい音を立てて出席簿で一夏の頭をはたく女性教師と、突然頭をはたかれた衝撃に一夏はギリギリと無理矢理首を動かしながら後ろを向く。

「げえっ、関羽！？」

何故そこで三国志のネタに走るのか不思議に思う俺をよそに、再び出席簿が一閃されて一夏の頭がはたかれる。

その女性教師の顔は見えがかったのだが、まさかここで再会するとは思っていなかった。

織斑千冬さん。織斑一夏の実姉であり、第一回モンド・グロツソ（ISを使った総合競技）の総合優勝者で、日本にいた時には俺も色々とお世話になった。

実弟への注意と周囲から上がる黄色い声援に呆れながら、SHRを終わらせようとする。

「さあ、SHRは終わりだ。諸君らにはこれからISの基礎知識を半月で覚えてもらう。その後実習だが、基本動作は半月で体に染みこませる。いいか、いいなら返事をしろ。よくなくても返事をしろ、私の言葉には返事をしろ」

そう言っつて授業に入ろうとする千冬さんを見ながら俺は立ち上がり、俺は千冬さんにむかつて挨拶をする。

「お久しぶりです、千冬…いえ、織斑先生」

頭を下げながら千冬さんの名前を呼ぶが、ここでは教師と一生徒なので呼びなおす。

「ああ、久しぶりだなアルバート、お前も席に着け。授業を始める」

そう言っつて授業を始める千冬さんを見ながら俺は席に着くと、入学初日の初授業　IS学園では入学式当日から授業がある
である、ISの基礎理論授業が始まるのだった。

1時間目の授業が終わった休み時間。授業自体は事前にISの教本を読んだり研究所の人達に教えてもらっていたのでなんとかついていけたのだが、

授業終了直後に今までのクセで次の授業の教室へ行くこうとして席をたった瞬間、IS学園は純日本風の学校で教師が教室を移動する事を思い出す。

俺達を見に来たのか、教室の廊下には上級生も含めて女子生徒が続々と集まってきていた。

学園中の注目の的であることもあって、俺が席を立った瞬間にクラスじゅうの視線が俺に集中してしまつて微妙に気まずかったのだが、俺はそのまま一夏に近づく。

男子生徒同士の話ということ、周囲の女子生徒の視線は何をするのか期待に満ちた視線が俺達に注がれる。

「よう、久しぶりだな一夏。元気にはしていたようだな」

「そついうお前も元気そつじゃないか、アル」

そつ言つてお互い拳をつき合わせながら、俺達は再開の挨拶をした。

「お互いとんでもない事になつたみたいだな」

一夏がやや疲れた表情で聞いてくるので、俺は今日までにあったことを一夏もやつたのか聞いてみる。

「そつだな。やつぱお前の所にも報道陣とか来たのか？」

「来た来た。IS関連企業のお偉いさんやら遺伝子研究所の職員やらが来て大変だった」

「俺の所も似たようなもんだ。ISが使えるつてわかつてから今日まで報道陣やらの対応以外は最低限の休みで基礎知識の詰め込みや実機動かして訓練してたからな。」

「そついえばお前つてISどうしてるんだ？やつぱ男がIS動かしたデータ収集用に専用機が用意されてるのか？」

俺の場合、研究所内でISを起動させたこともあつてか、かなり早い段階で政府のお偉いさんの前でISを展開したので、本当に男でISを動かせると認可されて、

男がISを動かした際のデータを収集、さらには各国のエンジニアや特殊部隊からの自衛の名目で起動させたISは俺の専用機とされた。

この時俺は一夏も自分と似た状況でISを起動させたと思つていたので、既に一夏にも専用機が用意されていると思つてそう聞いてみたのだが、

ここでお互いの知識量や周囲の環境の差が出た。

「専用機つて何だ？それに、お前もここには強制的に入学させられたんじゃないのか？」

「あー………専用機についてはそのうち授業でやると思う。それに、俺も国に言われて強制入学させられたけど、元々操縦者じゃなくてISそのものに興味あつたからな」

男でISに興味がある人間の殆どはその”操縦者”に興味を持っていて、IS”そのもの”に興味を持っている人間は少ないことをすっかり忘れていた。

一夏は俺が操縦者に興味がないと知ると、男でISに絡める唯一といていい仕事を思い出し、俺に聞いてきた。

「……つまりこれがなかったらIS関係の研究職に就こうと思つた？」

「正解。だから基礎知識くらいなら覚えてる」

「男でISそのものに興味があるつてのも珍しいな」

「だろうな。それでも全世界で見ればそこそこいるけどな」

その手のコミュニティサイトもネットにはそれなりにあるから、話をするには事欠かないが。

そうしてお互いの話がひと段落つくと、俺達二人に声がかかった。

「……………ちょっといいか？」

「え？」

「ん？」

声のかかった方向を見ると、そこには幼馴染がそのまま成長したような少女が立っていた。

「……………箒？」

「箒…さん？」

「……………」

日本にいたときに通っていた剣術道場の娘さん姉妹の妹さんで、髪型やどこか刃物を思わせる印象も昔のまま大きくなった箒さんがそこにいた。

「二人とも、廊下でいいか？」

「残りの時間も少ないから、手短に済ませられる事ならここでお願いしたいんだけど」

何せ休み時間はあと少ししかないので、廊下まで出て話してきて戻るとなると少し厳しい。

「む……………そうだな、アル」

周囲の女生徒たちが聞き耳を立てていることもあってか、篤さんはどうやらそのことを失念していたらしく、その場で押し黙ってしまった。

「そういえば篤」

「何だ、一夏」

「去年、剣道の全国大会で優勝したってな。おめでとう」

「へえ、それはすごい。おめでとう、篤さん」

それを聞いて感心していると、篤さんは顔を赤くしながら一夏に問い返した。

「なんでそんなこと知ってるんだ」

「なんでって、新聞で見たし……」

キーンコーンカーンコーン

一夏がそう言い終わると同時に二時間目の開始のチャイムが鳴り響き、それまで廊下を集まっていたほかのクラスの人も自分の教室に戻っていく。

「それじゃあまた後で、篤さん」

「あっ、ああ」

そう言いながら俺は自分の席に戻り、篤さんも顔を赤くしたまま席に戻る。織斑先生達が教室に入ってきたのはその直後だった。

二時間目のISの基礎構造に関する授業中に、一夏が事前に渡され

ていた必読のIS用の教本を捨ててしまっていて、千冬さんから頭をはたかれた上にあの分厚い教本を一週間で覚えるように言われ、それに関係して山田先生との放課後の補修が確定した様子を見ながら授業を受け終わった2時間目の休み時間、一夏や篤さんとは席も比較的近いためいつでも話せると思い、

俺は同じクラスになっていて、面識のある代表候補生に声をかけた。

「セシリア、今いいか？」

「どうしましたの？アル。幼馴染との昔話は終わりましたの？」

セシリア・オルコット。イギリスの代表候補生で、彼女の専用ISである『ブルー・ティアーズ』を俺の母が作った関係で以前からそれなりに話をしていたし、俺がISを動かせると判明してからも何度か模擬戦の相手をしてくれた。

模擬戦の勝率に関しては五分五分だが、元々彼女のISの特性を知っていたため、何とかこの勝率にできているのが現状で、知らなかったらもつと勝率は低かっただろう。

日本でいう彼氏彼女の関係ではないが、それなりに仲のいい女友達だと俺は思っている。

「いや、まだ終わってないけど、セシリア、日本に来る前に一夏の事気にしてただろ？紹介しようと思っただけだ」

「覚えていましたのね？まあ、あなたから声がかからなくても自分から話しかけていました」

セシリアはそう言うと席から立ち上がってさっさと一夏の所まで行くと声をかけようとするので、俺も一夏の所へむかう。

「ちょっと、よろしくって？」

「へ？」

突然話しかけられた事で素っ頓狂な声を出しながらセシリアの方を向く一夏。セシリアも一夏が自分を見ているとわかると、自分の用件を言い出す。

「織斑一夏さんでよろしかったかしら？」

「ああ、そうだけど……君は？」

「わたくしを知らない？このセシリア・オルコットを？イギリスの代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを！？」

セシリアが自分の事を知らない一夏に驚くので、俺はそれのフォロ
ーに入る。

「セシリア、自分が代表候補生だからって誰も彼も自分の事を知つてるとは限らないだろ？」

「そっ、それはそうですが、ISに関わる者として代表候補生の名前くらい知っておくべきでしょう！！」

顔を赤くして怒りだすセシリアとそれをなだめる俺を見ながら、一夏は俺にこう言ってきた。

「なあアル、二つ質問いいか？」

「どうした？」

「お前と彼女って仲良いのか？それと、代表候補生って、何？」

二つ目の質問を聞いた瞬間、俺を含めてクラスメイト数名がずっこける。

「あ、あ、あ……………」

「あ？」

「あなたっ、本気でおっしゃってますの!？」

すさまじい剣幕で一夏を問い詰めるセシリア。俺も埃を払いながら立ち上がる。

「おう。知らん」

一夏の放った言葉を聞いて怒りが一周して逆に冷静になったセシリアは、こめかみを人差し指で押さえながら小声で何か言いはじめたので、俺は一夏の質問に答える。

「一夏、二つ目の質問の答えからだが、代表候補生つてのはニューースとかで流れる国家代表IS操縦者の候補の事だ。単語から想像すればわかるだろ？」

「そついわれればそつだな」

納得した顔をする一夏。

「で、一つ目の答えは彼女は俺のガールフレンド」

「ほお」

少し意外そうな顔をする一夏。何か言っていたセシリアも少し顔を赤くしながら俯き、同時に周囲で聞き耳を立てていた女子生徒達のがやつきが大きくなる。

「もっとも、日本でいう彼氏彼女の関係じゃないぞ、仲のいい女友達ってところだ」

「そつか」

それを聞いて納得する一夏と、少し不満顔になるセシリア。周囲の女生徒たちも半数が落ち着きを取り戻し、残り半数は相変わらず驚いている。

「あなた、ISについて何も知らないくせに、よくこの学園に入れましたわね。アル以外にISを操縦できる男と聞いていましたから、同程度の知識を持っていると思っていましてけど、期待はずれですわね」

「俺に何かを期待されても困るんだが。それに、アルは元々ISにかなり興味持ってたみたいだから、そこまでの知識を求められても……」

「俺ほどの知識を持っているとは言わないが、一般常識程度のISに関する知識はあったほうがいいと思うぞ。山田先生の補修が終わってからでもよければ、多少なりとも教えようか？」

一夏はISの基礎知識すら不足しているようなので、助け舟を出しておく。幸いISの基礎知識程度だったら元々調べていたため、教える事ができる程度には覚えている。

「あー……そうだな、頼めるか？さっきの授業もさっぱり解んなかったし、教えてもらえると助かる」

「了解。連絡用にアドレス教える」

そう言ってお互いに携帯を取り出すとアドレスを交換する。

「おつ、織斑さん、ISのことわからないことがあれば、泣いて頼まれるようなら教えて差し上げてもよくなってよ。何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

お互いのアドレスを交換中、何を思ったのかセシリアが一夏に向か

ってそう言ってくるので、少し考えて一夏がそれに答えようとする。

キーンコーンカーンコーン

だが、その前に3時間目の授業開始のチャイムが鳴り、話を中断せざるをえなくなる。

「セシリアさん、だっけ？それに関してはまた後にしてくれ」

「そうだな、すぐにでも先生来るだろうから、セシリアも早く席戻ったほうがいいぞ」

そう言いながら俺も自分の席へ戻る。

「そっ、そうですね、またあとで来ますわ」

セシリアもそう言って早足で自分の席に戻っていく。その直後に山田先生と織斑先生がやってきて、3時間目の授業が始まるのだった。

「それではこの時間は実戦で使用する各種装備の特性を説明する」

1、2時間目と違い千冬さんが教壇に立ち授業を進める。元ブリュンヒルデ（IS世界大会での総合優勝者に与えられる称号）で様々なISとの対戦経験もあるだろうから、実体験も交えて話をするのだろう。

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決め

ないといけないな」

ふと思い出したようにそう言って、クラス代表について説明をする千冬さん。その説明を聞く限りだとクラス長の役割も兼任しているようで、その候補者を募る。

「はいっ、織斑君を推薦します!!」

「私はアルバート君を推薦!!」

「ふむ、候補者は織斑一夏とアルバート・ウイルソン……他にはいないか？自薦他薦は問わないぞ」

「俺!？」

千冬さんが候補者をディスプレイすると、半分蚊帳の外的な雰囲気を出していた一夏が驚きながら立ち上がり、クラス中から『彼ならやってくれる』という無責任かつ勝手な視線が注がれる。

「織斑。席に着け、邪魔だ。他にはいないのか？いないなら投票を始めるが」

「ちよっ、ちよっと待った!!俺はそんなのやらな」

「他薦された物に拒否権はない。選ばれたからには覚悟してもらおう」

「い、いやでも」

「織斑先生、質問があります」

一夏の言葉を半ば遮りながら俺は立ち上がる。当然クラス中の視線が俺にも注がれるが、それを半ば無視しながら先生に質問する。

「どうしたウイルソン。何か質問か？」

「はい。辞退することは出来ませんか？」

「今言っただけだろう。他薦された物に拒否権はない」

「わかりました。ではセシリア・オルコットを推薦します」

「ほお、オルコットか」

俺がそういうと、俺達に注がれていた視線の4分の1がセシリアに集まり、残りの4分の3の視線はそのまま、『どういった理由でセシリアを推薦したのか』の説明を求める眼差しになる。

「アル！！あなた、何を考えていますの！？」

突然の指名に驚きながら机を叩きつつ立ち上がるセシリアをよそに、俺は推薦理由を説明する。

「単純なクラス長ということなら俺や一夏でも問題はありませんが、クラス対抗戦ということは他のクラスの代表者と戦闘をすることになります。」

その場合ISの実稼働時間が少ない俺や一夏がクラス代表だとすく負ける可能性が高いです。その点彼女は代表候補生なので実力は十分にあり、負ける心配は皆無と思われるのが推薦理由です」

「あなたはISを起動させてすぐの模擬戦でわたくしに勝ったことがおありでしょう！！自信をお持ちなさい！！」

「殆どビギナーズラックだろ？より勝率を高めるならそっちがやった方がいい」

怒りながら俺の事を薦めるセシリアと、より勝率の高い選択肢を提案する俺の言いあい聞きながら、クラスメイト達は誰をクラス代表にすればいいのかを話し始め、クラス内がざわざわと騒がしくなる。

「全員黙れ。クラス代表の推薦は織斑とウィルソン、オルコット以外いないか？」

織斑先生の鶴の一声で俺を含めた全員が黙る。

「……………いないようだな。ウィルソン、オルコット。お前達はどちらが強いのかはつきりすれば納得するのか？」

「何度かセシリアとは模擬戦をしたことがあって、今の勝率は五分ですから、実際戦えば納得は出来ませんが……………」

「より強い者がクラス代表をするべきですので、実際戦わせていたれば納得はいたしますが……………」

「では1週間後の月曜。放課後、第3アリーナでクラス代表決定戦を行う。最初にオルコットとウィルソンが戦い、勝ち残った方が織斑と戦う事、異論は？」

織斑先生が俺とセシリアを見た後に一夏を見ながら質問してくるので、俺達は先生の方を向きながらこう答えた。

「「ありません」」

「千冬姉、どうして俺まで！！」

「織斑先生だ。お前も他薦されているんだ、拒否権はない。3人もそれぞれ用意しておくように。それでは授業を始める」

ぱんっ、と手を打って織斑先生が話を締めると、俺達3人は席について授業を聞き始めるのだった。

01 入学と再会（後書き）

戦闘シーンまでいってなくてすみません。

今回は戦闘シーンにいけると思います。

オリキャラの使うISも既に考えてあるので、次回は戦闘メインになると思います。

感想もお待ちしていますが、なるべくマイルドにお願いします。

02 入寮（前書き）

ごめんなさい。戦闘シーンまでいきませんでした。
今回は入学初日終了までのお話です。

02 入寮

「アル、昼食はもうお済み？」

授業が一段落ついた昼休み、昼食を取ろうと学食へ行こうとした俺をセシリアが呼び止める。

「いや、ただだけど？」

「それなら一緒にいかが？」

「ああ、構わない。3時間目の事についても話があるんだらう？」

「お見通しですね。とにかく移動しましょう」

そう言っただけ俺達は学食に向かう。しかもハーメルンの笛吹きのごとく俺の後ろを女子生徒たちがぞろぞろとついてくる。

学食に着いたらついたでモーゼが海を割った伝説のように人垣がスーッと割れてあっさりと学食の列につけた。

俺もセシリアも日替わり洋食セットを頼んで受け取ると、空いている席につくとセシリアが話しかけてくる。

「人気者ですわね」

「半分珍生物扱いだった。視線に物理的圧力があつたら、既に3回は圧死してる」

「それに関しては同情いたしますわ。それよりもどうして3時間目にわたくしを推薦いたしましたの？わたくし、クラス代表をあなたなら任せられると思っていたのです」

食事には手をつけず、俺の目を見ながら説明を求めてくるセシリア。

「理由としてはクラスで言ったとおりだよ。いくら模擬戦で勝った事があるといつても、元々ブルー・ティアーズがどういったISかは知ってたのとビギナーズラックで勝ってたんであって、純粋な実力でいえば俺はセシリアよりも弱い。」

それなら実力の高いセシリアがクラス代表になって対抗戦に出たほうが優勝の確率も高まる。それがより詳しい推薦理由だけど？」

理由を説明すると、セシリアはため息をはきながらこう言った。

「……………はあ、負けず嫌いのわりに計算高いですわね。それなら特訓しようとか思いませんか？」

「二週間そこらの訓練で優勝できると思うほど自惚れてないさ。より確実に勝てる手があるならそっちの方がいいだろう？」

「そういう理由でしたらわたくしも全力で戦って差し上げます。わたくしなら勝てると思って推薦していただいたようですし。代表決定戦、負けませんわよ？」

「それはこっちも同じだよ。ここでセシリアに勝てたらISの操縦についても少しは自信がつく」

「ではお互い勝つても負けても恨みっこなしということ。……………時間もありませんから食べてしまいましょうか」

「そうだな。いただきます」

話が一段落ついたので俺達は昼食を取り始め、その後の授業に備えるのだった。

その後普通に授業を受け終わり、今は放課後。約束していたとおり、俺は一夏に今日授業で教わった範囲の単語や用語の説明していた。

もつとも、俺達が余程珍しいようで、夕焼けが見え始めた時間になつても、クラス内だろうと、上級生だろうと、他のクラスだろうとお構い無しに女子生徒たちが教室外に現在進行形で押し寄せてきており、何を話しているかは判断できないが小声で何か喋っていた。

「それにしても3時間目の時は悪かったな」

「ん？クラス代表決定戦の事か？」

「ああ、俺とセシリアの戦いがメインで、お前との戦いがおまけみたいになつてるからな」

「でも実際に俺はIS初心者だからな。勝った方の胸を借りる気持ちでやるさ」

「それを言うなら俺も初心者だよ。でも戦うからには勝つつもりだろ？お互い全力を尽くそうぜ」

「ああ。お前相手でもセシリアさん相手でもやってやるさ」

それにしても今日1日は大変だった。出来ることならこのままホテルに行つてぐっすりと惰眠を貪りたい。

「ああ、織斑君、アルバート君。まだ教室にいたんですね。良かったです」

小休止で話していると、山田先生が書類片手に教室に入ってくる。

「どうしたんですか？先生」

「えつとですね、二人の寮の部屋が決まりました」

そう言つて部屋番号の書かれた紙と鍵を二つ渡してくる。

「あれ？俺の部屋、決まってないんじゃないかなかったですか？前に聞いた話だと一週間は自宅から通学してもらって話でしたけど」

「俺も寮の部屋が決まるまではホテルから通学って聞いてましたけど？」

「そうなんですけど、二人とも事情が事情なので一時的な処置として部屋割りを無理矢理変更したらしいです。……………お二人ともそのあたりのこと各政府から聞いてます？」

最後のあたりは俺達だけに聞こえるように耳打ちしてくる。

政府。つまり俺はイギリスの、一夏は日本の政府からの通達の事だろう。

俺はその手のセキュリティがしっかりしている政府要人御用達のホテル　IS学園の性質上学園近くにそういったホテルがあるから通学と言われていたのだが、それがなくなりありがたかった。

「そう言うわけで、政府特命もあって、とにかく寮に入れるのを最優先してみたいです。1ヶ月もすればそれぞれ個室の用意が出来ますから、しばらくは相部屋で我慢してください」

「あの、山田先生。耳に息がかかってくすぐったいんですが」

「あつ、いやつ、これはそのつ、別にわざととかではなくてですね……………」

そう言いながら慌てて一歩下がる山田先生。

「それはわかってますけど、俺は荷物を取りにホテルに戻らないといけないですから、失礼させてもらっても構いませんか？」

「俺も準備をしないとイケないですし」

「あ、いえ、お二人の荷物なら……………」

「私が手配をしておいてやった。ありがたく思え」

声のした方を向くと、大き目のボストンバック二つを肩にかけ、トランクを一つ引いた千冬さんがいた。よく見るとボストンバックの片方とトランクは俺のだった。

「ど、どうもありがとうございます……」

「織斑、お前の方は生活必需品だけだな。着替えと携帯電話の充電器があればいいだろう。ウィルソンの方はホテルの部屋にあった私物は全て持ってこさせてもらった」

「ありがとうございます。織斑先生」

俺はそう言いながら千冬さんからバックとトランクを受け取る。

「じゃあ、二人とも時間を見て部屋に行ってくださいね。夕食は6時から7時、寮の1年生用食堂で取ってください。

各部屋にはシャワーがありますけど、学年ごとに使える時間の違う大浴場もありますけど……お二人は今のところ使えませぬ」

基本女子が生活する場所ですから、当然ですね。

「え、なんでですか？」

一夏は気付いていないようなので、ヒントを出す。

「一夏、校内の男女比率を考えればわかるだろ？」

俺がそういうと、一夏はどういうことを悟ったようだ。

「あー………そういうことか。そうだよな、男は俺達だけだった」

「そういうことだ。しばらくはシャワーで我慢しとけ」

お前は昔篠ノ之神社の大き目の風呂が好きだったけど、ここでそれは諦めたほうがいい。

「わかってもらえたようですね。そういうことですから、しばらくは我慢してください」

「……わかりました」

「了解です」

「それじゃあ、私達は会議がありますので、これで。二人とも、ちゃんと寮に帰るんですよ。道草くっちゃダメですよ」

そう言つて山田先生達は教室から出て行く。教室内外の女子達は何か話しているようだが、流石にこうなつては一度寮にむかわざるを得ないだろう。

「一回寮に行つて荷物置いてくるか」

「だな。荷物の片付けもしないといけないしな」

お互い立ち上がると全方位から視線の集中射撃が起こるが、それを半ば無視して寮へ歩いていく。

「そつえばアル、お前の部屋つて何号室だ？俺は1025号室だけど」

昇降口で靴を履き替えている時に、一夏が部屋番号を聞いてきたので、俺は渡された部屋番号を確認する。

「あれ？俺のは1032号室つてなってるぞ？」

「は？男子は俺達だけだから普通同室じゃないのか？」

「記載ミスか？とにかく、一度それぞれの部屋に行って、それぞれのルームメイトさんに話をしてから山田先生の所に行って、部屋割りを変えてもらおう。流石にこの歳で男女同居はまずいだらう」
「そうだな、そうするか」

お互いにそう言って、一度指定されている部屋番号に向かっていく。何かヤバい事が起こりそうな予感がするが、そうならないことを祈りながらお互い入寮するのだった。

「1032号室は……ここか」

コンコン

扉をノックしても中から反応がない。少し待ってみるが反応は何もないので、他の女子生徒さん達が集まってくる前に部屋に入らせてもらおう。

「……ほお、いい部屋だ」

さすが未来の国家防衛を担うことになるIS操縦者を育てる学園、設備のレベルがかなり高い。

「誰かおりますの？」

ドア越しに独特の曇った声が聞こえてくる。

「ああ、ちょっと相談があるんだが」

「相談？少しお待ちになって。今出ていきますので」

そう言ってルームメイトさんが出てこようとするのを待ちながら、俺はもう一度部屋を見回す。

見覚えある特注品の鏡台やテーブルとイスのセット、いくつかのインテリア　本来ならここに天蓋付きのベッドとシャンドリア、壁紙の張替えなどが追加されていたのだが、ルームメイトにもプライベートがあるのでやめさせた　を見て、今誰がシャワールームに居るかを察する。

「セツ、セシリア、ストップ！俺、アルバート！」

テンパって片言になってしまったのは勘弁して欲しい。

「あつ、アル！？どうしてあなたがここにおりますの！？しばらくはホテルから通学と言っていたでしょう！？」

シャワールームの扉越しにセシリアからも驚きの声上がるが、今はそれどころではない。

「それに関して説明するから、まずは何か着てくれ。一回部屋の外出てるから、着替え終わったら言ってくれ。相談がある」

「えっ、ええ。わかりましたわ」

そう言って俺はそそくさと部屋を出て扉を閉めると、扉に背中を預けてその場にしゃがみこむ。あと少しでも気付くのが遅れていたら、俺はブルー・ティーズで蜂の巣にされていただろう。

「あつ、アルバート君だ」

「へえ、あそこがアルバート君の部屋なんだ。いい情報ゲット」

騒ぎを聞きつけてそれぞれの部屋からぞろぞろと女子が出てくる。

しかも皆さん結構ラフな格好なので目のやり場に困り、目を閉じてセシリアから声がかかるのを待つ。

「……………お待たせしました、どうぞ」

体感時間としては10分以上そこで待っていると、入り口越しにセシリアから声がかかるので部屋に入る。

「た……………助かった。ありがとう、セシリア」

「いつ、いえ……………かまいません。それで、どういうことか説明してもらえますかね？入学の時にしばらくはホテルから通学と自分でおつしゃっていたでしょう？」

「あ、ああ。それは今から説明する」

俺はセシリアに政府側がゴリ押しで俺を入寮させたこと、一夏も同じ様な状況で、年頃の男女が同室はマズイからお互いのルームメイトに事情を説明した上で山田先生に部屋割りを変えてもらうように話をすることを伝える。

「そういうわけだから、まずは一夏の部屋に行つて、一夏のルームメイトさんと一緒に山田先生の所に行こう」

「わかりましたわ……………わたくしはこのままでも構わないのです
が」

「ん？セシリア何か言った？」

セシリアが何か言った気がするが、あまりに小さすぎて聞こえなかった。

「何でもありませんわ。それより早く行きましょう」

「セシリア待って。お前一夏の部屋番号知らないだろう？」

セシリアはそう言いながら部屋を出て行くこととするので、俺は慌ててセシリアの後を追う。

俺達が1025号室の近くに行くと、そこには大勢の女子生徒たちが集まっていて、1025号室内の様子を扉に近い人から聞きだし、それを伝えあっていた。

IS学園にいる男の一人という意味で一夏が珍しいのはわかるが、こんな状況になっていることに若干引きながら一番近くにいる女子生徒に話しかける。

「ちょっといいかな？」

「え？うそ、ウイルソン君！？どうして織斑君の部屋に！？しかもオルコットさんも連れて！？」

その女子生徒さんがそう言った瞬間、その場にいた女子生徒さん達の視線の8割が俺を射抜く。

「うっ……一夏とそのルームメイトさんに部屋割りについての相談があるから通してほしいんだけど……」

物理的圧力すら感じそうな視線の量に慄きつつそう言うと、本日二度目になるモーゼが海を割った伝説のように人垣が割れていく。

俺が気まづくなりながら、セシリアは堂々と女子生徒たちの間を通ると、既に部屋の扉が少しだけ開いていた。

「一夏いるか？」

そのまま部屋に入るのも失礼なので一声かけると、中から返事が聞こえてくる。

「あ、アル！！丁度よかった、箒にも説明をしてくれ！！」

かなり切羽詰った声を一夏が返してくるので慌てて部屋に入ると、剣道着姿で木刀に全体重をかけて一夏を押し倒そうとする箒さんと、その木刀を白刃取りして押し倒されようとしている一夏の姿があった。

「……………どういう状況ですの？コレ」

「一夏、お前は一体何をした？」

幼馴染二人のその姿を見た俺達は、状況把握ができなかった。

「あつ、アル！？どうしてお前が来るのだ。しかも女生徒連れで！！」

「あれ？箒さん、一夏から説明聞いてない？男女で同室は色々とまじいだろっから、山田先生に相談して部屋割り変えてもらおうって言っておいたんだけど」

「そんな話は聞いていない！！一夏からは同室だと言われただけだ！！」

「一夏。お前、箒さんにどういふ説明をしたんだ？」

俺が一夏がそう問いかけると、箒さんは木刀に体重をかけるのをやめたので、そこからどきながら一夏はこう反論してきた。

「俺が説明する前に篤が斬りかかってきたんだよ!! 篤、たのむから人の話は最後まで聞いてくれ!!」

「おっ、お前が早くそのことを言わないのが悪い!! それなら私も話くらい聞く!!」

「でも篤さん、早とちりはよくないよ」

「うっ……………そうだな。一夏、すまなかった」

俺がそういうと篤さんは素直に一夏に謝った。

「いや、いいよ。俺も言い方が悪かったしな。それじゃあ、山田先生の所に行って部屋割り変えてもらおうぜ」

「そっ、その前に着替えさせてもらっていいか? この時間にこの姿というのもおかしいだろう」

「そうだね。部屋の外で待ってるから着替えたら声をかけて」

「ああ。わかった」

そう言っただけで俺達3人は部屋を出て廊下で篤さんが着替え終わるのを待つ。

1025号室の扉の前には依然として大勢の女子生徒さんたちがいるので、扉から少し離れた俺達3人を中心として半円を描くように人垣が出来ている。

当然とすべきなのか、篤さんを待っている時間は俺達にとっても手持ち無沙汰な時間なので、その間に少しでも俺達のことを知ろうとした女子生徒の一人が俺達に話しかけてくる。

「織斑一夏君に、アルバート・ウィルソン君……………あとセシリア・オルコットさんだよ。私、二年の薫子。新聞部の副部長やってるんだけど、一つ聞いていいかな?」

「その間は何!?! わたくしは二人のおまけではなくてよ!!」

「セシリア、落ち着いて。先輩、俺達が気になるのはなんとなくわかりますが、人をおまけ扱いするのはどうかと思いますよ?」

セシリアをなだめつつ、黛先輩にも一言言っておく。

「ああ、ごめんごめん。オルコットさんにもいずれインタビューはさせてもらうから、その時はよろしく。それでウィルソン君、オルコットさんはガールフレンドで随分と仲が良いようだけど、どうやって代表候補生と知り合ったの?」

今の社会情勢を考えると、もっともな質問だった。女尊男卑な社会になってからというものの、女性にナンパをして成功するような男は殆ど容姿がいい人物。それこそホストやアイドルクラスの美形のみで、

その他の男がナンパしようものなら即警察のご厄介になるので、どうやってセシリアと知り合ったのが気になるのだろう。

「ああ、そのことですか。イギリスのIS研究所に俺の母親が開発者として勤めていて、ブルー・ティアーズの開発主任をやったので、研究が忙しい時とか、たまに母親に差し入れとか持ってたんですよ。」

その時にセシリアとは顔を合わせてまして、それから何度か話す機会があつたんです。もつとも、ここまで気さくに話せるようになったのは1ヶ月くらい前からですが」

それまではたしかに話をしたことはあつたが、セシリアは俺の事を見下した目で見ていた。それが大体一月前に行ったセシリアとの模擬戦で俺が勝った後からはそういった目を俺に向けてくることは無くなり、

色々と話しかけてくるようになったのだが、そこまで詳しく言う必

要はないだろう。

「ほうほう、なるほど。オルコットさん、ウィルソン君の言ってることに間違いはない？」

「ええ、ありませんわ。それより質問は以上かしら？わたくし達、これから山田先生の所に行かなければなりませんので」

セシリアがそう言うと、タイミングよく部屋の扉が開いて篝さんが出てくる。

「待たせたな。それでは山田先生の所に行こう」

「篠ノ之さんも来たみたいだし、ここまでだね。織斑君、君も今度インタビューさせてね？それじゃー！！」

そう言って、黨先輩は人垣の中に紛れていった。

「それじゃあ山田先生の所に行って、部屋割り変えてもらおう」

「そうだな。でも私物の移動とかはどうするんだ？」

職員室へむかひながら、もったもな質問をしてくる一夏。俺達は入寮したばかりで荷解きをしてないのでどうとでもなるが、篝さんとセシリアはそうはいかないだろうから俺はこう言った。

「俺達で移動させるしかないだろ。篝さん、私服以外に持ち込んだ私物って多い？」

俺が篝さんにそう質問すると、声のトーンが一段落ちながらこう答えてくれた。

「いや、そこまで持ち込んではいないから、すぐにでも移動できる」

篤さんは東さんの実妹だから、それに関係してそれなりに辛いことがあったのだろう。

「……………そっか。セシリアは私物が結構多かったから、セシリアと篤さんに1032号室を使ってもらって、俺達が1025号室を使うようにしよう。二人ともそれでいいかい？」

今から私物を移動させていたら引越しが終わるのが何時になるかわからないので、短時間で終わるプランを提案して確認する。

「そうですね。わたくし、かなり色々と持ち込みましたから、その移動となると1日かかってしまうかもしれませんから」

「そっだな。今からどたばたするのも他の生徒達にも悪いから、それで構わない」

「俺もそれでいいぜ。少しでも早く済ませて休みたいしな」

「じゃあその方向で。後は山田先生から承認が得られればいいだろ」

そう言いながら寮を出たところで、目的の人物がこちらに走ってくるのが見えた。

「ああ、丁度よかった。織斑君、アルバート君、二人とも荷解きつてもう始めちゃいました？」

「いえ、流石に年頃の男女が同居はまずいと思ったので、今からそれぞれルームメイトと一緒に先生の所に行つて、部屋割りの相談をしようと思つていたところです」

急いで走ってきたのか、少し息が上がっている山田先生を見ながら正直にそう答えると、先生は安心した声色でこう言った。

「良かった。あまりに急な部屋割りの変更だったから、ついさっきの会議でも議題にあがって、織斑君達を同室にするように決まったんだけど、二人ともそれでいいかな？」

それを聞くと、当事者の一人である一夏はこう言った。

「ええ、俺達もその方が気が楽ですから。会議で議題にあがったって言うてましたけど、俺達の使う部屋はどうなったんですか？」

「俺のルームメイトがセシリア、一夏のルームメイトが箒さんだったので4人で話しあつた結果、箒さんとセシリアが1032号室を使って、俺と一夏が1025号室を使おうって話になつてるんですが」

4人で話しあつた結果を山田先生に伝えると、先生はこう言った。

「会議でも織斑君とアルバート君を同室にして、お二人のルームメイトさん達を同室にするように決まりました。ただ、私物の移動がありますから今日だけは同室で我慢してもらつことになりましたが」「そうなんですか？箒は私物少ないみたいですから、運び出しにそこまで時間はかからないと思つんですが」

一夏がそういうと、山田先生は箒に向かって問いかける。

「篠ノ之さん、本当ですか？」

「ええ、私服以外だとそれほど私物は持ち込んでませんから」

「そうなんですか。でも、そろそろ夕食の時間ですから、4人ともまずは夕食をとってください。その後で先生も手伝いますから、急いで荷物を運んじやいましょう」

「わかりましたわ」

「わかりました」
「了解です」

上からセシリア、篤さん、俺と一夏の順でそう答える。

その後俺達は先生に言われたとおりまず夕食をとった後にそれぞれの私物の移動を開始し、それが終わる頃には夜9時近くになっていた。

部屋の移動がようやく終わり、お互いにシャワーを浴びてさっぱりした頃には11時近くになっていた。

「今日はお互いに疲れたな」

「ああ、でもこれから十分大変だと思うぞ？しばらくは珍生物扱いも続くだろうし」

そうやって考えると、今この時間が貴重に思えてきてしょうがない。

「それでも、アルがいてくれるだけで精神的な負担は結構減ってるぞ。コレで俺一人だったら耐えられそうにない」

そう言って苦笑いを浮べる一夏。

「それは俺も同じだな。いくら知り合いがいるとはいえ女子ばかりの中に男子一人は肩身が狭すぎる」

「まあお互いこれから助け合っていこう。さしあたってはISの用

語に関して頼む」

「いいけど、俺もまだ勉強中だから、わからない部分も出てくると思う。その時は山田先生あたりに聞いてくれ」

「ああ、そうする。それじゃあ寝るか」

「おう。お休み」

そう言ってお互いにベッドにもぐりこんで眠り始める。お互い余程疲れていたようで、その後は一言も話さずにぐっすりと眠りこけるのだった。

02 入寮（後書き）

はい、前回後書きで戦闘メインとか言っておきながら完全に日常編です。

セシリアとの戦闘シーンは早ければ次回、もしかするとその次になる可能性もあります。

とにかく完結を目指したいと思いますので、皆さんよろしくお願ひします。

03 準備期間とクラス代表決定戦 アルバートVSセシリア（前書き）

PV数5000オーバー、ありがとうございます。

今回は少し難産でした。今回出てきている女性キャラは一応原作にも出ています。ただし、モブですが。

少し設定も捏造しちゃいました。

03 準備期間とクラス代表決定戦 アルバートVSセシリア

翌朝6時。いつも家事をしていたから勝手に目が覚めて、自分と母親の二人分の昼食用の弁当を準備し始めようと思ってしまった主夫根性について少しばかり考えた後、朝食までまだ時間があるので、ジャージに着替えてランニングをする。

幸いといっていいのはわからないが、IS学園のグラウンドは1周5キロあるので、グラウンドに出て1周走って寮に戻ってくるだけで朝食の開始時間になるだろう。

走っている最中はただ走ることに集中しているのでどれくらい時間がたったのか曖昧になるが、寮に戻ってシャワーを浴びる直前に部屋に備え付けの時計を見たら、既に7時をまわっていたので、手早くシャワーを浴びて制服に着替える。

その頃になると一夏も目を覚ましたようで、俺は声をかける。

「おはようさん。よく寝てたな、一夏」

「ああ、おはよう。アル、お前起きるの早いな。何時に起きたんだ？」

「今までの癖で6時には目が覚めたから、グラウンド走って時間潰してた」

「グラウンドって1周5キロだろ？よく走る気になったな」

「ボーっとしてる内に二度寝して、二日目から遅刻かまして千冬さんの出席簿攻撃をくらいたくないからな」

「そりゃそうだ。今着替えちまうから食堂行くのは待っててくれよ」

「ああ、待ってるよ。俺だけ先に食堂に行つて、朝一である視線の中に突入する気はない」

「そうだよな。早めに珍生物扱いでなくなる事を祈るか」

そう言いながら身だしなみを整え始める一夏。10分もすると一夏も着替え終わり、俺達は1年生用の食堂へむかう。

「あら、もう起きてましたのね？アル。それに一夏さんも」
「おはよう。二人とも早いんだな」

その最中に後から声がかかる。

「ん？ああ、おはよう。篝、セシリアさん」

「二人ともおはよう。篝さん、セシリア」

「ええ、おはようございます。わたくし達も一緒にさせていただきます
てよろしくて？」

「私も一緒にいいか？」

そうやって二人が問いかけてくるので、俺達はこう返した。

「むしろこっちから頼みたいくらいだよ。珍生物扱いの中だろうと
知り合いと話せるのは気が楽だから」

「俺も同意見かな？篝とアル位しか学園の中に知り合いいないから」

俺達がそう言うと、セシリアは少し苦笑しながらこう言った。

「お二人とも世界的ニュースにもなりましたから、しばらくは我慢
するしかないと思いますわ。時間もたてば皆さん慣れるでしょう」
「そうだな。むしろ私は二人の顔をニュースで見た事のほうが驚い
た」

なにせ幼馴染二人が一躍時の人だ。驚くのも無理はない。

「とにかく早く食堂行こうぜ。ここで立ち話しててもしょうがないし」

「そうですね。早く行きましょう」

セシリアがそう言いながら、俺達4人は1年生用食堂へ向かう。

4人で並んで朝食を取っていたのだが、その間じゅう周囲の女子がそれなりに距離を保ちながらなんともいえない気配の包囲網に辟易しながら食事を終えると、俺達は登校するのだった。

「セシリア、ちょっといいか？」

「アル、どうかしましたの？」

50メートルもない通学路を歩きながら、俺はセシリアにあることを話しておく。

「放課後の自主訓練だけど、お互いクラス代表決定戦までは別アリーナで訓練するようにしないか？流石に対戦相手に動きを教わっておいて戦うのはおかしいと思うし」

俺がそう言うと、セシリアはこう問いかけてきた。

「わたくしは別に構いませんが、そうするととなると戦闘機動マニューバの訓練はどうされるおつもり？」

学園入学前の訓練では、基本的にセシリアが戦闘機動マニューバのお手本を見せた後に彼女なりの説明を聞き、それを俺が実践する方法を繰り返していたのでどうするのか気になるのだろう。

「それに関しては上級生の先輩か、山田先生か織斑先生に聞くことにするよ」

俺がそういうと、セシリアはため息を一つはくところ言ってくれた。

「……はあ……そういうことでしたら認めてさしあげますわ。ただし、クラス代表決定戦が終わったらどれ程戦闘機動メニューを覚えたか確認させていただきますからね」

「了解。代表決定戦が終わったらまた頼むよ」

「ええ、おまかせなさいな」

そう言つてクラス代表決定戦まではお互い別メニューで訓練することにした。

それから特にコレといった注意を受けることなく授業を受けて今は昼休み。授業中や休み時間に山田先生が男の俺達には理解できない例えをしてくれたり、

一夏に専用機が用意される通達があったり、篝さんがIS製作者である篠ノ之束博士の実妹であることをクラスメイトのみんなが知って驚かれたりしたが、それも今は治まっている。

昼食の日替わり洋食セットを食べながら、俺は放課後どうするかを考えていた。

(さて、訓練場所はどうするかな？流石に対戦相手のセシリアと同じアリーナはまずい。かといって他のアリーナで訓練するにしても相手がいないことにはなあ……)

IS学園はIS操縦者を育成することを第一としているため、授業二日目から放課後、各学年に均等にアリーナの使用が認められている。

もつとも、授業二日目からアリーナを使うのは基礎学習が終わり、自主訓練の大切さのわかっている2年生からで、基礎学習の終わっていない1年生でアリーナを使う人物がいるとすれば、基礎学習の終わっている専用機持ちか早く実機を動かしたい人くらいだろう。実際、俺も基礎学習に関してはなんとか終わっているのですが、今日からアリーナで実機を動かそうと思っていたのだが、戦闘機動マニョーバの扱いに関してはまだまだ素人同然なので、誰かに見てもらいながら教えてもらう必要がある。

ただ、その手の機動とその活用法がわかるとすれば同級生だと専用機持ちであるセシリアと四組の女子生徒さんだけで、あとは上級生の先輩に頼んで教えてもらうか先生に聞くしかなかつたりする。

俺の知名度を利用すれば上級生の先輩だろうと戦闘機動マニョーバを教えてくれる可能性が高いが、それはあくまでも打つ手がなくなった時の最終手段と決めているため、どうすればいいか迷っていた。

「あれ？アルバート君？」

「へ？」

食事の手を止めて、放課後のことを考えていると、突然声がかかってきたのでなにかと思って顔を上げると、顔見知りの2年生の先輩リボンの色が黄色だった。がいた。

「サラ…先輩」

「うん。久しぶり…ってほどでもないか。隣、いいかな？」

「えつ、ええ……」

そう言つてサラ先輩は俺の左隣に座る。サラ先輩　本名サラ・ウエルキン　はセシリアと同じくイギリスの代表候補生の一人だが、ある意味でとても不遇な人だ。

今までに2度専用機取得のチャンスがあつたのだが、そのどちらも外的要因でふいになつてしまった薄幸の人だつたりする。

1度目のサイレント・ゼフィルスは研究所から本社への移送中に強奪されてしまったため話が立ち消えになり、2度目のスカイ・ブレードはサラ先輩の専用機とするのがほぼ決まっていたところを横から掻つ攫つように俺が起動させてしまったので、

政府側の意向により俺の専用機になつてしまったため、今までどおり量産機を使っている。

何度かISの操縦訓練の相手をしてくれたこともあるのだが、そういった経緯もあつて俺はサラ先輩に対して負い目を感じていた。

「えつと……その……」

何か言おうとは思ふのだが、上手く言葉が口から出ないでいると、サラ先輩が先にこう言つてきた。

「もしかして、まだスカイ・ブレードの事気にしてる？ たしかに専用機は魅力的だけど、量産機もバカにした物じゃないし。アルバート君がそこまで負い目を感じる必要もないよ」

そう言つてサラ先輩は俺の左手を掴むと、左手につけてある俺の専用機であるスカイ・ブレードの待機状態である男物の空色の腕時計を両手で包み込むように軽く握る。

「それに、その手の感情はこの子も感じ取るから、変に気負った状態で使つてると、この子も落ち着かないだろうしね」

既に先輩の中で気持ちの切り替えは済んでいるのだろう。俺の目を見ながらそう言うってくる先輩の声は実に爽やかで、気負っているこつちがバカらしく思えてくる。

「わかりました。………ところで先輩、申し訳ないんですけど、手を離してもらってもいいですか？ 思いつきり目立ってるんですけど」

俺を注視していた他の女子生徒たちはサラ先輩の行動を見ながらざわざわと騒ぎはじめており、なんともいえない微妙な緊張感があたりを漂っていた。

「はわっ!？」

顔を真っ赤にしながら先輩は慌てて手を離す。一部の女子生徒はその姿を見て和んでいるようだが、大多数の生徒は張り詰めた空気をしていた。

「そつ、それで……何か用事があったから話しかけてきたんですよ？ どういった用件なんですか？」

「そうそう、セシリアちゃんと、同じ男子のIS操縦者の織斑君の二人とクラス代表の座を賭けて勝負するって本当？」

昨日の今日で早速噂になっているようで、サラ先輩はまくし立てるようにしながら俺にそう聞いてきた。

「そうですね、耳が早いですね。昨日決まったばかりですよ？」
「噂の男性IS操縦者二人がいるクラスだから、あたしを含めてみんなかなり気にしてるよ？それで、放課後でよかつたら前みたいにISの事教えてあげようか？今の稼働時間はどれ位？」

とても助かる申し出だったので、俺は考えるまでもなく答えた。

「是非よろしくお願いします。稼働時間に関してはようやく60時間を超えたところです」

「はい、任せました。放課後に迎えに行くから、教室で待っていてね。稼働時間も初心者には多いみたいだし。とにかく今はご飯食べちゃおっか」

そう言っただけで俺達は急いで昼食を取り終わると、それぞれの教室に戻るのだった。

そうして午後の授業を受け終わった放課後。約束どおりにサラ先輩が俺を迎えに来たのだが、その途端セシリアがさまざまに怖い笑顔で顔を笑っていたが目が笑っていなかった。俺に向けてきたので逃げるようにサラ先輩と一緒に2年生用の第5アリーナへ向かい、

そこでサラ先輩から今俺がどれ程動けるのかを確認してもらった後に基礎的な戦闘機動を見せてもらい、簡単なものから教わり、最終日には少し応用的な戦闘機動を教えてくれた。

ギャラリーの女子生徒も学年を問わずそれなりに多かったのだが、中でも1年生にとっては授業内容の先取りに見えたようで、クラス代表決定戦前の土曜日には結構な数の1年女子が第5アリーナに集まっていた。

そんな事もありながら、クラス代表決定戦まで俺はサラ先輩から戦闘機動ニコルバとその使い時や弱点、戦術の組み立て方などを聞きながら訓練に励むのだった。

そうして翌週の月曜日、クラス代表決定戦は今まさに始まるうとしていた。

俺は第3アリーナのCピット　このアリーナにはピットが4つある　で既にISを展開し終え、試合開始の合図を待っている。

アリーナの観客席はほぼ満員らしく、ピットの外部カメラに移る観客席は学園の制服を纏った女子生徒たちで埋め尽くされていた。

「それではこれよりクラス代表決定戦を行う。第1試合のウィルソンとオルコットはゲートに入れ」

織斑先生のアナウンスがピット内のスピーカーから流れてくるので、俺は言われるがままピット・ゲートに進む。

ゲート内に入り、体を傾けると自然とその場に浮かび上がり、いつでもアリーナへ飛び立つことが出来る。

今のうちに左手に主兵装のスカイ・ブレードを、右手に遠距離武装のスターダストを展開しておく。

俺の専用機であるスカイ・ブレードは、BTビーム兵器を搭載しつつ兵装の燃費を出来るだけ向上させることを目的として開発された第3世代ISだ。

主兵装として通常時から少量のBTビームを発生させて斬撃能力を向上させている半実体剣のバスタードソード『スカイ・ブレード』、副兵装としてエネルギー消費を抑える意味も含めてBTビームと実弾の切り替え機能を持たせたマシンガンの『スターダスト』と、ビームサーベル発生機能を持つ近接戦闘仕様のソードビット4機、セシリアのブルー・ティアーズと同型ミサイルビット2機を搭載した合計6機のビットで構成されている『スカイ・エッジ』の3種類の武装が搭載されている。

ハイパーセンサーから試合開始の合図であるゲート開放までの残り時間が送られてくるので、それが0になった瞬間に試合が開始になる。

これまでのセシリアと行ってきた模擬戦の結果と、今日の戦闘用に考えていた戦術をもう一度頭の中で思い出しながら俺はゲートの開放を待っていると、残り時間がほぼ0になっていた。

「試合開始!!」

ピット内に響く織斑先生の声と同時にゲートが開放され、俺はアリーナ・ステージへと飛び立っていった。

警告 敵IS射撃体勢に移行。トリガー確認、初弾エネルギー
装填

アリーナ・ステージに入った瞬間、ハイパーセンサーがセシリアの射撃体勢への移行を告げてくるため、俺は高度を急上昇させる。

その次の瞬間、キュインという独特の音と同時に閃光が走り、今まで俺の体があった場所を撃ち抜く。どうやらギリギリでかわせたようだ。

「いきなり、やってくれる!!」

視線操作でスターダストを本体の小型化技術が不完全のため、射程の短いBTビームモードから実弾モードに変更すると、

セシリアの機動予測をしながらウイング・バインダーにマウントされたままのブルー・ティアーズ 以下ビット 目掛けて実弾をばら撒く。

「そうは、いきません!!」

アブソリュートターン
特殊無反動旋回をしながら高度を上げることで実弾全てを回避しつつ、セシリアはビットを展開する。

「さあ、踊りなさい!!」

「遠慮させてもらおう!!」

セシリアが同時制御できる最大数である4機のレーザービットが俺

の上下に回り込んでくるので、今までのパターン通り回避行動を取りつつハイパーセンサーを頼りに俺が反応するのが一番遠い角度にあるビット目掛けて射撃を行う。

「その手はもう通じませんわー!」

だが、それも読まれていたらしく、ビットがそこから外れたのをハイパーセンサーが捕らえた上で、別のビットが俺の視界の中に堂々と入り込んでレーザーを撃ってきた。

「ぬおっ!?!」

何とかかわそうと動いたのだがかわしきれず、両肩の装甲を完全に破壊された上、胸部装甲や非固定浮遊部位のウイングバインダーにもダメージが来ていた。

17。バリアー貫通、ダメージ183。シールドエネルギー残量、4
17。実体ダメージ、レベル中

「わたくしの先制、ですわね」

「だな。流石にビット撃墜のネタがバレたか」

「ええ。あなたは常に一番反応するのが遠くなる角度に注意を払って、そこに来たビットを撃墜していたのでしょうか?」

答えを確認するかのように俺にそう言ってくるセシリア。

「正解だ。流石にもうこの手は通じないか…一度に1/3近く持つてくとは……まいったね、こりゃ」

「ええ。ネタがバレてしまえば対策もしやすいですから」
「確かに。さて、どうしようか!?!」

俺はそう言いながら銃を格納して剣を両手で持つと、セシリア本人スターダスト スカイ・ブレード
に向けて瞬時加速で突撃する。イクニッションブースト

「そんな特攻など!?!」

俺がヤケを起こして特攻してきたと思ったのか、セシリアはレーザースター
ライフルを構えた上にミサイルビットも起動させ、4機のレーザー
ビットを全て俺の背後に設置して前後から挟撃しようとするのを
ハイパーセンサーで確認しながら、
閃光が放たれる直前に瞬時加速の勢いそのままPIC慣性制御装置を搭載している
ISだから出来る最小半径のインメルマントーンを行ってセシリア
の背後に回る。

そこで剣を振ってセシリアの非固定浮遊部位の両肩のウイングバイアンロック・ユニット
ンダーに一撃ずつ加えた後に地面ギリギリまで急降下しながらミサ
イルを射出すると、特殊無反動旋回をしながら停止する。アンリユートターン
ミサイルの爆炎が晴れると、セシリアが話しかけてくる。

「……………随分と古風な機動をしますのね」レトロ

「サラ先輩直伝だよ。古風だからこそ効果も実証済みだし、堅実だ
つてね。……………さっきくらった攻撃分くらいは返せたか?」

「少し多めに頂いてしまったので、今からその分をお返しいたしま
すわ!?!」

そう言ってビットとレーザースターライトmk?ライフルを交互に連射してくるセシリ
ア。

「そいつは、勘弁してもらいたいね!?!」

地面すれすれを飛び回って襲い掛かってくるビームを回避しながら
スカイ・ブレイド 剣を片手に持ち替えると、銃を再展開しつつセシリアに連射して、
スカイ・ブラスター 少しでもビット制御の邪魔をして攻撃の勢いを殺す。

「当たりませんわー!!」

当然銃撃を回避しながら、セシリアは反撃としてビットのレーザー
を撃ってくるが、攻撃をかわしながらのビット制御は彼女でも辛
らしく、いくつかの射撃はあさつての方向に飛んでいった。

俺の射撃を懸命に避けつつも、ビットでの反撃を試みているセシリ
アを見ながら、俺はあることを考えていた。

(少し早いけど切り札を使うか？それとももう少し後にしたほうが
ジョーカー いいか？)

当てる事さえ出来れば一撃で戦闘不能まで持っていけるだけの攻撃
スカイ・ブレイド 力を出す事が可能な手段が俺のISにはあるのだが、まともに使え
るのは1試合につき1回、失敗したら自分の勝機を極限まで削る諸
刃の剣でもあったりする。

先ほどのセシリアの言葉から想像するに、セシリアの残りのシール
ドエネルギーは多く見積もっても6割から半分といったところで、
ソレを使えば戦闘不能に持っていくのは十分に可能ではあるのだが、
未だにセシリアの武装が全て生きている事が気がりではあった。

(でもまあ、先輩からも動きが鈍ったら迷わず使ったほうがいい
てアドバイス貰ったし、行きますか!!)

俺は腹を括って銃を格納すると、スカイ・ブレイド 剣を両手でしっかりと握って、搭

載されているその機能を発動させると、すぐに変化は訪れる。

刀身を淡く輝かせる程度に発せられていたBTビームが発生量を大幅に増加させ、刀身を包み込む長さ200メートル近いビームサーベルが発生する。

「このタイミングでそれを使いますの！？でも、それをしのぎきればわたくしの勝ちですわ！！」

「しのげれば、だろ？やってみるよ！！」

以前の模擬戦でもコレは何度か使っているのに、セシリアもサーベルをかわしきれば勝てることを知っているため、俺がここでそれを使った事に驚いたようだが、すぐに高度を上げてひたすら逃げようとする。

その前に俺はサーベルを振りはじめ、すぐに瞬間加速イグニッションブーストを使ってサーベルを当てやすくするためセシリアとの距離を少しでも詰める。

視界の片隅のウィンドウには刀身が発生させているBTビームに耐えられる残り時間のカウンターが表示されていて、それは後1分で刀身が限界を迎える事を伝えていた。

1分以内に決める事が出来なかった場合、武器のエネルギーが全て尽きて俺の攻撃手段はほぼなくなってしまうため、使いどころを間違えると自分の首を絞める事になるトンデモ機能なのだが、威力はその分折り紙つきである。

30秒近く攻撃を続けるがセシリアには一向に当たらないため、限界時間がさらに短くなる事を承知で今までセシリアにも見せた事のない追加コマンドの起動ワードを叫ぶ。

「フルブラスト機動!!」

その言葉と同時に残っていたシールドエネルギーの殆どを消費して、サーベルの長さだけではなく幅も5倍近くまで長くなる。

「なっ!?! そんな機能までありましたの!?!」

始めて見るその姿に驚いたセシリアは、自分が足を止めてしまった事に気付かない。その千載一遇の好機を逃すことなく、セシリアに向けて超巨大化したビームサーベルを叩きつける。

「貰ったああっ!!」

「しまっ、きゃああああっ!!」

その圧倒的なエネルギー量に絶対防御が発動し、ブルー・ティアーズの機能は停止するのだった。

「そこまで!! 勝者、アルバート・ウィルソン!!」

織斑先生のその言葉で俺の勝利が確定し、俺は最後の攻撃をくらってISの所々から煙を吹いているセシリアに近づくと、「こう言うしかなかった。」

「今回は俺の勝ちってことで」

「そのようですね。申し訳ないけどピットまで連れて行ってくださいませんか? 流石にダメージを受けすぎましたわ」

「了解」

そうやって俺がセシリアの体を支えると、セシリアは安心してISを解除してISスーツだけになるので、俺はAピットの入り口まで

飛んでいく。

「アルバートはすぐにDピットに向かい、シールドエネルギーのチャージとISのチェックを受ける」

その途中に織斑先生のアナウンスがそう告げてくるので、俺は手早くセシリアをピットの入り口まで送り、Dピットへ向かおうとする。とセシリアが声をかけてくる。

「アル、負けないでくださいね、あなたはこのわたくし、セシリア・オルコットに勝ったのですから」

「ああ、戦うからには勝ちにいくさ」

そう言って俺はDピットに向かい、一夏との戦いに備えるのだった。

03 準備期間とクラス代表決定戦 アルバートVSセシリア（後書き）

そんなわけでVSセシリアはこんな感じの戦闘になりました。

もつとも、これは何度か戦闘をしたことのあるセシリア相手だからこうなったのであって、初見の相手にはアルバート君はもつと苦戦します。

今回出したサラ先輩の専用機云々は完全に捏造設定です。

今回はVS主人公なお話で今回と同じく戦闘メインとなります。

……オリキャラの強さのさじ加減がよくわからないため、そこらへんのアドバイスをいただけるとうれしいです。

3・5 回想 セシリアの想い (前書き)

今回は幕間のお話。

急いで書いたお話なので、いつもの1/3程度で短いです、ごめんなさい。

3?人称視点の練習でもあったり。

3・5 回想 セシリアの想い

第3アリーナに備え付けになっているシャワールーム。そこで彼女、セシリア・オルコットは先ほどまでの試合でかいた汗を流すためにシャワーを浴びながら物思いにふけていた。

(また……負けてしまいましたわね……)

つい先ほどまで行っていたクラス代表決定戦の対戦相手、アルバート・ウィルソンとセシリアが初めて会ったのは、彼女の専用機であるブルー・ティアーズの受領直後だった。

無論その頃には社会は女尊男卑となっていたし、彼女の両親も3年前に起こった鉄道事故に巻き込まれて他界。

その遺産を金の亡者共から守るため、様々な勉強をした時の一環としてISの適性検査を受けた結果、その数値がA+とかなり高かったため代表候補生となり、研究所で国内の最新ISである第3世代機ブルー・ティアーズを受領した時に、いつもの様に母への弁当を届けに来たアルバートと初めて会った。

セシリアのアルバートに対する第一印象は『自分の理想の男性に少しは近いが、亡き父と似た雰囲気も持つ男』だった。

アルバートは女性に対して媚びてはいないのだが、その眼差しは力強いと言いきれず、どこか弱く感じたため、それがセシリアにとって亡き父を連想させてしまい、その点でアルバートの印象をかなり悪くしてた。

そのため、研究所で会う度に話しかけられるのを疎ましく思っていた。

そんな彼が偶然ISを起動させ、世界でたった二人の男性IS操縦者となったニユースを聞いた時にセシリアが抱いたのは、『男の癖にISを使えるなんて生意気な』というどこかベクトルのずれた怒りだった。

連日マスコミにもてはやされる彼をどこか羨ましく思っていた事もあり、半ば八つ当たりするように研究所に向かい、そこで訓練中のアルバートに模擬戦を申し込んだ。

（あの時の模擬戦は今までの中で一番酷い内容でしたからね）

アルバートも模擬戦を快諾、すぐに模擬戦を行ったのだが、結果はセシリアの完敗だった。

模擬戦を開始してから、常に自分の手を見透かされているような気持ち悪さを感じていて、事実攻撃の殆どは当たらなかった。

実際、レーザービットを射出してもすぐさま全機撃墜され、ミサイルビットを使った奇襲も失敗。その事に動揺している間に近づかれスターライトmk?てしまつてレーザーライフルを破壊された。

ヤケになつて近接戦用装備であるショートソードで突撃するがそれインターセプターすらいなされた上でショートソードを砕かれ、全ての攻撃手段を失つた結果のギブアップというものだった。

その結果に納得できなかったセシリアは再戦を要求したのだが、この時のアルバートの忙しさは尋常ではなく、すぐにどこかへ出かけてしまった。

その事に憤慨していると、アルバートの母であり、ブルー・テイアーズの開発主任であるアリス博士が現れたので、何か特別な訓練をしているのかと思ひ、アルバートの訓練映像を見せてもらった。

訓練中の彼の眼差しは非常に力強く、かなりの切断能力を持つらしい日本刀を思わせるほどに鋭くて、普段の眼差しはそこにはなかった。

先程まで行っていた模擬戦の時のアルバートの顔を思い出すと、この訓練映像の時と同じ鋭く、力強い眼差しをしていた事に気付く。

それは自分が理想とする男性像に最も近く、だからこそ普段のどこか弱い眼差しの理由が気になり、アリス博士に何故アルバートの普段の眼差しがイマイチ強くないのかを聞き、その理由を聞いて納得した。

今の女尊男卑社会については納得しきれていないが、それでも母がIS研究者という事で、ISのハイスペック振りを間接的に知っているためどこかで諦めてしまっており、それが眼差しに現れているのだろうということだった。

それでも今はアルバート自身がISを動かさせていて、社会的地位で言えば十分だろうとセシリアは博士に向かって言ったのだが、アリス博士は苦笑しながら自分も似た事を言ったら冷静にこう返されたと言つて、その時に言われたことを教えてくれた。

『たしかに俺はISを動かせるけど、今のところ一夏を含めたたった二人の例外だから、政府を含めて社会全体で珍しがっているだけ』

そう言い返されて、確かにそのとおりだと納得している部分があったとアリス博士は言った。

そんな風にアリス博士からアルバートの事を聞いている内に時間はかなり過ぎていて、この日の予定もあるため自分も研究所から自宅に戻らないといけないう時間になっていた。

自宅に戻る直前にアリス博士からアルバートに惚れたのかと聞かれ、返答に困っていると、その態度だけでどう思っているかわかったと言われていくつかのアドバイスを貰い、その一つとして翌日から自分の都合のつく日は積極的にアルバートの訓練相手を勤めた。

プライベートでもそれなりに仲良くはなったのだが、IS学園女の園に混ざった二人の男性イレギュラーという事で色々大変だろうから、いつか羽休めも兼ねてデートに誘おうと思いつながら、

セシリアはシャワーを浴び終わると手早く制服に着替えて、2試合目の観戦をするためアリーナの観客席へと向かうのだった。

3・5 回想 セシリアの想い (後書き)

そんなわけで今回はセシリアがアルバートに惚れたのかのお話。
要するに一夏より先にフラグを立てていたという至極単純なもの。

4話も執筆中なのですが、白式のピーキーぶりに試合として成り立たせるのに一苦労していたり。自分の文才のなさが恨めしい。

04 クラス代表決定戦 アルバートVS一夏(前書き)

何とか4話完成しました。

そして読者の皆様方、PV12000オーバー、ありがとうございます。
ます。

これからも頑張りたいと思いますので、よろしくお願いします。

04 クラス代表決定戦 アルバートVS一夏

Dピットに着くと、山田先生が俺を待っていた。

「待つてましたよ、アルバート君。機体状態のチェックをしますから、整備用ハンガーにISをセットしてから一度装着解除してください」

「了解です」

俺はそう言っつて整備用ハンガーにスカイ・ブレードをセットするとその場にしゃがみ、コクピットから一度出る。

「それじゃあ先生、状態のチェックをお願いします」

「はい、任せてください」

そう言っつて山田先生はエネルギーチャージと平行して、スカイ・ブレードの状態チェックに入る。

「受けているダメージはそこまで多くないみたいですけど、武装用のエネルギーもシールドエネルギーも殆ど無くなっていますね。何かのトラブルでしょうか？心当たりはありますか？」

モバイルPCでスカイ・ブレードの状態を逐一チェックしながら、そこまで多くの攻撃をくらったわけでもないのにエネルギーがほぼすっからかんになっているのを何かのトラブルと思ったようで、山田先生は使用者の俺に心当たりがあるか聞いてくる。

「ああ、最後に使ったフルブラストは武装用のエネルギーだけじゃなくて、シールドエネルギーの殆ども武装にまわして攻撃しますか

ら、それでほぼ空になってるんです」

それを聞いた山田先生は苦笑しながらこう言った。

「そつ、それはまたすごいですね」

「ええ、なんでも織斑先生が現役時代に使っていた暮桜の単一仕様能力ワンオフ・アビリティを参考に超攻撃力を得させようとしたみたいなんですけど、元々単一仕様能力は真似できませんから、こういった形になったらいいです。」

あの能力を除けば武装の燃費はかなり高いんですけどね」

最後に使った機能、ライジングブレードは当たれば一撃でシールドエネルギーを0にする事が出来る非常に強力な機能チカラだが、単一仕様能力ワンオフ・アビリティではない。

元々単一仕様能力は二次移行した時に発現する可能性のあるものであつて、二次移行したからといって確実に単一仕様能力を得る事が出来るとは限らず、

二次移行したISの7割に単一仕様能力は発現せず、純粹に今までの戦闘経験からの更なる能力上昇のみというのが通例のようだ。

これは単一使用能力の発現条件自体が『使用者とIS自身が最高の相性になった時』に発現するようになっていたため、ISと使用者自身の元々の適正の問題などもあつてそこまでの相性にならない事が多いかららしい。

それを解消するために考案されたのが第3世代型ISで、二次移行しても単一仕様能力が発現しなかった時の為、第3世代機には何らかの特殊な機能や武装が予め搭載されている。

もつとも、日本のとある研究所は一次移行段階から単一仕様能力の発現しているISの開発を試みたようだが見事に失敗、製作された

機体は凍結されたらしい。

これも趣味のISコミュニティサイトで知ったのだが、あのサイトは何処からこういった機密に近い情報を仕入れてきているのか、実際にISを動かすようになってから余計に気になっているのだが、非常に怖いことになりそうなので最近はアクセスしていない。

「チェック終了。これなら、壊された所を予備パーツに変更すれば大丈夫ですね。アルバート君、予備パーツの準備はしてありますか？」

「ええ。代表決定戦をするって決まった時に一通りの予備パーツを取り寄せておきましたから」

コクピットに背中を預けて立ち上がりながら整備ウインドウを開くと、先程の戦闘で完全に破壊された両肩の装甲部分と、ライジングブレード・フルブラストを使った反動のきているスカイ・ブレードは赤く、ヒビの入った胸部装甲、ダメージの心配なウイングバインダーは黄色で、その他の問題ない部分は白で表示されていた。

赤と黄色で表示されている部分全てを視線操作でタッチして、選択部分を予備パーツに変更する。

するとISの展開時のように選択部分のみが量子化、予備パーツと切り替わり、整備ウインドウの全ての部分が白くなり、実際展開しているISも新品同様となる。

それと同時にエネルギーチャージも完了したようで、目の前にシールドエネルギー及び、武装エネルギーチャージ完了のウインドウが

展開される。

「山田先生、エネルギーのチャージが終わりました。織斑先生に連絡してください」

「はい。それじゃアルバート君、試合頑張ってくださいね。織斑先生、アルバート君の準備が出来たようです」

そう言つて山田先生は一言激励すると、織斑先生に試合準備が出来た事を伝える。

戦闘待機状態のISを感知。操縦者織斑一夏。ISネーム『白式』。戦闘タイプ近接格闘型。特殊装備有り

ハイパーセンサー越しに試合相手である一夏の機体情報が送られてくる。基本色に白、次いで青の比率が多く、アクセント程度に黄色のパーツが見られるISで、背部のウイングスラスタはそれなりに大きいため、加速能力は高そうだ。

「ありがとうございます。戦うからには勝つつもりでいますよ」

その情報を見ながら山田先生にお礼を言いながらピット・ゲートに入る。

今から戦うのは同じ近接格闘型ということもあり、剣のみ展開、力を十全と伝えるための両手持ちをするため銃はあえて展開せず、いつでも試合を始められるようにする。

「それではこれより第2試合を行う。織斑とウィルソンはゲートへ

入れ」

一夏との剣術戦は久しぶりなため、少しでも落ち着くために深呼吸しながら集中する。

「試合開始！！」

そうしている内に試合開始の合図がかかりピット・ゲートが開放されるので、集中を維持したままアリーナ・ステージに飛び出す。

セシリアとの戦闘の時と違い、アリーナ・ステージに入った直後の攻撃はなく、一定の高度で停止すると一夏も20メートルほど離れた場所に多少ふらつきながら上昇してくるので、開放回線オープンチャンネルで一夏に話しかける。

その手には近接戦闘用のブレード 打鉄の刀より少し短い太刀
を持っていて、いつでも戦闘を始められるようだった。

「それがお前の専用機か。フォーマット 初期化と最適化は終わってるんだよな？」

「ああ。お前とセシリアさんの試合中に終わったよ」

「そうか」

こうして一夏と対峙していると、小さい頃に篝さんの家の道場で試合をしていたのを嫌でも思い出す。

俺の容姿は母方の祖父の隔世遺伝で何処からどう見ても外国人然としていたため、小学校入学時から『ガイジン』と呼ばれ苛められ、その時に一緒に篝さんも苛められていて、その苛めてきたやつらに一夏が突っかったのが一夏と篝さんとの出会いだったりする。

苛められた事が悔しかったから純粹に腕っ節を強くしたかったため、

当時剣術道場を営んでいた篤さんの実家で剣術を習っていたのだが、その鍛錬中に千冬さんから真剣を持たされ、

『刀の重さとそれを振るう怖さ』を知ったため一時は辞めようとしたのだが、千冬さんからその刃を振るう『精神的な強さ』という物を教わり、その『強さ』を得たかった事もあってより真剣に鍛錬に取り組んだ。

その当時によく一夏とは試合をした事があるのだが、8：2と俺が負けることが殆どで、一夏は俺の中で一番近くにある超えるべき『壁』だったりする。

「それじゃあ、戦^やるか一夏。昔の雪辱、少しでも晴らさせてもらうぞー!!」

それから小三の終わり頃に両親の間で色々あって離婚する事となり、俺は母親に引き取られてイギリスに引っ越す事になったのだが、イギリスに引っ越してからも普通の訓練を怠ったつもりはない。

勿論得物が剣と刀では振り方や力の入れ具合は違って当然なのだが、それでも訓練経験の有無で多少なりとも違いは出てくる。

「ああ、いくぞアル!! 負けないからな!!」

そう言いながら一夏は太刀を両手で持つて突撃しながら右切り上げを放ってくるので俺もそれに合わせるように突撃しながら左打ち下ろしを放ち、二人のいた場所の中間で激突する。

一瞬鏢迫り合いになるが一夏に俺の剣を受け流され、一瞬だが一夏に背後を取られてしまうが、ISの全方位視界接続はやや後方に位置する一夏の動き 俺の剣を受け流しながら刃を返し、追撃を加えようとしていた を正確にとらえていたので、

俺はそのまま加速して一夏の追撃を回避しながら先程よりも長い30メートル程の距離をとって、一夏と向き直りながら、イグニッションブースト瞬時加速のエネルギーチャージを開始する。

「おいおい、今のをかわすのかよ」

ほとんど必中の勢いだった斬撃をかわされて呆れた声を出す一夏。

「ギリギリだがな。……それにしても相変わらず鋭い斬撃だな一夏、ISバトルじゃなきゃ当たってたぞ」

純粹な剣術勝負なら今の一撃で終わっていたかもしれない斬撃は、一夏の近接戦闘能力の高さを再確認させるには十分だった。

「そりゃ当てるつもりでやったからな。アルも強くなったじゃないか。昔なら、さっきの一撃で終わってたんじゃないか？」

「かもな。今度は……こっちから行くぞ!!」

イグニッションブースト瞬時加速を発動し、今出せる最大速度で俺は一夏に突撃する。

「速い!!でも、当ててやるさ!!」

そうして再び突撃してくる一夏。一夏が加速した瞬間に、それが起こった。

一夏の太刀の鎬の部分を中心に刀身が上下に展開し、開いた部分から青白いビームサーベルが発生する。

(なんだそりゃ!!物理刀の中にビームサーベルを内蔵している!?)

しかもビームサーベル発生時には物理刀部分の刀身が自分のビームでダメージを受けないように展開する事が可能な装備なんて聞いた事がなかった。

第二世代最後期機体のラファール・リヴァイヴに搭載されているパイルバンカー、灰色の鱗殻グレー・スケールのように普段は盾として使用し、いざという時にその盾部分をパージして使う以外の方法だと、どうしても俺の剣スカイ・ブレードのように通常使用時のビーム出力に耐えることが可能な素材で物理刀身を作り、高出力ビームを発生させる場合はその物理刀身の損傷を覚悟して高出力モードを使うくらいしか方法がない。

だが、一夏の近接ブレードはその問題を見事にクリアしている事に驚いた俺は今が試合中だということを忘れてしまい、そのビームサーベルの一撃を受けてしまう。

「ぐあああつー!!」

胸部装甲にきつちりとビームサーベルによる斬撃の痕が刻まれ、同時にシステムがダメージを報告してくる。

バリアー貫通、ダメージ500。シールドエネルギー残量100。実体ダメージ、レベル低

そのダメージを見て俺は驚くしかなかった。

(待て!!!実体ダメージが低レベルのクセにダメージ500!?!?強

制的に絶対防御を発動させたのか!?)

通常ISが展開しているバリアーをまるでないもののようにして強制的に絶対防御を発動させる攻撃なんて一つしかないが、それを一夏が使っているのはおかしかった。

(ありえない……………白式と暮桜は別物だぞ!!)

織斑先生が現役時代に使用していたISの暮桜は単一仕様能力が発現していた。能力名『零落白夜』、その効果は『バリアー無効化能力』だった。

その名のとおりISが通常展開している操縦者を攻撃から守るバリアーを無効化、自分の攻撃に対して強制的に絶対防御を発動させる事でISバトルにおけるHPヒットポイントであるシールドエネルギーを極端に減らす事ができる超攻撃能力だ。

俺のスカイ・ブレードの切り札、ライジングブレードもこの零落白夜を参考に開発されているのだが、一夏が今発動させたのは零落白夜そのものようだった。

(ってちょっと待て、白式は今日搬入されてきたばかりで一次移行したばかりのはずだろ!?)

ファースト・シフト
ワンオフ・アビリティ
一次移行したばかりのISが単一仕様能力を発現させている事に気が付き、ますますワケがわからなくなってくる。

「どうした?アル。調子でも悪くなったのか?」

試合の最中に完全に動きが止まり、無防備な状態になってしまった俺をみて突然体調が悪くなったと心配したのか、攻撃の手を止めて一夏が声をかけてくる。

「ああ……なんでもない。……続けよう」

「そうか？もし調子悪いようなら……」

そう言ってくる一夏だが、俺は気を引き締めなおしてこう答える。

「体調は問題ない。ただ単に驚いた事があっただけだ」

そう言いながら俺は剣を格納すると、戦闘中にエネルギーが切れた時に搭載されている予備も含めた二丁の銃を構える。

「そうか？まあお前がそう言うならいいけど」

釈然としない表情のまま一夏は構えると、俺達は試合を再開する。

（もし一夏が使ったのが本当に零落白夜なら、自分のシールドエネルギーもそれなりに減っているはず。こうなったら遠距離戦でしばらく様子を見るしかない）

暮桜の使っていた零落白夜はエネルギー無効化という性質のためか、自身のシールドエネルギーを大幅に消費してそれを攻撃用エネルギーに変換していた。そのため、織斑先生の現役時代の試合では、織斑先生の残存シールドエネルギーはかなり少なくなっていた。

もし一夏が先程使ったのが本当に零落白夜なら、自分のシールドエネルギーも消費している可能性が高い。

俺のISのシールドエネルギーの残量もかなり少ないため、臆病者と呼ばれようがしばらくは遠距離戦に徹するしかない。

零落白夜の能力を持つビームサーベルを展開したまま突撃してくる

一夏に近づかれないように距離をとりながら機動を予測して、その先に銃弾をばら撒く。

「そういえばお前のISは遠距離武装もあつたな。こっちは刀一本だけだつて言うのに」

銃撃をギリギリかわしながらそう言ってくる一夏に対して、50メートル近い距離を稼ぐ事ができた俺はそこで銃を格納して一端足を止め、セシリア戦時には使っていなかった武装を使用する。

「そりゃ大変だな一夏。でも手加減はしないぞ。スカイ・エッジ、GOー!!」

4機ある近接戦用ビット『スカイ・エッジ』の内、俺が同時に制御できる最大数の2機をウイングバインダーからパージすると、ビームサーベルを発生させて一夏に向かって突撃させる。

「ソードビットお！？そんなのまであるのかよ!!」

ソードビットを撃墜しようとする一夏の攻撃を随時コマンドを送ってビットに回避させながら、俺はミサイルビットも起動させていつでもミサイルを射出できるようにしておく。

俺のビット操作適正はセシリアよりも低いため、同時に制御できるビットの数は2機。しかも足を止めて制御に集中しないとまともにビットを操作できないため、普段ソードビットはほとんど使わないのだが、ここまで距離をとっておけば何とかなるだろう。

一夏は展開しつぱなしのビームサーベルでソードビットを撃墜しようとするが、近接戦用ビットのため速度重視の推進器スラスターを搭載してい

るため、上手く攻撃を当てられないでいた。

「くそっ、こっとなったら!!」

ビットに攻撃の当たらない一夏はビットの撃墜を諦めて、コマンドを送っている俺を攻撃しようとして突撃してくる。

「うおおおっ!!」

無防備に見える俺の姿を見ながら突撃してくる一夏を見ながら、俺は攻撃のタイミングを図る。

「貰ったあああっ!!」

「こっちがな」

そうして一夏と俺の距離が10メートルをきった所でミサイルビットの射出口を一夏に向けて、ミサイルを発射する。

「なっ!!しまった!!」

慌ててとまるうとする一夏だが、トップスピードに乗っていたため急に止まることができず、自分からミサイルに突っ込むようにしながら直撃を受けて爆発に包まれた。

「そこまで!!勝者、アルバート・ウィルソン!!」

織斑先生のその言葉で俺の勝利が確定、爆炎が晴れると、少しばかり煤にまみれた一夏がいた。

「くそっ、どうなってるんだ?一撃くらっただけでシールドエネルギー

ギアが0になったぞ」

「知らん。後で織斑先生に試合の記録^{ログ}を見せてもらえばいいだろ」
疑問を述べる一夏だが、俺も予想 零落白夜の使いすぎでシールドエネルギーがなくなつた はしているがそれが当たっていると限らず、一夏に近づきながらそう答えると、続けて織斑先生からのアナウンスが聞こえてくる。

「これでクラス代表決定戦を終了する。織斑とウィルソンはBピットまで戻ってくるように」

一夏は普通に飛べるようなので、俺達は連れ立ってBピットまで戻ると、ISを待機状態に戻してISスーツ姿になる。

「二人とも戻ってきたな」

それから一夏に向かって織斑先生からのお叱りの言葉があり、同時にISの教本を渡されて覚えるように言われ、一夏は更衣室に向かおうとして俺に声をかけてくる。

「どうした？アル。着替えないのか？」

「織斑先生に聞きたい事があるから、先に行つててくれ」

「……わかつた」

そう言つて更衣室に行く一夏から視線を外して織斑先生に向き直ると、俺は今日の試合の不可解な点を織斑先生に聞いてみる。

「織斑先生、一夏の専用機つてどうなってるんですか？最初にくらつた一撃は間違いなく先生が現役の時に使つていた暮桜の零落白夜^{ワンオフ・アビリティ} ^{ファースト・シフト} ^{ワンオフ・アビリティ}そのものでした。それに、一次移行状態から単一使用能力が使える

ISなんて初めて見たんですが」

「やはり気付いて途中から戦術を変えていたか。……………山田先生、悪いが席を外してくれるか。二人だけで話したい」

「はっ、はぁ……………わかりました」

そう言っつて山田先生がピットから出て行ったのを確認すると織斑先生はコンソールの椅子に乱暴に腰掛け、片手でキーをいくつかブラインドタッチで打ってから俺に視線を向ける。

「カメラとマイクは黙らせてあるとはいえ、今から話す事は機密事項に抵触しているから他言無用だ、覚えておけ。あと、教えられるのは後者についてだけで、前者については私にもわからん。一夏の専用機、白式についてだったな……………アレを作ったのは束だ。元々凍結されたISを譲らせて完成させたのが白式となり、一夏が起動させた」

あの人自らが完成させたISという事は、何かしらのトンデモ機能があってもおかしくないだろう。

「……………つまり一夏のブレードに使われている技術は束さん考案の新世代技術ってことですか？」

「ほお、さすが元技術者志望。それすら見抜くか」

「詳しいギミックはわかりませんが、あの人の身内鬮屋は相当なものですからね。新世代技術の一つや二つぽんと出してもおかしくないと思っただんですが」

「違うない。聞きたい事はそれだけか？」

「ええ、ありがとうございます」

一礼してピットから出ようとすると、織斑先生から声がかかる。

「ウイルソン、白式の零落白夜についてだが、あいつが自分でその特性に気付くまで教えないように。ただでさえ織斑は知識が足りていない状態だから、少しは自分で考えさせる。それに気付いたら私の公式戦の記録を見せてやっても構わん」

それを聞いた瞬間、俺は自分の耳を疑った。

「な、っ、どうしてそのこと知ってるんですか!?!」

プレミアの付いてかなり高価なモンド・グロツソの映像記録を持っている事は誰にも言った事はないはず。どうして千冬さんが知っているんだ!?!

「お前なあ、ホテルの私室に荷物を取りにいったのは私だぞ?その時にパッケージが出しっぱなしになっていれば気付かないはずないだろうが」

「あ、」

呆れたようにそう言ってくる千冬さん。……そういえばそうだった。あの時に見られてたのか。

「あの、千冬さん。なるべく他の人にはばらさないで欲しいんですが……」

「織斑先生だ。なに、生徒のプライベートをばらすような事はしないさ。とっとと戻れ、アーリーナの使用時間もそろそろ切れる」

「はい、了解しました」

俺は言われるがまま更衣室で手早くシャワーを浴びて制服に着替え、寮に戻るうとすると、寮側の更衣室の出入口でセシリアが待っていた。

「お疲れ様。それと、クラス代表おめでとうございますわ、アル」
「何とかギリギリの勝ちだったけどな。シールドエネルギー100
しか残ってなかったし」

寮に戻りながら俺がそういうと、セシリアは驚いた表情でこう聞いてきた。

「それ、本当ですか？あなた、一撃しかくらっていなかったでしょ
う」

「その一撃で8割持ってかれた。白式の攻撃力はとんでもないよ」

暮桜と同じ単一使用能力ワソオフ・アビリティだけある。使いこなせれば最強の能力だ。

「そこまで！？一夏さんのISの攻撃能力はとてつもないですわね」
「ああ、その分リスクも馬鹿デカそうだけどな」

いずれ一夏には千冬さんの公式戦の記録映像を見せてやるとしよう。

「とにかく今日はお疲れ様でした。ゆっくり休むといいですわ」
「セシリアもしっかり休むといい。俺も休むから」
「ええ、そうさせてもらいますわ」

そう言っている内に寮の部屋の前まで来ていた。

「それじゃあお休み、セシリア」
「ええ、お休みなさい。アル」

そう言って俺達は分かれ、夕食をとった後試合の疲れを癒すため、ぐっすりと眠るのだった。

04 クラス代表決定戦 アルバートVS一夏（後書き）

一夏VSアルバートはこういった決着になりました。

一夏君の敗因は零落白夜を発動しっぱなしにしたため、シールドエ
ネルギーがほぼ空になった所を攻撃されたため落ちた形になります。

クラス代表をアルバートがやるかどうかは次回に発表しますので、
それまでお待ちください。

05 セシリア、初めての料理（前書き）

ちょっと遅れましたけど最新話です。

今回のお話は独自解釈がありますので、嫌いな方がおりましたらごめんなさい。

05 セシリア、初めての料理

クラス代表決定戦翌日の朝のSHRで、昨日行われたクラス代表決定戦の結果を山田先生が伝える。

「では、一年一組代表はアルバート・ウィルソン君に決定しました。アルバート君、これから一年頑張ってくださいね」

嬉々とした笑みを浮べて喋る山田先生。クラスの女子一同も大いに盛り上がっていた。

「あれだけ強ければ、クラス対抗戦リーグマッチは優勝したも同然だね」

「そうそう。なにせ専用機持ちはあたし達のクラスの3人を除けば4組に一人だけで、あとは全員量産機だしね」

「私たちは貴重な経験が積める。他のクラスの子に二人分の情報が売れる。一粒で3度おいしいね、アルバート君達は」

一部非常に不穏当な発言が聞こえてきた気もするが、こうなった以上頑張るしかないだろう。

「静かにしろ、馬鹿ども」

そうしてクラス全体でざわついていると、織斑先生が教室に入ってきてクラス全体に注意すると、あっという間にクラス中が静まる。

「昨日の試合の結果、クラス代表はアルバート・ウィルソン。異存はないな？」

織斑先生が確認の意味をこめてそういうと、俺自身も含めて反対意

見はあがらなかつたため、俺は1年1組のクラス代表を務めることになった。

「アル、今から学食ですか？」

「ん？そうだけど。セシリアも一緒に行くか？」

時間は過ぎて昼休み。ここに通っている間はなるべく家事から解放されたいため、少しばかり高くつくが学食をメインにしようと思っているので移動しようとしたのだが、セシリアに呼び止められた。

「いえ、実は料理に初めて挑戦してみたので、味を見ていただきましたのですが……」

少しばかり恥ずかしいのか、顔を赤くしながらうつむき気味にそう言ってくるセシリア。よく見るとその手には「初めての料理」の入っているらしきバスケットと、ビニール袋を持っていた。

「へえ、そういうことなら構わないよ。どうせ腹も減ってたし。…

……どこか移動するか？周りはこんな状態だし」

セシリアがそう言った途端、教室どころか廊下まで俺と一夏を見に来ている女生徒達が全員緊張していて、その張り詰めた空気の中で食事が出る人間がいるとすれば、その人物は余程の大物か場の空気がわからないバカのどちらかだろう。

「そう…ですわね。では屋上で」

「了解。そういうわけで悪い、一夏。学食には一人で行ってくれ」
「いや、そういうことならいいさ。篝、俺達だけでも学食行こうぜ」
「あっ、ああ。そうだな一夏」

そう言っただけで席を立つ一夏と篝さん。クラスメイトと廊下に集まっている生徒の半数を連れて、一夏達は学食へ移動していく。

「それじゃあ俺達も移動するか」
「そうですね」

そう言いながら廊下に残っていた女子達を引き連れて、俺とセシリアは屋上へ向かうのだった。

普通の学校なら立ち入り禁止になっている屋上だが、IS学園はしっかりと整備されて生徒が利用できるようになっていた。

しかも、テーブルと椅子も用意されているので晴れた時は風景を楽しむながら食事する事が出来るの親切設計だ。

そのテーブルセットの一つを使って、俺はセシリアから手渡されたバスケットを開けて中を見てみると、その中身はサンドイッチが1つの種類につき4つ入っていた。

初めてという事もあったか、具はタマゴとハムとツナマヨネーズというオーソドックスな物のようだ。

「へえ、見た目は結構上手くできてるみたいだな。それじゃ、いただきます」

「ええ。しっかりと味わってくださいな」

バスケットからハムサンドを取って一口ほおばってのみこんだ瞬間、口の中全体に火をつけたような辛さが襲い掛かってくる。

「かつら！これハムサンドだろ！？」

「えっ、ええ。そうですが、どうかしましたの？」

何を当然とばかりに言ってくるセシリアだが、ハムの味より先に襲ってきた辛さに驚きながら食べかけのハムサンドをよく見てみると、パンとハムにはピンク色　味から推測するとおそらくは赤唐辛子系のソースにマヨネーズ？を混ぜた物　のソースが大量に塗られていた。

「せつ、セシリア。一つ聞くけど、このハムサンドに塗ったソース、味見はした？」

「いえ、していませんが」

セシリアのその言葉を聞いた瞬間、俺は少しめまいがした。

辛いといっているのか、辛さは耐えられないわけではないので何とか一つ食べ終わると、口直しにタマゴサンドに手を伸ばす。

一口ほおばってのみこむと、先程のハムサンドの唐辛子系の辛さとは違う、カレーを食べたような辛さが口の中に広がる。

「かつ、カレー味のタマゴサンドとは……。セシリア、タマゴを潰してマヨネーズと和えた時にカレー粉入れたでしょ、それも大量に」「えっ、ええ。写真と見比べると黄色が足りなかった気がしたのでそうしたのですが、いけませんでした？」

その言葉に二度目のめまいがした。

「うん、言いたい事はいくつかあるけど、この味も見てからにさせてもらおう」

そう言っつて、俺はツナマヨネーズ？に手を出す。

一口ほおばつてのみこむと、ツナの味とマヨネーズの味に加え、チーズ系の味とレモン系の酸っぱさがほのかにしてくる。

(あ、これは前二つに比べればイケるかな?)

多分マヨネーズにドレッシングをいくつか混ぜたのだろう。

「その……どうですか?」

「うん、このツナマヨネーズは合格かな?」

おそらくは偶然ヒキナースラックの代物だろうけど、俺がそう言った途端に緊張していたセシリアの表情が一気に明るくなる。

「そうでしょうそうですね。このセシリア・オルコットに出来ないものなどございせんわ」

そう言いながら今にも高笑いを始めそうなセシリアだが、何とかしないといけないだろう。主にセシリアの将来の旦那さんのために。

ツナサンドは除くとしても、こなす事の少ないサンドイッチでこの味　ハムサンドとタマゴサンドは本来ここまで辛からくする必要は全くない　だ。より多くの手順や工程が必要になる料理を作つたら、まず間違いなくとてつもないアレンジが加わって壊滅的な味に変貌する事が容易に予想できる。

いくらセシリアの実家が大きいといつても、将来の旦那さんも妻の

手作り料理を食べたくなる時はあるだろう。その時にマイナスの意味で凄まじい味の料理を出されたら何かが終わりがねない。

「セシリア。悦に浸ってるどころ悪いけど、いくつか質問に答えて料理つて、どうすればいいと思う？」

「…本と一緒になればいいのでは？」

「……その本と一緒にっていうのは、手順は考えず、最終的に本に載っている写真と一緒にすることでいいかな？」

「そういうものではありませんの？」

小首をかしげながらそう言ってくるセシリアを見ながら、俺は正直に話すことを決定した。

「うん。セシリア、アウト。ハムサンドとタマゴサンドって本来は辛くないんだよ。ちゃんと本に載ってる作り方を見て、そのとおりに作れば、自然と本に書いてあるとおりの味になるから。」

写真はあくまでも完成した時とか盛り付けの目安であって、手順を無視していい訳じゃないんだ。簡単な料理でこれだと、手順が難しくなったらまず間違いなく失敗してマズイ料理になるよ？」

それを聞いて、セシリアはテーブルを叩きながら立ち上がりつつこう言った。

「でっ、ですがツナサンドは合格と言ったではありませんか!!」

「じゃあ、同じ味の物を作りたいからレシピを教えて欲しいって言われて、それぞれの材料が何グラムずつ必要かって書き出せる？」

「そっ、それは……」

言葉につまるセシリア。つまり出来ないという事だろう。

「だから、最初の目標は意図的にこのツナサンドを作る事が出来るようにすればいい。少しずつ基本を覚えていって、その後に試行錯誤していけばいいと思う。ISの操縦と一緒にだよ。セシリアが初めてISの操縦した時だって、今出来た事が全部出来たわけじゃないだろ？いつもISの操縦を見てもらっているお礼としては少ないかもしれないけど、料理とかの家事関係なら教えられるから」

俺がそういうと、セシリアはしばらく考えた後こう言った。

「そう……ですわね。それでは料理を教えてくださいませんか？アル」

「ああ。いつから教える？」

「そうですね、放課後はISの実機訓練もありますので、明日の朝から教えてもらってもよろしいですか？」

「了解。セシリア、今日は何時に起きた？」

それなら早く起きる必要があるのです、セシリアが今日何時に起きたのかを聞いておく。

「わたくしは6時少し前に起きて、それから食堂の開くギリギリまでキッチンで料理していましたが」

寮の1年生用の食堂は、朝の場合7時から8時となっているため、かなりギリギリまで粘っていたのだろう。

「そっか。それじゃあ朝6時に起きてきて。1時間もあれば教えながらでも弁当くらいなら作れると思うから。それでいい？」

「教わるのはわたくしですから、贅沢は言いませんわ。それでは、朝6時という事で」

「なるべく遅れないようにね。遅れると教える時間も少なくなるから。……さて、時間もあんまり残ってないから、さっさとお昼食べ

「ちやおうか」

「ええ、そうしましょうか」

そう言っつて、俺はバスケットに手を伸ばしてサンドイッチを食べていく。一つ一つがかなり辛いので、急いで食べるのは辛かったのだが、昼休みの残り時間もあまりなかったので我慢するしかなかった。こうして俺は、明日からセシリアに料理を教える事になった。

そうして昼食を食べ終わって教室に戻ると、既に一夏と篝さんは学食から戻ってきていたので、俺は一夏に放課後の予定を聞いておく。

「一夏、今日は放課後どうするんだ？アリーナで自主練するならつきあうし、わかんないところあるなら教えるけど」

「あー、そうだな。アル、放課後に昨日の試合の記録見せてほしいんだけど」

「そりゃいいけど、いきなりどうした？」

「昨日千冬姉から武器の特性を考えずに使ってるって言われたから、放課後に白式の活動記録見ようと思ってるんだけど、白式だけじゃなくて、対戦相手のお前の記録を見れば何かわかるかと思っただけど、ダメか？」

なるほど、自分の記録だけだとわからなくても、相手の記録も見れば何かわかる可能性は高いな。

「そういうことなら構わんさ。放課後に記録見せてやるよ」

「サンキョ」

キーンコーンカーンコーン

「予鈴だな」

「ああ、午後も頑張るか」

予鈴が鳴ったので、俺達の様子を見に来た女子達も含めて自分のクラスへ戻っていき、午後の授業が始まるのだった。

午後の授業も特に問題なく進み、放課後約束したとおり一夏にスカイ・ブレードの記録^{ログ}を見せる。

白式の記録^{ログ}も同時に表示して、昨日の試合全体の動きがわかるようにしておく。

そうして記録^{ログ}の映像を見ると、一夏が零落白夜を発動させたあたりから白式のシールドエネルギーが減っていく。

「なんだ？白式がビームサーベル展開した時からシールドエネルギーがすごい勢いで減ってるぞ」

どうやら一夏は昨日の戦闘中、集中しすぎてシールドエネルギーの減少に気づいていなかったようだ。

「でも、一撃でスカイ・ブレードのシールドエネルギーの8割持っていつてるんだから、その分攻撃力は折り紙つきみたいだがな」

スカイ・ブレードに一撃当てた後もシールドエネルギーの減少は続き、決まり手のミサイルをくろう直前には白式のシールドエネルギーは30程度しか残っていなかった。

記録^{ログ}をひととおり見終わり、白式のシールドエネルギーが減り始めたところから何度かループ再生していると、一夏が気付いた事を言う。

「ようは白式のビームサーベルって、自分のシールドエネルギーを消費して、相手のシールドエネルギーを極端に減らす攻撃する能力があるって事か？」

「それで正解だろう。自分のシールドエネルギーを攻撃に使うから相手の攻撃は基本的にかわすしかないな。バリアーで受けるとそれだけサーベルの使用限界を早めることになる」

俺が補足でそういうと、一夏は背もたれに体重をかけながら、体の力を抜きつつこう言い返してくる。

「でも、サーベル出してる間は自分で自分のシールドエネルギーを減らす呪いの攻撃だぞ？かわしてる間にもシールドエネルギーが減るんじゃない意味がない」

「それなら、任意でビームサーベルを出せるように訓練するしかないだろ。記録^{ログ}を見ると最初の内はシールドエネルギー減ってないみたいだから、ここぞという時だけビームサーベルを使えるようにすればいいんじゃないか？」

「そうだよなあ。でもそのここぞのタイミングとかがわかんないとどうしようもない気がするぞ？」

俺がそう言つと、一夏が根本的な問題を提示する。一夏自身、零落

白夜の特性には気づいているようなので、織斑先生との約束も果たしたと判断していいだろう。

「タイミングとかなら問題ない。寮に戻ったらそれを解決するいいものを見せてやる」

「そうなのか？やけに準備がいいじゃないか。アル、俺の白式のと知ってたのか？」

少しばかり的外れな事を聞いてくる一夏だが、俺はその質問に正直に答える。

「違う違う。元々俺の持ってた私物の中にちょうど参考になるものがあっただけだよ。偶然だ」

「そっか。それじゃあ今からどうする？時間も結構余ってるみたいだけど」

教室に残って記録ログを見始めて30分。アリーナが閉まるまでまだ時間があるので、俺は素直にこう言った。

「アリーナ行って少しでも実機動かすしかないだろ。一夏、個人間プライベート秘匿通信トチャネルの使い方とか知らないだろ？タッグ戦の時とか色々便利だから、今のうちに使えるようになっておいた方が楽だぞ」

「そうだな、少しでも教えてもらえると助かる」

「自分の復習も兼ねてるから気にすんな」

こっちがきっちり覚えてないと教えられないから、一夏に教えるのはけっこう復習になるのだ。

それからはいくつかISとは全く関係ない話をしながらアリーナに向かい、ISスーツに着替えてから実機訓練を始める。

「あら、アルに一夏さん。確か昨日の試合の記録ロケを見るといっていませんでしたか？」

ちようどセシリアも訓練中の小休止をしようとしていたようで、上空からピットからのカタパルトに立つ俺達に気づいて開放回線オープンチャンネルで声をかけながらカタパルトに降りてくる。

「こんにちは、セシリアさん。記録ロケはさっき見終わったから、少しでも訓練しようと思って」

「殊勝な心がけですわね。お二人とも今日はどいつた訓練をするおつもりで？」

「ここに来る時は個人間秘匿通信プライベートチャンネルの使い方がどうか言ってたけど、それをやるのか？アル」

よくよく考えると個人間秘匿通信プライベートチャンネルの使い方以前に教える事があるのを思い出す。

「最初は個人間秘匿通信プライベートチャンネルの使い方教えようと思ったけど、それ以前にIS本体と武装を確実に展開できるようにする方法を教える」

パーソナライズをした専用機持ちの基本ではあるのだが、これも慣れないと上手くできないので練習あるのみだ。

「そんな簡単な事からか？」

「そう思うなら、白式展開してみる。慣れないうちはかなり苦労するから」

「そうなのか？」

一夏はそう言いながら白式を展開しようとするが、展開イメージが

固まっっていない事もあつてか5秒ほどかかって量子化の兆候が現れ、白式を展開しきるのに10秒ほどかかった。

「こんな感じだけど、これだと遅いのか？」

「遅い。慣れると展開には1秒あれば余裕だからな」

「展開する時に自分なりの明確なイメージがあれば、すぐに展開できますわよ」

そう言つてセシリアは一度ブルー・ティアーズを待機状態のイヤークラスに戻してISスーツだけになる。

「見ていてくださいいな」

そう言つてセシリアは目を閉じるだけで再びブルー・ティアーズを展開、ISを装着する。

「あ、俺よりも全然早い」

「ついでに俺も同じくらいあれば展開できるぞ」

左手首につけている待機状態のスカイ・ブレードである男物の空色の腕時計を胸のあたりまで持ち上げ、時計を右手で持つて左手首を回す。何度となく行ったその行動で直感的にISを展開するイメージを作り上げ、その直後にスカイ・ブレードは待機状態から戦闘状態になつていた。

「こんな感じで、慣れればISの展開に時間はかからない」

「へえ。ところでセシリアさんは目を閉じてただけだったけど、アールはどうしてポーズとつてたんだ？」

「俺はISの展開に慣れはしたけど、展開イメージをより早く固めたほうが展開時間短縮できるから、特定動作を行う事でそのイメー

ジを引き出しやすくしてるんだよ」

時計を持ちながら手首を回すなんて普段はしない仕草だが、そういった仕草にする事でふとしたはずみでISを展開しないようにするための安全装置セイフティでもあったりする。

「普段しないような動作で、なるべく時間のかからない動きをする事で展開イメージを固めれば展開にかかる時間は少なくて済むぞ」
「普段よくする動作だと、それで間違えてISを展開してしまいかねませんからお勧めはしませんわ」

セシリアの補足も聞いて、一夏は確認してくる。

「つまり変身ヒーローの変身ポーズみたいなものか」

「みもふたもない事言つとそれが一番近い」

あまりいい例えではないが、一夏なりに理解してそう言っているのだろうからよしとしておく。

「その特定動作もあくまで展開イメージの補助ですから、いずれはその動作なしでも展開できるようにしておかないといけませんわ」

セシリアも補足説明を入れてくれるので非常に助かっている。ついでにいうと、俺の場合IS展開までの所要時間はさっきの動作をすれば0.5秒、しない場合1秒かかるので、動作なしで展開所要時間0.5秒が今の目標だったりする。

「なるべく短い動作のほうが緊急展開する時とかに楽だから、自分で動作を考えてみな」

「おう。自分なりにやってみるさ」

そうして30分ほどすると、特定動作の補助もあって一夏も確実にISを展開できるようになった。

「よし。まだ少し時間はかかるけど、確実に出来るぞ」

「あとはひたすら練習していけばISの展開は問題なさそうだな。次は武装の展開をやるか」

「ああ、わかった。こっちはISの展開との違いは何かあるのか？」
本体の展開との違いを聞いてくる一夏。

「基本的にはIS本体の展開と違いはないけど、戦闘中にその局面にあわせた武装を選んでいく必要があるから、展開スピードは早ければ早いほどいい。一夏、白式の武装って昨日の試合で使ってた太刀以外には何かあるんだ？」

戦闘局面にあわせた高速武装展開の一つの極致が高速切替ラビット・スイッチと呼ばれる技能だったりするのだが、そこまで詳しく言わなくてもいいだろう。

「白式の武装か？武装欄には雪片式型以外は無いみたいだけど」

正直に話してくる一夏の言葉を聞きながら、俺は二重の意味で耳を疑った。

「マジか？それ」

「ああ。そんなに変な事なのか？これって」

「普通のISなら最低でも3種類程度は武装があるもんだ。近接戦闘用のブレードのみなんて、暮桜……織斑先生が現役時代に使っていたISだけだぞ」

太刀の名前まで暮桜の使っていた物と似ていて、武装も暮桜と同じ仕様の刀一本。ここまで白式と暮桜が似通っているとなると、そのデメリットまで同じなんて事がありえそうで困る。

「それ、本当か？」

「ああ。白式と暮桜の仕様がここまで似通ってるなら、織斑先生に直接指導してもらった方が早いかな。基本的な運用方法からきっちり教えてくれると思うぞ？」

下手をすれば地獄を見ることになるだろうが、垣間見た地獄の分だけ腕は上がるだろう。

「そうだな、時間がある時にでも一度見てもらうか」

「そうしとけ。まあ今は武装の展開を確実にできる様にしておいた方がいいだろ」

「だな。よろしく頼む」

そう言いながら武装の展開練習を始めるが、それも日が暮れる直前には一夏も感覚を掴んだらしく、武装を確実に展開できるようになったので、そこで自主訓練を終わりにして寮へと戻った。

シャワーを交代で浴びて、夕食もとって部屋でまったりしていると、一夏が思い出したように話しかけてくる。

「そういえばアル。記録ログを見てた時にいい参考資料があるとかいつてたけど、どんな物なんだ？」

「ああ、それか。ちょっと待ってる」

トランクの中にしまつてある第一回と第二回のモンド・グロツソのディスクを取り出すと、それを一夏に見せる。

「どういうわけか暮桜と白式は特殊能力も一緒みたいだから、これ見れば少しは参考になるんじゃないか？」

「あつ、ああ………そうだな。見させてもらつていいか？」

パッケージを見た瞬間悔しげな顔をした一夏を不思議に思いながら、俺はディスクを渡す。

「ただでさえプレミア付いてるんだから、ディスクに傷つけるなよ？」

「ああ、注意して見るさ」

俺も久しぶりに見たかったので、それからしばらくは二人でモンド・グロツソの鑑賞をする。

そして、第二回モンド・グロツソのディスクのラストトラックの準決勝第2試合が始まる直前、一夏がこんな事を言ってきた。

「そつか、映像だとこれがラストになるのか」

「ああ。理由は知らないけど、決勝戦は千冬さんの不戦敗だから収録されてないんだよ」

ネット上だとこの千冬さんの不戦敗は理由が諸説入り乱れているため、どれが真実かは千冬さんしか知らないのだが、俺が千冬さんの不戦敗の話題を出した途端一夏の表情が苦虫を噛み潰したような表情になつていることに気づく。

「どうした？一夏。なにかマズイ事言ったか？」

そう言っているうちに試合映像が開始される。

「いや……………なんでもない」

そういう一夏だが、その表情は優れないまま試合の映像を見ていて、ディスクの再生は終わるのだった。

「それよりありがとな。色々勉強になったよ」

「ああ、また見たければいつでも言ってくれ」

「おう。ちょっと早いけど、俺寝るわ。お休み」

いそいそとベッドにもぐりこむ一夏。時間を見るとそろそろ11時になるうといったところだった。

「そうだな、少し早いけど俺も寝るか。電気消すぞ」

そう言って部屋の電気を消す。実はこの時に、軽くだが一夏の触れてほしくなかったところに触れていたのだが、それを俺が知るのもう少し後になってからだった。

05 セシリア、初めての料理（後書き）

今回はこんな感じの日常ストーリーでした。

奇をてらってアルバート君にクラス代表をさせてみました。

そしてセシリアの初料理。簡単な物ゆえに外し方がおとなしめで、きっちり指摘させてみました。

ISの展開についての云々は独自解釈ですので、ご容赦ください。

06 物事の教え方と、新たな転校生（前書き）

最新話投稿です。今回から感想受付をフリーにしました。

あと、今後の展開で迷っていますのでアンケートを取りたいと思います。

別枠でアンケート内容を発表するので、そちらもご覧ください。

06 物事の教え方と、新たな転校生

昨日一夏にモンド・グロツソの記録映像を見せ、今朝はセシリアと約束したとおり、朝食前にセシリアに料理を教えながらついでに自分の分の弁当を作る事にした。

俺が手順を説明してから料理を始めるが、最初の内はセシリアは教えた手順を守って調理してくれていたの、自分の弁当作りに集中する。

それから朝食を取って授業を受けるのだが、最近は少しずつ実機を使った授業も増えてきて、専用機を持っている俺達3人が色々な機動や武装の展開などをクラスメイト達に見せるようになってきている。

これは専用機持ちがいるクラスだけのカリキュラムで、専用機持ちがいないクラスだと普通に教材の映像を見て飛行や武装の展開の様子を見るのだが、専用機持ちがいるクラスはその代わりに専用機持ちが実際にその様子を見せることで一般生徒達に見本を行うのと同じ時に、専用機持ちのISの制御能力の高さなどを教える意味合いもあるようだ。

それでも俺達のクラスでそこまでの技量を持っているのはセシリアだけで、男の俺達例外はといえば、今日の授業中に一夏が急降下と完全停止両方に失敗して盛大に墜落したし、俺も急降下は問題なかったのだが、完全停止の距離が本来なら10センチの所が30センチ近く開いてしまったため、今日の自主練の内容は自然と決まった。

そんな事があつたが、いずれはクラス全体で実機を使った実習訓練も行われることになるのだろう。

昼には朝作った弁当を食べた。俺もセシリアとの味の比較のために今日は中身を同じにしているのだが、当たってほしくなかった俺の予想は見事に当たっていた。

マズイ意味で凄まじい味のBLTサンドを食べてしまい、セシリアにこれを作った時に使った調味料を聞くとかなり色々な、自分の知らない調味料を混ぜたようで、俺が作ったBLTサンドとの味の違いを思い知ったセシリア。明日からは味付け前に一言声をかけるように言っておく。

午後も授業を受けて放課後には自主練をしているのだが、一夏も俺も世界に二人しかいない男性IS操縦者のため、各種書類の申請などで自主練が出来ない場合もでてくると思っていたが、今日は少しばかり勝手が違った。

「アルバート君、ちょっといいかな？」

「ん？相川さん、何かあつた？」

自主練のためアリーナに向かおうとすると、クラスメイトの相川さんが話しかけてくる。

「自主練行く前に悪いんだけど、夜って時間空いてるかな？」

「え？特にこれといって予定はないけど」

「実は今日、アルバート君のクラス代表就任パーティーやろうと思ってるから、出来る事なら寮の食堂に7時半に来てほしいんだけど、ダメかな？」

今日の夜は特に予定もないのし、パーティの類は嫌いじゃないので、時間を確認して出席する事を伝える。

「別に構わないよ。7時半に寮の食堂だね？」

「うん。みんな待つてるから、絶対来てね!!」

俺がそういうと、相川さんは満面の笑みを浮かべながら念をおしてから去っていった。

「……………元気だなあ、相川さん。…っと、一夏たち待たせてたっけ」

そのハイテンションにちょっと驚きながら、一夏たちとの待ち合わせ場所である第3アリーナに向かうのだった。

急いでISスーツに着替えてアリーナ・ステージに向かうと、一夏とセシリアだけではなく、今日は篝さんも一緒に俺を待っていた。

「アル、遅い!!何をやってたんだ」

「そう言っつてやるなよ、篝。でも、アルが一番最後つても珍しいな」

「何かありましたの？」

「悪い。相川さんから今日パーティやるって聞いてたから、それで遅れた」

遅れた事を謝り、理由を正直に話す。

「む、そういえばお前には最後に話すようになっていたな」

「それでは仕方ありませんわね」

「そっぴや俺も参加してくれって言われてたっけ」

そうして三者三様の返答がきて、あっさりと許してくれた。

それからはいつもおりの自主練時間 今日授業中に上手くできなかつた急降下と完全停止の練習がメインだ となり、経験者であるセシリアと篤さん、初心者俺と一夏で釣り合いが取れていたためマンツーマンで教える事になり、セシリアは俺に、篤さんは一夏に教える事になった。

そうして訓練を開始してある程度時間が経って夕焼けが出始めた頃、俺のほうは何か完全停止10センチを安定して出来るようになったので一夏の様子を見てみると、一夏と篤さんが言い争っていた。

「一夏、いつになったらイメージが掴めるのだ。さっきからずっと同じところで詰まっているぞ」

そう言っつて一夏を睨む篤さん。説明が上手く伝わっていないのだからうか？

「あのなあ篤、お前の説明が独特すぎるんだよ。なんだよ、『くいつて感じ』って」

それに反論するように一夏の言つた一言はあまりにも抽象的すぎて、俺にも理解できなかつた。

「……………くいつて感じだ」

だが、あくまでもその抽象的なイメージを口にする筈さんを見て、俺はセシリアに秘匿通信フライングチャネルを繋げると、一言セシリアにこう聞いた。

『セシリア、今の筈さんの説明でわかった？』

俺に付き添って地上で待っていたセシリアは、まさか自分に話を降られると思っていなかったようで、たつぷり10秒は考えてこう答えた。

『……………いえ、あまりに抽象的すぎてわかりませんでしたわ』

『……………だよねえ。失礼なこと言うけど、最初の頃のセシリアの説明より酷いと思うのは気のせい？』

初めてセシリアに模擬戦で勝ったのはISを起動させたばかりの頃なので、それからセシリアには色々教えてもらっていたのだが、最初の頃のセシリアの説明は動きの説明が細かすぎて逆にわからなかった。

今ではそれも直ってきているのだが、筈さんの説明はそれに輪をかけて酷かった。

『…間違っていますせんわ、それ。今考えるとあの説明で教えた動きを実践できたアルの理解力の高さのほうが際立ちますわ』

『あはは、ありがとう』

一夏たちに聞こえないように二人で話し込んでいると、筈さん達にも動きがあった。

「もう知らん！！勝手にしろ！！」

自分の説明を理解していない一夏に対して篤さんは完全に怒ってしまい、足早にアリーナ・ゲートに向かかっていってしまふ。

「おい、待てっつて篤!!」

そしてそれを慌てて追いかける一夏。それを見て、俺は繋げっぱなしの秘匿通信でセシリアにこう言った。

プライベートチャンネル

『俺は一夏のフォロワーするから、セシリアは篤さんのフォロワーお願いしてもいい？これはちよっと放っておけない』

『同感ですわ。あの説明では伝わるものも伝わりませんから、教える方を伝授しておきます』

『そうだね、そうしてくれると一夏と篤さんのためにもなると思う。あと、今は篤さんも気が立っているだろうから、出来るだけ穏便にね』

『わかっております。それでは、また後で』

プライベートチャンネル

そう言ってお互いに秘匿通信を切るとISを待機状態に戻し、それぞれの更衣室に向かうのだった。

更衣室に着くと、荷物を入れてあるロッカー近くの椅子に座っている一夏の隣に腰掛けながら声をかける。

「盛大にやったもんだな、一夏」

「……アルか。なんかこうしていると昔みたいだよな」

「ああ。お前と篤さんが些細な事で喧嘩して、俺が二人の話を聞いてからそれぞれにフォロワーして仲直りつてのがいつものパターンだったな」

回数こそそこまで多くなかったが、それでも二人のフォローをする事には多少なりとも慣れていた。

「で？喧嘩の原因は篝さんの教え方か？」

「ああ。篝に急降下と完全停止のやり方を教わろうとしたんだけど、説明が抽象的すぎてわかんなかったんだよ。IS展開してたなら聞こえてただろ？」

「まあ、最後のほうは聞こえてたからお前の言う事もわかるけど、急降下と完全停止、一回でも挑戦してみたのか？」

「してない……っていうか、篝からやり方を教わって、一回挑戦しようと思って詳しい説明聞いてたら結構時間経ってたから、出来てないっていった方が正しいかな」

一夏のその言葉を聞き、俺は一つ確認を取る。

「つまり、篝さんなりの説明を一回は受けたんだな？」

「ああ。その説明もかなり擬音が多くて抽象的だったんだけどな」

一夏の話聞いて、俺は少しの間黙考すると、こう言っしかなかった。

「……………今から言うのはあくまでも私見だから、本当にそうとは限らないってのを頭に入れといてくれよ？」

「ああ、わかった」

一夏の返事を聞いてから、俺は自分の考えを述べる。

「篝さんからすれば、『一夏は自分の説明をしっかりと理解してない』と思ってるんじゃないか？」

俺がそう言つと、一夏は当然反論してくる。

「あの独特極まりない説明で内容を理解しろっていう方が難しくないか？」

「俺もそれは思ったことだし、当然教える側の箒さんに問題があるのは認めるさ。でも、最初から最後まで説明はひととおり聞いたんだろ？」

「ああ。ただ箒の説明してくれた部分の中で抽象的などころがかなり多かったから、そこを詳しく聞いてたらかなり時間が経つてたけど」

「それを箒さんは『自分の説明を理解していない』って思ったんだろ。同じ事を何回も説明するのって、教える側からすればだんだん怒れてくるのも仕方ないだろうしな。一夏も立場が逆なら頭にこないか？」

そこまで言つて一夏に聞いてみると、少し考えてから一夏はこう答えた。

「……………確かにそうかもしれないな」

「だろ？まあ、今回の事は箒さんも教え方を知らなかったし、一夏も同じ事を何度も聞きすぎたから起こった事だと俺は思う。セシリアには箒さんへのフォローで物事の教え方を教えるように頼んでおいたから、次からは多少なりともマシになつてると思つぞ。あとは一回謝つておけば大丈夫じゃないか？」

「そうだな。急いで着替えて、箒に謝つてくるか」

そう言つて、いそいそと着替え始める一夏。

「そうしとけ。ただ、女子更衣室前で待つてると変な噂がたつて余

計に目立ちかねないから、適当なところで待ってたほうがいいだろうけど」

おまけでそう言うのと、一夏の動きが一瞬きこちなくなる。

「……………そうだよな。今でも十分目立ってるのに、これ以上目立つ噂あつたらまずいよな」

「……………まあいい。あとでどうなったか結果だけ教えてくれ」

一夏はそこまで気が回っていなかったようだが、言われて気づいたようなのでそのことには触れないでおく。

「おう。サンキュな、アル」

着替えが終わった一夏は箒さんに話をするため、鞆を持って更衣室を出て行ったので、俺もこの後のことを思い出し、協力してくれたセシリアへのお礼を考えながら制服に着替える。

そうして着替えが終わり、第3アリーナから寮へと繋がる道に制服に着替えたセシリアが待っていたので、一言お礼を言うておく。

「セシリア、ありがとう。箒さんと話をしようにも女子更衣室だと俺入れないから、助かったよ」

「いえ、構いませんわ。わたくしとしても、少し前の自分とアルを見ているようなものでしたから」

説明が上手く伝わらずに怒る教える側と、独特の説明が理解できずに何度も聞いてしまう教わる側という構図は、俺とセシリアも何度かやってしまった事で、その時にはサラ先輩が間を取り持つてくれて何とかなったのだが、自分がフォローする側になるとその苦労もわかってくる。

「……確かにそうかも。まあ、あの二人は元々仲良かったし、何とかなるでしょ」

「あのお二人とお付き合いの時間はあなたのほうが長いですから、あなたが言うならそうなのでしょう」

そう言いながら俺は立ち止まると、セシリアもそのことに気づいて足を止める。

「アル、どうしましたの？」

「……あのさ、セシリア。今日幕さんをフォローしてくれたお礼代わりに言うのもおかしいかもしれないけど、今度の日曜日、どこか一緒に出かけないか？」

俺がお礼代わりに出来そうな事が他に思い浮かばず、こんなベタ極まりない事しか言えない自分のボキャブラリーの少なさを恨めしく思いながらそう言つと、振り返ろうとしたセシリアの動きがぴたと止まる。

「そっ、そそそ……それは……でっ、デートのお誘いということかしらっ」

俺に背を向けたまま、どもりながら確認してくるセシリア。

「デートって程気取るつもりはないよ。そういった施設の場所知ら

ないし、入寮前に俺がルームメイトにもプライベートがあるからって説き伏せて荷物減らさせたたる？そろそろ入寮して1ヶ月経つから足りない物も把握できただろうし、一緒に出かけて買いに行こうかと思っただけだ」

本気でデートするなら誘い方ももう少しは工夫するし、それっぽい場所にも行くつもりだから、今回は純粋に買い物メインだ。

「もし、先約あるならそっち優先してくれてかまわないけど？」

「とっ、特に予定はないですから、ご一緒させていただきますわ。」

それに、確かに足りない物がありますから、一緒に選んでいただけると助かります」

「本当か？よかった。こっちとしても何かお礼したかったんだよ。」

料理教える前なら教えてもよかったけど、それ以外だと一緒に出かけて荷物持ちやるくらいしか思いうかばなかったんだよな」

女尊男卑には納得しきっていないので見知らぬ女相手に荷物持ちなどをやる気はないが、知り合いの女性の荷物くらいなら持つてもかまわないし。

「にっ、荷物持ちなどさせませんわ。むしろわたくしに似合う物を選んでいただきたいくらいですし」

それはまた随分と神経を使う仕事を仰ってください。だが、それがお望みならば応えるしかないだろう。

「了解。ただ、そのてのことは初めてだから、ある程度は自分で絞り込んでくれよ？こっちとしても1から10まで全部選ぶのは責任重大すぎるから」

「ええ、それはわかっておりますわ。ただ、期待はさせてもらいま

すわよ？」

「ああ、善処する。……………時間は10時に駅前で待ち合わせでいいか？」

「それでかまいませんわ。遅れないようにしてくださいね」

「わかってるよ。……………そうそう、セシリアは十分綺麗なんだから、早く来すぎて大量のナンパ野郎共を交番送りにし過ぎて交番のおまわりさんに迷惑かけないようにね」

少し冗談めかしてそう言って注意すると、セシリアは一人で足早に寮に向かいながらこういつてくる。

「そつ、そんなことはいたしません。それに、それは分不相応にわたくしに声をかけてくる男性が悪いのですわ……………あなた以外の男性とお付き合いますつもりはないのですから」

最後にセシリアが何かつぶやいたようだが、あまりに小さくて何を言っているのか聞こえなかった。

「……………セシリア、何か言った？」

「なんでもありません。パーティまで時間もあまりないのでですから、急ぎますわよ」

そういわれてスカイ・ブレードの表示する時間を見てみると既に6時をまわっていて、夕食の事を考えると余り時間がなかった。

「本当だ。それじゃ急ぐか」

俺も急いでセシリアの後を追ひ、二人とも寮につくとそれぞれの部屋へと向かってから夕食をとり、あつという間に約束の時間となつて俺のクラス代表就任パーティの開始時間となり、パーティはその

日の10時過ぎまで続いた。

パーティ中、以前会った黛先輩がクラス代表決定戦を繰り広げた俺達3人にインタビューをしに来たし、セシリアは俺の顔を見ながらやけに嬉しそうにしているし、インタビューの一環で写真撮影となつたのだが、参加者の内一組のメンバー全員がフレームに割り込んでくるハプニングも会ったが、それ以外は特にこれといった問題もなかった。

「あー、疲れた。シャワーどっちが先に使う？」

パーティ会場の食堂から寮の自室に戻ってくる頃には、結構体力を消耗しておりベッドに寝転びながら一夏にどちらが先にシャワーを使うかを聞く。

「俺も結構疲れたけど、アルが先に使っていていいぞ。俺はパーティ前に一回浴びてるし」

「それじゃあ遠慮なく使わせてもらう。一夏はそのまま寝るのか？」

「そうするから、電気は消してもかまわないぞ」

一夏のその発言を聞きながら着替えを取り出し、それを持ってシャワールームに入る直前部屋の電気のスイッチに手をかける。

「了解。それじゃお休み」

そう言って部屋の電気を消すと、一夏のいるであろう場所から返事が返ってくる。

「おう、お休み」

そう言ってくる一夏を背にして俺はシャワールームに入りシャワーを浴びてから就寝するのだった。

翌日、いつもどおりの時間に登校して席に付くと、クラスメイトの一人が話しかけてくる。

「アルバート君、おはよー。ねえ、転校生の噂聞いた？」

「転校生って、4月この時期に？」

IS学園はかなり特殊な学園のため、転入の手続きはかなり面倒な物になる。単に入試をパスするだけでなく、学園内の安全保障の意味合いもあつて国側の推薦が必要になつてくるため、転入生[〓]どこかの国の代表候補生となつていたりする。

「そう、なんでも中国の代表候補生なんだってさ」

「へえ、そうなんだ。教えてくれてありがとう」

「いいよ。それじゃまたね」

そう言つて離れていく子に手を振りながら、俺はセシリアに近づくと一言聞いてみる。

「噂の転校生、目的はセシリアの実力を見ること。俺と一夏のどちらか、もしくは両方の自国引き入れのどっちだと思つ？」

「もしくはその両方の可能性もありましてよ？」

そんな風に少し物騒な会話をしていると、少し遅れてやってきた篤さんが俺達の横を通る時にこう言ってくる。

「このクラスに転入してくるわけではないのだろう？騒ぐほどのことでもあるまい」

そう言っただけの男性IS操縦者　を考えるとどうしても樂觀視が出来ない。

「…………でもまあ、実際に会ってみないとわからないか」

「そうですね。ここで話していても転入生の事がわかるわけではありませんし」

「後で転入生がいるクラスに行ってみる？」

「いずれはどこかで会うでしょうから、それを待ってもいいのでは？」

「そうするか」

そう言っただけ俺は席に戻ろうとすると、セシリアが声をかけてくる。

「そつ、それよりもアル、対抗戦は明後日リーグマッチで、明日一日はアリーナの設定調整が入るので、今日がアリーナを自由に使える最終日なのです。基礎訓練ではなくより実戦的な訓練をすべきでは？」

「あー、そうだな。セシリア、手伝ってくれるか？遠距離戦を想定した場合、セシリアは相手にするにはちょうどいいし」

「勿論ですわ。ただ、そうすると近接戦闘も想定したほうがいいと思います」

当然といえば当然の指摘に、俺は少し考えてこう答える。

「それは一夏に頼むとするさ。あいつも専用機持ちだからすぐに準備できるから、今から少し話してくる」

「そうですね。後で結果を教えてくださいな」

「ああ。それじゃまた後で」

俺はセシリアから離れて一夏の席に近づくと、一夏に話しかける。

「一夏、今日の放課後の自主練について少しいいか？」

「ああ。今日は何をやるつもりなんだ？」

いつもどおりの基礎訓練と思っている一夏。

「悪いけど今日は俺の模擬戦の相手をしてくれ。近接戦相手って意味なら白式はかなり強いから、相手してもらえると助かるんだが」

「オツケー、そういうことなら任せとけ」

突然の模擬戦にもかかわらず快諾してくれる一夏。それを聞いていたクラスメイト達は専用機の話になり、自然と所属クラスの話にまで発展する。

「でも今のところ専用機を持つてるクラスって一組と四組だけだから、それ以外のクラスと当たっても余裕だよな」

「その情報、古いよ」

教室の入り口側から聞き覚えのない声が聞こえてきたので全員が入り口を見ると、そこには見た事のない制服のカスタマイズをしたツィールの女子生徒がいた。

「二組にも専用機持ちがいるんだよね。もっとも、クラス代表は興

味なかつたから対抗戦には出ないけど」

「鈴……？お前、鈴か？」

ほとんどの生徒が始めて見る女子だが、例外として一夏はその女生徒を知っているようだった。

「そうよ。中国代表候補生、凰鈴音。久しぶりね、一夏」

「何格好つけてるんだ？すげえ似合わないぞ」

そう言つて一夏と話を始める鈴音さん。どうやら一夏と知り合いらしい。それから話を始めようとする鈴音さんの後ろに織斑先生が立つと、一声かける。

「おい」

「なによ！？」

そう言い返す鈴音さんの頭に出席簿アタックが決まり、織斑先生の注意を受けると鈴音さんはすごすごと自分の教室へと戻っていく。

クラス中が一夏と鈴音さんが知り合いということ騒がしくなるが、織斑先生はそれすら出席簿で鎮圧していき、SHRが始まる中で俺はSHRが終わったら一夏に事情を聞こうと決めて、今日の授業が始まるのだった。

06 物事の教え方と、新たな転校生（後書き）

色々キング・クリムゾンしちゃいましたが6話です。

キンクリした理由は書いてみたら面白いくらいに違いがでなかった
ので省きました。

同時にアンケートの募集も行ってますので、気が向いた方は答えて
くれるとうれしいです。

今後の展開アンケート(前書き)

アンケート内容となります。もしよろしければお答えください。

今後の展開アンケート

6話前書きで言っていたアンケートですが、セシリアの『恋のライバル』ポジションのキャラをどうするかで迷っています。

妥当？なところでアルバートとシャルルを相部屋にして、男装したシャルルの秘密を知らせてアルバートにシャルフラグを立てさせるか、7巻の発売を待つて更識先輩の妹さんが4組の専用機持ちらしいので、クラス対抗戦の相手を4組に変えてアルバートと一緒に無人機の相手をさせてフラグっぽい物をたてさせ、7巻以前から一夏たちと一緒に行動させるか、

それとも『恋のライバル』ポジションキャラそのものをやめてアルバートに鈍感（偽）のスキルをつけてセシリアと相思相愛なお互いどぎまぎさせるか、どれにしようか迷っています。

もし『アンケートに協力してやるか』と思った方は、感想受付をフリーにしておいたので、感想欄で

1・シャル

2・更識先輩の妹

3・鈍感（偽）付与

4・それ以外の展開

のどれがいいかを書き込んでください。4番の場合具体的な案を出してくれると助かります。

なお、事前フラグの関係上、鈴とラウラは関係を持っていないので、その二人は大変申し訳ないんですがアルとくつつかせる事ができま

せん。

アンケートの受付期間は4月11日の日付変更までとさせていただきます。

7話はそれから書き始めるので、7話はそれ以降の投稿になります。

こんなダメ作者ですが、皆さん、ご協力をお願いします。

07 幼馴染と転校生の関係、その実力（前書き）

アンケート集計後に7話を書き始めるといいましたが、書き方を忘れないように書いていたら一本分出来上がったので投稿します。

07 幼馴染と転校生の関係、その実力

時間は流れて昼休み。SHR終了後の休み時間に一夏から鈴音さんとの関係を聞こうと思ったのだが、休み時間になることに女子生徒の視線が大量に一夏に注がれ、

その圧倒的な視線量は『信管の抜いていない爆弾の近くに実は火種がありました』的な、何かか爆発しそうな緊張感が漂っていたため、話しかけようにも話しかけることが出来ず、結局昼休みまで流れてしまった。

「うっ……俺が一体なにをした……」

最近珍生物扱いも沈静化してきたと思った矢先にこれまで以上の視線が注がれたため、さすがの一夏も机に突っ伏してグロッキー状態だった。

「初めて見る転校生に気軽に話しかけるたった二人の男子生徒の片割れっただけで、変な噂を呼び込むには十分な起爆剤だと思うのは気のせいかな？」

「間違ってますせんわね、それ。聞こえた話だとお二人が付き合っているのではないかという噂が一番多かったようですが」

「そっ、そうだぞ一夏！！あの転校生との関係をはつきり説明してもらおう！！」

そうやって今にも一夏に掴みかからんとする筈さん。どうやら噂に翻弄された結果授業に集中できず、昼休みまでに山田先生から注意を3回、織斑先生からの出席簿アタックを2回受けている。

「あー……その話はメシ食いながらもいいか？とりあえず学食に

行きたい」

「む……。ま、まあお前がそう言うのなら、いいだろう」

「別にいいけど、学食で弁当食べてもよかったっけ？」

「たしか席がそこまで混んでなければ大丈夫のはずです」

各々が了承の意を告げると、一夏はのろのと立ち上がると、そのままおぼつかない足取りでふらふらと学食へと向かい、俺とセシリア、篝さんと他数名のクラスメイトを連れて学食へと向かう。

「一夏、俺達は適当に席とっておくから、自分の分買ってきな」

「あー、そうだな。頼む」

そう言っで一夏と篝さんはメニュー注文の列に並び、俺とセシリアは最低でも4人が全員座れる場所に陣取って、一夏たちが来るのを待つ。

「鈴、いつ日本に帰ってきたんだ？」

「アンタこそ、なにIS使ってるのよ。ニュースで見た時びっくりしたじゃない」

そうして弁当に手をつけずに待っていると、一夏と篝さん、一緒に来たクラスメイトたちだけでなく、例の転校生の鈴音さんも一緒に来ていた。

「一夏、こっちだ。適当に座って、とっとと関係バラしたほうが精神的にも楽になるぞ」

「そっだぞ一夏。そろそろどういう関係か説明してほしいのだが」

「まさか本当に噂どおり付き合ってますの？」

弁当を食べながら、いたって普通に関係を聞こうとする俺とセシリ

ア。篝さんは自分以外に親しくしている女子生徒がいることに疎外感を感じているのか、多少言葉に棘があるようだし、席についたクラスメイト達も興味津々とばかりに頷いていた。

そんな周囲の反応を知ってか知らずか、机に買ってきた日替わり定食をおきながら一夏は正直に鈴音さんとの関係を話し出そうとする。

「べ、べべ、別に私は付き合ってる訳じゃ……………」

だが、一夏が話し出す前に羞恥心が限界を向かえたのか、セシリアのその言葉に真っ赤になりながら俯く鈴音さんだが、一夏はそんな彼女の様子に気づくことなく疲れた声色でこう答えた。

「セシリアさん、なんでそんな話になるんだ？俺と鈴はただの幼馴染だよ。それが学園に転入してきたっただけで、どうしてみんな騒いでるんだ？」

今日半日で入学以来最大の視線攻撃をくらった事にうんざりとしながら、心底不思議そうにそう言う一夏。

「……………」

だが、その発言は鈴音さん個人としては気にいらないうつで、一夏を睨みつける。

「？何睨んでるんだ？」

「なんでもないわよっ！！！」

いきなり睨みつけてきた鈴音さんを不思議に思い、何故睨んできたかを聞く一夏だが、鈴音さんは怒った様子でなんでもないと言う。

「幼馴染……？」

「ってことは、俺が転校した後に会ったって事か？」

怪訝そうに聞く篤さんと、確認するように聞いてきた俺に対して一夏はこう答えた。

「そのとおりだよ、アル。アルが引越したのが小三の終わりまで、篤が引越していったのが小四の終わりだっただろ？鈴が転校してきたのは小五の頭だよ。で、中二の終わりに国に帰ったから、会うのは一年ちよつとぶりだな」

「ん？篤さんって小四の終わりに転校してたの？」

一夏が言った一言で篤さんが一度この街から引越した事を知った俺は、何気なく篤さんにその事を確認すると篤さんの表情が曇っていく。

「ああ……」

そのなんともいえない表情を見ながらISの設計者が誰かを思い出すと、ISを実際に動かすようになってから教わった様々なプログラムの中で篤さんに関係がありそうなものを思い出す。

「あー……ごめん。無神経だった」

「いや、アルとは転校してから連絡を取っていなかったから、知らないのも無理はない」

「？何の話だ？」

そこまで習っていない一夏はいきなり謝りだした俺を不思議そうな顔で見るので、一応ごまかしておく。

「なんでもないから、気にしなくていい」

「……ならいいけど。鈴、こっちがアルで、こっちが篝。ほら、前に話したろ？二人とも小学校からの幼馴染で、お前と同じ様に知り合った男の幼馴染と、俺の通ってた剣術道場の娘」

「ふうん、そうなんだ」

そう言つて俺と篝さんをじろじろと見る鈴音さん。篝さんは負けじと鈴音さんを見返しているが、俺は彼に向き直ると一言声をかける。

「ニュースとかでも何度か見ただろうけど、初めまして。これからよろしく、凰さん」

「篠ノ之篝だ。よろしくたのむ」

「二人とも初めまして。これからよろしくね。あたしの事は鈴でいいから」

それに答えてくる鈴さん。普通に挨拶しただけのはずだが、俺は何故か篝さんと鈴さんの間で火花が散ったような緊張感があつた。

「ンンンっ！！、私の存在を忘れてもらつては困りますわ。中国代表候補生、凰鈴音さん？」

自分ひとりだけ仲間はずれに思ったのか、咳払いをしながら鈴さんに話しかけるセシリア。お互いに所属国家は違えど、代表候補生どうしだから顔くらいは知っているのだろう。

「……誰？」

だが、それはどうやらセシリアから鈴さんの一方通行だったようで、セシリアの顔を見ながら小首をかしげる鈴さん。

「なっ!?わ、わたくしはイギリス代表候補生セシリア・オルコックトでしてよ!?まさかご存じないの!?!」

「うん。あたし他の国とか興味ないし」

「な、な、なっ……!?!」

興味ないという一言でばつさりと切り捨てた鈴さんに対して、言葉をつまらせながら怒りで顔を赤くするセシリア。

「セシリア、怒りたい気持ちはわからないでもないけど、まずは深呼吸して落ち着こう」

「でっ、ですがアル!!この方はわたくしと同じ代表候補生!!それが他国の代表候補生を知らないなんてありえませんか!!」

「そう言われても、知らないものは知らないんだし」

ひとまず冷静にさせるためになだめる俺を尻目に、無意識の内に追加で爆弾を投下してセシリアの怒りを煽る鈴さん。

「い、い、言っておきますけど、わたくしあなたのような方には負けませんわ!!」

「そ。でも戦ったらあたしが勝つよ。悪いけど強いもん」

怒りで拳を握りしめながらそういうセシリアに対して、素で確信した表情で自分が勝つという鈴さん。嫌味つたらしくないのでいいのだが、それはそれでセシリアのプライドを刺激するのでそこそこにしてほしいのが本音だったりする。

「……………」

「い、言ってくれますわね……………」

二人のやりとりを見ていた篤さんもいつの間にか箸を止めていて、

セシリアも拳を握ったままわなわなと震える。

そんなセシリアや篝さんに対して何食わぬ顔でラーメンをすすりながら一夏に話しかけている鈴さん。話している内容からすると一夏の自主練の相手をしてあげようとしているようだが、それに対して篝さんが抗議の声をあげている。

「セシリア、一回落ち着こう。少なくとも鈴さんに悪気はない様だし……ってそれはそれで問題あるか」

「そうですね！代表候補生なら、いずれ戦う事になる他国の代表候補生の顔と名前くらいは覚えておくべきです！！」

そう言いながらセシリアは自然に俺の作ったほうのバスケットに手を伸ばしてサンドイッチをほおばる。

「セシリア、今食べたの俺の作ったほうなんだけど……まあいいや。セシリアの……貰うよ」

一言そういって、セシリアのバスケットに手を伸ばして比較的安全なツナマヨネーズを一つ貰う。

「え？ ア、アル！！ っ、いきなりなにをしますの！？」

俺の取った行動に驚くセシリアを見ながらサンドイッチの味を確かめると、昨日に比べて初日の味に少しは近づいてきている様だ。

「いや、セシリアが一切れ持っていったから、俺も一切れ貰ったんだけど」

「ど、どおりで美味しいと思いましたわ。………それで、味のほうはいかがですか？」

自分でも気づいていなかったようで、驚いた表情をした後におずおずとサンドイッチの味を聞いてくるので正直に答える。

「うん。初日の味に少しずつ近くなってきたから、いいんじゃない?」

そう言うと、セシリアはほっと一息つく。

「ねえ、ちよつといい?」

「ん?どうかした?鈴さん」

そうしてセシリアと話していると、突然鈴さんが話しかけてくる。

「あのさ、一夏と放課後に自主練するって聞いたんだけど、あたしも参加させてもらうから」

鈴さんは一言そういって、俺の返事も聞かずに食べ終わった食器を片付けに行ってしまう。

「……………えーっと、どういった経緯でああなったんだ?一夏」

鈴さんはそのままテーブルに戻ることなく学食を去っていったので、一緒に話していた一夏に事情を聞いてみる。

「ああ。アルは何処まで俺達の話し聞いてた?」

「鈴さんがセシリアと話してた後のは全部聞いてなかったけど」

「そっか、それなら最初から話した方がいいな」

そう言って一夏は鈴さんが自主練に参加する事になった経緯を説明

してくれる。

なんでもクラス代表決定戦に負けた事に対して鈴さんは自分がISの操縦を見てあげようか一夏に提案したところ、篤さんが自分と俺が教えている事を理由にその提案を却下しようとしたらしいが、そこから一夏と篤さんの関係の深さに話が発展。

最終的にはお互いに近況報告しようという話になったが、放課後は先約で俺との模擬戦がある事を聞いていた篤さんがそれを理由に断ろうとしたところ、鈴さんも自主練に参加すると言い出し、俺に話しかけたようだ。

「そういうわけで鈴も参加する事になったんだけど、大丈夫か？」

「あ……あの方は……」

再び拳を握りしめながら体を震わせるセシリアを見ながら、俺はこう言うしかなかった。

「大丈夫も何も、返事する前にいなくなられたら認めざるを得ないだろ」

「そつだよなあ……」

そつという俺達を情けなく思ったのか、セシリアがテーブルを叩きながら立ち上がってこう言った。

「そんなことありませんわ！！今からでも二組に行って、訓練参加を却下する事を伝えればいいではありませんか！！」

その目は怒りに染まっっていて、生半可な言葉では覆せそうになかったので、俺は少しばかり考えると、セシリアに向かってこう言った。

「セシリア。上級者同士の対戦って観戦するだけでも勉強になるか

らちようどいい機会だし、代表候補生どうしの模擬戦見てみたいから鈴さんの自主練参加を認めてほしいんだけど、ダメか？」

「そっ、それは……たしかにそうですね……」

初心者にとってはISのとある機能を利用した試合観戦もすっかりとした訓練になることはセシリアも熟知しているので言いよどみ、しばらく悩んだ後にこう言ってくれた。

「……仕方ありませんわ。今回は特例として認めてさしあげます」「ありがとう、セシリア」

セシリアの中でもそれなりに悩んだ末の結論だろうから、一言お礼を言うておく。

「……かまいませんが、今日が自主練最終日なので、模擬戦は厳しくいきますわよ？」

「……了解。負けないように頑張るさ」

そうやってきたセシリアの目が本気になっていたのも、放課後は頑張る事にしようと思いながら弁当を食べ終え、俺達は午後の授業に備えるのだった。

そんな感じで時間は流れて放課後、俺と一夏はいつものとおり更衣室でISスーツに着替えて第三アリーナのステージに到着すると、そこには学園にある訓練機の一つである打鉄を装着、展開している筈さんが準備万端とばかりに腕を組んで待っていた。

「え？」

「あれ？ 篤さん、訓練機借りてきたんだ？」

「ああ。一夏の近接格闘戦の訓練用に借りてきた。……な、なんだ一夏。その顔は……おかしいか？」

一夏の表情を見てみるとなんともない表情をしていて、それから少し遅れるようにISスーツに着替えたセシリアと鈴さんもステージに來ると、打鉄を展開している篤さんを見ながらそれぞれ思った事を口にする。

「あら、篤さん。訓練機を借りてきましたの？」

「なに？ あんたも訓練参加すんの？」

二人とも意外そうな顔で篤さんを見てきた。そのため篤さんも恥ずかしいのか少しばかり顔を赤くしながら俺達に向かつてこう言った。

「そつ、そんな目で見るな、恥ずかしい。それより、訓練を始めるぞー！！」

そつぽを向きながらそう言ってくる篤さんを見ながら俺達はそれぞれのISを展開し、俺達はクラス対抗戦^{リーグマッチ}前の最後の自主練を始めることにする。

「鈴さん、一つ聞きたいんだけど、今までに誰かにISの操縦を教えた経験ってある？」

今日は模擬戦メインで自主練をしようと思っているのだが、模擬戦の何処が悪かったかを指摘するため一人は待機しようという話が午後の休み時間に出たので、鈴さんに操縦指導経験があるなら最初の

内は待機してもらおうと思っていた。

「そんなのないけど、それがどうしたのよ？」

「いや、それなら俺と一試合戦ってほしいんだけど、いいかな？」

「えー、あたしとしては一夏の実力を直接確かめたいんだけど」

そう言っただけの試合を渋る鈴さんだが、少しばかり遅かったようだ。

「でも、もう一夏と篤さん模擬戦始めちゃってるみたいだけど？」

「えっ！？うそっ！？」

そう言っただけ鈴さんはハイパーセンサーの情報を見始めたようで、俺達の上空では一夏の白式と篤さんの打鉄が模擬戦を始めていて、近接格闘戦の真っ最中だった。

「一夏はもう模擬戦始めてるから、悪いんだけど俺と戦うか、俺とセシリアの模擬戦を見て何処が悪かったかを指摘する役のどっちかをやってほしいんだけど」

「……そういうことなら戦ってあげるわ。男性IS操縦者の実力、見せてもらおうわ。手加減なしでいくよ？」

巨大な青竜刀を呼び出しながらそう言ってくる鈴さんを見ながら、俺はセシリアに開放回線オープンチャンネルでセシリアに話しかける。

「そういうわけだから、悪いけどセシリアはそれぞれの試合が終わったらその指摘よろしく」

「わかりましたわ。頑張ってきて下さいね」

セシリアは俺を励ましながら右手を大きく掲げる。

その姿を全方位視界接続で見ながら、俺も自分の主兵装であるスル^{バス}イ・ブレード^{タイドレント}を呼び出しながら両手で持ちつつ、ハイパーセンサー越しに送られてくる鈴さんのISのデータを見ながら、いつでも戦闘を開始できるようにする。

戦闘待機状態のISを感知。操縦者鳳鈴音。ISネーム『甲龍』。戦闘タイプ近接格闘型。特殊装備有り。

肩部分の棘付き装甲付きの非固定浮遊部位と刀身が馬鹿でかい青龍^{スパイク・アーマー}刀がやたら攻撃的な印象を与える機体で、特殊装備がある事から中国製の第3世代ISなのだろう。

(しばらくは様子見しながら防御と回避重視だな)

専用機持ちの代表候補生相手に事前情報なしで戦うのは初めてなので、しばらくは情報収集に徹するでしょう。

「では、試合開始!!」

そんな事を思っていると、セシリアが右手を振り下ろしながら試合開始の合図をする。

「いくわよ!!」

「ふっ!!」

お互いにブーストしつつ突撃しながら俺が袈裟切りを、鈴さんが左切り上げを放つ。これが単なる剣術戦なら純粹な膂力勝負になった

のだろうが、今やっているのはISバトルなので、当然ISのパワーアシストがある。

そして鈴さんの甲龍は俺のスカイ・ブレードよりもパワーが上のよ
うで、剣は青龍刀とぶつかった際の衝撃ではじき返されて体勢を崩
しかける。
スカイ・ブレード

「くっ!!」

吹き飛ばされた衝撃を利用して距離をとりながら二次元躍動旋回を
して鈴さんを再び正面に捉えると、鈴さんが俺に話しかけてくる。
クロス・グリッド・ターン

「へえ、初撃を防ぐなんてやるじゃない。でも」

そう言いながら鈴さんはもう一つの青龍刀を呼び出すと、二振りの
青龍刀で切りかかってくる。

「ちっ!!」

「甘い!!」

二刀両方を振るってくる鈴さんの攻撃を何とか防御すると、両肩部
分の非固定浮遊部位がスライドして中心の球体が光った瞬間、目に
見えない『何か』からの衝撃で殴り飛ばされる。
アンロック・ユニット

「ぐおっ!?!」

「まだまだあ!!」

飛びかけた意識を何とか繋ぎとめることに精一杯で次の鈴さんの攻
撃に対する防御はできないため、本命の攻撃が直撃する。

ドンッ！！

「ぐぐっ！！」

目に見えない『何か』によって、先程よりも盛大に殴り飛ばされて地表に打ち付けられる。

7. バリアー貫通、ダメージ83。シールドエネルギー残量、51
7. 実体ダメージ、レベル中。

「いつて〜」

シールドバリアーを貫通して届いたダメージを我慢して、自分のステータスを確認しながら立ち上がると、鈴さんは悠然とした態度で俺にこう聞いてきた。

「どうする？まだやるの？」

「当然。これくらいで音を上げるような、柔な鍛え方はしてないつもりだし」

それに、セシリアが見てる前でギブアップしたら模擬戦が終わった後で追加訓練を言い渡されるだろうし、それを除いた個人的事情としても絶対にしたくないので、正直にそう答える。

「そう。それなら何処まで出来るか、試してあげるわ！！」

そう言いながら鈴さんは先程と同じ攻撃を加えようとしているよう

で、非固定浮遊部位アンロック・ユニットがスライドする。

(どんな攻撃だろうと目標地点は俺のいる場所。とにかく回避に専念!!)

ハイパーセンサーに周囲に何かしらの変化があったら通達するよう
にコマンドを送ると、すぐに鈴さんの非固定浮遊部位アンロック・ユニット周辺の空間に
歪みが出ていると表示され、

その1秒後には大気の流れの一部が不自然なまでに俺目掛けて直進
してくる。

「ぬおっ!?!」

その反応を見て慌てて後ろに下がるが、回避のタイミングとしては
少し遅かったようでシールドエネルギーの残量が20ほど減少する。

「ほら、まだまだいくわよ!」

ハイパーセンサーが伝える空間の歪みも先程より大きくなり、そこ
を基点に連続で大気のパ弾が撃ち出される。

「くそっ!!そういう事かよ!!」

そんな事を言いながら急上昇で回避しようにも機動は予測されてい
たらしく、俺の機動を正確に予測して砲弾が飛んでくる。幸いとい
つていいのか加速性能はスカイ・ブレードこちひが上らしく、クリーンヒ
ットはしなかったにせよ砲弾のいくつかは当たってしまった、
連続砲撃が止む頃には残っていたシールドエネルギーの4割近くを
消費してしまっていた。

「鈴さん、その非固定浮遊部位アンロック・ユニットって衝撃砲？」

空間の歪みを再度検出し、3度目の衝撃砲のチャージに入った鈴さんを見下ろしながら確認するように話しかけると、少し意外そうな顔をして答えてくる。

「よくわかったじゃない、そのとおりよ。ま、それだけくらくつとい
てといて気づけないほうがおかしいけど」

しかも先程の急上昇中に非固定浮遊部位アンロック・ユニットが俺を捕捉して動かなかった事から、上下180度は確実に、最悪の場合360度死角なしで
衝撃砲を撃つ事が出来るのだろう。

正直言つてスカイ・ブレードの武装を全て使いこなせていない今の
俺では勝てる気がしない。それでも、ただ倒されるのを待つなんて
選択をするつもりもないので、今出来る範囲で精一杯足掻くとしよ
う。

(とはいえ、空間の歪みと大気の流れで発射基点と弾の位置を知つ
ても撃たれた後でわかったようなもんだからなあ)

それだとワントンポ遅いので、何処まで鈴さんの砲撃の軌道を読み、
攻撃する事が出来るかにかかっている。

初めて戦う代表候補生相手に素人の俺が読みの勝負を挑もうなど我
ながら酔狂が過ぎるが、今出来る中だとこれくらいしか対抗手段が
ない。自分のISの加速性能任せの大博打だ。
スカイ・ブレード

「鈴さん、今度はこつちからいくよ!!」

そう言いながら少しずつイクニッション・ブースト瞬間加速のチャージを開始しながら、最大
出力でブーストして、鈴さん目掛けて突っ込む。

「特攻するにしても、真正面からなんて随分と無謀ね!!」

当然鈴さんはチャージしていた衝撃砲を連射してくるので、それを上下左右に体を動かして出来る限り不可視の砲弾を回避する。その分時間はロスするし、いくつかの砲弾は鈴さんの読みが上手く直撃してしまつたが、

それでもイケニッション・ブースト瞬間加速のチャージが終わると同時に発動、トップスピード状態からさらに加速する。

「おおおおおっつ!!」

「なっ!?!何よそのスピード!!」

トップスピードからのイケニッション・ブースト瞬間加速という、機体と操縦者への負担を強いるそれを使った事に驚いた鈴さんは衝撃砲の連射を止めてしまい、その隙に剣でスカイ・フレード一撃を加えて鈴さんの脇を抜け、おまけにミサイルビツトから2発のミサイルを撃つ。

残りのシールドエネルギーを見てみると、残量55と表示されていて、あと一撃くらつたらその時点で終わりである。

気を引き締めて爆炎の中を注意深く見ていると、爆炎を貫くような動きがあつたため慌てて左に回避するが、それを読んでいたかのように追撃の砲弾が襲い掛かり、その一撃を受けた事でシールドエネルギーが0となり、俺の負けが確定した。

「あつぶなー。でも、代表候補生に攻撃当てるなんて、初心者にしてはやるんじゃない?」

模擬戦が終わつたので地上に降りる俺に対してそう言ってくる鈴さ

んを見ながら、俺は代表候補生の強さを改めて実感し、模擬戦の一部始終を見ていたセシリアから第三者の視点でどう動くべきかを聞くことにするのだった。

07 幼馴染と転校生の関係、その実力（後書き）

そんなわけで第7話です。

VS鈴ちゃん。アルバートのストーリー上の初敗北ですが、作者の中でアルバートを含めた1年の専用機持ちメンバーの強さを上からランキングするところになります。

ラウラ>シャル>鈴>箒（7巻）≡セシリア≡簪>箒（3）6巻
>一夏（白式雪羅）>アルバート（ファーストフォーム）≡一夏（白式）

これに対戦相手との相性とどれだけ相手の技などを知っているかで戦闘結果が変化します。

アンケートも今日の日付変更まで受け付けてますので、まだ協力していただけるようならほんの少しの時間ですがよろしく願います。

今後のアンケート結果発表（前書き）

今後の展開アンケートの結果発表だけです。本編とは無関係です。

今後のアンケート結果発表

いつも拙作を読んでいただき、ありがとうございます。
以前取った今後の展開アンケートの結果を発表します。

投票数9票中、1番のシャルルートが3票、2番の簪ルートが2票、3番のセシリア単独ヒロインでアルバートに鈍感（偽）付与ルートが4票という結果になりました。

よって、3番の鈍感（偽）付与を採用とさせていただきます。

なお、寄せられていた一部のアイデアも同時に採用させてもらおうと思います。

投票して下さった皆様、アイデア提供ありがとうございます。

投稿ペースもなるべくこのままを維持していくつもりですので、これからもInfinite Skyをよろしく願います。

08 クラスリーグマッチ開始、現れるアンノウン その1（前書き）

お待たせしました、最新話です。
いつもより少し長くなっています。

08 クラスリーグマッチ開始、現れるアンノウン その1

あれから時間は少し過ぎて午後6時半。自主練もとくに終わり、寮に戻ってシャワーも交代で浴び終わったので、今から夕食を食べようとしているところだった。

今日は最終的には鈴さんを含めて全員一度は俺と戦ってもらい、最後にセシリアと鈴さんの模擬戦をISの視界共有を使って観戦する事で、二人が戦闘中に相手の何処を見ながら戦っているかを俺と一夏と篤さんは追体験させてもらった。

俺の最終的な今日の模擬戦の結果は2勝1敗1引き分けという少し微妙な戦績だったりする。勝ったのは零落白夜の使用ペース配分を間違えた一夏と篤さん相手に、鈴さんには完敗、セシリアとは引き分けに終わった。

「そういえばアル。明日って放課後どうするんだ？全アリーナ設定調整で使えないんだから、休息日にするのか？」

部屋でセシリア達を待っていると、一夏が唐突に明日の予定を聞いてくるので正直に答える。

「明日か？明日は機体の調整したら休もうと思ってるけど」

そうやって答えると、一夏は意外そうな声でさらにこう聞いてきた。

「え？機体の調整って自分で出来る物なのか？」

「本来なら整備専門の人達に頼むのが一番確実なんだろうけど、自分でも調整できるにこした事はないと思うぞ。俺も自分の機体はマ

マニュアルに乗ってる整備と調整なら一通り出来る」

スカイ・ブレードを始めて起動させてから、IS学園に入学するまでの少ないながらの自由時間はひたすらマニュアルを読んでいたら、その方法は頭の中に入っている。

「へえ、俺もマニュアル取り寄せるかな？」

「そうした方がいいと思うぞ。自分で調整できれば行事の時に無調整で挑む必要ないし。……………そういえば白式ってドコの研究所が作ったんだ？」

白式は束さんが完成させたらしいが、元々は凍結されていたISを完成させたらしいので、ドコの研究所が元になったISを作ったのが気になったので聞いてみる。

「たしか倉持技研って所が作ったって聞いてるけど」

「倉持技研……………ねえ……………」

まさかその名前を聞く事になるとは思わなかった。

「アル、倉持技研の事知ってるのか？」

「離婚した俺の親父がその所員なんだよ。最近忙しいって言うんだけど、白式にかかわってたのか」

親父とはそこそこの頻度で連絡を取り合っているのだが、男性用ISって事なら忙しくなるのも無理はない。母の研究所も俺がISを動かしてからかなり忙しいから、倉持技研でも同じ様なものなんだろう。

「昔はあんまり会った事なかったけど、今はISの研究者なんだな」

「ああ、再婚もしてない。元々日本の代表候補生用のISの開発に関わってたらしいけど、一夏が白式動かしてからはそっちにかかりきりなんだと」

何でも所員一丸となって白式をいじっていたため、先に開発していた代表候補生さん用の第三世代ISが未完成のままらしい。

それを聞いた一夏は、驚いた顔でこう言った。

「……………なんていうか、俺って期待されてるんだな」

「そりゃそうだろ。女性しか動かせないって言われてたISを男の俺達が動かしたんだ。男でISの研究に関わってる人達にとっては、ヒーロー扱いされてもおかしくないと思うぞ」

実際俺がISを初めて起動させた時にも、研究所の男性職員の皆さんからはすごい勢いで励ましを受けた。

コンコン

「一夏あゝ、早く食堂行かないと時間なくなるわよ」

そんな事を話していると、扉をノックして鈴さんが声をかけてくる。

「あ、早く行かないとな」

「だな。この続きは後で話すか」

そう言いながら扉を開けると、鈴さんだけでなく篤さんとセシリアも部屋の前で待っていた。

「早くしないと、食堂が閉まっちゃいますわ」

「そうだ。早く行くぞ、一夏」

二人ともそう言いながら食堂に向かうので、俺達も一緒になって食堂へ移動して夕食を食べるのだった。

「そういえば箒さん、箒さんのISの適性ランクっていくつ?」

夕食を取り終え、寮の休憩室で先程の模擬戦をしたメンバーで話をしていたのだが、その時の箒さんの動きを思い出したので箒さんに適性の事を聞いてみると、箒さんは苦虫を噛み潰したような表情でこう答えた。

「……………Cだ」

かなりの間を空けてそう答える箒さんを見ながら、俺はこう答えるしかなかった。

「え?……………それ、本当?」

「ああ……………なんだその表情は。馬鹿にしているのか?」

啞然とする俺を睨みつけてくる箒さん。ついでに言う俺の適性値はBでまあまあ良い方ではある。もつとも、専用機持ちの代表候補生になるとAランクばかりになるので、専用機持ちとして見ると低いのだが。

「違うよ。本当に適性がCランクなら、やけに動きがいい気がしたから」

「そういえば俺と戦ってた時も算ってかなり動き回ってたよな。セシリアさん、それって本来ならありえないのか？」

武装を全て使いこなせていない俺や、かなりピーキーな機体の一夏が相手とはいえ、専用機持ち相手にシールドエネルギー残量を2ケタまで減らせたり、近接格闘用の機体相手に防御重視の打鉄で勝つ事が出来る適性Cランクの人物なんて常識的に考えると少しおかしい気がする。

一夏も俺のその発言で疑問に思ったのか、セシリアに参考意見を聞く。

「そうですね。……私見ですが、個人用最適化処置をかけていない量産機を使用していた事を考えても、Bランク後半からAランク前半は確実にあったと思うのですが」

「そうよね。本当に適性がCランクなら、基本的な部分から始めないと模擬戦出来るようになるまでも時間かかるものだしね。あれだけ動いててCランクってのは納得いかないかな？」

セシリアだけでなく鈴さんにもそう言われて、篤さんは戸惑った表情になるところ言った。

「だつ、だが、入学試験の時に図った適性試験の結果がCランクだったんだ。これはどう説明するんだ」

「単純に考えて、誰かが学園に侵入してデータを改竄したとか？」

一夏が一番単純な答えを口にする、即座に鈴さんから否定意見が入る。

「あのねえ、一夏。IS学園のセキリユティの頑丈さはかなりの物よ？セキリユティ突破して、学園内のデータベースに忍び込んで、生徒の適性試験の情報だけ改竄するなんてドコの暇人がやるのよ」

未来の国家防衛を担う事になるIS操縦者や整備士を育成するIS学園はセキリユティにはかなり力を入れているので、校舎に忍び込むにしても、ネットからのハッキングをするにしても、侵入するだけでもかなりの手間がかかる事になるのだろう。

「そうなのか？なら、試験をやった時の篝の体調が悪かったとか」

「入試の時は体調は悪くなかったぞ。………あー、結局アルは何を言いたいんだ！！」

それぞれの質問に律儀に答えながらも結論が見えずに苛立つ篝さんなので、俺が思ったことを正直に言う。

「篝さんは確実に強いし、試験結果が改竄されているとしたらっていう前提になるけど、それこそどこかの企業や日本政府から専用機を与えられてもおかしくないって事」

「むう………そんな事があるのだろうか……」

「当然素人の考えた事だから外れてる可能性は大いにあるけどね」

それでもセシリアを含めたイギリス国内の代表候補生の訓練映像を自分の訓練用の参考資料としてかなり取り寄せて見せてもらった事があるのだが、篝さんの今日の動きはまだ荒削りなところはあにしる、かなり上手かった気がする。

「はあ………お前は持ち上げたいのか落としたいのか、どっちなんだ、アル」

そう言って呆れた声を出す篝さんを見ながら話は別の話題に変わっていき、ある程度時間が経って部屋に戻ると、ゆっくりと休むのだった。

そうして翌日、朝のSHRで全アリーナの設定調整が入る事が改めて通達された。幸い各アリーナに隣接されている整備室は使用可能らしいので、放課後は整備室で機体の整備をする事に決める。

それからは特に問題が起こることなく授業を受け、一夏や篝さん、セシリアや鈴さんと一緒に昼食を食べて午後の授業を受けていると、あっという間に放課後になった。

「あら、アル。どこに行きますの?」

SHRも終わって放課後、整備室に行こうと思った俺をセシリアが呼び止める。

「ん?明日は対抗戦^{リーグマッチ}だから、整備室で機体の調整しようと思ってるけど」

「ああ、なるほど。一人で……大丈夫でしたわね」

訓練の間の自由時間にマニュアルを読みふけていた事を思い出したらしく、一人で納得するセシリア。

「何なら一緒に行くか？セシリアも専用機持ちなんだから、これから整備室にはよく世話になるだろうし」

「そうですね。ご一緒させていただきますわ」

そう言つて俺達は整備室に向かい、セシリアは上級生の先輩達に挨拶をすると共に整備科の中でもイギリス出身の人達に声を掛けて整備を頼み込んでいて、その様子を見ながら俺は自分の機体の整備をするのだった。

途中マニュアルだけでは分からないところもあったのだが、そういつた時はセシリアの整備チームの人達に教えてもらいながら機体の整備を続け、いつもの自主練終了時刻には機体の整備も終わるのだった。

そうしてクラス対抗戦^{リーグマッチ}当日、第二アリーナのピットで、俺は試合開始の合図を待っていた。

噂の男性IS操縦者がクラス代表という事で、アリーナの観客席は満員御礼どころか、立ち見や廊下での観戦者がいるほどの注目度になっている。

「相手は打鉄か…」

ハイパーセンサーを通じて対戦相手のISの情報が表示されるのを見ながら、セシリア達からの激励をもらつた。

「油断はせず、普段の訓練どおりに動けば大丈夫ですわ」
「そうだな、硬くなるな。普段どおりの動きをすれば問題ない」
「頑張つてこいよ。アル」

三者三様の励ましを聞きながら、通信で山田先生からも激励をもらう。

『放課後もしっかり訓練しているようですが、それは相手からすればいくらでも敵情視察が出来るという事でもあります。油断しないでください』
「了解です」

その言葉を聞き終わると同時に、場内アナウンスがかかる。

『それでは両者、規定の位置まで移動してください』
そのアナウンスと同時にセシリア達は俺から離れるので、俺は3人が十分離れるのを確認してからアリーナ・ステージ目掛けて飛んでいく。

「よろしくね、アルバート君」
「ああ。手加減なしでやるから、そのつもりで」

2組のクラス代表とお互い挨拶程度に言葉を交わすと、再びアナウンスが入る。

『それでは両者、試合を開始してください』

その言葉と同時に剣スカイ・ブレイドを展開して、クラスリーグマッチ対抗戦の第一回戦を始める。

普段行っている基礎訓練と初機動から今まで覚えた戦闘機動マニユールや駆け引きの方法を利用して確実に相手にダメージを与えていき、あと少しで勝てそうになった時にそれは起こった。

ズドオオオオンッ！！

スカイ・ブレイド
剣の刃が対戦相手に届きそうになった瞬間、何かアリーナの遮断シールドを突き破りながらアリーナ中央目掛けて凄まじい勢いで落下してきて、その衝撃がアリーナ全体を揺らせた。

「何だ！？」

突然の事態に驚き、何か落下したであろうアリーナ中央に視線をめぐらせる。

そこからは黒煙がもうもうと立ち上っていて、アリーナを揺らしたのは落下の際の衝撃波のようだった。

『試合中止！！ウィルソン達は直ちに退避しろ！！』

ステージ中央に熱源。所属不明のISと断定。ロックされています。

緊急事態の対応を全て任されている織斑先生の鶴の一声で対戦相手の女子生徒はすぐさま退避を始めたが、織斑先生の言葉と同時に俺

だけを狙ってビームが放射される。

「危なっ……！」

とつさにブーストしてその場を離れると、次の瞬間には俺がそれまでいた場所にセシリアのスターライトmk?の3倍は太いビームの砲撃が通過する。

射線の方向を見ると炎の中から攻撃されていて、落下してきたのがISと同じもので作られている遮断シールドを貫通可能なだけの攻撃能力を持った機体のようだ。

「なっ……んだ……あれ……」

落下の衝撃で起こった炎で全体のフォルムは揺らめいているが、それでもつま先まである異常なまでに長く大きなマニピュレーターと、頭部に剥き出しになっているセンサーレンズ、全身を装甲で覆った見たこともないISが俺の様子を窺うようにしていた。

「誰だ！？何の目的でIS学園（ユ）に来た！！答える……！」

そう言いながらも俺は所属不明機（アンノウン）から少しずつ距離をとってピット（オープンチャンネル）に戻るうとすると、山田先生から開放回線で通信が入る。

「アルバート君、今すぐアリーナから脱出してください……！すぐに先生達がISで制圧に行きます……！」

「先生、観客席にいたみんなの避難は完了しているんですか……？」

退避前に山田先生に観客席の避難が完了しているかを確認しておく。

『いえ、まだですが、早くそこから脱出をしてください!!』

観客席の遮断シールドは緊急事態が起こったと同時に閉じられたが、観客席にいる誰かがこの所属不明機の目標の場合、その誰かは危険に晒される事になる。

「……先生、俺がなんとかしてアイツをひきつけながら時間を稼ぎますから、その間に観客の避難を完了させてください。俺はその後に退避します」

『なっ!? アルバート君!? 生徒にそんな』

そう言っつてうるたえる山田先生からの通信を一方的に切ると、俺は所属不明機を見据えて瞬時加速のチャージをしながら、そのパイロットに向かってこう言っつておく。

「誰が狙いか知らないけど、襲撃は諦めてくれ。代わりとってはなんだけど、世界で二人しかいない男性IS操縦者との戦闘データをやるよ」

そう言いながら瞬時加速を発動。所属不明機に向かって突撃する。

「もつとも、相手はアンタだけだな!!」

その言葉と同時に所属不明機も突撃しながらその異形の拳を繰り出してこちらの攻撃を迎撃してくる。

観客の避難が完了するまでエネルギーを維持するように細心の注意を払いながら、俺は先の見えない戦闘を始めた。

「アルバート君！？聞いてますか！？アルバート君！！」

インカムに向かって叫ぶ真耶は通信がカットされている事に気づくことが出来ないほどに焦っていた。

「本人がやると言ってるのだから、やらせてみてもいいだろう」

「お、お、織斑先生！！何をのんきなことを言っているんですか！？」

「落ち着け。コーヒーでも飲め。糖分が足りないからイライラするんだ」

そう言っつて千冬はティースプーンに多めの砂糖を掬ってコーヒーに入れて混ぜると真耶に渡す。

「先生！！わたくしにISの使用許可を！！すぐに出撃できますわ！！」

「千冬姉！！俺にも使用許可をくれ！！アル一人でなんて無茶だ！！」

セシリアと一夏も空間投影ディスプレイに表示されるアルバートが一人で戦っている姿に耐えられず、担任であり緊急事態担当の千冬にISの使用許可を求める。

「織斑先生だ馬鹿者。それにそうしたいところだが、
見る」

いつもどおりの注意をすると、アルバートと所属不明機アンノウンが戦闘を行
っている姿を映すディスプレイの少し下にあるアーリーナ全体のステ
ータスを表示するディスプレイを注目させる。

「遮断シールドが…レベル4に設定…」

「しかも、扉が全てロックされて…あのISの仕業…」

「そのようだ…これでは、避難する事も、救援に向かうことも出
来ない」

淡々と事実を告げる千冬もその表情は険しく、今の状況をよく思っ
ていないのは明白だった。

「でしたら…！緊急事態として政府に救援を…！」

「やっている。現在も3年の精鋭がシステムクラックを実行中だ。
遮断シールドが突破できれば、すぐにでも部隊を突入させられる」

千冬がそこまで言うと、授業内容を思い出した一夏が名案を思いつ
いたとばかりにこう言う。

「ちょっと待ってくれ…！遮断シールドってISと同じ物で作られ
てるんだろ！？それなら白式の零落白夜を使って遮断シールドを突
破すれば」

「馬鹿者。零落白夜の攻撃力で遮断シールドを破ったとしても、そ
の先にいる避難者達に当たったらタダでは済まん。観客席との連絡
も取れない状態では二次災害の恐れがある」

だが、その案すら零落白夜の高すぎる攻撃力が仇となっていた。

「結局、待っていることしか出来ないのですね……」

「くそっ！！こんな時に待ってることしか出来ないのかよ！！」

「織斑は別として、オルコット。お前はどちらにしても突入隊に入れないから安心しろ」

悔しがる二人を尻目に、千冬はセシリアに対してさらに精神的な追い討ちをかける。

「なっ、何故ですか！！」

「お前のフル・ティアースの装備は一对複数向きだ。お前が複数の側に入ると、むしろ邪魔になる」

千冬のその言葉に納得できないセシリアは、当然ながら反論する。

「そんなことはありませんわ！！このわたくしが邪魔などと」

「では連携訓練はしたか？その時のお前の役割は？味方の構成は？敵はどのレベルを想定してある？連続稼働時間は？」

次々に問われる質問に対してセシリアは考え込むと、はつきりとう言った。

「……わかりました、織斑先生。それなら、アルに遮断シールドと扉のロックの事を伝えてはいけませんか？」

セシリアの口から出たその言葉に、千冬と真耶は顔をしかめる。

「何故だ、オルコット。理由を言ってみろ」

「そうですね、セシリアさん」

「いくらISのパワーサポートがあるとはいえ、操縦者の集中力には限度があります。いくらアルが専用機持ちとはいえ、一夏さんを除く専用機持ちからすれば稼働時間は短い上に、アルの性格からすれば本当に時間を稼ぐ事だけを目的にしている可能性が高いです。それならいっそのアルの集中力をもつ内に所属不明機を機能停止するように指示した方が効率的だと思うのですが」

セシリアの説明を聞き、真つ先に返事をしたのは真耶よりもアルバートとの付き合いの長い千冬だった。

「……そうだな。アイツは昔から自分が言った事は何が何でもやり通そうとする性格をしていたな。それに、お前の言う事ももっともだ」

「では」
「山田先生、ウィルソンに通信を入れてください」

千冬の発言は、セシリアの案の採用を意味していた。

「わかりました、織斑先生。アルバート君に通信をつなぎます」

真耶も対策を任されている千冬が指示した事でアルバートに通信を繋げ、所属不明機の機能停止を指示するのだった。

その様子を見ながら、一夏は先程から筈が殆ど口を開いていない事に気付く。

「筈、アルの事が心配なのか？」

「……一夏か……そうだな。それもある」

「それも？他にも何かあるのか？」

幕のその言動が気になった一夏はさらに詳しい事を聞こうとする。

「いや……………なんでもない、気にしなくていい」

その表情はかなりの苦悶に歪んでいるが、本人が触れてほしくない事だと察した一夏はこう言っしかなかった。

「……………そっか。まあ相談できるようならしてくれ。話を聞くくらいなら俺にも出来るから」

「……………ああ、また今度そうさせてもらおう」

その表情を見ながら、一夏はこれからの事に備えるのだった。

あれから体感時間で15分近く戦闘を続けながら、目の前の所属不明機ファンが本当にISなのかというレベルで疑問が浮かんできた。

「今までずっと黙ったままみただけど、苦しくないのか？」

戦闘中何度も声をかけてみたものの、まったくの無反応。おまけに

その間は俺の様子を窺っていて、声をかけるのを諦めると再び襲い掛かってくるのでその相手をするのを繰り返している。

戦っている内に気づいた事だが、所属不明機は攻撃の緩急のつけ方が殆ど一緒な上に行動の端々が妙に機械くさく、機械が無理矢理機体を動かしているような不自然さがあつた。

（まさか本当に無人機？……いや、ISの技術をフィードバックした新型か？）

ISは人が乗らないと起動できないようになっていたため、ISの技術を解析、それを使って新基軸の無人兵器を作り上げたと考えた方がまだ納得できる。

『アルバート君、聞こえますか？』

考え事をしてしていると、視界の片隅に通信ウィンドウが表れ、山田先生からの通信がくる。

「山田先生？避難が完了したんですか」

所属不明機の行動に注意を払いながら、開放回線で話しかけてきた山田先生に確認をする。

『いいえアルバート君、よく聞いてください。現在、所属不明機の影響でアリーナの遮断シールドがレベル4に設定され、扉が全て口ツクされてしまっています』

「……つまり、目の前の所属不明機を機能停止させて、原因を排除した方が早いって事ですか？」

『そうです。一人で何とかできそうですか？』

そう言ってくる山田先生の通信ウィンドウを見ながら、視界の片隅に残存エネルギーを表示させる。

シールドエネルギーはちまちまと攻撃をくらっているんで残量320、武装のエネルギーはブーストを結構使っていたため、残量5割5分といったところだ。

このエネルギー残量で目の前の所属不明機アンソウンを倒せるか頭の中で考えると、少し厳しい感じがしたので山田先生にこう言った。

「……………ちょっと厳しい感じがするんで、応援を頼みたいんですが」「わかりました。それでは応援部隊を編成して、すぐに」「いえ、応援に来るのは一夏とセシリアだけでいいです。下手に大勢で来てもらい切札ジングブレードで巻き込みかねませんから。あと、二人に待機状態での秘匿通信ブライベートチャンネルの使用許可をお願いします」

セシリアは何度か使っているところを見ているし、一夏も俺の剣のクセを知っているから何とかなると思う。

『わかりました。すぐに二人には応援に行くよう伝えます。同時に秘匿通信ブライベートチャンネルの使用も許可しておきます』

「よろしくお願いします、先生」

先生に一言お礼を言った後、すぐにセシリアブライベートチャンネルに秘匿通信を繋げる。

『セシリア、聞こえる？』

『聞こえますわ、アル。一夏さんも隣におります』

一夏には秘匿通信ブライベートチャンネルの使い方を説明していないので、代わりにセシリアに答えてもらおう。

『悪いけど一夏にも伝えてくれ。所属不明機は十中八九無人兵器だ。あと、突入までどれ位時間かかる？』

『無人兵器…ですか？突入自体は一夏さんのISの能力を使つて遮断シールドを突破するつもりですので、すぐにでも出来ますが』

たしかに零落白夜なら遮断シールドだろうと切り裂く事が出来るだろうが、一夏の負担が大きすぎる気がする。

『いや、遮断シールドは俺が破る』

『……わかりました。ですが、無茶はしないでくださいね』

俺が何をするのかを察したセシリアは一言注意だけしてくる。

『ああ、気をつけるさ。すぐに始める』

『わかりましたわ。お気をつけて』

そう言つてセシリアからの通信を一端切る。

「待たせたな。さて、続きをやるうか」

こちらが通信している間中襲ってくる気配のなかった所属不明機は、俺が声をかけると再び戦闘体勢に入り、襲い掛かってくる。
アンソウン

その突撃をかわしながら、俺は切札であるライジングブレードを起動させるが、残存エネルギーが約半分しかないため、起動可能時間はクラス代表決定戦の時の半分ほどしかない。

「おらっ、くらえ!!」

飛行をしながら所属不明機に近づき、長大なビームサーベルを左に薙ぐが高度を上昇されてかわされてしまいが、続けて振るった右切り上げは所属不明機に当たり、その異形の右腕を根元から切り飛ばす。

所属不明機はその事に驚きながら残った左腕のビームキャノンを最大出力で俺に向けながら今まさにその砲口が火を噴こうとしていた。

「……狙いは？」

「完璧ですわ！！」

だが、その攻撃も所属不明機の背後から連続で浴びせられたレーザー射撃をモロにくらって照準がずれ、あさっての方向に飛んでいつてしまう。

「一夏さん！！」

「おっ！！」

さらには一夏が零落白夜を発動させて突撃して、レーザー射撃でなおさら脆くなった背面にバリアー無効化攻撃を叩き込み、所属不明機はその機能を停止させるのだった。

「アル、ギリギリすぎますわ。それに、遮断シールドを破れなかったらどうするつもりでしたの？」

「その時は一夏頼みだよ。白式のエネルギー消費を少しでも抑えたかったからな」

よく見ると俺の視線の先の遮断シールドが一部分だけ溶解していて、そこからセシリアと一夏はアリーナに乱入してきたのだ。

「それにしても、お前のISってすごいんだな。遮断シールド突破

スカイ・ブレード

するなんて、白式以外無理だと思った」

「暮桜の単一仕様能力を参考にした攻撃能力だからな。上手く当てると遮断シールドも突破しちゃうから、使いどころの見極めが辛いんだよ」

そう、ライジングブレードはバリヤー零落白夜無効化攻撃を参考に行っているため、その攻撃能力はかなりの物だが、単一仕様能力ではないので、当然ながら絶対防御を発動させた上で操縦者を殺さないように威力が調整されている。

だが、それでも一撃で相手を機能停止ダウンさせる事が出来る攻撃力を持っている。そんな威力の攻撃を2回遮断シールドにぶち当てれば、遮断シールドを両断できる可能性は高い。

失敗した場合でも零落白夜そのものがあるので、所属不明機の撃墜は可能なのだが、少しでも一夏の負担を減らすために賭けに出た。

俺は二人に近づきながらうつぶせに倒れた所属不明機を見るが再起動する様子もなく、一夏の最後の攻撃痕を見ると内部機構ごと切り裂いていて、ほんの少しの隙間から二つに割れた金色のキューブラISのコアユニットらしい物が見えていた。

(こいつ、無人のISかよ。……誰が作った?)

「アル、どうした?」

「いや、なんでも」

『織斑君、オルコットさん、アルバート君、すぐにそこから退避して!』

一夏が不思議そうな顔をして俺に質問してくるのでそれに答えようとするが、かなり切羽詰った山田先生の声が聞こえると同時に、頭

上に影が差し込む。

「うおっ！！」

「きゃあっ！！！」

「なんだあ！？」

慌てて俺達がその場を離れると何か落下してきて、機能停止した所属不明機を踏み潰す。

落下の衝撃で再びアリーナに炎と黒煙が立ちこめ、新たに落下してきた物の姿が明らかになる。

「なっ……んだと！？」

「うそ……」

「……二体目って…マジかよ……」

そこには今しがた倒したはずの所属不明機アンソウンと同型の機体がたたずんでいて、ゆっくりとした動作で俺達に向き直ろうとしていた。

08 クラスリーグマッチ開始、現れるアンノウン その1（後書き）

かなり長くなりそうなのでここで次回に引きます。

男性IS操縦者が2人いるんだから、ゴーレムも2体出てきてもおかしくないと思うのは自分だけでしょうか？

それっぽい理由は考えてありますが、それをばらすのは次回以降とさせていただきます。

09 クラスリーグマッチ開始、現れるアンノウン その2（前書き）

今回で原作1巻の内容は終わりです。そしていつもと比べてほんの少し短いですが、ごめんなさい。

09 クラスリーグマッチ開始、現れるアンノウン その2

突如として表れた二体目の所属不明機。^{アンノウン}

一体目のそれと同じ姿、同じ攻撃方法だが、その標的は俺ではなかった。

「くそつ、なんでコイツ俺ばつか狙ってくるんだ!？」

まるで一夏の実力を知りたいとばかりに一夏に集中攻撃を仕掛けており、一夏はそれを必死に回避しながら隙を見て攻撃しようとしている。所属不明機は俺とセシリアに対しては自分から攻撃をしてくる事無く、

俺達の攻撃に対して最低限の反撃と防御・回避をするだけだった。

「一夏聞こえるか!?!その所属不明機は無人化されたISの可能性が高い!?!零落白夜を全力で使っても問題ないはずだ!?!」

そう言いながら銃を^{スターダスト}実弾モードで援護射撃をするが、マガジンは1体目の時にかなり使ってしまったため、予備用を含めてあと2つしかないのでも1回の射撃時間は短くするしかない。

さらに、武装用エネルギーはさっきのライジングブレードで空になつてしまったのでブーストも満足に使えない。剣の刀身への^{スカイ・ブレード}ダメージも考えると、シールドエネルギーをコストにした2発目のライジングブレードは撃てても5秒が限度だろう。

「それ本当なのか?アル」

声色に疑問を浮かべながら、俺とセシリアに合流しながら確認してく

る一夏。

「アル、お待ちなさい！！ISは人が乗らないと起動すら出来ませんわー！」

それに反論するように俺の言葉に異を唱えたのは、この中で最も長くISに触れているセシリアだった。

「どこの国かは知らないけど、ISの無人化に成功させたんだろ。一夏がぶった切った1体目の所属不明機アンノウンの背中側から、胸部中央周辺に少しだけISのコアユニットが見えた。2体目はどう考えても1体目と同型だ。

なら、内部機構も同じって考えた方が自然だろ」

だから、自分が見たことと所属不明機アンノウンの外見から考えた事をセシリアに説明する。

「そつ、それは……そうですが……」

「後でその記録ログも見せるさ」

それでもセシリアは納得のいかない様子なので、後で記録ログを見せる事にする。

『ウィルソン、見間違いではないのか？』

『そうです。どこの国でもISの無人化を研究しているようですが、成功例は聞いたことがありません』

俺の発言を通信越しに聞いていたであろう織斑先生と山田先生も会話に加わり、一夏に襲い掛かる二体目の所属不明機アンノウンが本当に無人機なのかどうかという話になる。

「先生たちの懸念ももつともですが、実際にコアが見えましたから十中八九無人機で間違いないと思います。二体目コイツを倒したら、一体目のコア周辺の記録映像ログを提出しますから、後で検証をお願いします」

「それならアルバート君だけでも先に戻ってくれば」

山田先生がそう言うってくるが、俺はそれを否定するしかない。

「無理です。どういう理屈か、さっきライジングブレードで開けたはずの遮断シールドの穴がもう塞がってますから」

一夏たちが入ってきた場所を見ても遮断シールドには溶解の痕一つ残らず塞がっていて、二体目の所属不明機アンノウンを倒したほうが手っ取り早そうだった。

「わかりました。くれぐれも無理はしないようにしてくださいね」

山田先生もそれを確認したらしく、一言だけ注意して通信が切れる。

「一夏、シールドエネルギーはどれ位残ってる？」

「あと220つてところだ。バリアー無効化攻撃に全部つき込んで、あと4回が限度だろうな」

シールドエネルギーの消費を抑えるため、一夏は雪片式型を物理刀モードにしながらそう言った。

「戦闘中にダメージくらう可能性も考慮すると、2回出来るかどうかってところか……」

今ここにいる味方で一番攻撃力があるのはどう考えてもバリアー無効化攻撃を持つ一夏だが、リスクも相応に高いため確実に当てる戦術が必要になる。

その上、戦闘中にダメージをくらってバリアー無効化攻撃の回数が減る可能性もあるので、4回という数字は理想数値でしかない。

目の前の所属不明機アンノウンを倒すにはどうすれば勝てるかを考えるため、一夏に一つ質問をする。

「一夏、ブーストしてトップスピードになるまで何秒かかる？」

「え？………だいたい1〜2秒ってところだと思うが…それがどうかしたのか？」

さすがは高出力ブースターを持つ白式、トップスピードになるまでの時間も十分短い。

「今から0.5秒以内でトップスピードにする方法を教えるから、1回それでアイツに零落白夜なしで突撃して攻撃してくれ」

俺がそういうと、一夏は困った表情を浮べてこう言ってきた。

「こんな時に教えられても、覚える時間がないし、零落白夜なしでか？それだと大してダメージ与えられないぞ？」

「大丈夫だよ、原理自体はかなり単純だから、すぐ覚えられる。それに、少しでもエネルギーの消費を抑えるためだ」

そう言って、一夏に瞬時加速イグニッションブーストの原理を説明すると、意外な答えが返ってきた。

「それなら昨日の放課後、千冬姉に教わったぞ」
「へ？……昨日ってアリーナ使えなかったはずだぞ。ドコで訓練してたんだよ」

放課後に自主練出来る場所は各アリーナだけのはずで、それ以外の場所での自主練は基本的に禁止されていたはずだ。

「アルが機体の調整に行ってから、白式の事聞くために千冬姉の所に行ったらグラウンドに連れ出されて、日が暮れるまで千冬姉とマントーマンで訓練してたんだよ」

放課後のグラウンドはどこかの部活が使っていたはずだが、それを織斑先生が何とかしたのだろう。

「……つまり、イゲニッションブースト 瞬時加速は出来るんだな？」

「おう。昨日はグラウンドで訓練してたから、部活中の先輩達からもアドバイス貰って、何とか使えるようにはなった。……ただ、千冬姉からは使いどころは見極めろって言われたけど」

一夏の説明をそこまで聞いて、俺は気になったことが一つあるのでそのことを聞いてみる。

「……つまり昨日一夏が聞いたのは普通のイゲニッションブースト 瞬時加速の使い方だけで、応用までは聞いてないんだな？」

俺がそう聞くと、一夏は不思議そうにこう聞いてきた。

「イゲニッションブースト 瞬時加速に應用ってあるのか？」

「ああ、高等応用技で二段階^{ダブル・イクニッションブースト}瞬時加速つてのがある。瞬間的に^{イクニッションブースト}瞬時加速を連続使用する事で、通常の瞬時加速以上の速度で移動できる技がある」

「へえ、そんな方法もあるんだな」

応用の説明を聞き、感心する一夏。その姿を見ながら、俺は一夏に^{プライベートチャンネル}秘匿通信を繋ぐ。

『今から話す事は口には出さず、どんな時でも頷くだけでいい。もう一つが諸刃の剣の裏技的な応用だ。^{イクニッションブースト}瞬時加速は基本的にはスラスタのエネルギーを使うが、高エネルギー攻撃をスラスタ内に取り込んで^{イクニッションブースト}瞬時加速を使えば、

普通じゃ出せないスピードだろうと出す事が出来る。もつとも、高すぎるエネルギーを取り込むと下手したらスラスタがぶっ壊れるから、注意する必要がある』

俺がそう言つと、突然の^{プライベートチャンネル}秘匿通信に驚きながらも頷いてくれた。

『よし、それじゃあ作戦を説明する』

それを確認しながらセシリアにも^{プライベートチャンネル}秘匿通信を繋げて、二人に考えた作戦を説明する。

『始めに無人機^{アイツ}の足を止めさせる必要がある。セシリア、レーザーライフルとビットで何秒止められそう？』

『……60秒は足止めしてみせますわ』

セシリアも頭の中で考えて、そう答えてくれる。

『それだけ稼げれば大丈夫だと思う。セシリアが無人機の足を止め

てる間に、一夏は今出来る最大出力の瞬時加速のチャージを開始、準備が出来たら開放回線でもいいから教えてくれ」

一夏にそう言っていると、一夏もそれに頷く。

『連絡をしたら、一夏は俺の前に立って零落白夜を起動させたあとに直視映像を使って、瞬時加速の使用タイミングを俺にも教えてくれ』

そこまで言つと一夏ももう一度頷くので、最後の説明に入る。

『最後に一夏が瞬時加速を発動させると同時に、俺もライジングブレードを一夏に向けて使うから、それに合わせてもう一度一夏は瞬時加速を使い、無人機に雪片式型を叩き込んでくれ。説明は以上だ、何か質問は？』

『問題ありませんわ』

「大丈夫だ」

二人の返事を聞き、俺は一つ頷いて作戦開始の合図をする。

「よし、作戦開始！！」

「いきますわよ！！」

そう言いながらセシリアは無人機を囲むようにビットを展開、レーザーライフルの射撃とあわせて無人機を地上に貼りつける。

当然ながら無人機から腕部高出力ビームキャノンの反撃があるが、それを回避していくセシリア。

その姿を見ながら、一夏は零落白夜を起動させてから瞬間加速のエネルギーチャージを開始し、俺は少しでも時間を稼ぐためにマガジン内に残っていた弾丸を全て無人機に向けて発射したあと、一夏の後ろに立っていつでもライジングブレードを発動できるようにしておく。

一夏も昨日教えてもらったばかりの技術のためエネルギーチャージに時間がかかっているようだが、それでも少しづつは出来ているようだった。

「よし、チャージ完了!!」

そうして30秒ほど待つと一夏が開放回線オープンチャンネルでチャージの完了を告げてくるので、俺は直視映像のチャンネルを合わせるために一言こう聞く。

「チャンネルは!?!」

「208!!」

簡潔に告げる一夏に、俺も急いでチャンネルを合わせて一夏と視界を共有する。

「アル、いくぞ!!」

「おう!!チャージが終わったら言えよ!!」

そう言いながら一夏は瞬間加速を発動、視界を共有しているので、世界が早回しになりかけた瞬間にライジングブレードを発動させ、

白式のスラスターに向けて高エネルギービームサーベルを突き立てる。

初段の瞬間加速イクニッションブーストが発動、それと同時にライジングブレードが一夏のスラスターに叩き込まれ、一夏は必死になってもう一度瞬間加速イクニッションブーストのシークエンスに入る。

（もってこれよ、スカイ・ブレード！！）

2度目のライジングブレードを発動させた事により、残っていたシングルエネルギーが瞬く間に消費されていき、20程度まで減少する。

「アル、十分だ！！」

それと同時に一夏から再び声がかかり、その言葉に合わせるようにシステムが使用限界と判断してビームサーベルが途切れる。

「おおおおおおおっ！！」

叫びながら一夏が二段目の瞬間加速イクニッションブーストを発動、その超スピードで0.1秒とかからずに近づき、雪片式型を無人機の胸部中央に突き刺し、思いきり振りぬいた。

その攻撃を受けた事で機能を停止した無人機はゆっくりと仰向けに倒れていく。

その姿を視界共有で確認した後に一夏との視界共有を解除、一夏に通信を繋げる。

「一夏、ありがとな。高エネルギー攻撃背中に当てたから、念のため
に医務室行って検査してもらってくれ」

「ああ、そうだな。さすがに背中がちょっと痛い」

そう言って苦笑いを浮べる一夏を見ながらセシリアにも通信を繋ぎ、
お礼を言っておく。

「セシリアもありがとな。二人がいなかったらと思うとゾツとする
よ」

「わかっているならよろしいですわ」

「ああ。それじゃあ織斑先生に報告だな」

そう言って俺は織斑先生に通信を繋ぐ。

「織斑先生、所属不明機の撃墜、完了しました」

『ああ、よくやった。無人機の残骸はこちらで回収する。それと、
ウィルソンはISの記録^{ログ}の提出、織斑とオルコットにも今後の説明
をするから、至急ピットに戻って来い』

「……了解」「」

織斑先生の指示に頷くと俺達はピットへと戻り、ISを待機状態に
戻す。そうする事でパワーアシストが切れ、戦闘での疲れが全身を
駆け巡る。同時に一夏とセシリアは学園の制服姿に戻り、俺もIS
スーツ姿になる。

「よく戻ってきた。早速で悪いがお前達は医務室で検査した後事情
聴取を受け、その後これを書いてもらう」

織斑先生がそう言うと、山田先生が俺達ひとりひとりにある紙を手

渡してくるので文面を見てみると、IS学園入学前に習って知識としては知っていたが、実際に見る事はないだろうと思っていた物だった。

「今回の騒動に関する緘口令の誓約書：ですか」

代表候補生といえど実際に目にするのは初めてらしいセシリアも、驚いた表情でその紙を見つめる。

「そうだ。今回の件には協議の結果、緘口令が敷かれる事となった。同様の理由でウィルソン、お前のISも今日の戦闘記録にはロックをかけさせてもらおう」

学園上層部と各国のお偉いさんで話し合った結果そうなったのだろう。俺達はただ頷くしかなかった。

「あと、ウィルソンは明日、外出許可の申請をしていたな」

「ええ、そうですね」

IS学園は全寮制のため、街に買い物などに行く場合は事前に申請が必要になる。

「今回の件はお前と織斑が目的ではないかという意見も出たため、明日の外出許可は出せそうにない。諦める」

「……………わかりました。それでは医務室で検査を受けてきます」

そうやって俺達は誓約書を山田先生に返し、ついでに空色の腕時計スカイ・ブレイドも渡して医務室まで移動する。

「……………外出許可が出ないんじゃ、明日の買い物は延期するしかない

な。それに、記録もロツクされるみたいだから、無人機かどうかはおしえられそうもない、すまないな」

「まあ、仕方ありませんわ。外出先で襲われて、周りの皆さんに迷惑をかけるわけにもいきませんもの。……また予定があつたら声をかけてくださいな。それに、織斑先生達が無人機と判断したならそうなのでしよう」

お互いにそう言うが、セシリアの表情は戦闘での疲れと落胆の表情が混じっていた。

その後は医務室で検査を受け、3人とも問題なしと診断された後に事情聴取を受け、誓約書を書き終える頃には夕方6時近くになっていたため夕食をとり、普段どおりの生活に戻っていった。

コンコン

夕食をとり終わり、既に夜の10時近く。今日一日で色々あったので寝ようと思った矢先、部屋の扉がノックされる。

「アル、一夏、すこしいいか？」

「篝さん？ちよつと待って」

ベッドから起きて扉を開けると、部屋着姿の篝さんが立っていた。

「どうかした？」

「疲れているところすまない。一夏はいるか？」

「ああ。ちよつと待ってて」

一度部屋の奥に行つて眠ろつとしていた一夏を起こす。

「一夏、篝さんが何か用事あるみたいだぞ？」

「ん？……ああ、今行く」

そう言つて一夏はベッドから起き上がり、部屋の入り口へと向かつていく。

「つ、付き合つてもらおう！！」

用事は一夏のみのようなので眠ろつとした時、大声で篝さんが一夏に向かつて言つたその言葉は俺にも聞こえてきた。

(付き合つてもらおう……どっちの意味でだろう?)

男女交際的な意味なのか、それとも買物物の付き添いなのかは知らないが、大声でそれを言うのは変な誤解を生みかねないと思ひながら、俺は睡魔に抗うのをやめ、眠り始めた。

どことも知れない場所。部屋の至る所には機械の備品がちりばめら

れ、ケーブルが樹海のように広がっている。

その金属てつの森の中を機械仕掛けのリスが走り回り、不要な部品を食べ、再構成している。

「いやー、あーくんもいつくんもすごいなあ」

そんな金属に覆われた部屋の中で、一人の女性が空間投影型のキーボードとディスプレイを複数展開し、ある映像を鑑賞していた。

ディスプレイにはスカイ・ブレードを纏ったアルバートが一人で所属不明無人機と戦っている姿と、一夏、アルバート、セシリアの3人がそれぞれのISを纏って所属不明無人機と戦っている姿が映し出されていた。

その隣のディスプレイには、白式とスカイ・ブレードの稼働効率とパーツの損耗率が表示されていて、ISの専門家の中でも頭一つどころか他の専門家達全てを余裕で周回遅れにするほどの知識量を誇る彼女から見れば、スカイ・ブレードは問題のありすぎる機体だった。

「いつくんの白式は問題ないけど、あーくんの機体は機構に問題と無駄がありすぎるなあ〜」

そんな事を一人つぶやく女性の名前は篠ノ之束。この世界にISを作り出し、世界のあり方を変えた張本人だった。

その姿は奇天烈の一言で、童話のヘンゼルとグレーテルをモチーフにしているのはかるうじてわかるが、人前に出ること自体がはばかれる格好だった。

なにせ右半身がヘンゼルの衣装、左半身がグレーテルの衣装になっ

ているのに加えて頭の上に鳥籠をのせていて、その中で青い塗装をされたロボット鳥が動いている状態で、まともな人間なら着ようともしわない衣装だった。

「問題ありすぎの機体だけど、その攻撃力だけはお情けでギリギリ合格かな？やり方がスマートじゃないから本当は不合格にしたいけど」

そんな姿でもお構いなしに、束は独り言をつぶやきながら戦闘映像に見入る。

「それにしても、やっぱり無人機だとこんなものか。まあ、あーくんといつくんもいい経験になっただろうし、束さんも実験と箒ちゃん専用機のための展開装甲のデータも取れたから、問題ないない」
そう、今回の騒動は彼女の仕業だった。いずれ連絡をしてくるであろう妹のため、最高性能を持ち、最新技術である展開装甲を全身に施した機体を作るためには、どうしても展開装甲の実験機的な側面も持つ白式の戦闘データが必要だった。

だが、一夏はクラス代表ではないので、無人機の実験とアルバートリーグマツチを強くするためにクラス對抗戦に無人機を乱入させたのだが、偶然にもアルバートが一夏に応援を頼み、一夏がアリーナへ入った事を1機目の無人機が撃墜されてから知った束は急遽2体目をアリーナに投入し、

その結果白式の戦闘データもとる事ができた。

「あとは問題ありまくりのあーくんの機体だよね。ん〜、どうやって改造してあげよっかな〜」

そう言いながら束はもう一つの空間ディスプレイを投影すると、アルバートがISを初めて起動させた数日前にイギリスの研究所にハッキングを仕掛け、その最中におまけとして手に入れたスカイ・ブレードの詳細なスペックデータを呼び出すと、データを元にCGモデルを作り出す。

その表情は非常にうれしそうで、今にも踊りだしそうなほどに軽快な動作でキーボードをタイプして画面の中のISは形を変えていく。鼻歌を歌いながら、束はスカイ・ブレードの改造プランを練っていくのだった。

09 クラスリーグマッチ開始、現れるアンノウン その2（後書き）

そんなわけでこれにて原作1巻の内容は終了、次回からは2巻の内容に入ります。

東さんが出てきましたが、原作と衣装が違うのは2巻の本文で一人ヘンゼルとグレーテルと書いてあったので、こんな変な格好にしてしまいました。

そして、ゴーレム？の理由などは完全に独自解釈です。

あと、スカイ・ブレードを今後どうするかは考えてあるので、こうしてほしいという要望があっても繁栄させることができるかは厳しい事を先に言うておきます。

10 ファーストデートとプレゼント（前書き）

今回のお話の執筆にてござり、1週更新をサボってしまいました、ごめんなさい。

そしてさらに文章量としては全開と同じ程度です、重ね重ねすいません。

10 ファーストデートとプレゼント

クラス対抗戦リーグマッチから時間は流れて、今は6月の第一土曜日。ここ1ヶ月は特にこれといった問題も起こることなく、月曜からは本格的な実習訓練が開始されることになっている。

セシリアとの買い物物の約束も対抗戦リーグマッチの騒動に絡んで、『世界に二人しかない男性IS操縦者の保護』という名目で外出許可が下りなかったので、結局出掛ける事が出来なかった。

それでもあれから1ヶ月経った事もあり、ようやく俺と一夏にも普通に外出許可が出るようになった。

「セシリア、日曜って予定ある？」

土曜の午後、お互いにアリーナで自主訓練中の小休止をしている最中、セシリアに話しかける。

「いえ、特に予定はありませんが、どうかしましたの？」

「今朝山田先生から連絡があつて、俺と一夏にもようやく外出許可が出るみたいだから、4月に行けなかつた買い物の埋め合わせになるかはわからないんだけど、一緒に出かけないか？」

俺がそう言ってセシリアを見てみると、一瞬驚いた表情をして、明後日の方向を向きながらこう言った。

「そつ、そうですね。ちょうど足りないと思っていたものもありましたし、一緒に選んでいただきましょう」

「了解。待ち合わせするなら時間はそつちの都合に合わせるけど、

何時にする?」

この間はこちらの都合でふいにしてしまったので、セシリアの都合を優先するべきだ。

「それでは……10時に駅前で待ち合わせ、という形にしましょう」

IS学園は島ひとつ丸々学園の敷地になっているので、学園の校舎以外だと各学年の生徒用の寮と、独身者と既婚者用の職員寮、各国政府関係者が宿泊するためのホテルがあるくらいだ。

そのため、学園に通っている生徒の間で駅前というのは、IS学園行きのリニアトレインに乗って着いた本土の駅という意味だったりする。

「わかった。……それじゃあ訓練再会しようか」

少し考えるようにした後、セシリアそう言うてくるので俺はそれにした承の言葉を返して、自主訓練を再開する。

後日聞いた話だが、この日の自主訓練終了後の更衣室で、非常に嬉しそうにしているセシリアを見た女子生徒が多数いたらしい。

「ん?アル、何してるんだ?」

既に時刻は夜7時ちょうど。一夏よりも早めに食堂に行ったので既

に夕食も食べ終わり、明日の外出で訪れるためにネットで地図を眺めている店探しをしていると、一夏が食堂から戻ってきて話しかけてくる。

「調べもの。明日セシリアと出かけるんだけど、どこかにいい店ないかと思ってな」

地図でそれっぽい店を探し、ホームページがあるなら検索する作業を継続しながらそう答えると、一夏が意外な事を言ってきた。

「それなら駅前のショッピングモール行けば大概の物は揃うぞ」

「……そうなのか？昔の感覚だと、そこまでいい店なかったと思っただけだ」

たしかに店の種類は多かったが、店ごとの当たり外れの差が凄まじかった思い出しかない。

「女尊男卑が本格化してからショッピングモールもかなり変わったから、昔みたいに酷い店はないぞ。それに、店の種類も増えたしな」
「……ショッピングモールが変わってから今までの間に、男女二人で出かけて店側の対応が下手で気まづくなった話を聞いたことは？」

せつかく出かけるのに気分が悪くなつては堪^{たま}ったものではないので、今までにそういった話があるかどうかを聞いてみる。

「うーん……俺の知る限り、特にそういう話は聞いた事ないぞ」

「なるほど、それなら大丈夫そうだな。あとは男女で出かける時にお勧めの店を知っているようなら教えてくれ」

少し考え込みながら、そうやって答えてくる一夏。幼少の頃からこ

ここに住んでいるし、どこの店が女性受けするかもある程度知っているだろうから聞いておく。

「そう言うけど、俺もそこまで知ってるわけじゃないぞ？鈴にでも聞いたほうが早いんじゃないか？」

「なるほど、一理あるな。後で鈴さんにも聞いてこよう」

俺はそう言いながら駅前ショッピングモールのホームページにアクセス、店内見取り図を2枚プリントアウトする。

「だが、一夏も知ってる限りの情報を教えてくれ」

「ああ。ただ、俺も中学の頃に話を聞いただけなんだから、そこまでの期待はしないでくれよ？」

「かまわない。地元って言うっても、引越してかなり時間経ってるからその復習も兼ねてだよ」

そう言うで一夏が覚えている限りの店の情報をプリントアウトした店内見取り図の片方に書き込んでいく。

「俺が覚えてるのはこれくらいだな」

「これは殆ど別の場所だな、教えてくれて助かった。今から鈴さんの部屋行って、話聞いてくる」

昔と比べてショッピングモールが大きく変化している事に驚きながら一夏に礼を言うと、もう片方のプリントアウトした見取り図を持って鈴さんの部屋へ行く。

コンコン

「はい」

鈴さんの部屋の扉をノックすると、返事と共に扉が開いて鈴さんのルームメイトのティナさんが出迎えてくれる。

「あれ？アルバート君、何か用？」

「こんな時間に訪ねるのも失礼かと思っただけで、ちょっと鈴さんに聞きたいことがあってきたんだ。あがらせてもらっていいかな？」

「別にいいよ。あがって」

そう言っただけで迎えてくれるティナさん。

「あ、そうだ。ティナさん、これあげる」

ココに来る途中、購買部付近にある自販機で買っておいだ缶ジュースをひとつティナさんに渡す。

「あ、ありがと。鈴、アルバート君が聞きたいことがあるんだって」「アルバート？何の用よ」

部屋に入ると鈴さんがポテトチップスを食べていて、突然現れた俺の姿を見て一言用件を聞いてくる。

「鈴さんって、中学2年まではこっちで過ごしてたんだよね？」

「そうだけど、それがどうしたのよ？」

「明日セシリアと出かけるんだけど、一夏から駅前のショッピングモール行けば大概の物を売ってるって教えてもらったんだよ。ただ、一夏はお勧めの店とかはあんまり覚えてなかったから、鈴さんの知

「つてる範囲でお勧めの店を教えてください」

正直に目的を告げてショッピングモールの見取り図を見せると、鈴さんは少しだけ驚いた顔をした後、納得した様子でこう言った。

「つまりデートの手伝いってワケ？セシリア誘う前に調べときなさいよ」

「調べはしたけど、場所としてはそこそこ遠い場所だったんだよ。一夏から話聞く限りだと駅前の方が元々調べてた場所より品揃え良さそうだし」

「……なるほどね。でもあたしが知ってるのは去年までの店の情報よ？情報の鮮度としては古すぎる気がするけど」

「それでも、何も知らないよりは古い情報だろうと知っているにこした事はないと思う」

そこまで言うと、鈴さんは呆れながらも一言注意してくる。

「そこまで言うなら教えてあげるけど、ミスって恥かいても知らないからね」

「そいつは重々承知してるよ」

「……しょうがないわね」

俺がそう言うと、鈴さんは一つため息をはいてから見取り図を手に取りると、自分が知っている範囲でお勧めの店などを書き込んでくれた。

「あたしが知ってるのはこれくらいね。……重ねて言うておくけど、情報は1年以上前の物だから、鵜呑みにして痛い目見てもあたしは責任持たないからね」

「わかってる。ささやかだけど、お礼としてこれあげる」

そう言って買って置いておいたもう一つの缶ジュースを鈴さんに渡すと、微妙そうな顔をしてからこう言った。

「お礼が缶ジュース一本って、安すぎない？」

「それなら、今度学食でデザート一品奢りって事で」

「…まあ、それくらいでいいわ」

そうして話していると、今まで黙っていたティナさんが俺に話しかけてくる。

「つまり私に渡したコレも口止め料の代わり？」

「納得いかないようだったら、ティナさんにも同じ様にデザート一品奢るけど？」

買収しているようであまり気が進まないが、変に噂を立てられるよりマシだと思っている。

「んー、それはいらなかな？私としては缶^{コレ}ジュースでちょうどいいくらいだし」

そう言いながらティナさんはプルトップを持ち上げて、缶ジュースを飲み始める。

「ティナさん、ありがとう」

「いえいえ。その分セシリアちゃんを楽しませてあげて」

お礼を言うと、さらに精神的な後押しをしてくれるティナさん。それから二言三言話して、俺は自分の部屋に戻ると、明日の服装を決めた後にしっかりとシャワーを浴びて眠るのだった。

翌日の朝7時には目が覚め、朝食を食べてから準備を終えた頃には9時を少しまわったところだったので、少し早いが本土行きのリニアトレインに乗って待ち合わせ場所に移動したところ、待ち合わせの30分前には到着したのだが、セシリアは既に到着していて、ナンパをしてきた男二人をあしらっているところだった。

「はあ……、俺の連れにちょっとかい出すのは遠慮してもらいたいな」
「なんだあ!？」

ナンパ男の背後に立って注意すると、突然後ろから声をかけられたナンパ男が慌てて振り返るので、その隙に横を素通りしてセシリアに近づき、一言謝る。

「少し遅れたな。すまないセシリア、不愉快な思いをさせた」
「いえ、まだ待ち合わせの時間の前ですし、かまいませんわ。行きましょう」

セシリアはそう言って俺の手を引いて移動しようとするが、ナンパ男たちはまだ諦めきれないのか俺の肩を掴もうとしてくるので、それをかわしながらナンパ男たちに向き直る。

「ちょっと待てや!!!いきなり割り込んできたのはそっちだろうが!!!」

「そう言われても待ち合わせをしていたのは俺だ。それに、強引な勧誘するのは日本こっちでも条例違反なんじゃないか?警察に突き出され

ないだけありがたく思っておけ」

この時勢
女尊男卑の世の中、イギリスで似たような方法のナンパをすれば、
確実に警察のお世話になる事が出来る。

「うるせえー!!」

同性ゆえ手加減する必要はないと思ったのか、いきなり殴りかかってくるナンパ男A。どこを狙っているか丸分かりのテレフォンパンチをいなして背中を軽く押すと、勢いあまったナンパ男Aはそのままつんのめって倒れてしまい、その際の衝撃で気絶してしまった。

「はあ、それにしても俺ってやっぱり日本だと顔を知られてないのか？」

「それはしかたないのでは？アル。同じ人物でも自国の人間を報道したいと思うでしょうし」

俺達の会話をそこまで聞いて、今まで一言も言葉を発していなかったナンパ男Bは俺が誰が見当がついたらしく、恐る恐るこつ聞いてきた。

「アル?.....まっ、まさか.....世界に二人しかいない...男性IS操縦者の、アルバート・ウィルソン!？」

「正解。出来る事なら手荒なまねはしたくないんだけど?」

「ひっ、ひええ.....すみませんでしたあ!!」

正直にそういうと、ナンパ男Bは鬼でも見たように表情が凍りつき、慌ててナンパ男Aに駆け寄ると、ナンパ男Aの足を持って引きずりながら一目散に走って逃げていく。

「……………何故逃げる」

「さあ？何か思うことがあったのではなくて？」

「まあいいや。それより、遅れてすまなかったな。もう一度謝らせてくれ」

「お気になさらないで。待ち合わせの時間より早く来すぎたわたくしが悪いのであって、あなたに責任はありませんわ」

セシリア本人がそう言っているのなら、気にしないようにしておこう。

「わかったよ。それじゃあ移動するか」

「ええ。どこへ行きますの？」

「一夏から聞いたんだけど、この駅に併設されているショッピングモールは一通りの物が揃ってるらしいから、そこに行ってみようと思う」

「わかりましたわ。行ってみましょう」

セシリアはそう言って先に進んでいくので、俺も遅れないように少し早足でセシリアの後に続く。

幸いというべきか、イギリスで始めてISを起動させてからIS学園入学までの訓練の合間に、他の代表候補生の人達とペアになってモデルの真似事をさせられた事がある。その時の報酬でそこその金額を貰い、今まで使う暇がなかったのでそれを使う事にした。

駅に併設されたショッピングモールも昔と比べると店の種類も豊富になっているし、どの店の品揃えもかなり良くなっていた為、正直かなり驚かされた。

昨今の風潮からか女性向けの店舗が若干多く感じられたが、それで

も男性向けの店舗もそれなりにあったし、品揃えもよかった。

当然ながら今日はセシリアの買い物付き添いという事なので、セシリアが行きたい店を優先的にまわっていった。

服を始めとして、小物などを買っている内にあつという間に12時を過ぎていたので、その時近くにあったオープンカフェで昼食を取り、午後になった後初めて入った女性向けの洋服屋で、ちょっとした事件が起きた。

「そのあなた」

「ん？」

いきなり声をかけられ、何かあったのかと思つて周りを見回してみると、俺の背後にいた見知らぬ年上の女性から、突然こう言われた。

「男のあなたに言っているのよ。その服、片付けておいて」

よく見てみると、体に当てて丈を見たと思しき服が何着か売り物の服の上に被せられていて、自分で戻すのが面倒らしいその女性は横柄な態度を隠そうともせずそう言うってくる。

その姿に俺は小さくため息を一つ吐くと、なるべく女性を刺激しないようにこう答えた。

「半分程度なら手伝つても構いませんが、いくら女尊男卑この「男尊」の世の中だからといって、片付けを全て男にやらせるのはどうかと思いますよ」

イギリスで男友達と遊んでいた時にもああいった態度を取ってくる女性はほんの少しはいたので、そのときと同じ文句であしらう事に

する。それにしてもここまで強硬な態度の女性を見たのは初めてだ。

「ふうん。そういうことを言うの。自分の立場がわかっていないみたいね」

だが、俺の返答が気にいらなかったらしく、その女性は警備員を呼ぼうとする。

「そこまでしておきなさい、彼はわたくしの連れです。それに、これ以上は同じ女として見過ごせませんわ」

だが、タイミングを見計らっていたらしいセシリアが口を挟む。

「なに？あなたの男なの？躰くらいしつかりしなさいよね」

そう言っただけをそのままにしてその女性は店を出ていこうとする。

「そういうあなたはご自身の躰をしたほうがよいのではなくて？その態度では品位が疑われますわよ？」

セシリアは相当気が立っているらしく、底冷えのする声でその女性に向かってそう言い返す。

「なっ！？……失礼しちゃっ！」

その言葉が頭にきたのか、足音がより強くなって店から去っていく。

「……………はあ、日本ではあんな女性もいますのね。いくらISが自国^{日本}で作られたものとはいえ、あの態度はありえませんか。不快な思いをさせてしまいましたわね、アル」

見知らぬ女性のあまりに横柄な態度に呆れながら、セシリアは俺に謝ってくるので、俺はこう言った。

「今の世の中じゃああいう態度を取ってくる人は珍しくないから気にしてないさ」

あの手の女性はこのご時勢だと何処にでもいるので、全く気にしていない。それに、断り方は心得ていたつもりだったが、国が変わると上手くいかなくなる事を実感できただけでもうけものだ。

「それならいいのですが……」

そう言ってくれるセシリアだが、同性の行いとして許容できるものではないのかどこか気落ちしている感じの声になってしまっている。

「気分切り替えるためにも、別の店行くか？」

「そう……ですわね」

そう言って今まで見ていた服を元通りにしてから俺達は店を出るが、セシリアは先ほどの事を気にしてしまってどこか上の空だ。

「……さっきの事、気にしてるのか？」

先程の洋服屋からそれなりに移動したところで、セシリアに問いかける。

「そう……ですわね。気にしていないといえば、嘘になります」

「そうか……まあ、見ていて不愉快だと思っただんなら、自分が異性と接する時に似たような態度で接しなければいいんじゃないか？そ

うすればその時の相手にも不快な思いをさせずに済むし」

「そう…ですわね。今日の事は反面教師として覚えておきます」

セシリアがそう言って、俺達は近くにあった別の店に入っていく。

それから何件か店を巡っているうちにセシリアも先ほどのことを表面上は気にしなくなっていったので、よしとしておく。

「あ……」

そうしている内に時間も流れ、そろそろ学園に戻ろうかと思った時に寄ったアクセサリーショップで、ある物を見つけた。

「アル、どうしましたの？」

俺が声をあげたので何かあったのかと思ったセシリアが話しかけてくるので、俺はこう答えた。

「ある意味でセシリアに似合うもの見つけたんだよ。すみません」

「いらつしゃいませ。何かお探しですか？」

「コレをひとつください」

店員を呼ぶと、ショーケースの中に入れられていた物のひとつを指差す。

「かしこまりました。少々お待ちください」

店員はそう言うと、ショーケースの中のそれを取り出して確認してくる。

「お客様、こちらの商品でよろしいですか？」

「ええ、大丈夫です」

「蒼い…雫？」

俺が選んだのは、蒼い宝石が雫状に加工されたネックレスだった。

支払いを済ませて店を出ると、セシリアに向かって今買ったばかりのネックレスを差し出ししながらこう言った。

「かなり無理矢理だけど、俺からセシリアに蒼い雫のプレゼント。
受け取ってもらえるか？」

「…ええ。大切にさせていただきますわ」

その言葉を聞いて、セシリアはほんの少しだけ驚いた表情をすると、微笑を浮かべながらネックレスを受け取ってくれた。

「アル、申し訳ありませんがつけていただけますか？」

「ああ。わかったよ」

ネックレスをケースから取り出して、セシリアの首にかける。

「…うん、似合ってる」

「ありがとうございますわ。…名残惜しいですが、そろそろ学園
に戻りましょう」

時計
スカイ・ブレードを見てみると、既に夕方6時近くとなっており、
そろそろ戻らないと寮の夕食の時間に間に合いそうになかった。

「そつだな、そろそろ戻るか」

改札近くに移動して表示されている時刻表を確認すると、10分もせずにIS学園行きのリニアが来るようなので、その便で俺達は学園へと戻ることにする。

「アル、今日はありがとうございました。また誘ってくださいね」
学園に戻り、寮へと帰る道すがらセシリアがそう言ってくるので、俺も返事をする。

「ああ。こちらこそこれから色々迷惑かけるかもしれないが、その時はよろしくたのむよ、セシリア」
「ええ。ですがわたくしもあなたから料理を教わっているので、その時はお願いしますね」

「ああ。それじゃあ、お互い持ちつ持たれつってことで」
綺麗にそう返してくるので、そう返すしかなかった。

それから二言三言はなしている内に寮へとついたので、お互いに夕食をとるためにいったん部屋へと戻る。

「ただいまーっ」と

寮の部屋に入ると、既に一夏は夕食をとり終えて戻ってきていたが、それよりも驚くことがあった。

「ああ。お帰り、アル。………どうかしたのか？」

「いや……………どうしてベッドが一つ増えてるんだ？」

まるでこの部屋でなければいけないとばかりにもう一人分の寝具を始めとした生活用品が搬入されている事に驚きを隠せない。

「アルが出かけた後に山田先生が来て説明してくれたんだが、何でも明日転入生が編入してくるんだけど、それが男子らしいんだ」

「つまり、3人目の男性IS操縦者……………ってことか？」

「ああ、それで俺達の一緒の部屋ほうがいいだろうって事で、急遽一人分の生活用品が運ばれてきたんだよ」

ニユース類は常にチェックしているが、3人目の男性IS操縦者が現れた事はどこでも報道していた覚えはない。

「……………そうか、わかった。その転校生は明日到着するんだな？」

「そうらしい。山田先生から明日までみんなには黙っておくのと、仲良くしてくれって言った。…それより、夕食はもう食べたのか？」

「まだだよ。今から食べてくるから、後でその話詳しく聞かせてくれ」

そう言って部屋着に着替えてから食堂で夕食を食べたあと、今日俺が出かけている間に起こった事を詳しく聞き、明日会うことになる3人目の男性IS操縦者お仲間について一夏と話をするのだった。

10 ファーストデートとプレゼント（後書き）

そんなわけで今回はアルとセシリアのデート話。しかも本編の焼き増し臭さがバリバリです…… 自分の文才のなさとかポキャブラリの少なさが恨めしい。

シャルとラウラの登場は次回以降に持ち越しになります。

今回のように執筆にてこずり、更新が1週遅れてしまう事がこれからあるかもしれませんが、その時は気長に待っていただけると助かります。

1 1 3 人目の男性IS操縦者（前書き）

今回から2巻の内容に入ります。

話を進めていく上でアニメ版のタイムラインの方が都合がよかったです、まずはシャルルだけ登場です。

11 3人目の男性IS操縦者

翌日、登校してから朝のSHRまでの僅かな時間、クラスメイトの女子達が話している話題は大きく3つに分かれていた。

一つは今月末に行われる学年別トーナメントで女子生徒たちの中でささやかれている噂話。女子生徒たちが話している内容からかすかに聞こえた話だと、学年別トーナメントで優勝すると何かいいことが起こるらしい。

もう一つは今日から本格的に始まる実技訓練に関連した話で、何処のメーカーのISスーツを使うか、という話。コレに関しては俺と一夏は完全に無関係だ。

何故なら俺達が普段使っているISスーツが既に男性用に特別に作られたものだから、何処のメーカーがいいとかそういう次元は軽く超えている。

ついでに言っておくと、一夏が使っているISスーツはイングリッド社のストレートアームモデルをベースにフルカスタマイズしたものだし、俺のISスーツも母親の勤めている研究所で俺専用で作られた特注品だったりする。

最後の一つが今日編入してくる転校生について。昨日寮の俺達の部屋に荷物が運ばれてくるのを見た女子生徒が何名かいたため、一人

は男子生徒ではないかという噂がそこかしこでささやかれている。

比率としては2：4：4といった感じで、気の早いクラスメイトは俺と一夏の所に転校してくる男子生徒がどういった人物かを聞いてくる人もいるくらいだった。

「お前ら席につけ。ホームルームを始める」

教室にやってきた織斑先生の鶴の一声で、いくつかのグループに分かれて話していたクラスメイト達が慌てて自分の席につく。

「今日はなんと、転校生を紹介します」

いつもどおりホームルームの進行は山田先生が勤めている。織斑先生は何か連絡事項がない限りホームルーム中はあまり口を開かない。

圧縮空気の抜ける音と共に教室の教壇側の扉が開き、そこから噂どおり一人の男子生徒が教室に入ってくる。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。皆さん、よろしく願います」

（フランスの、デュノア…か。真っ先に思い浮かぶのはIS企業だ
よな）

デュノアの自己紹介を聞いて、真っ先にフランスにあるIS関係の企業の関係者と思ってしまったが、あそこの社長に令息がいるという話は聞いたことがないので、同じファミリーネームだけの可能性もある。

「噂どおりの…男子生徒？」

俺が一人でそんな事を考えながらクラス全体が静まり返っている中で、クラスメイトの一人がそうつぶやくと、デュノアはそれに答えるようにこう言った。

「はい。IS学園イシガクエンに僕と同じ境遇の方が二名いると聞いて、フランフランスより転入を」

「……きゃああああっ！！」「……」

デュノアの答えをそこまで聞いて、本当に男子生徒だとわかったクラスメイトの殆どから同時に黄色い声上がる。

「騒ぐな、静かにしろ！！」

だが、それを織斑先生が一喝する事で強制的に流れを元に戻すと、連絡事項に入る。

「本来ならもう一人転校生がいたのだが、先方の都合で一日転入が遅れる事になった。それと、今日から本格的なISの実習訓練に入る。訓練機ではあるが、実際にISを使用しての授業になるので各人気を引き締めるように。」

各人のISスーツが届くまでは学校指定の物を使うので忘れないように。今日は2組と合同で実習を行う。各人はすぐに着替えて第2グラウンドに集合。それから織斑、ウィルソン」

「はい」

「なんででしょう」

その途中織斑先生が俺達を呼ぶので、返事をする。

「デユノアの面倒を見てやれ。同じ男子同士だ。解散!!」
「君達が織斑君とウィルソン君?初めまして。僕は」
「ああ、いいから。とにかく移動が先だ。女子が着替え始めるから」
「早くしないと変態の烙印を押されるぞ。入学早々針の筵に座りた
いなら話は別だがな」

一夏がデユノアの手を引いて、俺は一夏と自分の着替えの入ったバ
ックを持って教室を出て行きながら、生徒手帳のメモページに書い
ておいたこの時間空いているアリーナの更衣室部分を見返す。

「今日は第3アリーナの更衣室が開いてる。第2グラウンドはちょ
っと遠いから、速めに行くぞ」

「俺達はアリーナの更衣室で着替えるんだ。実習のたびにこの移動
だから、早めに慣れてくれよな」

「う…うん」

「なんだ?そわそわして。…トイレか?」

「ちっ、違うよ」

「俺達が使えるトイレは限られてるから、覚えておいてくれ。後で
場所も教える」

3人で早足で移動していると、予想していた事態が起こる。

「あ!!噂の転校生発見!!」

「しかも織斑君とウィルソン君と一緒に!!」

廊下の角からホームルームの終わった女子生徒たちがぞろぞろと集
まってくる。

「予想どおりだな。一夏、昨日たてた作戦どおりに行くぞ」

「ああ、そうだな」

「えっ！？ええっ！！」

いきなりの事態に慌てるデュノアをよそに、俺達は昨日のうち合わせどおりの行動を取る。

「デュノア、バッグ貸せ！！」

「え！？いきなりどうして！！」

事態が把握し切れていないデュノアは、突然の事にうろたえたままだった。

「いいからバッグをアルに渡してくれ。授業に遅刻したら、織斑先生の特別カリキュラムだぞ！！」

「わっ、わかった！！」

俺達の言葉に含まれた危機感を感じ取ってくれたデュノアは、俺にバッグを預けてくれる。

「一夏、わかってるな！！」

「ああ！！そっちこそ遅れるなよ！！」

俺達はそれだけ言うと、一夏はデュノアの手をつかんで走り出し、すぐさま廊下の角を曲がっていき、俺は3人分のバッグを両肩にかけると、続々と集まる女子生徒たちの壁に向かって全速力で突撃する。

「特別カリキュラムは受けたくないんでね、ぶつかりたくなければどいてくれよ！！」

一言注意すると、大抵の女子生徒たちは避けてくれるので、その間を出来る限りのスピードで女子達の間を縫うようにして通り抜けていく。

最短ルートで校舎から第3アリーナ更衣室前まで駆け抜けると、少し遠回りなルートを通ってきた一夏達の姿が正面に見える。

「時間は!?!」

一夏が授業開始までの残り時間を確認してくるので、スカイ・ブレードを確認する。

「デュノアの着替え時間込みで7分!」

その言葉を聞きながら俺達3人は更衣室に入ると、一夏とデュノアにそれぞれのバッグを返していつも使っているロッカーの辺りまで移動、制服のボタンを一気に外し、Tシャツも一呼吸で脱いでハンガーにかける。

「シャルル、授業開始まで時間ないから、早く着替えてくれ」

「俺達は下にISスーツ着てたからそんなに時間かからないけど、デュノアは着替えてないだろ?」

昨日男子の転校生が編入してくると聞いて一騒動起こるだろうと予想していたので、昨日の内に一夏とどうすれば今日の実習に遅れずに済むか話し合っておいてよかった。

「う、うんっ!!着替えるよ?あとさっき一夏には言ったんだけど、ウィルソン君も僕の事はシャルルでいいから」

「ああ、わかったシャルル。俺の事も略称で呼んでいい」

本人からファーストネームで呼んでいいとの事なので、俺も普通に呼んでいい事を伝える。

「わかったよ、アル。あと悪いんだけど、二人ともあっち向いててくれるかな？」

「ああ……わかった」

「了解。着替え終わったら言ってくれ」

昔大怪我でもして体に傷が残っていて、それを見られたくないのだろっ。

「おっ、お待たせ」

少し離れた場所で待っていると、シャルルも自分のISSスーツに着替え終わってこちらにやってくる。

「時間もそろそろヤバイから、急ぐぞ」

授業開始まであと3分ほどしかないので、急ぐように伝える。

「ああ。そうだな」

「わかった。急ごっか」

3人で第2グラウンドに走って向かう最中、一夏がシャルルに一つ質問をする。

「そのスーツ、着やすそうだな。どこのやつ？」

「デュノア社製のオリジナルだよ。殆どフルオーダー品」

「自己紹介の時から思ってたんだが、シャルルってデュノア社の関係者か？それとも単にファミリーネームが同じだけなのか？」

デュノア社の事がちょうど話にあがったので、気になっていた事をシャルルに聞いてみる。

「前者：かな。父が社長をしてるんだ。アルはイギリスに住んでいたら知ってると思うけど、フランスで一番大きなIS関係の企業だと思う」

平然とそう答えるシャルルに対して、一夏は驚いた表情でこう言った。

「へえ、社長の息子が…道理でな」

「ん？道理でって？」

一夏の返事が意外だったのか、その理由を聞くシャルル。

「いや、気品っていうか、いいところの育ち！！って感じがするじゃん。納得した」

一夏のその言葉を聞き、複雑な表情をするシャルル。おそらくシャルルは愛人の息子で、経営危機に陥っているデュノア社の社長が愛人の息子にISを触らせた結果起動させる事が出来た、といったところだろう。

（まあ、シャルルの個人情報も含まれているし、そこまで言う必要もないか）

そんな事を考えている内に第2グラウンドに到着する。

「遅い!!とつとと列に並べ!!」

「「「はい!!」」」

授業開始前に間に合ったとはいえ、俺達3人が最後だったよつで織斑先生から注意を受け、慌てて列の最後尾に加わる。

「本日から実習を開始する。まずは戦闘を実演してもらおう。鳳!
!オルコット!!」

授業開始と同時に織斑先生が鈴さんとセシリアを呼ぶ。

「はい!!」

「はいつ!!」

「専用機持ちならすぐに始められるし、その中でもお前達の方が実
力が高い。前が出る!!」

その指示を聞いて、二人はあまり気乗りしない感じの声でこつ答え
ながら前に出る。

「めんどいなあ……なんであたしが……」

「はあ、なんか……こつというのは見世物のよつで気が進みませんわね

……」

二人が渋々前に出ると、織斑先生が二人に小声で何か話しかける。

「お前ら少しはやる気を出せ。あいつらにいいところを見せられる
ぞ」

その言葉を聞き、二人は何かに気づいたような顔をするとききなりやる気に満ちた表情をしてこう言った。

「やはりココはイギリス代表候補生、わたくし、セシリア・オルコットの出番ですわね」

「実力の違いを見せるいい機会よね。専用機持ちの」

さっきまでの沈んだ表情から一転してやる気を出した二人を見て、何を言われたのか見当がついた俺は心中でこうつぶやいた。

(織斑先生、人の好意を利用するのはなかなかいえぐいと思います) 口に出した瞬間出席簿が飛んでくることは目に見えているので、なるべく表情に出さないようにしておく。

「今、先生なんて言ったの？」

「俺が知るかよ……」

「ははは……」

シャルルも聞こえなかったようで、俺達に何を言ったか聞いてくるが、知らないことを答えればいい一夏と違って俺は曖昧に答えるしかなかった。

「それでお相手は？鈴さんとの勝負でもかまいませんが」

「ふっふーん、こっちのセリフ。返り討ちよ」

「慌てるなバカ共。対戦相手は」

キィィィン……

突然聞こえてくる飛行時独特の空気を切り裂く音。

「ああああーっ！！どいてくださいーい！！！」

声のする方向を見ると、上空でラファール・リヴァイヴを纏った山田先生が体勢を崩して俺と一夏のあたりに落下してくる。

「ええいつ、くそっ！！！」

タイミング的に生身では間に合いそうもないので、ISを緊急展開しながら後ろに飛び退いて、墮ちてくる山田先生を避ける。

ドオーンッ！！

俺が避けた1秒後、山田先生はちょうど落下地点にいた一夏を巻き込んで墜落し、あたりにもうもうと土煙が立ち込める。

「一夏、無事か？」

飛び退く瞬間に一夏も白式を展開するのが見えたので無事だとは思うが、安否を確認するためスカイ・ブレードの展開を解除しながら土煙の中にいるであろう一夏に声をかける。

「ひゃあっ！！おっ、織斑君、喋っちゃダメですう！！！」

だが、返ってきたのは山田先生のあられもない声だけで、土煙が晴れた先には、白式を纏った一夏が山田先生に押し倒され、なおかつ

山田先生のバスの間に顔を埋めているとんでもない状態になっていた。

「うわぁ……………」

「山田先生……………大胆すぎない？」

副担任と男子生徒のあられもない姿を見て、まわりが騒がしくなる。

「うつつ……………おっ、織斑君、無事ですか？」

「えっ、ええ……………なんとか」

山田先生が起き上がってどいたあと、一夏も体を起こして立ち上がろうとする。

「いい〜ちかあ〜!!」

「げえっ!?!」

だが、上半身を起こした一夏を待っていたのは鈴さんからの双天牙月の投擲攻撃で、それを慌てて仰向けになってかわす一夏だが、両刃形態の双天牙月がブーメランと同じく戻ってくる事を忘れていたため、二撃目はかわしようがなかった。

「はっ!?!」

ドンッドンッ!!

だが、銃撃音と共に双天牙月の両端に火花が散って軌道が変わり、双天牙月はグラウンドに突き刺さる。

「えっ?」

「織斑君、ケガはありませんか?」

音源をたどると、山田先生がアサルトライフルを展開した上に理想的なフォルムで構えていて、銃口から硝煙が立ち上っている事を考えると双天牙月に銃弾を当てて防いだようだ。

「はっ、はい……ありがとうございます……」

普段の山田先生とのギャップに驚きながら、先生にお礼を言う一夏。

「山田先生は元代表候補だ。今くらいの射撃は造作もない」

「昔の事ですよ。それに、候補生止まりでしたし」

そう言って謙遜する山田先生だが、代表候補生という時点で十分すごいと思う。

「さて小娘ども。さっさと始めるぞ」

織斑先生がそう言っている時点で、セシリアと鈴さんの相手は山田先生という事になる。

「えっ!?!……あつ、あの…2対1で?」

「いや……さすがにそれは……」

「安心しろ。今のお前達ならすぐ負ける」

入学試験の時に一度勝った事のあるセシリアと実力が高い鈴さんはその事に難色を示すが、織斑先生のすぐ負けるという言葉が気に障り、その瞳にやる気が満ちる。

「では……始め!」

織斑先生の号令と同時に二人は高度を上げ、それに遅れて山田先生も高度を上げる。

2対1の模擬戦が始まると、織斑先生はシャルルに山田先生の使っているラファール・リヴァイヴの解説をさせて、シャルルがどの程度のISに関する知識を持っているかを確認すると同時に、他の生徒達に量産ISがどういった物かの説明をさせる。

その説明をしている間にもセシリア達と山田先生の模擬戦は進み、連携の上手くいっていないセシリア達を誘導しながらグレネードを二人に同時にヒットさせ、それが決まり手となって模擬戦は山田先生の勝ちで終わった。

「これで諸君にも教員の實力は理解できたろう、以後は敬意をもって接するように。次に、グループになって実習を行う。リーダーは、専用機持ちがやる事。では分かれる」

その言葉と同時に、殆どの女子生徒たちが男性IS操縦者3人に教男子生徒えてほしいらしく、俺達3人を取り囲む。当然ながら俺達3人だけで教えたのでは授業にならないので、織斑先生の鶴の一声で出席番号順に班を分けられる事になった。

一班に1機ずつ訓練機が渡され、本格的な実習訓練が開始される。

俺がリーダーをやる事になった班にはラファール・リヴァイヴが渡されたので、全員で人の搭乗していないISを見ながらひとおりの注意をしておく。

「出席番号順にISの装着と起動、歩行までやるんだけど、搭乗して一通りの事が終わって降りる時に、気をつけてほしいことがある」「降りる時？何か気をつけることがあるの？」

どういう因果か最初に教えるのが顔を知っているティナさんだったのだが、訓練機を使いまわす際の注意事項は知らないようだ。

「これは俺も今の機体スカイ・ブレードの物理的調整中にイギリス製第2世メールシュトローム代機を使っていてやった事のある失敗んだけど、訓練機って基本的にフィッティングとパーソナライズを切っているから、いちいちコクピットに乗る必要があるんだけど、

訓練が終わってそのまま装着解除すると当然ISは立った状態で固定されるから、次に使う人がコクピットに届かなくなるんだ。ちよつと見てて」

そうやって俺は自分の機体スカイ・ブレードを展開して、立った状態のまま一端装着を解除する。

当然そうするとスカイ・ブレードは立った状態のままコクピットが開放される。

「見てのとおり、専用機でもこの状態だとコクピットまで届かない。だから、歩行まで終わったら一度しゃがんでから装着解除するようにしてほしい。間違って立った状態で解除した場合は俺がコクピットまで運ぶけど、」

実習終了予定時間までに間に合わなかったら放課後織斑先生と居

残りで今日の事をやるようだから、時間短縮のためにも装着解除の時にはしゃがむようにしてほしい」

そう言いながらスカイ・ブレードの外部コンソールを開いて待機状態に戻るようにコマンドを送り、ISを待機状態へと移行させつつ班員のみんなを見ながら、始めるように言う。

「俺からの注意事項は以上かな。それじゃあ、一人ずつやっていこう」

ティナさんから始まり、俺の班は全員スムーズに装着、起動、歩行をこなし、装着解除の時も全員しゃがんでくれたので、これといった問題もなく終了予定時間前に全員実習を終える事ができた。

「では午前の実習はここまでだ。午後は今日使った訓練機の整備を行うので、各人格納庫で班別に集合すること。専用機持ちは訓練機と自機の両方を見るように。では解散!!」

全ての班が実習を終えたのは予定時間ギリギリで、急いで訓練機を格納庫まで運び再びグラウンドに戻ってきたのは授業終了1分前だった。IS学園で生徒が訓練機の運搬用に使うカートは人力なので、腕と腰が少し痛い。

「あー、腕痛い。一夏もお疲れさん。とっとと着替えて、昼行くかシャルルも一緒にどうだ？」

「そうだな。シャルル、着替えて一緒に昼行こうぜ。俺たちはまたアリーナの更衣室まで行かないといけないしよ」

俺達がシャルルを誘うと、シャルルは何故か少し焦りながらこう言ってきた。

「え、ええつと……僕はちよつと機体の微調整をしてからいくから、先に行つて着替えててよ。時間がかかるかもしれないから、待つてなくていいからね」

「ん？いや、別に待つてても平気だぞ？俺は待つのににはなれてるし」

「それに、案内役も必要だろう。お前の専用機もどんなのか気になるし、手伝わせてくれ」

「そつ、そこまでしなくていいから！！僕が平気じゃないから！！ね？二人とも先に教室に戻つててね？」

「お、おう。わかった」

「わかったよ。ただ、校内の案内と施設使用時の説明役は必要だろうから、俺が一夏のどちらかは更衣室前で待つてるからな」

妙に力強くそう言うてくるので、俺たちはうなずくしかないが、どちらにしろ校内施設の使用についてのルール説明などもしないといけないので、どちらかは待つている事を予め伝えておく。

「うつ……わかったよ」

その言葉を聞き何故かしょぼくれた声を返すシャルルだが、施設使用時の細かいルールなどは教えてもらう必要がある事はわかつているらしく、了承の返事をする。

「アル、シャルルに言つてた案内役とかはどつちがやるんだ？」

「言い出したのは俺だから、俺がやるさ」

こういつたのは提案者が残るのが筋だろう。

「わかった。箒と屋上で昼食食べることになってるから、セシリアさんと鈴誘っておくから、アルもシャルルを連れてきてくれ」

「……わかったよ。一通り説明したら屋上に行く」

箒さんを不憫に思いながらそれだけ言って、一夏はISスーツを脱いで制服に着替え始める。

「午後も整備実習だから、どっちにしろISスーツ着てたほうが楽だぞ？」

「でもスーツ着てズボン穿くのって、嫌なんだよ」

「まあ……わからなくてもない」

それでも俺は実習ごとに着替えるのは面倒なので、基本的には実習のある日はISスーツは着っぱなしだったりする。

「それじゃあ、先に行ってるからな」

そう言って一夏は更衣室を出ていくので、俺もISスーツの上から制服を着て、更衣室前の入り口でシャルルを待つ。

5分ほど待っていると、制服に着替えたシャルルが出てくるので、声をかける。

「あ、アル。本当に待ってたんだ」

「当たり前だ。それじゃあ移動しながら施設利用の注意点教えてくからな。あと、一夏と一緒に昼食べようって誘ってたぞ」

「う、うん。わかったよ」

シャルルの返事を聞きながら教室に戻りつつ、俺達男子生徒が各施

設を利用する時の注意事項を説明していく。その最中、多数の女子生徒たちがシャルルと俺を食事に誘ってきたが、お互いに先約があることを理由にお誘いを断る。

教室に戻って昼食を手に屋上へ向かっている最中、突然シャルルが俺に話しかけてくる。

「色々教えてくれてありがとう、アル。何か困った事があったら言っ
つてよ、出来る限り力になるからさ」

「ああ、困った時に言っさ。とにかくこれからよろしくな、シャル
ル」

「うん」

お互いにそう言いながら俺たちは屋上に着き、待たせていた一夏と
篝さん、鈴さんとセシリアに謝りながら昼食にするのだった。

11 3人目の男性IS操縦者（後書き）

そんなわけで今回も原作焼き直しに近いお話になってしまいました。アルは元々ISに興味がある設定だし、同じEU圏内という事もありデュノア社が経営危機に陥っている事、デュノア社社長に実の息子がいないことは知っていると認めてください。

なのでシャルルが愛人の子供である事はあたりをつけていますが、シャルルがシャルロットである事には気づいていません。

今回のようなペースは稀だと思しますので、また1週間ほど間が開くと思いますが、よろしく願います。

12 二人目の転校生と不協和音（前書き）

1 週間かかりませんでした。

そして今回からラウラが登場しますが、しばらくの間は嫌味キャラになると思いますので、ラウラ派ことブラックラビッツの方々には先に謝っておきます。

12 二人目の転校生と不協和音

昼食を取り終え、午後の整備実習を終えた俺達はシャルルの入寮に伴う引越しがあるため、今日一日は自主訓練をやめて私物の配置などを手伝った。

「じゃあ、改めてよろしくな」

「3人しかいない男子生徒だ。仲良くしていこうぜ、シャルル」

「うん。よろしく、一夏、アル」

その後いつもどおり寮で夕食をとったのだが、やはりというか相変わらずというか、学年を問わない女子生徒の包囲網と質問攻めを適当なところで切り上げさせて、部屋に戻ってきて緑茶で一服しているところだった。

「紅茶とは違うんだね。不思議な感じ。でもおいしいよ」

「俺はどっちも飲み慣れてるけど、紅茶よりは緑茶かな」

セシリアは色が原因で緑茶が苦手らしいが、俺はそんなことはない。おそらく育ってきた環境の差だろう。

「気に入ってもらえたようで何よりだ。今度機会があったら抹茶でも飲みに行こうぜ」

「抹茶ってあの畳の上で飲むやつだよな？特別な技能がいるって聞いたことがあるけど、一夏はいれるの？」

「そもそも抹茶あれはそう簡単に飲めるものなのか？ここらに茶道教室があるなんて聞いた事がないぞ。茶道部に頼み込む気か？」

俺とシャルルが二人して一夏に質問すると、一夏は少し意外そうな

顔をしてこう答えた。

「シャルル、抹茶は『たてる』って言うんだぜ。それに、俺も略式のしか飲んだことない。アルはこの間駅前行っただろ？あの中に抹茶カフェってあって、コーヒーみたいな感覚で飲める店があるんだよ」

「へえ、そんな店まであったのか。知らなかったな」

「じゃあ今度誘ってよ。一度飲んでみたかったんだ」

「おう。ついでに色々案内もするぜ。せっかくだし今週末の日曜にでも出かけるか。アルはどうする？一緒に行くか？」

「本当？嬉しいなあ。ありがとう、一夏」

「そうだな、俺も一緒に行こう。色々な店を教えてくれると助かる」

一夏からの誘いを聞き、ちょうどよくあいているので了承しておく。

「あ、あんまり気にするな、シャルル。俺も久しぶりに抹茶飲みたかったし、ついでだよついで」

「ふふっ、ありがとう」

若干照れながら返事をする一夏と、それを見透かしているかのよう
に優しいな笑みを浮かべるシャルル。

「そうだ、シャワーの順番どうする？今までは二人だったからその日その日で決めてたけど、3人で使うとなると予め順番決めておいた方がいいだろ」

3人で話しているとあつという間にそれなりの時刻となっていたので、目先の事としてシャワーを使う順番をどうするかを二人に聞く。

「あ、僕は最後でいいよ。一夏とアルが先に使って」

「それならお言葉に甘えて先に使わせてもらおう。まあ、先に使いたい日があつたら言ってくれ」

シャルルの言葉にうなずき、先に使わせてもらう事にするが、気分によつては先に使いたい日もあるだろうから、その時は言うように言っておく。

「うーん、そう言われると俺としては逆に使いづらいというか……。シャルルも実習終わつてすぐにシャワー浴びたい日とかあるだろ?」「ううん、平気だよ。僕つてあんまり汗をかかない方だから、すぐにシャワーを浴びなくてもそんなに気にならないし」

「わかつたよ。それじゃあありがたく使わせてもらう。でもあれだぞ、遠慮とかしなくていいからな。なにせ男同士だし」

最初は難色を示す一夏だが、シャルルの説明を聞き了承の言葉を返す一夏。それでも同性と言うこともあり、変に遠慮しないでいいことも言っている。

「二人ともありがとう。そういう時があつたら言わせてもらつね」
そう言つて再び笑うシャルル。

「そういえば、二人はいつも放課後にISの特訓してるって聞いたけど、そうなの?」

「ああ、俺は他のみんなから遅れてるから、地道に訓練時間を重ねるしかないからな」

「俺も初起動からいままで詰め込み学習しているとはいえ、遅れることに変わりないから地道に訓練してるけど、それがどうしたのか?」

月末には学年別トーナメントもあるので明日からはまた訓練を再開するつもりなのだが、何かあるのだろうか。

「僕も加わっていいかな？二人には何かお礼がしたいし、専用機もあるから少しくらいは役に立てると思うんだ」

自分も自主訓練に加わりたいたいと言ってくるので、俺達は即座に了承する。

「おお、それはありがたい話だ。ぜひ頼む」

「どういった機体かは知らないが、対戦相手のバリエーションが増えるのはいい事だし、よろしく頼む」

「うん。任せて」

その言葉を頼もしく思いながら、この日は決めた順番でシャワーを浴び、ぐっすりと眠るのだった。

翌日朝のホームルーム、昨日織斑先生の通達があつたとおりにもう一人の転校生が編入してきたのだが、山田先生を含めたクラスの全員が多かれ少なかれ困惑の表情を浮かべていた。

「えっと……今日もまた一人クラスにお友達が増えました。ドイツから来た転校生の、ラウラ・ボーデヴィツヒさんです」

教壇の上に立つ、医療用ではない黒の眼帯をはめた銀髪の女子生徒。クラスの女子一同を下らなそうな目で見ているだけでなく、発する

気配は周囲を拒絶する氷のような冷たさを放っていて、その気配にあてられてクラス全員が押し黙ってしまふ。

「挨拶をしる、ラウラ」

「はい、教官」

織斑先生のその一言で少しの間だけ氷の気配が止むが、発せられた言葉に違和感を覚えるしかなかった。

（教官？織斑先生じゃなくて？どういうことだ？）

織斑先生を何故か教官と呼ぶその姿と、織斑先生とプライベートでも付き合いのある俺だからわかる、千冬さんが知っている人物に話しかける際の微妙な声色の変化から、ボーデヴィツヒと織斑先生は知り合いという事になる。

「ここではそう呼ぶな。もう私は教官ではないし、ここではお前も一般生徒だ。私のことは織斑先生と呼べ」

「了解しました」

織斑先生からの注意をすんなりと了承すると、ボーデヴィツヒは足をかかどで合わせて背筋を伸ばしながら自己紹介を始める。その所作は軍人のそれに近く、いつそう冷たい雰囲気立ち込めている気さえしてくる。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

ボーデヴィツヒは俺達全員に向き直ると、一言そう言っただけで再び黙り込む。

「あの……以上……ですか？」

そのあまりの短さに山田先生も困惑しながらボーデヴィツヒに問いかける。

「以上だ」

ボーデヴィツヒは山田先生の問いかけに即答すると、何故かクラス全体を見回し始める。そうして一夏の姿を見つけると、無言のまま一夏に近づぐ。

「っ……！貴様が……！！」

「ん？」

バシンッ……！！

「……………」

「っ？」

無言で一夏の頬をひっぱたくと、先程以上に冷たい視線で一夏を睨みつけながらボーデヴィツヒはこう言った。

「私は認めない。貴様があの人の弟であるなど、認めるものか」

いきなり一夏の事を否定しだしたボーデヴィツヒの問答無用の平手打ちに、クラス全体が言葉に出さないまでも混乱の渦に巻き込まれていく。

「なっ!？」

ボーデヴィツヒのいきなりの暴挙に俺も頭にきたが、第三者がわめいたところで事態が好転するわけでもないし、事態を悪化させるだけの可能性もあるので、落ち着くためにも大きく深呼吸をする。

「いきなり何しやがる!！」

「ふん……」

一夏もいきなり女子生徒に殴られて怒りをあらわにするが、ボーデヴィツヒは一夏の問いかけを無視して空いている自分の席につき、そのまま微動だにしない。

「あー……ゴホンゴホン!！」ではホームルームを終わる。各人は次の授業の準備をして待機していること」

ぱんぱんと織斑先生が手を叩いて行動を促すと、怒りの表情を浮かべている一夏を含めて、ボーデヴィツヒを除くクラス全員が腑に落ちない表情で授業の準備を進める。

一夏も最初の内は怒りの表情を浮かべていたが、1時限目の中盤から表情が暗くしながら何かを考え込み、ボーデヴィツヒを除いたクラスメイト全員が今朝の一件が気になって授業に身が入らず、クラス全員が注意を受ける事になってしまったのだが、それもしかたない事だろう。

一時限目終了後の休み時間。俺は今朝の行動の理由を聞くため、ポーデヴィツヒに話しかける。

「ポーデヴィツヒ。いくつか聞きたいことがあるんだが、いいか？」
「何の様だ？アルバート・ウィルソン」

発せられる言葉は氷のように冷たく、他者を拒絶しきっていることがありありとわかるが、それを半ば無視して質問をする。

「何故あんなことしたんだ？一夏の立場を考えれば、自分の国を巻き込んだ国際問題に発展しかねないことはわかるはずだ。それに、一夏を織斑先生の弟として認めないってどういうことだ？」

「私からすればお前の方が不思議だがな。同じ様に教官を慕っているながら、何故あの男を認め、友人としてつきあう事が出来るのか理解に苦しむ」

おそらくポーデヴィツヒは編入前に俺や一夏の経歴を調べていたのだろうが、そんなことを言ってくる理由がわからなかった。

「何を言ってるんだ？たしかに俺は織斑先生を尊敬しているけど、それと一夏とのつきあい方とどう関係がある」

会話の内容がまるでかみ合わず、聞きたいことだけが増えていきながら、ポーデヴィツヒは何かに気づいたとばかりに嗤わらいはじめる。

「ああ。あの時のお前は完全に一般人だから、あの男がどれほど罪深い事をしたのか知るはずも無いか」

嘲笑を浮かべながらそう言ってくるポーデヴィツヒに、俺は重ねて問いかけるしかなかった。

「だから、一体なにを言っているんだ？質問をしているのは俺なんだから、わかるように言っただけだよ」

「ふん、教える義理は無いな。そんなに気になるならあの男に直接聞いたらどうだ？」

ボーデヴィツヒはそう言うと、興味が失せたと言わんばかりに目を閉じて再び黙り込む。

「なあ、人の話を聞いているか？質問に答えてほしいんだが」

ボーデヴィツヒにそう言うが、答える気がないのか黙ったまま微動だにしない。

「……………そうかよ、じゃあもういい。最後に一つだけ忠告しておくが、このままだとクラスの中で確実に浮くぞ」

その態度に呆れと一抹の怒りを感じながら一言忠告して、ボーデヴィツヒの席を離れる。

「いつそ見事なまでに話がかみ合いませんでしたわね」

少しばかりイライラしながら自分の席に戻ろうとすると、セシリアが自分の席から話しかけてくるので、一つ深呼吸してからわかった事を話す。

「ああ。わかった事といえば、俺が引越してIS学園（イ）に入学するまでの間に、織斑先生がらみで一夏がボーデヴィツヒに怨まれるよ

うな何かがあつて、ボーデヴィツヒはそれをまだ根に持つてることくらいだ。

しかも自己紹介の時に軍人然とした動きをしていた事も考えると、ボーデヴィツヒは現役の軍人かもしれないし、本当にボーデヴィツヒが軍人なら、一夏が怨まれるようになった織斑先生がらみの事も軍事機密の可能性がある」

クラス対抗戦の時みたく緘口令まで敷かれていたら、それこそ真相は闇の中だ。

「よくそこまでわかりますわね。………それにしても、親友を問答無用で殴った相手に対して何故あそこまで冷静に話しかけることができますの？わたくしなら我慢出来そうにありませんわ」

少し驚きながら、セシリアは一夏を殴ったボーデヴィツヒに冷静に話しかけたことが気になって問いかけてくる。

「問答無用でぶつ叩いた事に対しては頭にきてるさ。それでも、二人のいざこざの原因を知らないから、どっちが悪いか判断できないしな。事情を知らない第三者がわめいたところでどうしようもない」
事情を何も知らない第三者が当事者を一方的に嫌ったりわめいたりしていたら、それはそれで問題だろう。

「では、原因がはっきりしたらどうなさいますの？」
「その時は行動あるのみだな。ボーデヴィツヒが悪ければ一夏の味方をするし、一夏が悪ければボーデヴィツヒに味方して考えを改めさせる」

友人の悪いところを指摘するのも友の務めの一つだろう。

「そこまで考えているなら何も言いませんわ。ただ、わたくし個人としてはボーデヴィツヒさんはあまり好きではありませんが」
「それに関しては俺も同じだよ」

他人を問答無用で殴るような人物を好きになるやつはそうそういないだろう。

キーンコーンカーンコーン

「休み時間も終わりですわね」

「ああ。またあとでな」

急いで自分の席に戻り、次の授業の準備をしておく。幸いといっているのか、次は織斑先生が担当のIS理論に関する授業なので、終わったらボーデヴィツヒの事も聞いてみよう。

二時限目が終わり、教室から出ていく織斑先生を追いかけて声をかける。

「織斑先生、一つ聞きたい事があるんですが」
「どうしたウィルソン。先程の授業の事か？それともボーデヴィツヒの事か？」

さすがというべきか、俺が聞きたい事はお見通しのようだ。

「後者です。何故ポーデヴィツヒはあそこまで一夏を目の敵にしているんですか？」

「……………教えてやってもいいが、その前に一つ質問に答える。ポーデヴィツヒの事を聞くのはお前の個人的興味のためか？それともクラス代表としてクラスメイトを按じてのことか？答える」

その目は相変わらず鋭く、嘘をつくことを許さないと語っているようにも思えてくるため、正直に答える。

「両方です。もつとも、割合としては8：2と前者の方が圧倒的に多いですが。個人的にもポーデヴィツヒがあんなことをした理由を知りたいですし、

少なからずはクラス代表としても、クラスメイトがハブられている姿を見るのは気持ちがいいものではありませんから」

そう答える俺の目を見て、本当の事を言っていると思っただらしい織斑先生は一つため息を吐いてからこう言った。

「正直だな。……………理由を教えるから、昼休みになったら弁当を持って職員室に來い」

「ありがとうございます。……………ところで、ここまであっさり教えてもらえるって事は、ポーデヴィツヒが一夏を怨む原因になった事件って緘口令とか敷かれてないんですか？」

織斑先生に聞いても、緘口令が敷かれていて答えられないと言われる可能性も考慮していたのだが、やけにあっさり教えてくれる事になったのでつい聞いてしまった。

「生徒以外の学園関係者なら殆どの者が知っていることだからな。公然の秘密というやつだ。……聞きたいことはそれだけか？」

「はい。ありがとうございます、織斑先生」

一礼してから教室に戻り、次の授業の準備をして、いつも昼食を一緒に食べているセシリアには事情を説明しておく。

「セシリア。今日の昼は悪いが一人で食べてもらえるか？」

「いきなりどうしましたの？理由を聞かせていただけますか？」

突然のキャンセルに驚きながら、セシリアは理由を聞いてくる。

「ボーデヴィツヒがらみの事を昼休みに織斑先生に教えてもらう事になったんだよ」

「なるほど、そういうことですか。わたくしも一緒にしてはいけませんか？」

理由を聞いてセシリアも同行を申し出てくる。

「すまないが遠慮してもらっていいか？十中八九、一夏やボーデヴィツヒのプライベートに関わるから、本人の口から話されるまではそっとしておくべきだと思います」

「……そういうことなら仕方ありませんわね。後ほど話せる範囲で教えてくださいね」

「わかったよ。突然のキャンセルですまないな」

「いえ。まだお昼前ですし、大丈夫ですわ」

そう言ってねぎらいの言葉があるだけでこちらとしてはありがたい。それに、一夏とボーデヴィツヒの件も当事者に話を聞けるとなれば原因の半分はわかるだろう。一夏に話を通さないのは筋が通ってい

ないが、そこは後で謝るしかないだろう。

そんな事を思いながら授業を受け、あっという間に昼休みとなった。

「ん？アル、今日はどこか別の場所で食べるのか？」

学食に向かおうとした一夏が弁当を持って一人で移動しようとする俺を見て話しかけてくるので、理由を説明する。

「ああ。織斑先生のところ行ってくる」

「……今朝の事、聞いてくるのか？」

一夏としてもこのタイミングで織斑先生と聞き、思い当たる事は一つしかないようだ。

「ああ。本来ならお前に聞くのが筋なんだろうが、ずっと考え事をしてきたみたいだから聞くに聞けなかった。すまない」

「いや、正直こっちもいつアル達に話せばいいか迷ってたからな、ちようどいい機会だ。千冬姉のところ行った後、時間が余ったら屋上まで来てくれ」

「わかった。行かせてもらう」

それだけ答えると、俺は職員室へと向かう。

「ああ。来たか、ウイルソン」

「はい。お待たせしました」

「いや、いいさ。ついて来い」

職員室の扉の前で織斑先生がまっていたので、一言挨拶してから先生の後に続き、ついた場所はアリーナのオペレーションルームだった。

「お互い昼もまだだし、食べながら話そう。それに、ここならうるさくしても問題ないし、ロックしてしまえば邪魔も入らないからな………織斑とボーデヴィツヒについてだったな」

そう言いながら適当なテーブルに教師用の仕出し弁当を広げる織斑先生。

「はい。何故ボーデヴィツヒは一夏をあそこまで目の敵にしているんですか？」

俺も少し気後れしながら弁当を取り出しながら織斑先生に質問する。

「お前の事だ。ある程度は何かあったか予想しているんじゃないか？話してみる」

「えっ？それは別にかまいませんが、肝心要の部分が抜けていることは先に言っておきます。」

弁当を食べながら唐突に織斑先生がそう言うってくるので、肝心な部分不明な事を前置きしてから1時限目の休み時間にセシリアに言ったことを織斑先生にも話す。

「……といった具合に俺は考えているんですが、実際のところはどうなっているんですか？」

「ああ、そうだな………ウィルソン、何故私が第2回モンド・グロ

ツソの決勝戦で不戦敗になったか知っているか？」

一通りの考えを織斑先生に伝えると、織斑先生は少し考えてから変な質問をしてくる。

「知りません。ネット上では織斑先生の不戦敗の理由は諸説入り乱れていますから、どれが本当の事かは見当が付きませんよ」

「ネット上に流れている話はすべてはずれだ。私の不戦敗の理由は『試合なんぞより一夏の救出を優先した』のが理由だ」

「一夏の…救出？あの日、一夏に何かあつたんですか？」

織斑先生から語られた意外な事実、俺はただ驚くしかなかった。

「ああ。ドコの者かは知らないが、決勝日に一夏が誘拐された。

しかも私の元にその報せが届いたのが試合開始直前でな。それを聞いてから、文字通り一夏を探すために飛び出した」

そうして織斑先生の口から第二回モンド・グロツソ決勝戦当日に一夏が誘拐、監禁され、事件発生時にドイツ軍が独自の情報網から一夏の監禁場所の情報を得ていたため、その情報を織斑先生に教え、先生がその場所に突入すると本当に拘束されていた一夏が見つかり、その『借り』を返すため大会終了後から1年ほどドイツ軍で教官をやっていた事を教えられた。

「その後いろいろあってIS学園（11）で教師をすることになったんだが、ボーデヴィツヒはその頃の教え子の一人だな。私の強さに惚れ込んだ様で、大会二連覇の出来なかった原因である織斑を心底怨んでいるわけだ。

「……私から話せることは以上だな。ウィルソン、私を軽蔑したか？」

織斑先生の話をごここまで聞いてそうやって問いかけてくる織斑先生を見ながら、俺はボーデヴィツヒに対する呆れの感情が限界を突破し、つい思った事を口にしてしまった。

「軽蔑なんてしませんよ。むしろ織斑先生らしい理由で納得してるくらいです。まあ、ボーデヴィツヒには呆れてモノが言えませんがどね。自分がどうして織斑先生と知り合うことが出来たのかを理解せずに一夏を逆恨みしているだけじゃないですか」

俺のその言葉を聞き、織斑先生は少しの間呆然としてからこうつぶやいた。

「……………いきなり身も蓋もないことを……………実際そのとおりだから言い返せんがな」

若干の呆れを含んでそう言うてくる織斑先生を見ながら、俺は感情のままに思ったことをぶちまける。

「織斑先生も含めた3人でもっと複雑でへビーな事情があると思ったら、真実はボーデヴィツヒが逆恨みで思考停止状態になって、何の事件が原因で自分が愛しの教官殿に会うことが出来たのか欠片も理解せず、

あまつさえその事件の中心人物で、男性IS操縦者になった一夏につっかかって本人と周囲の人物へ自国の印象を大きく落とす始末これで呆れるなという方が無理ですよ」

織斑先生は俺の言葉をそこまで聞いてから、一言こう言った。

「それをボーデヴィツヒの前で言うなよ？お前からすれば気付いて

当然のことかもしれないが、正論は時として相手の感情を刺激する。ああ見えてあいつはドイツ軍の特殊部隊の隊長だ。IS操縦の技量については学年内で最強と言っていていいかもしれん。下手に刺激すれば痛い目を見ることになるぞ」

「ご忠告ありがとございます、織斑先生。俺も無闇に喧嘩を売る気はありませんが、ボーデヴィツヒの出かたによつては戦つかもしれません」

その時はとことん怒らせて冷静さを奪えばいいが。

「……はあ、まあいい。私からボーデヴィツヒについて教えられることは以上だ」

一つため息を吐きながらそついう織斑先生は、ちよつど弁当を食べ終わったようだ。

「お忙しい中お時間をいただき、ありがとうございました」

俺もちよつど弁当も食べ終わったので、空になった弁当箱をもって席を立ち上がり、一礼する。

「生徒の面倒を見るのも給料の内だ、気にするな」

そう言つて織斑先生も立ち上がり、オペレーションルームを出て行くので、俺も一緒になつて出る。

「お前のことだから心配は要らないと思うが、あまり問題を起こすなよ？こちらとしてもお前達が入学してから色々忙しいからな」
「それは重々承知しているつもりですよ。それでは、失礼します」

そう言ってもう一礼してから織斑先生の下を去り、職員室を過ぎてから時間を確認するとまだ半分程度残っていたので、一夏との約束どおり屋上へ向かう。

「待たせたな、一夏」

「いや、そうでもないさ」

屋上に向かうと待っていたのは一夏だけで、セシリアをはじめとしたいつものメンバーは誰一人としていなかった。

「あれ？セシリアたちはどうしたんだ？俺達に話すって言ってただろ」

「俺達二人だけで話したかったから、他のみんなには先に事情を説明してから教室に戻ってもらった」

「そうか………それで、俺まで呼んだ理由はなんだ？お前とボーデヴィツヒの関係なら織斑先生から一通り聞いたから、似たような説明はしなくてもいいぞ？」

別の人間からとはいえ、同じ説明を聞く気はないので一言一夏に言うておく。

「それに少し関係した事だよ。………4月にアルがモンド・グロツソの映像記録見せてくれた時があっただろ？」

「ああ、そういうえばあの時思いつきり表情歪ませてたな。………すまん、良かれと思って見せたんだが、嫌なことを思い出させた」

織斑先生から事情を聞き、あの時の表情にも得心がいったので、頭を下げて謝っておく。

「いや、アルは俺が誘拐されたこと知らなかったんだから仕方ない

さ。……………今日呼んだのは、謝りたかったんだよ」

「謝るって……………何に對してだ？」

「アルのことを信じきれなかったことに對して。本当はあの時に誘拐された事を話そうかと思っただ。……………けど、話せなかった。アルが千冬姉や束さんを慕ってたのは知ってたし、ISにも興味があるって言ってたから、そのことを話したら嫌われるんじゃないか、軽蔑されないかと思って話せなかった。

あいつに殴られてからそのこと思い出して、今までずっと悩んでたんだ。アル、すまなかった」

そう言つて一夏も頭を下げ謝ってくる。一夏のこういったところは本当に律儀だ。

「はあ……………そうそうに見くびらないでもらいたいものだな。織斑先生から話を聞く限り、一夏は完全に被害者だ。俺は被害者を憎むような狭量な心を持った覚えはないぞ。言いたい事はそれだけか？」

「あつ、ああ」

「それならとつとと教室戻るぞ。次は移動教室だろ」

IS学園にも普通の授業はあるので、授業によっては移動教室もある。

「アル…許してくれるのか？」

「正直に話してくれたことに對しては感謝するが、友人だろうと隠し事の二つや二つはあるものだから、許すも許さないもないさ。まあ、納得できないって言うなら、その時のことを含めて今日のことを忘れなければそれでいい」

そう言いながら屋上の出入り口へ向かう。

「ああ、そうする」

少しだけ後ろを向いて一夏の顔を見ると、迷いのない表情でこちらに向かってきたのでよしとしておく。

あとはどうやってボーデヴィツヒがらみの問題を解決するか考えながら、俺は教室へと戻るのだった。

12 二人目の転校生と不協和音（後書き）

そんなわけでシャルルの引越しとラウラの登場、それに付随するいざいざで一話分出来ました。

前書きでも書いたとおり、しばらくの間、具体的には学年別トーナメントが終わるまでの間はラウラは嫌味キャラ全開になると思います。

今回はアニメ第5話付近のエピソードになると思います。

投稿が早くなるかもしれないし、遅くなるかもしれませんが、読者の方々は気長にお待ちいただけるとありがたいです。

13 立ち込める不穏な空気と三人目の男性IS操縦者の正体（前書き）

いつの間にかユニークが10000を突破してました。読者の皆様、ありがとうございます。

そのお礼というわけではないのですが、今回は文章量がいつもの倍近くあります。

そのため読みづらく感じる方もいるかもしれませんが、そこはご了承ください。

13 立ち込める不穏な空気と三人目の男性IS操縦者の正体

シャルルが転校してきてから5日、ボーデヴィツヒが転校してきて4日たった土曜日の午後。ボーデヴィツヒが転校してきた日から自主訓練自体には参加していたシャルルだが、実は今まで一度も俺達と模擬戦をしていなかったりする。

これはシャルルが3人目の男性IS操縦者である事に起因していて、シャルルが自主訓練している第3アリーナのアリーナ・ステージで同じ様に自主訓練しようとしている女子生徒がかなり多く、今日もかなりの人数が集まっているが、俺と一夏で事前にそういった女子生徒さんたちと交渉し、アリーナ・ステージに入る人数を模擬戦が出来る程度に減らしてもらい、見学だけの人は観客席に移るようになしてもらった。

そのお礼として俺と一夏は後日自作のデザートを振舞う事になったのだが、あまり関係ないので割愛する。

ついでにというと、ボーデヴィツヒが転校してきてすぐに一夏を引っ叩いた事はあつという間に学園中に広まり、それに関係して織斑先生がドイツで教官をやっていた事は学園の生徒達にも知れ渡る事になった。

「はじめて見た時から思った事だが、リヴァイヴのフルカスタム機が専用機っていうのも珍しいよな。実戦証明取れて安定してる分、操縦者としては気が楽だろ」

「あはは……まあね。でも、アルの機体だって最新鋭の第3世代機じゃないか。僕としてはそっちの方が羨ましいかな」

本当の最新鋭機は束さんの手がかかっている、新世代技術が使われている白式だろう。しかも単一仕様能力も覚醒済み。操縦者の技量を除いた機体性能だけでいえば確実に一夏がトップだ。

「そうか？……まあ、機体に関することは後でも話せる。今は模擬戦といこうぜ、シャルル」

「うん。負けないからね、アル」

お互いにそう言いながら、俺は剣と銃を展開し、シャルルも両手にマシンガンを展開して戦闘開始の合図を待つ。

「それじゃあ、試合開始！！」

鈴さんの合図とともに俺達は互いに後方に下がりながら銃撃を開始し、お互いの出方を見る。

シャルルの使っているマシンガンはカタログでも見たことがあり、1マガジンあたりの装弾数もそれなりに多いし、1発あたりの威力もそこそこ高いため、ノーマルのリヴアイヴにも初期装備として量子変換されているいい銃だ。

お互いに距離をとりながら高度を上げて、軌道を予測しながらマシンガンで牽制しあうが、それでもシャルルの射撃ペースは緩急がついていることを考えてもテンポが速く、あと少して1マガジン撃ちきってしまう可能性が高かった。

（まだISバトルに慣れてないのか？それとも何かの策か？どちら

にしてもそのペースだとそろそろ弾切れのはず！！)

そう考えている内にシャルルの銃撃が止み、予想どおりマガジンを撃ちきったようだった。

「しまった！！弾が！！」

「ペースが早すぎだ、シャルル！！エッジ、GO！！」

ここ1ヶ月の訓練で同時制御可能数は増えていないが、何とか最低限の集中でビットのコントロールが出来るようになってきたので、射撃を中断してスカイ・エッジ2基をウイング・バインダーからパージ、シャルルの反応が一瞬遅れるであろう真下と背後から突撃させる。

「……………なんてね」

高加速性能の推進器スラスターを搭載したスカイ・エッジをハイパーセンサーで確認したシャルルは、急上昇しつつ体勢を入れ替えながらマシンガンを格納、0.5秒でショットガン2丁を展開し、とつさにコマンドを送っても回避しきれない面と錯覚できるくらいの散弾が大量に発射される。

2基のソードビットはその散弾の嵐に巻き込まれ、あっという間に蜂の巣になって爆散した。

その一連の動きはシャルルがある技能を使用できることを如実に表していて、その事実には俺は驚くしかなかった。

「おいおい、マジかよ。……………まさか高速切替ラビット・スイッチを使えるとは思わなかったぞ。とんでもないセンスだな」

ラビット・スイッチ
高速切替が使える時点で、シャルルの先天的な器用さと状況判断能力はかなり高いことになる。

「僕も早速使わされるとは思わなかったよ。アルのビットがここまでするのは予想外だ」

「近接戦用だからな。加速性能は他の2機種のビットより高く設定されてるんだよ」

基本的にはヒット&アウェイで高速で相手にぶつけ、すぐさま相手の攻撃範囲から離脱させるのがソードビットの基本的な使い方なので、スピードが速ければそれだけ攻撃回数も上がり、ビットが撃墜される危険性も低くなる。

そのためにスカイ・エッジの推進器スラスターはサイズの割に加速性能がかなり高くなっている。

シャルルがラビット・スイッチを使うことが出来るとわかったただけまだマシンだが、それでも序盤でビット2基のロストは取得できた情報量の割に合っておらず、正直言ってかなり痛い。

「まあ、細かい説明はまた後でな。今度はこっちから行くぞ!!」

スターダスト スカイ・ブレード
銃を格納し、剣を両手持ちに変更しながらシャルルに突撃する。

「そうはさせないよ、アル!!」

シャルルは左手に持っていたショットガンを格納し、リロード済みのマシンガンを再度展開。こちらの軌道予測をしながらマシンガンで牽制しつつ、ショットガンの散弾で少しでもこちらにダメージを与えようとしてくる。

こちらとしてもタダでくらうつつもりもないので、回避行動を取りながら少しずつシャルルとの距離を詰めていき、イグニッションブースト瞬時加速のチャージも同時進行で進める。

当然ながら距離を詰めていけばショットガンの散弾が一番ダメージを与えられる中距離に入る事を意味している。

(ちっ!! 覚悟していた事とはいえ、中距離でのショットガンはやっぱきついな!!)

散弾がバラけすぎて威力の低下している遠距離や散弾のバラけていない近距離ならまだしも、弾丸であるショットシェルから散弾がバラけはじめた中距離になると、威力の減衰が最低限かつ散弾が面のように広がるショットガンは脅威だ。

多少高度を上げ下げしたとしてもバラけた散弾がヒットしてダメージが蓄積されてしまう。

(だが、ここをしのげば何とかなる!!)

軌道予測して発射されるマシンガンをかわし、本命であるショットガンの散弾を高度の調整でダメージを最小限に抑えながらイグニッションブースト瞬時加速を発動、シャルルとの距離を一気に詰める。

「近距離ならショットガンも役にたたねえよな、シャルル!!」
「たしかにね!!」

俺のその指摘を受け、シャルルは正直にショットガンを格納、近接戦用のショートブレードを展開して俺のスカイ・ブレードを受け流す。

そこからはある意味一方的な試合になった。こちらが攻めていたはずがシャルルの近接射撃から防戦になり、一端距離を開けようにもシャルルが突っ込んできて近接格闘戦になって攻撃リズムを完全にシャルルに掌握された。
ミラージュ・デ・デザート　ラピッド・スイッチ
砂漠の逃げ水と呼ばれる高速切替使用の戦闘技法だと気づいた時には既に遅く、いつ自分が逃げ水に捕らえられていたのか理解する暇もなくシャルルの攻撃をくらった。

その一撃でこちらのシールドエネルギーが0となり、シャルルとの初めての模擬戦は俺の黒星となった。

「くっそー、砂漠の逃げ水まで使えるなんてお前どれだけセンスあるんだよ。……それともあれか？実はシャルルが男性IS操縦者のファーストケースで、デュノア社が今まで秘匿してたのか？」
「あつ、あはは……」

曖昧な苦笑いを浮かべて答えの名言を避けるシャルル。

「でもアルの操縦技術もすごいと思うよ。操縦訓練を始めて3ヶ月くらいなのに基礎は一通り出来ているみたいだし、射撃武器の特性もしつかり把握してる。鍛えれば絶対に強くなれるよ」

「何事も基礎を疎かにしてたら上達は見込めないからな。それに元々ISに興味あったから、有名メーカーの武器だったらスペックは一通り覚えてある」

「へえ、そうなんだ。……今から一夏と戦ってくるけど、それが終わったらアルの事も色々聞かせてほしいな」

「ああ、いいぜ。それじゃあまた後でな」

「うん」

シャルルとは身边がらみの突っ込んだ話をした事はなかったの了承しておき、シャルルも俺の返事を聞いてから一夏の方へと向かっていく。

「お疲れ様でしたわ、アル。戦ってみた感想はいかがですか？」

その後姿を見ながら一夏とシャルルの模擬戦を観戦するために頭部のハイパーセンサーのみを残して展開を解除。戦闘後の疲れに身を任せて一息ついていると、セシリアが話しかけてくる。

「しばらくシャルルには勝てる気がしない。逃げ水使われたらその時点でこっちの負けがほぼ確定する」

「わたくしも話聞いたことはありませんが、実際に見てあの戦法の厄介さは痛感いたしましたわ」

セシリアも模擬戦を見ていたようで、あの戦法の厄介さを理解してくれたようだ。

「セシリアならどうやって対処する？」

「そうですね……それは後にしておきましょう。一夏さんの模擬戦が始まるようです」

「あ、そうだな」

ハイパーセンサーが戦闘態勢に入った一夏とシャルルを感知し、俺達は二人の模擬戦を見ることに集中する。

近接格闘型といえど遠距離兵装も搭載している俺のISと違って、スカイ・プレート本当に刀一本の白式を使っている一夏と基本的にガンナータイプのカスタムリヴァイヴを使うシャルルだと、中・遠距離ならシャルル、

近距離より内側に入る事ができれば一夏が有利になるだろう。

そんな予想をしていたが、試合内容としては俺との試合とは別の意味で一方的だった。

一夏も自分のISの武装が刀一本の近接格闘戦オンリーなことは理解していて、最近は射撃兵装への対策の一環として銃器に関する勉強している。

その勉強のかいもあってか、最初はシャルルの攻撃もそれなりに回避できていたのだが、距離が近づくにつれて銃弾が発射されてから回避までの時間は減っていくので被弾率が上がっていつてしまい、焦った一夏は瞬間加速で距離をつめようとしたが、シャルルの的確な軌道予測で逆に蜂の巣にされてしまっイグニッションブーストてシールドエネルギーが0になり、一夏の負けとなった。

二人が降りてきたところで俺も再度ISを展開して二人に近づいて声をかける。

「見事なまでに一方的にやられたな、一夏」

「ああ。最近は結構勉強してるつもりだったんだけど、まだ射撃武器に関する勉強不足かなあ……」

「戦ってて思ったこととしては、特性も把握してはいるようだけど、まだ知識として知っているだけの部分が多い感じがしたかな。……僕としては教えるのが上手いセシリアさんやアルがいるのに、一夏が射撃に関する訓練を殆どしてないことの方が意外なんだけど」

ここ数日の訓練を思い出しながら、暗に指導者が悪いのではないか

と言ったとも取れる発言をするシャルルだが、その言葉だけは頷けないので反論しておく。

「確かに一夏の射撃兵装に関する勉強が不足してるのは認めるが、今までのメンバーだとガンナーはセシリア一人だぞ？ブルー・テイアーズに搭載してるのは光学兵器オンリーだし、鈴さんの衝撃砲は空間圧兵器だから回避はまず無理。篝さんも資質としては近接格闘型だから打鉄使った方がいい。そうなると実弾兵装が実質的に俺のスターダストだけになる。

遠距離兵装がこの状態で回避訓練やろうとすると、光学兵器とマシンガンの回避だけで、一夏の回避方法が偏って戦闘時のバランスが崩れかねない。実際の対戦だと実弾兵装のほうが圧倒的に多いんだから、回避方法が偏っている状態は逆にまずいと思ったんだよ。その代わりに知識だけは先に与えておいて、機体操作の習熟を優先させてたんだが」

俺の説明をそこまで聞き、シャルルもそこまでは考えが及ばなかったようで、一言謝ってくる。

「あー……ごめん、アル。そこまでは考えてなかった」

「いや、シャルルの言う事ももっともだからな。教える側の人材不足で訓練内容一つ疎かにしてるって言われたらそのとおりだし、気にしないでくれ。これからはシャルルもいるから教える人間も増えた事だし、俺も心おきなく自分の訓練に精を出せる。一夏も実弾、光学、空間圧兵器の3つの回避訓練が出来るようになった。篝さんも気にかけるようにしてくれよ、シャルル」

「え？ちよつと待って、アル。僕、完全に教える側のカウントなの？」

「アルはもう教えてくれないのか？かなり覚えやすかったんだが」

俺のその言葉に驚きながら待ったをにかけてくるシャルルと、もう教えないとも取れる俺を残念そうな表情で見ている一夏。

「教えないってわけじゃないが、自分の訓練を少し優先させてもらうって事だ。それに、高速切替使える時点で俺達男子3人の中での技量はシャルルがトップだ。むしろ俺が教えてほしいことがあるくらいなんだが？」

俺の言葉をそこまで聞いて、シャルルは一つため息をついてからこう言った。

「わかったよ。ただ、僕も自分の訓練があるからそこまで教えてあげられないかもしれないからね。……………まずは一夏から始めようか」

そう言ってシャルルは自分のアサルトライフルを使用許諾して一夏に渡し、構え方を教えて一夏に実銃の感触を教えながら、俺に質問してくる。

「これからISについて教えていくのはいいんだけど、代わりにアールが知っている限りでいいから白式の事を教えてほしいんだけど」
「ああ。それは教えようと思ったから、今のうちに言うておく」

製作者が束さんであることを伏せて、自分が知っている限りの白式についての知識をシャルルに教える。シャルルは俺の話聞きながらも一夏へ気を向けていて、一夏の体勢がおかしくなるたびに注意しながら話を聞いている。

「とまあ、白式について俺が知ってるのはこれくらいだな」

「……………なんていうか、白式ってすごいピーキーなんだね」

なにせ初期装備で太刀一本、後付武装なし、拡張領域なし、ハイリ
スクハイリターンな単一仕様能力ありのトンデモ仕様だ。後付武装
と拡張領域については一夏が白式を倉持技研に機体を調べてもらっ
た直後に教えてもらった。

それを聞いてからというものの、似たような仕様で世界最強になっ
た織斑先生の（操縦技術的な意味での）人外っぷりがよくわかった。

「おい、シャルル。1マガジン撃ち終わったぞ」

「あ、うん。それじゃあ次は」

一夏からアサルトライフルを受け取ったシャルルが次の指示を出そ
うとした時、アリーナスステージ内にいた一般性との女子数名がざわ
ざわと騒ぎ出したのでその方向を見ると、ピットゲートに漆黒のI
Sが佇んでいた。

「おい」

オープンチャンネル
開放回線で俺達3人のいるあたりに声を飛ばしてくるボーデヴィッ
ヒ。目的はおそらく一夏だろう。

「……………なんだよ」

一夏も俺達3人の中で自分が目的だとわかっているのだろう。ボー
デヴィッヒの呼びかけに無愛想気味に答える。

「貴様も専用機持ちだそうだな。ならば話は早い。私と戦え」

いつそ清々しいくらいの高圧的態度。衆人環視の中で一夏を叩き潰
したいのだろう。

「イヤだ。理由がねえよ」

「貴様にはなくても私にはある。貴様がいなければ教官が大会二連覇の偉業をなしえただろうことは容易に想像できる。だから、私は貴様を　　貴様の存在を認めない」

たしかにポーデヴィツヒの言うとおり、白式の原型ともいえるピーキーな暮桜で決勝まで進んだ織斑先生の技量ならば優勝も十分可能だっただろう。

だが、ポーデヴィツヒは知らない。織斑先生にとって一夏は唯一の家族とっていい。その家族が誘拐、監禁されていて、自分に助けに行けるだけの力があるなら、織斑先生は間違いなく家族の救出に向かう。というか、あの人を知っている人物で一夏の救出に向かわず試合を優先したら、知人一同はその時点で織斑千冬ではない別の誰かだと断言するのは想像に難くない。

そして、それほどまでに一夏を深く愛しているからこそ情報を提供したドイツ軍への『借り』を返すために軍の教官となり、その結果ポーデヴィツヒは織斑先生に出会うことが出来たことに気づいていないのだろうか？

それに、一夏自身も姉の試合という大事な日に誘拐され、姉の経歴に傷をつけた自身の無力さを確実に恨んだだろう。

そういった個人の心情を理解しようとせず、自身の逆恨みだけを優先するポーデヴィツヒに対しては嫌悪と同時に呆れと哀れみを覚えしてしまう。

「また今度な」

「ふん。ならば　　戦わざるを得ないようにしてやる……」

その言葉と同時にボーデヴィツヒの機体の左肩にある大型レールカノンが火を噴く。

「一夏、危ない!！」

ゴガギンツ!!

シャルルが左腕に実体盾を展開してレールカノンの砲弾を上空に受け流し、左腕にアサルトライフル、右腕に高速展開したアサルトカノンをラウラに向ける。

「いくらアリーナが開いているとはいえ、いきなり戦闘を始めようとするなんて、ドイツの人は随分と沸点が低いんだね」

「どうせ月末には学年別トーナメントがあるんだ、それまで我慢しようとは思わないのか？ボーデヴィツヒ」

シャルルに遅れて展開したスターダストをボーデヴィツヒに向けながら、俺は一言ボーデヴィツヒに問いかける。

「私は織斑^{そいつ}一夏を叩きのめせばそれでいい。そこをどいてもらおう」

「イヤだね。お得意の力技で何とかしたらどうだ？」

お互いに軽口を叩きながら涼しげな顔で睨みあいを続けていると、状況に変化が訪れる。

『その生徒!!何をやっている!!学年とクラス、出席番号を言え!!』

観客席かアリーナ・ステージにいた誰かかは知らないが、アリーナ管理の担当教師を呼んできたのだろつ。スピーカーからアリーナ全体に声が響き渡る。

「……………ふん。今日は引こつ」

横やりが入って興がそがれたらしいボーデヴィツヒは、ISを待機状態に移行^{シフト}させてピットゲートに入っていく。おそらく怒り心頭で待っている担当教師も無視するだろつ。

「無事か？一夏」

「一夏、大丈夫？」

「あ、ああ。助かったよ」

いきなりいつもの表情に戻った俺達に驚きながら、多少どもりながら一夏が礼を言うてくる。

「こんな気分だと二人とも集中できないだろつし、今日はもう上がらない？どの道アリーナも閉館時間近いし」

「……………そうだな。あ、銃サンキユ。色々と参考になった」

「それなら良かった。アルはどうする？」

シャルルの提案で自主訓練を終わる事に賛成する一夏。俺も同意見だが、忘れないうちに今日のデータを反映させておきたいので整備室へ行く事を伝えておく。

「俺も上がるけど、整備室行って少し調整してくる。二人とも先にシャワー使っついていいからな」

「わかったよ」

「おう。そうさせてもらおう」

そう言っただけ俺達はアリーナゲートへ向かい、待っていた担当教師に事情の説明をしてからそれぞれ目的の場所へ移動する。

転校当初は一夏もシャルルと一緒に着替えようとしていたが、俺が一夏にシャルルの体に昔の事故の傷が残っている可能性を説明してからは軽く聞いてみる程度にしているようだ。

それから整備室で今日の戦闘結果を反映した微調整を施して寮の部屋に戻ったのだが、一夏のちょっとした行動が原因となって大事件が発生していた。

「ただいまー、って一夏。部屋の入り口に突っ立ってどうしたんだ？」

微調整が終わって寮の部屋に戻ると、一夏がシャワールームの扉の前で呆然としていた。

「なあ、アル。男に胸ってないよな？」

「そりゃバカみたいに太ってるか、何かしらの病気でない限りあるわけないだろ。いきなりどうした」

「シャルルに、胸があった」

「はあ！？……一回深呼吸してから、座って待ってる。シャルルはシャワールームか？」

「あ、ああ……」

呆然としたまま答える一夏を見ながらバッグをその場に置き、シャルムルームにいるらしいシャルルに一声かける。

「シャルル、聞こえるか？一夏が見たことについて説明してほしいんだが、大丈夫か？」

「うん……ちよつと待ってて。すぐに着替えるから」

その声は先程と比べて覇気がなく、気落ちしているのが丸分かりだった。

俺も制服姿のままシャルルが出てくるのを待っていると、シャルムルームの扉が開いてシャルルが出てくる。

服自体はいつもどおりのスポーツジャージだが、その手にはコルセツトらしき物を持っていて、その戒めから解き放たれたシャルルはどこからどう見ても女子だった。

お互いにベッドに座ったまま何を話せばいいのかわからずにいると一夏が唐突にこう言った。

「あー……その……お茶でも飲むか？」

「うん……貰おうかな？」

「なら俺が淹れるよ。今のお前に任して火傷でもされたら面倒だ」

「あつ、ああ…サンキュ、アル」

きこちないながらもそう言いながら3人分の緑茶を淹れておく。

「お茶、デスクの上に置いておくぞ。気が動転してると些細な事でミスするから、落ち着いてから飲もうぜ」

湯飲みに注いだ3人分の緑茶をデスクの上においてから二人にそう言っておく。

「うん。ありがと、アル」

「そう……だな」

「さてと、本名を知らないから今までどおりシャルルで通すけど、まずは一夏。何がどうなってシャルルの秘密を知ったんだ？」

何が原因でこうなったのかを聞くために一夏に質問する。

「あつ、ああ……昨日シャワー最後に使ったの俺だっただろ？ちようどボディソープ切れたこと思い出して、換えのボディソープをシャルルに渡そうとしたら、ちようどシャルルがシャワールームから出てきたんだ」

「つまり、そこでシャルルの裸を見て、シャルルが女だとわかったわけか」

「ああ。そうだ」

よくもまあそこまでタイミングよく行動できるものだ。

「なるほどな。次にシャルル、そっちの事情を説明してもらえるか？」

「うん、ちゃんと説明するよ」

そう言ってシャルルは立ち上がって自分の分の緑茶を一口飲む。それにつられるように一夏も一口飲んで喉を潤すと、シャルルに向かってこう聞いた。

「なんで、男のフリなんかしていたんだ？」

「実家からそうしろって言われて……」

「お前の実家っていうと……デュノア社の」

「そう。僕の父がその社長。その人から直接の命令でね」

シャルルの言葉をそこまで聞き、デュノア社社長の目的が理解できた。

「目的は……デュノア社単独で第3世代機を開発するため、セシリアや鈴をはじめとした学園内の第3世代機のデータ強奪と、特異ケースである俺達二人のISの詳細データの入手……ってところか？」

「あはは……アルって本当に頭がきれるよね。ちょっと話しただけでたどり着いてほしくない正解にたどり着くんだから。もつとも、僕が言われたのはアルと一夏のデータだけだから、その答えは深読みのみすぎだけど」

「そうか。半分はあってたか」

微苦笑を浮かべてそう言ってくるシャルルと事実の確認のようにつき返す俺を見ながら、一夏は激昂しながら立ち上がってこう言った。

「ちょっと待ってくれ！！命令って親からだろっ！！なんでそんな」

「僕はね、一夏。愛人の子供なんだよ。……多分、アルは最初から気づいてただろうけどね」

曇った表情でそう告げるシャルルに、一夏は絶句するしかなかった。

「なっ！！………それ………本当か？………アル………」

『愛人の子供』という事に驚き、続けてシャルルの言ったことに驚きながら俺に問いかけてくる一夏。

「そうじゃないかとは思っていたのは事実だが、他人が口に出していい事じゃないだろ。それに、ドライな言い方になるが、シャルルが本妻の子供だろうと愛人の子供だろうと俺達の関係にとってはどっちでもいい事だから言わなかった」

それからシャルルの母親が亡くなり、デュノア社に引き取られテストパイロットをするようになった事、本邸に呼ばれ、本妻の人から殴られた事を喋るシャルル。

本人からすれば言いたくないであろう話を健気なまでに話してくれるその姿に、一夏は拳を握りしめて怒りを押さえ込む。

「それから少し経って、デュノア社は経営危機に陥つたの」

「え？だってデュノア社って量産ISのシェア世界第3位だろ？」

売り上げ的な意味では問題ないのではないかと一夏は言いたいようだ。

「売り上げだけなら問題ないんだろうが、結局のところラファール・リヴァイヴは旧世代の第2世代機でしかない。しかもISの開発はかなりの金がかかる。世界中がこぞって第3世代機の開発に躍りになってるところで、フランスはやっと第2世代機の開発が出来た状態だ。世界的に見れば『フランスはIS開発においては後進国』だと思われてるんだよ。」

しかもその開発力が低いことが原因となってEU内での統合防衛計画、『イグニッション・プラン』からもフランスは除名されている。資本力で劣るフランスが第3世代機の本格実用化を急いでいる

のもEUI内でのアドバンテージを取るためってのがかなり強い。セシリアも少し説明してただろ？」

「あっ、ああ……」

俺の説明をそこまで聞き、一夏は自主練中に政治的な話になった時にセシリアが話していた事を思い出しながら返事をする。

「アルが説明してくれた事は本当だよ。デュノア社でも第3世代機の開発をしていたんだけど、遅れに遅れた第2世代最後発機体だからね。データも時間も不足していて形にならなかったんだよ。当然政府からも予算を大幅にカットされて、次の国内トリアルで選ばれなかったら国からの援助は全面カットの上に、ISの開発資格の剥奪って話になったんだ」

「でも、それがどう男装に繋がるんだ？」

「簡単だよ。注目を浴びるための広告塔と、さっきアルが言ったとおりの目的のためだよ」

「えっと……俺とアルの機体データか？」

「そう。僕はあの人に白式とスカイ・ブレードのデータを盗んでこいって言われてるんだよ。もつとも、もう失敗したも同然だから本国に呼び戻されるだろうね。デュノア社は、まあ……潰れるか他企業の傘下に入るか、どのみち今までのようには行かないだろうけど、僕としてはどうでもいいかな？」

そこまで言ったシャルルは逆にすっきりした表情となり、続けてこう言った。

「ああ、なんだか話したら楽になったよ。聞いてくれてありがとう。それと、今まで二人にはウソをつけていてゴメン」

深々と頭を下げて謝ってくるシャルル。一夏も親であるはずのデュ

ノア社社長のやりたい放題に頭に血が上り、シャルルが怯えるのもお構いなしに自分の言いたいことを言い、学園の特記事項まで使ってシャルルを学園にいるように説得している。

俺も一夏の意見とはほぼ同じだが、不自然な引つ掛かりを感じている部分もある。大企業の社長ともあるう人物が、諜報活動の教育をロクに施していない素人同然の子供にそこまで重要な案件を任せるだろうか？……普通ならしないだろう。なら、シャルルを学園に入学させたのは何か別の目的があることになる。

「そつえばアル、さつきから黙ってたけど、どうかしたの？」

「なあ、シャルル。今思ったことなんだが、デュノア社の社長には何か別の目的や思惑があるんじゃないか？」

「え？それって、どういう」

コンコン

「一夏さん、アル、デュノアさんもいらっしやいます？夕食をまだ取られていないようですけど、体の具合でも悪いのですか？」

「！？」

シャルルの質問を遮るように部屋の扉がノックされ、その後セシリアが声をかけてくる。セシリアが部屋に入ってきてシャルルの事がバレると、確実に面倒な事になる。

「身を隠すためにシャルルは布団の中入ってる。ボディラインが見えなければ性別もバレることはない。コルセットも布団の中入れとけ」

「おつ、俺はどうすればいい!?」
「なるべく普段どおりにしてる。急げ!」

焦り気味の小声で矢継ぎ早に二人に指示を出すと、シャルルは慌てて布団に潜り込んで布団をかぶる。

「夏もなるべく普段どおりの行動をしよう、湯飲みを手にする。

「入りますわよ?」

「ああ。どうぞ」

「失礼いたしますわ。……あら、デュノアさんは既に寝ているようです、何かあったのですか?」

ドアの開く音と共にセシリアが部屋に入ってきて、部屋を見回してシャルルが寝込んでいる事を見つけ、俺達に事情を聞いてくる。

「ああ。いきなり体調悪いって言い出したから、シャルルの夕食とかどうするか聞いてたんだよ。今からシャルルの分の夕食頼むのも兼ねて、食堂行こうとしてたんだよ」

時間を確認すると7時近くになっていて、オーダーストップまでの時間まで余り時間がなかった。

「それなら仕方ありませんわね。デュノアさん、お大事に」
「ごほつ、ごほつ、うん……ありがとう」

少しわざとらしい調子の悪い声でそういうシャルルの声を聞きながら、セシリアは俺の腕を取りながらこう言った。

「では、お二人も参りましょう」

「ああ。シャルル、少し待っていてくれ」
「ゆっくりしてるよ、シャルル」

そう言いながら、俺達は部屋を出て食堂へ向かう。その途中に尊さんと会い、俺とセシリアが腕を組んでるのに対抗するように一夏とも腕を組み、4人で食堂に行つて夕食を取る。

久々に4人で夕食を食べ終わった後、帰りがけに一夏にシャルルの分の夕食を頼むように言っておき、一足先に自室に戻る。そのうち一夏もシャルルの分の夕食を持って戻ってくるだろう。

「あ。お帰り、アル」

「ああ。夕食は一夏に任せてあるから、もう少し待っていてくれ」

「うん。それよりも、さっき言つた事の原因を聞かせてくれない？」

「ん？デュノア社の社長に別の目的や思惑があるんじゃないかと思つた理由か？」

「そう。僕からすれば、言われたこと以外に何か目的があるとは思えないんだ」

「……………言つてもいいが、全部想像しただけだから、当たつてるとは限らないし、途中で失礼なことを言うかもしれないからな」

「わかつたよ」

一言注意しておき、シャルルが了承したのを聞いて俺は自分の考えを話し始める。

「シャルルがデュノアの社長に言われたとおり、男装して表面上は男子生徒になつてIS学園に編入すれば、たしかに特異ケースであ

る俺達に接触できる可能性は高くなる。そこはシャルルの親父さんの言うとおりだと思う。

ただ、デュノア社として欲しているのは俺達二人とのコネクションじゃなくて、もっと即物的なそれぞれのISに関するデータなんだよな？」

そこで一端説明を区切り、シャルルに確認する。

「うん。父はふたりのISのデータを盗んでこいって言うてたから、間違いないよ」

「引つかかるのはそこなんだよ。シャルルってデュノア社の非公式テストパイロットの経験があるだけで、接触対象への効率的な話の聞き方とか、そういった諜報活動に関する技能って持ってないよな？」

「確かにそういった技能は教わってないけど、それがどうしたの？」
「もしも本当にデュノア社がシャルルを使ってデータの強奪をしようと思うなら、事前にそういった技能を持った人材からその手の方法を教わってないと逆におかしいと思うぞ？」

素人を学園に送り込めばたしかに織斑先生の目をごまかせる可能性もあるかもしれないが、それだとデータの強奪はまず成功しないかといって本職の人物を学園に送り込んで俺達と接触させようとしても、事前に織斑先生にばれる可能性が高い。それなら最低限の諜報技能がある人物を送るのがデータ強奪の成功率が一番高いと俺は思う。

だが、実際に学園に送られたのは諜報活動においてはズブの素人のシャルルだ。だから、俺はデュノアの社長に何か別の理由や思惑があるんじゃないかと思ったんだよ。……俺の考えは以上だ」

そこまで説明すると、シャルルは驚きの表情を浮かべながら一つ質問してきた。

「それなら……僕は、何のためにここに送り込まれたの？」

「ここまで言っておいて突き放すような言い方になるが、それは俺にもわからんし、考えようにも情報が不足してる。少なくとも学園在学中の3年間は時間があるし、干渉は最低限になるだろう。その間に直接デュノア社の社長に理由を聞き出すしかないだろうな」

「そう……だね……ごめん。……わがままを言うけど、少しだけ一人にしてくれる？」

「ああ。一夏が来たらどうする？」

「入るように言っておいて。お腹もすいたしね」

そうやって無理矢理笑顔をつくるシャルル。

「すまん。俺もしばらく頭冷やしてくる」

一言そう言ってから扉を開けると、ちょうど一夏がシャルルの分の夕食を持って戻ってきたところだった。

「あれ？アル、どこか行くのか？」

「ああ、購買行ってくる。しばらくしたら戻る」

そう言いながら一夏の脇を抜けて外に出て、寮に設置されている購買方面へ向かい、適当な飲み物を買ってから、寮の裏のちよつとした集会議場で頭を冷やす。

もつとも、飲み物を飲みながら頭を冷やそうと思ってもあれこれ余計に考えてしまい、本当に頭が冷えて部屋に戻った頃には二人とも寝ていて、俺はシャワーを浴びてから自分のベッドで眠りこける事にするのだった。

13 立ち込める不穏な空気と三人目の男性IS操縦者の正体（後書き）

そんなわけで今回はシャルルの男装バレと説明まででした。

そしてアルはその理解力の高さゆえ自爆。オリキャラも人間なので失敗する事もあります。

今回はお話の引きどころがわからなかったこともあり、文章量としては約27kbといつもの量からすればほぼ倍、二話分近くなっています。

今回はラウラとの私闘になります。誰が戦うかは楽しみにしてください。

14 事実（前書き）

最新話です。今回も文章量はいつもと比べて少し多め。そして独自展開色が強いです。

14 事実

シャルルの男装が俺達にバレ、俺とシャルルの間に気まずい雰囲気
が流れはじめた平日の月曜日。習慣というのは恐ろしい物で、今日
も今日とてセシリアに料理を教えるのも兼ねた弁当作りのために6
時には目が覚めた。

教え始めの頃にはもう少し早く起きたのだが、最近はセシリアも料
理に慣れ始めたので、この時間に起きても7時には余裕で弁当を作
り終えることが出来る。

「おはようございます。アル」

「ああ、おはよう。セシリア」

お互いに挨拶をしてキッチンに入り、何を作るかを話してから調理
を開始したのだが、その最中にセシリアが話しかけてきた。

「そういえば一昨日、寮の裏の集会場で何かしていたようでしたが、
どうしましたの？」

部屋の位置によっては集会場が見えるので、そこから話が広まった
のだろう。

「ああ、シャルルとちょっとトラブってな。頭冷やしてたんだよ」

シャルルの男装バレもトラブルの一つだろう。セシリアに本当のこ
とを話せないのは心苦しいが、ウソは言っていない。それに、この
手の秘密は知っている人数が少なければ少ないほどバレる可能性も
減る。

「デユノアさんには謝りましたの？」

「部屋戻った時には一夏もシャルルも寝てたし、昨日一日はずっと
気まずかったから謝れていない」

「早く謝った方がよいのではなくて？時間が経つとますます謝りづ
らくなりますわよ？」

「……………わかつてるよ。弁当作り終わったら謝るさ」

お互いに手を動かしながらそう言い、調理の方法などを教えていき、
食堂の開く7時には後片付けも含めて弁当を作り終えたので、制服
に着替えるためにもいったん部屋に戻る。

「おっ、おはようさん。アル」

「おはよう、アル。お弁当作ってたの？」

「あっ……………ああ。おはよう、一夏、シャルル」

既に制服に着替えていた一夏と、ちょうど制服に着替え終わったら
しいシャルルがいつもどおりの口調で話しかけてくることに驚きな
がら、俺はとつとと謝る事にする。

「シャルル、一昨日はすまなかった。言葉だけで申し訳ないんだが、
許してくれ」

「そんなに気にしなくてもいいよ。元々僕から聞き始めて、勝手に
傷ついて八つ当たりしたようなものなんだし」

「それでも傷つけた原因は俺だ、責任は俺にあるだろ。不用意にあ
んなこと言わなければ、自分の身の上を話して傷ついていたシャル
ルに追い討ちをかけるようなこともなかった」

俺がそこまで言うと、シャルルはため息を一つ吐いてからこう言った。

「昨日一夏から聞いたとおり、アルってそういうところは頑固だね。……許してもいいけど、お詫び代わりに一つほしい物があるんだけど」

「何がほしいんだ？すぐに用意できる物なら買ってくるが」

どうやら昨日、事前の約束どおり二人で駅前に出かけた時に一夏から俺の事を聞いたらしいシャルルは、俺が問いかけると非常に綺麗な笑顔を浮かべながらこう言った。

「お金はかからないよ。今アルが作ってきたお弁当がほしただけだから」

かなり意外な物を要求された。……まあ、弁当一つで機嫌を直してくれるなら安いものだろう。

「……了解。それだけでいいか？」

シャルルに今作ったばかりの弁当を渡し、他になにかないか聞いてみる。

「うん。初めて見た時から美味しそうだと思ってたんだよね」

「……そいつは何よりだが、味付けは俺好みにしてあるからな。もし口に合わなかったら残してくれてかまわないぞ」

「大丈夫。今までアルのお弁当に入ってたメニユーで、僕が食べられない物ってないし」

「まあ、シャルルがそう言ってるんだからいいんじゃないか？アルはそういうところ気にしすぎだと思うぞ？昨日だって俺とシャルル

は出かけたのに、アルは結局行かなかったじゃないか」

そんな風に言いながらはしゃぐシャルルを見ながら、今まで黙っていた一夏が忠告してくる。

たしかに昨日二人が出かける時にも俺は気まずくて一緒に外出するのを辞退。一日中部屋であれこれ考えていた。

「そういう性分なんだ、仕方ないだろう。………まあいいや。俺も着替えたら追いつくから、二人は先に食堂行っててくれ」

「わかった。注文はどうする？」

「今日は…和食セットで頼む」

「わかった。行こうぜ、シャルル」

「うん。待つてるからね、アル」

そう言って二人は部屋を出て行き、俺も制服に着替える。

そのあとは食堂に向かって一夏に頼んでおいた朝食を取り、普通に登校したのだが、教室が近くなると、廊下まで聞こえる大声に俺達3人は目をしばたかせる。

「そ、そんなはずありませんわ！！デタラメです！！」

「う、ウソついてないでしょうね！！」

声の主はセシリアと鈴さんのようで、何かを聞いたリアクションのようだ。しかも二人のその反応は全く逆のように思えた。

「今の叫び声、鈴とセシリアさんだよな？何があつたんだ？」

「さあ？」

「知らん」

一夏の質問に端的に答えながら、俺達は教室へ向かう。

シャルルは対外的には男子生徒なので、今までと同じく男装をして俺達と一緒に登校している。

一夏は昨日、俺は今朝聞いたのだが、シャルルの男装はそこそ手が込んでいて、普段は俺達に男装をバラした時のコルセットをつけて体型を男に近づけ、IS実習の時にはデュノア社が特別に作った体型を男に近づける特製ISスーツを着ているとのことだ。

その話を聞いて、俺はデュノア社は金の使い道を盛大に間違えていると思ってしまうた。

いくら広告塔が欲しいといっても限度がある。俺達二人のことが発覚してからデュノア社が製作したであろうこの無駄に凝った男性風（より正確にいうなら男装用）ISスーツにかかった時間と開発費を第3世代機開発に回せば、

少しはマシな機体を作ることが出来るのではないかと誰に言うてもなく呟いた瞬間、シャルルは少しだけ呆気にとられた表情をすると、突然乾いた笑い声をあげはじめた。

しばらく抑揚のない笑い声をあげるシャルルに俺達が慄おのいていると、突然シャルルはがつくりとうなだれてぶつぶつと俺達に聞こえない小声で何かをつぶやきだした。

その時ちらりと見えたシャルルの目は完全にすわっていて非常に怖かったのだが、意を決して俺達が声をかけるといつもどおりの柔和な目をしていたので、おそらく見間違えのだろう。………そういうことにしておく。

俺達が教室に着くと、中央にクラスの女子の半分ほどが集まってい

て、何かを話していた。

「おはよう。みんなが集まってどうしたんだ？」

「何の話してるの？」

「俺達にも関係あるのか？」

それぞれの席についてバッグを置き、俺達も話しに加わろうとしたのだが、返ってきたのは意外なリアクションだった。

「……きゃあああつ！」「……」

突然話しかけられて驚いたのか、慌てて自分の席に戻っていった。

「じゃあ、あたし自分のクラスに戻るから」

「そ、そうですね！わたくしも自分の席につきませんと……」

鈴さんとセシリアもホームルームまではまだ時間があるにも拘らず自分のクラスと席に戻っていく。

「……なんなんだ？」

「さあ……？」

「知らん。……？」

一夏とシャルルが不思議がっているのと同じく、俺も不可解なものを感じ、首をかしげながら一夏やシャルルと話をする。

(ん？…視線？…誰だ？)

二人と話をしてから席につくと同時になんととも言えない視線が真後ろから俺に向けられ、視線の主を確認するために後ろを向いてみる

が、ホームルーム直前という事もあって全員席についているため、誰からの視線かは分からなかった。

今朝の不可解な視線の事は一端置いておき、いつもどおり授業を受けて、今は2時限目終了後の休み時間。IS学園は元々女性が通う事が前提となつているため男性用のトイレが設置されている場所は少なく、

生徒である俺と一夏が使えるトイレは3ヶ所しかない上に、何処も教室からはかなりの距離があるため、授業終了のチャイムと同時に中距離走をすることになる。

行きも帰りも全力疾走しなければ次の授業に間に合わないのだが、先日廊下を爆走していた最中に教頭先生から、『廊下を走るな』というお叱りを受けてしまった。

この全力中距離走はそこそこ辛いので、俺も一夏も思い立ったら全力疾走するしかなかったりする。

「なぜこんなところで教師など!!」

「やれやれ……」

そんな感じで今日は珍しく一夏と一緒に全力ダッシュに挑んでいると、通り道である曲がり角の先から聞き覚えのある声があった。一人はボーデヴィツヒ、一人は織斑先生だ。

「!!?」

少々厄介くさい組み合わせが通り道にすることもあり、俺達はその場で足を止めざるをえなかった。ここで空気を読まずに出て行った場合、一夏はさらに恨まれるだろうし、俺も変な因縁をつけられかねない。

「何度も言わせるな。私には私の役目がある。それだけだ」

「このような極東の地で何の役目があるというのですか!!」

声を荒げながら織斑先生に不満や思いの丈をぶちまけるボーデヴィツヒ。

「お願いです、教官。我がドイツで再びご指導を。ここではあなたの能力は半分も生かされません」

「ほう」

「大体、この学園の生徒など教官が教えるにたる人間ではありませんせん」

「なぜだ？」

「意識が甘く、危機感に疎く、ISをファッションかなにかと勘違いしている。そのような程度の低い者たちに教官が時間を割かれるなど」

言葉として認識するのはそこまでが限界だった。曲がり角の先にいるボーデヴィツヒハカ女は本当に軍の特殊部隊の隊長なのだろうか。他人の表面的なことにはしか目を向けず、自分がどう思われているかすら理解しようとしていない。さぞや部下をはじめとした部隊内から疎まれていた隊長殿だろう。

たしかに学園生徒のごく表面的な部分だけを見れば、ボーデヴィツヒのいうとおりの解釈することもできるだろうが、それを絶対の真

実のように言っている時点で我慢ならなかった。

人間は四六時中緊張感を維持し続けることなどできず、どこかで息抜きをする必要がある。俺や一夏を含めたIS学園の生徒達にとつて、普段の学生らしい姿というのは息抜きの一つなのではないかと思っっている。

最近の実習訓練も進んできたので、実際にアサルトライフルなどの銃器や近接用のブレードを使用した射撃や近接格闘訓練が始まったのだが、当然扱っているモノが物だけに、皆真剣な表情で訓練に取り組んでいるので、自分がどういった物を扱っているのかは十分に理解しているだろう。

それに、IS学園に入学した時点で卒業後の進路は当然ながらIS関係の職に限定される。ほとんどの人は企業のテストパイロットなどになるのだろうが、それでも命の危険というのは最低限付きまとうものだし、中には国家代表やそれに近いポストにつく人もいるだろう。

そうなった人たちは日常生活の中に操縦訓練などが組み込まれ、街に遊びに行くといった年齢相応のことすらそう簡単には出来なくなる。

俺や一夏も学園を卒業したら確実に検査と実験の繰り返しの日々になるのは目に見えているため、今のうちに学生らしい行事などを楽しんでおこうと思っっている。

将来的にそうなる可能性が高いのであれば、力を抜けるところは抜いておき、いざという時にきっちり動けるように英気を養っておくべきだろう。

普通のオーバーリアクション気味な姿は、彼女達なりの将来的な不安などに対する息抜きの方法の一つなのだと言は解釈している。

そんな考えを持っている俺からすれば、ボーデヴィツヒの発言は学園にいる生徒全体に対する侮辱であり到底許容できるものではなかった。

もつとも、ボーデヴィツヒに怒りを感じながら思考に没頭していた代償はすぐに払うことになった。

ゴッー！！

「ぐへあ！？」

突然頭頂部に衝撃が襲い掛かり、その痛さに頭をおさえつつずくまる。

「うつ、おお……っ」

「目が覚めたか？馬鹿者」

うずくまった状態で視線を上に向けると織斑先生が出席簿を縦に持っていて、出席簿アタック（ピンポイントだがその分高威力の縦バージョン）で思考の海から強制サルベージされたようだ。

「つつ〜。織斑先生、いくらなんでも縦はないでしょう、縦は」「なんだ、角のほうがよかったか？」

立ち上がりながら抗議すると、からかいのまなざしを向けてながら
そう言ってくる織斑先生。「冗談とはいえ勘弁してほしいものだ。

「いえ、ありがとうございました」

「ふん、目が覚めたならとっとと走れ。織斑にも言ったが、このま
まじゃお前は月末のトーナメントで初戦敗退だぞ。勤勉さを忘れる
な」

よく見てみると一夏の姿は既になく、思考に没頭したままの俺を放
置して教室に向かったようだ。……… まあ次の授業は織斑先生の担
当ゆえ仕方ないだろう。

「わかっていますよ。それでは、教室に戻ります」

そのあと織斑先生から一言廊下を走るならバレないように走れと言
われながら、俺は教室へと急ぐのだった。

それから時間は流れて、放課後の第3アリーナ。昼食の時に鈴さん
と篤さんとセシリアの3人から放課後の自主訓練は個人訓練にした
いという申し出があったので俺達3人はそれを了承。

技量の低い俺達はいつもどおりの訓練にしようとしたのだが、放課後
直前になって一夏とシャルルが少し遅れる形になってしまったので、
一人で一足先にアリーナまで来ると、鈴さんとセシリアもちょうど
アリーナステージにやってきた。

「あれ？鈴さんにセシリア。来るの早いね」

「アルバートこそ、来るの早すぎじゃない？」

「あつ、アルこそ早いではありませんか」

「ああ、確かにちょっと早いかもしれないけど、ビットコントロールの練習するなら少し早く来るくらいがちょうどいいんだよ」

人がいなければその分スペースが広く使えるので、初心者のビットコントロールにはもってこいだったりする。

「たつ、確かにそうですね。ビットのコントロールに慣れないうちは動きが荒くなりがちですし……」

「へえ、そうなんだ」

セシリアの言葉に相槌を打つ鈴さん。いつも自主訓練だと部活動などもあつてアリーナに来る時間がバラバラな二人が率先してアリーナに来ている時点で、目的は一つしかないだろう。

「二人とも早く来たつてことは、学年別トーナメントに向けての特訓？」

「そうよ。ちょっとばつか優勝してみたくなったから」

「わつ、わたくしとしては是が非でも優勝しなければいけませんから」

今の技量で何処まで勝ち進めるかを知りたい俺とは違って、二人が目指しているのは優勝のみのようにだ。

「それよりセシリア。ちょうどいい機会だし、この前の実習のことも含めてどつちが上かはつきりさせとくつても悪くないと思わない？」

「あら、鈴さん。珍しく意見が一致しましたわね。どちらの方がより強く優雅であるか、この場ではつきりとさせましょうではありま

せんか」

あからさまな挑発をする鈴さんと、それを真正面から受けるセシリア。そんな二人を見ながら俺はスカイ・ブレードを戦闘形態へ移行シフトさせながら、ビットコントロールの練習をするためにバーチャルターゲットをいくつか展開させようとする。

警告、砲弾接近。回避を推奨

「危ねっ!!」

だが、訓練中の流れ弾などが接近した際の警告システムが起動したため、緊急回避して砲弾が飛んできた方向を見ると、いつか見た漆黒のISがたたずんでいた。

戦闘待機状態のISを感知。機体名『シユヴァルツェア・レーゲン』、登録操縦者

「ラウラ・ボーデヴィツヒ……」

近くにいたセシリアと鈴さんも砲撃に巻き込まれかけたのだろう。回避方向が偶然一致していた俺達3人は横一直線に並んでいた。

ボーデヴィツヒのいる方向を見ながら、二人は非難の眼差しを砲撃手であるボーデヴィツヒに向けるが、それが通用したらもっとマシな人格をしているだろう。

「どついつもり？いきなりぶつ放すなんていい度胸してるじゃない」

連結状態の双天牙月を肩に預けながら開放回線オーブンチャンネルでボーデヴィツヒに話しかける鈴さんだが、ボーデヴィツヒはその言葉を無視してこう言った。

「中国の『甲龍』にイギリスの『ブルー・ティアーズ』と『スカイ・ブレード』か。……ふん、データで見た時の方がまだ強そうではあったな」

いきなりの挑発的な物言いに鈴さんとセシリアが口元を引きつらせながら、少しでも怒りを言葉に変えて言い返す。

「何？やるの？わざわざドイツくんだからやってきてボコられたいなんて大したマゾっぶりね。それとも、ジャガイモ農場じゃそういうのが流行ってるの？」

「あらあら鈴さん？こちらの方はどうも共通言語をお持ちでないようですから、あまりいじめるのはかわいそうですわよ」

そう言う二人の言葉など、どこふく風とばかりに華麗なまでのスル―をしながら、ボーデヴィツヒは言い返す。

「はっ……。ふたりがかりで量産機に負ける程度の力量しか持たぬ者が専用機持ちとはな。数くらいしか能のない国と、古いだけが取り柄の国は余程人材不足と見える」

そこまで聞いて二人は完全に頭にきたらしく、今にも突撃しそうなほどで、俺はそれを制するために二人に秘匿通信プライベートチャンネルを繋いでこう言っ

た。

『二人ともストップ。今から俺が挑発するから、その間にある程度冷静になって』

俺は簡潔にそれだけ言ってから秘匿通信を切断、フライベートチャンネル開放回線に切り替えて今まで思ったことを口にする。

「人材不足ならそっちの方がよっぽだと思うが？何故自分が愛しの教官殿と出会ったのが出来たのかすら理解していないような小娘に専用機を与え、さらには一部隊の隊長をやらせてるって時点で相当のものだろう」

「なんだと？」

今まで冷静だったボーデヴィツヒの口元がほんの少しだけ引きつり、目じりに力がこもる。

「違うのか？第二回モンド・グロツソ決勝戦当日、優勝が確実視されていた初代ブリュンヒルデ・織斑千冬の弟、織斑一夏が誘拐・監禁されてしまい、独自ルートでその情報を得ていたドイツ軍がそれを教え、ブリュンヒルデは弟君の救出に成功。その礼を返すためにブリュンヒルデはドイツ軍で教官を勤め、お前と出会った。違うか？」

「……教官から聞き出したか。そのとおりだ。あの男さえいなければ教官は大会二連覇の偉業をなした。だから私は、あの男の存在を認めない」

「だが、ブリュンヒルデが大会二連覇を達成していた場合、お前はあの人と出会ったことすらなかった」

「なっ！！」

俺の指摘に驚愕の表情を浮かべるボーデヴィツヒ。言われるまで気づいてすらいなかったらしい。

「どうした？驚いた表情なんか浮かべて。まさか気づいていなかったのか？千冬さんがドイツに渡ったのは一夏を救出した時の情報提供の礼をするために過ぎず、仮にあの人が一夏を見捨てて試合を優先していた場合、第二回モンド・グロツソ終了後にドイツに行く理由がない。つまりお前が千冬さんと出会う可能性はほぼゼロになる。千冬さんに出会ってISの操縦を教えてもらった時点で、お前は学園編入初日に一夏にこういふべきだったんだよ。『あなたが昔誘拐されたおかげで、私は教官殿と出会うことが出来ました。ありがとうございます』ってな。一夏を認めない？冗談も大概にしろ。お前がそうして専用機を持っている時点で、一夏に対してバカみたいにでかい借りがあるんだよ」

「きつ、さま……殺す！！この場でむごたらしく殺してやる！！」「殺す？冗談が得意だな。俺を傷つけたら、世界に二人しかない男性IS操縦者をないがしろにしたって事で、故郷は非難が相次ぐだろうし、実行犯であるお前は確実に社会的な抹殺をされるぜ？」「減らず口を！！」

完全にキレたボーデヴィツヒが突撃してくるので、俺は後ろに下がりにながら高度を上昇、一目散に逃げる。

鈴さんもセシリアも普段の俺らしからぬ言動に驚き、きよとんとした表情で固まってしまっているの、二人に秘匿通信を再度繋げる。プライベートチャンネル

『鈴さん、セシリア。俺一人だと負けるから、目を覚まして手伝って！！』

俺とボーデヴィツヒの實力はかなりの開きがあるのは目に見えてい

るため、同じ国家代表候補生の鈴さんとセシリアの協力がなければ本当にボーデヴィツヒに殺されかねない。

『わっ、わかってるっの!!』

『はっ…はいっ!!了解ですわ!!』

二人とも意識がはっきりしたらしく、少々慌てながらも高度を上げてボーデヴィツヒに攻撃を仕掛けようとする。

当然俺も煽るだけ煽って逃げるようなマネはせず、飛行姿勢のまま腰部のミサイルビットを起動させて2発のミサイルを撃ち出す。

「そんなもの!!」

そう言いながらレールカノンを撃ってミサイルの迎撃をするボーデヴィツヒ。レールカノンの弾体に貫かれたミサイルは至近距離にあったもう一発も巻き込んで爆発した。

「アルバート一人じゃないの!!」

ミサイルの爆発に紛れながら双天牙月を二刀モードにしてボーデヴィツヒに切りかかる鈴さん。

「邪魔だ!!どいている!!」

だが、ボーデヴィツヒが右手を鈴さんに向けて突き出すと、切りかかっていたはずの鈴さんの動きが不自然なくらいにぴたりと停止してしまう。

「なっ、なによこれ!!きゃあああっ!?!」

鈴さんは身体を動かそうとしているようだが上手く動かないらしく、ボーデヴィツヒの非固定浮遊部位からワイヤーブレードが射出されて甲龍の脚部ユニットに巻きつくくと、そのまま勢いをつけてアリーナの壁面目掛けて放り投げる。

「わたくしがいることをお忘れではなくて!？」

セシリアも4機のレーザービットを展開してボーデヴィツヒに狙いをつけ、ビットとセシリア自身による連続攻撃を行う。

「その程度の攻撃など通じん!！」

全方位からのレーザー攻撃すら若干小さめの体軀を生かし、細かく身体を動かすことでレーザーを完全回避するボーデヴィツヒ。

「なっ!?!?ですが!！」

全方位からの攻撃を回避されたことに驚愕の表情を浮かべるセシリア。

「無駄だ!！」

だが、レーザービット4機を一箇所にまとめて再度連続攻撃をしようつとした時に再びボーデヴィツヒがビットに向けて右手を突き出すと、鈴さんの時と同じ様にビットの動きが不自然に停止する。

「なら、コイツでどうだ!！」

俺は銃を展開、物理弾モードに変更してボーデヴィツヒに向けて連

スタージェスト

射する。

「私に物理攻撃は通じない!!」

レーザービートを停止させた時と同じ様に俺の撃った銃弾に左手をかざすと、発射されたマシンガンの弾丸が一つ残らず停止してしまつた。

「……おいおい、慣性^{AIC}停止能力かよ」

発射されたマシンガンの弾丸を一つ残らず停止させる事が可能な能力などそうあるはずもなく、その数少ない能力の中でボーデヴィツヒが持っている可能性が高いのは、ドイツで製作された第3世代兵器の一つ、AIC^{アクティブイナーシャルキャンセラ}だろう。

「ほお、この短時間でよくわかるものだ。そこだけは褒めてやろう。だが、この私を侮辱した罪、その身できっちり払ってもらおうぞ!!」

ボーデヴィツヒはそう言いながら、いつの間にチャージをしていたのか^{イクニッションブースト}瞬時加速を発動させ、腕部ユニットに搭載されているプラズマ手刀を展開して俺との間合いを一気に詰めてくる。

「侮辱も何も、事実を言ったただけだろうが!!逆ギレすんじゃないよー!!」

俺も格闘戦に移行するため^{スカイブレード}剣を展開して一度プラズマ手刀を受け止めながら、銃^{スターダスト}を格納する。

「うるさい!!貴様だけはここで殺す!!」

プラズマ手刀を巧みに操って攻撃をしてくるボーデヴィツヒ。純粹に稼働時間の差が現れ、俺はどうしても防戦一方になってしまう。

「さっきまでの勢いはどうした！？お前の実力はこんなものか！！」「そうだよ！！そっちこそ、初心者相手にムキになってんじゃねーってのー！！」

プラズマ手刀を防ぐのに精一杯のうえ、プラズマ手刀の長さが原因となり、攻撃のいくつかは完全には防ぎきれずにシールドダメージをもらってしまっし、少しずつISアーマーも傷ついていく。はつきり言っただけでジリ貧だ。

しかもボーデヴィツヒの攻撃が苛烈なので、攻撃を防ぐ事に全神経を集中する必要がある、セシリアたちに話しかけて助けを呼ぶことすら出来そうにない。

『アル、今から攻撃を仕掛けますので、その隙に一端離脱してくださいー！！』

だが、セシリアから一方的な秘匿通信プライベートチャンネルが来ると、その直後ボーデヴィツヒの視界をふさぐようにセシリアのレーザービットからレーザーが周囲の地面目掛けて連射されて大量の土煙が辺りに発生し、その瞬間だけプラズマ手刀の攻撃が弱まる。

俺はその隙を逃さずにボーデヴィツヒから距離をとり、追撃がこないことを確認してから一度大きく深呼吸する。

「ふう。サンキュー、セシリア。助かった」

「無事なら何よりですわ」

ダメージはそこそこ食らっていて、シールドエネルギーは残り6割弱、アーマーも全身くまなく傷ついているが、織斑先生曰く学年最強の専用機持ちを相手にしてこれなら無事と言っていていいだろう。

「あたしらを冷静にさせようってのはありがたかったけど、ちよつと言いすぎたんじゃない？あの女、アンタしか狙ってないじゃない」「ああ。あそこまで怒るとは思わなかった。事実から目をそらしてただけだと思ってたんだけどな」

正直言つて、ここまでキレて突っ込んでくるとは思わなかった。これからは他人を無闇に煽るのは止めよう。さっきみたいな命の危機に発展しかねない。しかもボーデヴィツヒが再び突っ込んでくる気配はなく、それが逆に不気味だった。

「……………話は終わったか？」

土煙が晴れると、多少は冷静さを取り戻したのか、ボーデヴィツヒが冷淡な声でそう問いかけてくる。

「アンタこそコイツばっか狙ってて、あたし達に不意打ちされても知らないわよ？」

「それに同じ専用機持ちとはいえ、アルの稼働時間はわたくし達より短いのですから、相応の気遣いというものがあったいいいのではないかと？」

「ふん。私を侮辱したこの男に手加減する理由がなかるう。……………今度はこちらからいくぞ？」

そう言つてボーデヴィツヒはワイヤーブレードを展開して攻撃してくる。先程とは違って鈴さんに1本、セシリアに1本、俺に2本と

俺達全員に同時攻撃を仕掛けてくるが、俺だけワイヤーブレードが一本多いのは挑発した分ボーデヴィツヒの怒りを多く買っているのだろう。

「そんな攻撃!!」

鈴さんは龍砲を起動させると、片方はワイヤーブレード目掛けて、もう片方はボーデヴィツヒ本人に向けて不可視の砲弾を発射する。

「無駄だ!!」

ボーデヴィツヒはワイヤーブレードを操作して大気の砲弾を回避させ、自身に近づいてくる砲弾すら再度右手を突き出してAICを自分の前面に起動、大気の砲弾の慣性を停止させる事で龍砲を完全に防ぐ。

「そんな!?!」

攻撃を完全に無効化されたことに驚く鈴さん。

「ふん。停止結界の前では衝撃砲など役に立たん。身の程を知るがいい」

ボーデヴィツヒはそう言って腰部に残していた2本のワイヤーブレードを起動させ、元々鈴さんに向かわせていた1本とあわせて計3本のワイヤーブレードを3次的に操作して攻撃を仕掛ける。

『セシリア、援護頼む!!』

俺はボーデヴィツヒを中心に右側にいるので、反対の左側にいるセ

シリアに秘匿通信でそれだけ言つと、全速力でポーデヴィツヒに突
つ込む。

『なっ！！アル！？……ああっ、もう！！』

突然ポーデヴィツヒに突つ込んだ俺に驚きながらも、セシリアはビ
ットとあわせた援護射撃の態勢に入る。

「一人に集中しすぎだ！！」

「はっ！！バカが！！」

だが、こちらの攻撃が届く前にポーデヴィツヒがAICを起動させ
る。

「くそっ！！動けねえ！！」

慣性を完全に停止させられ、切りかかる体勢のまま動きを止められ
てしまった。

「ふっ。捕まえたぞ！！」

ポーデヴィツヒはそれだけ言つと嗜虐的な笑みを浮かべ、動きが止
まったままの俺を滅多打ちにし始める。

当然鈴さんたちは俺を助けようとするが、セシリアの射撃に対して
はAICで動きを止めて痛めつけた俺を盾にして防ぎ、鈴さんには
執拗なまでのワイヤーブレード攻撃で接近する事を許さず、その間
にもポーデヴィツヒは攻撃をしてくるのでISAーマーはどんどん
破壊されていき、

いつ強制解除されるかわからない状態になる上、操縦者保護機能に

エラーが発生したのか、だんだんと意識が朦朧としてくる。

意識がなくなる直前に見たのはスーツの女性が打鉄の太刀を生身で使っているところまでで、俺の意識はそこで一端途切れる事になった。

14 事実（後書き）

そんなわけでアルバート君大失敗パート2。ラウラを刺激しすぎた結果大怪我しちゃいました。

そしてISの二次創作を書こうと思った時からやりたかったシーンの一つ、ラウラに対するツッコミをやっちゃいました。オリキャラが最強ならそのまま返り討ちも可能だったんでしようが、うちのアルバート君はそこまで強くないのでごらんの有様に。

ラウラの怒りをアルバートが一身に受けて大怪我した分、鈴ちゃんとセシリアのケガはほぼ皆無です。

次回の頭にはアルバートは目を覚まさせるつもりですが、ボロボロになったスカイ・ブレードについては次回以降を期待してください。まあ前回以前に露骨なフラグを立てているので、感がいい人はわかるでしょうけど。……ただ、筆者の基本スタンスに『テンプレ、お約束は捻るもの』というのがある事だけは言っておきます。

15 代償（前書き）

今回はいつもどおりの文章量です。……正確には前2回が多すぎただけですが。

ポーデヴィツヒからフルボッコにされて気を失い、目を覚まして一番最初に見たのはセシリアが俺の身を案じている顔だった。

「セシ…リア？……くおっ!？」

そんな顔をさせている原因である自分自身に憤りを感じ、セシリアを少しでも安心させようとして身体を動かそうとした瞬間、全身に痛みが襲い掛かってきたので思わず声をあげてしまった。

「あっ、アル、目を覚ましましたの!？大怪我をして丸2日寝込んでいたのですから、動かないでください!！」

「あっ、ああ……わかった」

その苦悶の声でセシリアは俺が目を覚ました事に気付き、慌てて俺の動きを制してくる。身体を動かそうとするたびに全身くまなく悲鳴を上げるので、正直言ってかなり辛い。

「先生たちを呼んできますので、待っていてくださいな」

セシリアはそれだけ言つと俺のそばから離れていき、織斑先生達を呼びにいったようだ。

「ここは……医務室か。まあ、そうだよな」

首を動かそうとするとまた痛みが襲ってくるのは目に見えているので、視線を動かせる範囲でここがどこかを判断して、学園の医務室という事がわかった。

それからすぐに織斑先生と山田先生が医務室に入ってきて、開口一番こう言ってくれた。

「目を覚ましたらしいな。しかし、私はボー・デヴィツヒの前で『あのこと』を言うなと忠告したはずだが？この超警級の大馬鹿者が」「おつ、織斑先生。アルバート君は目を覚ましたばかりなんですから、いきなりそのことを言わなくても」

「いえ、いいんですよ、山田先生。時間を稼ぐためとはいえ、織斑先生の忠告を無視した俺が悪いんですから」

これからは時間稼ぎをするにしてもやり方を考えよう。今回は助かったが、次があるとも限らない。

「全身打撲で全治2週間ということだ、せいぜい反省しろ大馬鹿者。お前とボー・デヴィツヒの模擬戦に関しては『訓練中のコミュニケーション不足による事故』という形で処理することになった。後日、記入してもらおう書類が大量にあるから覚悟しておけ」

「わかりました。俺の機体に関してはどうなりましたか？」

あれだけボロボロにされたんだから、最悪の事態も考えた方がいいだろう。

「それについても今から説明する。山田先生、あとは頼みます」

それだけ言っただけ織斑先生は医務室を後にする。おそらく俺が起こした問題の処理で、これから色々あるのだろう。

「えっと、アルバート君のスカイ・ブレードについてですが、ダメージレベルDとかなり深刻な損傷を受けていますが、コアは無事な

ので安心してください。ただ、しばらくの間は修復に専念する必要があります。絶対にISを起動させないでくださいね」

最悪の事態であるコアユニットの損傷は免れたようだが、それでも重傷なのは変わらなかった。

「機体が不完全な状態での特殊エネルギーバイパス形成を防ぐためですよ？」

「そうです。ISに無理をさせると、そのツケはいつか自分が払うことになりますから。少なくとも本体の修復が完全に終わるまでは絶対に展開しちゃダメですからね」

機体の損傷という意味ではクラス代表決定戦の時と同じだが、あの時とは規模が違う。あの時はまだ予備パーツでの応急対応が可能なAとBの間だったが、今回はIS側にとっても重傷なC以上の損傷度なので、スカイ・ブレードの自己修復能力に頼るしかない。

「山田先生、活動記録アウトログの閲覧に関してはどうなんですか？先日のデータだけでも見ておきたいんですが」

「待機状態で活動記録アウトログを閲覧する分には問題ありませんよ。機体の展開をしなければ特殊エネルギーバイパスが形成される事もありませんから」

「了解しました。この状態だと学年別トーナメントの参加は無理だつていうのはわかるんですけど、補修授業つてあるんですか？1年生にとっては、『生徒個人がどれくらい成長しているかを調べる』意味あいがあるって織斑先生が前に言っていたと思っただんですが」

「アルバート君の場合は理由が理由ですし、使える機体も専用機のスカイ・ブレードしかありませんから、機体修復が完了しだい放課後に誰かと戦う事になると思います。ペアを組む人を考えておいてくださいね」

「ペア、ですか？学年別トーナメントって1体1のトーナメント戦だと思っただんですが」

俺が気を失っている間にルール変更があっただらうか。

「えっと、アルバート君が気を失っている間に決まった事なんですが、学年別トーナメントはより実践的な模擬戦闘を行うため、2対2のトーナメント戦にルールが変更になりました。そのため、アルバート君にも誰かとペアを組んでもらう事になります。」

トーナメントまでにペアが決まらなかった場合、抽選で選ばれた人とペアを組んでもらう事になります。何か質問はありますか？」

山田先生の説明をそこまで聞き、俺は一つ質問する。

「トーナメントのルール変更と、その理由はわかりました。俺の場合は機体の修復が終わった後で行うとの事ですが、ペアを決める期日は学年別トーナメント本戦と同じなんですか？それと、俺がペアを組む人は既にペアを組んでいる人からでも選んでいいんですか？」

スカイ・ブレードの損傷具合を考えるとまず間違いなく学年別トーナメント当日を過ぎる場合でも、俺のパートナーを決める期日は学年別トーナメント本戦と同じ日程で行われるのかどうか。

実際に俺の試合を行う日、学年別トーナメント本戦で既にペアを組んでいる人が改めて俺とペアを組むことはルールのOKかの2点を予め聞いておく。

「そつ、それに関しては決定しだい通達しますね。とにかく、アルバート君はしばらくの間怪我を治すことと、ISの修復に専念してください。ISを起動させたり、無理な訓練は厳禁ですからね」

だが、どうやらそこまでは決まっていなかったらしく、山田先生はそれだけ言ってそくさと医務室を出て行ってしまふ。腕を動かすのも億劫なので壁にかけてある時計を確認すると、午後3時を少しまわったところで、いつもなら自主練を始めている時間だった。

コンコン

だが、山田先生が退室した直後に部屋の扉がノックされ、誰かが来た事を告げる。

「どつぞ」

医務室にいるのは俺だけなので、誰かが見舞いに来てくれたのだろう。

「失礼しますわ。アル、先生達との話は終わりましたの？」

「このバカ！！あたしたちがどれだけ心配したと思ってるのよ！！まったく！！」

「アル、目を覚ましたって聞いたから、お見舞いに来たよ」

「怪我の具合はどうだ？ボーデヴィツヒに一方的にやられたというが、何をやったんだ？」

「アル。目、覚めたんだってな」

一夏とシャルル、セシリアと鈴さんと篝さんのいつもの5人が医務室に入ってくるなり、思い思いのことを口にしてくる。

「見てのとおり、程よく重傷だ。目は覚めたが、身体中痛くて堪らん」

もつとも、彼我の実力差を見誤って大怪我をしたのだ。自業自得であって、ここまでしてもらう必要はあまりないと思うのだが、それを言ったら怒られるので黙っておく。

「クラスのみんなも心配してるから、怪我が治ったら一言謝っておいた方がいいよ?」

「そうするさ。悪いが俺が意識失ってから起きるまでの間に、何があつたか教えてくれないか? 山田先生から学年別トーナメントが2対2のペアトーナメントになったのは聞いたんだが、他にも俺が大怪我して何か騒ぎがあつたんじゃないか?」

男子生徒の一人がフルボッコにされたのだ。先生たちをはじめとして、学園の皆には多大な迷惑をかけたことだろう。

「その前にいつまで意識あつたか教えなさいよ。織斑先生があの子止めた時にはアンタもうつんでたでしょ?」

鈴さんがいつまで意識があつたのか聞いてくるので、俺は自分が見た最後の光景を思い出す。

「意識飛ぶ直前に見たのはスーツの女の人が打鉄用の太刀を生身で使つてるところだから、その織斑先生が乱入してきたあたりで完全に気絶したんだと思う」

「そう。じゃあ意識を失う少し前から順を追って説明してくわよ」

鈴さんがそう言い始め、俺が気絶した後のことをそれぞれの主観から少しずつ説明してくれる。

俺がボーデヴィツヒのAICに捕縛されてフルボッコにされている最中、鈴さんたちは俺を助けようとしてくれたようだ。だが、救出のためにボーデヴィツヒに攻撃したところ、セシリアのコントロールするビットのレーザーはAICに捕縛された俺を直接掴んで盾にすることで防がれ、

鈴さん自身が突撃して助けようにも、6本のワイヤーブレードが縦横無尽に襲い掛かってくるために突撃できずに手をこまねいていると、いつの間にか織斑先生がボーデヴィツヒの背後に近寄っていて生身で打鉄の太刀を一閃。

それに驚いたボーデヴィツヒが俺を放した瞬間にスカイ・ブレードが強制解除され、同時に俺は意識を失ったらしい。

それからアリーナ内にいた全生徒にこの場の出来事の他言無用と学年別トーナメントまでの私闘を一切禁止する旨を^{むね}通達して解散され、俺は医務室に運ばれて治療を受けることとなり、直接ボーデヴィツヒと戦闘を行っていたセシリアと鈴さん、ボーデヴィツヒは事情聴取を受けることになったようだ。

事情聴取を担当した織斑先生に対して、鈴さんとセシリアは国際IS委員会に今回の事件を通達して世界に事情を知らせ、ドイツ、ひいては男性IS操縦者傷害の主犯であるボーデヴィツヒに対する社会的制裁をするように申し出たらしいが、それをやるためにはIS学園上層部全てを抱きこめるようなとてつもない権力が必要なので、

学園内では一教師と緊急事態時の対応に関する権力しかない自分には今回の件を社会に通達する事は出来ず、内々に処理する形になるだろうと言われたらしい。当然というべきか、ボーデヴィツヒに対する事情聴取は別の時間に織斑先生が行ったようだ。

事件に直接的な関係がない一夏とシャルルと篤さんも、あの日は俺

に遅れてアリーナに向かおうとしたところ、俺がボーデヴィツヒにフルボッコにされている事を聞いて慌ててアリーナに向かったが、事態は既に織斑先生の鶴の一声がかかるところだったらしく、助けに入れなかつたらしい。

全員が揃ったあと俺の見舞いに来ようともしたらしいが、俺のいる医務室前には先生たちが見張りをした上で面会謝絶措置がとられていたが、今朝からは見舞いも短時間ながら許可されたらしく、ちょうどセシリアが見舞いに来たところで目を覚まし、今に至るようだ。

「……なるほど、だいたいの事情は理解できた。……すまなかつたな。皆にはかなり心配をかけたようだ」

身体を動かすとまた痛みが襲ってきそうなので、言葉だけで謝罪する。

「そついつなら、とつと怪我治しなさいよね」

「同じことにしないようにすれば、それでいいんじゃないかな？」

「まあ、これからは無理しないようにしてくれ」

「私達も心配したが、セシリアが一番アルを心配していたぞ。部屋でもロクに眠れていなかったようだしな」

「ほっ、篝さん!!」

一夏たちから一言ずつ返事をもらい、篝さんがセシリアが一番心配していた事を教えてくれる。

セシリアの顔をよく見てみるとうつすらと化粧がしてあり、睡眠不足をメイクでごまかしているようだった。

「セシリア、すまなかった。かなり心配をかせせたみたいだな」
「そつ、そういうのでしたら、今後はこのようなことはしないでください！！………どれだけ心配したと思っていますの、ばか」

最初は少し大きめの声で、最後の方はかろうじて聞こえるくらいの小さな声でそう言うてくるセシリア。

「これからはあの手の行動は自重するよ。相手を煽って、自分から敵を作るのもバカみたいだな」

それに口には出さないが、同じような事をしてセシリアに泣かれるのは俺としても避けたい。

「わかっていただけたのなら何よりですわ。………少し早いですわ、わたくしは自室に戻らせていただきますわ」

「ああ。心配かけさせたようだし、ゆっくり休んでくれ」

「ええ。アルもゆっくり休んで、早く怪我を治してくださいね」

俺の言葉を聞いてセシリアは安心してくれたようだ。それに、一番心配していたらしいので、俺が目を覚ましたことでセシリアは緊張の糸が途切れかけているのだろう。一足先に部屋に戻る事を伝え、医務室を出て行く。

「俺達も行くこうぜ？いつまでもここにいてアルの負担になるわけにもいかないだろ」

「そうだな。それに、学年別トーナメントまで時間もない。少しでも訓練をするべきだろう」

「その意見には賛成ね。あたしは少なくともあの女にリベンジしなきゃ気がすまないわ」

「僕も同意見かな。一夏、今から一緒に訓練しようか。連携訓練を少しでもしておけば、トーナメントでも役に立つし」

一夏たちも退出しようとしながら、今後の予定を話し合う。話の最中に聞いたことだが、ペアトーナメントとなった途端に一夏とシャルルにペアになりたい女子生徒が殺到。一夏はシャルルと組むことを伝えると、対外的には男同士ということもあって納得されらしい。

「皆、一つ聞きたいんだが、ボーデヴィツヒはどうなった？これだけのことをしたんだから、相応の処分はされていると思うんだが」

俺のその言葉を聞き、真っ先に返事したのは鈴さんだった。

「そりゃ知ってるけど、アンタ自分をフルボッコにした相手の心配までしてるわけ？どんだけ博愛主義者なのよ」

「博愛主義ってわけじゃないよ。単にあの女が退学された上で専用機剥奪にでもなったらリベンジできないから、どうなったか聞きたいだけだし。負けっぱなしは趣味じゃない」

「そついえばアンタって地味に負けず嫌いだったわね。………確か特別教育室での生活2週間って聞いたわ。仕出かした事の大きさに比べれば、かなり甘い処分よ」

鈴さんは俺が地味に負けず嫌いだったことを思い出しながら、今回の事件に対するボーデヴィツヒの処分を教えてください。続けて在学しているようなので、リベンジの機会もいつかあるだろう。

「なるほど。ありがとう、鈴さん。また今度会った時でいいから、ボーデヴィツヒと戦ってた時の記録ロケも見せてほしいんだけど、大丈夫？」

俺が鈴さんに向けてそういうと、鈴さんは少しだけ啞然とした後に呆れた表情をしてからこう言った。

「負けた試合の方が得る物が多いつつつても、あの時の記録ログが参考になるとは思わないわよ？」

「それでもボーデヴィツヒの数少ない戦闘映像だ。自分の記録ログもあるけど、一緒にいたほかの人の視点っていうのも勉強になるし」

「はあ……わかったわよ。あんたの事だから、セシリアにも同じ事いうつもりでしょ？あたしから先に言つとくからね」

渋々了承し、短いとはいえ俺の性格を理解しだしている鈴さんは行動を先読みしてそう言うてくる。

「正解。データはまた今度でいいから」

「わかってるわよ。それじゃあね」

そう言うて医務室から去っていく鈴さん。一夏とシャルルも俺が鈴さんと話している間に自主練に向かったようで、医務室には俺ひとりとなる。

「一人だと暇なんだけど……仕方ないか」

独り言を呟きながらボーっとしはじめ、そうしている内に眠っていた。

それから週末までは医務室で療養し、週明けには寮の自室に戻る許可が出たので自室に戻り、表面上はいつもどおりの生活を送ること

が出来る程度には回復した。

無論怪我は治りきっていないので、ちょっとした移動が辛かったりするのだがそこは我慢するしかなかった。

当然ながら事件後初めて教室に顔を出した時にはちょっとした騒ぎになりかけたのだが、織斑先生が鎮圧してくれたので大事には至っていない。

俺の行く試合のペアも、スカイ・ブレードの修復完了後日程が決まった時点で学年別トーナメント本戦に出場した人だろうとかまわず、自由にペアを組んでいい事になった。

放課後もとつと寮に戻って安静にしているくらいしかなかったのだが、セシリアと鈴さんからあの時の記録^{ログ}データを受け取ったので、自分の分と合わせて3人分の記録^{ログ}を見ながらいつか行つりベンジマツチに向けて、ボーデヴィツヒの動きを調べる。

そうしているとあつという間に時間が過ぎ、一夏とシャルルも部屋に戻ってくる。

「ただいま。アル、戻ってきてる？」

「ああ。お帰りシャルル、一夏」

「おう。……またその時のデータか」

パソコンでボーデヴィツヒ戦のデータを見ていたので、その事に気づいた一夏の表情が若干曇る。

「まあな。ボーデヴィツヒとの戦いって意味だと、情報がこれしかないからな。……そういえば一夏とシャルルは学年別トーナメントでボーデヴィツヒと当たった場合のことって考えてあるのか？」

精神的にはアレだが、ボーデヴィツヒは軍の特殊部隊の隊長をやっているだけあってISの操縦技術は高い。勝とうとするなら絶対に何かしらの作戦は必要だろう。

「一応はシャルルと一緒に考えてある。そのための連携訓練もして
るしな」

「作戦が上手くいけば、勝てる可能性は十分あるよ」

「俺は学年別トーナメントに参加できそうもないから、どんな作戦か聞かせてもらってもいいか？」

俺がそう聞くと、予め決めてあったのかあっさりと答えが返ってきた。

「悪いけど今回だけは秘密にさせてくれないかな？一応学校行事だし、作戦内容とかも成績にも関わってくるだろうから」

「悪い、アル。たまにはお前に頼らずに勝ってみたいんだ」

確かに学年別トーナメントは政府関係者やIS関係の企業のスカウトマンが来るとはいえ、一応は学校行事なので作戦立案なども成績に関わってくる可能性は大いにありうるだろう。

「わかった、二人の間で決めたら俺も文句はないさ。ただ、作戦プランは最低2つは用意しておいた方がいいぞ。相手の動きが100%自分の想定どおりにいくなんてまずないからな」

「ああ、忠告感謝する。お前の代わりってわけじゃないけど、アイツ相手だろうと全力でやってやるさ」

「そうだね。一夏、後で作戦をもう一回練り直そう。アルの言っており、作戦プランはいくつかあった方がいいだろうから」

そう言って俄然やる気を出す二人。そんなやり取りを繰り返しながら

ら時間は過ぎていく。

怪我の具合もそこそこよくなってきた6月最終週、IS学園は学年別トーナメント一色となり、男性IS操縦者がいる意味でもっとも注目を集めている1年生の部のトーナメント表が発表される。

「おいおい、マジかよ……」

個人用端末に配信され、表示されたトーナメント表。第1回戦第1試合は、一夏とシャルルのペアとお互いに相手がおらず、自動的に抽選で選出されることになってしまったボーデヴィツヒと箒さんのペアだった。

「この試合、確実に荒れるぞ……」

一夏VSボーデヴィツヒという何か因縁めいたものを感じながら、俺はその試合に出場する一夏とシャルル、箒さんの身を観客席で案じることしか出来なかった。

15 代償（後書き）

そんなわけで今回はアルバートが目を覚まし、学年別トーナメントが開催されるまでとなりました。

一夏・シャルルペアVSラウラ・篝ペアの試合は、オリキャラが完全に観客状態なので、どうやって書こうか迷っています。

まずしないとは思いますが、最悪の場合試合丸ごとキンクリするかもしれません。

感想はフリーのままにしておりますので、誤字、脱字、誤用を見つけたら教えていただけるとありがたいです。

16 学年別トーナメントとアルバートの想い(前書き)

最新話、学年別トーナメントです。試合自体はあまり変わりありませんが、ちよつとネタに走ってしまいました。そしてちよつと危ないネタに走ったかもしれません。

16 学年別トーナメントとアルバートの想い

学年別トーナメント、第1回戦第1試合。クジ運がいいのか悪いのか、一夏とシャルルのペアは1試合目から自分達を除く専用機持ちの一人、ボーデヴィツヒと戦う事になった。

しかもボーデヴィツヒのパートナーはどういうわけか篤さん。一番戦いたい相手であるボーデヴィツヒと同時に、自分の手の内をよく知っている篤さんと戦うとなるとかなり厳しい戦いになる。ボーデヴィツヒの性格から考えるとまずないだろうが、二人がきちり連携をとった場合一夏は確実に窮地に立たされることになるだろう。

一夏の専用機である白式は、ISバトルでのHPヒットポイントになっているシールドエネルギーを消費して攻撃する単一仕様能力ワンオフ・アビリティの仕様もあって、攻撃力が極端に高い反面、耐久性能については問題がある。

零落白夜を起動させるだけでシールドエネルギーは消費されていくため、攻撃に回す分のシールドエネルギーを計算に入れると白式のHPヒットポイントに回す事のできるシールドエネルギーは一般的なISを下回ってしまい、

その結果として普通のISなら軽いダメージで済む場合でも、白式にとっては同じだけダメージをくらったら致命傷になりかねない。

その分攻撃力は折り紙つきで、打鉄やりヴァイヴをはじめとした量産機なら1回、俺のスカイ・ブレードや甲龍などをはじめとした専用機でも最大3回零落白夜をくればシールドエネルギーは0にさせられる。

零落白夜を当てることが出来れば、たとえボーデヴィツヒだろつと倒すことは可能だろうが、一夏とボーデヴィツヒの技量には相当の差があるのは容易に想像できる。

ボーデヴィツヒの動きを制しきり、零落白夜を当てることが出来れば一夏たちの勝ち、そうでなければボーデヴィツヒたちの勝ちだろう。

「上手く立ち回れよ、一夏」

俺は一年生で唯一学年別トーナメントを欠席しているため、観客席で観戦するしかない。

一夏たちの心配をする俺をよそに、試合は今まさに始まるうとしていた。

試合開始前、既にアリーナ・ステージに入場していたラウラは、目の前にいる仇敵、織斑一夏に話しかける。

「一戦目で当たるとはな。待つ手間が省けたというものだ」

「そりゃあなによりだ。こっちも同じ気持ちだぜ。親友を一方的に

痛めつけてくれた礼、きつちりさせてもらう」

話しかけられた一夏も、目の前にいるラウラと自分との因縁とは直接的に関係のないアルバートを一方的に痛めつけたことに対しては頭にきていた。

「はっ、あの程度の実力しかないものが親友とはな。つくづく貴様は理解しがたいよ」
「言ってる」

そう言っている間にも試合開始まで数秒を残すだけとなっており、試合開始のブザーが鳴ると共に二人は行動を開始した。

「叩きのめす!!」

奇しくも同じ言葉を放ちながら、一夏は零落白夜と瞬間加速を同時に発動、ラウラに向けて突撃し、その行動を読んでいたラウラも右手を突き出して、突撃してきた一夏の身体を目標にAICを発動させ、その動きを停止させる。

脳が身体を動かそうとしてもAICの作用で動かそうとする端から慣性を停止させられるため、一夏はその場で動けなくなってしまう。

「開幕直後の先制攻撃か。わかりやすいな」

「そりやどうも。以心伝心で何よりだ」

「ならば私が次にどうするかもわかるだろう」

そう言ってラウラはレールカノンを起動。弾体を装填し、至近距離から一夏に大ダメージを与えようとする。

「させないよ」

だが、A I Cで停止した一夏を壁に使って密かに接近していたシャルルが自身もA I Cの範囲内に入らないように細心の注意を払いながら一夏の頭上に飛び出し、アサルトカノンによる爆破弾バーストをレールカノンに向けて発射する。

「ちっ………!!」

爆破弾バーストがレールカノンの至近で爆発し、その衝撃で照準がずれ、一夏の頭部を狙ったレールカノンの砲弾は空を切る。

それと同時にラウラはシャルルからの攻撃を回避するためにA I Cの発動を停止、急速後退をして間合いを取る。

「逃がさない!!」

その言葉と同時に、シャルルは自分の特技である高速切替ラビッド・スイッチを使用してアサルトカノンを格納しつつ、マシンガンとショットガンを展開。2丁の射撃で一夏とラウラの距離を十分に引き離させる。

「私を忘れてもらっては困る」

今まで間に入ることの出来ていなかった箒が実体シールドを展開しながらシャルルとラウラの間に割り込み、銃弾を防ぎながらラウラへの追撃を防ぎ、さらにはシャルルへ突撃しようとする。

「それじゃあ、俺も忘れられないようにしないとな!!」

それもA I Cの拘束から開放され、シャルルと入れ替わるように一夏が前に出てきたため、箒の狙いは外れる事になる。

当然そうなれば打鉄の近接ブレードと白式の雪片式型がぶつかり合う事になるが、この時既に一夏は零落白夜の発動を停止させて雪片式型を物理刀モードに変更しているため、シールドエネルギーの消費は最小限で済んでいた。

幾度となく斬撃を交し合いながら、一夏は少しずつスラスタの推力を上昇させて箒を後方へと押ししていく。

「くっ、このっー!!」

それに焦れた箒はブレードを頭上に振りかぶり、少しでも斬撃の威力を上げようとする。

「シャルル!!」

「うん!!」

だが、それを待っていたとばかりに一夏は雪片式型で箒の斬撃を受け止め、背後にいたシャルルも武装をショットガン2丁へ変更し、動きの止まった箒目掛けて引き金を引く。

「!?!」

箒自身確実に当たると思った瞬間、足にラウラのワイヤーブレードが絡みつき、凄まじい勢いで後方に投げ飛ばされた事でダメージを負うことはなかった。

「何をする!!」

『パートナーのサポート』ではなく、『自分の戦いに邪魔だから放

り投げた』事を表すようなぞんざいな扱い方に、箒はパートナーであるラウラに対して怒声を発するが、ラウラは聞く耳を持たずに一夏へ急接近しながら箒に向けてこう言った。

「邪魔だ」

その言葉と共にラウラが一夏との近接格闘戦に入り、めげずに箒も一夏に切りかかって2対1の形にしようとしたところでシャルルが間に入り込み、1対1の戦いが2ヶ所で行われる形になるのだった。

「……………なんつーか、2対2なのにあそこまでパートナーの存在を計算に入れてない戦い方って、いっそ清々しいな」

「それに関しては同意見。あれじゃ篠ノ之さんがかわいそう」

俺が座った場所は政府関係者などが観戦している来賓席の反対側、その中央列の中ほどというベストポジションに陣取る事ができ、誰に言つてもなく呟くと、右隣から聞き覚えのある声で相槌がうつたれる。

「……………ティナさん。席、隣だったんだ」

「…気づいているものと思ってたんだけど。……私に気づけないくらい、織斑君たちが心配？」

右を見てみると鈴さんのルームメイトで、鈴さんと同じく2組のテナさんが質問してくるので、正直に答える。

「そりゃね。一夏とペアを組んでるシャルルは俺達男子の中で一番実力が高いのも知ってるし、一夏の近接戦闘能力の高さも知ってるけど、実際戦ってボーデヴィツヒの実力の高さも知ってるから、頭の中で戦闘能力だけを比較するとどうしても一夏たちの分が悪い。心配にもなるさ」

純粋なスペックだけを見れば、ボーデヴィツヒは1年の専用機持ちどころか1年生全体の中で最も高い戦闘スペックを誇るだろう。織斑先生が言っていた1年最強のIS操縦者という言葉も頷ける。

「なら、戦術運用や戦略的なものを加味すればどうなると思う？やっぱりボーデヴィツヒさんのほうが有利？」

「それは一夏たちの戦術次第だろうね。行動を見る限り、まずは箒さんを倒して2対1に持ち込もうとしてるみたいだから、そのあとは2人でボーデヴィツヒを圧倒してところかな？」

当然俺達が話をしている間にも試合は進んでいて、シャルルVS箒さんはシャルルが砂漠の逃げ水ミラーシユ・デ・デザートを使って戦闘ペースを完全に掌握し、一夏VSボーデヴィツヒは近接格闘戦になっているが一夏は自分から攻撃するような事はせず、シャルルが箒さんを倒して援護に来るまで時間を稼ぐつもりだろうだ。

「篠ノ之さん、色々な意味で厳しいわね」

「ああ。俺も前にやられた事があるけど、逃げ水に一度でも嵌はまれば、

戦闘ペースを完全に掌握される」

あれは来るとわかっていても回避できない類たぐいだから、自分も同じ戦闘技法を使えない限り破る事は難しいだろう。

「それもそうだけど、2対2なのにパートナーからの支援が最初から期待できないっていうのは、精神的にもキツイでしょ。実質的に1対2を2ヶ所でやっているようなものよ？」

「同感だ。俺なら、そんな状況は遠慮したいね」

「私も同じかな？……ホント、篠ノ之さんに同情するわ」

ティナさんがそういうのと同時にシャルルの攻撃が当たり、打鉄のそこかしこから煙が上がって戦闘不能状態になったことを知らせる。

「ボーデヴィツヒさん、本当に織斑君を倒すことしか頭にないのね」

「ああ。アイツにとって一夏は『愛しの教官殿の経歴に傷をつけた男』だからな。なんとしても倒したいんだろう」

シャルルが一夏と合流し、2人でボーデヴィツヒを倒そうとする姿を見ながらティナさんにそう言う。

「ああ、織斑君がいなければ、織斑先生がモンド・グロツソ二連覇できたっていうあれ？……本当はボーデヴィツヒさん、織斑君に嫉妬してるのかもね」

俺が言った事に対するティナさんの返事を聞いて、俺は驚きながらティナさんに質問する。

「嫉妬！？逆恨みの間違いじゃないの？」

「逆恨みもあるんだろうけど、その根源的な感情は織斑君に対する

嫉妬じゃないのかって思ったのよ」

「……………理由を聞かせてもらっていいかな」

一夏とボーデヴィツヒの試合観戦すら半ば意識の上から閉め出し、
ティナさんの話に集中する。

「織斑先生って、IS学園（ユ）に来る少し前にドイツ軍で教官をしていて、ボーデヴィツヒさんはその時の教え子の一人だっというの
は学園の皆知ってるでしょ」

「ああ。ボーデヴィツヒの転校初日に一夏を引つ叩いたからな。学園側としても余計な波風を立てないために織斑先生の経歴の一部を開示したんだろう」

「多分そんなところなんだろうね。ここからは完全に私の想像なんだけど、軍の休憩時間とかにボーデヴィツヒさんが織斑先生とプライベートな話をしていて、話の最中に織斑君が出てきた。」

その時の織斑先生の表情が今まで一度もボーデヴィツヒさんの前で見た事のないもので、織斑先生が大好きなボーデヴィツヒさんはそんな表情をさせる織斑君に嫉妬。そこから逆恨みに発展したって考えたんだけど」

ティナさんの説明をそこまで聞き、俺は自分の持っている情報とティナさんの想像を頭の中で合わせてみると、かなりしっくりくる事に気づいた。

「ティナさん。それ、大当たりかもしれない」

「そっか。試合もそろそろ決まるかもしれないよ」

「えっ!?!」

考え事に集中していたため、意識を試合観戦に戻すと、一夏がボーデヴィツヒの背後からシャルルのアサルトライフルで不意打ちをか

け、それに激昂したボーデヴィツヒがワイヤーブレードで一夏を攻撃。

その隙にシャルルがボーデヴィツヒの懐に入り込んでいた。

『この距離なら外さない!!』

観客席のそこかしこに設置され、こういった校内行事の時のみ起動させられるスピーカーからシャルルの声が聞こえると同時に、第二世代最強の武装がボーデヴィツヒに牙をむいた。

左腕のシールド内に格納されていたパイルバンカーグレー・スケール灰色の鱗殻を起動させ、ボーデヴィツヒの腰部装甲の辺りに密着させてリボルバー内の炸薬を連続起動させ、シャルルはボーデヴィツヒのISの装甲を破壊すると同時にシールドエネルギーにダメージを与えていく。装弾数である6発全てを一度に撃ちつくし、その衝撃でボーデヴィツヒはピット・ゲート付近の観客席まで吹き飛ばされる。

シャルルも大ダメージを与えた事を確信しながらグレー・スケール灰色の鱗殻のリボルバーを開いて空薬莖を地面に滑り落とし、右手に専用のスピードローダーを展開して新たな薬莖をセット。リボルバーを閉じながら、シャルルはこう言った。

「切り札、きらせてもらったよ」

そんなシャルルの言葉を無視するようにボーデヴィツヒは立ち上がり、IS全体から紫電を発生させ、強制解除の兆候を見せながら大声を上げる。

「ああああああっ——!!」

IS全体から強烈な電撃が無差別に発生し、それと同時にボーデヴィツヒのISに変化が訪れる。

「何だ？まさか形態移行……じゃない!？」

ボーデヴィツヒの怒りに呼応した形態移行かと思った瞬間、シューヴアルツェア・レーゲンそのものの輪郭が崩れ、ドロドロの黒い粘液状になると使用者であるはずのボーデヴィツヒを取り込み、別の物へとその形を変えていく。

『非常事態発令。トーナメントの全試合は中止、状況レベルDと認定。鎮圧のため、教師部隊を送り込む。来賓、生徒はすぐに避難するごと』

そのアナウンスと共に観客席との間に遮断シールドが展開され、一夏たちの姿が見えなくなる。

観客席にいた生徒達も指示に従い避難し、俺もそれにしたがって避難していると、指定されている避難場所へ向かう最中ティナさんが質問してくる。

「ねえ、アルバート君。アレが…ISの形態移行なの？」

恐る恐る聞いてくるティナさん。その声は震えていて、いずれ自分が専用機を得た時にあんな風になってしまうのではないかという恐怖がありありと浮かんでいた。

「違う。アレは形態移行じゃないよ。それに、本当に形態移行なら非常事態が発令される事もない。可能性があるとするなら、ボーデヴィツヒの機体に何か仕込まれていたんだ」

避難場所へ到着すると、そこには第3アリーナにいた生徒全員が集まっていた。既にクラスごとに集まり、人員の点呼も始まっているようだ。

そういった避難に対する諸々をこなしている内に非常事態の発令も解除され、結局学年別トーナメントは中止となり、個人データ取得のため組み合わせで決めた第一回戦のみ執り行う形になった。

「あ、アルバート君。クラスのみんなはどうでしたか？」

非常事態発令が解除された後、山田先生が俺のところに来て避難をしている時のクラスの様子を聞きにくる。

「アリーナ・ステージにいた4名を除けば、全員避難場所にいましたし、これといった問題も起きませんでした」

「そうですか、よかったです。……………一つお願いがあるんですが、聞いてくれますか？」

俺の報告を聞いて一息つく山田先生。それから少し黙って何かを考えた後、頼み事をしてくるが、若干言い辛そうだ。

「内容にもよりますが、なんでしょう」

「その……………ボーデヴィツヒさんの様子を見に行ってくださいませんか？」

「お見舞いってことですか？あの形態移行もどきでボーデヴィツヒフォームシフトに何か影響が出たんですか？」

「いえ、それは大丈夫です。検査の結果、軽い怪我だけで済んだようですから。ただ……ボーデヴィツヒさん、今までの態度が態度ですから、お見舞いなどに来る人がいないと思うんです。先日の件の被害者であるアルバート君に頼むのも変なことはわかっているんですが、少しだけでも気にかけてあげられませんか？」

山田先生なりにボーデヴィツヒのことを心配しているようだ。

「わかりました。少し様子を見てくることにしますよ」

ティナさんから聞いたボーデヴィツヒが一夏に対して嫉妬しているという意見もあったし、一度腹を割って話し合ってみよう。

「本当ですか！？ありがとうございます。ボーデヴィツヒさんは医務室にいたので、よろしくお願いしますね」

それだけ言って山田先生は去っていったので、俺は医務室へと向かうのだが、その途中の職員室前で織斑先生に会ったので足を止める。

「どうしたウィルソン。この先は医務室だ。ボーデヴィツヒに追い討ちでもかけにきたか？」

「そんなことしませんよ。クラス代表としてボーデヴィツヒの様子を見に行くだけです」

「まあ、アイツも少し前のお前と同じで程よく重傷だ。相応の気づかいはしてやれよ」

それだけ言って織斑先生は職員室へと入っていき、少し歩いて医務室へとたどり着いた。

「失礼しまーす」

入室前に扉をノックし、中にいるであろうボーデヴィツヒに一声かける。

「だっ、誰だ!？」

間に扉があるため、若干くぐもった声でボーデヴィツヒが誰かと問いかけてくる。

「ボーデヴィツヒ。アルバートだが、様子を見に来た。入るぞ」

それだけ言って返事が来る前に扉のスイッチを押し、医務室の中に入る。

「へっ、返事もなしに入ってくるな!!着替え中だったらどうするんだ!！」

医務室に入った途端抗議をしてくるボーデヴィツヒの声は全く聞いた事がなかった。声の中に冷たさが欠片も含まれておらず、ついこんな質問をしてしまった。

「誰?ってか本当にお前はボーデヴィツヒか?声の感じがまるきり違うんだが……」

「うっ、うるさい!!お前こそ礼儀を知らないのか!!私が着替えしていたらどうするつもりだ!！」

俺は医務室の入り口にいるし、ボーデヴィツヒは一番窓側のベッドにいる上にカーテンでその様子が見えないようになっていたので、ここから話す分にはボーデヴィツヒが着替えていようとあまり関係なかったりするのだが、テンパっているのかそこまで頭が回ってい

ないようだ。

「礼儀知らずっていうなら、お前の方がよっぽどそうだと思うんだが？ 出会いがしらに人1人引つ叩いて謝罪なして、どれだけ礼儀知らずだよ」
「ぐっ!？」

今月始めのことを引き合いに出され、言葉につまるボーデヴィツヒ。

「それで？ 本当に着替えてるのか？ それなら外で時間潰して出直してくるが？」

「いつ、いや……大丈夫だ、問題ない」

「ならいいだろ。そっち行くぞ」

「あつ、ああ……」

ボーデヴィツヒの許可も得たので、一番奥のベッドまで向かってカーテンを開けると、初めて見る虹彩異色の銀髪の女がいた。

「なつ、なんだ……人の顔をじろじろ見て。何か話があるんじゃないのか？」

「あつ、ああ…ボーデヴィツヒか。一瞬誰かと思った」

常に眼帯をしていたので、声を聞くまでボーデヴィツヒだと気づかなかった。

「とことん失礼なやつだな、お前は……それで、一体何の用だ？ 私を笑いにでもきたか？」

「クラス代表として、クラス内で浮いているクラスメイトの様子を見に来ただけだ。他意はない」

プライベートならとことん笑ってやってもいいが、ここまで変化があると何があったのか逆に心配になってくる。

「そうか……………先日はすまなかつた。我ながら大人気ないことをした、許してくれ」

ボーデヴィツヒから謝罪の言葉が出てきたことに驚き、俺はしばらくの間呆然としてしまう。

「……………なつ、何とか言ったらどうなんだ!!」

「ああ……………許してやってもいいが、一つ聞かせてくれ。どういう心境の変化だ?っていうか、一体何があったんだ?雰囲気からして変わりすぎてて、正直違和感どころの話じゃないんだが」

同姓同名の別人と言われた方がまだしっくり来るボーデヴィツヒの変わりように、俺はついていけなかった。

「そこまで言うか貴様!!……………一夏に負けた後、教官から一言助言をもらってな。それから色々と考えていて、お前から模擬戦の最中に言われた事を真っ先に思い出した。私個人のことであそこまで辛辣にモノを言われたのは初めてだったからな。その後お前の言っていたことを考えたら、確かに私が全面的に悪かったからな。

私だって自分が悪いと理解すれば謝罪もするさ。あの時の模擬戦でお前が言っていた事は正しい。確かに教官が試合を優先した場合、私と教官が出会う可能性はかなり低くなる。その事に気づかず、一夏を一方的に目の敵にしていた時点でお前の指摘どおり逆恨みだ。

そのことを言われて逆上し、世界で二人しかいない貴重な人材に大怪我を負わせてしまったのだ。私一人が頭を下げるだけで許すというのならいくらでも下げるし、それでも気にいらぬというなら、私のことを好きに扱ってくれていい」

事情を話してくるボーデヴィツヒの目は真剣そのもので、俺としてはこう答えるしかなかった。

「そこまで言われて、『許さない』って言える奴はどれだけ外道だつての。誠意には誠意で返すのが礼儀つてもんじゃないのか？許すに決まってるだろうが」

「そつ、そうか……許してくれるか。その手のことは座学だけで実地訓練をした事がなかったから、どうすればいいのかよく知らないのだ」

俺が『許さない』と言っていた場合、どうやらマジでやる気だったようだ。

「真面目に勘弁してくれ、ボーデヴィツヒ。俺や一夏、もつと正確に言つと男性IS操縦者か。それがその手に乗ったら、アホみたいに面倒な事になるぞ。今でさえイギリスの知り合いに連絡取ると、『俺を確実に自国にとどめるための特別法案を制定するために協力してくれって言われた』って話が聞こえてくる事があるんだ。

そこに『他国の人間に手を出しました』なんて情報が入った瞬間、
国対国　今回はイギリスVSドイツか　の男性IS操縦者の取り合いになるのは確実だし、最悪の場合そこを全く別の第三国が漁夫の利で持つていって、イギリスとドイツが憤慨。

そこから国際紛争へ発展なんて事にもなりかねない。一人の男の女性関係で戦争になって、地球滅亡なんて冗談にもならんぞ」

勿論これは俺の考えうる最悪のパターンを伝えただけにすぎないが、起こりうる可能性としては0じゃないのが怖い。

「そつ、それはいくらなんでも考えすぎではないのか？……まあ、

許してくれるならこちらとしてもありがたい。……それと、私からもいくつか質問させてもらうぞ。まず始めに、そんなに印象が変わったか？正直に答えてくれ」

先程と同じ真剣な眼差しでそう聞いてくるので、俺も正直に答える。

「でも、さっき言った可能性は0じゃない。ISを初めて起動させてから学園に入学するまでのほんの少しの間だけど、世間の暗い部分の一端を見たからな。どうしても警戒っつーか、悪い方へ考えちまうんだよ。」

……話がそれたな。質問への答えだが、失礼を承知で言わせてもらおうと、『同じ顔の別人』って言われた方がよっぽど納得できるレベルだよ。それくらい印象が変わっている」

「そうなのか？私としてはそこまで変わったとは思えないのだが」

小首をかしげながらそう言うってくるボーデヴィツヒ。

「数時間前は氷像が服着てるみたいな周囲に対する拒絶オーラ放ちまくってたくせに、今はそれが無い時点で雰囲気は別物だよ。まあ、良い変化だとは思うがな」

「そうか。……最後の質問だ。何故お前は、あの時私を挑発した？先程のような考えが出来るなら、私と模擬戦を行う前から実力の差を理解していたはずだ。最悪の場合、死んでいたかもしれん。何故ああまで危険な橋を渡ったんだ？」

その目は先程以上に真剣で、はぐらかせそうになかった。

「………わかった。教えてやってもいいが、絶対に他人にはばらさないって誓えるか？」

「ああ、誓おう。絶対に他人には話さん」

「信じるぜ？ボーデヴィツヒ。まあ、保険だけはかけさせてもらうから、少し待ってる」

俺は立ち上がり、一度医務室の出入り口へ行つて誰も入ってこないように扉をロックしてから元の場所へ戻る。

「何をしていたんだ？」

「話してる最中に誰か来ても面倒だから、扉ロックしたんだよ。…

……あの行動の理由は簡単だ。セシリアを守ろうとしたんだよ」

「セシリア・オルコットを？何故だ。データで見る限りお前とオルコットの模擬戦の戦績は五分のようだが、それも機体スペックの差と互いの戦術の理解度の違いからそうなっているだけで、純粋な実力で言えばお前の方が低いだろう」

学園編入前に俺とセシリアのクラス代表決定戦のデータでも見たのだろう。気にしている事をはっきりと言ってくる。

「こう言つたほうがわかるか？惚れた女が傷つくのを見たくなかった。だから俺に目を向けさせた。……ささやかな男のプライドつてやつだ。まあ、その結果大怪我して惚れた女泣かしてるんだから、無様なもんだよ」

自嘲しながらそう言つと、ボーデヴィツヒは啞然とした表情の後、小さく笑つてこう言つた。

「そうか。……お前は強いのかもしれないな。尊敬に値するかもしれん」

「世辞は止せ。実力が伴っていない行動した拳句、守ろうとした女泣かせてる時点で下策もいいところだ」

「失敗している点を理解しているならいいじゃないか。少なくとも、

逆恨みや思考停止していた私よりはよっぽど上等だ。あとは実力をつけて、その上で成功させれば良いだけなのだからな。……少なくとも、お前の心は私より強いと思う。

それに、その理解力と推理力の高さも一つの武器だ。使い方次第では十分強力な物になるだろう。私の部隊に欲しいくらいだよ」

ボーデヴィツヒからの素直な賞賛の言葉に、俺はただ啞然とするしかなかった。

「怪我をさせた俺びも含めて、今後はISの操縦について教えてやる。ありがたく思え」

「ああ……そうだな。そうしてくれると助かる、ボーデヴィツヒ」

軍隊式はキツそうだが、その分上達も見込めるだろう。

「その呼び方も辞める。私のことはラウラでいい。お前の事もアルバートと呼ばせてもらう」

「了解、ラウラ。まあ、お互い訓練再開はISの修復が終わってからになるだろうがな」

「ああ。それからはきっちり鍛えてやるから、覚悟しておけよ？」

そう言っただけ冷たげな笑みを浮かべるが、今までの拒絶するような冷たさとは違い、相手を激励し、行動を促すような感じの笑みだった。

「了解。……結構話してみただし、寮に戻る。怪我人の俺が言えた義理じゃないかもしれないが、早く治せよ、ラウラ」

時間を見てみるとあれから30分ほど経っていたので、それだけ言って医務室を出ていこうとすると、ラウラから声がかかる。

「ああ、お前には色々と迷惑をかけた。すまなかつたな、アルバー
ト」

「そういうなら、怪我が治った後に一夏とクラスのみんなにも謝れ。
基本的にうちのクラスはおおらかだから、それで打ち解けられるだ
ろ」

「そうだな、そうさせてもらおう」

その返事を聞きながら俺は医務室を後にする。

月初めからの懸念事項の一つがほぼ片付き、肩の荷がひとつ下りた
感覚を堪能しながら、俺は寮へと戻るのだった。

16 学年別トーナメントとアルバートの想い（後書き）

そんな感じで、アルバートとラウラの間に師弟フラグが建ちました。あと、話の展開上アルバートがセシリアに好意をもっている事を初披露。本人以外に学園内で知っているのは直接話したラウラだけです。あとはアルの母親のアリス博士がなんとなくレベルで気づいているという感じです。

今回は2巻部分のエピローグ的なお話になります。

16・5 幕間 ラウラの戸惑い (前書き)

本編には全く関係のない幕間です。
ラウラの間違った行動の元凶が動き出します。

16・5 幕間 ラウラの戸惑い

「織斑一夏とアルバート・ウィルソン……か……」

医務室のベッドの上で、ラウラは男性IS操縦者2名の名前を呟く。一夏には好意を、アルバートには興味を持ったラウラは今後2人とどう付き合っていこうか考えるが、自分の中に人付き合いに対するノウハウがない事に気付く。

(いつ、いかん……どうすればいいかが全くわからん)

男の気の引き方も個人用のISの操縦訓練の方法も知らないことに気づいたラウラ。それから1人であるおろとしながらどうすればいいか考え、医務室の壁に備え付けてある時計を見てみると午後5時を過ぎたところで、本国のドイツは朝の9時過ぎ。

部隊の皆は訓練中だろうが、ラウラは教官である織斑千冬以外に唯一知っている『大人の女』の助言を求めるために、自分の部隊『シユヴァルツェア・ハーゼ』の訓練を取り仕切っている副隊長クラリツサ・ハルフォーフへ秘匿通信プライベートチャンネルを繋げることにするのだった。

同時刻、ドイツ国内にある軍事施設の一つで、ISの配備された特殊部隊『シユヴァルツェア・ハーゼ』 通称『黒ウサギ隊』が訓練を行っていた。

「何をしている！！現時点で23秒の遅れだ！！急げ！！」

怒号を飛ばすその女性は、『黒ウサギ隊』の訓練の一切を取り仕切

り、隊長であるラウラ・ボーデヴィツヒが本国に不在のため、隊長業務も兼任して行っている副隊長、クラリツサ・ハルフォーフだ。

部隊内の最高齢で、訓練の時は厳しいが、面倒見がいい事でも知られている部隊内の『頼れるお姉様』、それが周囲のクラリツサに対する評価だった。

その専用機である『シユヴァルツェア・ツヴァイク』に、緊急暗号通信と同義の秘匿通信プライベートチャンネルが届いた事に気づく。

「 受諾。クラリツサ・ハルフォーフ大尉です」

『ラウラ・ボーデヴィツヒ少佐だ……』

隊長からの緊急暗号通信という事もあり、クラリツサはハンドサインで訓練中止と部隊員全員の緊急招集をかける。

「ラウラ・ボーデヴィツヒ隊長、何か問題が起きたのですか？」

『あ、ああ……。とても、重大な問題が発生している……』

今まで聞いた事もないラウラの声に、何か重大な問題が発生したのかと緊張しながら、隊長であるラウラにいかなる『問題』が発生し、どうやってその『問題』への対処するかを頭の中で準備する。

「 部隊を向かわせますか？」

部隊の力が必要なら、すぐにでも日本へ向かう準備が必要のためにそう問いかけるクラリツサ。

『い、いや、部隊は必要ない。軍事的な問題では、ない……』

「では？」

軍事問題以外で隊長が自分の力を必要としているという事態に対し、どう動くべきかを考えながら続きを促すクラリツサは、次の瞬間にフリーズする事になる。

『好きな男ができた。お、男の気を引くにはどうしたらいい』

.....。

「はい？」

規律整然としたクラリツサの声が半オクターブほど高くなり、同時に今までの隊長の口からなら出ようはずもない言葉に、プライベートチャンネル秘匿通信を繋げたまま呆然としてしまう。

『こ、こういった事は初めてでな。どうすればいいか意見を聞きたい.....クラリツサ？』

いつもならすぐに対策を話してくれるクラリツサからの応答がないことを不思議に思いながら、ラウラはもう一度クラリツサの名を呼ぶ。

「.....しつ、失礼しました、隊長。好きな男というのは、やはり男性IS操縦者のいずれかですか？」

IS学園にいる男子生徒は3名しかいないが、万が一の可能性もあるため、クラリツサは確認を取る。

『そつ、そつだ。織斑一夏……教官の弟だ』
「!?!」

その名前を聞き、クラリツサは驚くしかなかった。あれほど憎んでいた『教官の弟』に、恋慕の感情を抱いたという。

頭の中ではアルバート・ウィルソンを想定してただけあってその衝撃は計り知れず、同時に教官の弟殿はどんな魔法マジックを使ったのかクラリツサは興味を持つ。

『そつ、それで……どうすればいい?このようなこと、教官に聞くわけにもいくまい』

今まで一度たりとも聞いたことのない恥ずかしげな声をしていて、クラリツサは自分の中にある知識を総動員し、ラウラにこう答えた。

「にっ、日本では気にいった相手を自分の嫁にする風習があるとい
います。教官の弟殿に口づけをし、衆人環視の前で宣言すれば大丈
夫でしょう」

『嫁?婿ではないのか?』

日本に向かう前に学習した日本語で、男の場合は婿と呼称する事を
ラウラは覚えていたため、クラリツサに確認する。

「嫁であっています。おそらく隊長は間違えて覚えてしまったので
しょう」

自信満々に答えるクラリツサ。事情を理解している人間がこの場に
いれば間違いを指摘したのだろうが、ラウラは日本についてあまり
詳しくないため、クラリツサの言葉を信じてしまう。

『そうか、嫁か。……しかし、衆人環視の前で宣言とは…難易度が高いな』

「しかし、効果はてきめんでしょう。教官の弟殿も隊長を意識せざるをえないかと思われませう。他にも」

そう言つてクラリツサは自分の中の『正しい日本』の知識を伝授し、ラウラも一切の疑問を持たずクラリツサの言葉を信じる。

「と、こんなところでしょう」

自分が記憶している全ての『正しい日本』の知識を伝え終えるクラリツサ。

『わかった。やってみよう。……もう一つあるのだが、いいか？』
「何なりとお聞きください」

長く喋つていて多少疲れてはいるが、今まで頼つてくれなかつた隊長が自分を頼つていることもあり、クラリツサは続きを促す。

ついでにこの時、黒ウサギ隊の他の隊員達は全員集合した上で副隊長の号令を待っている状態で、何かあればすぐにでも日本へと出発できるようになっていた。

『うむ、実はアルバート・ウィルソンにISの操縦を教える事になつてな。今まで訓練についてはクラリツサに任せきりだったから、どういった風に教えればいいかがわからん。効率的な訓練の方法などがあれば教えてくれるとありがたい』

「了解しました。そちらにつきましては、こちらでの訓練方法などを精査した上で隊長の個人用端末に転送しておきますので、後ほど

確認をお願いします」

『ああ。よろしく頼む、クラリツサ。……以上だ』

「はい。ご武運を祈ります」

そう言っフライングチャネルて秘匿通信を終了し、クラリツサは待機させている隊員達に先程の報告をするため、集合場所へと向かっていく。

クラリツサの取った一連の行動がさほど時間をおかずにIS学園にカオス混沌を巻き起こす事になるのだが、黒ウサギ部隊でそれを知る者は誰一人としていなかった。

16・5 幕間 ラウラの戸惑い (後書き)

そんなわけでもさかの一日二連続更新。

ラウラに間違った知識を植えつけた元凶、クラリツサさんの登場です。

ラウラの『嫁』発言といい、寝室への忍び込みといい、この人って地味に影響力が高いと思うのは自分だけでしょうか？

17 ラウラの変化と巻き起こる混沌（前書き）

第2巻のエピローグ的な部分になります。基本本編どおりですが、ちよっとはオリジナルエピソードも入ってます。

17 ラウラの変化と巻き起こる混沌

ラウラの様子を見に行つた後寮に戻ると、入り口のあたりでセシリアが待つていた。

「アル、どこに行つてましたの？非常事態発令が解除されてから、寮に戻ってきていなかったようですが」

「ああ。山田先生からラウラの様子見てきてくれって言われて、医務室行つてた」

「そうですね………つてラウラ？…一つ聞きますが、何を話されていたのかしら」

ラウラに対する呼び方が変わっている事に気づいたセシリアは、少し不機嫌になりながら会話の内容を聞いてくる。

「主にはあの時の模擬戦についてだな。俺がやった挑発の内容が合つてることを言ってきて、その上で大怪我を負わせたことに対して謝つてきた」

そこまで言うと、セシリアは驚愕の表情を浮かべ、恐る恐るこう聞いてきた。

「そつ、それは本当ですか？同じ顔の別人と入れ替わっていて、騙されているのではなくて？」

「雰囲気変わりがまくつてたから、俺も最初はそれを疑つたさ。だが、本人が否定したからな。それに、自分の仕出かした事の大きさも理解してたようだしな」

「アル、あなた絶対騙されていますわ。『あの』ラウラ・ボーデヴィツヒが自らの非を認め、謝罪してくる事などありえませぬわ。何か

変なものでも食べさせられたか、精神に作用する薬物を投与された可能性がります。

部屋に戻って身体を休めるか、一刻も早く精密検査を受けるべきですわ」

酷い言いようではあるが、『変わった』ラウラの事を知らないセシリアは俺の手を掴むと、半ば引きずるようにしながら男子部屋である1025号室へと向かっていく。

「セシリア、そう思いたい気持ちもわからんわけじゃないが、クスリを打たれた覚えも変な物を食べた覚えもない。俺は正常だって。ウソだと思うなら、今から医務室行ってくるといい」

時間的にはギリギリだが、急げば少し話をするくらいはできるだろう。

「……そこまで言うなら行ってきますが、医務室にいるのがボーデヴィツヒ本人ではなかった場合、本当に精密検査を受けていただきますからね」

セシリアは疑いの眼差しで俺を見ながら手を放し、早足で校舎へ向かっていった。

夕食まではまだもう少しあったので、手早く制服から私服に着替えて自室の前で15分ほど待っていると、セシリアが呆然とした表情のまま、ゆっくりとした歩調で戻ってきた。

「『変わった』ラウラと会ってみた感想は？」

「……人間、あそこまで変わりますのね。わたくし、謝られたことが未だに信じられせんわ」

セシリアはラウラの唐突な変化に驚いているようだ。まあ、あそこまで急激な精神的変化はすごい事だとは思っているので、やはり戸惑いもするだろう。

「だが、いい変化だと思わないか？少なくとも、逆恨みや思考停止して周囲を拒絶してるよりはよっぽどいい」

「それはそうですが、あまりに唐突な変化すぎてついていけませんわ」

そう言いながら溜め息を吐くセシリアは、どこか疲れた雰囲気をしていた。

「やけに疲れてるみたいだが、どうかしたのか？」

「な、なんでもありません。雰囲気の変ったラウラさんと話していて、少々疲れてしまったようです。あはは、はは……はあ……」

乾いた笑いを浮かべながらそう言ってくるセシリアだが、その笑いもすぐになりを潜め、気落ちした表情に変わってしまう。

「何が原因になったのかは知らないが、学年別トーナメントが中止になったことがそんなに悔しかったのか？外的要因で中止になったんだから、代表候補生としての評価にそこまで影響があるとは思えないが……」

代表候補生としては今回の学年別トーナメントで好成績を残しておきたいと思うのはおかしくないが、それでもここまで気落ちするのは少しばかり不自然な気がした。

「きわめて個人的なことなので、気になさらないでください」

「……了解。まあ、相談できるような内容なら話してくれ。多少は力になれるかもしれないから」

様々な感情が混ざり合った表情でセシリアはそう言ってくるので、俺も深く追求するのはやめておく。

「そろそろ食堂も開くし、一夏とシャルルも戻ってくる気配はない。久しぶりに一緒に食事にするか？」

俺が大怪我を負った後、セシリアは鈴さんとペアを組んで学年別トーナメントに向けた特訓を行っていたので、一緒に食事をするのは久しぶりだったりする。

「そう…ですわね。ご一緒させていただきますわ。着替えてまいりますので部屋でお待ちになっていてくださいな」

「おう。また後でな」

「ええ。では後ほど」

お互いそう言いながらいったん別れ、俺は部屋に入ってセシリアが来るのを待つ。

10分ほど待っていると扉の先からセシリアの声がしたので、一緒に食堂へ行き、夕食にするのだった。

夕食を食べ終えても一夏・シャルル・篝さんの3名は戻ってきていないようで、俺とセシリア、他数名の女子生徒はいずれ食事のため

に食堂に来るであろう3人を待つことにした。

大多数の女子生徒は食事が終わるとかなり気落ちした様子で部屋へと戻っていったのだが、その時にギリギリ聞こえる小さな声で何かを呟いていた。その時に何とか聞こえたのがいくつかの単語で、優勝・交際・チャンス・無効の4つの単語は何とか聞き取れた。

(優勝・交際・チャンス・無効……………まさか、違うよな?)

その4つの単語と、学年別トーナメントという大舞台。さらには以前聞こえた『学年別トーナメントで優勝する』という噂話と、『前聞こえた』という噂話と、それらがささやかれた始めた時期。そういったものを合わせると、考えられる言葉はこれだろう。

『学年別トーナメント』で『優勝』した場合、俺が一夏のどちらかと『交際』出来る。

シャルルが転校してくる前から噂自体はあったので、今回の交際の話からは除外されていて、その話は何故か俺達2人に知らせられなまま公然の秘密となり、それが学年別トーナメントが中止になったことから話が『無効』となり、皆気落ちしている。……………納得できないわけではないが、そんな馬鹿な話はないだろう。いくら女尊男卑な世の中とはいえど、そういった色恋沙汰に関してまで男性が蔑ろにされる話など聞いたことがない、というかあってはならないと思う。

(……………想像すると腹がたってくるから、これ以上このことは考えないようにしよう)

軽く頭を振ってバカな考えを強制終了しつつ、セシリアと雑談しながらかなりの時間一夏達を待っていると、食堂のオーダーストップギリギリになつてやっと3人がやってきた。

「3人とも、随分遅かったじゃないか。非常事態の発令自体は随分前に解除されたはずだが、何をやってたんだ？」

「それに関しての説明は後にさせてもらつていいか？先に食事だけでも済ませたいんだが」

3人を代表して一夏がそう言う。確かにオーダーストップギリギリだから、その方がいいだろう。

「そうだな、そうしてくれ」

「ただ、その後はきつちり説明してもらいますわよ。わたくしもアルも心配したんですから」

「うん、わかってるよ。それじゃあまた後でね。アル、セシリアさん」

そう言つて、3人は注文をするためにカウンターへと向かつていった。

それから3人は遅めの夕食を摂り、俺達への説明をするために俺とセシリアの座っているあたりにやってくると、突然一夏が箒さんに向けて話しかける。

「そつえば箒。先月の約束だが」

「ああ、その事が……」

意気消沈という言葉が非常にマッチしそうなくらい雰囲気纏っている筈さんだが、次の瞬間その表情は大きく変わることになる。

「付き合ってもいいぞ」

「。、なに？」

「だから、付き合ってもいいって」

一夏のその言葉を聞いて、筈さんの顔が一気に明るくなり、その表情のまま一夏の襟元を掴む。

「本当か？本当に、本当なのだな！！」

「お、おう」

一夏の返答を聞き、襟元を掴んでいた手を放しながら咳払いを一つすると、筈さんは頬を赤らめながら理由を聞き始める。

「な、なぜだ。り、理由を聞くこうではないか……」

「幼馴染の頼みだからな、付き合うさ」

「そ、そうか！！」

実にあっさりした物だが、それなりに付き合いのある2人だからこんな告白もありだろう。

目の前で行われた幼馴染同士のカップル成立を祝おうと思った次の瞬間に一夏の放った一言で、俺は表情を引きつらせた。

「買い物くらい」

「」

どげしっ!!

篝さんの表情が一瞬にしてこわばり、次の瞬間には腰のひねりの入った正拳が一夏の頬にめり込んだ。

「そんなことだろうと思ったわ!!」

どごおっ!!

正拳をくらってその場に崩れ落ちた一夏のみぞおちに向かって、篝さんのつま先がめり込む。告白をスルーされてしまった篝さんは、怒ってその場を去っていく。

「一夏って、わざとやってるんじゃないかって思うときがあるよね」
腹を押さえてうずくまる一夏に向かって、自分もしゃがみながらそう言うシャルル。

「日本語が難しい事はこちらに来る前に学習していて思ったことですが、今の一連の流れはありえませぬ。一夏さん、反省なさったほうがよろしくてよ?」

セシリアも一夏に向かってそれだけ言うと席を立ち、自室へと戻っていく。

「一夏、さすがに今のはなしだろ。篝さんも怒って当然だぞ」

ああまで上げておきながら、垂直急降下クラスの勢いで落とせば怒って当然だ。

「おっ、おれが……なにをしたっていうんだ……」

……ありえねえ。一夏のやつ、自分が付き合っつて言った時の皆さんの嬉しそうな表情から、『付き合ってもらおう』の意味が『男女交際的な意味で』付き合ってもらっつてことを理解してねえぞ、おい。

「……付き合っつて言葉の意味を考えろ。わからなければ辞書を引け」

自分でも思った以上に冷たく言い放ったが、友人の色恋沙汰にまで口を出すつもりはないので与えられる最大のヒントを言っておく。

「織斑君、アルバート君、デュノア君。朗報ですよ」

そんな感じで一箇所に集まっていた俺達に、山田先生が話しかけてくる。

「なんとですね!! 今日から男子の大浴場の使用が解禁です!!」

その言葉を聞き、大きな風呂が好きな一夏は先程のダメージも気にならないくらい嬉しそうな笑みを浮かべながら、こう言った。

「おお!! そうなんですか? てつきり来月からになるものとはかり思っていましたよ!!」

事前の通達事態はあったのだが、細かい日程に関してはまだ決まっていなかったもので、一夏は早く大きな風呂に入りたいと言っていたのだが、ようやく念願がかなったようだ。

「それがですね、今日は大浴場のボイラー点検があったので元々生徒さん達は使えない日だったんですが、点検自体はもう終わったので、織斑君をはじめとした男子生徒に使ってもらおうって事になりました」

その言葉を聞き、輝くばかりの笑顔で山田先生に礼を言う一夏だが、シャルルの本来の性別は女性。男子の俺達しか使っていない大浴場に連れて行くのは非常にまずい。

(さて、どうしたものか……)

体調不良での辞退は今までガツツリ動いていたから使えない。となると、シャルルだけ、ないしは3人全員の入浴時間を意図的にずらせるか、脱衣場までは一緒に行動して、大浴場では別行動をするしかないだろう。

「山田先生、俺はちょっと調べ物があるので1人で大浴場を使いたいんですが、そういうことは可能ですか？」

もし可能なら俺はその手を使いたい。

「こちらとしては可能な限り3人一緒に入ってもらえると助かります。調べ物は後回しにしてもらってもかまいませんか？」

だが、それも山田先生の一言で不可能となったので、一つだけ確認しておく。

「山田先生。一つ聞いておきたいんですが、大浴場の使用自体は来月以降も日によっては可能なんですよね？」

もしそうなら、今後は誰か1人が意図的に大浴場の使用をやめ、それをローテーションさせれば疑われる事もなくなるだろう。

「ええ。詳しい日程に関してはもう少し調整が必要ですが、来月以降も織斑君達も大浴場が使えるようになります」

「わかりました。ありがとうございます。それじゃあ俺達は入浴の準備してきますね」

そう言っただ俺は一夏とシャルルを連れて、一端部屋まで戻ってくる。

「なあ、アル。何か良い手はないか？シャルルも一緒っていうのは……さすがにアレだろ」

「さすがに3人一緒に入るっていうのはマズイと思うんだ」

部屋に入った瞬間、一夏とシャルルは俺に話を振ってくるので、考えを伝える。

「脱衣場までは一緒行動するしかないが、お互いに離れて着替えれば問題はないし、湯ぶねに入る時間とかも示し合わせれば何とかなるだろ」

「そうだね。そうすればお互い恥ずかしい思いもせずに済むな」

「うんうん。こういつた時に考えられる人がいると、ホント頼りになるよ」

そう言っただ、二人は俺をほめてくる。悪い気はしないが、状況が状況だからあまり嬉しくない。

「あとは大浴場使用日ごとに誰か1人あえて使わないようにするくらいしか思いつかん。今日は俺が辞めとくよ。元々一夏ほど風呂好きってわけじゃないから、シャワーで十分だし」

「でもそれだと山田先生から怪しまれないかな？理由はどう説明するの？」

シャルルから来る当然の質問に、俺はこう答えた。

「……………普段女子が使ってるって事を意識しすぎて、大浴場の使用を辞退したとでも伝えてくれ。理由としてはそれなりに筋が通ってるだろ」

これは俺の本心でもあるので、そこまで疑われる事もないだろう。

「たっ、確かにそうだな……………そうやって考えると、なんかやばい事してる気分になってくるな」

俺の発言を聞き、急に意識し始める一夏。先程のスルーっぷりはどこへいったと言いたくなる。

「そこまで意識しなくてもいいんじゃないかな？山田先生を待たせてもいけないから、早く準備しよう」

そう言っつてシャルルが入浴の準備を始めるので、一夏もそれに習っつて準備をする。

「それじゃあ、行ってくるね」

「いつ、行ってくる」

入浴準備を終えて、あっさりした表情のシャルルと、微妙に緊張した表情の一夏が大浴場へと向かっていく。

俺もその間にシャワーを浴びておく。

それから部屋でボーっとしていると一夏たちが戻ってくるので、一声かけてみる。

「……………何があった？やけに顔が赤いが」

2人とも顔を真っ赤に染めているので、のぼせたとかそういうわけではないだろう。

「なっ、なんでもないよ！？ねえ、一夏！！」

「ああ、そうだよな！！シャルル！！」

驚いてそう言い返してくる2人だが、やはりどこか落ち着きがなかった。

「……………まあいい。山田先生は何か言ってたか？」

理由が生々しいので、先生としても何か言わざるをえないだろう。

「えっと、『アルバート君たちが大浴場を使う日は女子生徒さんたちは大浴場を使いませんから、そこまで意識しなくても大丈夫ですよ』だって」

山田先生からのメッセージを伝えてくるシャルル。……………たしかに意識しすぎるのもよくはないか。

「山田先生には明日の朝一にでも『前向きに善処する』とでも言うておくか」

「そうした方がいいだろうな。……少し早いけど、俺寝るわ」

一夏はそれだけ言つと、そそくさと自分のベッドに入つてしまふ。

「シャルル、何か一夏にしたか？」

一夏があそこまで取り乱すところははじめて見るので、一緒に入浴していたシャルルに聞いてみる。

「あつ、あはは……ちよつとね。……僕も寝るよ。お休み、アル」

「まあ、お互いそういうならいいけどな。……俺も寝るか」

シャルルもそれだけ言つて自分のベッドに入る。2人の慌てぶりからすれば、絶対に『ちよつと』で済ませられるレベルじゃないように思えるのだが、それを言うのも野暮なので気にしないでおく。

こうして俺達3人は眠りについて翌日を迎える。

そう、人間関係の変化をぎっしりと詰め込んだ怒涛の一日のカウンtdownは、この瞬間からスタートしたのだった。

翌日、いつものような生活リズムで起き、弁当を作りながらセシリアに料理を教え、朝食を食べ終わると、一つの変化があった。

「一夏、アル。悪いんだけど先に部屋に戻っていてくれるかな？」
「ん？どうかしたのか、シャルル」
「俺達に手伝える事なら手伝うが？」

食事を終えたので登校の準備をしようとしたところで、シャルルが何かを決意した表情で俺達にそう告げる。

「朝のホームルームには絶対に顔を出すから、心配しないで先に行つてて」

「……わかった」

「無理だけはするなよ」

俺達はそのまま登校準備をするためにいったん部屋に戻り、そのまま登校してシャルルがやってくるのを待つ。

だが、ホームルーム開始直前になってもシャルルが現れる気配はなく、山田先生がやってくるのだが、何故かふらふらしていた。

(何があつたんだ？あんなにふらふらして)

山田先生の状態を不思議に思いながらも、先生はホームルームを開始する。

「み、みなさん、おはようございます……」

声にも覇気がないので、本格的に体調不良かこの時は思ったのだが、後々冷静になって考えると原因は別にあつた。

「今日は、ですね……皆さんに転校生を紹介します。……転校生といえますか、既に紹介は済んでいるといえますか、ええと……」

珍しく山田先生の言動の歯切れが悪い。しかもまた転校生らしい。当然ながら転校生と聞きクラス一堂騒がしくなる。中国、フランス、ドイツときて、今度はアメリカあたりが代表候補生を送り込んできたのだろうか？

「じゃあ、入ってください」

「失礼します」

だが、教室の外から聞こえた声は聞き覚えのあるものだった。

「シャルロット・デュノアです。皆さん、改めてよろしく願います」

本来の性別である女子用の制服に身を包んだシャルル…否、シャルロットが一礼する。当然ながらクラス一同が呆然としたまま、シャルロットの礼に対して頭を下げる。

「ええと、デュノア君は、デュノアさんでした。という事です」

憂いの表情を浮かべてそういう山田先生。この後部屋割りやら何やらを再び考える事になるのが憂鬱なのだろう。

「え、デュノア君って女？」

「おかしいと思った！！美少年じゃなくて美少女だったわけね」

頭の再起動が終わったクラスメイト達が思い思いの言葉をつむいでいく中、気づいてほしくない事を二つ言われてしまった。

「って、織斑君、ウイルソン君！！同室だから知らないってことは

「ちよつと待つて！！確か昨日つて男子が大浴場使つたわよね！？」
その言葉が引き金となったのか、俺の後頭部に非常に冷たいモノが押し当てられているような錯覚を覚えてしまつ。

「後ろを向かないでくださいね、アル。今あなたの顔を見たら引き金を引いてしまいそうですから。………それで、何か言い残す事はありますか？」

絶対零度を錯覚する冷え切つた声でセシリアがそう言ってくるので、俺は正直に話す。

「たつ、確かにシャルル…じゃない、シャルロットが女だとは知っていたが、やましい事は何一つしていない。本人にも確認してくれ」「デユノアさん？」

俺のその言葉を聞き、シャルロット？にそう問いかけるセシリア。普段見たことのない冷徹なまでのセシリアの雰囲気にはクラス全体が飲み込まれ、誰一人として動いていないようだった。

「ほつ、本当だよ。アルは僕の裸も見てないし、大浴場に一緒に行つていないから見せたこともない。見せろつて言われた事もないよ」
冷たい気配を一身に浴びながら、そう答えてくれるシャルロット。

「一夏さん、今の発言は本当ですか？」
「あつ、ああ……昨日アルは普段女子が使つてる場所だつて意識しすぎて、大浴場に行かなかつた。だから、シャルルの裸は一切見ていない」

「……なるほど、事実のようですね。……いくつか気づいたこともあるのですが、それは黙っておきましょう」

実家で会社を経営しているらしいセシリアは、人の話を聞いてある程度ウソか本当かを判断できるようで、それだけ言つと後頭部に押し当てていたレーザーライフルを俺の頭から放し、自分の席に戻つていき、同時に張り詰めた空気も緩みかける。

ドゴオンッ！！

だが、次の瞬間に教室の入り口が物理的に崩壊し、甲龍を展開した鈴さんが怒りの表情を浮かべて一夏を睨みつける。

「いちかあ〜っ！！」

その叫びと共に衝撃砲が起動し、エネルギーチャージを開始する。

「えっ！？ちよつと待て！！死ぬ、死ぬ！！俺絶対死ぬう〜！！」

戦闘出力の衝撃砲が生身の人間に当たれば、大怪我ではすまない。セシリアは何とか思いとどまってくれたが、本当に撃つ人がいるとは思わなかった。

だが、意外なところから救いの主は現れた。

鈴さんが破壊した反対側の入り口から入ってきたその人物はISを高速展開しつつ瞬間加速で一夏の前まで瞬時に移動すると、自身の第3世代兵器を起動させる。

「……………あれ？死んでない」

突然の事態に目を閉じていた一夏が恐る恐る目を開けると、自分の前に漆黒のISが立って右手を突き出していて、AICで衝撃砲を停止させたようだった。

そう、ラウラが自らの専用機『シユヴァルツエア・レーゲン』で一夏を守ったのだった。

「ラウラ！！助かったぜ、サンキュ！！」

そう言うてはしゃぐ一夏だったが、ラウラの次に取った行動は色々な意味ですごいものだった。

「むぐっ！？」

ISを纏ったままラウラは一夏に向き直ると、そのまま一夏のあとに手を添えてクラスメイトと鈴さんが見ている中でキスをしてから、恥ずかしがりながらこう言った。

「おっ、お前は私の嫁にする！！決定事項だ、異論は認めん！！」

ラウラのその発言を聞き、1年1組にいた人間全ての時が一瞬停止する。

「……………ええええええええええっ！！……………」

今まで憎んでいたはずの一夏に対してそうだったことも驚きの声をあげるクラスメイトたち。鈴さん、篝さん、シャルロットに目を向

けてみると、ぷるぷると細かく震えているようだった。

「は？………はあ！？」

そしてその発言をようやく理解した一夏が驚きの声をあげる。それと同時に先程の3人も再起動して一夏に突っかかり始めるのだが、『嫁』宣言をしたラウラはISの展開を解除してからこう言った。

「ふむ。クラリツサの言ったとおり効果はてきめんだな。これで私の嫁一夏に近づくものもいなくなるだろう」

そう言いながら自分の席に戻るラウラだが、セシリアの席の近くで一度立ち止まりセシリアに向けて何かを呟くと、自分の席につく。

結局この混沌カオスは織斑先生が現れるまで続き、騒動の原因となった俺達専用機持ち + 篝さんは全員でクラスカラスの罰掃除をやらされる事になったのだが、十分甘い処分だろう。

17 ラウラの変化と巻き起こる混沌（後書き）

そんなわけで2巻のエピローグでした。

ラウラがセシリアに何を言ったかは読者諸氏のご想像にお任せしますが、そこまで過激な台詞ではありません。

次回からは3巻の内容である臨海学校、別名福音編になります。

どういった内容になるかはある程度決めてありますが、先に言っておくとアルバートの二次移行はまだ先です。

18 セカンドデート（前書き）

今回から原作3巻の内容に入りますが、現在スランプ気味のため原作との違いが上手く書けませんでした。そのため読みづらいかもしれませんが、ご容赦ください。

18 セカンドデート

シャルロットが自分から男装をばらした事を発端に巻き起こった混沌オスな出来事から早数日が経過。カレンダーの月も変わって、今は7月の第一土曜日。

あの日の放課後、シャルロットが女性だったと判明したため、当然ながらシャルロットは別室へと移動になったのだが、デュノア社側の根回しがよっぽど上手かったらしく、学園側はシャルロットが本当に男子生徒だと思っていたためベッドやデスクなどはそのまま俺達の部屋に残される事になった。

ラウラもクラスの皆に謝った上で周囲を拒絶する事もなくなったのでクラスに打ち解け、それなりに人付き合いをするようになったのだが、新たな問題も発生している。

食事中は一夏と同席になった上にべったりとくっついているし、実習授業前にISスーツに着替えている時に更衣室に突撃してくる事もある。大浴場も本格的に使えるようになったのだが、一度2人で入浴していたらラウラが突撃してきて大騒ぎになったし、朝も一夏が寝ているベッドに忍び込んできたりもした。

そんな感じで意図せずに大騒ぎを起こすラウラの行動は、一夏に好意を寄せる篤さんと鈴さんとシャルロットとしてはあまり歓迎できる物ではないだろうし、俺としてもセシリアに変な誤解を与えかねないと思っていた。

だが実際のところは違って、ラウラの仕出かす騒動に対するセシリアのリアクションはラウラの行動そのものに対する驚きはある

ものの、焦燥や危機感などはあまり感じられなかった。

「……はあっ……セシ、リアに……ぜっ……たい…何か、言った
だろ……ラウラ……はあっ…」

どちらかというときセシリアらしくないその行動に、放課後の自主練
中に原因の一端を担っているであろうラウラへ質問してみる。

怪我の痛みもなくなり普通に運動できるようにはなったが、スカイ・
ブレードの修復はまだ完了していないので、最近ではラウラがコーチ
について基礎体力作りをメインにしている。

当然ながら軍隊式のもののだが、まだほんの少し怪我の影響が残
っているので、多少なりとも手加減されている。

それでも目標時間を設定されてその時間＋5秒で指定距離を走る
のはそれなりにキツイものがある。

「ん？セシリアに対してか？私の目的は一夏だけで、お前に対して
その手の情は抱いていないと言っただけだ」

「それ、だけか？……他にも…何か……言っただろ…」

あの混沌カオスな一日で始めて知っただが、セシリアは行動が過激にな
ることがあるようで、ここまで連続して騒動が起これるとまた過激な
行動を取る可能性もありうると考えているのだが、セシリアからそ
ういった片鱗は見られない。

「ふむ……言っただけには言ったが、セシリアとの約束で教える事は出
来ん。諦める」

そう言われたらこちらとしても追求しようがなくなるので、引き下がるしかない。

「わかったよ……それで？他には何をやるんだ？」

今は自主訓練中、しかも教わる側なので次に何をするかを聞く。

「走った後でそれだけ話せる余裕があるようだし、次は先程よりも短い時間で走ってもらおうぞ。目標時間は」

そう言っただけでラウラは目標時間を告げ、俺はその目標時間を目指してひたすら走る。

ひたすら走ったため自主訓練終了時間間際にはかなり疲れたのだが、おそらくはこういった考えが出来るだけまだマシなのだろう。

今後どのような訓練になるのか全く予想できないまま、この日の自主訓練は終わるのだった。

寮に戻ってシャワーを浴び終えたのと同時に部屋の扉が開き、一夏が戻ってくる。

「おう、お帰り一夏。今日はちょっと遅かったな」

「模擬戦やった後に色々話し込んでたからな。それでだよ」

「順位の入替わりはあったのか？」

学園に入学してから今まで、仲間内（メンバーは俺、セシリア、一夏、篝さん、鈴さん、シャルロット、ラウラの7名）で行った模擬

戦は全て勝率を出して順位をつけている。

現在の状況としては、上からシャルロット、鈴さん、セシリア、一夏、俺、篤さん、ラウラの順だ。

この順位もある意味当然で、訓練機の打鉄を使っている篤さんは貸し出しの関係上いつも模擬戦が出来るとは限らないし、ラウラはまだ誰とも模擬戦をしていないので暫定最下位、スカイ・ブレードの修復が終わっていない俺も最近模擬戦をしていないのでどうしても順位が低くなってしまう。

やはり高速切替ラビット・スイッチの使えるシャルロットはかなり強く、記録ログを見てある程度どういった動きをするかはわかってきたのだが、砂漠ミラーシユ・デ・デザの逃げ水イトで攻撃リズムをコントロールされると対処しきれなくなるため、勝率自体かなり高い。

鈴さんやセシリアも代表候補生の操縦技量の高さを見せ付けるかのように2人して高い勝率をマークしているが、セシリアは俺に負ける事もあるので、その分若干勝率が落ちて3位になっている。

逆に勝率が低いのは俺と一夏だ。俺は誰とでもそれなりのレベルで戦う事は出来るようにはなってきたているものの、地力の差で鈴さんやシャルロット相手では分が悪く、戦術理解度や機体の詳細スペックを知るセシリアには若干有利から五分程度、一夏や篤さん相手だと戦術の取り方次第でそれなりに有利に戦う事ができる。

それでも零落白夜の攻撃力の高さや篤さんの適性レベル以上の操縦センスにやられて負けてしまうことがあるので、まだ戦術運用が甘い部分があるのだろう。

一夏も以前シャルロットにアサルトライフルを借りて試射した経験によって射撃武器の特製をかなり理解してきている。零落白夜の使

用ペーヌなども掴んできている為、俺と同じ様に誰とでもある程度は戦う事が出来るようにはなったが、期待のピーキーさが災いして勝率の伸び自体が悪くなってしまうている。

ラウラが本格的に参戦すれば確実に順位の変動はあるだろうが、現在の順位も今日の模擬戦の結果次第ではまた変わってくるかもしれない。

「順位の入替わりはなかったけど、やっぱり皆一人不参加っていうのに慣れてない感じだな」

「遅く見積もっても今月半ばには修復も終わると思うから、俺の復帰はそれまで待ってもらおうしかないな」

機体の修復状況は現在65%を超えたのでもつと早く復帰できる可能性もあるが、そこはスカイ・ブレードの修復能力次第だろう。

「俺は詳しくは知らないけど、あれだけ派手にやられて1ヶ月で修復が終わるなら十分早いんじゃないか？」

「機体ごとに修復速度とかは個体差があるみたいだから、それに関しては何とも言えん」

「そうだな。……食堂行く前にシャワー浴びさせてもらっていいか？ ずつと動いてたから汗が気持ち悪い」

「構わん。まだ時間もあるしな」

時間的に食堂が開く時間も近くなっているが、その前に一夏が汗を流したいと言ってくるので了承する。

コンコン

「はい、今開けまーす」

一夏がシャワーを浴びている間部屋の中でボーっとしていると、部屋の扉がノックされた音がするので扉を開けると、そこにいたのはセシリアだった。

「セシリア。どうしたんだ？」

「アル。一つお聞きしますが、明日は何か予定はありますか？」

「明日？来週の臨海学校用の水着買いに行こうと思ってるくらいだけど、それがどうした？」

俺のその言葉が意外だったのか、セシリアは一瞬驚いた表情をした後、恥ずかしそうに俯きながらこう言った。

「その、わたくしも一緒にさせてもらいたいのですが。その……一緒に水着を選んでいただけますか？」

また難易度の高いことを言ってくれる。……だが、せっかく誘ってくれたのに断るのも気が引けるので、こう言っしかない。

「それはいいけど、あまり過度な期待はしないでくれよ？」

「だっ、大丈夫ですわ。わたくしとしても、そこまで派手な物を選ぶつもりはありませんから」

まあ、そう言うなら大丈夫だろう。

「出発時間はどうする？セシリアが他に予定あるようならあわせるけど」

「わたくしは他の予定はありませんから、アルが決めてくださって

結構ですわ」

「そうか？じゃあ………9時30分頃に部屋に迎えに行く」

以前一緒に出かけた時のように待ち合わせをして、ナンパ野郎に絡まれるのはセシリアも鬱陶しいだろうからそう言う。

「えっ、あの………待ち合わせはしないのですか？」

驚いた表情をしながらセシリアは確認をしてくるので、俺は理由を込みで説明する。

「前一緒に出かけた時みたいにナンパ野郎共に絡まれるのはセシリアも面倒だろ？それなら学園を出発するところから一緒に行動した方がいいと思っただけけど」

「そっ、そうですわね。それでは、その時間をお願いしますわ」

俺の答えに納得したものの、驚いた表情のままセシリアはそう言うてくる。俺の答えが予想外だったらしい。

「おう、わかった。また明日な」

「ええ。………それではこれで失礼いたしますわ」

部屋から去っていくセシリアの後姿を見ながら、明日はなるべく表情を崩さないようにしようと思うのだった。

翌日、時間どおりにセシリアを迎えに行き、学園に設置されているリニアステーションへ移動しながら、セシリアに確認をする。

「そういえばセシリア、買い物に行くのは駅前でいいよな？」

「ええ。以前2人で訪れてから1人で何度か行きましたが、あそこの品揃えはかなり良いですから問題ありませんわ」

ステーションへ到着し、料金を払ってリニアが来るのを待っていると俺達に声がかかる。

「あれ？アルにセシリアさん。2人して買い物か？」

「……そういう一夏はシャルロットと買い物か？」

声をかけてきた人物は一夏で、シャルロットも一緒だった。

「ああ。シャルロットって女子用の水着もってないって言ってたし、俺も臨海学校用の水着買おうと思ってたからついでに誘ったんだよ」

「っ、ついでに……」

そういうのは口に出さないのがマナーじゃないのか？シャルロットがすっげー微妙そうな顔してるぞ。

「い、一夏さんらしいですわね……」

セシリアも若干頬を引きつらせながらそう言う。

「そういうアルたちはどうしたんだよ。やっぱり臨海学校用の水着買いに行くのか？」

「ええ。駅前のショッピングモールには何度か足を運んだのですが、良い水着が多くて困ってしまいました。アルに助言を頼もうと思い

ましたの」

俺が一夏の問いに答えるより早くセシリアが口を開き、理由を説明する。

「なるほどね。頑張れよ、アル」

「セシリアさん、いいなあ……」

女性用水着を選ぶ事に対して激励してくる一夏と、そういった頼み事が出来る男性がいることに対して羨ましがるシャルロット。こちらとしても意中の女性に頼られるのは嬉しい。

そういった気持ちもあるにはあるが、服や水着を選ぶのはかなり気を使うことを理解してほしい。当然このことは口に出して顰蹙ひんしゅくをかうつもりもない。

そんな事を言っている間にリニアが到着したので、俺達4人は移動を開始。駅前のショッピングモールへ着くのだった。

リニアを降りて改札口へ向かおうとするアルバートとセシリア、一夏とシャルロットの4人を自販機の陰から見つめる2人の美少女の姿があった。

ひとりは躍動的なツインテール、ひとりはポニーテールの髪形をしたその少女達の名前は、篠ノ之箒と凰鈴音といった。

「……………ねえ」

「……………なんだ？」

「……………あれって、手え握ってない？」

「……………握ってるな」

2人の視線の先では一夏がシャルロットの手を握っていて、どこか恥ずかしそうにしているシャルロットの姿もあった。

それを見る二人は表情がどこか暗く、視線の焦点もあっていないため非常に怖かった。

この2人が行動を共にしている原因は様々な偶然が重なった結果だ。アルバートがセシリアを部屋まで迎えに行ったため、当然2人が出かけることは箒の知ることとなり、箒は臨海学校用の水着を選んでいなかった事を思い出すと、アルバートとセシリアのように一夏に自分の水着を選んでもらうために一夏の部屋に向かった。

だが、部屋には鍵がかかかっていて誰も居ないのは否応なくわかってしまい、意気消沈したまま部屋に戻ると途中の廊下から外の様子が見え、一夏とシャルロットが一緒に出かけようとしている姿を目撃する。

箒はその姿を見て急いで私服に着替えて寮の入り口まで走ると、同じ一夏の姿を見たらしい鈴音と出くわしたため、2人は無言で頷く

と一夏の追跡を開始、今に至るのだった。

「そっか、見間違いで白昼夢でもなく、やっぱりそっか。よし、殺そう」

「ほお、楽しそうだな」

無意識の内にISアーマーを部分展開して今にも殴りに行きそうな鈴音だが、その行動は自分達の背後からかかった声で中断せざるをえなくなる。

二人が声のかかった方向を振り返ってみると、そこにはラウラ・ポ―デヴィツヒがいた。

「む、ラウラか……」

「なっ！あ、あんたいつの間に!？」

「そう警戒するな。今のところお前達に危害を加えるつもりはない」

「あんな事やっというて信じられると思う？」

学園に打ち解け始めたとはいえ、自分よりも弱いはずのアルバートを滅多打ちにした事から警戒する鈴音だが、ラウラは警戒したままの鈴音に向けてこう言った。

「そっか……そうだな……」

自分のした事の重大さを理解しているラウラは少しだけ寂しそうな表情をすると、箒と鈴音の横を通して改札口に向かおうとする。

「ちよっ、待ちなさいよ」

「どうするつもりなのだ？」

その行動を驚きながら止める二人を見ながら、ラウラはその目的を告げる。

「決まっているだろう、あの中に混ざる。それだけだ」

ラウラの視線の先では、アルバートと腕を組んだセシリアが、2人で改札口へ向かうエスカレーターで下へ降りていこうとしていた。

「みつ、未知数の敵と戦うには情報収集が先決でしょ!？」

「無闇に突っ込んで、痛い目を見ることになる。あの2人の関係がどういったものか見極めるべきではないのか？」

「……なるほど、一理あるな」

頬を赤らめながらそう言う二人の意見を聞き、ラウラは目線だけで一緒に行動するか問いかけると、箒も鈴音も同意を示し、奇妙な追跡トリオが結成される事になった。

そうして追跡トリオが一夏とシャルロットの様子をチェックを始めるが、3人の内2人が開始30分で当初の目的を外れていた。

「なつ、なんて理想的な恋人同士なの?あの2人」

「うっ、羨ましい……」

鈴音と箒の2人は一夏とシャルロットの関係を見極める事を第一目的としていたはずが、いつの間にかアルバートとセシリアのデートをデバガメし、その様子を一夏と自分がデートしている姿に置き換える作業に没頭していた。

この間にもラウラは単独で当初の目的を1人で寡黙にこなそうとし

ていたのだが、これは今までの生活環境の差が出たとしか言いようがない。

箒は用心保護プログラムを受けた事を除けばいたって普通の10代の少女だし、鈴音も代表候補生として軍に所属してはいるものの、その期間は約1年と短いため、私情を優先してしまうことがある。

そんな2人の目の前では頬を赤く染めながら水着姿を見せるセシリアと、その姿を見ながら普通の表情を装って感想を告げるアルバートの姿があった。しかもアルバートはセシリアが試着室に入っている間に何度となく深呼吸を繰り返して、こういった事に慣れていないのは明白だった。

当然、鈴音も箒もアルバートたちからは見えづらいが自分達は二人を観察できる場所を選んで、ISもステルス潜伏モードを使用しているので早々現在位置がばれる事は無いと思っていたのだが、その予想は外れる事になってしまう。

2人がデバガメを始めてから何度か行われた、セシリアが水着を選んで試着室へ入り、アルバートが深呼吸しながら待っている姿を見ていると、突然試着室のカーテンが開いて私服姿のセシリアが出てくる。

怒りと羞恥が混ざり合った表情で鈴音と箒のいる場所へ向かってきていて、自分達がどこにいるかはつきりと理解しているようだった。

「鈴！？ステルス潜伏モードを起動しているのではなかったのか！？」

「あたしだつて知らないわよ!!とにかく一端逃げ
」
『逃がすとお思いですか？鈴さん』

静かな怒りを秘めた冷淡な声の秘匿通信プライベートチャンネルが届き、その冷たさに鈴音の動きが停止する。それからアルバートの動きも数秒間停止すると、セシリアに遅れながら表情筋が全て凍りついたような無表情でゆっくりと近づきながら、秘匿通信プライベートチャンネルが着信する。

『鈴さん、覗き見は感心しないな。いつから見ていたのか、説明してもらおうからね?.....逃げんなよ、コラ』

アルバートらしくない非常にドスの聞いた声を聞き、鈴音は2人が本気で怒っている事を悟るのだった。

そうして鈴音と篝は同時に思った『ああ、こんなことやるんじゃないか』と。

セシリアの水着選びを中断し、その場で鈴さんと篝さんに事情聴取（当然ながら店側に配慮して軽く理由を問いただすだけ）を行った後、鈴さんが今までの光景を甲龍の記憶領域に保存していたため、

そのデータは絶対に削除するように言い含めた。

その後二人を伴って水着コーナー内にあるもう一箇所の試着室に行くと、シャルロットと一夏が正座をして山田先生から注意を受けていた。

「……えっと、どういう状況ですの、これ？」

「……知らん。一夏がまた何かやらかしたんだろう」

セシリアの問いかけに俺がそう答えると、意外な人物の声が出た。

「一夏とデュノアと一緒に試着室に入っていたからな。それを注意しているんだ。お前達こそ、やけに不機嫌じゃないか」

「織斑先生。先生も水着のご購入にいらっしやっただのですか？」

セシリアの言うとおり、織斑先生はいつもどおりのスーツ姿ではあるのだが、その手には購入候補の水着が何着かあった。

「そんなところだ。お前達が不機嫌な理由も教えてほしいものだがな」

俺達が2人して不機嫌なのが珍しいらしく、織斑先生はその理由を聞いてくる。

「デートをデバガメされたら、誰だって不機嫌になりますわ」

「しかも鈴さんは甲龍の記録領域に保存してるんですから、手に負えませんよ」

俺達の答えを聞き、気落ちしている鈴さんと篝さんに気づくと織斑先生はこう言った。

「篠ノ之、凰。デバガメをするなどは言わんが、ISの記録領域を使うのはやめろ。凰は後でデータを削除しておけよ」

「……………はい、わかっています」

気落ちした声でそう答える鈴さん。他人のプライベートを勝手に記録したのだから当たり前だ。

そうしている内に一夏とシャルロットに対する山田先生のお説教も終わり、山田先生が何かを思い出したように俺達を連れてどこかに行こうとするので、俺とセシリアは中断していた水着選ぴを再会し、最終的にはセシリアは青のパレオつきのビキニを選ぴ、それが終わると俺は一端別行動をとって、自分局の水着としていたって普通のネイビーカラーの男性用水着を選んだ。

それが終わると時間としては昼食時となっていたので一緒に来ていたらしいラウラとも合流して7人で昼食にしたのだが、俺とセシリアの分の代金についてはデートの見物料という事で鈴さんと篝さんが快く出してくれた。その少し前に、セシリアからちょっと強めの殺気が二人に対して発せられていたような気もするが、気のせいだろう。

それから7人でショッピングモール内のいろいろな場所へ行ったのだが、主な行き先は女性用の洋服店だった。

理由は簡単で、ラウラは今まで軍での生活一色だった為に私服を持つておらず、それに驚いた女性陣一同がラウラを着せ替え人形もどきにして様々な洋服店を物色し、所持数としては一般的な同年代の女子と比べると少ないものの、それっぽいい服を何着か購入した。

その姿は男からすればかなり綺麗で、常に着けている黒の眼帯が逆に違和感を与えていたのだが、ラウラから眼帯をつけている意味を聞かされ、一同納得するしかなかった。

ラウラとしても友人との買い物は初めてだったようだし、デートをデバガメされたことを除けば実に楽しい一日だった。

18 セカンドデート（後書き）

そんなわけで原作3巻冒頭の水着選びデートの様子でした。

福音戦でのオリジナル展開が全くつかばず、それに引きずられるように難産気味でした。

オリジナルイベントが一つは思い浮かんでいるのですが、それに付随した各登場人物の行動変化が上手く思い浮かびません。

次回以降はまた2週間ペースになってしまうかもしれないことを予め言っておきます。

19 臨海学校と昔話（前書き）

最新話です。何とか書き上げる事ができました。

悩みの種だった原作3巻の独自展開もやっと固まったので、いつもの投稿ペースに戻るかもしれません。

今回にも独自解釈が含まれていますので、嫌いな方はご容赦ください。

19 臨海学校と昔話

IS学園における臨海学校は『ISの非限定空間における稼動試験』が主な目的になっている。

つまり、いつもの7人から一夏と篝さんを除いたメンバーには各国から新装備がどっさりと送り込まれ、それを装備して性能評価を行うのが主な仕事だ。

一夏と篝さんが除かれている理由は簡単で、一夏は拡張領域バースロットが空いていないので装備の量子変換インストールが不可能なため、専用機の開発元である倉持技研から新装備が送られてくる事がないし、篝さんはそもそも専用機を持っていない。

ただ、学園としては生徒を二人も遊ばせておくことはないだろうから、一夏は各国のIS関連企業が送ってきた汎用装備のターゲット役をやる事になるだろうし、篝さんも打鉄を装備して汎用装備の性能評価で忙しくなるだろう。

それでも、初日から『兵器まみれの物騒極まりない臨海学校になるか』と問われると、違つと答えることが出来る。

この臨海学校でISを纏うのはまだまだ遊びたい盛りの十代女子がメインなのだ。現場についての初日が主だが、思いきり海で遊ぶ事ができる。

もつとも、これも世界中の国から新装備が山ほど送られて稼動試験の準備が出来るまで1日はかかるので、その間生徒を無意味に拘束するくらいなら海で遊ばせてあげようという学園側の配慮なのかも

しれない。 何がしたいのかというと、

「海っ！！見えたあっ！！」

トンネルを抜けたバスの中ではしゃぐ人がいても、何一つおかしくないのだ。

「日本の海は初めて見ますが、綺麗ですわね」

隣の席にいるセシリアが、海を見て一言感想を呟く。

「俺も日本の海は久しぶりだから、今日一日は楽しむつもりだよ」

セシリアが窓側、俺が通路側の席にいる状態だ。バスに乗る前にセシリアの表情が少し疲れ気味だったことを考えると、水面下では座席位置を決める際かなりの交渉合戦が繰り広げられたのだろうが、気づかないフリをしておいた方がいいだろう。

セシリアは私服姿なのだが、以前俺がプレゼントしたネックレスを着けていて、服装もネックレスにあわせたコーディネートをしているように思える。

「この間のデートの時にはつけてなかったみたいだけど、今日はそれ着けてるんだな」

「えっ、ええ。せっかく頂いた物ですから、今日は着けてみようと思いましたが」

俺としても送った甲斐があるが、皆がいる時にそれを着けるのは余計な火種になりかねないと思うのは気のせいだろうか。

「そろそろ目的地に着く。全員ちゃんと席に座れ」

そう思っていたのだが、これといった問題は起こることなく目的地である旅館へと到着し、各クラスごとに整列。1組の担任であり、学年主任でもある織斑先生から注意事項が伝えられる。

「それでは、ここが今日から3日間お世話になる花月荘だ。全員、従業員の仕事を増やさないように注意しろ」

「「「「「よろしくおねがいします」「」「」」」」

織斑先生の言葉の後、全員で挨拶をする。この旅館には毎年お世話になっているらしく、着物姿の女将おかみさんが丁寧にお辞儀をした。

「はい、こちらこそ。今年の一年生も元気があってよろしいですね」

旅館の女将をやっているという時点でそれなりの年齢に達しているのは容易に想像できるのだが、かもし出す雰囲気などから非常に若々しく見えた。

「あら、こちらの方たちが噂の……?」

女将さんが俺と一夏を見ながら織斑先生に尋ねると、先生も若干の苦笑を浮かべながらその問いに答える。

「ええ、まあ。今年は男子二名がいるせいで浴場わけが難しくなってますって申し訳ありません」

「いえいえ、そんな。いい男の子達じゃありませんか。2人ともしっかりしてそんな感じを受けますよ」

そう言って俺と一夏をほめてくれる女将さん。

「アルバート・ウィルソンです。何かとご迷惑をおかけするかも知れませんが、3日間よろしくお願いします」

先生に言われる前に自己紹介をしてから一礼する。

「お、織斑一夏です。よろしく申し上げます」

一夏も俺に若干遅れて、自己紹介と礼をする。

「うふふ、ご丁寧にも。清洲景子です」

静かに微笑みながら丁寧にお辞儀をする女将さん。その動作は気品に溢れていて、こちらとしても緊張してしまふ。

「こちらの方は」

俺と一夏の自己紹介を聞き、女将さんは一夏と織斑先生の間係を察したらしく、一言問いかける。

「ええ、不出来の弟でご迷惑をおかけします」

「あらあら。織斑先生ったら、弟さんにはずいぶん厳しいんですね」「いつも手を焼かされていますので」

織斑先生が一言そういうと、女将さんは何も言わずに笑みを浮かべたまま女子一同にこう言った。

「それじゃあ皆さん、お部屋の方にどうぞ。海に行かれる方は別館の方で着替えられるようになっていきますから、そちらをご利用なさってくださいな。場所がわからなければいつでも従業員に訊きいてく

「ださいまし」

女子一同が揃って返事をして、すぐに旅館の中へと入っていく。自由に泳ぐ事ができるのは今日だけなので、まずは割り振られた部屋に荷物を置いてから海へ行くつもりなのだろう。

「ね、ね、ね。おりむく、ういる」

俺も自分の部屋の位置を知るために織斑先生に話しかけようとする
と、やけに間延びしたゆっくりとした声が俺達にかかる。

「あ、布仏さん。どうかした？」

「のほほんさん。どうしたんだ？」

一人の女子生徒がいつもの眠たそうな顔で同じクラスの布仏本音さんがゆっくりと俺達に近づいてくる。彼女は色々と特徴的で、学園の制服をはじめとした普段着の全てが袖を大量に余らせた服装をしている。そして、今まで何度か話しをした事があるのだが、その話し方が独特で、普段のぼやぼやした雰囲気も合わせて、一緒にいると微妙に眠くなる。

「おりむくたちの部屋どこ？一覽に書いてなかった。遊びに行くからおしえて」

布仏さんの一言で折れの周りにいた女子達が聞き耳を立てるが、俺も一夏もどこの部屋を使うか連絡を受けていないので教える事はできない。

「いや、俺も知らない。多分アルが聞いてるんじゃないか？」

その手の管理情報まではさすがに聞いていないので、正直に話す。

「俺も聞いてないっての。まあ、色々と問題があるだろうから個室はありえないってことしか言えん」

「そうなのか？就寝時間過ぎた後の部屋の移動って原則禁止なんだから、大丈夫だろ。まあ、最悪廊下にも寝るんじゃないか？」

「わー、それはいいね。私もそうしようかなー。あー、床つめたーいって〜」

あつけらかなと言う一夏には呆れるしかない。個室になれば忍び込み放題の上に、色々な意味でやりたい放題になるっての。

そして布仏さん。床に寝ても、そのうち体温で温まるからそこまで気持ちよくないと思うぞ、俺は。

「織斑、ウィルソン、お前達の部屋はこっちだ。ついてこい」

織斑先生が呼んでいるので、一端布仏さんと分かれて織斑先生の後続く。

「えーっと、織斑先生。俺達の部屋ってどこになるんでしょうか？」

「黙ってついてこい」

一夏の質問をばっさりと切り捨てて、織斑先生はある場所へと移動する。

「ここだ」

「え？ここって……」

俺達を通された場所は普通に旅館の一室ではあったのだが、左隣の部屋には『教員室』の張り紙がしてあり、大きな音がすれば即座に

わかるような部屋割りだった。

「お前達は元から2人部屋だというのは決まっていたのだが、一部の女子が就寝時間を無視して押しかけるだろうということになってな」

そこまで言っつて、その想像図が容易に浮かべられる織斑先生は一つため息をついてから続けてこう言った。

「結果私達教員用の部屋の近くに配置という事になった。これなら、女子もおいそれと近づかないだろう」

確かにこの部屋配置なら女子も近づこうとはしないだろうし、俺達も誰かを連れ込もうとしない。そういった意味ではベストな配置だろう。

「そうですね。色々な意味でいい部屋の配置だと思います」

「そうだな。先生達の近くでバカ騒ぎなんてしないもんな」

「施設の利用についても一通り説明するから、まずは部屋に入れ」
織斑先生が俺達に一言注意してから部屋に入るよう言われるので、俺達もその指示に従って部屋に入り、施設利用についての注意事項を一通り教わる。

「とまあ、注意事項としては以上だ。今日は一日自由時間だから、荷物を置いたら好きにしろ。ただし、2人とも羽目を外しすぎるなよ？」

それだけ言っつて織斑先生は部屋を去っていった。

その姿を見送った後、俺達は簡単な荷物を入れるために用意しておいたリュックに水着やタオル、替えの下着といった必要な物を入れ、海で遊ぶために別館へ移動する事にした。

別館へ続く廊下を歩いていると、篝さんが廊下にしゃがみこんで庭の一部を凝視していた。

「あれ？篝？何してるんだ？」

「篝さん、そんなところにしゃがみこんでどうしたんだ？」

「……………ああ、一夏とアルか……………」

篝さんがすごく疲れた声で庭の一部を指差すのでその方向を見てみると、なんとも珍奇な光景になっていた。

「……………」
「……………」
「……………」

地面にウサギの耳が生えていた。しかも、生のウサギの耳でもなく、バニーガールが着けているような布っぽいウサギの耳でもない、やけにメカメカしいウサギの耳が生えていて、しかもご丁寧に『ひっぱってください』とひらがなで書かれ、さらにはハートマークとデフォルメされたニンジンと一緒に書いてある看板が後ろに刺さっている。

そして何の因果か、俺達3人にはこんな珍妙奇天烈な行動をしそうな人物に心当たりがあっってしまう。

「なあ、これって」

「知らん。私に訊くな。関係ない」

「でもこんな事しそうなのって、やっぱ束さん」

看板に書かれている字の書き方は、篝さんの実姉で世界のあり方を変えた張本人、篠ノ之束さんの筆跡に酷似しているように思えた。

「ええい、口に出すな！！あの人の事だからどこかで見ているに決まってるだろう！！私には関係ないからな！！」

実姉の珍奇な行動を見慣れている篝さんは若干怒りに顔を赤くしながら早足で別館へと向かっていった。

「おい、篝！？………どうする、これ？」

「抜くだけ抜いてみよう。絶対に何かしらのリアクションはあるだろうしな」

そう言いながら庭に降りる。

「あら？アルに一夏さん。何をしてらっしゃいますの？」

庭に立つ俺達を見つけて、セシリアが俺達に近づきながら話しかけてくるので、俺はメカウサ耳を掴んだ状態でセシリアに注意する。

「セシリア。ちょっと危ないかもしれないから、そこで待っていてくれ」

「なにをなさるおつもりですか？」

セシリアがその場で止まると、俺は軽くメカウサ耳を持ち上げる。

すると案の定簡単にメカウサ耳だけが引っこ抜けた。

「あれ？誰もいないのか？」

東さんが地面に埋まっていると思っていたらしい一夏がそう言うので、俺はこう返すしかなかった。

「あのなあ、人一人埋まっているなら、確実に耳の近くに空気穴くらい在るに決まってるだろ。それが無い時点で人は」

キィィィン……

そう言っているのと、風切音が頭上から響いてくるので上を見上げてみる。すると、赤熱化した何かが高速でここに落ちてきていた。

「ってシヤレになりませんよ！！東さん！！」

「うわあああああっ！！」

落下物の衝撃と撒き散らされる石などを防御するために俺達とはとっさにISを展開する。

ドカーーーーーーン！！

展開完了直後に上空からの落下物が地面に突き刺さり、大量の石つぶてと衝撃が俺達に襲い掛かる。

もうもうと立ち込める土煙が晴れると同時に俺達はISの展開を解除し、上空からの落下物を確かめる。

「……………」

「……………にん、じん?」

「しかもデフォルメされてる上にメカっぽいにんじん型飛行体……何故?」

呆然と落下物を見つめる俺達をよそに、そのメカにんじんがぱかと真つ二つに割れて、一人の女性が姿を現す。

「むう、あーくん面白くないよ!!思いつきり引つ張って尻もちついてくれないと用意した意味がないじゃん!!……でも、これが落ちてくる時に思いつきり驚いてくれたからおっけーなのだ!!」

出てきて早々、俺のリアクションに対する不満を述べる束さん。その服装は不思議の国のアリスが着ているような青と白のワンピースで、昔と変わらず、服装は何かの童話をモチーフにした物のようだ。

「「お、お久しぶりです、束さん」」

半ば呆然としながら、俺と一夏は束さんに挨拶をする。

「うんうん。おひさだね。いつくんもあーくんも本当に久しいね。ところでふたりとも、篝ちゃんはどこかな?さっきまで一緒だったよね?トイレ?」

「「えーつと……………」」

束さんと会いたくないからどこかに行きましたとは言えないので、どう答えるべきかを迷ってしまふ。

「まあ、この私が開発した篝ちゃん探知機ですぐ見つかるよ。じゃあね。いっくん、あーくん。またあとでねー」

俺が持っているメカウサ耳を受け取ってカチューシャにセットすると、メカウサ耳が一定の方角を向き、その方向に走り出そうとする束さんだが、何かを思い出したのか二、三步走り出して急に止まると、俺のほうを向いてこう言った。

「そうそう。あーくんにはプレゼントがあるから、楽しみにしててねー」

束さんはそれだけ言うのと俺達に向かって手を振り、本当に本格的に走り出していった。

「あ、アル？一夏さん？今の方は一体……………」

呆然とした表情でセシリアが束さんについて聞いてくるので、俺は正直に答える。

「篠ノ之束。篝さんの実姉にして、ISの生みの親だよ。セシリアには篠ノ之博士って言った方がわかりやすいと思う」

「え……………？ええええええっ！？い、今の方が、あの篠ノ之博士ですか！？現在、行方不明で各国が探し続けている、あの！？」

もつと理知的な人物を思い浮かべていたのか、セシリアは大声を上げながら驚きをあらわにする。

「そう、その篠ノ之束さん」

一夏が俺の言葉を肯定し、セシリアはしばらく驚いた表情をしていると、束さんにまつわる噂話を思い出して困惑の表情を浮かべる。

「でっ、ですが、篠ノ之博士はかなり気難しい方で、友人である織斑先生以外には誰にでも冷淡に接すると聞いたことがあります！！なのに、何故あそこまでフレンドリーですの！？」

束さんの最も代表的な話を思い出し、あそこまでフレンドリーな理由を聞き出そうとするセシリア。

「ああ、それは微妙に間違いだよ。千冬姉以外にも、俺と篤とアルの3人。……正確には自分が興味を持った人物にはかなりフレンドリーだぞ」

「もつとも、その興味を持たせること自体がかなり難しいんだけどな。昔の俺ですら半年近くかかったんだし、今の束さんの状態だと興味を持つ対象が増える事はまず無いんじゃないか？」

俺のその発言を聞き、セシリアは困惑の表情から再び驚きの表情になると、俺に向かってこう問いかけてくる。

「そっ、それは一体どういうことですか！？説明してください！！」

「ああ、いいぞ。多分束さんの事だから、下手したら明日以降現れる可能性もあるし」

「あー、たしかに。あの人の事だから、規則なんかぶっちぎって乱入してきそうだな」

俺が言ったことに対して同意を示す一夏と一緒にあって、セシリアに俺と束さんがどうやって仲良くなったのかを説明する。

「俺と束さんが初めて会ったのは、篝さんの実家がまだ剣術道場を営んでいた時にまで遡る。当時の俺は一夏と篝さんに出会ったばかりで、クラスメイト達に苛められてもやり返せるように腕っ節を強くしたかったから、篝さんの家が剣術道場をやっていると聞いてすぐに入門。束さんと会ったのは初めての稽古が終了した直後だった。稽古が終わって、汗を拭いている一夏と篝さんにべったりと張り付く束さんがすごい気のお姉さんに見えて俺も話しかけたんだけど、見事なまでに無視された上に道端の石でも見るようなすごい冷たい目を向けられた」

「えっ！？でも、アルだって今は篠ノ之博士の興味の対象でしょう！？何故そんな目で見られますの？」

先程の束さんのフレンドリーさからかけ離れたその行動に、セシリアは驚きの表情を浮かべる。

「簡単だよ。今は興味対象だけど、当時は興味対象外だった。それが理由だよ」

「俺も篝も束さんの興味対象だったから、あの目をアルに向けられたのは結構ショックだったな」

当時を思い出しながら合いの手を入れてくる一夏。

あの日は一夏も篝さんも束さんの変貌に驚いたまま解散になって、俺は束さんからあの目を向けられたことがかなり悔しかった。

「そっ、それで……どうしましたの？」

「とにかく道場　この場合は篝さんの実家か。　に連日通って、

ひたすら束さんに話しかけた」

「それで篠ノ之博士の興味対象になりましたの？」

「いいや。1ヶ月近く話しかけ続けはしたけど、全部スルーされた上に一瞥もされなかった」

それを聞いて、セシリアだけでなく一夏も驚いた表情を浮かべる。

「アル、そこまでやってたんだな。初めて聞いたぞ」

「ああ。あの時は束さんの気を引くことになり力入れてたからな。ただ話しかけるのがダメだったから、今度は話しかける内容を考えるようになったんだ」

「あー、そういえばこの頃から千冬姉が束さんに人付き合いがどうのこうのって言い出したな。後はアルの戦術も今のやり方っぽくならはじめたな」

一夏も昔を思い出しながらそう言うと、セシリアは意外そうな表情で一夏に問いかけた。

「え？一夏さん、それどういうことですか？」

「ああ、セシリアさんは知らないよな。それまでのアルが試合をやる時って、直感頼りというか、頭より先に体が動いてただけど、道場に通い始めてから1ヶ月くらい経ってからはしっかり考えて動き始めたんだよ」

「ええと……何故そこまで戦術を変えましたの、アル？」

セシリアがそれまでの戦術を根本的に変えた理由を聞いてくるので、正直に答える。

「たまに束さんが道場の様子を見に来てたから、とにかく戦術を変えて束さんの気を引こうと思ったんだよ。これも失敗だったけど」

あの時はとにかく束さんの気を引こうとしたため、剣術の稽古の時もそれまでの直感頼りのものから今のよう^{よう}に考えて行動するようになったのだが、これも上手くはいかなかった。

「とにかくその後は束さんの気を引こうと色々と考えて行動したんだけど、どれも外して4ヶ月が過ぎた頃、いつも話しかける俺が煩^{わづら}わしくなった束さんが一言俺にこう言ったんだよ、『うるさい、静かにしろ』ってね。束さんから話しかけられて、俺はかなり嬉しかったな」

「え？それって嬉しいがることですか？どう考えても迷惑しているようにしか思えませんが……」

至極全うな事を言うセシリアだが、当時の俺の捉え方は全く違っていた。

「それまで何を話しかけても全くの無反応だったのが、迷惑だっという反応するようになっただけでもかなりの進歩だろ？後は束さんが興味のありそうなことを千冬さんや束さんの両親とかに聞いて、話す内容を考えてひたすら話しかけた。

そうして2ヶ月間いろいろな事を話しかけてると、俺と束さんが仲良くなるきっかけがやつと出来たんだ」

「きっかけ…ですか？一体どういった話をしましたの？」

少し恥ずかしい話になるが、この際しようがないのでごまかさずに話す。

「束さんに話しかけるネタがなくなって、仕方ないから当時放送してた特撮ヒーローの話をしたんだよ。何気なくそのヒーローの設定の話をしてたんだが、当時俺が重要な設定を一ヶ所おぼえ間違えて

たんだよ。

そしたら束さんもそれを見てたみたいで設定の間違いを指摘してきたんだが、俺も色々考えるようになってから話の種の一つでそのヒーローの設定を真っ先に覚えたから、絶対間違っただけで二人して大喧嘩になった」

「ああ。そう言えばアルと束さんが何か話してて、いきなり取っ組み合いの大喧嘩になって、千冬姉が止めた事が一回あったな。そんなこと話してたのか？」

その話をすると、一夏が当時の事を思い出して意外そうな顔をする。

「おう。それから設定を一から調べなおして、俺が間違ってた事を素直に謝ると束さんがこう言ったんだよ。『あの設定を間違えるよっじゃあ、てんでお話にならないね。話をするのもおこがましいよってな。』

そう言われてアタマきたから、こう言い返したんだよ。『そう言うなら設定に対するクイズで勝負だ。俺が全問正解したら、今まで無視してきた事を謝ってもらう』って言って、そのまま設定のクイズ勝負になったんだよ」

「それでアルが勝って、篠ノ之博士の興味対象になりましたのね？」

今までの話の流れで予想してそういうセシリアだが、事實は少し違う。

「いや、クイズ自体は最後の1問に答えられなかった俺が負けたんだけど、それって答えられなくて当然だったんだよ。その時に束さんが出した問題って、当時は本放送しか見てなかった俺が絶対に正解にたどり着けないように仕組まれた問題だったから」

「え？どうということですか、それ？」

問題が俺には答えられないようになっていて聞き、セシリアはその意味が上手く理解できないようだ。

「その時に束さんが出した問題はその当時の放送内容の何週間か先の情報……つまりはネタバレ情報だな。それを知っていないと絶対に正解できない問題だった。簡単に言えば束さんは反則技を使っただよ。

その時はすごい悔しかったんだけど、後日、本放送を見て正解を知った後、束さんが出した問題の正解そのまんまだったのには驚かされたよ。でも、それと同時に不自然さを感じて、急いで束さんの所に行つてあの時の問題が俺に答えられないことを知った上で出題した事を言ったら、ちょうど千冬さんが来たんだよ。

それで事の顛末を話したら、束さんが思いつきりアイアンクローされて、千冬さんの一声で最後の一问は束さんの反則負けって事になった。当然その後束さんが俺に謝り、話についていったことを褒められて、束さんの興味対象になったんだよ」

そこまで言つと、セシリアは感嘆の表情をしながらこう言った。

「人に歴史あり……でよかったかしら？とにかく大変でしたのね」

「ああ。その後は束さんとも普通に話をするようになったし、よく考えれば今の性格を形作る基礎にもなってる。もっとも、ISを発表した後に失踪してからは連絡が取れなかったんだけどな」

束さんとは本当に年単位で会っていないのですごく久しぶりなのだが、あの人は意図してなのかどうかは知らないが、時折とんでもない混沌を巻き起こすので、何かしないだろうかと心配になってくる。

「まあ、筭に用があるみたいだったし、束さんも何か問題を起こすつて決まってるわけじゃないんだ。今のところは俺達には関係なさ

「げだからいいんじゃないか？」

「でも俺にはプレゼントがあるって言うてたから、俺は関係ないとは言いい切れないんだよなあ……………」

東さんからのプレゼント……………東さんお手製のISのパーツか何かだろうか？全く予想がつかない。

「現状、特に問題を起こしていませんのでからそこまで怯えなくてもよろしいのではなくて……………ところで、お二人は海へは行きませんの？」

「行くけど、先生と旅館の人にこの事報告しといた方がいい気がしてきた」

見た目的にも中庭がこの状況だと旅館側としてもまずいし、織斑先生に報告しないと東さんが何かしてからでは遅い気もする。

「そつ、それは後にしていただいて、海に行ったら、アルには一つお願いがあるのですが……………」

「ああ……………背中サンオイルでも塗るか？」

若干セシリアの顔が赤くなっているの、少し考えてそう言ってみる。

「えっ！？……………ええ、そのとおりです。お願いできますか？」

自分の要望を言い当てられて驚いたセシリアが落ち着かない雰囲気、で視線を泳がせる。

「ああ、かまわないさ。ただし、塗るのは背中側だけだからな」

「えっ、ええ、わかっておりますわ……………わたくしは先に行つて

おりますね。また後で！！」

小さく乾いた笑いを浮かべながら、セシリアはそそくさと別館へと向かっていく。……注意しなければどうなっていたかは考えないようでしょう。

「ああ、セシリアさん。また後でな。……アルも大変だな」

「……まあ、セシリアのお願いに関しては予想範囲内ってところだ。東さんの登場は完全に予想外だけど」

俺と一夏も話をしながら別館の更衣室に向かう。俺達の身支度なんて短時間で済むのでさっさと着替えて俺達は海に向かうのだった。

19 臨海学校と昔話（後書き）

みんな大好きのほほんさん初登場。

アルと束さんの過去話はちよつと無理があるかもしれないが、昔のことなので現在よりも興味対象の選定が甘いとでも思っておいてください。

もしも原作で束さんの興味対象云々が書かれたら修正するかもしれない。ません。

今回は海水浴と紅椿登場あたりだと思います。気長にお待ちください。

20 オトコゴコロ、オンナゴコロ（前書き）

最新話です。海水浴関係だけで、紅椿登場まで行きませんでした。
のほんさんの言動が地味に難しい……。

20 オトコゴコロ、オンナゴコロ

男が水着に着替えるのは10分もあれば余裕ではあるのだが、セシリアに俺と束さんが仲良くなった時の事を話していたのもあって、浜辺に出た頃には11時15分頃になっていた。足の裏に伝わる砂の熱の感触が懐かしい。

「あ、織斑君とアルバート君だ!!」

「二人ともおそーい!!何やってたの〜?」

「わ、わ〜。体カッコいい〜。二人とも鍛えてるね〜」

「二人とも、今からビーチバレーしようよ〜」

俺達が現れた事に気づいた女子数名が、思い思いの事を口にしながら俺達と一緒に遊ぶために声をかけてくる。

「俺は別にかまわないぜ。今すぐやるか?」

「悪いけど俺はパス。先約が終わったら考えてもいいかな」

一夏はビーチバレーに賛成し、俺はセシリアとの約束があるので辞退する。

「おりむ〜もついるも遅かったね〜。なにかあったの〜?」

今まで泳いでいたらしい布仏さんが後ろから声をかけてくるので、振り返った俺達は数秒間フリーズする事になった。

「……………のほほんさん、すごい水着?だね……………」

「……………特注品?」

布仏さんの水着はかなり独創的で、頭につけた狐耳のカチューシャとセットになって狐っぽい着ぐるみ型の水着で、普段着と同じ様に袖を大量に余らせている。しかも今まで泳いでいたらしく、着ぐるみ水着が布仏さんの体にぴったりと張り付いてボディラインが丸分かりになっていて、余った袖からも海水がぼたぼたと滴っていた。

「特注品じゃないよ。駅前にごういった着ぐるみとかを扱ってるお店があつて、そこでこれを買ったの」

……おそろべし、駅前ショッピングモール。品揃えが豊富つてレベル超えてないか？

「……………着ぐるみ型の水着なんてあるんだ……………」

「あるのだよ、ういる」

えへんと胸を張る布仏さん。着ぐるみ型水着という物が存在する事も驚きだが、そういった物を扱っている店が学園からモノレールを乗っただけである事にも驚かされる。

「あら、布仏さん。どうなさいましたの？」

ビーチパラソルとシート、サンオイルを持ったセシリアが布仏さんに話しかける。

「おお、せつし。ういるとお話してたのだよ」

「そうですね。……………では、約束どおりサンオイルを塗っていただけですか？アル」

優雅にビーチパラソルなどの準備を始めるセシリア。

「ああ、了解。……………今のうちに言っておくけど、自分でサンオイル塗った人が自発的に海に入ってオイルを落として、俺に塗りなおしてって頼んできても塗らないからね」

「……………うっ!?」「……………」

肌を焼いていた人の内8割が突然立ち上がりかけたので、面倒なことにならない内に釘を刺しておく。

「そして後で海に入るつもりだけど、俺にサンオイルを塗ってもらう為だけにパラソルとかを用意しようとしている人にも塗らないよ」
「……………ぐっ!?」「……………」

海で遊んでいた人たちの半数が砂浜に上がり、突然パラソルなどを用意しようとした人たちがいたのでその人たちにも一言。見た感じ殆どの女子生徒はいるようだから、セシリア以外で俺にサンオイルを塗ってほしいという人は

「じゃあ、今来たばかりで純粋に肌を焼くのが目的ならOKってことよね?」

いたよ、おい。

「ソノトオリです、ティナさん」

にっこりと俺に微笑みかけてくるティナさんには、そう答えるしかなかった。

「まあ、私は馬に蹴られるつもりはないから辞退するけど。頑張れ、アルバート君」

俺の耳元でそう囁いて、ティナさんは一人でどこかに行ってしまった、俺はその姿を呆然としながら見送るしかなかった。………ラウラ以外には教えていないのだが、そこまでわかりやすいのだろうか？

「そ、それではアル、お願いしますわ」

自然にパレオを脱ぎ、ブラの紐を解くと、水着を胸の上から押さえ、シートに寝そべる。その仕草が妙に色っぽいので、どうしても意識せざるをえない。

「さ、さあ、どうぞぞ？」

「ああ……」

紐解いた水着はシートと体に挟まれているだけの状態で、セシリアが無防備にせなかをさらし、体に潰されて形を歪めた乳房が脇の下から見えているし、しっぴかり発育したお尻や、そこからすらっと伸びた脚線美がすばらしいので、正直言っただけの目やり場に困る。

「じゃあ、塗り始めるぞ」

「えっ、ええ………お願いしますわ」

サンオイルを手にとると結構冷たいので、多少揉んでオイル自体を温めてからセシリアの背中に塗っていく。

「さ、最初は冷たいオイルを覚悟していたのですが………こういった事には慣れてますの？」

「………オイル自体が結構冷たかったから、こうした方がいいかと思っただけ？」

内心緊張しまくっているが、それを悟られないように普段どおりの声色を意識してそう答えながら、少しずつサンオイルを塗っていく。

「あ、ありがとうございますわ。……………下の方もお願いしてよろしいかしら」

背中にサンオイルを塗り終わると、セシリアがそう言ってくる。当然その発言で周りが騒がしくなるが、今は色々と自制するので精一杯な状態なので、周囲の人達がなにをいつているのかが上手く聞き取れない。……………というか、周りの人の言葉を聞いている余裕が全く無い。

「……………そこはギリギリ自分で塗れるだろ。すまないがあとは自分でやってくれ」

少し冷たい言い方になってしまったが、既に精神的に限界なのでそれだけ言ってセシリアから離れ、一人で適当な場所へ移動する。

人のいない方角へどんどん進んでいき、ほとんど誰もいない場所へたどり着くと、その場に腰を下ろして一息つく。

そのままボーっとしているとセシリアに最後に言った言葉があまりに冷たいことに気づき、自己嫌悪に陥る。

「何やってんだよ、俺は……………バカくせえ……………」

「そういうお前はこんなところで何をしているんだ？ウィルソン」

突然背後から声をかけられ、驚いて後ろを向くと水着姿の織斑先生がいた。

「おつ、織斑先生！先生こそ、こんなところに何しにきたんですか！！」

「なに、砂浜を歩いていたらお前が一人で人気の無い方向に行くのが見えたんでな。オルコツトあたりを待たせて、ここでその手の事を始めるつもりかと思っただんでつけてきた。風紀を乱すようなら止めるつもりだったが、そうだった雰囲気じゃなさそうだな？」

「織斑先生。それを本気で言ってるなら思いつき的外れですよ。」

「夏はどう捉えているかは知りませんが、俺は少なくとも世の中が落ち着くまでは誰ともそういった事をするつもりはないですよ。自分から大規模な国際紛争の火種になるつもりはありませんから」

織斑先生に言ったのは紛れもない俺の本心だ。いくら所属国家や企業からある程度のバックアップがあるとは言え、自分自身の特殊極まりない立場を考えればそういつた事をした瞬間に国際紛争勃発の狼煙のろしをあげることになりかねない。

「……………ふん、ならいいさ。ただ、私も教師なんでな。可能性がある以上はつけさせてもらったただけだ。……………それで？ここまでの移動中やけに疲れた顔をしていたみただが、どうしたんだ？」

「……………かなりプライベートな部分ですから、他の人には言わないでくださいね」

周囲に人影はないようだし、織斑先生も生徒のプライベートをべらべらと喋る人ではないことは十分知っているが、それでも一言だけ念を押しておく。

「そんなことはわかっている。それで？どうしてあんな顔をしていたんだ？」

「それはですね、」

俺はセシリアにサンオイルを塗ることと、実際にオイル塗り始めてからの顛末を説明していく。

「　　ってことで今に至ります」

「　　なるほど。…今まで意中の人物に好意を悟られないように行動していたにしては、結構大胆じゃないか、ウイルソン」

「　　……ナゼソノコトヲシツテルンデスカ？」

数秒間思考が停止し、頭が半分フリーズしたまま呟いた言葉なので、どうしても片言になってしまう。

「あのなあ、私はお前よりも年上だぞ？この間のシヨッピングモールでのお前達の態度を見ればイヤでも気づく」

「　　……一応確認しておきますけど、生徒にはバレてないですよね？」

これで生徒にバレていたなら今までやってきた事が無意味すぎるから、そっちまでバレていないか織斑先生に聞いてみる。

「そこまでは知らん。ただ、聡い奴の中には気づいてるやつもいるんじゃないか？」

「　　……そうですね。実際一人は気づいている人がいるみたいですし」

ティナさんには確実に気づかれているだろう。………彼女は応援してくれる側のようだが、邪魔する側の人に気づかれたら色々とまず

い気がする。

「で、何故オルコットに好意を隠してるんだ？お前の事だからオルコットがどう思っているかは知ってるだろう。とっとと告白すれば色々と楽になるだろうに」

確かにセシリアが俺をどう思っているかは察しがつく。でも、だからこそ今この時期に告白するのが怖い。下手をすればセシリアにも多大な迷惑をかけることになりかねないから。

「……………それが出来れば苦労しませんよ。確かに告白して恋人同士になれば他の女子からのちょっかいは減るかもしれませんが、今度はセシリア自身が『男性IS操縦者の彼女』ってことで各国政府のエージェントとかに狙われることになりかねません。」

そうなったら最悪の場合、『専用機の強奪』を目的とした敵と、『男性IS操縦者に最も近い異性』を狙った敵の2種類を同時に相手どらなきゃなくなる可能性がありますからね。……………そうなったら、逆にセシリアへの危険が増して本末転倒ですよ」

そこまで言うと、織斑先生は呆れた表情でこう言った。

「深く考えすぎだ馬鹿者。それに、専用機持ちは様々な状況を想定した訓練を受けている事は知ってるだろう。…お前が思っているほどオルコットは弱くない。少しはあいつを信じてやったらどうだ？」

「でも可能性としては0じゃない以上、気をつけるにこした事は」

「それを考えすぎだと言っているんだ。学園に所属している間はその国からの干渉もない。……………それとも、そんなに学園側が信用できないか？」

半ば睨みつけられるようにそう言われ、俺は何も言えなくなってしまふ。

「そういうわけじゃないですけど……」

「ならもつとバカになれ。少なくとも3年間は普通の高校生に準じた生活くらいはさせてやるさ。卒業間近になったらそついったやつらへの対処法も教えてやる。……慎重になりすぎて何も出来ない姿はアホ以外の何でもないぞ」

呆れた表情をしたまま織斑先生はそう言ってくる。ので、少し考えてからこう答える。

「……善処はしてみますけど、元々こついった性分なんでどこまで直せるかはわかりませんよ?」

「まずはそれでいい。少しは学生らしい事をしてみる。さっきの行動についてもオルコットへフォローしておいてやる。……ただし、風紀を乱すような事をするなよ?お前達が入学してから色々忙しいからな」

「それはわかってますよ。少しは考えないようにしてみます。……」

「……そうだ、織斑先生。一つ報告があります」

「報告?なんだ、言ってみろ」

「俺と一夏が砂浜に来る前に、束さんと会いました。自分の発明品と思われるにんじん型の飛行体でここまで来たみたいです。篝さんを探していたみたいなので、目的は篝さんだとは思いますが、俺にもプレゼントがあると行ってました」

忠告だけしてその場を立ち去ろうとした織斑先生に束さんが来た事を報告しておく。

「束が？ その場にはお前と束以外誰がいた」

俺の報告を聞き、織斑先生の表情が一気に険しくなる。

「俺と束さん以外だと、一夏とセシリアの2名だけで、付近に旅館の従業員さんはいませんでした。3人ともにんじん型飛行体が落下してくる際の石つぶてなどから身を守るためにISを展開してしまいましたし、落下の衝撃で中庭に飛行体が刺さったままになっています。旅館の従業員の方へ説明しようとも思っただんですが、付近にいなかったでそのままになっています」

「そうか、わかった。旅館へはこちらから話を通しておくから、お前達から従業員へ言う必要はない。ISの無断展開も不問とする。

……報告はそれだけか？」

「はい。ただ、束さんの性格上、明日の稼動試験の際に何かをしてくる可能性はあると思います」

「それに関してはこちらで対策を考えておく。お前はこの後どうするつもりだ？」

「少しここで頭冷やしてから戻ります。昼食までには戻りますよ」

「わかった。時間には多少遅れてもかまわんから、きっちり頭を冷やしてから来い」

それだけ言っつて、織斑先生はその場から去っていった。

俺もそこから移動し、人氣が少なくて泳げる場所ですばらく泳いで頭を冷やし、12時30分頃に旅館へ戻った。

ここの旅館は食事中は浴衣の着用が義務付けられているので浴衣に着替え、食事をするために大広間3部屋を繋げた大宴会場へ向かった。

食事の開始時間には遅れたものの、俺が大宴会場に向かった頃でもそれなりの人数が食事をしていたが、セシリアに謝りたかったこともあって、食事のスピードは味わいながらも早めに食べた。

一度割り振られた部屋に戻り、臨海学校のしおりに書いてある部屋割りの一覧表でセシリアたちの部屋へ向かうが誰もおらず、仕方がないので旅館内をぶらつきながらセシリアを探す事にする。

「あゝ、ういるだゝ。今までどこにいたのゝ」

「ああ、布仏さん。セシリア探してるんだけど、どこにいるか知らない？」

そうして10分ほど旅館内をぶらついていると布仏さんの特徴的な声が背後からかかってくるので、俺は振り返りながら布仏さんにセシリアが今どこにいるかを聞いてみる。

「ちよつとまつてゝ。今せつしゝに聞いてみるからゝ」

浴衣の上から羽織っている半纏はいつものごとく袖が余っていて、布仏さんは袖の中に仕舞っていたらしい携帯電話を取り出し、セシリアにコールし始める。

「あ、せつしゝ？ういるいたよゝ。せつしゝ探してるみたいだから、今どこにいるか教えてゝ……………ふんふん、なるほどゝ。じゃあ、そこに行つてもらつ事にするねゝ」

布仏さんは手短かにセシリアの現在位置を聞いたあとに通話を切ると、

いつもの顔でこう言った。

「せっし〜は、今別館にいるみたいだよ。更衣室近くに自販機コーナーがあるから、そこで待ってるって〜」

「わかった。布仏さん、ありがとう。助かったよ」

あてのないまま探していたら入れ違いになっていた可能性もあるの
で、素直にお礼を言っておく。

「いえいえ〜。ういるも大変だろうけど、頑張ってるね〜」

布仏さんが励ましを受けながら、少し早足で指定された場所に向かうことにする。

指定された別館の更衣室付近の自販機コーナーへ向かうと、浴衣姿のセシリアが落ち着かない様子でその場をうろろしていた。

「セシリア。待たせたみたいだな」

「あつ、アル!? え、えつと…その……」

俺がきたことに驚き、セシリアは何か言おうとするが、何を言えばいいのかわかっているらしく、黙り込んでしまう。

「まずは落ち着いてくれ。……何か飲むか? 色々あるみたいだけど」

「そ、それでは……紅茶をお願いします」

「了解」

セシリア用の紅茶と自分用のコーラを購入し、紅茶をセシリアに渡

す。

「銘柄は確かこれでよかったよな？」

「ええ……大丈夫ですわ」

ブルトップを開けてコーラを一口飲んだ後、俺は正直にこう言った。

「午前中はすまなかった。俺もあの時は精神的に限界で、断り方がかなり冷たくなってたと思う。許してくれ」

セシリアの方を向きながらそう言って、俺は頭を下げる。

「許すもなにも、配慮の足りなかったわたくしが悪いのですから、アルが謝る必要はありませんわ。……わたくしの方こそ謝らせてください。織斑先生から、アルくらいの歳で女性の肌に触れるのはそれなりに覚悟があると聞きました。そういったことを知らず、浮かれてアルを傷つけてしまった事、許していただけませんか？」

視線だけを上に向けるとセシリアが頭を下げていたので、織斑先生はしっかりとフォローしてくれたようだ。

「……………なら、今回の事は両成敗ってことにしておくか。俺はセシリアの事を考えていなかったし、セシリアも俺のことを考えていなかったからこうなったって事でどうだろう？」

「……………そうですね。これからはこういった事をするとしても、節度を持って行う事にしましょう」

少し考えた後にセシリアにそう提案すると、セシリアもそれを了承してくれる。

「ああ、これからはそうするか。……そういえば、セシリアはその後どうするんだ？」

「えっ！？ええと……」

お互いに懸念事項もなくなったので、この後どうするかを聞いてみると、セシリアは顔を若干赤くしながら視線を泳がせる。

「もし予定がないようなら、午前中と同じ様に一緒に海に行かないか？」

「ええっ！？そ、その…… よろしいんですか？」

俺から海で一緒に行動する事を提案され、セシリアは驚きながら確認をしてくる。

「午前中みたく過激な事をしなければ大丈夫だよ。それで……どうする？」

「で、では……」
「一緒に一緒にさせていただきますわ。着替えなどを持ってまいりますので、30分後に砂浜ということでもよろしいでしょうか？」

「ああ。俺もちよつとは準備があるから、それくらいでかまわない」

「で、では後ほど砂浜で……」

「おう。待ってるからな」

それだけ言っつて、俺達は水着などの準備をするため、いったん部屋へと向かう。お互いに海で遊ぶのを期待していた事もあり、その後俺達はいつものメンバーとだけでなく、普段はあまり話さない別のクラスの人たちなどと一緒に、日が暮れるまで海で遊びまわった。

ひたすら遊んで、現在夜7時30分。昼と同じ大宴会場で、学生一同夕食をとりはじめたところだ。

「うん、美味い！！昼も夜も刺身が出るなんて豪勢だなあ」

「そうだね。ほんと、IS学園は羽振りがいいよ」

「同感。学生でこの食事の豪華さはまずないと思う」

一夏の右隣にいるシャルロットが学園の羽振りのよさに驚き、俺もそれに同意する。

全ての素材が天然物と思われる食事は、日本に在る普通の高校の修学旅行などでは味わえない物であるう事は容易に想像できる。

一夏もそれに気づいているようで、刺身についているわさび一つとってもしっかり本物を使っているようだ。

その説明を受けて、シャルロットはわさびの辛さを知らないまま、その山を食べてしまう。

「~~~~~!!!」

案の定とも言えはいいが、シャルロットは鼻を押さえて涙目になるので、一つアドバイスをする。

「シャルロット。鼻で息をするようにすれば、わさびの辛さはすぐに引くぞ」

コクコク

俺がアドバイスをするとシャルロットは無言で頷いて言われたとおりにする。

「っー！……………ホントだ。辛^{から}さが引いた」

辛さが鼻に残っているようで、まだ少し涙目ではあるのだが、シャルロットの声色はほぼ通常通りになる。

「……………でも、どうしてアルはそのことを知ってるの？」

「ジユニアハイ中学の時の男友達とゲームをしてな。その罰ゲームでわさび入りの食べ物を大量に食べた事があるんだが、その時に鼻で息をしたら辛さが早く引いたんで、それを覚えてたんだよ」

最初は辛^{から}いのが辛^{つらい}かったのだが、この事に気づいてからはそこまで辛^{つらい}くなくなったので、今でも覚えている。

「そ、そうなんだ……………」

引きつった笑いを浮かべたまま、シャルロットがそう言う。

「ああ……………で？セシリアは大丈夫なのか？」

「だ……………い……………よう、ぶ……………ですわ……………」

どう考えても大丈夫ではない。セシリアは正座が苦手なようで、食事が始まってから全く手をつけることが出来ていないようだ。

（相応の苦勞はしたんだろうが、それで食事が出来なきゃ本末転倒だろう……………）

IS学園は様々な宗教や国籍の学生が在学しているので、正座が苦手な生徒用にテーブル席が用意されている。テーブル席の様子を試みるとまだ2人くらいなら座れる余裕があるので、俺は自分とセシリアの分の膳のお盆の部分を持つと、セシリアにこう言う。

「やせ我慢は見てるほうとしても辛いんだよ。ちょっと待ってな」
「えっ!?!あの、アル!?!」

まずはお盆の上の食事をこぼさない様にテーブル席まで運んで座る席を確保する。この時点で女子生徒の半分ほどがざわつき始めるが、それをスルーして再びセシリアに近づくと、ぷるぷると小鹿のように震えるセシリアを横抱き 俗に言うお姫様抱っこ でテーブル席まで運ぶ。

「あ、あ、あ……………」

セシリアは顔を真っ赤にしながら何かを言おうとするが、あまりに恥ずかしいのか黙り込んでしまう。

大宴会場にいる全ての生徒が食事の手を止めて呆然と俺達の行動を見つめているが、そんなことはどうでもいい。セシリアのお盆を置いた席に座らせ、その正面の席に座ってからセシリアに一言言うておく。

「辛いなら言うてくれ。無理されると俺が精神的にキツイ」
「はっ、はい……………わかりました……………」
「わかればいい。とつとと食べよう」

それからしばらくの間俺とセシリアが食器を動かす音だけが宴会場

に響き、女子生徒の一人がこういうまで殆どの人物がフリーズしていた。

「セシリアさん、いいなあ……」

「緊急措置ゆえ、リクエストされてもやりませんのであしからず」

宴会場が騒がしくなる前に全体に釘を刺し、その後宴会場が再び騒がしくなるのにはかなりの時間を要した事を追記しておく。

20 オトゴコロ、オンナゴコロ（後書き）

そんなわけで、THE海水浴&夕食での一幕のお話。

ついでに、アルバートが言ったわさびは鼻で息をすると早く辛味が引くのは作者の実体験です。

次回こそ紅椿登場シーンに行くと思います。

21 新たなる力、遅れて開く紅椿（前書き）

最新話、紅椿登場です。これで更識姉妹以外の一夏にかかわりのある専用機持ちが登場しました。今回は少し厨二臭い部分があります
がご容赦ください。

21 新たなる力、遅れて開く紅椿

あれから多少時間は流れて夜の9時近く。既に夕食は全員食べ終え、俺が部屋に戻った時にはちょうど男子が露天風呂を使える時間だった。たので露天風呂へ行き、一通りさっぱりした状態で部屋に戻っている最中だった。

「あ、ういるだ〜。やつほ〜」

「布仏さん。どうした？今から露天風呂行くのか？」

男子が露天風呂を使える時間はそろそろ切れるので、布仏さんも入浴かと思っただけだが、俺の予想は大きく外れる事になる。

「ちがうよ〜。せつし〜がさつきからず〜と真っ赤だから、冷たい物買ってくるの〜」

「セシリアが？またどうして？」

布仏さんはセシリアと同室だが、何かあったのだろうか？

「原因はういるだよ〜。心の準備もなしにいきなりお姫様抱っこされたから、せつし〜恥ずかしがっちゃってて、まだ真っ赤なままなの〜」

「あー、……………そっか、わかった。これでセシリアに適当な物買ってあげて」

「りょうか〜い」

財布を取り出して布仏さんにくらか渡し、それから少し話して俺は部屋に戻ることにした。

「お、お、お、お、お、お、つ……」

部屋についた瞬間、布仏さんから聞いた第三者視点での先程の宴会場での行動を思い出し、俺はその恥ずかしさに悶えるしかない。

「あー、アル。どうした？部屋に戻ってくるなりいきなり悶えて」

「い、いつそ殺せ………恥ずかしすぎる………」

「……宴会場でセシリアさんにお姫様抱っこしたことか？やってた時は恥ずかしくなかったのかよ？」

「………恥ずかしかつたらやってねーっつーの」

あの時は羞恥らやなにやら感じる以前の問題として、セシリアが見てられなかったからああいった行動をしたのであって他意はない。

「それもそうだ。皆呆然としてたからなあ。俺もびっくりしたぞ」

俺の言葉に同意しながら、一夏はあっさりとそう言う。

「俺も自分の行動に驚いてるよ。………あ、く、く、く、明日が気まずい………」

明日から各種稼働試験が始まるというのにあんな事をしてしまい、顔を合わせづらい事この上ない。

「そうか？特に問題を起こしたわけでもないんだし、普通にしてくればいいだろ」

「おいおい、あれだけ派手な事して普通にしてくられるヤツがいるとしたら、そいつは余程面の皮が厚いか、場の空気が読めないやつだと思っるのは俺だけか？」

俺はそういつた自覚はないので、出来る事なら最低でも明日一日、出来る事なら学園に戻ってからもしばらくの間部屋に引きこもっていたい。

トントン

「織斑、いるか？」

「ん？千冬姉だ。どうぞー」

俺の言葉に対する返事をする直前に部屋の扉がノックされ、織斑先生の声が部屋の中に伝わってくるので、一夏が中に入るように言う。

「ああ、入るぞ」

その言葉を受けて織斑先生が入室してきたのだが、珍しいものを見たらしく啞然とした表情を浮かべる。

「……………ウイルソン、何をしている？」

「……………聞かないでください」

先程と変わらず床を転げまわっている姿を見て織斑先生が問いかけってくるが、あまり話したくない内容なので、そう答える。

「単に恥ずかしがってるだけだろ。どうして隠すんだよ？」

おいコラ、勝手にバラしてんじゃねえよ一夏。

「……………一体なにをした？」

一夏の言葉を聞いて、半ば俺を睨みつけるようにしながら事情を聞いてくるので、差し障りのない言葉で答える。

「……………夕食の時間に少しばかり派手な事を……………」

「……………織斑、ウイルソンは何をした？答える」

どうやら俺の答えはお気に召さなかったようで、情報取得の対象を一夏に切り替える織斑先生。

「宴会場で食事中、アルがセシリアさんにいきなりお姫様抱っこしてテーブル席に移動したんだよ。セシリアさんとアル以外はしばらく呆然としてたってだけ。アルは今になってそれがどれだけ恥ずかしいか分かったみたいで、ああしてるんだよ」

「……………そうか。ウイルソン、そうしていてもいいが、あまり騒がしくするなよ」

「……………了解です」

それだけ返事をしてから、再び部屋の中を転がりまわる。

「で、織斑。ちょっと用があるから教員室まで来い」

「えっ！？俺は何もしてませんよ！！」

「馬鹿者。何も説教しようってわけじゃないんだ。いいから来い」

突然教員室教員室に來いと言われて慌てる一夏だが、織斑先生は問答無用で一夏を自分の部屋教員室に連れて行ってしまった。

それから15分ほど経つとある程度はいつもどおりの思考が出来る

ようになったので、思いつきり恥ずかしい思いをさせたセシリアに謝ろうと思つて部屋を出る。

「……………何してんの？」

だが、その瞬間に篝さん・鈴さん・シャルロット・ラウラの4人が教員室の扉に耳をくつつけて中の会話を聞こうとしている姿を見て、俺は若干呆れた視線を4人に向ける。

「しっ！！」

その視線を無視して静かにするように鈴さんから注意を受け、再び静かになつた廊下に一夏と織斑先生の声がかすかに響く。

『千冬姉、久しぶりだからちよつと緊張してる？』

『そんなわけあるか馬鹿者。……………んっ、少しは加減をしる』

『はいはい。んじゃあ、ここは？』

『くあっ！！そ、そこは……………やめっ！！？』

『すぐに良くなるつて。だいぶ溜まつてたみたいだし、ね』

声だけを聞けば変な勘違いをしそうなものだが、俺には心当たり

十中八九一夏のマツサージだろう　があつたので、その場を離れてセシリアたちの部屋に向かいながらこう言う。

「4人も変な勘違いしてるようだけど、あの2人に限つてそれはないよ。じゃあね」

廊下を曲がったあたりで扉の開く音と一緒に何かがぶつかる音がしたが、変な勘違いをした4人の自業自得だろう。

さして時間もかからずにセシリアたちの部屋の前に着いた。仕出かしたことが事なので、入室の時点で門前払いをくろう可能性もあることもあって、多少緊張しながら扉をノックする。

トントン

「誰ー？開いてるからどうぞー」

同室の谷本さんが同性を招く時特有のフランクさでノックに反応して入ってくるように言うので、俺は緊張を維持したまま入室する。

「失礼しまーす。セシリアいるか？」

「えっ！？あ、アルバート君！？」

「うそっ！？どうして！？」

「あゝ、ういるだゝ。いらっしやーい」

「あ、あ、あああっ！？」

谷本さんと鏡さんは俺が現れた事に驚きながら、布仏さんはいつものどおりの口調で迎えてくれ、セシリアは隠れるように掛け布団をかぶってしまふ。

「ど、どうしたのかな？何か用事があったんだよね？」

「わ、私達、お邪魔なようならどこかで時間潰してくるけど？」

「そこまでしなくていいよ。要件は一つだけだから」

鏡さんが気を使ってそう言うってくれるが、俺としては長い時間いる

つもりはないので断っておく。

「セシリア、そのままでもいいから聞いてくれ。夕食の時は恥ずかしい思いをさせてすまなかつた。言い訳がましく聞こえるかもしれないが、あの時はセシリアのやせ我慢が見てられなかつたからあしたんであつて、他意はない。それだけは覚えておいてくれ」

「……………ひとつ、聞いてよろしいですか？」

それだけ言つて部屋を出ていこうとして扉を開けた時、少しくぐもつた声でセシリアが俺に問いかけてくる。

「どうした？」

「アルは……………ああいつた行動をして恥ずかしくありませんでしたの？」

「……………やつた時はそういう感情は全くなかつたけど、第三者視点で行動を省みたらすつげー恥ずかしかつた」

谷本さん達が聞いているが、偽ることなく本心を伝える。

「……………わかりましたわ。……………今後ああいつた事をする時は、先に一言声をかけてください。わたくしにも心の準備がありますので」

「了解。今度からはそうするよ」

セシリアからの言葉にそう返答し、俺は部屋へと戻り、明日からの稼動試験に備えて眠ることにした。

臨海学校2日目。今日は丸一日ISの各種装備を試験運用し、そのデータを取ることに追われることになる。

俺を含めた専用機持ちの場合はそれぞれの専用機に合わせた各種換^パ装^{ツケージ}用^ジ装備の試験運用が主だった仕事だ。

「ようやく全員集まったか。 おい、遅刻者」
「は、はいっ」

織斑先生にそう呼ばれて身をすくませたのは、意外なことにラウラだった。珍しく寝坊したようで、集合時間から5分遅れてやってきた。

その罰として織斑先生からISのコア・ネットワークについての説明をするように言われ、適切な説明をした事で許された。

「さて、それでは各班ごとに振り分けられたISの装備試験を行うように。専用機持ちは換装用装備のテストだ。全員、迅速に行え」

その場にいる一同が返事をして、各装備を試験場所まで運んでいく。

「ああ、篠ノ之。お前はちよつとこつちに来い」
「はい」

打鉄用の装備品を運んでいた篝さんが織斑先生に呼ばれ、俺達のほうにやってくる。

「お前には今日から専用 」
「ちーちゃ~~~~~ん!!」

織斑先生の言葉を遮るようにしながら、昨日聞いたことのある声が周囲に響く。

今俺達のいる場所は三方向を岩壁に囲まれ、残る一方を海に面している。

その人はかなりの勢いで崖を駆け下りてきていて、その場にいる全員が突如現れた人物の行動を注視する。

崖の途中から勢いよく跳躍したその人は、織斑先生向かって落下を開始する。

「……………はあ……………」

織斑先生はため息をついたあと、異様に慣れた手つきで落下してきた人物の顔面にアイアンクローをかまししながら地面に下ろした。……地味？にすごいと思うのは俺だけだろうか？

「やあやあ！！会いたかったよ、ちーちゃん！！さあ、ハグハグしよう！！愛を確かめ」

「うるさいぞ、束」

「相変わらず容赦のないアイアンクローだね」

そう言いながら簡単に拘束から抜け出し、篝さんのほうを向く束さん。……千冬さんの攻撃に普通に耐えることの出来るあなたも結構すごいと思うんですが。

「やあ……………」

「……………どつむ」

「えへへ、久しぶりだね。こうして会うのは何年ぶりかな？大きくなったね、篝ちゃん。……特におっぱいが」

ガンー！

「殴りますよ？」

どこからともなく取り出した木刀で束さんに一撃当てた後にそう言う篝さん。……それは行動する前に言うべきでは？

「殴ってから言った。篝ちゃんひどーい。ねえ、いっくんもあーくんも酷いよねえ？」

「あ、あはは……」

「……………」

頭をさすりながら俺達に同意を求めてくる束さんだが、自業自得な気がするので俺達は何も言えない。

「え、えつと……ここは関係者以外」

「んん？珍妙奇天烈なことを言うね。ISの関係者というなら、一番はこの私をおいて他にいないよ？」

「えつ、あつ、はいつ。そ、そうですね……………」

突然の事態に驚きながら、山田先生は束さんを追い出そうとするが、正論っぽい事を言われて押し黙ってしまふ。

「おい束。自己紹介くらいしろ。うちの生徒達が困っている」

「えー、めんどくさいなあ。私が天才の束さんだよ、はろー。終わ

り

そう言ってくるりとその場で一回転する東さん。作業の手を止めてぼかんとしていた一同も、そこで目の前の人物がISの開発者である篠ノ之束だと気づき、女子一同がにわかに騒がしくなる。

「はあ……。もう少しまともにできんのか、お前は。そら、手が止まっているぞ。こいつの事は無視してテストを続ける」

「こいつはひどいなあ、らぶりい東さんと呼んでいいよ？」

「うるさい、黙れ」

旧知の間柄である二人のやりとりに、おずおずと山田先生が割り込んで織斑先生に質問をする。

「え、えつと、あの、こういう場合はどうしたら……………」

「ああ、コイツはさつきも言ったように無視して構わない。山田先生は各班のサポートをお願いします」

「わ、わかりました」

織斑先生の指示を受け、山田先生は訓練機側のサポートに回る。

「それで、頼んでいた物は……………」

ためらいがちに篤さんが東さんにそう尋ねる。……………東さんに何か頼んでいたのだろうか？

「ふっふっふ。それは既に準備済みだよ。さあ、大空をご覧あれ！
！」

ビシッと頭上を指差す束さんに連れられ、俺達全員が上空を見上げ

ると、銀色の八面体が束さんの正面のに落下してくるが、八面体は地面に突き刺さったり土埃一つあげる事なくその場に着地した。

「じゃじゃーん。これぞ篝ちゃん専用機こと『紅椿』！！」

そう言いながら束さんがどこからともなく取り出したりリモコンを操作すると、ISを展開する時のような量子化現象（ただし、かなりファンシーにアレンジされている）が発生して八面体が消失し、中に収納されていたらしい紅のISが姿を現す。

「全スペックが現行ISを上回る、束さんお手製だよ。なんたって紅椿は、天才束さんが作った第4世代型ISなんだよー」

その言葉を聞き、俺を含めた全員が驚きの表情を浮かべる。

「……………つまり、この『紅椿』には一夏の雪片式型に使われている新世代技術と同じものが搭載されている……………ってことですか、束さん？」

「むむっ！！あーくん、何故そのことを！！さてはエスパー！？」

少し考えた後に束さんにそう確認すると、若干芝居がかった仕草で驚く束さん。

「ちょっと待った！！雪片式型に使われてる新世代技術ってどういうことだよ、アル！！」

「そ、そうですね！！白式は第3世代機のはずでしょう！！それに、雪片式型はただのギミックブレードではないのですか！？」

驚いた表情のまま一夏とセシリアが俺の発言に対して質問をしてくる。

「えーっと……織斑先生、言ってもいいですか？」

「……この際仕方なかるう。説明してやれ」

以前機密事項と言われたので織斑先生に説明をしてもいいものか聞くと、少し疲れた表情で許可を出してくれるので説明する事にする。

「白式に搭載されてる唯一の武装、雪片式型って常識的に考えると少しおかしいんだよ」

「おかしい？普通に物理刀としても使えているし、零落白夜を使う時に多少変形するくらいだろ？そのどこがおかしいんだよ？」

ISの兵装に対してあまり詳しくない一夏が疑問を投げかけてくる。

「もし、雪片式型が普通のギミックブレードとしたら、あの形状と大きさでビームサーベル発生機構を組み込んだ場合、単一仕様能力ワンオフ・アビリティの攻撃力を引くと、あそこまでの攻撃力を得られるはずがないんだよ」

「……そうか、わかった！！」

そこまで言って、実家でテストパイロットをしていた経験のあるシャルロットが雪片式型のおかしな点に気づいたようだ。

「アルが言いたいのは、搭載されているはずのビームサーベル発生機構の小ささに対して、雪片式型のビームサーベルの出力が高すぎるって言いたいんじゃない？」

「シャルロット、正解。そこが雪片式型のおかしい点の一つだよ。」

あとはビームサーベルと物理刀を切り替えられる点に加えて、複雑な変形機構を搭載しながらしっかりと物理刀として使える強度をもっている事もおかしいんだよ」

「た、確かに。僕の灰色の鱗殻グレイ・スケールみたいな使い方以外だと、アルのスカイ・ブレードみたいな方法しかないよね。……………言われるまで気づかなかったよ」

少し前にセシリアとのクラス代表決定戦の記録ログを見せた時のライジングブレードの事を思い出しながら、納得した表情を浮かべるシャルロット。

「なるほど、指摘されてみればそのとおりだ。雪片式型に新世代技術が使われていたとしても、何もおかしくはない。……………アルバート、お前はそれにいつ気づいたんだ？」

ラウラも納得した表情をすると共に、俺がいつその事に気づいたのかを聞いてくるので、正直に答える。

「白式と初めて戦った時に気づいたよ。ワンオフ・アビリティ単一仕様能力にも驚かされたけど、その前に驚いた点があったんだよ」

「……………つまり、クラス代表決定戦の時に一夏さんと対戦中、一度完全に動きが止まったのは……………」

「そう。雪片式型の機構機構そのものに驚いたんだよ」

セシリアが俺と一夏が初めてISで戦った時の不可解な行動を思い出して聞いてくるので、驚愕の原因が雪片式型であることをバラす。

「試合が終わった後に織斑先生から事情を聞いて、機密事項らしかったからずっと黙ってたんだよ」

「……………そういうことでしたか。今になって納得できましたわ」

どうもセシリアは俺と一夏が初めて戦った時の事を疑問に思っていたらしく、納得の表情を浮かべる。

「話の腰を折っちゃったみたいですね、束さん。あと、なんでもその事に気づいたかって言うと、ISを実際に動かせるようになるまでは技術者志望だったんで、色々調べてたんですよ」

「なるほどねえ。そういうことなら納得だ。さあ！！篝ちゃん、今からフィッティングとパーソナライズを始めようか！！私が補佐するからすぐに終わるよ」

「……………それでは、頼みます」

少し緊張した様子で束さんに向かってそう言う篝さん。

「俺達は自分の装備のテストを始めようぜ？」

「で、ですが……………」

ルームメイトということもあってか、篝さんの事だけでなく、紅椿も気になっているらしいセシリア。

「紅椿が気になるのは分かるけど、後で篝さんか束さんから試験飛行時のデータ見せてもらえばいいだろ？テストする装備は結構な数があるんだから、とっとと始めた方が記録データの閲覧に時間を取れると思うけど？」

本国の研究所からセシリアあての換装用装備が5つに、俺あての換装用装備が3つ。後は俺達二人への連名で来た各種通常装備品の数々があるので、真面目に1日かかりそうなのだ。

「そ、そうですね。まずは自分の仕事を片付けてしましましょう」

俺の言葉に同意し、セシリアは換装用装備の量子変換作業に入る。

俺は換装用装備の量子変換前に整備用のコンソールを開いて、織斑

先生のところへ向かう。

「織斑先生。機体の修復状況を確認していただきたいんですが……」
「ん？……ああ、わかった。見せてみる」

一瞬かなり険しい目つきで束さんを見ていたが、俺が声をかけると普段どおりの態度で整備ウィンドウに表示されているスカイ・ブレードの修復状況を見てこう言った。

「修復率85%か……微妙なところだな……」

「ん？どうしたの？ちーちゃん、あーくん」

「束さん。紅椿のフィッティングとパーソナライズは終わったんですか？」

「終わったよ？今篝ちゃんは試験飛行&武装をお試し中。……それで、あーくん達は何してたの？」

「少し前に機体にレベルDのダメージくらったんですけど、そろそろ展開しても特殊エネルギーバイパスが形成されないのかどうかを確認してもらおうと思ったんですよ」

「ふーん、ちよつと見せて」

そう言いながら束さんが整備ウィンドウを覗き込み、一瞥しただけでこう言った。

「これならエネルギーバイパスが形成されることもないよ。残りの修復も武装関係だけみたいだし」

「そうなんですか。ありがとうございます、束さん」

「あーくんストップ。どうせならその機体見せて。いつくんもこっちに来て白式見せてー」

一言束さんにお礼を言ってその場を去ろうとすると、束さんがそう

言ってくるので、久しぶりにスカイ・ブレードを展開する。

「あ、はい……東さん、呼びました？」

一夏も俺の近くに來たので東さんが再び説明し、一夏も白式を展開する。

「ふたりとも、データ見せてね。うりゃ」

東さんはそう言いながら白式とスカイ・ブレードの装甲にコードを刺し、それと同時に東さんの周囲に二つのディスプレイが表示される。

「ん……二人とも不思議なフラグメントマップを構築してるね。見たことないパターンだけど、二人のパターンだけ見ると微妙に似てるかも。やっぱり男の子だからかな？」

フラグメントマップというのは、パーソナライズをかけたISに現れる道筋の事で、人間で言う遺伝子のようなものだ。一夏がどうして男でISを動かせる理由や白式についての質問が一通り終わった後、俺は東さんにこう言った。

「えっと、俺は試験運用の方に戻ってもいいですか？」

「あーくん待って。昨日プレゼントあるって言ったよね？受け取ってよ」

「……………そのプレゼントって、何なんですか？」

「あーくんの新しいISだよ。もう少ししたら来るから、ちょっと待ってて」

「俺の、新機体……………ですか？」

俺が起動できるのはスカイ・ブレードだけで、他の機体は動かせないんだがどうということだろう。

「そう。あーくんの機体って、機構的な無駄があったりエネルギー効率が悪かったりするから、東さんがその改良機を作ってみたの。今の機体からコアを移植したり、それを馴染ませる為の調整に15分くらいかかるけど、受け取ってくれない？」

東さんがそう言うてくると同時に紅椿が収納されていた物と同じ八面体が上空から落下してきて、着地と同時に中身のISが姿を現す。

そこにあつたISは、確かに今使つてスカイ・ブレードいる機体によく似ていた。

基本的なデザインはスカイ・ブレードを踏襲していることが一目見ただけでわかる。脚部ブースターユニットは元のスカイ・ブレードのブースターユニットから無駄を極限まで省きつつ、見た目のカッコよさと航空力学的な流線型のラインが見事に融合していて、

腕部マニピュレーターもスカイ・ブレードとデザインラインを同じくしながら、一目見ただけで様々な機能を有している多機能武装腕アームド・アームであることがわかる。

アンロック・ユニット非固定浮遊部位に関してはスカイ・ブレードのウイング・バインダーから形状が変化していて、1つのバインダーにビットが2つ装着され、それが2枚重なって1枚のウイング・ユニットになっているという変わった形で、それが左右1対の2枚、合計8つのビットを搭載している。

胴体部を覆うアーマーや頭部のハイパーセンサーも形状がよりスタイリッシュに変化していて、紅椿や白式並みか、それ以上のスピー

ドを易々とたたき出すことが出来そうだった。

まるで目指すべき頂いただきの風景を見せられたような心境でそのISを見ながら、束さんにこう言った。

「…………ごめんなさい、束さん。機体を作ってくれたことはすごい嬉しいんですが、この機体、全ては受け取れません」
「え〜！〜！どうして〜！〜！せつかくあーくんのために作ったのに〜！！」

俺の返事に対して束さんが不満を述べるので、受け取れない理由を説明する。

「新しい機体を作ってくれたことは感謝していますし、俺みたいな初心者に対してここまでしてくれる事に対してはすごい嬉しいんですけど、こっちの機体にコアを移植して使うって事は、スカイ・ブレードを蔑ろにするだけじゃないと思うんです」

「どうして〜！！こっちだってベースはあーくんの機体なんだし、ベース機を蔑ろにしてないじゃん！！」

「確かに設計ベースとしてはスカイ・ブレードを蔑ろにしていることはわかります。でも、今、機体そのものへの思い入れを持っているのは束さんしかいません。けど、スカイ・ブレードに関わってくれた人の中には、この機体そのものへの思い入れをもっている人もいるんです。

そういった機体へ思い入れをしている人たちを蔑ろにしないために、新しい機体を全てを受け取ることが出来ないんです」

「あーくんが言ってることの意味がわかんないよ〜！！戦うんだったら、スペック高いほうがいいじゃん！！」

純粹に機能面だけを考えれば、束さんの言っていることの方が正しいのはわかる。だが、元々スカイ・ブレードを使う予定だったサラ先輩や、研究所に勤める男性職員の皆をはじめとした人達や、学園で調整を手伝ってくれた先輩達。そういった『スカイ・ブレードを通じて知り合うことが出来た人達』との『絆』や『想い』を蔑ろにしたくなかった。

「諦める束。こうなったらウィルソンが意見を変えないことはよく知っているだろう。それに、ウィルソンは機体全てを受け取らないと言っているだけだ」

俺の言葉を聞いて、織斑先生が束さんの説得に加わってくれ。しかも、束さんにヒントも伝えてくれているので、聡明な束さんなら気づいてくれるだろう。

「……………つまり、武装とか一部のパーツだけだったら受け取ってくれるって事？」

無然としたまま束さんがそう聞いてくるので、俺はその問いに対してこう答えるしかない。

「そのとおりです。……………自分がすごい我俣を言っていることは理解していますし、束さんからすれば納得いかない結果だつて言うことも重々承知しています。でも、今までスカイ・ブレードを通じて知り合った人達を蔑ろにしない為に、武装をはじめとした一部パーツの受領でとどめさせてください、お願いします!!」

そう言いながら束さんに向かって頭を下げる。

「……………しかたないなあ、あーくんは。今回はそれでいいけど、あ

「くんにはこっちの機体の武装全部受け取ってもらおうし、それに伴って、イメージインターフェースの入れ替えをはじめとした各種調整とかは完璧にやらせてもらうからね!!」

「ありがとうございます、東さん!!」

若干怒りながらも東さんは俺の提案を受け入れてくれたので、そのことに対してお礼を言っておく。

それからあつという間で、ISの展開時と同じ量子化現象で前腕部だけのパーツを左右二対、計四つ取り出すと、両手の指の隙間全てを使ってドライバードリル、カッターをはじめとした各種機材を手にとって、機体の改造作業を開始する。

外見からは全くわからないはずの外部装甲の接合面をメス状の刃物で開き、専用器具でロック。内部の機械部品を引き出していじり始めた。

東さんが非固定浮遊部位^{アンロック・ユニット}周りを担当し、4本の浮遊アームが同じ要領で四肢のパーツをカスタマイズしていく。

しかもその作業自体は10分ほどで終了し、続けて新機体とスカイブレードをコードで接続すると、いくつもの空間投影ディスプレイとキーボードを展開して、凄まじい速さでキーボードをタイプしていく。

当然というべきか、タイピングのスピードが速いだけでなく、滑らかですばやい動きでソースコードを打ち込み、秒単位で切り替わっていく画面にも目を通していて、東さんが天才と呼ばれ、自称していることを理解させられる一幕だった。

「はい、終了。こつちに量子変換インスタールしておいた装備は全部そつちに移し変えておいたからね。武装の説明を始めるよ」

「たっ、た、大変です！お、おお、織斑先生！！」

流麗なキータイプもハード面の調整と同じく10分かからずに終了し、東さんがそういつた瞬間、山田先生がかなり慌てた様子で織斑先生に駆け寄ってきた。

「どうした？」

「こ、こつ、これをつ！！！」

山田先生が織斑先生に小型端末を渡し、織斑先生がその画面に表示されたデータを見て表情を曇らせる。

「特命任務レベルA、現時刻より対策をはじめられたし……」

「は、はい。ハワイ沖で」

「しつ。機密事項を口にするな。生徒達に聞こえる」

「す、すみませんっ……………」

「専用機持ちは？」

「ひ、ひとり欠席していますが、それ以外は」

山田先生がそれだけ言うと、二人は声を出さずに手話で何かを伝え合う。

その後、織斑先生から教員の特殊任務行動に伴う稼動試験の中止が言い渡され、一般生徒達への室内待機命令と、専用機持ちに対する召集命令が発令された。

その中には今しがた専用機を得たばかりの篝さんも含まれ、篝さんのいつもと微妙に違う表情を見て、俺は言いようのない不安を感じ

てしまった。

21 新たなる力、遅れて開く紅椿（後書き）

最初は甘く、終盤は厨二臭いお話でした。

唐突な主人公強化と思われる方もいるかもしれませんが、9話で東さんにそれっぽいフラグを立てさせてあります。

新しいウイング・バインダーは、ストライクフリーダムの羽根をそのまま思い浮かべてください。

そして、アニメ1期のラスボスである銀の福音戦が次回から始まります。

アルバートの新武装については次回以降でお披露目できると思います。

22 静かに高鳴る銀の鐘へシルバーベル（前書き）

最新話、作戦会議編です。今回一緒にアルの新武装の解説も入れておきました。

次回からは1度目の福音戦になります。

22 静かに高鳴る銀の鐘へシルバーベル

織斑先生からの召集命令を受け、俺達専用機持ち7名と教員一同は旅館の一番奥に設けられた宴会用の大座敷・風花の間に集められた。

「では、現状を説明する」

証明を落とした室内に大型の空間投影ディスプレイが浮かび、そこに世界地図と、俺達のいる花月荘周辺の地図が表示される。

「二時間前、ハワイ沖で試験稼動にあつたアメリカ・イスラエル共同開発の第3世代型IS『銀の福音』シルバー・オ・ゴスペルが制御下を離れて暴走。監視空域より離脱したとの連絡があつた」

「……それを俺達に教えたって事は、専用機持ちも作戦に参加するって事なのだろう。」

「一夏は面食らっているようだが、俺はイギリス政府がかなり強引な手段を使った結果、イギリス代表候補生の一員という事になっているので、この手の訓練も少しだけ受けた経験がある。」

「その後、衛星による追跡の結果、福音はここから2キロ先の空域を通過する事がわかった。時間にして30分後。学園上層部からの通達により、我々がこの事態に対処する事となった。教員は学園の訓練機を使用して空域及び海域の封鎖を行う。」

「よって、本作戦の要は専用機持ちに担当してもらう」

なるほど、空域や海域の封鎖は訓練機でも十分可能な仕事だが、稼動試験用に持ち込んだISの数の関係で福音撃墜に回すことのでき

る訓練機がない。だから俺達の出番ってわけか。

「それでは作戦会議をはじめ。意見がある者は拳手するように」
「はい」

セシリアが拳手をしてから、織斑先生にこう言った。

「目標ISの詳細なスペックデータを要求します」

「わかった。ただし、これらはニヶ国の最重要軍事機密だ。けして口外するな。情報が漏洩した場合、諸君には査問委員会による裁判と最低でも2年の監視がつけられる」

「了解しました」

セシリアが了承の意を示すと、メインディスプレイに『銀の福音』の詳細なデータが表示され、それを見ながら対策を考える。

「広域殲滅を目的とした特殊射撃型……わたくしやアルのISと同じく、オールレンジ攻撃を行えるようですね」

「攻撃と機動の両方に特化した機体ね。……厄介だわ。しかも、スペック上ではあたしの甲龍を上回っているから、向こうの方が有利

……」

「この特殊武装が曲者って感じはするね。ちょうど本国からリヴァイヴ用の防御パッケージが来てるけど、連続しての防御は難しい気がするよ」

マルチスラスター

「しかも多方向推進装置を搭載しているから、かなり複雑な機動をするのは容易に想像できる。近づいてぶった切るしかないだろうな」

「だが、このデータでは格闘性能が未知数だ。持っているスキルもわからない。偵察は行えないのですか？」

ラウラの言うとおり、スペックデータだけでは近づいた際の格闘性

能まではわからないし、機体が暴走状態だからパイロットの経歴を見てどういった行動をとるかの予想を立てることも出来ないのも、面倒な事この上ない。

「無理だな。この機体は現在も超音速飛行を続けている。アプローチは1回が限界だろう」

織斑先生がそう言うので、自然と役割が決まってくる。

「そうになると、一撃必殺の攻撃力を持つ俺が一夏は出撃確定だな」
零落白夜かライジングブレードなら一撃で福音を叩き落す事ができる。

「あとは移動手段だね。エネルギーは全部攻撃に使わないと難しいだろうし、一夏の零落白夜もアルのライジングブレードもかなりのエネルギーを消耗するから、もう一人の役割は『攻撃役をエネルギーを消費させずに現場まで運ぶこと』になるね」

「しかも、目標に追いつけるだけの速度が出せるISでなければいけない。超高感度ハイパーセンサーも必要だろう」

「ち、ちよつと待った！！俺も出撃候補なのか！？」

シャルロットとラウラがそう言うと、一夏は驚いた表情で俺達を見る。

「この場にいるメンバーで、一撃でISを機能停止させられる攻撃力を持っているのは俺かお前だけだ。それなら出撃候補に入るの当然だろう」

「でっ、でも！ー！」

一夏が反論をしようとした時、織斑先生がこう言った。

「織斑、これは訓練ではない。実戦だ。もし覚悟がないなら無理強いはしない。幸いと言っていいのか、ウィルソンはそういつた訓練も受けているようだしな」

織斑先生がそう言った瞬間、それまでビビっていた一夏の顔が一気に引き締まって、こう言ってきた。

「やります。俺が、やってみせます」

「なら任せたぞ、一夏。俺のライジングブレードも攻撃力は高いが、お前の単一仕様能力の方が現実性がある」

一夏もあ言つた以上はやってくれるだろうから、攻撃役を一夏に任せることにする。

「よし。それでは作戦の具体的な内容に入る。現在、この専用機持ちの中で最高速度を出せる機体はどれだ？」

「それなら、わたくしのブルー・ティアーズが。ちょうどイギリスから強襲用高機動パッケージ『ストライク・ガンナー』が送られてきていますし、超高感度ハイパーセンサーもついています」

セシリアの発言を聞きながら、俺は事前に送られてきたストライク・ガンナーのスペックを思い出す。

ブルー・ティアーズ専用の強襲用高機動パッケージ『ストライク・ガンナー』は、デフォルト状態だと攻撃に使用する6機のブルー・ティアーズの砲口を全て塞ぎ、全機を腰部アーマーに接続。

普段は攻撃に使っている多目的エネルギーのBTビームを全て推進

力に回す事で高スピードと高機動性を実現させたパッケージだ。

そのスピードは、ビット1機あたりにチャージできるBTエネルギーのコンデンサ容量がブルー・ティアーズの方が多い関係上、同じ原理を使って設計されているスカイ・ブレード用の高機動パッケージを装備した状態よりも速い。

「オルコット、超音速下での戦闘訓練時間は？」

「20時間です」

「ふむ。それならば適任」

そう言いかけた織斑先生を、いきなり現れた底抜けに明るい声が遮る。

「待った待った。その作戦はちょっと待ったなんだよー!!」

突然天井の辺りから声がかかり、その場にいる全員が上を見上げると、部屋のだ真ん中の天井から束さんの首が見えていた。

「……………山田先生、室外への強制退去を」

「えっ!?!は、はいっ。あの、篠ノ之博士、とりあえず降りてきてください」

「とっつ」

束さんはくるりと空中で一回転してから着地すると、音も立てずに織斑先生に近づきながらこう言った。

「ちーちゃん、ちーちゃん。もっといい作戦が私の頭にノウ・プリンティング!!」

「……………出て行け」

頭を押さえながら束さんに向けてそういう織斑先生。山田先生も束さんを室外に連れ出そうとするが、するりとかわしてこう言った。

「聞いて聞いて！！ここは断・然！！紅椿の出番なんだよ！！」

「なに？」

「紅椿のスペックデータ見てみて！！パッケージなんかなくても超高速機動が出来るんだよ！！」

束さんの言葉に伝えるように数枚のディスプレイが織斑先生の周囲に現せながら、束さんは説明を続ける。

「紅椿の展開装甲を調整して、ほいほいほいと。ほら、これでスピードはばっちり！！」

いつの間にかメインディスプレイにも紅椿の情報が表示されていて、全身各所にある展開装甲を開いた状態の紅椿のスペック上のスピードは、ストライク・ガンナーを装備したブルー・ティアーズの1.3倍近いスピードを出す事が可能なようだった。

「束さん、展開装甲って雪片式型に使われてる技術の事ですよね？あれって攻撃専用じゃないんですか？」

使えばビーム系の機構を搭載できるスペースが小さくても高出力ビームを発生させる事ができるのは評価できるが、それ以外の使い道があるのだろうか？

「説明しましょ〜そうしましょ〜。展開装甲はこの天才束さんが作った第4世代型ISの装備で、攻撃・防御・機動と用途に応じて切

り替えが可能になつてゐるんだよね。つまり紅椿自体がパッケージ
換装を必要としない万能機で、第4世代型の目標である即時万能対
応機リアルタイム・マルチロール
・アクトレスの1号機として作つてみたんだよ。

確かにあーくんの言うとおり、雪片式型に使つてある展開装甲は
攻撃にしか使えないけど、紅椿の展開装甲は用途に応じて多目的工
ネルギーの出力を切り替え可能にした最新式で、最大稼動時にはス
ペックデータはさらに倍プッシュだ」

東さんの説明を聞き、その場にいる全員が静まりかえり、言葉が出
ない。

「……………つまり第3世代機つて、ISの技術発展に必要な寄り道つ
てことですか？」

「ん、そんなところかな？まあ、天才東さん的には寄り道なんて
必要ないんだけどね」

元技術者志望の人間として一番簡単な考えを言つてみたが、あつさ
りと必要なしとかわれてしまった。…………東さん、それは他の技術者
をバカにしすぎでは？

「東、言つたはずだぞ。やりすぎるな、と」

「そうだったけ？えへへ、ついつい熱中しちゃったんだよ」

織斑先生に言われてその場にいる人間が黙り込んだ理由を理解した
東さん。

「あ、でもほら、紅椿はまだ完全体じゃないし、あーくんもいつく
んもそんな顔しないでよ。二人が暗いと東さんはいたずらしたくな
っちゃうよん」

そうやって明るい声を出されても、俺としては困ってしまう。

「まー、あれだね。今の話は紅椿のスペックをフルに引き出したら、って話だからね。でもまあ、今回の作戦をこなすくらいは夕食前だよー!」

そうやって自信満々に告げる束さんだが、紅椿の操縦者である箒さんがやってくれると言わない限り無理強いは出来ないだろう。

「……箒さん、受領直後で紅椿に慣れきってない状態だけど、行けるか?」

「……無論だ。一夏を敵の所まで運び、撃墜のサポートをすればいいのだろう。それくらいやってやるさ」

箒さんの目はやる気に満ち溢れている。……少し不安だが、今の精神状態ならやってくれるだろう。

「織斑先生。箒さんもこう言ってますし、紅椿が超音速飛行可能なようですから、一夏と箒さんで1つのペア、俺とセシリアでもう一つのペアを組んで任務を行いたいのですが」

高攻撃力の機体が2機あって、超音速飛行が可能な機体も2機あるなら両方使うべきだろう。

「そうだな。……オルコット、そのパッケージは量子変換インストールしてあるのか?……それと束、紅椿の調整にはどれくらいの時間がかかる?」「ちーちゃん、あーくんの言ったプランでいくの!? 白式と紅椿があれば十分だよ」

織斑先生の言葉に不満を漏らす束さんだが、ここは納得してもらおう

しかないだろう。

「東さん、作戦に不測の事態は付き物です。白式と紅椿だけだとそういったイレギュラーへの対応が難しいですし、フィッティングとパーソナライズを済ませたとはいえ、篤さんは紅椿に慣れきっていません。より確実な作戦遂行をするつもりなら、保険はかけておくべきだと思います」

「そういうことだ、東。……それで、調整時間はどれくらいだ？」
「…7分あれば余裕だよ」

無然とした表情でそう答える東さん。

「オルコット、お前はどうかんだ？」

「既に量子変換済みですわ」
インストール

「よし。では本作戦はより速度の速い織斑・篠ノ之の両名による目標の追跡及び撃墜を第一プラン、織斑・篠ノ之ペアが目標の撃墜に失敗した場合はウィルソン・オルコット両名での敵機の追跡及び撃墜を第二プランとする。作戦開始は15分後。各員、直ちに準備にかかれ」

織斑先生のその言葉を聞きながら、その場にいたメンバー全員が作戦の準備を始める。俺としては武装の仕様がどう変わったか東さんに聞きたいところだが、東さんは紅椿の調整作業で忙しいだろうから、先に超音速下での機動の注意をセシリアに聞くため、一緒に行動する事になる一夏に声をかける。

「ボーっとしてるなよ、一夏。俺もお前も超音速戦闘の経験はないんだから、まずはセシリアに超音速戦闘時の注意事項を聞きにいこう」

「ああ、そうだな。そうしよう」

「夏も俺の言葉に同意し、二人でセシリアに超音速下戦闘における各種注意事項を聞くことにする。」

「セシリア、出撃準備中すまないが、超音速戦闘時に注意すべき事を教えてくれ」

「お願いします、セシリアさん」

「いえ、二人が来なければわたくしから教えていましたから、構いませんわ。おふたりとも、超高感度ハイパーセンサーを使用した経験はおありですか？」

「いや、ない」

「そうですか。ではまずその注意から。」

俺達と同じタイミングでそう返事をした事を皮切りに、セシリアをはじめとした面々から超高感度ハイパーセンサー使用時の注意から始まり、ブースト消費量と相互相対速度の差による射撃武器のダメージの違いといった細かな点を教えてくれた。

「とிட்டた具合に注意事項は山ほどありますから、気をつけてください。おふたりが今作戦の鍵なのですから」

そう言つて説明を終えるセシリアに、俺達は感謝の言葉を言つしかない。

「それはわかっているさ、セシリア。教えてくれて助かった」

「ありがとう、セシリアさん。筈にも伝えておく」

その後一夏は機材の運び出しを手伝い、俺は仕様の変わった武器の特製を聞くために、紅椿の調整が終わった束さんに話しかけることにした。

「束さん、調整が終わった直後で申し訳ないんですけど、新しい武装類の説明をお願いしても大丈夫ですか？」

「いやー。ただ、かなりいろいろな事できるようにしたから、口頭で説明するよりもこれ見たほうが早いね」

そう言いながら束さんは俺の目の前に空間ディスプレイを一つ展開して、仕様が変わった武装の一覧を見せてくれたのだが、束さんから新武装を受け取ったことを後悔しそうになった。

主武装：バスタードソード（名称未設定） 展開装甲を使用し

た全長1.8メートルのバスタードソード。原型武装と同様にBTエネルギーを刀身に纏わせる事も可能だが、その他にBTビームを纏わせない純物理刀モードと、BTビームのみで刀身を形成するビームサーベルモードへ任意にモード変更可能。

原型武装と比較して展開装甲を使用しているため、高威力攻撃時に刀身へのダメージが発生しないため、エネルギーが切れるまで高威力攻撃を連続使用可能。

副武装1：多目的ビット（名称未設定） 展開装甲使用の多目

的ビット。原型武装ではビームサーベル発生機能のみだったが、レーザービットモード及び3機以上のビットを同時使用したエネルギーシールドモードを搭載。

イメージインターフェースとビットの制御システムを新規開発の新型に換装しているので、随時コマンドを送ることなく一定の自立行動が可能。

副武装2：ビーム・実弾切り替え式マシンガン（名称未設定）

2丁搭載。原型武装と同様B Tビームと実弾の切り替えが可能。原型武装は小型化が不完全のためB Tビームモードに不具合があったが、それを解消。新機能としてビーム・実弾の同時発射モードを付加。

高威力攻撃：（名称未設定） 原型機の最大威力攻撃と同様、武装のエネルギーを使用した高威力攻撃が可能。ただし、原型機と違い刀身長をビームサーベルモードと同じにした上で一定のエネルギーを消費し、サーベルのエネルギー密度を高める事で攻撃力を上昇させる。

原型機と同じく全てのエネルギー及びシールドエネルギーを一挙に消費した最大威力攻撃も可能だが、その場合はビームサーベルモードの3倍近い刀身長になるので扱いに注意。

機能自体はそこまで変わっていないが、今までの弱点が克服されている上で戦闘中に可能な行動が一気に増えている点は非常に頼もしかったが、第4世代技術の展開装甲を使っている事を知った瞬間にこっちは思った。

（やべえ、夏休みがほぼ消えた……）

おそらく臨海学校から戻った瞬間、どこからともなく情報入手した故郷（くに）の代表候補生管理官あたりから、夏休みは展開装甲をはじめとした新世代技術のデータ取りのために絶対に帰ってくるように言われるだろう。

「こっちで名前決めてもよかったんだけど、使うのはあーくんだから、今の内に武装とかの名前を決めておいてね」

「……了解です、東さん。……あと二つ聞きたいんですけど、もしも国側が新武装を調査したいって言い出した場合、どうすればいいんでしょう？」

「そんなこと？無理矢理調査すると、調査元に対してシステムクラッシュするように作ってあるから大丈夫だよ？」

非常に恐ろしい事をにこにこ笑いながら言う東さん。………管理官には無理な調査をしないように言い含めておこう。

「………えっと、俺としては機体の細かい微調整とか、自己修復じやあ賄いきれない部分の定期メンテナンスをやりたいんですけど、その場合はどうすればいいですか？」

「それに関しては整備マニュアル作っておくから、それを見ながらやってよ」

「わかりました、東さん。それじゃあ、作戦があるので一端失礼します」

東さんに向かって一礼してからその場を去りつつ、各武装の名称を設定する。新しく名前をつける意味も薄いと思ったので、高威力攻撃は以前の名前をそのまま使用し、新武装については原型武装の名前にmk?をつけるだけにしておいた。

その後は紅椿の調整を終えた篤さんも交えて、皆で銀の福音への対応策を考えている内に作戦開始時間が近くなったので、移動を開始するのだった。

時刻は午前11時30分。7月の空はこれでもかというほどに晴れ渡り、俺とセシリア、一夏と篝さんはそれぞれ等間隔に距離を取って砂浜に立っており、それぞれのパートナーに目を合わせながら、一度だけ頷く。

「来い、白式」

「行くぞ、紅椿」

「頼むぞ、スカイ・ブレード」

「お願いしますわね、ブルー・ティアーズ」

それぞれの愛機に呼びかけながら戦闘形態へ移行^{シフト}してISアーマーを展開し、それと同時にPICによる浮遊感とパワーアシストの独特の感覚が体全体を駆け巡る。

「セシリア、すまないがよろしく頼む」

徐々に展開するISの感覚に体がついていけないのか、ほんの少しだけ操縦感覚に違和感を覚えてしまう。だが、マニピュレーターを何度か開けたり閉じたりしている間に違和感が消滅する。

「それは構いません。ですがアル、どうして翼の形状が変わっておりますの？」

「東さんお手製の新武装を貰ったんだよ。それについては作戦の後で説明するから、今は目の前の事に集中しよう」

横では篝さんが浮かれ気味の表情で一夏に話しかけていて、その様子に不安を感じてしまう。

「そうですね。今の篝さんは専用機を得て浮かれているように見えますから、わたくし達でフォローをしましょう」

「ああ、それに加えて銀の福音の撃墜もな」
「ええ。それでは背中に乗ってくださいな」

セシリアのその言葉を聞き、俺はブルー・ティアーズの背中に乗る。

『織斑、篠ノ之、ウイルソン、オルコット、聞こえるか?』

オープンチャンネル
開放回線から織斑先生の声が聞こえてくるので、俺達は頷いて返事を
をする。

『今回の作戦の要は織斑とウイルソンの攻撃による一撃必殺だ。コナンアフローチ・ワシタウソ短
時間での決着を心がける』

「了解」

俺と一夏が織斑先生に答えると、篝さんが織斑先生にこう問いかけ
た。

「織斑先生、私は状況に応じて一夏とアルのサポートをすればよろ
しいですか?」

『そうだな。だが、無理はするな。お前はその専用機を使い始めて
からの実戦経験は皆無だ。突然、何かしらの問題が出るとも限らな
い。それはウイルソン、お前にも言える。元の武装と基本的には同
じとはいえ、不具合が発生する可能性もある。十分に注意しろ』

織斑先生は篝さんへの注意と同時に、俺にも一言注意してくる。
…
確かに基本的な使い方は同じとはいえ、本来は初めて使う武器な
のだから慎重に使うにこした事はない。気を引き締めていこう。

「わかりました。出来る範囲で支援します」

「了解しました。注意して使用します」

織斑先生への通信の返事も喜色きしよくに弾み、どこか浮うついているように思えてしまう。……取り越し苦労ならいいが、気をつけることにしよう。

『 織斑、ウイルソン、オルコット 』

『 は、はい 』

『 「はい」 』

織斑先生からの通信が開放回線オープンチャンネルから秘匿通信プライベートチャンネルに切り替わり、俺達はほぼ同時に返事をする。

『 どうも篠ノ之は浮かれている。あんな状態ではなにかを仕損じるやもしれん。いざという時はサポートしてやれ 』

『 わかりました。ちゃんと意識しておきます 』

「 わかっています。いざという時はきっちりサポートしますよ 」

『 了解いたしました。お任せください 』

『 頼むぞ 』

俺達の返事を聞き、一言だけそういつた織斑先生は再度回線オープンチャンネルを開放回線に切り替わって、号令がかかる。

『 最高速度の関係上、ウイルソン・オルコットペアを先行させる。 』

『 では、はじめ！ ！ 』

織斑先生のその一言で作戦が開始され、俺達は上空へと旅立っていた。

22 静かに高鳴る銀の鐘へシルバーベル（後書き）

そういつたわけで、作戦会議とアルの新武装の解説回でした。

福音戦はアル&セシリアペアと、一夏&篝ペアの2組で作戦を行う事にしてみました。

アルの新武装は今までの武装の弱点を消した形になっていますが、ライジングブレードに関しては感想でツツコミが入った事もあって少しばかり変えています。

次回からの福音戦ですが、4人の登場人物が入り乱れての戦いになりますので、3人称視点での戦闘描写になることを予め言うておきます。

23 福音との戦い その1 (前書き)

最新話、福音との1度目の戦いなどです。

福音戦は事前の予告どおり3人称視点で行ってますので、少し読みづらいかもしれません。

23 福音との戦い その1

千冬の号令と共にセシリアは背中にアルバートを載せた状態で高度を上昇させ、10秒ほどで目標高度500メートルに達する。

「ざんじ暫時衛星リンク確立……情報照合完了。目標の現在位置を確認。アル、行きますわよ!!!」

「ああ。セシリア、頼んだ!!!」

アルバートの言葉を聞き終えるが早いか、普段は攻撃に使っているビットの砲口を塞ぎ、BTビームを推進力へと変換して出力を上昇させているブースターを使用しながら、セシリアは最大出力でブーストする。

このパッケージはビットが使えない分、攻撃の手数は減少するが、その代わりに大型BTビームライフル《スターダスト・シューター》を搭載しているので、デフォルト標準装備状態と比べても総合的な火力はそこまで落ちていない。

「アル、見えましたわ!!!」

「!!!」

セシリアはパッケージに付属している超高感度ハイパーセンサー《ブリリアント・クリアランス》越しに、目標の『シルバリオ・ゴスベル銀の福音』を捕捉し、そのことを攻撃役のアルバートに報告する。

福音はその機体名に相応しく、全身に銀色のISアーマーを纏っていて、ある程度距離をおいた状態でも一目でわかる頭部から生えた一対の巨大な銀色の翼が、機体を見た者に異質さを感じさせていた。

『アル、俺達が先に仕掛ける。サポートを頼む!!!』

『行くぞ、一夏！！』

後方から接近してきた一夏がアルバートたちに秘匿通信プライベートチャンネルでそう伝え、背中に一夏を乗せた筈がセシリアの斜め下のあたりから福音目掛けて突撃し、十分に距離を詰めたところで一夏が零落白夜と瞬間加速イクニッションブーストを同時に発動、福音に攻撃を加えようとする。

零落白夜の光の刃が触れる直前に福音はその場で反転して身構え、一夏達に向き直ると同時にほんの数ミリだけ後退し、一夏の攻撃を紙一重で回避する。

「なっ!?!」

「敵機確認。迎撃モードへ移行。《銀の鐘》シルバール、稼動開始」

驚きの声をあげる一夏への返礼と言わんばかりに、開放回線越しに福音から事務的な機械音声が発生し、搭載兵器が稼動状態に入った事を告げる。

「させるかよ!?!」

一夏と筈へ攻撃を加えようとする福音に対して、遅れて到着したアルバートが福音の上方からライジング・ブレードを起動させ、展開装甲によってそれまでの問題が解消したスカイ・ブレードmk?から発せられる真紅のビームサーベルを振って多方向推進装置を両断マルチスラストしようとするが、福音は慣性制御装置慣性制御装置を巧みに利用し、アルバートの攻撃に対して回避行動を取る。

その結果、アルバートの攻撃は右側の多方向推進装置の装甲表面を数センチ傷つけるだけの結果に終わり、ダメージを最小限に抑え込まれてしまう。

「ちっ、セシリア!!」

「了解ですわ!!」

アルバートの一言でセシリアが援護射撃を開始し、通常よりも高出力のBTビームを福音目掛けて連射する。

だが、その攻撃すら空中を踊るように移動する福音によって全て紙一重で回避されてしまい、ダメージらしいダメージを与える事はできない。

「「なっ!?!」」

「ウソだろ!?!」

「勘弁しろよ、クソが!!」

4人が福音の圧倒的な回避性能に驚きをあらわにしてしまい、一瞬とはいえ動きが止まってしまふ。無論福音はその隙を逃すことなく4人への反撃を行う。

「La……………」

甲高いマシンボイスの歌声に呼応するように福音の多方向推進装置マルチスラスターの装甲が翼を広げるように開き、展開された装甲各所から高密度に圧縮されたエネルギー弾が発射される。

「回避行動!!」

水しぶきのごとく大量に発射されたエネルギー弾を見て、セシリアが他の3人に行動を促すために大声でそう叫んでから自身も回避行動を取り、一夏達もセシリアの言葉に従ってそれぞれ回避行動を取りはじめる。

「くっ！？ 箒さん、紅椿のパワーで福音の動きを止めてくれ！！その間に俺達が攻撃する。セシリアは箒さんの援護を！！」

「わ、わかった！！」

「わかりましたわ！！」

アルバートの指示を受けて、箒は回避行動を続けながら福音から一端距離をとり、搭載武装の雨月あまつぎと空裂からわれを展開。背部と脚部の展開装甲を開いて爆発的なスピードで一気に距離を詰めようとする。

「行くぞ！！」

「撃たせていただきますわ！！」

《銀の鐘》シルバールの高密度エネルギー弾を回避しながらセシリアが《スターダスト・シューター》を連射し、僅かにスピードが落ちたところで箒が復員に接近し、得意の近接格闘戦を仕掛ける。

「はああああっ！！」

裂帛の気合と共に箒は二刀流での斬撃を繰り返す。しかも腕部展開装甲が開き、そこから発生したエネルギー刃が箒の攻撃に合わせて自動で射出され、福音を狙う。おまけとばかりに福音が箒から距離を離そうとするとセシリアの援護射撃が襲ってくることもあって、福音も二人の攻撃に対して防御を使い始め、少しずつだがダメージが蓄積されていき、福音の動きが止まる。

『行くぞー夏！！』

『おう！！』

絶好のチャンスにアルバートは瞬間加速を使いながら秘匿通信を使

イグニッションブースト

プライベートチャンネル

つて一夏に声をかけ、一夏もアルバートに遅れて瞬間加速を發動。
二人で左右同時に攻撃を仕掛けようとする。

「La……………」

だが、福音もそれに対抗するようにマシンボイスによる叫び声を上げながら、再び《銀の鐘》^{シルバーベル}を起動。全方位に向けて高密度エネルギー弾をばら撒く。

「やるなっ……………！！だが、押し切る！！」

筈が光弾の雨を紙一重で回避し、迫撃をしたことで隙が出来る。

「！！！！」

「！！！！」

しかし、攻撃を加える直前にアルバートが直下の海面へと全速力で向かい、一瞬遅れて一夏も直下の海面へと向かおうとしてしまう。

「一夏、下は俺が守る！！お前は攻撃しろ！！」

「わかった！！」

「いえ、アルも攻撃してください！！あの方達はわたくしにお任せを！！」

アルバートと同じ異変に気づいた一夏と一緒に直下の海面に移動しようとするが、アルバートが指示を出して一夏に攻撃を優先させ、セシリアもアルバートに攻撃を優先するように言う。

だが、3人がそうしている内に福音は一夏の攻撃可能範囲から離脱してしまい、追撃する事が不可能になる。

一方アルバートに指示を出したセシリアは直下の海面近くまで高度を落としており、そこで《スターダスト・シューター》を連射して《銀の鐘》^{シルバベル}の高密度エネルギー弾を撃ち落そうとする。だが、それでは間に合わないと思ったアルバートが今まで使っていなかったビットを4機パージしてエネルギーシールドモードを起動させ、セシリアごと覆つようにながら海面の一点にBTビームによる四角錐を形成する。

「3人とも何をしている！？せつかくのチャンスに」
「海上は先生達が封鎖したはずなのに船がいるんだよー！」
「密漁船だから、ジャマーあたりを積んでたんだろうな。発見が遅れた」

キュウウウン……

二人のその言葉と共に雪片式型とスカイ・ブレードmk?の展開装甲が閉じ、ふたりの機体のエネルギーがほぼ空になった事を間接的に伝える。

「馬鹿者！！犯罪者などをかばって……。そんなやつらは」
「箒さんー！！」
「ッ！？」
「たとえ犯罪者でも、^{IS}わたくし達からすれば守るべき人々に違いありませんわ。いつもの箒さんらしくありませんわよ」
「そうだぞ箒。力を手にしたら弱いヤツのことが見えなくなるなんて、箒らしくないぞ」
「わ、私、は……………」

明らかな動揺の表情を浮かべ、それを隠すように両手で覆う。その時に落とした刀が空中で光の粒子となって消えていき、それがどういふことを理解したアルバートが一夏にこう言った。

「一夏、箒さんを連れてすぐに離脱しろ！！紅椿は具現維持限界ギリギリだ！！」

「っ！？わかった！！」

アルバートの指示を聞き、一その危険性を理解した一夏が箒を抱きかかえるようにしながらその場から離脱していく。

「アル、わたくし達も！！」

「ああ、わかってる！！」

セシリアがそう言うと、アルバートもそれに頷く。密漁船を守っていたビットを回収し、離脱を開始しようとしたアルバートに異変が起こる。

「なっ、こんな時にエラーかよ！？」

突然ウイング・スラスタがストップしてしまい、ふらつきながら海面へ緩やかに落ちていくアルバート。その時、超高感度ハイパーセンサーからの情報で背後にいる福音が再び《銀の鐘》シルバベルを起動させようとしていることを感知する。

「アル、捕まって！！」

「頼む、セシリア！！」

だが、アルバートの落下軌道を予測したセシリアが海上で自分の背にぶつかるといふようにしながらアルバートを受け止め、自分の肩を掴ん

だ事を感じた瞬間に最大出力で脚部ブースターを点火し、その場から離脱していくのだった。

「作戦は失敗だ。以降、状況に変化があれば招集する。それまでは現状待機しろ」

作戦を失敗し、俺達4人が何とか旅館近くの砂浜に到着した後にISを待機状態へ移行シフトさせると、織斑先生の口からそう言われ、俺達はそれぞれこう答えた。

「了解です」

「了解」

「……………」

返事をした順に、俺とセシリア・一夏・篝さんの順でそう答え、織斑先生がその場を去っていく。

「……………くっ!!」

「おい、篝!!」

その場から駆け出す筈さんとそれを止めようとする一夏だが、一夏の肩を掴んでその場に押し留める。

「放せよ、アル！―！筈が」

俺のほうに向き直り、手を放すように言ってくる一夏。だが、手を放すつもりはない。

「一人にしてやれ。今、声をかけても逆効果になるだけだ」

「そんなこと」

「アルの言うとおりですわ、一夏さん。今、筈さんは自分ひとりだけあの船の存在に気づけず、さらには作戦を失敗してしまった事でかなり気落ちしている事でしょう。船に気づいていたわたくし達が何を話しても、聞き入れられるとは思えませんわ」

「わかったよ、くそっ！―！」

筈さんに対しても、福音に対しても何も出来ないことが余程悔しいのだろう。

「とにかく今は待機だ。しばらくすれば何かしらの動きはあるだろうからな」

「……わかった。……しばらく一人にしてくれ」

「ああ。ただ、あまり遠くに行くなよ？いつ招集がかかるかわからないからな」

「それはわかってるよ」

そう言つて、一夏も一人で移動していく。俺達も一度着替えるため、旅館へ戻るしかなかった。

制服に着替え、一夏と篤さんを除く代表候補生が集まって待機している部屋に入ると、シャルロットが話しかけてくる。

「お、お帰り。アル、セシリアさん」

「ああ……」

「ええ。今戻りましたわ、シャルロットさん」

「作戦が失敗したのはモニターで見てたから知ってるけど、一夏と篤はどうしたのよ？」

一夏と篤さんが待機室にこない事を不思議に思った鈴さんが問いかけてくるので、俺達は正直に答えるしかない。

「篤さんは作戦失敗を言い渡された後に走ってどこかに行ったよ。」

一夏はしばらく一人にしてほしいって言ってたから、そのとおりにしておいた」

「そっか……ありがとう、教えてくれて」

そう言う鈴さんだが、その表情は様々な感情が入り混じっているように思えた。

トントントン

その後作戦に関する話題で話していると、待機室の扉がノックされる。

「はい、どうぞ」

「失礼します。……織斑君と篠ノ之さんはどうしたんですか？」

ノックに答えると山田先生が待機室に入ってきて、一夏と篤さんがいない理由を聞いてくる。

「一夏は頭冷やした言っついてたんで、まだ海岸周辺にいます。篤さんは作戦失敗を言い渡された直後に走ってどこかに行ってしまったので、詳しくどこにいるかまではわかりません」

隠しても仕方ないので、二人が今何をしているかとどこら辺にいるかを山田先生に報告する。

「そう……ですか。アルバート君、ボーデヴィツヒさん、織斑先生がお二人を呼んでいるので、作戦室まで行ってください。私は織斑君と篠ノ之さんを探してきますから」
「わかりました。すぐに向かいます」
「了解しました」

山田先生の指示を受け、俺とラウラは作戦室である風花の間へと向かった。

トントン

「誰だ？」

「ウイルソンとボーデヴィツヒです」

「……入れ」

「失礼します」

織斑先生の問いにセシリアが答え、入室許可が出たので俺達は作戦

室に入る。

「織斑先生、俺達に何の用件でしょう？」

「そう急ぐな、今から説明してやる。お前達を呼んだのは他でもない福音についてだ」

「福音について……ですか？作戦は失敗に終わったのではなかったのですか？」

ラウラが発する疑問は当然のもので、作戦が失敗した以上別のチームが福音に対応しているのではないのだろうか？

「学園上層部からまだ解除命令が出ていない以上、我々が継続して作戦を行う事になる。お前達二人を呼んだのはお前達にやってもらいたい事があるからだ」

「やってもらいたい事……ですか？」

ラウラは特殊部隊出身だから、故郷くにの軍などにコネクションがあるのは容易に想像できるが、俺が呼ばれた理由がわからない。

「ボーデヴィツヒ。お前から軍に連絡をして、ドイツ軍の持つ衛星を利用して福音を発見してもらいたい」

「っ！？………了解です」

織斑先生からのその言葉を聞き、一瞬驚きの表情を浮かべるラウラだったが、すぐに表情を引き締めると一言そう言ってドイツへ連絡を取るためか、作戦室を出て行くこととする。

「すぐにでも取り掛かれ。発見次第報告を」

「はっ！！」

敬礼をして作戦室を去っていくラウラ。

「先生、それなら俺は何をすればいいんですか？」

「後で説明してやる。……ところでウイルソン。一つ聞くんが、先の作戦の失敗の原因は何だと思う？」

「作戦失敗の原因ですか？………一番大きいのは、作戦要員の内3名が超音速下での戦闘に不慣れな事が最も大きく、次いで近接攻撃役3名に遠距離射撃役1名という極端な構成も失敗の原因ではないかと思います」

少し考えてからそう答えると、織斑先生がとんでもない事を言ってきた。

「……ほぼ同じ考えか。ウイルソン、お前を呼んだ理由は、その思考力と発想力を活かして福音撃墜の作戦を考えてもらいたい」

「っ！？本気ですか！？」

織斑先生が言ってきた事は俺にとっても予想外で、思わずそう問い返してしまった。

「本気でなければこんなことは言わん。勿論、無理強いするつもりもないし、作戦の全てを考えるとまでも言わん」

だが、こうして呼ばれた以上一定の成果は期待されているという事だろう。

「……………わかりました、やってみます」

「そうか。では」

「ただ、先にいつものメンバーにその事を話して、全員が了承してくれた場合のみ作戦立案に参加する形にさせてください」

仲間の命を間接的に預かる事になるのだから、全員の了承がなければプレッシャーがきつすぎる。

「いいだろう。全員の了承を得られたら戻って来い。戻ってこなかった場合、反対者が出たと判断する」

「わかりました。それでは、一端失礼します」

俺は作戦室を出て、待機室へと向かう。

待機室に到着して中に入ると、一夏と篤さんも待機室に戻ってきていた。

「お帰りなさい、アル。織斑先生の要件とは何でしたの？」

「勿論話せない事なら無理に言わなくてもいいけど、ラウラと比べて時間かかったよね？」

「ああ、それについて今から説明すよ。……福音が発見されたらって前提になるけど、織斑先生から作戦立案への協力を要請された」

隠しても仕方ないので、その場にいる全員に聞こえるように少し大きめの声でそう伝える。

「なるほどねえ。確かにアンタは頭のキレがいいし、そういったこともありうるわね」

「すごいじゃないか、アル。それで、どんな作戦にするつもりなんだ？」

「私も一夏と同意見だ。アルバートなら的確な作戦を立ててくれるだろう。協力は惜しまない」

納得の表情を見せ、賛同してくれる鈴さん・一夏・ラウラの3名。

「作戦を考えるのは大変だろうけど、頑張つて。僕も応援してるから」

シャルロットも応援してくれるが、俺としては皆に一つ聞いたかった。

「……………反対しないのか？そもそも俺は3ヶ月そこそこしかISに触つてない。それでも俺の考えた作戦に命を賭けてくれるのか？」

これは嘘偽りない俺の本心だ。4月の所属不明機襲撃の時などは即興で考えた作戦がうまくいったが、今回も上手くいくとは限らない。

「少なくとも、俺が考えるよりはマシな作戦だろ？俺は学園に入学するまでそうだったことはほぼ無縁だったけど、アルは入学前にそういったことは教わつてるみたいだしな」

「あたしも一夏と同意見かな？作戦立案に関する訓練も受けた事はあるけど、あたしはそこまで精度の高い作戦考えた事ないし」

「アルは自分の発想力と思考力をもっと誇るべきですわ。自己の過小評価は感心いたしませんよ？」

そう言つて俺を励ます一夏・鈴さん・セシリア。そこまで言われるとこちらとしてもやる気になってくるが、今まで一言も意見を言っていない篤さんが気になった。

「そこまで言ってくれるのは嬉しいけど、もう一度確認させてくれ。俺が作戦立案に協力する事に反対意見がある人は拳手を頼む」

その言葉を受けて、ただ一人篝さんが挙手をする。

「反対意見¹、か……。篝さん、理由を聞いてもいいか？」

「……私は、アルが作戦立案に加わる事自体は反対しない。ただ、私を戦力としてカウントしない作戦を立てて」

篝さんがそこまで言うと、何を思ったのか突然鈴さんが立ち上がって篝さんの胸倉を掴んで無理矢理立ち上がらせる。

「あのさあ、さっきからずーっと黙って落ち込んでますってポーズしてたのもム力つくけど、その上戦力に数えるな？　ふざけてんじゃないわよ、アンタ！！やるべき事があるでしょうが！！今、戦わなくてどうすんのよ！！」

「わ、私……は、もうISは……使わない……」

篝さんがそう言ったのが頭にきた鈴さんは、思い切り手を振り上げて篝さんを引っ叩こうとするが、その手をセシリアが掴んで止める。

「セシリア、放して。コイツは一発殴って目を覚まさせないと」

「その必要はありませんわ、鈴さん。……篝さん、今の言葉は本気ですか？」

「あっ……ああ……」

うなだれた表情のまま篝さんがそう答えると、セシリアは表情を変えずにこう言った。

「篝さん、歯を食いしばってください」

一言だけ篝さんに向かってそう警告すると、セシリアが篝さんの頬に向かって右ストレートを叩き込む。

バキっ！！

頬を強打されたことで支えを失った篤さんが床に倒れこむ。

「ふざけるのもいい加減にしなさいな！！開発者の妹という特権を利用し、専用機を得たことはコネクションの利用という事でまだ我慢できますが、先の作戦前の浮かれっぷりといい、作戦中の失態といい、拳句の果てに一度失敗したくらいでもうISを使わない？戯言も大概にしてください！！

専用機を得た以上、相応の責任というものがあるのはおわかりでしょう！！それとも篤さん、あなたは戦うべき時に戦えない臆病者ですか？」

そう言いながら篤さんの胸倉を掴み、篤さんの瞳を見てそう問いかけるセシリア。

「戦えるなら……………」

篤さんの口から漏れた細い言葉は、すぐさま怒りを纏って強く大きく変わる。

「戦えるものなら、私だって戦うさ！！だが、敵の居場所がわからない以上、手の出しようがないではないか！！どうしろと言うんだ！！！」

怒りを多分に含んだ声でそう反論する篤さんだが、セシリアはその問いに対してこう答えた。

「それならばいずれ発見できるでしょう。先程ラウラさんが呼ばれたのもドイツ軍の衛星を利用するためでしょうから」

そう言っつてラウラを一瞥すると、ラウラは若干驚いた表情でこう答えた。

「そのとおりだ。今、私が本国で隊長を勤めている部隊を使っつて衛星で福音を探させている。発見次第連絡を入れるよう言っつてあるから、後は部下達の仕事次第だ」

「そういうことですね。それで篤さん、先程の発言は本気ですか？」

再びそう問いかけるセシリアに対して、篤さんはこう答えた。

「冗談を言っつな、あれは一時の気の迷いだ」

「よろしい。そういうわけですから、アルはこの場にいる全員を使っつて福音を撃墜する作戦を考えてきてくださいな」

微笑みかけるセシリアに対して、俺はこう答えるしかなかった。

「……OK、勝てる作戦を考えてくる」

待機室の扉を開けて作戦室に向かうが、部屋を出る前にセシリアにこう言っつておく。

「セシリア、余計なお世話かもしれないが、手を冷やすなりしておけよ？他人をグーで殴るなんてしたことないだろ？バイオリニストなんだから、無茶しないように」

それだけ言って扉を閉め、再び作戦室の風花の間へと向かう。

トントン

「誰だ？」

「ウィルソンです。全員賛成だったので、約束どおり作戦立案に参加します」

「よし、入れ」

「失礼します」

再び風花の間に入ると、先程はいなかった山田先生も作戦室に戻ってきていた。

「それでは作戦を考えるぞ。まずは」

織斑先生のその一言で2度目の作戦会議が始まり、1度目の作戦中に福音に与えたダメージや反応をロストしてからの自己修復などを計算することから始まり、織斑先生と俺が主導で、確実に福音を撃墜するプランを練っていく、作戦が練りあがるのとラウラが福音発見の報告を持ってくるのはほぼ同時だった。

その報告を受け、俺達専用機持ちは再びブリーフィングを行う事にするのだった。

23 福音との戦い その1（後書き）

そんなわけで福音戦1度目&2度目に向けてのアレコレでした。

文章量の割合としては2度目に向けたアレコレのほうが若干多めになってます。

あえて一夏君は福音に撃墜させてませんが、フォームシフトはさせるつもりです。

一ヶ所あからさまにフラグを立ててますが、すぐに回収するのでそこまで引つ張るつもりはありません。

今回は2度目のブリーフィングと福音戦になると思います。

2度目の福音戦も3人称視点でやるつもりですので、投稿が遅めになるかもしれません。

24 福音との戦い その2 (前書き)

大変お待たせしました。最新話の福音戦その2です。結構な割合でオリジナル展開です。

あと、今までの話にサブタイトルをつけてみました。

24 福音との戦い その2

ラウラから福音発見の報告が入り、それと時を同じくして専用機持ち全員での福音撃墜作戦の構築が完了した事もあり、再び作戦に関わるメンバーが風花の間に集められる。

「全員集まったな。それではこれより福音撃墜のための作戦を説明する。現在福音はここから30キロほど離れた沖合上空で自己修復を行っている」

織斑先生のその言葉と共に、メインディスプレイに現在の福音の姿が表示される。

膝を抱くようにしながら身体を丸め、頭部から伸びる多方向推進装置兼主砲の《銀の鐘》シルバークロウがその身体を守るように包み込んでいた。

「現在の福音の自己修復速度を計算し、作戦開始は30分後とする。作戦プランの説明が済み次第、各員は迅速に準備を進めるように」

「了解！！！！！！！！！！」

「よし。では作戦を説明する。」

一夏たちの返事を聞き、織斑先生が作戦を説明し始める。

「以上だ。質問はあるか？」

「はい」

織斑先生が作戦を一通り説明し終え、一夏たちに質問があるかどうかを聞くと、セシリアが拳手をする。

「先の作戦時のように不測の事態が発生した場合はどのようにすればよろしいのでしょうか？」

セシリアからの質問はある意味当然の物だった。

「それに関してはウィルソンに前線での指揮権限を与えておくので、何かあった時にはウィルソンの指示に従うように」

「了解しました」

そう。今回の作戦では俺に前線指揮の権限が与えられていて、イレギュラーへの対応を一挙に任された状態で作戦に望む。

「他に質問はないか？ では、各員ただちに準備にかかれ」

織斑先生の声を聞き、それぞれが作戦準備を開始する。

2時間近く作戦室に籠りきりだった事と、俺と篤さんの機体の調整を行うために束さんを探す必要があることもあって、部屋の扉を開くと目の前に束さんがいた。

「束さん、ちょうどよかった。紅椿とスカイ・ブレードの調整をお願いしたいんですが」

「調整？また何か作戦でもあるの？」

事情を全くつかめていない束さんに簡単に説明すると、束さんは納得した様子でこう言った。

「なるほどねえ。そういうことならお任せなんだけど、あーくんの機体も調整する理由はなんで？さっき完璧に仕上げたでしょ？」

「理由は簡単ですよ。先の作戦中にいきなりスラスタが止まっち

やいましたから、原因その他を見てもらおうと思ひまして」

「え、うそだ。束さんがそんなミスすると思つ？」

「確かに束さんがミスをするとは思へませんが、実際に止まっちゃつたんで原因が何かを見てほしいんです」

「……………わかつたよ、あーくん。準備するからちよつと待ってて。」

……………あと、今の内に篝ちゃんも呼んでおいてよ」

「了解です」

俺の返事を聞いて束さんは一端その場から移動していったので、俺は今の内に篝さんと呼んでおく。

「それじゃあ、まずはあーくんの機体を見せてもらつからね」

「はい。お願いします、束さん」

束さんがそう言つて俺の機体にコードを接続し、空間投影ディスプレイを展開した瞬間、束さんが驚きの表情を浮かべる。

「なっ!?! どうして!?!」

「どうかしたんですか? 束さん」

「……………なんでもないよ、あーくん。すぐにやっちゃうね」

俺が質問すると、少しだけ間をおいて束さんが調整作業を開始する。

空間投影型キーボードのタイプ音をBGMに、俺は今回の作戦に必要な事柄を束さんに聞いてみる。

「そつだ。束さん、一つ質問があるんですけど」

「んー、ちよつと待ってて。後で答えるから」

そう言いながら束さんはキータイプを続け、ある程度の作業が終了

すると一端キータイプをストップして、俺に声をかけてくる。

「で？あーくんは何を聞きたいの？」

「ええ、実は」

束さんにある質問をすると、すぐに返事が返ってくる。

「システム面をいじれば可能だね。今、そのためのプログラムも組んで入れておくよ」

「よろしく願います」

そう言つて束さんは再びキータイプを開始し、5分後には頼んだプログラムの組み込みも含めて再調整作業は終了した。

「はい、終わり。使い方は視線操作アイタッチで切り替え可能にしてあるからね。それじゃあ、私は篝ちゃんの方に行ってくるね」

「わかりました。再調整、ありがとうございました」

「いやいや、大丈夫だよ。それじゃ〜ね〜」

機体に接続されていたコードもいつの間にか回収され、束さんはあつという間に篝さんに近づいていた。

そうしている内に時間が経ち、作戦開始時刻には全員が作業を終わらせ、再度福音を撃墜するため出撃した。

花月荘のある海岸から30キロほど離れた海のと真ん中、上空200メートルの位置で、福音は自己修復を行っていた。

？

だが、不意に福音が膝を抱いて身体を丸めていた体勢から顔を上げた瞬間、超音速で飛来した砲弾が頭部に直撃し、大爆発を起こした。福音はハイパーセンサーを使用して先程の砲撃位置を特定し、頭部マルチスラスターの多方向推進装置兼主砲の《銀の鐘》シルバークロウを利用して現れた『敵』へと向かっていく。

福音から5キロ離れた場所に浮かび、福音に向かって砲撃したのは80口径レールカノン《ブリッツ》2門をそれぞれ左右の肩に装備し、対遠距離砲狙撃用として正面と左右に4枚の物理シールドを搭載している砲戦用パッケージ『パンツァー・カノーニア』を装備したシュヴァルツェア・レーゲンを纏ったラウラだった。

「初弾命中。続けて砲撃を行う!!」

その言葉と共に、福音が反撃に移るよりも早くラウラは次弾を発射、福音に向けての連続砲撃を行う。この時ラウラは自らの切り札でもある擬似ハイパーセンサー機能を有した左目、ウォータン・オージェ越界の瞳を使用して、通常のハイパーセンサーだけでなく、左目の圧倒的処理能力

をも併用して福音との相対距離を測っていた。

(敵機接近まで4000………3000 予想より少し速いか
!!))

ラウラはそんな事を思いながら砲撃を続けているが、福音の主砲・
《銀の鐘》^{シルババベル}から放たれる高密度エネルギー弾が砲弾の半数以上を的確に撃ち落とし、ラウラへ接近してきていた。

「ちいつ!!!」

砲戦仕様パッケージは大口徑レールカノンの反動を相殺するために
PICをフル稼働させるため、機動との両立が難しい。

それに対して機動力に特化している福音はラウラとの距離が500
メートルを過ぎたところで急加速を行い、右手を伸ばして攻撃をし
ようとする。

その頃になるとラウラは砲撃を中止していて、何を思ったか目を閉
じていた。

だが、ラウラの口元は歪んでいて、想定どおりとも言わんばかり
だった。

あと少し移動すればラウラに攻撃を当てる事が出来ると思っていた
た福音だが、自身のハイパーセンサー探知圏内に突如として現れた
敵機を感知する。ステルスも掛けずに上空から圧倒的なスピードで
落下してくるその機体はあつという間に自分と同じ高度までやって
くると、その手に持っていた刃を振り下ろしてきた。

「ぶつ!!!」

そのまま受ければ正中線からばつさりと切られていた攻撃だが、ころうじて右に移動する事でその攻撃を回避する事ができた。無論その代償として右側の《銀の鐘》シルババベルが根元から断たれてしまいその機動力を半減させる事になったが、あれだけの速度を出していた機体がP I Cを利用したところで海面に激突するまでに停止できるはずがなく、福音は再びラウラへの攻撃を再開しようとする。

「甘いな、福音！！はあああつ！！」

だが、ラウラは高度をほんの少しだけ落とし、自らの第3世代兵器慣性停止結界A I Cを普段よりも大きめに展開してあるものの慣性を停止させる。

「助かったぜ、ラウラ。もう大丈夫だ！！」

「わかった、一夏！！」

そう。今の超高速落下攻撃を加えたのは一夏だ。

この超高速落下攻撃はタネを明かすと非常にシンプルで、福音のハイパーセンサーの探知範囲外に陣取った一夏が所属不明機と戦った時と同じ方法ダイレクト・ビュー視覚共有を利用し、スラスターにライジングブレードを受けての二段階瞬時加速ダブル・イグニッションブーストを行い、その圧倒的なスピードで福音を斬ろうというものだ。

ライジングブレードは本来攻撃専用だが、束に頼んでB T ビームの攻撃力をほぼ0にした多目的マルチプルエネルギー放出モードを設定し、それを使って白式のスラスターへのダメージを最小限にした上で、重力加速度も味方につけさせたそのスピードは凄まじく、上手くいけばこの攻撃だけで作戦を終わらせる事が可能だった。

だが、この方法だと例え一夏が福音を斬る事が出来たとしても海面への衝突は免れなかったが、普段隠されているラウラの左目、視覚信号の伝達速度と超高速戦闘状況下における動体反応を強化する瞳・ヴォーダン・オージェ越界の瞳を使用して福音への攻撃を終えた直後の一夏を補足し、さらに普段以上の大きさのAICを展開することで、一夏が海面へ落下する前にそれまでの慣性を完全に停止させるブレーキにしたのだ。タイミングを間違えれば大惨事になりかねないが、ブリーフィングの最中にラウラは可能と返事をしたし、実際にラウラはそれをやり遂げた。

「……優先順位変更。現空域からの離脱」
「離脱なんてさせないよ」
「ここで墜ちてもらいますわ!!」

《シルバール銀の鐘》を片方失い、攻撃力と機動力が半減した事によって空域からの離脱を優先しようとした福音をステルスモードを利用して高度を落としてきたセシリアとシャルロットが前後から大型BTビームライフル《スターダスト・シューター》と愛用しているシヨットガン《レイン・オブ・サタデー》2丁による攻撃を行い、福音はその攻撃を全てくらってバランスを大きく崩す。
だが、そんな状態になっても福音は左の《シルバール銀の鐘》を起動させ、セシリアとシャルロットに反撃の高密度エネルギー弾を発射しようとする。

「セシリア!!!」
「了解ですわ!!!」

その兆候を見てシャルロットがセシリアに声をかけ、セシリアはシャルロットの背後へと移動した瞬間に、高密度エネルギー弾が発射される。

「そのくらいじゃあ、この『ガーデン・カーテン』は破れないよ！」

その言葉と共にシャルロットはリヴァイヴ専用防御パッケージ『ガーデン・カーテン』に搭載されているエネルギーシールドを展開し、さらにその内側で物理シールドを構えることで『銀の鐘』^{シルバークロウ}を防ぎきる。

『敵性体の防衛行動を確認。 現空域より離脱』

「させねえつつつてんだろつが、墜ちろ！！」

セシリアとシャルロットが『銀の鐘』^{シルバークロウ}を防いでいる間に空域を離脱しようとした福音だが、上空に待機していた3人目のアルバートに高度を合わせられていて、福音の周囲を囲んでいる8機の多目的ビット^{マルチプル}と2機のミサイルビット、アルバート本人が持っている2丁のマシガンからBTビームとミサイル・実弾を大量に撃ち出され、その場に釘付けにされる。

「そのとおりだー！！」

「逃がしやしないわよー！！」

海面が膨れ上がり、そこから紅椿とその背中に乗った甲龍が福音目掛けて突撃する。鈴はその背中から飛び降りると、甲龍の第3世代兵器の衝撃砲を起動させる。

機能増幅パッケージ『崩山』を装備した状態の甲龍はその象徴である衝撃砲の砲口が2つ増設されていて、計4門の砲口が一斉に火を噴く。

肉薄していた紅椿と鈴の射線上にあったビットが瞬時に離脱し、次の瞬間に甲龍から発射された衝撃砲は普段の不可視の弾丸ではなく、赤い炎を纏い、弾雨といえるほどの大量の弾丸を発射していた。

「どうだ!？」

「だめ、まだ足りない!！」

通常時よりも威力の増加している衝撃砲を受けてなお福音は機能を停止させておらず、それを聞いたアルバートはこう言った。

「なら、プラン続行。困め!！」

その言葉と同時に一夏と篤が福音へ突撃し、その他のメンバーも散開して福音を囲むような配置に移動を開始する。

『シルバール銀の鐘』稼動 開始』

だが、それをさせまいと福音も『シルバール銀の鐘』を起動させて出来る限り広範囲に高密度エネルギー弾をばら撒くが、左翼のみのため範囲もそれほど広くなく、近接戦闘を仕掛けてきた2機の牽制がやっとだった。

そうしている間にアルバート達は福音の前後上下左右に移動を完了させていて、いつでも攻撃できる状態になっていた。

「全弾叩き込め!！」

「……了解!!」「……」

アルバートの一言を受けて、ラウラのグレネード・セシリアのビームライフル・シャルロットのアサルトカノン・鈴の拡散衝撃砲・箒のエネルギー刃・アルバート自身のビットからの攻撃が福音目掛けて連射され、その圧倒的な火力を受けた福音は頭部を除いた全身のISアーマーと残っていた左側の《銀の鐘》シルバベルをあっという間に撃ち碎かれ、海面へと墜ちていく。

「……………ねえ、ちょっとやりすぎたんじゃない?」

「……………同感。やりすぎじゃないかな?アル」

「……………たしかにそうかもしれん」

「それよりも、早く装着者の方を救出」

あまりに一方的な攻撃だったため、鈴が福音の操縦者の事を心配し、シャルロットも攻撃が苛烈さをアルバートに問い、アルバート自身もオーバーキルの可能性を危惧する。セシリアが今後の事を話そうとした瞬間、それは起こった。

バアンっ!!

福音が落下したあたりの海面が大きく爆せて強烈な光を発する珠が現れ、次の瞬間にはその中心にあるものの形がはつきりする。

「……………ツ!?」「……………」

球形に爆発した海はその中心にある物

青白い雷を放つ銀の福音シルバリオ・ゴスベル

を避ける様に海面をえぐらせたまま大きく波打つ。

「福音!?!」

「ダメージが全く見えないぞ!?!どうなってるんだ!?!」

そう。海面から現れた福音はそれまでの戦闘のダメージが全く見当たらない真新しい銀色のISアーマーを纏っていて、その異常事態に一夏と箒が驚愕の表情を浮かべる。

一夏と箒の声に反応するように福音がアルバート達に顔を向けてくる。何の表情も読み取れないはずの無機質なバイザー越しにアルバート達は明確な敵意を感じ取り、それぞれの専用機からも警告文が操縦者に発せられる。

『セカンド・シフト
第二次形態移行』だと!?! どうする、アルバート!?!」

「全機散開しながら最大限警戒!?!何をしてくるか」

『キアアアアアアアア………!!!』

獣の咆哮を思わせるガラスを引つかいたような不快な大声を上げながら、福音は自分から一番距離が離れているはずのアルバート目掛けて飛びかかる。多方向推進装置兼主砲の《銀の鐘》シルバークロウが無いにも拘らずその速度は圧倒的で、あっという間にアルバートに近づく。

「なっ ……!?!」

「やらせねえ!?!」

その速度に反応し切れなかったアルバートはそのまま攻撃を受けそうになるが、突然横から突き飛ばされることで難を逃れる。突き飛ばされた方向を見ると一夏が福音に抱きつかれている状態だった。

「一夏!?!とつとつと振り払って離脱しろ!?!」

「ダメだ！！パワーが強すぎ」

一夏がアルバートにそう言うと同時に《銀の鐘》シルバールが失われたはずの頭部左右にゆっくりとエネルギーの翼が生え、そのエネルギー翼で白式を包み込んでしまう。

「ぐあああああつー！！」

エネルギー翼に包まれた中から一夏の叫び声が聞こえ、ゆっくりとエネルギー翼が開かれると、高密度エネルギーを直に浴びてISSアーマーを大きく損傷させた一夏がゆっくりと海に墜ちていった。

「一夏あー！！こんのおー！！」

一夏を撃墜されて激昂した鈴が福音に向けて拡散衝撃砲を放つが、セカンド・シフト第二次形態移行した福音はその性能をフルに発揮して衝撃砲を全て回避し、頭部ユニットの少し上、エネルギー翼の間に翼のエネルギーを収束し、大砲のように撃ち出してくる。

「きゃあああつー！！」

鈴はそのエネルギー砲の直撃を受けてしまい、そのまま海中へと墜ちていってしまう。

「鈴さん！！くそつ、今の攻撃…まさか《銀の鐘》シルバールか！？各員、絶対にあの攻撃に当たるな！！あの攻撃は、おそらく《銀の鐘》シルバールを収束して」

『キアアアアアアアア………！！！！』

アルバートがセシリア達にそう言っている間に、福音は両手足につ

いているスラスターを利用した四連瞬間加速イグニッションブーストを行ってアルバートの眼前に迫り、頭部のエネルギー翼にアルバートを包み込むと、全身からも小さなエネルギー翼を発生させながら零距离でアルバートに向けて《銀の鐘》シルバベルを撃ち込む。

「ぐあああああっ!!」

全身のISアーマーにくまなくダメージを与えられ、アルバートはそのまま海面へと落下していこうとするが、福音はそれすら許さないとばかりにアルバートに再び近づこうとする。

「させませんわよ!!」

だが、海面へ落下しようとするアルバートとの直線状にセシリアが割り込み、《スターダスト・シューター》を連射してアルバートに近づけさせまいとする。

『キアアアアアアアア……!!』

だが、そんなセシリアの事などお構いなしと言わんばかりに福音は再度マシンボイスの雄叫びを上げながら収束した《銀の鐘》シルバベルをセシリアに向けて放つ。

「くっ!?!」

セシリアもとっさに回避行動を取ろうとするが、射線上にアルバートがいることを思い出し、とっさに福音に背中を向けて収束した《銀の鐘》シルバベルを思い切り受けてしまう。

「くっ、ああああっ!?!」

その砲撃を受けてセシリアは大きく吹き飛ばされてしまいが、吹き飛ばされた際のスピードとアルバートが落下するスピードが偶然一致し、アルバートに半ば抱きつくように二人一緒になって海面へと落下していく。

セシリアは少しでもアルバートへダメージを与えないように左手だけでアルバートの身体を抱き寄せながらも、この状況で出来る事はないか必死に考える。

（なにか………なにか方法はありませんの……？）

そうやって考えている内にも攻撃のダメージで意識は少しずつ薄れていき、最後に思い出したのはアルバートから始めてもらったプレゼントのネックレスだった。

蒼い雫状に加工した人工宝石のついたネックレスで、値段としてはそこまで高くないものであってもセシリアにとっては宝物だった。

そして、その宝物の存在は同じ名前を持つ自らの機体で理論上可能なある事柄を思い出させた。

「　　お願い、ブルー・ティアーズ…力を……貸して………」

そして、その言葉に応える様にセシリアの心の中に蒼い雫が落ちて、その水面に波紋を広げていく。

（ああ、そうでしたの。ブルー・ティアーズとは、つまり　　）

砲撃はいつの間にか終わっていて、セシリアは身体をひねって上空

に向き直ると、ハイパーセンサーで福音のいる大まかな位置を確認してから《スターダスト・シューター》を構える。

「バーン」

残っている力を振り絞って引き金を引き、セシリアはB.Tビームを発射する。それは福音のいる位置からは大きく外れていたが、セシリアが念じる事でビームの軌道が弧を描くようにしながら大きく曲がり、福音の背中に当たる。それをハイパーセンサー越しに確認したセシリアは、一度意識を失うのだった。

「私の仲間を　よくも!!」

そう言つて、急加速を行った筈は一瞬の内に福音に肉薄すると、続けざまに斬撃を放ち続ける。

アルバートが墜とされ、それに続くようにセシリア・シャルロット・ラウラの順に福音の攻撃をくらって墜ちていき、残っているのは筈だけだった。

この作戦の前に筈は束の手で紅椿の再調整を施されていて、先の作戦で展開装甲を多用した事によるエネルギー切れを防ぐため、全ての展開装甲は防御行動時に自発作動せず、全てマニュアル操作で展開装甲のコントロールを行うようになっていた。

福音の攻撃に対して展開装甲を局所的に開き、あえて機体のバランスを崩す事で敵機の攻撃を回避し、それと同時に不安定な状態で放つ斬撃をブーストで加速させる事によって強引に攻撃をしていた。

「うおおおおおっ!!」

互いに回避と攻撃を繰り返しながらの格闘戦を行う箒と福音。箒は紅椿の出力を徐々に上げていき、その攻撃力の上昇によってわずかに福音が押されはじめる。

(これなら いける!!)

箒が必殺の確信を得た瞬間に雲を突き抜けて一条のビームが大きく弧を描いて福音の背中に当たり、それと同時に兩月の打突を放つ。しかし

キュウウン……。

福音に当たる直前にエネルギーが切れてしまい、斬撃の威力が大きく減ってしまったことでその一撃は必殺にならなかった。

「なっ!?!またエネルギー切れだと!?! ぐあっ!?!」

その隙を見逃さず、福音の右腕が箒の首を捕まえ、ゆっくりとエネルギー翼で包み込まれていくのだった。

「ぐっ、うっ……!!」

ぎりぎりと締め上げられ、圧迫された喉から苦しげな声が漏れる。

福音の手は硬く箒の首を掴んで放さず、エネルギー翼へ進化した《

銀の鐘シルバークロウが既に紅椿の全身を包んでいた。

(これまでか……。情けない……)

光の翼の輝きが増し、零距离での一斉射撃の秒読みが始まる中、箒の頭の中で一番大きな感情は悔しさだった。

紅椿という力を姉に作らせ、先の作戦では作戦要員に選ばれたことで浮かれてしまい、犯罪者とはいえ守るべき人々を見捨てるような言動をしてしまったこと。

作戦が失敗して一人で勝手に落ち込み、望んで専用機持ちとなったくせにその責任の重さを理解せずセシリアに思い切り殴られたことそして、後一步で福音を撃墜できたはずが、エネルギーのペース配分を間違えてしまい、逆に撃墜されそうになっていることも悔しかったが、一番悔しいのは別にあつた。

「ふざ……けるな……」

友人達は自分の役割をしっかりと果たそうとしていて、自分も思い切り殴られた後は与えられた役割ぐらいはこなそうと考えていた途端にこんな醜態をさらしていること自体が一番悔しく、自分は友人達と比べて大きく遅れているような錯覚を覚えてしまう。

自分の小ささを思い知らされ、同時に箒はこう思った。

(私は、みんなと共に戦いたい。あの背中に追いつきたい!!そして、できることならば守りたい!!だから……力を貸してくれ、紅椿!!)

箒はそう強く願い、使い手である箒に応える様に閉じていたはずの展開装甲が再び開き、そこから黄金の粒子があふれ出すと同時に自

分の首を掴んでいる福音に荷電粒子砲が当たり、大きく吹き飛ばされていった。

「俺の仲間、誰一人としてやらせねえ!!」

その言葉と共に一夏が雪片式型を構えて箒のそばまで飛んでくるが、その姿は大きく変わっていた。

「い、一夏!? その姿は……?」

「ん? 目が覚めたら変わってたんだよ。どうやら俺も第二^{セカンド}形態移行^{フト}したらしい」

頭部のハイパーセンサーやボディアーマー・脚部ブーストユニットなどの形状が変わっているだけでなく、ウイング・スラスタ^{アーム下}は一回り以上大きくなっていて、一番の変化は左腕に搭載された多^{アーム下}機能武装腕^{アーム}だった。

「それに、箒もどうしたんだよ。全身金色だぞ?」

「何?」

自分の身体を見てみるとISアーマーのあちこちから金色の粒子が出ていて、ハイパーセンサーからの情報で機体のエネルギーが急激に回復しているようだった。

『絢爛舞踏』発動。展開装甲とのエネルギーパイパス構築:

……完了。

目の前に単一仕様能力^{ワンオフ・アビリティ}が発動されている事を示すウィンドウが表示

され、箒は素直にこう思った。

（ありがとう、紅椿。だが、この力は私一人のものじゃない。みんなの力があってこそなんだ）

そして、紅椿を中心に黄金の粒子はその発生量を大きくしていき、黄金の嵐に巻き込まれるかのように福音は紅椿と白式から大きく吹き飛ばされ、撃墜された仲間達に力を与える。

「福音よ、私の……いや、私達の仲間は誰一人としてやらせない。

ここで墜ちてもらうぞ!!」

「箒と同意見だ。仲間は誰一人やらせない。もし、やるうってんなら相手になるぜ?」

『キアアアアアアア……!!』

一夏と箒の言葉に対抗するように福音はマシンボイスの雄叫びを上げて2人に突撃しようとするが、それを妨害するように炎の弾雨が福音に襲い掛かる。

「2人だけじゃないのよ?あたしも忘れないでほしいわね、福音!」

「そうそう。忘れるなんて酷いよ?」

目を覚ました鈴が拡散衝撃砲を放ち、福音がそれを回避すると、ステルスモードを再起動させたシャルロットがアサルトカノンに至近距離から発射する。

至近距離からの直撃を受け、福音が通常モードで《銀の鐘》シルバークロウを放とうとした瞬間、下から高熱を放つグレネードが発射され、福音は慌てて回避する。

「鈴とシャルロットだけではないんだ。忘れるな、福音」

ラウラからの支援砲撃をかるうじて回避するが、次の瞬間にはいくつものビームが雲を貫いて発射されるので続けて回避行動を取るが、全てのビームが回避直後に軌道を変更してくるため、悉く当たってしまう。

「わたくしをお忘れですか？つれないですわね」

セシリアも目を覚まし、精神感応制御によるBTビームの偏向射撃を連射する。

「悪いな、福音。ショウダウンだ」

目を覚ましたアルバートがビットを全て福音の周囲に展開し、自らもマシンガンを構えて全ての砲門からBTビームと実弾のシャワーを浴びせ、その場に福音を押し留める。

「福音よ、これで」

幕が全身の展開装甲からビームを発生させ、凄まじい勢いで加速して福音の脇を通り過ぎ、展開装甲のビーム刃で纏っていた銀色のISアーマーを破壊し、最後に一夏に向けて福音を吹き飛ばす。

「終わりだあつー!!」

そして、一夏が福音の象徴とも言える頭部アーマーを零落白夜を起動させた雪片式型で切り裂き、全身のアーマーを失って機能を停止した福音はゆっくりと墜ちていく。

「よっ、と……。一夏あ、やるなら後の事も考えなさいよね!！」

操縦者を鈴が受け止め、一夏に一言抗議する様子を見ながら、アルバートはこう言った。

「よし、作戦終了。みんな、戻るぞ」

「……………おう!!」「……………」

その言葉が福音撃墜作戦の終了を告げ、作戦本部である花月荘へと戻っていくのだった。

24 福音との戦い その2 (後書き)

そんなわけで皆での福音戦でした。

微妙に篤さんのターン。そして、セシリアの偏向射撃覚醒イベントを前倒しで起こしてみました。

これでブルー・ティアーズも白式雪羅との相性もそこまで悪くならない……はずです。

次回は後始末回になると思います。

25 鐘の音が響いた理由（前書き）

最新話出来ました。

この暑さのせいか、モチベーションがダダ下がりです。週一更新するのがやっとです。

誰かモチベーションを上げる方法を教えてください。

25 鐘の音が響いた理由

花月荘のある海岸まで戻ってくると既に山田先生と織斑先生だけでなく医療スタッフの人たちが待機していて、福音の操縦者を医療スタッフに任せると俺達は作戦室として使用していた風花の間に集合する。

「これで作戦完了だ。途中危なっかしい場面もあったが、全員無事に帰ってきて何よりだ」

「……………はい！！……………」

珍しく織斑先生が素直に俺達を褒めてくれて意外に思ったが、口に出したら地獄を見そうなので黙っておく。

「それじゃあ皆さん、戦闘中に怪我をしているでしょうから、その診断を開始しますよ。ちゃんとスーツを脱いで全身を見せてくださいね。あつ、と、当然男女別ですよ！！わかってますか？織斑君、アルバート君！？」

作戦中に負った怪我の診断をするため、そう言ってくる山田先生。それくらいは言われなくてもわかってるので、セシリアをはじめとして、みんな恥ずかしそうにしないでくれ。

「わかってますよ、先生。……………それじゃあ、俺達は適当な場所で時間潰してますから、俺達の診断準備が出来たら言ってください」

「お願いします、先生」

「わかりました。……………ふたりとも、その前に水分補給用のこれを受け取ってください」

そう言われて山田先生からスポーツドリンクのパックを受け取り、俺達は女子メンバーの診断が終わるまで適当な場所で時間を潰す事にした。

1時間ほどで俺達も呼ばれ、診断を受けた結果、俺は軽い切り傷などはあったものの、行った戦闘の規模を考えれば異常とは言えず、軽い治療を受けるだけにとどまったのだが、一夏に関してはあれだけのダメージを負ったにも拘らず怪我一つ無いたって健康な状態と診断され、診断をした山田先生と、その結果を聞いた一夏を筆頭に軽い混乱を巻き起こす事になったが、織斑先生の鶴の一声でその場の混乱は治められた。

その後は今回の戦闘に関する誓約書を書いたり作戦時に使用した機材の撤収作業を手伝ったりしている内に時間は過ぎていき、作業が一段落した頃には既に夕食の時間になっていた。

作戦終了後は一般生徒の室内待機も解除されたので、夕食の時間には昨日と同じく宴会場での食事となった。

「ね、ね、アルバート君、私達が室内待機してた理由って何だったの？教えてよ〜」

テーブル席に座って食事を取っている 理由は勿論セシリアに昨日のような事をさせないためだ 最中、他のクラスの女子が室内大気中にあつたことを聞いてきて、テーブル席にいる複数の女子生徒が興味津々とばかりに聞き耳を立てていた。

「無理だ。機密事項だから話せない」

「え〜。アルバート君、堅いよ〜。教えてよー」

そう言っしてしつこく聞いてくるので、その場合のリスクを説明する事にする。

「あのなあ、これ聞いたら100%間違いなくIS委員会から黒服着た人達からの監視と行動の制限セットがタダで付いてくるけど、それでも聞きたいのか？」

「あー……………それは困るかなあ……………」

「だろ？だから、この話はこれでお終い。もう何も答えないぞ」

「ぶーぶー」

一部の女子は納得がいかないようでブーイングしてくるが、俺としても今回の作戦に関することは話すつもりはない。今は学園の庇護があるから何とかなっているが、今回のコレを話したらそれをぶちぎて査問と裁判・監視の三点セットがついてしまう。そうなら今のそれなりに平穏な生活とおさらばする事になるので、それは遠慮したいところだ。

それに、女子一同がセシリアに理由を聞こうとしないのもセシリアが代表候補生の責任を自覚している事を知っているから、少しでも事情を聞きやすいであろう俺に話しかけてきたのだから。

その後は特に問題が起こらずに全員食事を終え、それぞれの部屋へと戻っていった。

部屋に戻ってきたあと適当にボーっとしていると、一夏が水着など

の準備を شدしたので何かと思つて聞いてみる。

「一夏、どうしたんだ？突然水着の準備して」

「ん？ちよつと抜け出して泳いでくる。アルも一緒に行くか？」

「止めとく。織斑先生に見つかったらヤバイし、なにより作戦で思いつきり動き回ったから疲れた」

「……わかった。先生が来たらごまかしといてくれ」

そう言つて一夏は夜の海へ繰り出していき、俺はそれを見送つた後、部屋の中央に寝転がる。

（まったく、今日は色々な意味で疲れたな。クラス対抗戦の時といリーグマッチい、今日といい、事件に関わりすぎだろ）

今日の最初の作戦 超音速下での俺とセシリア・一夏と篤さんの
2ペアによる一撃必殺を目的としたもの の時も紅椿の具現維持ダウン
限界に気づくのが遅かったら篤さんか一夏のどちらかが大怪我をし
ていただろうし、俺の機体のスラスターのエラーが出たのがあと数
秒早かったら、福音に攻撃されて大怪我していたのは間違いないだ
ろう。

さらに、二度目の作戦 専用機を全て持ち出した戦闘 では戦
闘中に福音が第二次形態移行した事で全員一度は墜とされた。一夏
の第二次形態移行と篤さんの単一仕様能力の発現がなければ、全滅
していた可能性が高い。

（そうやって考えると、かなり紙一重の勝利だったわけだ………今
後機体の整備はしっかりやろう。下手したらまた事件に巻き込まれ
るかもしれん）

俺個人としては二度と巻き込まれたくはないが、二度あることは三

度あると言つし、今後は機体の整備や調整は綿密にやって機体の状態は万全にしておこう。そうすればやり次第では対処できると思いたい。

トントン

「アル、おりますか？」

そのままボーっとしていて、睡魔が襲い掛かってきた時に扉がノックされ、セシリアの声が部屋の中に響く。

「ん？……セシリアか。入っていいぞ」

「失礼いたしますわ」

その声と同時にセシリアが部屋に入ってきた。

「こんな時間にどうしたんだ？」

「1度目の作戦の前はどうして機体の姿が変わっているか説明するとおっしゃっていたでしょう。それを聞きに来たのですが」

「ああ、その事か。セシリアは昨日東さんが中庭に落ちてきた時の事覚えてるよな？」

「ええ。あの時篠ノ之博士が篝さんを探していたのは、紅椿に関係していたのでしょうかね」

「だろうな。で、あの時東さんが俺にプレゼントがあるって言うってただろ？」

「……そういえばそうでしたね。結局アルへのプレゼントとは何でしたの？」

少し思い出す仕草をしながらセシリアがそう問いかけてくるので、俺は正直にこう言った。

「スカイ・ブレードをベースにした第4世代IS丸々一機」

「……………すごいプレゼントですわね……………」

俺の答えを聞いて呆然としながらそう呟くセシリア。

「ああ。コアについてはスカイ・ブレードのコアを移植して使う予定だったんだけど、研究所のスタッフの人達とかのこと考えて武装だけ受け取ることにした」

「……………本当にそれだけの理由ですか？アルの事ですから、武装だけ受け取った理由は研究所の方々への配慮だけではないのでしょうか？」

考え込む仕草をした後、セシリアがそう言うてくる。

「……………正解だ。あれ全部受け取ったら、色々な意味で面倒なことになるのは目に見えてるからな」

「そうでしょうね。『篠ノ之東博士じきじきに作成した第4世代IS』を『所属国家の決まっている男性IS操縦者』が使っているだけで上から下へ大騒ぎになるでしょうしね」

「まあ、武装だけ受け取っても大騒ぎになるのは分かってるけど、その内紅椿の事も各国のIS関係の企業とかに知られるだろうし、展開装甲の存在も発覚するだろうしな。」

あとは展開装甲絡みの利潤に関して国際的な話し合いの場がもたれるだろうけど、それに関しては政府に任ずことにした。この件は俺一人の手に余る」

思考放棄とも取られかねないが、これに関しては確実に高校生一人

で考える問題じゃない。夏休みはデータ取りの毎日になるだろうけど、いずれ訪れる日々の予行演習とでも思っておこう。

「そのほうが妥当でしょうね」

「まあ、なんとか福音を撃墜できたからこそこうして話を出来てるわけで、下手したら俺達全員死んだからな」

「ええ。お互い生き残ることが出来たことに感謝しましょう」

「そうだな。……出来る事ならこういったことが二度と起きなさないだけ……」

そんな愚痴をこぼしながらセシリアとたわいないことで話をしていると学校行事の話になり、俺はあることを思い出した。

「そうだ、セシリア。学校行事で一つ頼みがあるんだ」

「頼み……ですか？内容次第ではお受けしても構いませんが……」

不思議そうな顔で内容を聞いてくるので、俺は数日後に行く事になるであろう事柄について説明する。

「セシリアは学年別トーナメントの個人指標用のデータ収集のための戦闘って、もうやったよな？」

「ええ。学年別トーナメントが中止になってから程なくして行いましたが、それがどうしたのですか？」

「俺ってラウラ絡みで学年別トーナメント出てないから、山田先生から予め機体の修復が完了したら個人指標データ収集用の戦闘行うって言われてただけ、そのルールを学年別トーナメントと同じルールでやるってことだから、その時に俺のパートナー役をやってほしいんだ」

下手に勘違いさせてもいけないのでそう説明すると、セシリアはこ

う言ってくれた。

「なるほど。そういうことでしたらお受けいたしますわ。詳しい日程などが決まり次第、また教えてくださいな」

「ああ、わかっているよ。ありがとな、セシリア」

「困った時はお互い様ですわ。………アルも疲れているでしょうし、これで失礼させていただきますわ」

そう言ってセシリアは立ち上がり、部屋を出て行くこととする。

「おう。セシリアもゆっくり休めよ」

「ええ。お休みなさい、アル」

「お休み、セシリア」

お互いにそう挨拶をして、セシリアは割り当てられている部屋へと戻っていき、俺も部屋に備え付けのシャワーを浴びてさっぱりすることにした。

花月荘から程近い海岸の岩場。落下防止のフェンスすらないそこに腰掛け、一人の女性が複数の空間投影ディスプレイを表示させなが

らひとり眩く。

「紅椿の稼働率は絢爛舞踏を含めて49%かあ……まあ、こんなところかな？」

各種パラメータを眺めながら無邪気に微笑むその女性の名前は篠ノ之東だった。

「んー……ん、ん」

鼻歌を奏でながら、東は二つのディスプレイを追加で投影する。片方のディスプレイには第二^{セカンド・シフト}形態移行を遂げた白式雪羅の戦闘映像が、もう片方のディスプレイには新たな武装を手にしたスカイ・ブレイドの戦闘映像が映し出されていた。

「はー。それにしても白式には驚くなあ。まさか操縦者の生体再生まで可能だなんて。まるで」

「まるで『白騎士』のようだな。コアナンバー001にして、初の実戦投入機。お前が心血を注いだ1番目の機体に、な」

背後に生える一本の木に寄りかかるようにしながら、千冬が東に向けてそう言った。

「やあ、ちーちゃん」

「おっ」

二人はお互いのいる方を向かず、どんな表情をしているかお見通しといわんばかりに信頼しながら話をする。

お互い過去の機体

世界初のIS・白騎士や、千冬が現役時代に

使用していた機体・暮桜について　について話を始め、それが一段落すると千冬が束に向けてこう言った。

「……………そうだな。私も一つたとえ話をしてやるっ」

「へえ、ちーちゃんが。珍しいねえ」

「例えば、とある天才が一人の男子の高校受験場所を意図的に間違わせる事ができるとする。そして、間違つて向かわせた場所に設置してあるISを、その時だけ動けるようにする。さらにその数日前に某国のIS研究所へハッキングを行い研究所を混乱させ、それに乗じてそこでロールアウトしたばかりの新型ISに対して、IS好きの少年が触れたら起動するように設定したプログラムを秘密裏に仕込む。

そして、その2人が条件を満たせば、本来男が使えないはずのISが使える男が2人いる、ということになるな」

「でも、それだと継続的に動かないよねえ。しかも、IS好きの男の子に関してはその場で装着と解除を繰り返したって有名だよ？」

「そうだな。お前は長い間同じものに手を加えることはしないからな」

「えへへ。飽きるからね」

「……………で、どうなんだ？とある天才」

まるでテストの答え合わせをするように束に対してそう問いかける千冬。

「どうなんだろうね。うふふ、実のところ、白式もあの機体もどつして動くのか私にもわからないんだよね。いっくんもあーくんもISの開発に関わってないはずなのにね」

「ふん……………。まあいい。次のたとえ話だ」

「多いねえ」

そう言う束だが、千冬の話聞く気満々だった。

「嬉しいだろう？」

「違うないね」

「とある天才が大事な妹を晴れ舞台でデビューさせたいと考える。そこで用意するのは専用機と、どこかのISの暴走事件だ」

束は千冬の言葉に答えず、千冬も返事が来る事を期待していないのかそのまま言葉を続ける。

「暴走事件に際して、新型の高性能機を作戦に加える。そこで天才の妹は華々しく専用機持ちとしてデビューというわけだ」

「へえ、不思議なたとえ話だねえ。すごい天才がいたものだね」

「ああ、すごい天才がいたものだ。かつて、12ヶ国の軍事コンピユータを同時にハッキングするという歴史的な大事件を自作した、天才がな」

束は千冬のその言葉に答えず、千冬は続けてこう言った。

「……………まあいい。最後に一つ質問だ。……………束、アルバートの機体に何を仕込んだ？」

「……………何のことかな？ちーちゃん」

「お前は自分の手がけた機体は『十全で完璧』でなければ納得しない。そんなお前があいつに武装を渡すだけで『機体が十全で完璧』になったと判断するとは到底思えんし、何よりお前が関わった機体が作戦中にエラーを起こす事もありえないからな。……………それで、どうなんだ？」

「心配しなくても大丈夫だよ、ちーちゃん。あーくんの機体には『種』を植えたただけだから。あのエラーは『植えた』場所がコアに気にいられなくて起きたんだよ。その後で『種』は植えなおしたし、

コアが認めてくれたみたいだから、ちゃんと『種』が成長すれば、あの機体はあーくんの望みを叶えてくれる。あとはあーくん達次第だから。東さんはそのお手伝いをしたただだよ」

「……………」

東のその言葉を聞き、千冬はそれ以上言葉を続けなかった。

「ねえ、ちーちゃん。今の世界は楽しい？」

「そこそこにな」

「そうなんだ。……………ちーちゃん、これ、あーくに渡しておいて」

最後に東は千冬に向けてそう言うと風のようにその場から消え、束がいた場所には比較的分厚い一冊の冊子がおいてあるだけだった。

「……………しょうがないヤツだ」

千冬は崖に向かって行ってその冊子を手にとると、それをアルバートに渡すために旅館へと戻っていくのだった。

「……………一夏はまだ戻ってきてないのか？」

シャワーを浴びてさっぱりしたが、一人で泳ぎに行った一夏が戻ってきた様子はなく、織斑先生か山田先生に事情を話して探してくるべきかと思つて部屋を出ようとした。

トントン

「ウィルソン、いるか？」

だが、その直前に部屋の扉がノックされて織斑先生の声が扉越しに響くので、俺はこう答えた。

「はい、どうぞ」

「入るぞ」

織斑先生が部屋に入ってきたので、俺は何か問題が発生したのかと思つてしまう。

「そう身構えなくていい。束からお前にこれを渡してくれと言われたのでな」

そう言つて織斑先生がぶ厚めの冊子を渡してくるので受け取ると、表紙には『整備・調整マニュアル』と印刷されていて、最初の数ページをめくつてみると武装の変わったスカイ・ブレードの図が載つていて、束さんが作ってくれた専用のマニュアルのようだった。

「あ、ありがとうございます。織斑先生」

「気にするな。……あと、抜け出した者がいるならさっさと報告

するように」

それだけ言って織斑先生は教員室へと戻っていき、程なくして壁越しにでもかすかに伝わるほどの音量が響いてきた。……おそろく抜け出した一夏だけだろうが、自業自得という事で諦めてもらおう。

結局就寝時間になっても一夏は戻ってこず、朝目が覚めたら布団で寝ていたので一晩丸々お説教を受けていたわけではなさそうだった。

起きた後は残った機材の撤収作業を行い、10時過ぎには教員を含めた全員がバスへと乗り込み、あと少しで出発といったところだ。

座席の順番に関しては行きと同じなので、隣にはセシリアが座っている。

「すまん……誰か、飲み物持ってないか？」

すぐ後ろの席から一夏のその声が聞こえてくる。俺はそれを聞いてもシャルロットあたりが勝手に飲み物を渡すだろうと思っていたがその気配が全くなく、半ば乗り出すようにしながら一夏の方を向くと、かなりしんどそうだった。

「……しょうがない。少し待ってる」

幸いと言っていいのか1組のメンバーが乗っているバスのすぐ近くに自販機が置いてあるので、出発まで若干時間があることもあって駆け足で自販機に向かい、適当な飲み物を買いに車外に出る。

「あなた、アルバート・ウィルソン君よね？」

一夏の分と自分の分の飲み物を買って、バスへ戻るために振り返ると同時に、俺よりも確実に年上でブルーのカジュアル系サマーズーツを着てサングラスをかけた女性が俺に声をかけてくる。

「ええ。そうですが……どちら様でしょうか？」

写真などで見た覚えがある気がするが、初対面の女性なので失礼のないようにしておく。

「そう緊張しなくていいわ。私はナターシャ・ファイルス。『銀の福音』の操縦者よ」

「福音の？………どういった用件でしょうか？」

まさか、福音を撃墜した俺達にリベンジマッチでも挑むつもりだろうか？

「織斑一夏君ってあなたと同じクラスよね？彼はどこ？」

「一夏に会いに来たんですか？案内しますよ」

ナターシャさんを伴ってバスに向かうと、俺は一夏の席に近づきながらこう言った。

「待たせたな、一夏。飲み物だ。あと、お客さんだぞ」

「ああ。サンキュ、アル。って、俺にお客さん？」

俺に少し送られてバスに入ってきたナターシャさんが俺の立っているあたりまで来ると、サングラスを外して一夏を少しだけ眺める。

「君がそうなんだ。へえ」

その女性らしい仕草は年頃の俺達にとっては刺激が強く、顔を赤くしてしまいそうになるが気合でそれを抑え込む。

その後ナターシャさんは軽く自己紹介をした後、お礼と言って一夏の頬にキスをして颯爽と去っていき、その姿を見た篤さん・ラウラ・シャルロットの3人からペットボトルを一本ずつ投げつけられ、しばらくの間悶えることになったようだ。

俺が席についた直後に織斑先生と山田先生がバスに乗車し、点呼を取り終わると学園まで移動を開始し、夜7時には学園へと戻ってくる事が出来た。

色々あった臨海学校だが、全員無事学園に戻ってくることが出来たのは不幸中の幸いと言っているのかもしれない。そんな事を思いながら、明日から再び始まる平常授業にそなえることにするのだった。

25 鐘の音が響いた理由（後書き）

そんなわけで原作3巻の内容は今回で終了になります。

次回からは臨海学校終了後の学園でのお話を一本はさみ、その後夏休み編となります。

ただ、最近気温の暑さとモチベーションが落ちている事もあって以前のように週2回更新は難しいと思います。

楽しみにされている方々には大変申し訳ないのですが、なにとぞご容赦をお願いします。

26 夏休み前のこんな一日(前書き)

最新話出来ました。ここ数日涼しかったこともあって、あっさりと出来ました。

26 夏休み前のこんな一日

臨海学校から帰ってきた翌日の夜。夕食も食べ終えて部屋でゆっくりしているとき携帯電話が着信メモディを奏で、ディスプレイを見てみると案の定というべきなのかわからないが、イギリスの代表候補生管理官の電話番号が表示されていた。

「はい、もしもし」

『アルバート・ウィルソン代表候補生。先日の稼動試験結果のデータが一切無いのですが、理由の説明をお願いします』

そう。東さんの作った新規装備と新型イメージ・インターフェイスと新しいウイング・バインダーの3つを搭載・入れ替えた関係上、用意されていたスカイ・ブレードの換装用装備は量子変換しようとしても大元のスカイ・ブレードがハード・ソフト両面で大幅に変化しているのでエラーが出る可能性が高く、一つとして試す事ができなかった。

「あー……………、篠ノ之博士から直接新しい武装などを貰いまして、その時にビットのホルダーとして使っていた非固定浮遊部位を丸々換装しましたから、そのままだと色々と干渉しそうだったので、一つもデータが取れませんでした」

『篠ノ之博士から、直接！？武装のスペックは！？詳細なデータはありますか！？』

少し考えた後正直に理由を説明すると、驚きの声をあげる管理官。その声に疑念は混じっておらず、予め調べてはいたが、本人の口から聞いてますます驚きの情が隠せないといったところだろうか？

「それは用意してあります。夏季休暇には一度戻るつもりではい
ますが、機体を無理矢理調べると調査元にシステムクラックを行うよ
うに篠ノ之博士が設定してあるようなので注意してください。整備
マニュアルなども貰ってますから、後でコピーを転送します」

「……………了解しました。今回の件の判断はそのデータ次第とさせて
もらいます。今後はこのようなことが無いように」

少し間をおいて管理官は一言忠告をしてから電話を切る。

「アル、今の電話って誰からだっただ？微妙に緊張していたみた
いけど」

「今の電話相手か？イギリスの代表候補生の管理官からだよ。パッ
ケージの使用レポートが全く無かった理由を聞くために電話かけて
きたんだよ」

質問をしてきた一夏に対してそう返事をしながら俺はPCを起動さ
せ、昨夜から今日にかけてスキャンした束さんから渡された整備マ
ニュアルのデータと武装のスペックデータのコピーを圧縮し、念の
ために暗号化もかけてから管理官のPC宛にデータを送信した。

「そっか。アルも大変だな」

「それを言うなら一夏の方がよっぽど大変だつて。白式の新武装つ
て多機能武装腕アームド・アームだろ？射撃武装とか色々ついてるんだから、距離に
よってどのモードを使うかの戦略を考えて、各種モードを使いこな
すための訓練をするだけじゃなく、武装のエネルギー分配の設定と
かにも気をつける必要があるんじゃないか？

ただでさえ扱いが難しそうな代物なんだから、織斑先生とかに戦
法を相談しておいた方が無難だと思うぞ？」

どんな仕様かは詳しく聞いてないので不明だが、使い方次第では強

くなれるとは思うが、その習熟にはかなりの時間がかかるだろう。
一夏は今まで射撃武装を使った経験がほぼ皆無なので、射撃訓練も同時に進めなければならぬ。

「そうだよなあ……明日辺り千冬姉のところ行ってみるかな」

「そうしとけ。後はこまめに模擬戦やって、その結果で微調整していくしかないだろうな」

「ああ、そうするよ。ただ俺一人だと変なところイジるかもしれないから、微調整する時は手伝ってくれよ？」

申し訳なさにそう言ってくる一夏。………今までは本当に太刀一振りで戦っていたから微調整も何もなかったから、そう言ってくるのも仕方ないだろう。

「………わかったよ。俺も教えるけど、詳しいところまでは手が出せない可能性が高いから、その時は上級生の先輩達に聞いてくれ」

「おう、そうしとく」

コンコン

「アルバート君、いますか？」

そんな事を話していると部屋の扉がノックされ、山田先生が扉越しに俺を呼ぶ。

「はい。今いきまーす」

そう言って部屋の扉を開けると、俺の顔を見た山田先生が開口一番

こう言った。

「やはりこちらにいましたか。実はアルバート君に一つ連絡があります」

「連絡、ですか？なんででしょう？」

必修の一般科目の期末テストは来週半ばからだから、あとは個人指標用の戦闘データ収集の日程でも決まっただろうか？

「えっと、アルバート君は学年別トーナメントの時の事を覚えてますか？」

「ええ、覚えてます。それを引き合いに出したってことは、個人指標用のデータ収集の日程が決まったんですか？」

「そのとおりです。日時は来週月曜の放課後、第3アリーナで行う事になりました。ペアを組む人はもう決まっていますか？」

「ええ。セシリアに頼んであります。俺から伝えた方がいいですか？」

パートナーを報告し、日程を俺から伝えるべきか聞くと、山田先生はこう答えた。

「それに関しては私から言っておきますよ。対戦相手については直前まで秘密ですからね」

それはそうだろう。何日も前に相手が誰かわかっていれば、完全にその人用の戦略を考える事も可能だ。

「わかってますよ。連絡事項はそれだけですか？」

「ええ。それじゃあ私はオルコットさんに伝えてきますね」

そうやって山田先生はセシリアたちの部屋へ向かっていった。

「山田先生と何話してたんだ？」

ベッド近くまで戻ってくると一夏がそう聞いてくるので、俺は正直に答えた。

「ああ。学年別トーナメントの時に取れなかった俺の個人指標用のデータ収集の日程が決まったから、その連絡だよ。具体的には来週月曜の放課後」

「期末テスト直前か。アルも大変だな」

「なに、身の程知らずにラウラ挑発したツケを今になって払う事になっただけだ」

「まあ、誰が相手でも全力で戦ってくればいいだろ」

「無論そのつもりだ。それに、手加減するのは相手に失礼だろ」

そんな事を言いながら就寝時間まで時間を潰し、その日は眠りについた。

翌日の放課後からはセシリアと戦術の打ち合わせや連携訓練を行っている内に時間は過ぎていき、あっという間に試合当日になるのだった。

試合当日の放課後。既にISアーマーを纏いピット・ゲート内で対戦相手の情報が開示されるのをセシリアと共に待っているのだが、実質的には補修のはずのこの試合を観戦しようと第3アリーナには

学年を問わずに生徒が押し寄せていて、その人数には驚かされるばかりだった。

「さて、相手は誰だ？そろそろわかるはずだが……」

「誰であるかと全力でぶつかるだけですわ。そうでしょう、アル？」
「当然。負けるつもりで戦うなんてことはしないさ」

そんな事を話していると対戦相手の使用するISの情報が開示され、そのISのデータを見て、俺は啞然とするしかなかった。

「……おいおい、マジかよ……」

「……まあ、ちよつどいいのではなくて？堂々とあの時のリベンジが出来るのですから」

セシリアのその言葉と共に通信ウィンドウが開き、織斑先生がこう言った。

『今から5分やる。その間に作戦を考えろ』

織斑先生はそう言うと通信ウィンドウが閉じ、代わりに視界の片隅に試合開始までのタイムカウンターが表示される。

「セシリア、作戦を聞いてくれ」

「もう考えましたの？随分早いですわね」

「正確には『考えてあった』だよ。一度盛大に負けたからな」

そう言いながら事前に考えていたセシリアに作戦を説明し、それが終わる頃には試合開始時間となっていた。

試合開始時間となり、俺達がアリーナ・ステージに着地すると同時に対戦相手もアリーナ・ステージに着地し、俺達から20メートルほど離れた場所から開放回線オープン・チャンネルを使って話しかけてくる。

「手加減はしないぞ、アルバート」

「私としても早く紅椿に慣れたいからな。渡りに船というヤツだ。頼むぞ、アル」

対戦相手はどういうわけかラウラと篝さんのペアで、2人ともやる気十分という顔をしていた。

「ああ、全力でやらせてもらうさ。以前のリベンジって意味でもな……やるぞ、セシリア」

「ええ。わたくし達の実力、お2人にじっくりと味あわせて差し上げましょう。アル」

俺達もラウラ達と同じ様にやる気みなぎを漲らせながらお互いの主武装スカイ・ブレードmk?とスターライトmk? を展開する。

「打ち合わせどおり行くぞ、篝」

「ああ、あの2人に一泡吹かせてやるさ、ラウラ」

そう言って篝さんが雨月と空裂を展開し、ラウラもレールカノンを展開していつでも砲撃できるようにしていた。

『それでは、ブザーと共に試合を開始する』

織斑先生のその言葉と共に目の前に試合開始までの残り時間が表示され、俺はいつでも突撃できるように身体に力をこめながらいつで

イグニッションブースト
も瞬時加速を発動できるようにエネルギーチャージを開始する。

『ブーッ……!』

残り時間が0になると同時にアリーナ内にブザーの音が鳴り響く。

「行くぞ……!」

それと同時に俺は瞬時加速イグニッションブーストを発動させ、箒さんも紅椿のスラスタ
を全開にして突撃する。

ガギイツ……!

お互いのスピードは拮抗していたらしく、アリーナ・ステージ中央
でBTビームを纏ったスカイ・ブレードmk?と箒さんの二刀がぶ
つかり合い、鏝迫り合いの形でお互いの動きが硬直する。

「初撃は貰うぞ、アルバート……!」

箒さんの身体を目隠しにしてラウラが近づき、ほんの少しだけ高度
を上昇させてレールカノンのみを俺に向けてほぼ零距离の攻撃を俺
に当てようとした。

「やらせませんわよ、ラウラさん……!」

後方からセシリアがビットを展開し、ラウラと箒さんに向けてBT

ビームを連射する。

「くっ!?……なっ!!」

当然その攻撃を回避しようと後退しながら左右に分かれる2人だが、それを追尾するようにBTビームの軌道が曲がり、いくつかのビームが2人にヒットした。

「アル一人ではありませんのよ?わたくしを忘れてもらっては困りますわ」

スターライトmk?の銃口を二人に向けながら、不敵に微笑むセシリアを見ながら、ラウラは憮然とした表情でこう言った。

「高稼働状態のBT兵器が使えるという偏向射撃……いつの間に見えるようになった」
フレキシブル

その問いかけに対して、セシリアは少し意外な表情をしながらこう返した。

「あら、臨海学校の時に見えるようになったのですが。お気づきになられませんでしたの?」

「なるほど、あの時か。……厄介だな」

臨海学校中と言われ、ラウラはセシリアがいつフレキシブル偏向射撃を使えるようになったのかを悟ったようだ。

「ラウラ。悪いが考える暇は与えないぞ」

「このっ!……ッ!」

偏向射撃への対応策を考えようとするラウラだが、俺としてはそんな事をさせるつもりはない。ブーストしてラウラに近づきながらエネルギーを10%ほど消費してライジングブレードを起動させ、真紅のビームサーベルを構えながら突撃する。

ラウラはAICを発動して俺の動きを停止させようとするが、その直前に俺の狙いに気づいたようで大きく後退してその場から距離をとり、とっさに箒さんにこう言った。

「避ける箒!!」

「遅いよ!!」

「なっ!?!」

その場で箒さんに向き直りながらブーストして懐に入り込み、ライジングブレードを左から切り上げる。

「ぐあっ!!」

とっさの防御も間に合わず、箒さんはライジングブレードをくらって大きく吹き飛ばされるが、空中で体勢を立て直しながらラウラがいる辺りに着地し、パートナーであるラウラに半ば怒りながら問いかけた。

「何故AICを使わなかった!!動きを止められたらどう!!」

「……無理だ。あの状況でAICを使っていたら、私が蜂の巣になっただろうからな」

半ば俺を睨みつけるようにしながらラウラが視線で問いかけてくるので、俺は正直に答えることにする。

「……………正解。上手くいけばやれると思ったんだがなあ。残念だ」

「全くもって油断ならない奴だな、お前は」
「お褒めにあずかり恐悦至極……ってか？」

ライジングブレードを停止し、通常のビームサーベルモードに切り替えながらそう言う。ハマってくればラウラを撃墜できたかもしれない。非常に悔しい。

「どういう意味だ！！私にもわかるように説明しろ！！」

箒さんはまだ分かっていないようだ、今それを説明する気はない。

「この試合が終わったら説明してあげるよ。それまではお預けだ！！」

「私がアルバートを抑える！！箒はセシリアを頼む！！そうすればAICも使えるようになる！！」

そう言いながらラウラは瞬間加速を發動、プラズマ手刀を発生させて近接格闘戦に入ろうとするが、俺はそれに合わせるようにスラストターを全開にして後方に下がりながら8機のマルチビットを全て展開し、レーザービットモードで自立機動攻撃するようにコマンドを送り、その後ラウラとの近接格闘戦に入る。

「まさかこんな方法でAICを封じてくるとはな、アルバート！！」
「前回痛い目合わされたからな！！対策の一つも考えるさ！！こつちとしては気づかれた事に驚きだよ！！」

プラズマ手刀で攻撃を仕掛けながらそう言うラウラ。こちらとしてもラウラと戦う以上AICの対策は必須だし、いつかりベンジをするために色々と戦術を考えていた甲斐があった。一度気づいた以上、最低でもこの戦闘中はそう易々とAICを使ってくること

はないだろう。

「お前ほどの思考力はないが、私も代表候補生だからな！！過小評価は止めてもらおうか！！」

「そりゃ失礼！！だが、リベンジは達成させてもらうぞ！！」

ラウラはそう言いながらプラズマ手刀の貫手を放ってくるのでスカイ・ブレードmk?で受け止め、ラウラの動きがほんの少し止まった瞬間にマルチビットがラウラの左側に移動し、そこからBTビームが発射される。

「くっ!?!」

「おらあ!?!」

ラウラはその射撃をほんの少し後退する事で回避するが、その隙にこちらが攻勢に回り、周囲に散開して移動を続け、散発的に攻撃を続けるビットの回避と俺自身の斬撃を防御か回避をする必要のあるラウラ。当然後退して距離を取り仕切りなおそうとするが、そのたびにブーストして距離をつめて攻撃を続行、ビットでの支援攻撃も継続させる。

状況としてはこちらが多少有利だが、1年最強の専用機持ち相手に油断したら一気に巻き返される可能性もあるので俺はそのまま攻撃を続け、途中ビットのエネルギーが切れかけた物を随時回収しながらエネルギーをチャージし、常にラウラの周囲には最低4機のビットでの支援攻撃を続けるようにしておく。

「くっ!?!……このお!!」

「ッ!?!……がつ!!」

だが、それに痺れを切らせたラウラがダメージを覚悟で^{イクニッションブースト}瞬時加速を

発動して肉薄されてしまい、その勢いを利用したタツクルで大きく吹き飛ばされてしまう。

「はあ、はあ、はあっ……ふっ!!」

強引に仕切りなおしたラウラは俺が体勢を立て直している間に呼吸を整え、再び突撃してくる。

「ちっ!!」

プラズマ手刀の攻撃を迎撃し、再び近接格闘戦になるが先程と違いお互いダメージを受けている状態という事もあって一進一退の攻防となり、お互いにシールドエネルギーへのダメージが蓄積していくが、まだ俺とラウラの間には地力の差があるようで少しずつ押され気味になってしまう。

「アル!!」

そうして何度目か数えるかもバカらしいぶつかり合いをしているとセシリアが開放^{オープンチャンネル}回線で俺に通信を送りながらラウラに向けてライフを連射する。

「なっ、セシリアだと!?……ぐっ!!」

とっさにその射撃を回避するが、セシリアは発射されたビームを精^{サイ}イ^イコン^{コン}パ^パシ^シ神感^イ応^イ制^イ御^イで偏向させてラウラにダメージを与える。

セシリアのいる辺りを見てみると地面に機能^{ダウン}停止した紅椿を纏^タつて沈黙している筈さんがいて、こちらに近づいてきたセシリアもISアーマーの各所にダメージを受けていた。どうやらかなりの接戦だ

ったようだし、つい先程まで戦っていたようだ。

「すまない、ラウラ」

オープンチャンネル
開放回線でラウラにそう謝る筈さんだが、フレキシブル
偏向射撃の使えるようになったセシリア相手に慣れきっていない紅椿でここまでのダメージを与えた事には純粹に驚かされる。

「申し訳ありません、アル。筈さんの相手はかなり手間取ってしまいましたわ」

そう言いながら俺の隣に着地するセシリアだが、今存在する全てのIS内で最高スペックを持つ紅椿相手に辛勝だろうと勝てる時点で十分すごい事だと思う。

「いや、紅椿相手に勝ってるだけで十分だ。よくやってくれた」

これで形式としては2対1になったわけだが、これで数の利を使って勝ったとしても試合に勝って勝負に負けたような気がするので、セシリアにはこう言うしかない。

「セシリア、悪いが1対1でやらせてくれ」

「ッ、本気ですの!？相手はラウラさんですよ!？」

驚きの表情を浮かべて俺の方を向くセシリア。

「……本気ですね。…分かりましたわ。ただし、負けたら許しませんわよ?」

「OK。勝ってくるわ」

そう言つて数歩前に出てブースト一回でお互いの攻撃が届く範囲に陣取ると、ラウラから話しかけてくる。

「数の利を使つてくると思つたのだがな」

「どうせなら一人で勝ちたいし、お互い最大出力の攻撃をあと一撃くらつたら終わりでちょうどいいだろ？」

「……いいだろう」

ラウラはプラズマ手刀を最大出力で発生させ、俺も残りのエネルギーを全てつぎ込んだライジング・ブレードを起動させる。

「これで……」

「終わりだ!!」

お互い同時にブーストし、すれ違いざまにほぼ同時に攻撃を繰り出す。

「……私の負け、か」

「紙一重だ。初めから1対1ならわからんさ」

シュヴァルツエア・レーゲンから機能停止の証とばかりに全身から煙を上げながらラウラからの通信に返事をする。

こちらのシールドエネルギーの残量は5。あと少しでも攻撃が深く当たっていれば、こちらが負けていただろう。

『そこまで!!勝者、ウィルソン・オルコットペア!!』

織斑先生のその一言で俺達の勝利が確定したが、下手すれば負けていただけに安心できない。

「……………何とか勝ったけど、ギリギリだなあ……………」

「まあ、よろしいのではないのですか？勝ちは勝ちですわ」

「ああ。そうだな」

そう言いながらラウラに近づくと、案の定ラウラから話しかけてきた。

「次は負けん。それに、今日の方法は複数人数の時しか使えまい」

「まあな。1対1の時は別の方法を考えるさ」

お互いISを待機状態に移行シフトさせながらそう言うと、紅椿を待機状態にした篝さんが俺に質問してきた。

「アル、何故ラウラはあの時AICを使わなかったのだ？私にはさっぱりわからないのだが」

「言っつていいか？ラウラ」

「まあ、複数で戦う時だけだから、言っつても構わん」

ラウラの了承も得られたので、俺は篝さんに説明する。

「あの時ラウラがAICを使わなかった理由は簡単だよ。AICは停止対象に精神を集中しないと効果を維持できない関係上、使用中は自分の動きを制限してしまうんだよ。あの時はセシリアが完全にフリーだったから、仮にAICを使っつていた場合セシリアの偏向射撃フレキシブルで蜂の巣になっつてたかもしれないっつてワケ」

「なるほど。それでラウラはセシリアを倒すように言っつたのか」

「そういうことだ。それに、セシリアを倒せたら2対1で有利にな

るからな」

俺の説明を聞き納得した篤さん。それに、ラウラの言う副次効果もあるので、セシリアが篤さんを倒してくれたのは非常に助かった。

「そういえば篤さん、紅椿のエネルギー効率は考えておいた方がよろしくてよ？終盤にエネルギーが切れたから今回は勝てたようなものですから」

「ああ。どうも紅椿はこのままだとエネルギー消費が激しいからな。調整するか絢爛舞踏を自由に使えるようにするしかない」

「絢爛舞踏？何の事か教えてくれないか？」

セシリアからの忠告を素直に受け止める篤さんだが、聞きなれない単語があるので篤さんに聞いてみる。

「ああ。ワンオフ・アビリティ単一仕様能力の事だ。どうやら紅椿のワンオフ・アビリティ単一仕様能力はエネルギー回復能力を持っているようだから、それを自由に使えるようになればエネルギー効率の問題も解決する」

「その言い方だと一度は発動させた事があるみたいだから、その時の気持ちを思い出せばいいんじゃないか？」

「なるほど、明日試してみよう。感謝するぞ、アル」
「気にしないでいいさ。それより、とつとと戻るつ」

篤さんが礼を言ってくるが大した事は言っていないし、早く戻らな
いと織斑先生から注意される可能性もあるのでそう言うしておく。

「そうですわね、戻りましょうか」

「ああ。そうだな」

「私も今日は疲れた。早く寮に戻りたい」

「じゃあ行くつぜ」

そう言いながらアリーナ・ステージからピットへの階段を上っていき、織斑先生の話を聞いた後俺達は制服に着替えて寮へと戻っていた。

翌日の放課後、自主訓練の時間に篤さんは絢爛舞踏の発動を試した結果、最初は上手くいかなかったが、何度か試している内に発動できるようになり、その日の自主訓練終了時刻前には任意に絢爛舞踏を発動できるようになったようで紅椿のエネルギー問題はあっさりと解消されたようだった。

その後は一般教科の期末テストを受け、それが帰ってくる頃には8月 夏休み が目前に迫ってきていて、俺とセシリアは一度本国であるイギリスへ帰郷する事になるのだった。

26 夏休み前のこんな一日（後書き）

そんなわけで夏休み前のある日の出来事として、ラウラとのリベンジマッチでした。

篤さんも最初にできてきたヒロインだし、同じ束さんが関わっているISを使っている一夏があっさりワンオフを発動できて篤さんがあっさり発動できないというのもおかしいと思い、拙作では優遇して夏休み前に絢爛舞踏を発動できるようにしてみました。

次回からは夏休み編に入りますが、最初の内はオリジナルストーリーを挟もうと思っております。

夏休みにこんな話をやってほしいという意見がありましたら、感想欄にて書き込みをお願いします。さすがに量が多すぎた場合はこちらで選ばせていただきますし、書けそうなシーンだったら遠慮させてもらう場合もありますが、出来る限り頑張りたいと思います。次回も今回と同じペースで投稿できるかわかりませんが、これからもよろしく願います。

EX 設定まとめ エピソード26までのネタバレあります(前書き)

主にオリキャラのアルバートの設定ですが、原作と変化のあるキャラも変わっている部分を記述してあります。

EX 設定まとめ エピソード26までのネタバレあります

名前 アルバート・ウィルソン

略称 アル

国籍 イギリス

所属 IS学園1年1組

外見 金髪碧眼で欧米人的には低め、日本人からすれば高めの身長で、そこそこイケメン。

特徴 イギリス人の母と日本人の父の間に生まれたハーフで髪と目の色は母方の隔世遺伝。元々両親が共働きだったため、一夏と同じく家事は一通りこなすことが出来る。

日本に住んでいた時は一夏の近所に住んでいて、小学校入学当初クラスメイトから外国人然とした容姿から「ガイジン」呼ばわりされていじめられた経験があり、それが縁で一夏や箒と出会う。一夏からすれば初めての同性の幼馴染。

その後箒の家が剣術道場を営んでいる事を知り入門を決意。千冬とも知り合い、束と始めて邂逅、紆余曲折を経て束からは「身内」扱いされるようになる。

その後両親が離婚する事になり、親権は母親が獲得。小学3年の終わりまでは日本で過ごし、イギリスに引っ越した経歴を持つため、日本語・英語共に一通り話すことが可能。

趣味はモンド・グロツソの映像記録の鑑賞を筆頭としたIS全般で好きな色は空色。

性格は誠実で今の女尊男卑社会には納得できていないが、IS研究

者が身近にいてISのハイスペックぶりを間接的に知っているため半分受け入れているが、『女性「偉い」』という考えはしておらず、変に女性に媚びたりしない。

篠ノ之家の道場にも通っていて、当時の鍛錬を継続していたためそこそこ強い。

一夏と同日に研究所に勤める母に弁当を持ってきた際、完成直後の新型に触れた際に起動させ、織斑一夏と同様『男でありながらISを動かすことが出来る』人物となってしまう、世界的なニューズとなった上でIS学園へ入学することになる。

一夏や箒にISの操縦を教えているが、これに関しては自身の基礎の復習の意味あいもある。

母親がIS研究者でブルー・ティアーズの開発主任。そのためISを始めて起動させる前からセシリア・オルコットとは顔見知りで、何度かセシリアが研究所に泊り込みをする時に弁当を作って差し入れをした経験有り。

過去の経験により推理力・理解力といった思考能力が高く、IS学園の専用機持ちメンバーの中では頭脳労働と肉体労働両方をこなす事が可能。

専用IS『スカイ・ブレード』 主人公が触れたことにより起動したイギリス製のISで、BT兵器を搭載しつつ兵装の燃費を向上させ、なおかつ攻撃力を上げることを設計コンセプトとした近接格闘型IS

臨海学校まではいたって普通の第3世代ISだったが、その時に束によって手を加えられた結果、本体そのものは第3世代ISだが、武装に関しては第4世代ISの物を搭載する事になった関係上第4世代ISに分類されることになった。

機体色は空色がメインカラーでサブカラーに白、アクセントとして所々に赤が使われている。

以下は束の手による改造を施される前の武装

スカイ・ブレード 本機の由来にもなっている初期装備の近接戦闘用バスタードソード。通常時も刀身全体から少量のBTビームを発生させて切れ味を上げている半実体剣。

スカイ・エッジ セシリアのそれと同じ初期装備のBT兵器だが、ビット型の4機はビームソードを発生させる近接戦仕様のビットになっている。ただし、アルバートのビットの適正があまり高くないため同時に制御できるビットは2機が限度の上、ビットを使おうとすると足を止めてビット操作に集中する必要有り。後に訓練してその弱点は解消されたが、それでも基本的には両腰のミサイル型ビット2機をパージせずにミサイルポッドとして使用することが多い。

スターダスト 近距離用でも取り回ししやすいように設計されている後付装備のBTエネルギーと物理弾の切り替え式マシンガンで、2丁搭載されている。ただし、小型化技術が不完全のためBTエネルギーモードだと距離が開けば開くほど威力が減衰してしまう。そのため、基本的に近距離ではBTモード、中距離以上だと物理モードに順次切り替える必要有り。

ライジングブレード その時点で残っている武装用のエネルギーを全て消費する事でスカイ・ブレードから200メートルほどのロングビームサーベルを発生させる攻撃能力だが、単一仕様能力ではない。発生時間に関しては高出力BTビームに刀身の強度が耐えられず、最長60秒で停止するよう設定されている。

1度の戦闘でまともに発動できるのは1回だけだが、シールドエネ

ルギーを消費して2発目を撃つ事も一応は可能。ただしその時はそれまでの刀身のダメージに依存する形で発動可能時間が減る。1度目のライジングブレードでシールドエネルギーも消費すれば刀身の幅も5倍ほど広がるが、刀身の消耗も激増する。

以下は臨海学校で束から新たに与えられた武装

スカイ・ブレードmk？ 展開装甲を使用した全長1.8メートルのバスタードソード。スカイ・ブレードと同様にBTエネルギーを刀身に纏わせる事も可能だが、その他にBTビームを纏わせない純物理刀モードと、BTビームのみで刀身を形成するビームサーベルモードへ任意にモード変更可能。

展開装甲の恩恵でライジングブレード時に刀身へのダメージが発生しないため、エネルギーが切れるまで高威力攻撃を連続使用可能。

スカイ・エッジmk？ 展開装甲を使用した多目的ビット。スカイ・エッジはビームサーベル発生機能のみだったが、こちらはビームサーベルモード・レーザービットモード・3機以上のビットを同時使用したエネルギーシールドモードの3つの機能を搭載している。

イメージインターフェイスとビットの制御システムを束の作った新型に換装しているので、ビットの操作適性の低いアルバートでも8機のビットを同時操作可能で、同時にビットへ随時コマンドを送ることなく一定の自立行動が可能になっている。

スターダストmk？ スターダストと同様BTビームと実弾の切り替えが可能で2丁搭載されている。スターダストではBTビームのジェネレーターの小型化が不完全だったためBTビームモー

ドだと減衰する不具合があったが、束の持つ技術でそれを解消されていて、それまでのビームモード・実弾モードだけでなく、ビーム・実弾の同時発射モードを付加されている。

ライジングブレード　それまでのライジングブレードと同様に武装のエネルギーを消費して発動する高威力攻撃。こちらは任意の量のエネルギーを消費した状態でビームサーベルモードのサーベルへ供給されるエネルギー密度を高める事で攻撃力を上昇させている。それまでと同じ様に武装用エネルギー及びシールドエネルギーを一挙に消費した最大威力攻撃も可能だが、その場合はビームサーベルモードの3倍近い刀身長にした上でビームサーベルのエネルギーを高密度化して攻撃する仕様となっている。

これより後は原作より変更のあった人物を記します。

セシリア・オルコット　この作品でのヒロイン。一夏より先にアルバートがフラグを立てたため、アルバートに惚れた。原作と違い身近に男性IS操縦者がいたためIS学園へ入学する前から一夏を

見下していないが、一夏のIS絡みの知識のなさに驚いたり呆れたりすることはある。アルバートの親友であり、自身の異性の友人として付き合っている。

寮の部屋もアルバートの説得によってそこまで大掛かりなものを持ち込んでおらず、入学初日にアルバートが突然入寮してきたいざこざの結果、ルームメイトが幕に変わる。アルバートへISの操縦方法をしっかりと伝えたいと思い、物事の教え方を学んだ結果原作よりも一夏や箒に操縦のノウハウを多く教えている。

アルバートとはじめてデートした時に貰ったネックレスは彼女の宝物であり、そのおかげで福音戦で偏向射撃フレキシブルに覚醒した。

織斑一夏 原作主人公であり、アルバートの親友兼幼馴染。女性関係での鈍感さは変わっていないが、アルバートの影響で戦闘中に零落白夜を垂れ流してシールドエネルギーをいたずらに消費するような事もなく、射撃武装の特製を理解している事もあって操縦技量に関しては原作の同時期よりも若干上がっている。

篠ノ之箒 一夏とアルバートの幼馴染。原作では同じ1組のモブキャラと同室だったが、この作品ではセシリアと同室に。紅椿の絢爛舞踏も早々に任意で発動させる事が可能になっている。

ラウラ・ボーデヴィツヒ 基本的には原作と変わらないが、アルバートとのいざこざを起こした事に責任を感じ、アルバートにISの操縦を教えている。

篠ノ之束 過去のいざこざによってアルバートも興味対象であり、身内として認識している。

EX 設定まとめ エピソード26までのネタバレあります(後書き)

本編中でほとんどの事は説明済みですが、ここまでの設定を書き出してみました。

夏休みのエピソード募集についてはまことに勝手ながら、来週末を応募期限とさせていただきます。

27 帰省と再会、データ取り（前書き）

最新話です。今回から原作4巻の夏休み編に入りますが、オリジナルソードもちよくちよく挟むつもりではいます。

そんなわけで今回は完全にオリジナルストーリーの帰省したイギリスでのお話です。

登場キャラのセリフは全て日本語ですが、英語で話していると思われると思います。

27 帰省と再会、データ取り

7月31日。IS学園は1学期の最終日になっていて、いくつかの授業をこなしたあと終業式を行い、明日から学園は世間一般と比較すると少し遅めの夏季休暇となり、普段は寮で生活している学園生の約半数が故郷へ帰省する。

俺とセシリアも帰省組ではあるのだが、2人とも国側の事情 俺は臨海学校で束さんが作った最新鋭装備を貰った事、セシリアは偏^{レキシブル}向射撃に覚醒した事 で一刻も早く戻ってきてほしいと言われ、終業式が終わった直後に事前にまとめていた荷物を持ってIS学園を出発する必要があった。

「道中気をつけるよ。アル」

「ああ。1週間くらいで戻るつもりだから、戻ってきたらどこか出かけようぜ」

「いいけど、せっかくの帰省なんだからゆっくりしてきたらどうだ？」

そう言ってくる一夏だが、帰省する理由の大半が機体のデータ取りで、最悪の場合1週間丸々データ取りに忙殺される可能性がある以上、帰省してもゆっくり出来ない可能性もある。

「今回の帰省だとともに休めるかどうかも怪しいけどな。新武装受け取った時から覚悟してたとはいえ、少しはこっちの都合を考えしてほしいもんだ」

「所属が決まってるっていうのも大変だな。セシリアさんにもよろしく言っておいてくれ」

「ああ。それじゃあ行ってくる」

そう言っただけで何着か私服を入れたトランクを引きながら寮の部屋を出発する。

「すまないセシリア。待たせたか？」

「いえ。わたくしも今来たところですから大丈夫ですわ。既にチエルシー達も正面ゲート前で待機していると連絡がありました」

寮を出てすぐのところまでセシリアと合流すると、セシリアからチエルシーさん達が学園の正面ゲートで待っていることを教えてくれる。今回の帰省はセシリアの厚意こいついで学園からの移動手段を用意してくれたこともあり、快適な移動が出来そうだった。

「そうか。チエルシーさん達を待たせすぎても悪いし、早めに移動するか」

「ええ。行きましょう」

そうして雑談をしながら学園の正面ゲートまで移動すると、そこには白のロールスロイスが停車していて、その近くには見知った女性の姿もあった。

「お嬢様、お迎えにあがりました」

セシリアの幼馴染兼専属メイドのチエルシー・ブランケットさんが一礼しながらセシリアに向かってそう言った。

「頼むわね、チエルシー」

「お久しぶりです、チエルシーさん。今日はよろしくお願ひします」

チエルシーさんとはISを起動させる前から何度か研究所でセシリ

アを送迎する姿を見たことはあったが、実際に話をするようになってからはISを起動させてからなのでそこまで親しいわけではないが、心配りがかなり上手いため、そういった点は見習うべき人だと思っている。

始めて話をした時に敬称はいらないと言われたが、年上という事もあってこういった話し方で通させてもらっている。

「ええ。お久しぶりです、アルバート様。お荷物をお預かりさせていただきますね」

そう言っただけでチエルシーさんに荷物を預け、俺達はロールスロイスに乗って空港へ向かう。

出国審査を受けた後飛行機に搭乗　イギリス政府が俺達2人のために用意した特別便だった　し、今まで乗った事のないファーストクラスの接客などを受けながら、おれはセシリアにこう言った。

「時差と領空侵犯のことを考えなければ、IS展開して自前でイギリスまで飛んでいった方が早い気がするのはいかか？」

「……それはそうでしょうけど、飛行中の食事や現地に到着した時のことを考えるとデメリットの方が多いと思います」

「……それもそうか。そう言った意味ではこれが一番いいか」

そんな他愛のないことを話しながらフライトを続け、入国審査などを受けてロンドンのヒースロー空港にあるVIP用の入り口に着くと、既に政府関係者やイギリスの代表候補生管理官が俺を待ち構えていた。

「……行ってくるか」

「……ええ。お気をつけて、アル」

そう言っただけでセシリアとはいったん別れ、俺は政府側の用意した送迎車に乗り込み、車内で東さんから新武装などを貰った経緯の説明し、それが終わると今後の事 具体的には手に入れた俺が貰った第4世代技術の国内での取り扱いと他国への情報開示をいつにするか を話し合った。

一通りの事柄を話し終えた頃に実家に到着し、呼び鈴を鳴らすと足音と共に扉が開く。

「お帰りなさい、アル」

「ただいま、母さん」

珍しい事に母さんが直接出てきて迎えてくれた。普段は研究所に居ることの多い母さんも今日は早く帰ってきたか休暇をとったようだ。

「ええ、お帰りなさい。セシリアちゃんに送ってもらったの？」

「だったらセシリアもここまで一緒に来てるよ。空港からは政府の人と管理官と話しながらここまで来たんだよ」

「そっか。日本にいる間はセシリアちゃんと一緒に行動してたのね。……あと、管理官の人からスカイ・ブレードの新しいスペックデータとか送られてきたんだけど、臨海学校の時に来ちゃんから第4世代技術を使った武装を受け取ったって本当？」

リビングに移動しながら話をしていると母さんもスカイ・ブレードの事を聞いてくるので、俺はこう言っしかなかった。

「そうだけど、その事に関しては研究所に行ってから詳しく話す形にさせて。研究所の所員さん達にも説明しなきゃいけないから」

「それもそうね。今日一日はゆっくりしておきなさい。多分明日か

らは忙しくなるから」

「それは新武装受け取った時から承知してる。1週間でデータ取り終わればいいけど」

なるべく早く終わらせたいのが本音だが、世界に三機しかない第4世代IS 純然たる第4世代機は紅椿だけが、第3世代の機体に第4世代技術を使っている白式とスカイ・ブレードも分類としては第4世代扱いになるのだろう データ取りだから、どれ位時間がかかるかわからない。

「んー……………大丈夫じゃない？一通りの整備マニュアルとスペックデータは事前に受け取ってるし、今研究所だとその解析してる最中だから、実稼動データ取るだけなら其処まで時間はかからないはずよ」

「わかった。……………そういえばスカイ・ブレード用のパッケージってどうなったの？」

元々スカイ・ブレード用に用意されていたパッケージがどうなったか不思議に思ったので母さんに聞いてみると、少し意外な返答をされた。

「ああ、パッケージなら再設計してる最中よ。新しいスカイ・ブレードのデータ取って、それに合わせて装甲部分の調整と細かいパラメータの修正したら普通に使えるわ」

「そりゃよかった。それなら高機動パッケージの再設計を優先してくれない？どうも今年は1年生に専用機持ちが多いから、キャノンボール・ファストに1年生も出場する事になったし」

キャノンボール・ファストというのはISを使った超高速バトルレスの国際大会の名称なのだが、IS学園でも近隣市街と提携した

特別イベントといった形で毎年9月下旬に行われている。その際世界各国で生中継の特番が組まれ、いつものように各国のVIPも観戦に訪れ、一般にも開催している市から観戦チケットが販売される事もあって、IS学園の学校行事の中でも規模としてはかなり大きいイベントになっている。

このバトルレース、本来はISの整備を本格的に学ぶ整備科が設立される2年生から参加するのが定例なのだが、今年は1年に俺と一夏という男性IS操縦者2名がいて、各国から俺達の様子を見るために専用機持ちが大量（俺と一夏を除いたとしても、1学年に6名も専用機持ちがいるのはほぼありえないらしい）に編入された事もあり、1年生も経験を積ませるためにキャンボール・ファストに出場させる事が決まったらしい。

「そういう事ならわかったわ。高機動パッケージの再設計を優先するよう言っておくから、出来たら送るわね」

「頼むよ、母さん」

「任せておきなさい」

パッケージについて一通り話し終わると日本との時差の関係でちょうど昼の12時になったので、俺は自然とこう言った。

「もうこんな時間か。母さん、何かリクエストある？あるようならそれ作るけど」

「帰ってきて早々に家事をやらせるつもりはないわ。どこか食べに行きましょ」

そう言っ母さんは出かける準備をし始めるので、俺もそれに倣っなら

て外出の準備をする。

向かったのはそれなりに値の張る店だったが、母さんは男性IS操縦者の専用機の開発主任という事で高給取りだし、俺自身も束さんから第4世代技術を使った武装を受け取ったことで国から特別報酬が出る事になっているので、家計にはそこまで響かないだろう。

「アルじゃねーか。戻ってきたのかよ」

「ああ、久しぶりだな。エド」

その帰り道、あと少しで家に着くところで、こちらで出来た初めての友人でもあるエド エドワード・オークランド が話しかけてきた。

「おう。久しぶりだな、アル。いつ戻ってきたんだ？色々聞かせろよ」

「戻ってきたのはついさっきだよ。……………そうだな。明日からは

忙しくなるし、ちょうどいいか」

「あまり遅くならないようにね」

母さんはそれだけ言って家へと帰っていき、俺はエドの家へ向かうことにした。

「明日から忙しくなるって、また写真撮影か何かがあるのか？」

「少し前に篠ノ之博士から直々に新武装を貰ってな。そのデータ取りだよ」

「ああ、そう言えば博士とコネがあるって言ってたっけな。IS学園での生活はどうなんだ？」

エドもISにはそれなりに興味を持っているので、簡単な説明で事情を察してくれるのは非常にありがたい。

「基本的に同世代の女子しかいないからな。色々と気苦労が絶えない」

「そりゃ大変な事だ。……いつまでこっちにいるつもりなんだ？」

「だいたい1週間を予定してるけど、データ取りの進捗状況次第では伸びる可能性もある」

「そうか。まあ、今日一日は気楽に過ごしとけ。明日からは忙しいんだろ？」

「ああ。戻ってきたのもデータ取りが主な目的だからな。今日一日は気楽に過ごすつもりだよ」

そうやって話している内にエドの家へと到着し、主にIS学園に入學してから軍事機密に抵触しない事柄を主な話題にして盛り上がった。

「……………なんつーか、IS学園ってすげー所なんだな」

話が一段落した時にエドが発した第一声がそれだった。格闘技の実習訓練や爆発物の処理方法に関する授業といったIS学園独特の力リキラムは、普通の高校に通っているエドからすれば驚きしか浮かばないだろう。

「まあ、ISなんていう現状最強の兵器を扱う人物を育成するために作られた場所だからな。操縦者の身の回りに何が起こっても対処できるようにする意味合いが強い。専用機持ちを筆頭にした代表候補生の場合にはこれに加えて自衛用のあれこれが追加されるから、見た目の可憐さの割に戦闘能力は一級品だぞ」

普段意識する事はないが、いつものメンバーでその手のスキルを持ち合わせていないのは一夏と篝さんだけだろう。もっとも、あの2

人は昔から鍛えていたから持ち前のスキルである程度の自衛も可能ではあるだろうが。

「日本の諺ことわざでいう、『綺麗な薔薇バラには棘がある』ってやつか？」

「そんな感じだな。棘の鋭さを知らないと、とんでもない大惨事になるから気をつけるよ？」

「そうするよ。……そういえばアル、これ知ってるか？」

そうやってエドが話してきたのは、某国が開発した『ある物』についての情報だった。

「……っていう弱点がある物なんだが、そういう物があるって事はIS学園で習ったのか？」

「……エド。それについてはあのサイトサイトで知ったのか？」

「あつ、ああ……そうだけど、なんだよ？」

半ば睨みつけるようにしながら、俺もIS操縦者になる前はよく利用していた『とあるサイト』経由で知った情報なのかをエドに聞いてみると、案の定そのとおりだった。

「俺も実際にISを動かすようになってからわかった事だが、あのサイトはかなりやばいぞ。アクセスするなどは言わんが、軍事機密レベルの情報を平気で扱ってるから、他人に話すのは止めておいた方が身のためだ」

「ぐっ!?!?………わかった。俺も命は惜しいからな」

軍事機密と聞いて、エドもあのサイトで扱っている情報のヤバさを知ってくれたようだった。

そして、この時にあれの情報を聞いていた事で窮地を脱する事がで

きたのだが、それはもう少し先の事だった。

「わかればいい」

「ISがどういった物かって言う点に関しては、直に触れてるお前の方が知ってるからな。専門家からの忠告は受けるさ」

「そうしとけ。情報が情報だけに、何が起こっても知らないからな」

エドへの注意を終えた後は久しぶりにISの格闘ゲーム『インフィニット・ストラトスノヴァースカイ』

通称IS/V5

で対戦した。久しぶりの格闘ゲームという事も会ってあまり勝てなかったが、楽しむ事ができたのでよしとする。

「あれ？もうこんな時間か。エド、俺帰るわ。」

時間を見てみると結構遅い時間になっていたので、帰宅する事をエドに伝える。

「ああ。またその内会おうぜ」

「おう。データ取りが早く終われば遊ぶ時間も取れると思うから、その時は連絡する」

「了解。それじゃあな、アル」

そう言って俺は自宅へ帰り、明日に備えて少し遅めの夕食を取ってからシャワーを浴びて寝る事にした。

明けて翌日。いつもの時間に目を覚ますと既に母さんが出勤準備を

整えていて、軽く朝食を取った後すぐに研究所へ向かうことになった。

「おはようございます」

「……よく来てくれた、アルバート君！！」「……」

研究所に設けられている訓練場に顔を出すと既にデータ取り用の機材の準備も終了しているだけでなく、所員の人達の殆どが集まっています、俺を見て一斉にそう言ってきた。

「……どうも。早速データ取り初めますか？」

「いや、それよりも篠ノ之博士から新世代武装を受け取った経緯を教えてくださいませんか？」

「そうね。私も昨日は聞けなかったから、説明してね。アル」

「ああ。それじゃあ篠ノ之博士から武装を受け取った説明します。」

「

そう言つて、俺は新武装を受け取った経緯　スカイ・ブレードは束さんから見たら無駄と非効率の塊で、スカイ・ブレードをベースにした純第4世代ISを造つて俺に渡そうとした事、研究所の人たちを初めとしたスカイ・ブレードに関わった人たちを蔑ろにしたくなかつた事で、そのISの武装と一部パーツの受領だけに留めてもらつた事　を説明した。

「　。以上が新武装を受け取った経緯になります」

一通りの説明を終えて周囲を見てみると所員さんの中には涙をこらえている人もいて、俺の近くにいた人は俺の両手を握り、涙をこらえることもせずにごう言ってきた。

「ありがとう、アルバート君。そう言って機体を使ってくれるなら、我々も技術者冥利に尽きるよ」

その人に同意するように首を縦に振る人達がいて、俺も武装の受領だけに留めてよかったと思った。

「さあ、みんな。感動しているところ悪いけど、データ取りを始めましょう。アルのおかげで本体は殆どそのままだから、しっかりとデータとっていざという時に備えましょう」

手をたたいて皆の注目を集め、データ取りを始めようとする母さんだが、その目は少し潤んでいて、他の所員さんと同じ様に感動していたようだ。

「……………はい！！主任！！……………」

所員さんもやる気を出し、スカイ・ブレードの新武装のデータ取りが始まる。

俺はスカイ・ブレードを戦闘形態へ移行シフトさせる。真つ先に目に付くのは、形状の変わったスラスタ兼用のウイング・バインダーだろう。

「……………なるほど、その翼が武装以外で受け取った部分なのね？」
「受け取ったのは、この翼とイメージインターフェイスだよ。ビットの制御システムも組み替えてあるらしいけど」

実際、BT適性がB-の俺があれだけ大量のビットをコントロール出来ているのはイメージインターフェイスと制御システムが優秀なおかげだ。

「なるほど。それじゃあ、まずはビット周りのデータから取っていきましよう」

そう言っただけでターゲットバルーンがいくつか射出され、ビームサーベルモード・レーザービットモードの二つでターゲットバルーンを攻撃する。

「……かなり違いが出てるわね」

「そう？ 感覚としてはこっちの方がビットのコントロールはやりやすいんだけど」

「……そうでしょうね。ビット本体のコントロールの殆どを制御システム側で受け持っていて、最終判断をあなたが受け持っている形だから、精神面の負担はこちらの方が少ないわ」

「……その言い方だと何か問題がありそうだね」

母さんの言い方に含みを感じたので質問すると、母さんは少し迷った後にこう言った。

「……事前に送られてきたブルー・ティアーズのログデータを見た^{フレキシブル}だけで偏向射撃の詳しいデータを取ってないから確定してわけじゃないけど、この方法だと偏向射撃^{フレキシブル}をやるのはかなり難しいと思うわ」

「……つまり、射撃後の軌道変更はまず無理って事か」

「ええ。ただ、望みがないわけじゃないわ。偏向射撃^{フレキシブル}の詳細データ次第ではアルが偏向射撃^{フレキシブル}を出来るようになる可能性もあると思うわ」

まあ偏向射撃^{フレキシブル}自体がかなりの高等技術だから、俺自身のBT適性が上がらない限りまず無理だろう。

「……まずは一通りのデータを取って、話をするのはそれからし

ない？」

「…そうね、まずは全部のデータ取ってしまいませんか」

母さんにそう提案するとそれに同意してくれたので、それからは一通りのデータを取る事に集中する。

スターダストmk?のBTビームの射程や新しいライジング・ブレードの威力、スカイ・ブレードmk?とスカイ・エッジmk?に使われている展開装甲の原理や各モードの攻撃力についてなど調べる事は多岐にわたり、途中食事休憩を挟んだことを除けば丸一日データ取りに費やした。

そうして一通りのデータを取り終えて解析作業を開始したが、軽く解析しただけで全ての武装の威力がそれぞれの元の武装と比較して平均1.2倍近く上昇しながら武装の消費エネルギーが減少していて、今まで以上に長期戦に対応できるようになっている事がわかった。

それ以外は詳しく解析する必要があつたが、今日取ったデータでスカイ・ブレード用のパッケージの再設計作業はかどるようなので母さんにも話したキャノンボール・ファストの事情を所員さんたちに説明して高機動パッケージの再設計を優先してもらった。

明日はセシリアの偏向射撃フレキシブルに関するデータ取りを行うらしく、見学を希望したところ快く受け入れてもらえた。

家に帰った頃には日付変更ギリギリで、シャワーを浴びてベッドに入っただけですぐに寝てしまい、結構疲れていたのをその時に実感した。

27 帰省と再会、データ取り（後書き）

今回でてきたエド君は一夏の友人だと五反田弾に相当します。次回も帰省時の一幕を書く予定なので1週間ほど間が開くと思います。

28 策士策に溺れ…… (前書き)

先日の地震には驚かされました(静岡県住まいです)が、何とか1週間で書き上げる事ができました。

今回もイギリスでのオリジナルエピソードです。

俺が目を覚ましてリビングに出てきた時点で既に母さんは出勤して
いて、テーブルにメモが置いてあった。

「何だ？食事についてか？」

そう思ってメモを読んでみると、そこにはこう書いてあった。

『セシリアちゃんの見学に来る場合、データ取りの一環で模擬戦の
相手を頼む事になるかもしれないので、その時はよろしく』

(今のセシリアと模擬戦か………負ける可能性高そうだ)

ラウラとのリベンジ・マッチ前に行ったセシリアとの連携訓練の時
から思ったことだが、精神感応制御によるBTビームの偏向射撃は
『くるとわかっていても避けられない攻撃』の類だろう。

『一度明後日あつひの方向にビームを撃つてその軌道を変える事で死角
から強襲させる』事もできるし、『一度避けられたビームも軌道を
曲げて攻撃する』といった事もできる。

他にも『相手の機動を読んでから一発目の射撃を撃つて相手に回避
させ、2発目の攻撃を確実に当てて罠に使った一発目も軌道を曲げ
て追撃する』といった事も可能だろうし、今あげた以外のパターン
もあるだろうから、その攻撃バリエーションの引き出しの数は数え
きれない。

そのため今俺が取れる偏向射撃フレキシブルへの対策は『近接戦闘に持ち込んで
セシリアに偏向射撃フレキシブルを使わせる暇を与えない』か『エネルギーシー

ルドモードのスカイ・エッジmk?でビームを受け止める』かのどちらかしかない。

俺も偏向射撃が使えるば『偏向射撃同士で相殺する』方法も取れるのだろうが、自分で使えないことには意味がないので他の方法を使つて対策を取る必要があるのだが、先にあげた2つ以外でいい案が浮かばない。

相手との距離を問わず射撃に専念できるようになった分、今までの戦術では軽く突破される可能性が高い。

(今回に限っては勝ち負けを気にせず、偏向射撃の情報収集と今までの戦術がどれ位通用するかを調べる事に専念しておこう)

方針が決まったので着替え 普通の私服の下にISスーツを着ることにした をして家の戸締りを確認したあとに施錠をして研究所に向かうと、研究所の前でセシリアとチエルシーさんに会った。

「おはようございます、アル。今日もスカイ・ブレードのデータ取りですか?」

「おはようございます、アルバート様。アルバート様も研究所にご用事ですか?」

「チエルシーさん、セシリア、おはよう。データ取りは昨日のうちに終わったから、今日は純粹にセシリアのデータ取りの見学。母さんからは模擬戦するかもしれないって言われてるから、その時は俺が相手する事になってる」

「そうなのですか? 予め偏向射撃のデータ取りを行うとは聞いていました、模擬戦までするとは聞いておりませんよ?」

受付までの僅かな距離を3人で歩いていく。今日のデータ取りは予

め政府から伝えられていたので、当然データ取りの詳しい内容も一緒に教えられていたのだが、その時の項目で模擬戦がなかった事を思い出しながら疑問を口にするセシリア。

「ターゲットバルーンだけじゃ取れないデータもあるだろうから、そういった時のために模擬戦をするって俺に言ったんだと思う」

「なるほど、そういうことなら納得ですわ」

適当に理由を考えて伝えると、セシリアはそれに納得したようだった。

「それではわたくしは準備があるので。チエルシー、終わったらまた連絡いたしますわ」

「かしこまりました。お嬢様。……………アルバート様もありがとうございます」

「？」

チエルシーさんはセシリアに一礼したあと、何故か俺に礼を言っ去って行ってしまった。

「チエルシーさん、なんで俺に礼を言ったんだ？感謝される覚えがないんだけど……………セシリアは心当たりあるか？」

お礼を言われて悪い気分になるような人間はまずいなと思うが、身に覚えのない礼を言われるとこちらとしても困ってしまうので、チエルシーさんの身近にいて一番彼女を知っているセシリアに心当たりを聞いてみる。

「おそらく今朝の事だと思いますが……………時間もありませんから、説明は後にさせてもらってもよろしいかしら？」

「そりゃ構わないけど、後でちゃんと教えてくれよ？」
「ええ、それはわかっておりますわ。データ取りが終わったら説明いたします」

そう言ってセシリアは更衣室の方へ向かっていったので、俺は訓練場に併設されている来賓用の観客席　訓練場全体を俯瞰できる場所に設置されている　へ向かう。

観客席から機材調整の様子を見ているとセシリアがいつもどおりのISスーツ姿でやってきてデータ取りが始まった。

ターゲットバルーンがいくつも射出され、母さんの指示を受けて様々な軌道でBTビームを偏向させていくセシリア。

それを所員の人達が一つずつ記録していくのだが、それと同時に俺はハイパーセンサーのみを展開してセシリアが指示を出してからどれ位したらビームの軌道が変わるかを計測してみた。

軌道をどれくらい変えるかにもよるが、平均して0.5秒以内に軌道の変更が完了していて、『予想どおり相手をするには厄介すぎる能力』だと思った。

1度の偏向射撃フレキシブルで2つ以上のターゲットバルーンを撃ち抜く事など造作ソノノリもないようだし、射出されたターゲットバルーン全てを一撃で撃ち抜く軌道になるようBTビームを偏向させたり、その逆に撃ち抜くべきターゲットバルーン以外のバルーンを全てすり抜けるような軌道でBTビームを操ったりもしていた。

偏向射撃フレキシブルに覚醒して間もないはずなのにこれだけ微細なコントロー

ルが出来ているという時点でセシリアのBT適性がイギリス代表候補生の中で最も高いことを再認識させられる。

(……………うん、しばらくセシリア相手の模擬戦は勝てそうにないなあ……………)

半ば曲芸じみた軌道で動くBTチームの軌跡を見ながらハイパーセンサーを格納し、頭の中でセシリアとの戦闘をシミュレートしてみるが、やはり一番の問題は偏向射撃への対処方法だ。

実際に偏向射撃を見て回避パターンが一つ思い浮かんだが対処方法としては確実性に欠けていることもあって、セシリアからの攻撃を捌ききれずに負けるイメージの方が強い。

「それじゃあセシリアちゃん、最後にアルと模擬戦してもらいたいのんだけど、大丈夫?」

「ええ。大丈夫ですわ」

「アル、事前に言ったとおり模擬戦をするから、あなたも着替えてこっちに降りてきてちょうだい」

「……………了解」

そう言つて更衣室に向かってISスーツに着替えた後、訓練場へ向かっている最中にセシリアから秘匿通信が入る。

『アル、負けませんかね』

『ああ。俺も本気でやらせてもらつたさ』

本気で今の内に情報収集と対処法を考えておかないと仲間内の模擬戦勝率ランキングに影響しそうなので、気合を入れるためにも二、三度頬を軽く叩いてから訓練場に入る。

「お待たせしました。始めましょう」

訓練場内に入ってそう言いながらスカイ・ブレードを戦闘形態へ移行させ、セシリアと同じ高度まで上昇する。

『それじゃあ、ブザーの音と同時に試合開始とします』

母さんのアナウンスを聞きながらスターダストmk?を2丁展開する。

「あら、珍しいですね。いきなり射撃戦ですか?」

「ああ。偏向射撃がどんな物か遠距離から確かめようと思ってね」

ある程度距離が離れていれば偏向射撃を使われたとしてもどういった角度でBTビームの軌道が変化するかもわかるだろうから、今回は射撃戦をメインにしていくつもりだ。

ピーッ!!

そう言っている間に模擬戦開始のブザーが鳴る。

「いきますわよ!」

「ああ。こっちからいくぞ!」

セシリアにそう言いながら俺は高度を落とし、夏休み前にラウラに仕込まれた円状制御飛翔でセシリアの周囲を飛び回りながら実弾とBTビームの同時発射モードにしたスターダストmk?を連射する。

「円状制御飛翔サークルロンドですか……甘いですわ!!」

セシリアはそう言って俺の機動を予測しながらブルー・ティアーズビットを展開しながらスターライトmk?を連射する。

「簡単にはくらわん!!」

俺は射撃を一端中断してエネルギーシールドモードでビットを4機展開し、自分の周りに三角錐を形成して襲い掛かってくるであろうフレキシブル偏向射撃に備える。

「そう来ると思ってたわ!!」

そう言いながらセシリアは俺の周囲に浮遊しているマルチビットの内2機を集中攻撃するようにBTビームを偏向させてスラスターを破壊しようとしてくる。

ボンッ!!

「げっ!?!」

あっけなくスラスターを撃ち抜かれ、仲間には誰にも話していない筈の弱点 エネルギーシールドの基点となっているビットを撃墜されるとエネルギーシールドの展開面積が減っていき、2機以下になるとシールドの維持ができなくなる を攻撃されてしまい、あっさりとエネルギーシールドが消失してしまう。

「さあ、どうなさいますか!?!」

間髪入れずに再びスターライトmk?とブルー・ティアーズを交互に連射してくるセシリア。その攻撃に対して回避行動を取るが、案の定軌道を偏向させて回避したはずのBTビームが再び襲い掛かってくる。

再度ビットを展開してシールドを張ろうにもエネルギーシールドモードの弱点を察知されている以上、突破される可能性のほうが高い。それに、もう一度回避行動を取ったとしてもそこから軌道を変えられて再度攻撃されるのがオチなので、取れる手段は限られてくる。

(受け止める以外だと、あれしかないか!!)

観測用機材は模擬戦を行う事もあって楕円形の訓練場の壁際に集中している。無事なビットをウイング・バインダーに格納し、同じ様に左のスターダストmk?を格納。その変わりにスカイ・ブレードmk?を展開。

後ろを振り向いて迫ってくるBTビームの中でも軌道进行操作されなくても直撃しそうなビームを選び、それらをスカイ・ブレードmk?の刀身で受け止めながら自分から後ろに下がり、観測機材を壊さないように訓練場の中央付近まで移動する。

「あら、そんなに距離を離してよろしいのですか？近づくのが難しくなりますわよ？」

「何とかしてやるさ。油断していると痛い目見るぞ」

「ふふっ、見せてもらえるようなら見せていただきますわね！
！」

一定の距離を保ったままセシリアはスターライトmk?を構えて3度目の攻撃態勢を取ってBTビームを連射してくるので、俺はその

攻撃を高度を下げて一端回避する。

「まだ終わりませんわ!!!」

「そんなことは百も承知!!!」

セシリアのいったその言葉と共にBTビームの軌道が曲がり、高度を落とした俺を追尾してくる。

(さて、チキンレースと行きますか!!!)

追尾してくるBTビームに当たらず、それでいて飛行中に方向転換が出来るギリギリのスピードで急降下をする。

地面に激突しないように細心の注意を払いながら後方から追いかけてくるBTビームにも注意しておき、地面との距離が残り数センチといったところで水平飛行に切り替え、最大出力でブーストしてセシリアがいる方へ向かっていく。

BTビームが追ってくる気配はなく、フレキシブル偏向射撃を回避しきったと思つて油断したのが悪かった。

「ブルー・ティアーズはフレキシブル偏向射撃だけじゃありませんのよ、アル」

「あ………」

視線の先には地面ギリギリまで高度を落としてきたセシリアが待ち構えていて、勝利宣言とばかりにスターライトmk?とブルー・ティアーズが一斉に火を噴いた。

「くっそーっ!!!」

最大出力でブーストしていた為方向転換することも出来ず、その一斉射撃を受けて俺のシールドエネルギーは0になった。

「さて、わたくしの勝ち……ってアル、ストップ！！お止まりなさい！！」

「無理だ！！避けるセシリア！！」

模擬戦が終わっても突撃してくるのを止めない俺にセシリアが慌てて止まるように言ってくるが、機体は機能停止ダウンしているため操縦者からのコントロールが効かず、最大出力でブーストした勢いのままセシリアに突っ込んでしまう。

ドガンッ！！ゴロゴロゴロ……………

「ぬおおおっ！？」

「きゃあああっ！？」

あまりのスピードゆえに地面に叩きつけられてお互いに抱き合っような格好で機材の置いてある壁面近くまで転がっていく。

ゴロゴロ……………どんっ！！

「むぐっ！？」

「んんっ！？」

機材にぶつかる形でようやく止まり、その衝撃でお互いの顔の位置

が前方に動いた。その結果、偶然とはいえ俺とセシリアの唇が重なり、キスをしてしまった。

さらにぶつかった際の衝撃でもみくちゃになってしまい、その結果俺がセシリアに覆いかぶさるような形になってしまってもいた。

「……………」

「……………あの、アル……………右手を、どかしていただけませんか……………」

セシリアのその言葉で右手がやけに柔らかいものに触れている事に気付き、立ち上がるために反射的に右手に力を入れてしまった。

「ひゃうっ!? あっ……………あ、あ、あ……………」

身体を持ち上げて右手のある位置を見ると、ちょうどセシリアのブレストアーマー（軟質性）の右胸を鷲掴みにしていたので慌てて放す。

「っ!? すまない、セシリア! !」

右手を地面に突いてから起き上がり、急いでセシリアから離れて謝る。

「いつ、いえ……………おっ、お気になさらないでください、アル……………」

……………じっ、事故ですから仕方ありませんわ! !……………そう! !

先程の……………キっ、キスも事故ということにしておきましょう! !」

「あっ、ああ……………そう……………だな」

捲まくしたてるようにそう言ってくるセシリアの気迫に押され、俺はそ

う返事をするしかなかった。

「ア、アリス博士！！……デ、データ取りはまだ続けるのですか！？」

『えっ……と……十分よ、セシリアちゃん』

「そっ、それではわたくしは一足お先に失礼させていただきますわ！！！」

顔を真っ赤にしてそそくさと訓練場から出て行くセシリア。………
やってしまった事の大きさを考えればこうなるのもわかるが、それでもあそこまで強調されると少しへこむ。

『………セシリアちゃんの言動を気にするなとは言わないけど、ちゃんと2人で話し合っておきなさいよ、アル』

「……………了解」

セシリアの姿が完全に訓練場から消えた後母さんがマイクでそう言うってくるので、一言返事しておく。

『本日のデータ取りはこれにて終了、機材の撤収とデータの解析を始めて。アルも今日はお疲れ様、上がってちょうだい』

その一言と共に訓練場内に配置してあつた観測用機材の撤収作業が始まったので、俺もISを待機状態へ移行シフトさせて着替えをするために更衣室に向かう。

コンコン

「セシリア、いるか？」

中にセシリアがいる可能性もあるのでノックをして声をかけた後反応を待ってみるが、返事がないので誰もいないと思い、更衣室の中に入る。

ガチャ

「え？」

「……………は？」

俺が更衣室に入ると同時に声が聞こえたのでそちらの方を向くと更衣室に隣接して備え付けられているシャワールームへの扉 更衣室出入り口の右奥の壁面にある にシャワールーム側から手かけたセシリアが一糸纏わぬ姿で呆然と俺を見ていた。

「……………すまん!!」

慌てて更衣室の外に出て扉を閉める。

ボタン!!ドサツ!!

「ツ!?!……………くそっ!!」

更衣室の外に出たのと同時に人が倒れるような音が響いてきたので中に入ろうとするが、セシリアの今現在の姿を思い出し女性職員を

呼び、事情を話して更衣室に向かってもらった。

案の定セシリアが更衣室内で倒れていて、すぐさま研究所内の医務室まで運ばれていき、セシリアの実家にも連絡が行った。俺も迎えに来るであろうチエルシーさんに謝るために研究所に残る事にした。

「緊張のしすぎで倒れただけね。安静にしていれば大丈夫よ」

研究所の医務室に勤めている女性医師がセシリアの診断結果をそう告げたのに安心しつつ、俺は診断中に研究所にセシリアを迎えにきたチエルシーさんに向き直って頭を下げた。

「今回の事は俺の責任です。大変申し訳ありませんでした」

「……………ひとつ、お聞きしてもよろしいですか？」

「なんででしょう？」

「アルバート様はセシリアお嬢様の事をどうお思いですか？正直にお答えください」

普段よりも幾分か冷たい眼差しで俺を見ながらそう問いかけてくるチエルシーさん。……………ごまかしは効かないだろうから、正直に答える。

「一人の男として、セシリアの事は好きです」

「……………アルバート様は聡明と聞いています。お嬢様がアルバート様のことをどう思っているかもご存知なのではないですか？」

「……………それも心当たりはありますが、こんなことをした以上、幻滅されるでしょう」

「……………今日のところはお引き取りください。何かあればこちらか

らご連絡いたします」

「わかりました。失礼します」

チエルシーさんに携帯のアドレスを教え、挨拶をしてから医務室を出て行く。

「そついえばISスーツのままだったけな」

自分がISスーツのままだった事を思い出し、更衣室で私服に着替えた後、半ば呆然としたまま自宅へ向かう。

「あれ？鍵が開いてる……」

自宅について玄関の扉のノブをひねると簡単に扉が開いたので、既に母さんが帰ってきているようだった。

「ただいま……」

「お帰りなさい、アル。……今日は色々大変だったわね」

「あー……そつだけど、半分以上自業自得だよ」

自嘲気味にそついうと、母さんはこう言ってきた。

「そつかしら？……まずはシャワー浴びてきなさい。顔、ひどいことになってるわよ？」

「そつする。……夕飯どうする？何か作るっか？」

時刻は既に午後6時近くになっていたので、そろそろ何か作ったほうがいいだろう。

「今のあなたに包丁持たせたら何するかわからないから却下。出て

きたら何か食べに行きましょう」
「……了解」

一度部屋に戻って着替えの準備をしてからシャワールームへ向かい、脱衣所に備え付けの鏡を見て自分でも驚いた。

「……はっ、ひっでえ顔」

自分でも思った以上に顔色が悪く、目が濁った魚のようになりかけていた。精神的にかなり参っている様だ。

「……まったく、何してんだらうね俺は……」

熱めのシャワーを浴びながら、今日一日を振り返ると碌ろくな事がなかった。

模擬戦は偏向射撃フレキシブルを気にしすぎて負け、勢いあまってセシリアを押し倒し、あまつさえセシリアの裸を見てしまった。死にたくなるほど情けないが、自傷行為に走ったところで回りに迷惑をかけるだけだ。

「これからどうすっかなあ……」

シャワーの温度を切り替えて少しずつ冷たくしていきながら今後のことを考える。

「……だめだ、何も浮かばん」

まともな考えが浮かんでこず、そのままボーっとしていると寒くなってきたので再び温度を切り替えて身体を温めた後シャワールームを

出て着替え、もう一度鏡を見る。

「さして変わらんか……まあ、当然だよな」

目は変わらずに死にかけていたが、多少顔色は良くなったので何とかなるだろう。

「……まあ、あんなことがあった後だから仕方ないわね。出かけましょう」

「……そうだね」

母さんも俺の表情については何も言わず、2人で夕食を取るために出かけ、半ばやけになっていつもより多くの量を食べた。

結局その日はチェルシーさんから何の連絡もなく、落胆したまま一日を終えた。

28 策士策に溺れ……………(後書き)

はい、今回はフレキシブルに覚醒したセシリアと新武装のアルバー
トによる模擬戦と、お約束イベント3連発でお送りしました。
次回はこの後始末をやるつもりです。

29 それぞれの後始末 その1（前書き）

何とか1週間でかけました。今回は前回の後始末の前編になります。

29 それぞれの後始末 その1

「んっ……んんっ……」

セシリアが目を覚まして目にした光景は見慣れた自分の部屋だった。

「あら？確か……わたくしは、あの時……」

「お目覚めになられたようですね、お嬢様」

「ッ！？」

意識を失う前の事を思い出そうとして、それを遮るようにチエルシーから声がかかる。

「チエツ、チエルシー！？一体どうなっていますの！？確かわたくしは……」

そこまで言っつてセシリアはアルバートに自分の裸を見られたことを思い出し、それに加えて事故でキスをしてしまったことと直ではないにせよ胸を触られた事も思い出して、顔を耳まで真っ赤に染め上げる。

「あっ……あ、あ……」

「無理に思い出すとまた倒れてしまいます。気分転換のためにも、一度ご入浴されてはいかがでしょう？」

「そっ、そうね……そうしましょう」

入浴準備を始めるセシリアを見ながら、チエルシーは今後のことを考える。

時刻は既に午後11時を過ぎていて、後1時間もすれば日付が変わる。

アルバートに連絡を入れようにもこんな時間に電話をかけるのも失礼と思い、チエルシーは明日連絡する事にして、主兼幼馴染あまじのセシリアに今のアルバートの事をどう話すかを考える。

アルバート自身は気づいていなかったようだが、チエルシーと研究所内の医務室であった時のアルバートの顔色は蒼白になってお世辞にも優れているとは言えず、迷いと戸惑いと後悔が混ざり合った瞳をしていて、2日前にIS学園で会った時と同一人物とは到底思えなかった。

（それだけお嬢様を想っているということなのでしょうが……その想いが枷になってもいるようですね……）

チエルシーがアルバートに問いかけ、それに答えた時だけは瞳に力が入っていたが、それもすぐに抜け落ちてしまった。

アルバートがセシリアの事をあれだけ想っていないからそれを伝えず、むしろ悟られないように行動する理由は何かをチエルシーは考える。

（……………最も考えられるのは『彼が世界で二人しかいない男性IS操縦者であること』でしょう。アルバート様は世間が自分にどれだけ注目しているかを理解している。それと同時にご自分の立場の危うさも理解している可能性が高い。

そして、その注目度の高さに付随する負の面といえる『男性IS操縦者ゆえの諸問題』にお嬢様を巻き込みたくないと考えれば一応の納得はいく）

「ルシー、チエルシー!!」

そこまで考えていてセシリアが自分を呼んでいる事に気づき、チエルシーは慌てて返事をする。

「はっ!!しつ、失礼いたしました。お嬢様」

「いえ、構いませんわ。………何か考え事でもしていたのですか？」

「はい。お呼びかけに気づかず申し訳ございませんでした、お嬢様」

考え事に没頭していたあまり声をかけられたことを素直に謝るチエルシー。

「珍しい姿を見れましたから不問としておきますわ。………入浴後に一つ相談したい事があるから、時間を空けておいてちょうだい」

「かしこまりました、お嬢様。私からもお嬢様が倒れられている間の事をご説明したいと思っておりますので、その時にお話させていただきます」

「わかりましたわ。それでは、準備をしておいてくださいな」

「かしこまりました」

セシリアのその言葉で何をすればいいかを察したチエルシーは一言返事をする。

「それじゃ、頼んだわね」

その言葉を受けてセシリアはバスルームに向かっていき、チエルシーもセシリアの入浴時間などを考え、こまめ頃合いを見て2人で相談をする時の準備 紅茶とお茶請け を始める。

そうしてセシリアが入浴を終えてバスローブ姿で自室に戻ってくるのと、チエルシーが紅茶などの準備を終えるのはほぼ同時だった。

「タイミングとしてはちょうど良かったようですね」

「はい。つい先程準備が整いました」

チエルシーが椅子を引き、セシリアがそれに合わせるように着席する。

「チエルシーも座って」

「はい。失礼いたします」

チエルシーもセシリアの対面へ座ると、セシリアはチエルシーにこう問いかけた。

「チエルシー、まずはわたくしが研究所で倒れてから目を覚ますまでの事を教えてちょうだい」

「かしこまりました、お嬢様。」

セシリアのその問いに対して、チエルシーは偽ることなく自分が研究所に到着してからの事を説明し始めた。

いつもなら研究所の入り口付近で待っているはずのセシリアが居らず、代わりに研究所の所員がいてセシリアが倒れたことを教えられた事に始まり、研究所の医務室近くでアルバートと会った事、医師からセシリアの倒れた原因を聞き、それに付随してアルバートにある質問をした事、セシリアが目を覚ましたら連絡する事を報告し、推測ではあるがアルバートは今日の出来事でかなり傷ついているであろう事を伝える。

「 私からの報告は以上です」

「 アルへは連絡いたしましたの？」

「 いえ。時間が時間ですから、アルバート様もご就寝になられてい
ると思われまので、明日の朝連絡いたします」

「 ……それなら仕方ありませんわね。明日の連絡、忘れないよう
に」

時間は既に日付変更ギリギリになっているため、その判断も仕方な
いと思い、セシリアは明日朝の連絡を忘れないように注意しておく。

「 承知しております。……………お嬢様のお話を聞く前に、いくつか質
問をさせていただいてもよろしいですか？」

「 ……何かしら？」

「 模擬戦中にアルバート様とキスをされてしまったとのことですが、
その時の事を詳しくお教えいただいてもよろしいですか？」

「 ……いいでしょう。」

チエルシーのその言葉を聞き、セシリアはゆっくりとその時の事を
思い出して頬を赤らめながら説明をしていく。

「 と、こんなところですか」

「 ……ありがとうございます、お嬢様」

その時の情景を聞き、チエルシーはセシリアにこう問いかけた。

「 お嬢様。一つ質問なのですが、アルバート様とキスをされた時に
ごまかし始めたのはお嬢様からですか？それともアルバート様から
ですか？」

顔の赤みが引かぬ間にそう質問され、セシリアは耳まで顔を赤くしながらチエルシーの質問にこう答えた。

「そつ、それは……あまりに恥ずかしくてわたくしから言い出したことですが、それがどうしましたの？」

「……今後このようなことがあった場合、そうした発言は控えた方がよろしいかと思えます。推測になりますが、アルバート様もお嬢様とキスした事をなかつたことにしたくないでしょうし、続けて否定された場合相手の方を気落ちさせてしまう可能性が高いかと思われまます」

「うう……、そつ……ですわね。気をつけることにします」

セシリアのその返答を聞きチエルシーは少し表情を緩ませるが、次の瞬間には今までで一番表情を引き締めてセシリアに問いかけた。

「最後の質問になりますが、今回の件を経てアルバート様の事をどうお思いになられているのですか？」

「そつですわね……よく考えてみれば、研究所に更衣室はあそこだけ。お互いに気が動転していたし、わたくしとアルが鉢合わせになる可能性はかなり高いように思えますから、今回の件が原因でアルに対して気持ちの変化はありませんわね」

セシリアは少し考えてからそう答え、チエルシーはそれを聞いてからこう問いかけた。

「そのことは明日アルバート様に連絡を入れる際にお伝えしてもよろしいでしょうか？」

「アルの事ですから今回の件の責任を感じているでしょうし、許可します。少しでも精神的負担を軽くしてあげてちょうだい。あと、あまり思いつめすぎないようにとも伝えておいてくださいな」

「かしこまりました。アルバート様にお伝えしておきます」

「頼むわね、チエルシー。……他に報告はありますか？」

「いえ。私からの報告は以上になります」

「そう。……わたくしが相談したいのは、他でもないアルに係る事なのです。」

チエルシーからの報告を一通り聞き、セシリアは自分の相談を始める。

その相談が終わる頃には日付も変わっていて、セシリアもチエルシーもその後すぐに就寝して翌日に備えるのだった。

結局昨日はあの出来事でセシリアの俺に対する気持ちの変化が気になって一睡も出来ずに朝を迎えてしまい、寝不足のままいつもの起床時間になっていたのでリビングに向かう。

「……おはよ」

「おはよう、アル。昨日は……眠れなかったみたいね。あまり気にしすぎても身体に毒よ。忘れるとは言わないけど、思いつめないようにしなさい」

母さんは既に出勤準備を終えていて、朝食も済ませたようだった。

「朝ごはん、簡単だけど作っておいたから食べておく事。あと、昨日の事を誰かに相談して少しは楽になっておきなさい」

「……了解」

それだけ言っただけで母さんは出勤し、俺も用意された朝食を食べる事にするが、その直前に携帯電話が着信メロディを奏でたので電話に出ることにする。

「もしもし……」

「アルバート様の携帯電話でよろしいでしょうか？」

「チエルシーさん？……どうかされたんですか？」

電話の相手はチエルシーさんのようで、昨日の事でセシリアに何かあったようだ。

「朝早くから申し訳ありません。少しお時間を頂いてよろしいですか？」

「ええ、構いません。……セシリアに何かあったんですか？」

「それに関してはご安心ください。お嬢様に特に問題は見当たらず、昨夜遅くに目を覚まされました。アルバート様はお嬢様の事をかなり気になされていたので、遅くなりましたがそのご連絡を入れさせていただきました」

その言葉を聞いて安心した。おそらく昨日以前のような関係に戻るのには絶望的だが、それでもセシリアの体に異常がないならそれに越した事はない。

「そうですね。……教えていただき、ありがとうございます」

「いえ。こちらこそ連絡が遅れ申し訳ございませんでした。……」

それと、お嬢様から言伝ことづてがございます」

「……………どういった内容でしょうか？」

一度深呼吸して覚悟を決め、チエルシーさんにセシリアからの伝言の内容を聞く。

「今回の件でお嬢様のアルバート様に対する感情の変化は無いとの事です。それと、あまり思いつめすぎるなとも言っておられました」

「……………へ？……………本当…ですか？」

チエルシーさんから伝えられた言葉が信じられず、つい問い返してしまっただ。

「はい。研究所内に更衣室は一箇所しかありませんし、お互いに気が動転していた事で着替えの時間が重なってしまう可能性は十分ありえたとも言っていましたので、アルバート様が過度に気になさる必要はございません」

それを聞いて身体中の力が一気に抜け、椅子の背もたれに全体重を預ける。

「そう……………ですか。……………今、セシリアと話せますか？」

「ただいまお取次ぎいたしますので、少々お待ちください」

IS学園で過ごしている頃だとセシリアと一緒に昼食用の弁当を作っていた時間なので、セシリアと話が出るかと思っただ聞いてみると既にセシリアは起床していたようで、チエルシーさんのその言葉の後に保留音が流れだす。

「お電話変わりました。おはようございますわ、アル」
「ああ。……おはよう、セシリア」

それから15秒ほど経つとセシリアが電話に出てくるので、お互いに挨拶を交わす。

「ええ。それで、こんな朝早くからどうしましたの？」

あまりにいつもどおり過ぎるセシリアの声色を聞き、俺は声が震えそうになるのを必死に抑えてこう言った。

「セシリア、昨日はあんな事をしてすまなかった。許してくれ」

「許すも許さないもありませんわ。模擬戦の時も更衣室の時もお互い気が動転していたのですから、あまり気にし過ぎないようにいたしましょう」

「ああ……そうしておくか」

それでもあんな事をした以上は何かしらケジメはつける必要があるだろう。

「セシリア、今日って予定空いているか？」

「少々お待ちいただけますか？………申し訳ないんですが、今日は一日中予定がありまして、会えるとしたら明日以降になります」

明日以降、か。………ちょうどいいかも知れないな。

「そうか。明日の何時以降なら会える？」

「そうですね………遅い時間になってしまいますが、午後8時頃ならば会えると思いますわ」

「わかった。その時間に会おう」

「わかりましたわ。……場所はアルの家でもよろしいですか？」

会う場所をどうしようか迷っていたところでセシリアから提案があった。

「……そりゃ構わないけど。8時に俺の家だな。こっちも準備しておく」

「ええ……よろしく願いますわ」

「いや、よく考えてみればセシリアが俺の家に来るのは久しぶりだからな」

セシリアは何度か俺の家に来たことはあるが、俺がISを動かすようになってからは来ていなかった。

「それでは、明日の8時にお会いいたしましょう」

「ああ。それじゃあな、セシリア」

「ええ。チエルシーに変わりますか？」

「そうだな……悪いが変わってもらえるか？一言お礼が言いたい」
「わかりました。少々お待ちを」

セシリアがそういうと再び保留音が鳴り、すぐにチエルシーさんが電話に出る。

「お電話変わりました。アルバート様」

「チエルシーさん、今日はありがとうございました」

セシリアに伝言を頼んでもよかったが、直接言つのがスジだろう。

「お気になさらないください。……何か私に御用でしょうか？」

「いえ。一言お礼が言いたかったので変わってもらったんです。とにかく、ありがとうございます。それでは、また明日以降お会いしましょう」

「はい、またお会いいたしましょう。失礼いたします」

「はい。それでは」

そう言っただけで俺は通話を終了する。

「ふう……………あの態度だと……………ふああ……………怒ってない……………のは
確実だな」

セシリアと話していて安心したせいか眠気が一気に襲ってきて、今にでも寝てしまいそうだ。

「まあ、その前にこれだけ食っちゃおうか」

ぱぱっと朝食をたいたら、その後部屋に戻って寝る事にした。

精神的な疲労がかなりあったらしく昼ごろまでぐっすり寝ていて、目を覚ました時には12時を少し過ぎていたことに驚かされた。

（結構寝てたな……………何かあったかな？）

宅配便なども特になく、あったことといえばエドからの着信があったくらいで、それ以外は何もなかった。

(エドからか……まあ、ちょうどいいか)

着信履歴からエドの番号を呼び出し、エドの携帯に電話をかける。

「アルか？何のようだよ？」

殆ど待つことなくエドが開口一番にこうやってきたので、俺はこう返した。

「着信があつたから何の用かと思ってかけたんだよ」

「ああ。暇ならまた会えないかと思って電話かけたんだよ」

「なるほど。俺もお前に相談があるからちょうどよかった。そっちに行けばいいか？」

「おう。待つてるから適当に來い。その相談つても聞いてやるよ」
「そこそこ真面目な話だから、よろしく頼むぞ」

下手したら殴られそうな内容だが、現状で相談できて口の堅いやつがエドしかいないので仕方ないだろう。

「わかった。……相談つて、IS絡みの機密とかじゃないよな？」

「それなら別のヤツに話すつての。きわめて個人的なことだよ」

「それもそうか」

「とにかく頼むぞ。昼食が終わったらからそっち行くからな」

「了解」

そう言つて軽く昼食を作つたあとにそれを食べ、手早く食器などを片付けてから戸締りを確認してエドの家に向かうことにした。

「それで、きわめて個人的な相談ってのは何なんだ？」

エドの家に着き、エドが真っ先に聞いてきたのは相談の内容だった。

「ん？恋愛相談だけど」

「……………アル、それは彼女のいない俺に対するあてつけか？」

微妙に怒りながらそう聞いてくるエドだが、相談に乗ってくれない事にはどうしようもないので正直に答えるしかない。

「そんなつもりはこれっぽっちもない。こっちにいる知り合いで気軽に相談できそうなのがお前だけなんだよ」

「……………まあ、いいだろう。それで、誰が好きなんだよ？」

「セシリア・オルコット」

「セシリア・オルコット……………って代表候補生の？」

俺が好きな人物の名前を聞き、エドが恐る恐るといった感じで確認してくる。

「ああ。それ以外に誰がいるんだ？」

「……………はあ。…それで、相談の内容は？」

「意図せずセシリアの裸見ちまっただけど、ケジメつけるにはどうしたらいいと思う？」

言い終ると同時にエドが殴りかかってきたので、その拳を受け止める。

「どうすりゃそんなオイシイ思いができるか教えやがれ。そして一回全力で殴らせろ」

「どうしてそうなったかは教えてやるが、殴られるのはゴメンこう

むる」

そう言ってから昨日の模擬戦中にセシリアと偶然キスをしてしまったことに始まり、更衣室で鉢合わせたところまで話すとエドは表面上はにこやかになりながら目が全く笑っていない笑顔で俺を見ながらこう言ってきた。

「アル、マジメに殴らせるこの野郎」

「イヤだと言ってるだろうが。今朝までそのこと考えててへこんでたんだっつーの」

「……………まあ、普通ならとんでもないことになるのは間違いないな」

「だろ？だからこうして相談持ちかけてるんだよ」

普通なら警察のお世話になっているところだが、研究所内で起こった出来事ということに加えて、お互いが代表候補生同士というのも事態の複雑化を防いだ要因の一つだろう。

「……………一つ確認するが、アルは今までセシリアさんにどう接してきたんだ？」

「どう接してきたかって……………初めて会ったときから説明すればいいのか？」

「いや、お前が学園に入学してからでいい。隠さずに全部話せ」

「……………了解。」

その目ばかりかいの眼差しではなく真面目そのものだったので、俺もISS学園に入学してから今までセシリアとどうやって接してきたかをエドへ説明する。

「……………と、こんな感じで今まで過ごしてきたんだが」

「……………なるほどな。アル、学園内でお前がセシリアさんの事を好きだって知ってる人物はさっき言った3人だけなんだな？」

「多分な。もしかしたら上級生の先輩や他の先生の中で気づいている人もいるかもしれないけど、俺が知ってる限りだとその3人だけだ」

「そうか。……………アル、お前大勢の人前で告白する勇氣あるか？」

エドがいきなりとんでもない事を言ってくるので、俺はついこう言ってしまった。

「エド、お前いきなり何を言い出しやがる！！他人事たにじだと思って適当に考えてたら承知しないぞ！！」

「いやな、今日の夜に代表候補生達が出るコンサートがあるんだが、そこで告白すれば色々な問題が解決するかと思っただが……………」

「問題大有りだこの野郎！！多少はマスコミの突撃が収まってきたつてのにそんなことやったらまたマスコミが騒ぐっつーの！！しかも俺が楽器の演奏出来ないのは知ってるだろうが！！」

そのため今日のコンサートに俺は不参加で、明後日にその文の写真撮影があつたりする。

「そうか……………そうだな」

そう言いながら少し落ち込むエド。

「でも、ケジメつけるんなら告白した方がいいよなあ……………」

「まあ、告白したらしたで今までどおりの関係を継続するのは難しいだろうがな」

確かにエドの言うとおりで今までのおりの関係からは絶対に変化する

だろうが、いい意味でも悪い意味でもケジメをつけるのにはもってこいかもしれない。

「……そんな時はそんな時だ。ありがとな、エド。おかげで決心ついた」

「………本気で告白する気か。まあ、その結果だけでも教える」

「わかった。……サンキュな、エド」

「ああ。頑張れよ、アル」

そう言って俺はエドの家を去り、明日訪れてくるセシリアを迎える為の細かな掃除道具を買ったためにスーパーへ向かうことにした。

29 それぞれの後始末 その1（後書き）

そんなわけでアルバート君がセシリアに告白する決意を固めるまでのお話でした。

次回は告白本番のエピソードになります。

30 それぞれの後始末 その2 (前書き)

最新話出来ました。

告白シーンなどがありますので、お話としては甘めになっています。

30 それぞれの後始末 その2

細かな掃除用具の買出しが終わり、家の大掃除を開始したのが午後3時少し前。俺はそれから一部屋一部屋徹底的に掃除をしていった。

「ただいま。……………アル、何してるの？」

「お帰り、母さん。何って、家中掃除してるだけだけど。……………それにしても帰ってくるの早いね」

普段よりもよっぽど早い帰宅に少し驚いてそう言つと、母さんは呆れながらこう言った。

「もう7時過ぎてるんだけど……………気づかなかつた？」

「へ？……………おお、本当だ」

体感時間としては1時間から1時間30分程度だったのだが、待機状態のスカイ・ブレードの時刻表示を見ると既に7時15分になつていた。

「その様子だと気持ちは吹っ切れたみたいだけど、どうして家中の掃除をしてるのよ？」

「それに関しては後で教えるよ。夕食の準備するからちょっと待ってて」

そう言つて掃除道具などを片付け、手を洗ってから手早く夕食の準備を始める。

30分ほどで準備が終わつたので2人で食べ始めると、母さんが先程の質問をしてくる。

「それで、どうして家中の掃除をしてたの？」

「明日の夜にセシリアが来るから、その準備だけど？」

さすがに告白する事まで伝えるつもりはないので、差し障りのない部分だけ伝えておく。

「そう。……………それと、何かいいことあったの？帰ってきたらいつもどおりすぎて驚いたんだけど」

「ああ、それ？母さんが出勤したあとにセシリアから電話があつて、あの時の事話し合ったから……………かな？」

「……………まあ、元気が出たならよかつたわ。……………明日セシリアちゃん来るって言つてたけど、何時に来るの？」

「予定では8時頃になつてるけど……………セシリアに何か連絡？」

「ちよつと気になつただけよ。……………明日だけど、もしかしたら帰りが遅くなるかもしれないわ」

やけに間を空けて母さんはそう言ってきた。……………スカイ・ブレードの新武装と偏向射撃フレキシブルの解析がまだ全て終わつていないのだろう。

「……………わかつた。何か差し入れ持つて行つた方がいい？」

「その必要があつたら連絡を入れるから、食材の準備だけはして置いて」

「了解。連絡くれれば1時間くらいで持つていけると思う」「わかつたわ」

それから程なくして2人とも食べ終わったので食器を洗い、それが終わる頃には8時30分を過ぎていた。

「残りの掃除は明日にしておきなさい」

「それは言われなくてもわかってるよ」

そう言いながらお互い入浴準備などを進め、少し早いのが10時過ぎにはお互いに就寝することにした。

翌日、朝食を食べてから母さんが出勤した後で昨日の掃除の続きを始め、途中昼食を取った事以外はひたすら掃除をしていた。家中の掃除が終わったのは午後5時頃だったので、一人で掃除をしていた事を考えると比較的早く終わった方だろう。

ただ、注意していたとはいえ埃臭くなってしまったので、シャワーを浴びてさっぱりしてから時間潰しを兼ねてネットで調べごとをする事にした。

ピーッ

そうしてしばらくネットを閲覧していると呼び鈴が鳴った。

(呼び鈴?.....誰だ?)

心当たりはないが、来客の相手をするために玄関に向かう。

「はい。今いきまーす」

ガチャ

扉を開けてやってきた人物を見て、俺は驚くしかなかった。

「こつ……こんばんわ、アル」

やってきたのは大き目のハンドバックを持ったセシリアで、やけに緊張してるようだった。

「ああ、こんばんわセシリア。……それにしても、随分早いな。先約はもう済んだのか？」

「ええ。もつと時間がかかるかと思っていたのですが予想より早く終わってしまいました。失礼かと思いましたが、早く来てしまいました」

待機状態のスカイ・ブレードに表示されている現在時刻を見てみると午後6時ちょうどなので、予定より2時間早かった。

「いや、構わないさ。上がってくれ」

「失礼いたしますわ」

セシリアと一緒にリビングに移動する。

「……………セシリア、ハンドバックが随分大きいがどうしたんだ？」

「ひ……一つお聞きしたいのですが、アルはもう夕食は済ませたのですか？」

「いや、まだだけど……………」

セシリアが来る前に済ませる予定だったのでまだ準備すらしていない。

「その……わたくしに作らせていただけませんか？」

「そりゃ楽しみだ。……ってことは、そのバツクの中身は食材か？」

「そうですね。……申し訳ないのですが、キッチンを使わせていただけますか？」

「了解。案内する」

セシリアをキッチンに案内し、何がどこにあるかを一通り説明しておく。

「……って形になってるからな。……わかってると思うけど、学園のキッチンと使い勝手が違うところがあるから注意してくれよ？」

「ええ、わかりましたわ。……その、一人にしていただけですか？」

セシリアは緊張したままそう言ってくる。

「……了解。緊張しっぱなしだとミスしやすいから気をつけるようにな。……リビングにいるから、出来たら言ってくれ」

今のセシリアに告白したら色々な意味ですごい事になりそうなので、夕食が出来てから告白する事にしよう。それに加えてかなり緊張しているみたいなので怪我をしないか心配になってくるが、調理中の姿を見ているとわかってさらに緊張されても困るのでリビングにいることを伝えておく。

「……わかりましたわ。出来たらお呼びいたします」

緊張したままそう答えてくるセシリア。……リビングにいれば何か

あってもすぐに動けるだろう。

時間潰しのために部屋から本を数冊を持ってきてリビングで読みながら1時間30分ほど待っていると、セシリアから声がかかる。

「アル、お待たせいたしました。食事が出来ましたので食べましょう」

「わかった。今行くよ」

本にしおりを挟み、何を作ったのか楽しみにしながら食卓へ向かう。

「へえ……美味しそうだな」

用意されていたのはローストビーフとヨークシャー・プディング、プディングと言っても、お菓子のプリンではなく、日本でいうパイのような物だ。に付け合せの野菜と結構シンプルな物だった。

「学園で作ってたのは弁当で食べられる物ばかりだったから、結構大変だったんじゃないか？」

「そうでもありませんわ。レシピは事前に入手していましたから、そのとおりに作るだけですし」

それでも初めて作ったにしては外見上ミスらしいミスが見当たらないので、すごく美味しそうだ。

「セシリア、食事が終わったら話したい事がある。……聞いてくれるか？」

「……わかりましたわ。料理が冷めてしまいますから、先に食べて

しまいましょう」

「ああ。そうだな」

そう言ってお互い対面するような形で食卓に座り、挨拶をしてから食事を始める。

肉の焼き加減もブディングの味付けも問題ない。母さんがたまに作るものとはまた違った味わいがあって、クセになりそうだ。

「その……味はどうですか？」

「うん、美味しい。この味付けは好みだ。……後でレシピ教えてくれるか？」

「わっ、わかりましたわ」

嬉しそうな表情をしてそう答えるセシリアだが、それもすぐに落ち着かない表情に変わってしまう。どうやらこの後の事が余程気になっているようだ。

食事自体はゆっくりと1時間ほど時間をかけて食べたのだが、お互い何を話せばいいかわからず食器の音だけが食卓に響いた。

「ごちそうさま……」

「はい。お粗末さまでしたわ……」

そう言ってお互いに一息つき、なんともいえない静けさがあたりに漂う。

「セシリア」

「なっ、なんでしょっ？」

その沈黙を破って俺からセシリアに話しかけると、少しどもりながらセシリアが返事をしてくる。

「食事の前に言った話したい事、聞いてくれるか？」

「……………わかりましたわ」

セシリアも表情を引き締めてそう答えてくれたので、俺は一度深呼吸をしてからセシリアの目を見てこう言った。

「俺は、一人の男としてセシリアの事が好きだ。付き合ってくれ」

「……………それは、男女交際の申し込みと考えるとよろしいのですか？」

「当然そのつもりだ。出来ることなら結婚まで考えてほしいくらいだが？」

「……………一つ答えてください。何故、今日告白しようと思ったのですか？」

俺の言葉を聞き終え、セシリアは一度目を閉じてからゆっくりと俺と視線をあわせながらそう聞いてくる。嘘をつくことを許さないと知っているようなその目を見ながら、俺は正直に自分の気持ちを伝える。

「直接の原因は一昨日の出来事だな。意図していなかったとはいえ恋人でもない女性の裸を見たんだから、何かの形でケジメをつける必要があると思ったんだ。だから告白を決意した。その結果付き合う事になるとフラれようと自分の気持ちにケリを付けられるから今日このタイミングにしたんだよ」

「……………なるほど。わかりましたわ」

そう言ってセシリアが席を立ち、俺のすぐそばまでやってくる。

「わたくしの答えは……………こうですわ」

そう言って、セシリアは思い切り手を振り上げる。……………どつちやらフラれたようで、思わず俺は目を閉じる。

だが、いつまでたっても頬に衝撃は来ず、おそろおそろ目を開けると目を閉じたセシリアの顔が間近に迫っていた。

「んっ……………」

「んぐっ!?!」

両手で顔を持ち上げられ、俺の唇にセシリアの唇が触れる。

お互いに石像になったんじゃないかと錯覚するくらいの間そうしていて、セシリアは顔を真っ赤に染めながら唇を離してこう言った。

「……………浮気なんてさせませんからね、アル」

「……………ここまでされたらする気が起きないっての」

そう言い返している俺もおそらく顔が赤くなっているだろう。さっきからやけに熱い。

「なら問題ありませんわね」

そう言ってセシリアは俺の膝の上に横向きになって座ってくるので、俺はセシリアの腰に手を回して支えると自分からセシリアにキスをする。

「んっ……………」

母さんのその言葉を最後に通話が途切れる。……どうも色々と見透かされているようだ。

「アル、何方どなたからの電話でしたの？」

「母さんから。夜食作って研究所まで持ってきてくれて連絡だよ」

「アリス博士からですか。……わたくしもお手伝いいたしますわ。」

「一人でやるより二人の方が早く出来るでしょう」

「ああ、よろしく頼むセシリア。……あと、母さんから節度を
持って付き合えたと」

「つつ！！？？……アル、今日の事をお話になったのですか！
？」

驚きと羞恥で顔を赤くしながらそう問いかけてくるセシリアだが、
今日告白する事はエド以外には言っていない。

「そんなわけないって。今日の事を知ってるのは昨日相談した親友
だけだし、そいつは口が堅い。多分状況から推察されたんだろ」

「……………アリス博士もアルのお母様なのでから、頭が切れます
わよね」

「そういうことだろうな。……まあ、とにかく早めに作って持って
いこう」

「わかりましたわ。何を作りますか？」

セシリアがメニューを何にするか聞いてくるので、俺は普段夜食と
して持っていつているものをピックアップしていき、その中でセシ
リアが作れそうなものは任せて俺はそれなりに手間のかかる品を作
ることにした。

調理自体は一時間ほどで終わり、俺は出来た物を研究所へ持ってい

こうとする。

「手伝ってくれてありがとな、セシリア。……一緒に行くか？」

「ええ。ご一緒させていただきますわ」

そう言ってセシリアは俺の手を握ってくるので、そのまま10分ほど歩いて二人一緒に研究所へ向かう。

警備の人とは顔なじみになってはいるが、規則は規則なので研究所内に入る手続きを取ってから母さんがいる個人用研究室のある棟に向かう。

「そういえばこちらに来るのは久しぶりですね」

「……そうなのか？」

「来るとしたら整備室で機体の再調整をするか、訓練場でのデータ収集が主になりますから。こちらの棟に来たのはロールアウト直後のブルー・ティアーズを見た時くらいですわ」

「確かにそれ以外だとこっちに来る用事はないか」

俺はよく食事の差し入れを持ってきていたのであまり久しぶりといった感覚はない。

そんな事を話している内に研究室に着いたので呼び鈴を鳴らす。

ビーツ

「母さん、アルバートだけど」

「ああ、アル？今開けるから少し待って」

その言葉と共に扉が開くので、中に入って母さんに話しかける。

「お待たせ。差し入れ持ってきたよ」

「ありがと。……今日のこれってセシリアちゃんも手伝ってくれたの？」

「はっ、はい。お口に合うかどうかはわかりませんが、アルのお手伝いをさせていただきました」

「そうなんだ。……アル、悪いんだけどセシリアちゃんと2人で話をさせてくれない？」

何を話したいかは知らないが、悪いようにはされないだろう。

「……わかった。セシリア、俺は受付の近くで待ってるからな」

「わかりましたわ」

どこにいるかだけを伝え、研究室から退出する。

30分ほど研究所の受付付近で待っていると顔を赤くしたセシリアがやってきたので、俺は声をかける。

「話は終わったみたいだな、セシリア。……何を話していたか聞いてもいいか？」

顔を真っ赤にしているので何を言われたのか気になり、セシリアに話の内容を聞いてみる。

「学園に戻ったらあなたの事を頼まれましたわ。……それと、孫の

顔を見るのはしばらく後でいいと……………」

その言葉を聞き、俺はしばらく黙り込むしかなかった。

「……………」気が早過ぎだつて後で言うておく。それに、そこまでやったら色々面倒な事になりそうだし」

「……………」それに関しては同意見としておきますわ。わたくし達がこうしている事を知られたらマスコミが騒ぎ立てる可能性もありますし」「そうだよなあ……………」個人の恋愛くらい好きにやらせてくれって思うのは俺だけか？」

「お互い立場が立場なのでですからある程度は諦めるしかないのですよ。その言葉には同意したいと思えますわ」

そんな話をしながら俺の家へと向かう。家に帰ってきた時には11時近くになっていた。

「かなり遅くなってしまいましたね」

「そうだな。かなり遅いし泊まっていてもいいけど、どうする？」

「……………」その申し出はありがたいのですが、今日は帰りますわ。チェルシーに連絡してきます」

「わかった」

そう言うて、セシリアは帰宅準備をしながら迎えの電話をかけるために一度席を外す。

その間に俺は携帯を操作してエド宛にメールを打ち、約束どおり今日の結果を教えておく。

（まあ、メールでいいよな。この時間だとエドも寝てる可能性高いし）

そんな事を思いながらメールを送信すると同時にセシリアがリビングに戻ってくる。

「30分ほどで迎えに来るとの事です。……………アル、一つお聞きしたいのですが、わたくし達が交際を始めた事は一夏さん達にはどう説明いたしますか？」

セシリアが学園に戻ってからの事を話してくるので、俺は少し考えてからこう答える。

「……………そのまま伝えるしかないだろ。それに、隠していても態度の変化が会ったことはいずれ気付かれて付き合っていることもばれるだろうし、下手に隠さないほうが面倒を起こさないで済むと思う」

それに、学園の生徒達や山田先生と織斑先生を筆頭とした教師陣にもいずればれるだろうから俺としては隠すつもりはない。……………生徒を含めてかなりの騒ぎになるのは容易に想像できるが、先生達が鎮圧してくれるだろう。

「そうですね。……………根掘り葉掘り色々な事を聞かれそうな予感がいたしますが、男女比率の関係上仕方ありませんわね」

「男子生徒って俺と一夏だけだし、恋愛って点だとIS学園は結構きついよな。それに、多分俺にも学年問わず女子生徒からの質問が殺到するだろうから、セシリアだけに負担が行く事はないと思う」

IS学園の特殊性を考えれば致し方ないが、そこは諦めてもらうしかないだろう。

「まあ、最初の内は騒がれるだろうけどその内慣れてくれるだろ」

「……そうなる事を祈るしかありませんわね」

お互いに小さくため息をつきながらそう言い、セシリアの迎えが来るまで様々な話題で盛り上がる。

そうしていると呼び鈴が鳴り、セシリアの迎えの車が来たことを告げる。

「……どうやら迎えが来たようですね。名残惜しいですが、帰ることにいたしますわ」

「こうして話していると時間ってあっという間だな。……予定、空いたら連絡くれ。会いに行く」
「わかりましたわ」

セシリアを見送るために玄関まで向かい、扉を開けるとチェルシーさんが待っていた。

「お嬢様、お迎えに上がりました」

「夜遅くにありがとう、チェルシー」

「こんな遅くまで引き止めてしまい、すいませんでした。チェルシーさん」

かなり遅い時間なので俺も一言謝っておく。

「いえ。お気になさらないください、アルバート様。……それとも、旦那様とお呼びしたほうがよろしいですか？」

そうして返ってきた言葉は予想外のもので、俺はかろつじてこう答えるしかなかった。

「……………その呼び方は気が早すぎです、チエルシーさん」

「チエつ、チエルシー！！気が早すぎますわ！！」

「失礼いたしました」

そう言ってくるチエルシーさんだが、いずれそう呼ばれる事があるかもしれないのは否定しないでおく。

「それではアル、またお会いしましょう」

「ああ。またな」

そう言ってどちらからともなくキスをしてから離れ、セシリアは帰っていった。

その日以降は特にこれといって特別な事が起きる事もなく、代表候補生としての職務の一環で写真撮影をした以外は研究所の一角を使わせてもらい、研究員の人たちの手を借りて機体の再調整をした程度だ。

新しいスカイ・ブレードと偏向射撃フレキシブルの解析自体は全て終わらなかつたが、当初の予定通り1週間で全ての用事を済ませることが出来たので、俺もセシリアもイギリスに帰ってきた時と同じ様に特別便で日本のIS学園まで戻ることにするのだった。

30 それぞれの後始末 その2（後書き）

そんなわけでアルバートとセシリアのカップル成立なお話でした。今回でオリジナルのイギリス帰省編は終わりとして、次回から本格的に4巻の内容に入ります。当然2人がカップルになったこともあって人間関係の変化もあるでしょうが、その原作との違いをどう出すか迷っています。

まあ、サイレント・ゼフィルスとの因縁関係は確実に変わるとだけ言っておきます。

31 帰国とプールと妨害レース（前書き）

今回から原作4巻の内容に入ります。

ただ、原作4巻がオムニバス形式なので使用するエピソードはこちらで決めさせていただきました。

31 帰国とプールと妨害レース

イギリス政府の用意した特別便に乗り、学園から帰省する時と同じ様にセシリアの用意してくれたロールスロイスに乗って俺達はIS学園の正面ゲート前まで戻ってきた。

「あゝ……なんていうか、この高湿度の暑さを感じると『日本にいる』って感じがするのは俺だけだろうか？」

「わたくしはこの暑さはあまり好きではありませんから、今までの環境の差だと思いますが」

日本独特の暑さを感じながらセシリアにそう聞いてみると、冷静にそう返事をしてくる。

「お嬢様、アルバート様」

背後からチエルシーさんが話しかけてくるので振り向いて用件を聞く。

「どうしました？チエルシーさん」

「何かありましたの？」

「お二人のお荷物は私どもでそれぞれのお部屋にお運びすればよろしいでしょうか？」

荷物をどうするか聞いてくるので、少し考えてから返事をする。

「……俺の分は自分で部屋まで持っていけますよ」

「わたくしの分は量が多いから運んでおいてちょうだい」

「かしこまりました。こちらがアルバート様のお荷物になります」

そう言つてチエルシーさんが俺のトランクを渡してくれるのでそれを受け取り、チエルシーさんはその後一礼してからもう一人のメイドさんと一緒にセシリアの荷物運びを始める。

「ん？アル、セシリアさん」

移動しようとした瞬間に背後から声をかけられたので振り向くと一夏がこちらに向かつてきながら話しかけてきた。

「よう、一夏。一週間ぶりだな」

「一週間ぶりですわね。ごきげんよう、一夏さん」

「ああ、2人とも久しぶり」

お互いに挨拶をしてから、一夏にここまで来た理由を聞いてみる。

「誰かと外出か？」

「ちよつと気分転換に散歩だよ。……アル、セシリアさん、二人に質問なんだけど、ウォーターランドのチケットがあつたら行くか？」

唐突にそう聞いてくる一夏に対して、俺はこう答える。

「……その質問に答える前に移動しないか？さすがに熱い」

「そうだな。カフェにでも行くか。……セシリアさんはどうします？」

「ご一緒させていただきますわ。……それじゃあチエルシー、後はお願いしますわね」

「かしこまりました。お嬢様」

セシリアがチエルシーさんに話しかけ、俺達3人は学園の食堂に隣

接している冷暖房完備のカフェへ向かう。ここは年中無休で営業しているので、夏季休暇の最中だろうと学年を問わず生徒がいる。それに品揃えも豊富なので、俺達はそれぞれ注文をした後にカフェの一角でカフェ内にいる他の女子生徒さん達の話し声をBGMがわりにしながら一夏に先程の問いかけの理由を聞くことにした。

「ウォーターワールドのチケットがあつたらつて話だったな。……それってペア用のチケットなのか？」

もしそうなら買い取ってもいいが、一人用なら考え物だ。

「いや、一人用のチケットだ。鈴から明日一緒にここに行くためにチケット買ったんだけど、ついさつき山田先生から連絡があつて、明日倉持技研の人達が第二次形態移行した白式のデータ取りに来るんだよ」

「……そのデータ取りの件、鈴さんは知っておりますの？」

セシリアが一夏に質問すると、一夏は困惑した表情でこう答えた。

「それが倉持技研と学園の間で不備があつたみたいで話が伝わってなかったみたいなんだよ。山田先生も部屋に来た時はかなり慌ててたし、鈴に連絡しようにもケータイの電源切れてるし。だから直接話そうと思って部屋に行つてもいないみたいだからどうしようかと思つたんだ」

どうやら今回は完全なアクシデントのようで、一夏も鈴さんが自分をどう思っているかは別問題として一緒に行く気はあつたようだ。

「なるほど、そういうことなら仕方ありませんわね」

「鈴さんと連絡取れないから気分転換に散歩していたら、俺達が帰

ってきたってところか」

「そういうことだ。……それで、どうする？」

そう言っただけ聞いてくる一夏だが、鈴さんから買ったという事は鈴さんも一夏とプールでデートするつもりで手配したつもりなのは容易に想像できる。それを俺やセシリアが使ってもいい物が悩むところだ。

「そうだなあ……一夏、ちょっとそのチケット見せてもらえるか？」

「ああ。ただ、明日限定のチケットみたいだから日程ずらすのは無理みたいだぞ？」

一夏はそう言いながらテーブルの上にプールのチケットを出して俺とセシリアに見せてくれた。

「日程じゃなくて場所とか評判の確認だよ」

そう言いながらケータイを取り出し、ブラウザを起動させてチケットに表記されているウォーターランドの情報を集める。

「……………ここ、今月オープンしたばかりだ。それに評判も悪くないみたいだな。……前売りの入場券も今月分は完売してるっぽいし、当日の入場券も開場の2時間以上前に並んで買えるかどうかって程に人気もある」

「ああ、それは鈴も言ってた。このチケット入手するのも結構苦労したみたいだな」

それだけの人気スポットのチケットを入手するのはかなり骨が折れるだろう。約束としてはデートが先約のはずなのにそれを反故にされてしまう鈴さんが不憫だ。……それに、彼女であるセシリアを放

って鈴さんに一夏が来ない事を伝えるためだけに俺がこのチケットを買い取るのもおかしいだろう。

「一夏さん、つかぬ事をお聞きしますが、もし今日中に鈴さんと連絡が取れなかった場合はいかなさるおつもりですか？」

俺がそんな事を考えていると、セシリアが一夏に質問を投げかけた。

「その場合は明日早くに連絡しようと思ってるけど、それがどうしたんだ？」

「それでしたらこのチケット、わたくしが買い取りますわ。電話での説明だけだと怒ってしまうでしょうから、直接現地で詳しい事情を説明した方が鈴さんも冷静になることができるかと思えます」

そう言いながら財布を取り出してチケット代を払おうとするセシリアに、一夏はこう言った。

「いや、俺の尻拭いみたいな形だから、代金は要らない。このまま受け取ってくれ、セシリアさん」

そう言ってテーブルの上においてある入場チケットをセシリアに差し出す。

「……………わかりましたわ」

一夏の目を見てチケット代を受け取らないと判断したセシリアはそれを素直に受け取ると、一夏がセシリアに問いかけた。

「……………そういえばセシリアさん、どうして行く気になったんだ？アールと一緒にならともかく、同性の友達とこういう所に行くのはちよっ

と以外なんだけど」

「そのことですか？いくら気心の知れた友人とはいえ、付き合い始めたばかりの彼氏が他の女性と一緒にいるところは見たくないだけですわ」

一夏の質問にそう答えたセシリア。……俺はこの後起こるであろう衝撃に備えて耳を押さえしておく。

「……………へ？」

「……………ウソ……………」

「へえ、2人ともおめでとう。でも、いつから付き合い始めた」

「……………ええ〜ツ！……………」

一夏がいつ俺達が付き合い始めようか聞いてこようとした瞬間にカフェ内にいた他の女子生徒さん達ほぼ全員が驚愕の大声を上げる。

「いつ！？いつから付き合いしてるの！？……………まさか入学当初から付き合い合ってた、今まで隠してた！？」

「それはないはずよ！！だってアルバート君、臨海学校でセシリアさんにサンオイル塗る時微妙に緊張してたし！！」

「それよりこの事他の子にも教えてあげないと！！」

周囲にいた女子生徒さん達の約半分が俺達がいつ付き合い始めたのか問いかけてきて、もう半分が一斉にケータイを取り出して素早い指捌きでメールを打ち、ここにいない女子生徒に俺達が付き合い始めたことを知らせようとしていた。

……………隠すつもりはなかったが、帰ってきて早々にばらす事になるとは思っていなかった。まあ、いろいろな所に説明する手間が省けたという事にしておこう。

「……一々聞かれると面倒だから今の内に他の生徒さん達に伝えておいてくれ。……付き合い始めたのはつい2日前で、告白したのは俺から。告白した場所はイギリスの俺の実家。キスはしたけどそれ以上には進んでない。告白の時に何を言ったかは秘密。………
…こんなところでいい？」

「……………十分!!」「……………」

いつ付き合い始めたのかを問いかけてきた女子生徒達も俺の説明で納得し、ケータイを操作していた生徒達はその言葉と共にメールを送信したようだ。

「……………ところで、一夏もセシリアも無事か？」

女子生徒たちの絶叫を直接聞いたであろう一夏とセシリアに声をかけ、無事かどうかを確認する。

「な、なんとか……………」

「わたくしは問題ありませんわ」

どうやら一夏は直撃を受けたようだが、セシリアは耳を押さえることができたようで平然としていた。

「それでは一夏さん、明日の事はわたくしにお任せください」

「俺も連絡はしてみるけど、10時ちょうどにウォーターワールド前のゲートで待ち合わせって事になってるから、間に合わなかったらよろしくなセシリアさん。」

「おまかせください、一夏さん」

セシリアと一夏がそう言い合って話は一端終わり、一夏が席を立つ。

「俺はもう一回鈴のところに行ってくるけど、アルとセシリアさんはどうする?」

「わたくしは寮に戻りますわ」

「俺も荷物置きに寮に戻るつもりだけど?」

「なら会計行くか」

そう言っただけで俺達は会計に向かって代金を支払った後に寮へ向かうことにした。

一夏はもう一度鈴さんの部屋へ行き、俺もセシリアも寮の部屋に戻る。その後1時間ほどで一通り荷物の片づけを終わらせるとちょうど昼時だったので昼食を取り、その後もう一度ウォーターワールドについて調べてみる。

評判などは先程調べたので、ウォーターワールド内でどんなイベントが行われているか調べてみると、タイミングよく明日の午後1時から水上での障害物ペアレースが行われるようだ。優勝賞品も5泊6日の沖縄旅行ペア招待券とかなり大々的なイベントだ。さすがにコーズレイアウトについては当日まで秘密となっているため詳しい事は不明だが、選手間での妨害がありになっているため、一般の人達にとってはかなり苦戦するレベルのレースになるのは容易に想像できる。

(……………そういうことなら、色々な意味で鈴さんにはちょうどいいイベントかもしれないな)

一般の人達が苦戦するのなら、様々な訓練を経験した事のある代表候補生にとつては簡単なものだろう。一夏とのデートを反故にされて気が立っている鈴さんにとっては、ストレス解消兼一夏とお近づきになることが出来る招待券を得る事が可能な舞台という事で一石二鳥だろう。

(まあ、エントリーの可否は鈴さんとセシリア次第だから、伝えるだけ伝えておくか)

出来るなら鈴さんに直接教えておきたいが、今どこにいるかわからない上にケータイも通じないようなのでセシリアに教えておくしかない。

(……篝さんには色々聞かれるかもしれないが、セシリアの部屋に行こう)

一夏の鈍感っぷりに振り回された経験のある篝さんから質問攻めにかかる覚悟を決めてから、俺は明日の事を伝えるためにセシリアの部屋へ向かう。

コンコン

「どちらさまでしゅう?」

セシリア達の部屋の扉をノックすると、セシリアが扉越しに声をかけてくる。

「セシリア。俺だけど入っついていいかな？」

「どうぞ。入ってくださいな」

セシリアから入室の許可が出たので、室内に入る。

「どうなさいましたの？アル」

室内にいたのはセシリアだけで、篝さんはどこかに出かけているようだった。

「ああ、セシリアが明日行くウォーターランドの事を調べてたら、どうやら明日はイベントがあるみたいなんだ」

「イベント……ですか？どのような内容なですか？」

「水上ペア障害物レースらしい。しかも、選手間の妨害あり。優勝者には5泊6日の沖縄ペア旅行招待券付きってなってる」

そこまで言うと、セシリアは一つため息をついてからこう言った。

「鈴さん、絶対にエントリーしますわね。……………アルはそれを教えるために来たのですか？」

「半分はそうだけど、もう半分は明日俺も一緒に行っついていいかと思っつてな」

「それは構いませんが……………入場チケットは当日券を買いおつもりですか？」

「それしかないだろ。開場が10時らしいから、3時間前の7時くらいに並べば大丈夫だろ」

「わたくし達だけではなく鈴さんもいるのですが、それはどう説明するおつもりですか？」

セシリアが俺と一緒に来た理由をどうするかを聞いてくる。

「それは明日のイベントの作戦参謀ポジションって考えてるんだけど……」

「まあ、それなら大丈夫でしょう。……それに、出来る事ならわたくしも一緒に一緒したかったですし」

少し照れながらそう言うてくるセシリア。

「そっ……そうか。まあ、俺もセシリアとどこかに出かけたかったし、ちようどいいだろ」

その顔がかわいかったので俺も顔が赤くなってしまい、少しの間お互いに黙り込んでしまう。

「……アル、一つ聞いてもよろしいですか？」

「なっ、何だ？セシリア」

そうしているとセシリアが質問をしようとしてくるので、俺は少しどもりながら答える。

「明日のイベントの事なのですが、仮に鈴さんが優勝した場合、そのペア旅行券の扱いはどうなさるおつもりですか？」

「……セシリアはどうしたい？やっぱり俺と一緒に沖縄行きたいか？」

俺としては鈴さんに譲ってもいいと思っているが、セシリアが反対するなら代替案を用意する必要がある。

「出来る事なら行きたいですが、明日のメインは鈴さんですから、鈴さんにお譲りいたしますわ。……それにアルと一緒にいることが

できるなら、わたくしは何処でもかまいませんし」

「そうか……………ありがとな、セシリア」

俺と一緒に何処でもいいと言ってくれるセシリアにお礼を言う。

「あ……………」

「ん？どうしたんだ、セシリア」

「……………今気付いたのですが、一夏さんと鈴さんがふたりで沖縄に行くことになった場合、篤さん達が黙っているとは思えないのですが……………」

確かにそのとおりだろうが、一夏の鈍感さを考えると旅行に行ったくらいで鈴さんの気持ちに気付く事はないと思ってしまつのは気のせいだろうか？

「……………確かにそうだろうけど、十中八九鈴さんが望むような展開にならないと思うのは気のせいかな？」

「……………一夏さん、女性の気持ちに疎いですからね……………」

それはセシリアも思ったようで、なんともいえない表情をしていた。

「……………とにかく、明日は俺も行く事にするからよろしくな」

「ええ、わかりましたわ。おそらく待ち合わせ場所にいるとは思いますが、見つからなかった場合連絡をくださいな」

「コア・ネットワークの情報を使えば見つけれないって事はないと思うけど、万が一見つからなかったらそうさせてもらつさ。……………それじゃあ、俺は部屋に戻ることにする」

「それもそうですわね。それでは、また明日お会いしましょう」

「ああ、また明日な」

お互いに挨拶をしてから俺は部屋に戻り、水着や着ていく服など明日の準備を進めておく。

「アル、何をしてるんだ？」

「ん？一夏、戻ってきたのか」

ある程度服が決まったところで一夏が後ろから声をかけてきた。

「ああ。結局鈴に合えなかったから、明日はセシリアさんに任せることになるな。……もしかして、アルも行く気か？」

「おう。もつとも、前売りチケット持ってないから早めに行つて当日券買つつもりだけど」

「熱中症とか日射病はかなりきついから、熱さ対策しっかりしていけよ」

「それはわかってるよ。一夏も明日データ取りが終わったら鈴さんに謝っておけよ」

「そのつもりだよ。……アル、夕食はもう食べたのか？」

時計を見てみるといつの間にか夕食の時間になっていた。

「いや、ただだけど……一緒に行くか？」

「ああ。イギリスで何があったのか教えてくれ。データ取りしかやってないってことはないんだろ？」

「話してもいいけど、告白絡みのことは教えんぞ」

「無理に聞く気はないさ。早く行こうぜ」

そう言いながら俺達は食堂に向かい、1週間ぶりの学園での夕食を楽しみながら四方山話で盛り上がりながら就寝時間まで過ごす事にした。

そうして翌日。俺は朝早くから熱中症などの対策物を持って外出し、ウォーターワールドの開場3時間前に当日券の購入希望者の列に並び事にした。

幸いといっていいのか俺が到着した時にはそこまで当日券購入希望者の列も長くなかった事もあり、当日券の販売が開始された9時頃から40分ほど待つだけで当日券を入手する事ができた。

当然その頃には入場ゲート付近にはかなりの人達が待ち合わせをしていることもあって、この中から何の手がかりもなく鈴さんとセシリアを探すのはかなり苦労しそうだった。

(……………しょうがない。少しばかりズルをしよう)

俺は待機状態のスカイ・ブレードを操作してISのコア・ネットワークにアクセスし、スカイ・ブレードの半径500メートル以内にあるコアの位置を探る。

(……………反応あり!!場所はここから南西5メートルの位置に二つと……………南南西300メートルに一つ!?学園の専用機持ちの誰かが来てるのか!?)

南南西からの反応は少しずつこちらに近づいてきている事もあり、目的地がここなのは明白だった。

(……………まあ、上級生の先輩の可能性もあるしな。今はセシリアたち

に合流しよう)

俺は南西の反応目指して移動を開始し、すぐにセシリアと鈴さんを発見する事ができた。

「セシリア、待たせたか？」

「いえ、そこまで待つていませんから大丈夫ですわ」

「なんだ。やっぱアルバートと待ち合わせしてたか」

俺の姿を見て、鈴さんは予想どおりという顔をしていたが、それ以上浮かれた表情をしていて一夏がやってくるのを待っているように見えた。

~~~~~

『大変長らくお待たせいたしました。ただいまより、開園となります』

鈴さんの浮かれ姿を見ると同時に時間が10時ちょうどを示し、音楽と同時にアナウンスが流れ、入場ゲート前にいた人達が続々と園内に入っていく。

「鈴さん。少しよろしくって？」

「なによ？セシリア。私一夏と待ち合わせしてるからまだ入園しないわよ？」

浮かれた表情の鈴さんにセシリアが話しかけると鈴さんはそう言うので、俺達は事実を伝えるしかない。



「一夏さんなら、本日はメーカーの倉持技研の人達を相手に第二次<sup>セカン</sup>形態移行した白式のデータ取りがあるから来れないと仰<sup>おっしゃ</sup>ってしましたよ。昨日もその事鈴さんに伝えようと探し回っていたようですし」  
「……え？」

セシリアがそう言った瞬間、鈴さんの動きがぴたりと止まってしまい、鈴さんの身体が石になったと錯覚してしまうほどだった。

「ドウイウコトカ、セツメイシテクレナイ？」

俺達の言葉を理解した鈴さんは一瞬で目が据わり、俺達を睨みつけながらそう言ってくる。

「そのために俺達ここまで来たんだから、当然説明はさせてもらうけど、まずは入園しないか？さすがにこの炎天下の中だとお互い辛いだろ？」

「ワカッタワ……」

殺気を撒き散らしながら俺達3人は入園手続きを取り、園内のカフエで適当な物を注文してから鈴さんに顛末の説明を始める。

「まず最初に言っておくと、一夏は今日のデートに来る気はあったことを先に伝えておく」

「……なら、どうして一夏はデータ取りに行ってるのよ」

「それは」

俺とセシリアは鈴さんに昨日一夏から聞いた一部始終を説明する。

「……って理由なんだよ。今日の事は一夏も反省してるみたいだか

ら、責めるのは勘弁してやってくれ」

「……そういう理由なら納得できないわけじゃないけど、それならなんでアルバートが当日券買ってまで来てんのよ？」

「俺が来た理由は」

『では！！ 本日のメインイベント、水上ペアタッグ障害物レースは午後1時より開始いたします！！ 参加希望の方は12時までフロントへとお届けください！！ 優勝賞品はなんと沖縄5泊6日の旅をペアでご招待！！』

当然の疑問を鈴さんが口にするので俺は目的を告げようとすると、タイミングよく園内放送でペア障害物レースのアナウンスが流れる。

「今放送してたレースの作戦参謀やろうと思ったんだけど」

「どんな手段使っても絶対勝たせなさい！！ いいわね！！」

テーブルを勢いよく叩きながら立ち上がり、半ば睨みつけてくるようにしながら鈴さんがそう言うってくる。

「どんな手段を使っても……ねえ」

個人的にセシリアにそういう手を使わせるのはあまりやりたくないのだが……。

「わたくしは構いませんわ。勝負においてダーティな手段のほうが効果的なこともありますから」

手段をどうするか迷っていると、俺の悩みを見透かしたようにそう言うってくるセシリア。

「……了解。それじゃあエントリーといきますか」

「えっ？作戦はどうするのよ？」

鈴さんが作戦を聞いてくるので、俺はそれにこう答える。

「俺が考えたのは作戦ってほどに上等じゃないし。」

俺は2人に考え付いた事を伝えたと、二人は納得した表情でこう言った。

「あー、確かに作戦以前ね。最初からそれやればかなりの数減らせるし」

「確かに。勝つためだけなら非常に効率的ですわね」

「だろ。まあ、このとおりにやるかどうかは二人に任せるよ」

個人的にはあまりやってほしくない手段だが、勝つためだけならこの手は非常に有効だ。

「私はそれでいくわ。絶対優勝して一夏と一緒に沖縄よ！！」

「……冷静に行動してくださいね、鈴さん」

作戦というのもおこがましい戦術を伝え、やる気をみなぎらせる鈴さんを先頭に俺達3人はフロントへ移動する。

フロントでは多数のカップルがレースにエントリーしようとしていたが、男性の方は受付の人の無言の笑みに退けられてしまい、出場者の殆どが急造ペアのようだった。

俺達は元からセシリアと鈴さんの2人でエントリーするつもりだった。

たので問題はなく、受付が終了した12時過ぎにどれだけのペアがエントリーしたのか確認すると、13ペア26名がエントリーしたようだ。

当然誰がエントリーしたかは教えてもらおう事はできなかったが、エントリーしたペアの数は俺の想定より少し多いくらいだったのでセシリアと鈴さんの2人ならなんとかなるだろう。

それを聞き終わると同時に俺はイベント用プールに移動し、ちょうどよく観客席の前側に座る事ができた。

それと同時に司会の女性がプールサイドに現れたので、レースはあと少しで始まるようだった。

「さて、上手くいくといいけど」

実際に動くのは鈴さんとセシリアの2人だが、アドバイスをした以上二人に勝ってもらいたいのが正直なところだ。

そんなことを考えながら司会の女性のアナウンスを聞いていると、あつという間にレース開始の時間となり、合図と同時にレースが開始されるのだった。

### 3 1 帰国とプールと妨害レース（後書き）

そんなわけで、今回と次回はプールレース編です。

次回はレースで1話使います。

あとは夏祭りイベントはやるつもりですが、一夏の自宅訪問に関しては未定です。

もしかしたら夏祭りイベントが終わったら原作5巻のエピソードに移行する可能性もあることだけは先に伝えておきます。

### 32 レースの結果と頼まれごと(前書き)

最新話です。事前の予告どおり今回でレースは決着がつきます。

### 32 レースの結果と頼まれごと

「さあ、いよいよレース開始です！！ 位置について、よいい……」

パン！！

司会者の女性が鳴らせた競技用ピストルの乾いた音がプールに響き、参加している13ペアの内12ペアが一斉に駆け出し、全員が駆け出した後に残りの1ペア、鈴さんとセシリアが駆け出す。

『おつと！！ 凰・オルコットペア出遅れたか！？』

司会の女性が耳につけたインカムに向かってそう叫ぶが、当然ながら二人の行動は自発的なものだ。

「行くわよ、セシリア！！」

「わかってますわ！！ 鈴さんこそ遅れないでください！！」

先行逃げ切りをしようとしている参加者は後回しにして、積極的に妨害しようとしているペアを先に潰すことで妨害を受けづらくしてレース展開を有利にするつもりだからだ。

では、どうやって妨害ペアを潰すかというと、身動き出来ないようにしてしまうだけである。

このペアレースは50×50メートルの広大なプールに点在する浮

島を円を描くように渡っていき、途中にある障害をペアでクリアしていきながら、最終的にワイヤーで宙吊りになっている中央の島にあるフラッグを入手したペアに優勝商品の沖縄旅行のペア招待券が渡される形になっている。

当然途中でプールに落ちたら1からやり直しになっているので、一般の女性にとってはかなりの体力を消耗する事になる。

それに加えて他のペアから妨害を受ける事が想定される為かなり過酷に見えるのだが、場所がプールという関係上出場者の女性は全員水着だ。

元は男女のカップルで出場しようとしていた女性が大半だったし、いざという時にはパートナーの男性に抱きつけばいいと考えた出場者の女性が多かったようで、殆どの女性が纏っている水着はビキニタイプになっている。

しかも、鈴さんとセシリアは所属国家は違えど代表候補生なので、参加者の妨害に対しては滅法強く、反撃の余裕すらある。

当然その事を知らない一般参加者はワントempo遅れて行動を開始した2人をいいカモだと思ひ込み、畏だと知らずに2人に近づいてくる。

「うりゃあああああっ！！」

威勢のいい掛け声と共に大振りなリアットを仕掛けてくる妨害ペアに対して、鈴さんとセシリアは素早い動きで一閃。カウンター気味にそのペアをプールに叩き落とす。



「「」のっ!」」

当然素早く水面に浮かび上がる妨害ペアだが、自分達の変化に気づいていないようだ。

「さて、一丁上がり。水着がなきゃ上がってこれないでしょ」

「辱めた事に対してはお詫び申し上げますわ」

二人の手には妨害ペアの水着のブラが握られている。

「「きゃああつ!?!」」

「「「「「「おおおおおつ!?!」」」」」

胸元を押さえて沈んでいく元妨害ペアを見ながら2人は奪ったブラを丸めて観客席に放り投げてレース復帰の可能性を0にするのと同じに、予想以上のアクシデントに会場の男性陣が沸き上がる。……俺から提案したこととはいえ、被害にあった人には心の中で謝っておく。

「行くわよ、セシリア」

「わかりましたわ、鈴さん」

鈴さんとセシリアが2人同時に第1の障害　いくつもの小島を口  
ープ伝いに渡っていく　を超えようとする。

「さつさと行くから遅れんじやないわよ」

「鈴さんこそ、遅れないでくださいね」

そう言いながら二人は女性一人の体重を支えるのがやっとのはずの

小島を鈴さんが一つ飛ばしで跳んでいき、セシリアもその揺れを見切って素早くついて行く。

普通なら出来そうもないその動きを見て観客席にいる殆どの人物が性別を問わずに歓声を上げる。しかも鈴さんは途中でもたついている一般参加者を突き落とし、第二の島に到着してセシリアを待つほんの少しの間にロープを固定しているパートナーを落とす徹底ぶりだ。

『こ、これはすごい！！ 2人は高校生ということですが、何か特別な訓練でもしているのでしょうか！？』

司会の女性が場を盛り上げるためにそう言っている間にも第2の障害をあっさりと突っ切っていく鈴さんとセシリア。そのスピードはかなり早く、最初の出遅れ分を完全に取り戻していた。

その勢いのまま第3・第4の障害をクリアし、残るは中央の浮島へ渡るだけの第5の島にたどり着くことが出来た。鈴さんとセシリアの現在順位は2位なので、この第5の島でトップペアとの決戦になる。

「ここで決着をつけるわよ！！」

そうして反転したトップペアが鈴さんとセシリアに向き直る。

「あっはっは、一般人があたしたち候補生に勝てるだけでも  
『おおっと、トップの木崎・岸本ペア！！ ここで得意の格闘戦に持ち込むようです！！』」

「はい？得意の……なんですって？」

そう言いながら第5の島の上で呆然とするセシリア。俺もトップペアの姿を見て啞然としてしまった。

何故なら鈴さんとセシリアに向かってマツチヨ・ウーマンといわんばかりに一般女性以上に筋肉のついたペアが間合いを詰めようとしているので、俺はとつさに2人に秘匿通信プライベートチャンネルを繋いで指示を出す。

『2人とも足を止めるとまずい!! 辛いだろうけど逃げ回って時間を稼ぐんだ!!』

さすがに無酸素運動に近い事をここまで連続して続けているので2人ともかなり疲労しているのは容易に想像できるが、ここで足を止めると逃げ道がなくなる可能性がある。

『バカ!! 味方がいないのに時間稼いだってしょうがないじゃない!!』

鈴さんがまっとうな事を言ってくるが、俺はその言葉にこう返す。

『確かに味方はいないけど、時間を稼げば敵の敵は増える!! 潰しあわせて漁夫の利狙っていこう!!』

『なるほど、そういうことですか。了解しましたわ、アル!!』

『そういう魂胆ね。……分かったわよ!!』

セシリアも鈴さんも俺が何を言いたいかは理解してくれたようで、相手のメダリストペア突撃を何とかかわし、少しでも時間を稼ごうとする。

『鳳・オルコットペア、さすがに木崎・岸本の武闘派ペアの前では辛いのか!? 膠着状態だ!!』

オリンピックメダリストの名は伊達ではなく、自分達の攻撃が回避されるとすぐに鈴さんとセシリアに向き直ってくる。そのため突撃の勢いを利用したカウンターで落下させる事はかなり難しく、相手もそれを最も警戒している事もあってこちらの望みどおりあつという間に膠着状態に陥ってくれた。

『おおつと!! トップの木崎・岸本ペアと凰・オルコットペアが睨み合いを続けている第5の島に3位ペア、相川・篠ノ之ペアが到着!! 三竦み状態になつたぞ!!』

そうして武闘派ペアとの睨み合いを続けている間に3位のペアが到着したのだが、その人物はクラスメイトの相川さんと箒さんで、どいう経緯でここに来たのかは知らないが、開場前にセシリアと鈴さんを探していた時にあつた3つ目のコアは紅椿の反応だつたようだ。

位置関係としては島の中央にメダリストペアがいて、鈴さんとセシリアペア・箒さんと相川さんペアが第4の障害の小島を背にしている状態で、下手に動くとも均衡が崩れる事もあつて俺も指示を出せない状態になる。

「箒さんに相川さん!? お二人ともいらしていたとは知りませんでしたわ」

「それはこちらも同じだ。レースが始まるまではお前達が来ていることは知らなかったからな」

お互いにそう言いながら、メダリストペアだけでなく話し相手とそのパートナーにも注意を払っていて、何かの要因がない限りこのまま膠着状態が続きそうだった。

「知り合い同士かもしれないが、とにかく喰らええっ！！」

その状態を崩すためにメダリストペアが第5の島に現れたばかりの  
箒さん達に突撃してくる。

「くっ！？」

「うわわっ！？」

「二人とも！！ 退くと逃げ場なくなるから、突っ込みなさい！！」

慌てて小島の方に退避しようとする箒さん達だが、鈴さんが大声で  
箒さん達にそう言う。……………何をするつもりだろうか？

「っ！？ ええいつ、ままよー！！」

「あっ、箒さんー！！」

箒さんは鈴さんの言葉を信じてメダリストペアに単身特攻していき、  
相川さんはメダリストペアが突撃してくる恐怖に耐えられず小島に  
退避してしまう。

鈴さんは箒さんからほんの少しだけ距離を開けて後ろについていき、  
メダリストペアとの距離がある程度詰ったところで箒さんに向けて  
こう言った。

「箒、そこで反転ー！！」

そう言った後に鈴さんは大きくジャンプする。

「何？ ぶべらっ！？」

鈴さんのその言葉に反応してしまった篤さんは指示されたとおりに振り向いてしまい、膝・肩・顔の順番で鈴さんに踏みつけられて即席の踏み台にされてしまう。……………俺が言えた義理ではないが、かなり酷い。

「よしっ！！ 勝ったあ！！」

曲芸じみた大跳躍で一気にゴールへ到着し、鈴さんはフラッグを獲得する。当然数秒前まで鈴さんがいた島では、思い切り踏まれてバランスを崩した篤さんがメダリストペアのタックルを受けて3人一緒にプールの水面へ落下していく。

どっぽーん

その姿をセシリアは第5の島で、相川さんは小島でその姿を呆然と見守るしかなかった。

「ありがとう、篤。あんたのおかげよ」

そしてそれを起こした張本人の鈴さんは篤さんがプールに落下した水柱を眩しまぶしそうに見つめながら満面の笑みを浮かべていて、扱あい方が完全に故人のそれだった。

「ふ、ふ……………」

地の底から響く声が辺りに響き、次の瞬間には先程の倍はあろうかという高さの水柱が立ち、ダイレクトフォームチェンジ直接変換をして紅椿を戦闘形態に展開した篤さんが憤怒の表情を浮かべてPICを作動させていた。

「……そりゃ、そうだよな。失礼、通してください!!」

俺はその姿を見ながらこれから起こるであろう大惨事を鎮圧するために前にいた男性に声をかけて道を開けてもらい、観客席の縁へりに足をかけてジャンプしながらスカイ・ブレードダイレクトフォームチェンジを直接変換しながら展開、同時にセシリアに秘匿通信ブライベートチャンネルを繋ぐ。

『セシリア。鈴さんと篝さんを止める、手伝ってくれ!!』  
『了解ですわ!!』

セシリアも俺の言葉を受けてブルー・ティアーズダイレクトフォームチェンジを直接変換しながら展開し、事態の鎮圧に向かう。

「はっ、やろっつての？ 甲龍!!」

「鈴さん、こんなところで何を始めるおつもりかしら？」

甲龍を展開した直後に鈴さんにスターライトmk?を突きつけることで鎮圧したセシリアの姿を全方位視界で確認しながら、俺はスカイ・ブレードmk?を篝さんの首筋に近づけて鎮圧する。

「篝さん。鈴さんが許せないのはわかるけど、ISの展開はやりすぎだ。戦闘がしたいなら学園まで我慢してくれ。それに、鈴さんもあのやり方は篝さんが怒って当然だ。もうちょっと考えてくれ」

「わっ、わかった」

「わかったわよ。……悪かったわね、篝」

篝さんと鈴さんに一言ずつ忠告をしておく。鈴さんと篝さんも自分の非を認め、鈴さんはすぐに篝さんに謝ってくれた。

「な、なっ、なあっ!?　なんとレースに参加していた3人はIS学園の生徒のようだ!!!　しかも観客席から飛び込んできた男性もISを展開!!!　噂に聞く男性IS操縦者が乱入し、あっという間に事態を鎮圧!!!　この大会で3機ものISを見られるとは思いませんでした!!!」

でも、あれ?　ルールのにはどうなんでしょう?」

興奮と困惑の入り混じった声で司会の女性が慌て始めるので、俺はプールサイドにいる司会の女性に近づきながらスカイ・ブレードを待機形態に移行<sup>ソフト</sup>させて着地し、司会の女性に話しかける。

「それに関しては参加者の間で話し合いの場を設けたいと思うのですが、いけませんか?」

さすがに優勝者なしというのもイベントとしての盛り上がりに欠けるだろうから、ダメ元でそう提案してみる。

「あー、それに関しては上と掛け合ってみますので、少々お待ちください。……………大変申し訳ありませんが、大会は一端中止とさせていただきます。参加者の方々はお手数ですが、一度プールサイドまでお集まりください」

司会者の女性のその言葉で観客席にいた人々は解散していき、篤さん・鈴さん・セシリアを含めた参加者の女性達はプールサイドに集まっっていく。

「俺がいると話せない内容だと思いますので、俺は席を外しますね」  
レース内容も関わってくるし、男が近くには話し辛いだろうと思うって司会をしていた女性にそう言う。



「あ、ちょっと待って。……はい、はい、わかりました。……悪いんだけど、オーナーが君を呼んでるみたいなの。着替えをしてから更衣室で待っていて。迎えのスタッフが更衣室に行くから」

どうやら司会の女性が耳につけていたインカムはトランシーバーとしても利用できるようで、指示を受けて俺にそう言ってくる。

「……わかりました」

かなり真剣な表情でそう言われてしまい、俺はそれを受け入れて更衣室に向かうことにする。

私服に着替えて更衣室内で待っているとあまり時間をおかずに男性職員が俺を呼びに来たので後についていき、バックヤードのオーナーさんが待つ部屋に案内された。

何を言われるか戦々恐々としていたが、話を聞くとオーナーさんは物的被害が出る前に事態を鎮圧した事に対して直接お礼を言いたかったらしい。

礼を言われて悪い気はしないが、下手したら大惨事になっていたことを考えると素直に受け入れられなかった。

それに筭さんと鈴さんが戦闘を始める直前に鎮圧できたとはいえISを無断で展開してしまった事は学園へ報告せざるを得ず、織斑先生の特別カリキュラムという名の懲罰訓練が待っている可能性が高い。

そのことで憂鬱になっている間にオーナーさんとの話は終わり、バックヤードから出てセシリア達を待とうとする。

「アル!!」

バックヤードを出る直前に背後から声をかけられたので振り向くと、私服に着替えたセシリアが駆け寄ってくる場所だった。

「セシリア。話し合いは終わったのか？」

「ええ。つい先程終わったところですよ」

「それにしても箒さんと鈴さんがいないけど……」

私服に着替えた女性達が俺達の横を通り過ぎていくのを見ながら、箒さんと鈴さんの姿が見えないことに気付く。

「あー、あの二人なら事務室でお説教受けてるよ。アルバート君とセシリアさんが止めたとはいえ、下手したら大惨事になってたから」

そうやって二人が今どこにいるかを教えてくれたのは私服姿の相川さんだった。その手には優勝賞品の沖縄旅行のペア招待券らしき物も握られていた。

「そっか。……でも、それなら俺とセシリアの扱ってどうなるんだ？無断でIS展開した事には変わりないし、やっぱ織斑先生の特別カリキュラムか？」

「それに関してはウォーターワールド側からある程度便宜を図ると言っておりますわ」

「箒さんと鈴さんは自分から展開したけど、アルバート君とセシリアさんの二人はあくまで事態鎮圧のために展開したんだし、ある程度は学園も勘弁してくれるんじゃない？」

「……結局はなるようにしかならないか」

セシリアと相川さんの言葉を聞き、俺はそう結論付けるしかなかった。

「そういえば相川さん。つかぬ事をお聞きしますが、どうやって入場チケットを入手しましたの？」

「それは俺も気になったな。出来ることなら教えてくれないか？」

セシリアが相川さんに入場チケットをどうやって入手したかを問いかける。俺もそれは気になっていたので聞いてみる。

「ああ、そのこと？ ちよつと前に駅前まで福引やって、それでこのチケット当てたの。誰かと行こうと思ってただけど、中学時代の友達とは予定が合わないまま使用期限が今日までだって事思い出したの。」

それで困っている時に篠ノ之さんが通りかかって、ダメ元でを誘ってみたら篠ノ之さんも気分転換にちよつどいいって受けてくれたの。準備をしてから入場したらちよつどこのレースやるって知って篠ノ之さんが一緒にエントリーしてくれて頼まれたからレースに参加したんだ。そしたらこんな事になつちやって」

どうやら様々な偶然が重なり合った結果のようで、事情を説明してくれた相川さんも微妙な表情をしていた。

「優勝賞品を相川さんが持つてるってことは、レースの優勝者は相川さんと篤さんのペアになったって事でいいの？」

「色々あってそうなたんだけど、本来欲しかった篤さんは今回の事件の発端ってことでこのペア券使えないから、どうしようか迷つてるの」

相川さんが優勝賞品を持つているのでレースの結果を聞いてみると、

相川さんは旅行招待券の扱いで悩んでいるようだった。

「それでしたらご家族の方に差し上げたらいかがでしょう？ ペア旅行券ですから、相川さんのご家族全員で旅行というわけにはいきませんが、喜ばれるのではなくて？」

「んー、たしかにそうかも。ありがと、セシリアさん」

だが、それもセシリアの提案であっさりと解決した。確かに自分で使うつもりがないなら、誰かに譲るか売るしかない。

「あまり気になさらないください。ところで、相川さんはこの後どうなさるおつもりですか？ わたくしは鈴さんを待つつもりですが、アルもそれで構いませんか？」

「ああ。元々今日は一夏の代わりに鈴さんと一緒に行動してるんだから、鈴さんを放っておくつもりはない」

それに、お説教を受けた後に愚痴をこぼせる誰かがいた方が鈴さんも精神的に楽になるだろう。

「私も自分から篤さん誘ったんだし、終わるまで待つ気ではいるけど……セシリアさん達はいいの？ 私がいると、その……」

相川さんは俺達の事を気にしてそう言ってくるので、俺とセシリアはそれにこう答える。

「そのお気遣いには感謝しますわ、相川さん。ですが、今は二人きりであるよりクラスメイトとお話したい気分ですの」

「よく考えてみたら相川さんとはじっくり話をする機会がなかったからちよつどいいと思ったんだけど、ダメか？」

「……そういうことなら、お願いしようかな」

俺達からそう言われて相川さんが一緒に行動する事を了承してくれたので、俺達は近くのスタッフさんに話しかけて鈴さんと篤さんへの伝言を頼み、カフェで3人一緒に待つことにした。

適度に注文を繰り返して、午後5時頃になると鈴さんと篤さんがカフェにやってきたので、俺達は5人で学園に戻ることにした。

学園に戻った頃にはウォーターワールド側から学園に報告が届いていたこともあり、俺達5人は織斑先生に呼び出された。

そこで鈴さんと篤さんには自発的にISを展開したためかなり重めの特別カリキュラムが言い渡され、俺とセシリアに対しては事態鎮圧のための展開という事もあって極々軽度の特別カリキュラムという事で済まされた。相川さんは専用機を所持していないし、特にこれといった問題行動は起こしていないのでお咎めなしだった。

寮の自室に戻ってきた時には6時を少し過ぎており、一夏もデータ取りを終えて自室に戻ってきていた。

「今日は色々と迷惑かけたみたいだな、アル。すまなかった」  
「俺も今日一日は楽しませてもらったから気にするな」

部屋に戻ってすぐに一夏から謝られたが、セシリアの水着姿を見れたから個人的にはあまり気にしていない。

「……わかった。そういえばアル、今日のデータ取りの時に、お前の親父さんからアル宛に渡しておいてほしいって言われたものがあるんだけど」

一夏はそう言いながら一枚のデータディスクの入ったケースを俺に渡してくれるので、俺はそれを受け取る。

倉持技研の技術者がデータ取りに来ると聞いたので、そこに勤務している親父が来る可能性は高い。一体何の用だろうか？

「データディスク？ ……中身は何か聞いているか？」

「いや、俺は聞いてない。中にメモが入れているからそれを読んでくれて言ってたぞ」

一夏は中身を聞いていないようなので、後で自分で確かめる事にしよう。

「わかった。中を見るのは後でも出来るから、まずは夕食にするか」「そうだな。早く行かないと時間なくなるしな」

そう言いながら俺達は食堂に向かい、夕食をとることにした。その時上手い具合に鈴さんと篝さんの二人と会うことができたので一夏は今日の事を鈴さんに謝ったが、鈴さんは今日のデートを反故にした代償としてデザートを奢る事を要求し、何故か篝さんも一夏に同じ様にデザートを奢るように要求していた。

一夏も鈴さんに奢る事に対しては素直に認めしたが、篝さんに奢る事に対しては難色を示した。

その一夏の態度に対して篝さんは勢いだけで押し切ってしまった、最終的に一夏は二人にデザートを奢る事になってしまったようだ。

そんな事がありながら夕食を食べ終わると今日のデータ取りの件で一夏が山田先生に呼ばれて教員室に行ったので、その間にデータデスクの中身を確認しておく。

一夏の言ったとおりケースの中にメモが入っていたのでそれを広げてみると、そこにはこう書かれていた。

《久しぶりだな、アル。いきなりこのようなことをしてきて驚いているかもしれないが、お前に一つ頼みがある。一緒に入っているデータデスクをお前と同じ学年のある人物に渡してほしい。渡す相手の名前は更識簪。元々倉持技研で専用機を開発していた新型を使う予定だった日本の代表候補生の子だ。

織斑君が現れたことにより、倉持技研上層部からの通達で白式の開発を最優先で行うようになってしまい、私が開発主任をしていた彼女の専用機も未完成のままになってしまった。

そのことを彼女に伝えた時に、彼女はその未完成機を引き取り一人で完成させると言っていたが、ISを完成させるのは相応の時間がかかるし、私をはじめとした開発チーム一同も技術者として未完成のままの機体を使用者に預けてしまった事は非常に遺憾だ。

そこで倉持内で元々彼女の専用機開発に携わっていたメンバーの中で有志の技術者が集まり、各々暇を見ながら小規模ではあるが彼女の専用機である第三世代IS『打鉄式式』の開発を継続していた。詳しいスペックは部外者であるお前に伝える事は出来ないが、打鉄式式の最大威力の武装を含めて使用できるレベルまでは完成させてある。

当然データ上のみでの開発という事もあって実戦で使うには細かな調整が必要ではあるが、彼女の助けになるはずだ。部材さえあれ

ば作り上げる事ができるだろう。

データディスクにはこちらで作成した打鉄式式の開発データを入れてある。勝手な願いではあるが、これを彼女に渡してほしい。さすがにこの事は織斑君に言うわけにもいかず、直接の原因である彼に頼むことも出来ないため、連絡の取りやすいお前に頼むことになつてしまふ。

「このような役目を押し付けてしまふが、何とか彼女にこれを渡し、一言『すまなかつた』と伝えてほしい」

父より

(なるほど、確かにそういう事情なら一夏には話せん)

一夏の事だから、自分のせいで専用機が開発中止になったことを知れば、学園内の知名度を利用して彼女の手助けをしようとするのは目に見えている。親父も離婚する前に一夏とは何度か出会っているので、その性格を覚えていたのだろう。

それに親父は技術者としてかなりの腕を持っている上に義理堅いので、このデータディスク内には本当に第3世代ISの設計データが入っているのだろう。

何かあった時の為にデータの中身は見ずにPCにバックアップだけは取っておく。

「アル。山田先生が呼んでるから、教員室まで行ってくれ」  
「わかつた。すぐに行く」

それが終わるとちょうど一夏が部屋に戻ってきて、山田先生が俺を呼んでいることを伝えてくるので、俺は教員室に向かう。



山田先生からは倉持技研の人から何を受け取ったかを聞かれたので、親父が一夏にデータディスクを渡すところを見られていたのだろう。隠す理由はないので、山田先生に離婚した父親が倉持技研に所属している事、父から1年にいる更識簪さん宛てに彼女の専用機の開発データを渡すように頼まれた事を報告する。

山田先生も受け持ちクラスは違うとはいえ彼女の事は知っていたように、事情を知った後はあっさりと俺を開放してくれたし、更識さんの外見と普段整備室にいることも教えてくれた。

話が終わった頃には時間も遅くなっていたこともあって寝る事にしたが、明日は更識さんに親父からの届け物をするとしよう。

### 32 レースの結果と頼まれごと（後書き）

そんなわけでペアレースの結果はこんな形になりました。

気付いていた人はいるかもしれませんが、原作と比べると1ペア2名分出場者が多くなっていて、それが篤と相川さんです。

レース展開を補足説明しておく、鈴がセシリアに対して原作と同じ行動を取らなかったのはセシリアが一夏を好いていない事と、事情の説明の為にここまで来ているので踏み台にするのを躊躇していました。

今回は姉の楯無さんを差し置いて妹の簪が登場。更識姉妹は結構好きなきャラなので、早めに登場させようと思います。

その後で篠ノ之神社での夏祭りをやるつもりですので、少しだけお待ちください。

### 33 頼まれごとと意外な事実（前書き）

最新話できました。かんちゃん登場です。

### 33 頼まれごとと意外な事実

山田先生から更識さんの事を聞いた翌日。いつもどおり朝食を取るために食堂に向かっているときセシリアを見かけたので声をかける。

「セシリア。おはよう」

「おはようございます、アル。朝食ですか？」

「ああ。一緒に食べよう」

「賛成ですわ」

お互いに挨拶をしてから一緒に朝食を食べる事を提案するとセシリアも賛成してくれたので、二人で一緒に食堂に向かう。

夏期休暇の最中という事もあっていつもよりもまばらな食堂で注文した朝食を食べながら、俺はセシリアに一つ質問をする。

「そういえば、セシリアに俺の親父のことって話したことなかったよな？」

「ええ。わたくしは存じ上げませんが、突然どうなさいましたの？」

突然の事で少しだけいぶかしみながらそう聞いてくるセシリア。

「ああ。細かい経緯は省かせてもらうけど、俺の親父って今、倉持技研で技術者やってるから、昨日白式のデータ取りのために学園に来たみたいなんだ。それで、昨日一夏経由で親父が俺宛てにデータディスクを渡してきたんだよ」

「データディスクを、ですか？一体何のために？」

「なんでも俺と同年のある人物にそのデータディスクを渡してほしいみたいなんだ。どうして昨日直接その人に会って渡さなかった

か疑問ではあるが、今日はその人の所に行ってきたいんだ」

下手に鉢合わせして変な誤解を与えないようにする為、今の内にセシリアに事情を話しておく。

「……一つお聞きしたいのですが、その会いにいく人物というのはどういった方ですか？」

「俺も話をした事はないんだけど、名前は更識簪さん。山田先生から聞いた話だと日本の代表候補生で、4組の専用機持ちの人らしい」「専用機持ち、ですか？　今までアリーナ内でいつものメンバー以外の専用機を見た覚えはありませんが、どうということですか？」

今までの自主訓練の時間中にいつも専用機持ちメンバー以外の専用機が訓練に参加していれば自然と話題に上がるだろうが、今までそうだった事は一度もなかったのでセシリアの疑問はもっともだ。

「ああ、そのことか。」

なので俺はセシリアに更識さんの専用機の開発元が一夏の白式と同じ事、倉持技研上層部が時の人である男性IS操縦者である一夏の機体・白式の開発を最優先し、技術者を全てつぎ込んでいるため更識さんの専用機が未完成になってしまったこと、

そのことを彼女に伝えた時に未完成機を引き取り自分ひとりで完成させると言っていたこと、親父達はそれに納得出来ず小規模ながら彼女の専用機をデータ上だけながら開発を続け、稼動データを収集・その結果を適用した調整を施すレベルまで完成させたこと、

親父から俺にその開発データを更識さんに渡し、開発チームの人達の謝罪の言葉を伝えるように頼まれたことを説明する。

「　　そういうわけで、今日はその更識さんのところに行ってデー

夕を渡してこようと思ってるんだが……」

「そういった事情なら構いませんわ。ただ、その更識さんが普段どこにいるかは知っておりますの？」

「ああ。それは昨日山田先生に聞いてある。整備室にいるらしいから、後で行ってくるつもりだ」

「それならいいのですが。……何故、その事をわたくしに話しましたの？」

セシリアがそう聞いてくるので、正直に理由を話しておく。

「理由は簡単だよ。もしも更識さんと話しているところをセシリアに見られて変な誤解をさせたくないから、今の内に話しておくと思ったんだよ」

「そ、そう……ですか」

俺の理由を聞いて少しだけ顔を赤くするセシリア。

「そんなに時間は掛からないと思うから、それが終わったら昨日言われた特別カリキュラム一緒に済ませて、それからどこか出かけないか？」

「そうですね……いくつか必要な物もありますし、一緒に選んでいただけると助かりますわ」

「了解。終わったら部屋に迎えに行くからな」

「ええ。お待ちしていますわ」

そう言っただけで今日の予定を決めてから、食べかけの朝食をたいらげりお互いに部屋に戻る。

整備室はその名のとおりにISを整備・調整するための設備が用意された部屋で、学園内に6つ存在するアリーナにそれぞれ併設されていて、基本的には2年生から始まる「整備科」 ISの開発・研究・整備に関して学ぶためのクラスだ に所属する人達が利用する設備だ。

入室する場合は原則的にISスーツの着用が義務付けられている。これは整備の際にISの装着と解除を繰り返すことが多いのが理由だ。

1年生に整備科が存在しない理由は簡単で、「開発・研究・整備の本格的な方法を学ぶ前に1年間実機を動かす事でISがどういった代物かを理解すると同時に、パイロットの視点を知る為」だ。

そのため1年生の段階で整備実習の時以外で整備室に来る事があるとすれば、整備科の先輩に何かの用事があるか代表候補生が自機の整備をするために訪れる事が殆どだ。そのことを考えると今回はそのどちらにも当てはまらない珍しいケースだと思う。

(さて。山田先生から聞いた話だと、更識さんは普段第2整備室にいるらしいけど……)

ISスーツに着替えてから昨日山田先生から聞いた情報どおりに第2整備室へ行くと、そこでは外装を剥がしたISの前にあるデスクでメカニカル・キーボードを打ちながら空間投影ディスプレイを覗みつけている水色がかかった髪の子女生徒だけが作業をしていて、他には誰もいなかった。……彼女が更識さんだろうか？

「ちよつといいかな？」

「……………何？」

俺が声をかけると、一瞬だけ手を止めた後で俺を一瞥することなく用件を聞いてくる。

「初めまして。アルバート・ウィルソンだ。間違つてたらすまないんだが、更識<sup>むかしかんせし</sup>さんであつてるかな？」

「……………そうだけど、何か用？」

用件を聞いてくる更識さん。

「倉持技研の技術者から君宛てに渡してほしい物があるって言われて、それを持ってきたんだ。受け取ってくれ」

そう言いながら俺は更識さんにのいるデスクに近づき、デスクの上にデータディスクを置く。

俺の言葉を聞き終わると今までメカニカル・キーボードをタイプしていた更識さんの手が完全に止まり、俺の方に向き直りながらこう問いかけてきた。

「どういうこと？あなたは男性IS操縦者であり、イギリスの代表候補生。何故他国の代表候補生であるあなたが日本の企業からメッセンジャーみたいな事を頼まれるの？」

疑問を投げかけてくる更識さんに対して、俺は正直に答える。

「簡単だよ。倉持技研には俺の父親が勤務していて、倉持側がその伝手を利用してきたんだ」

「そう。……………もう一つ聞かせて。このデータディスクの中身は何？」



俺の返答に一応納得した更識さんがデータディスクを見ながら中に何のデータが入っているのかを聞いてくる。特に隠す理由もないので、一緒に事情も説明してしまおう。

「未完成状態の更識さんの専用機を完成させるための開発データだと聞いている。」

俺は親父が専用機を未完成のまま使用者である更識さんに預けてしまった事を悔やんでいる事。今まで暇を見て小規模ながら倉持技研内の有志の人員で更識さんの専用機開発を継続していた事。その結果武装を含めた設計などは完了し、稼動データを収集してその調整を施すレベルまでの開発を完了させた事を伝える。

「あと、親父をはじめとした人達が『すまなかつた』と伝えてくれて書いてあったよ。俺宛ての手紙ではあつたけど、更識さんにも読んでほしかったからケースの中に入れてある」

俺の説明を聞いた更識さんは驚いた表情を浮かべ、しばらくの間考え込む表情をしてから表情が心苦しそうなものになり、こう言うてきた。

「……………ごめん、なさい。……………それは、受け取れない……………」  
「……………理由を聞かせてもらっていいか？」

断られるとは思っていなかったもので、理由を聞いてみる。

「たしかに、これを受け取れば機体を完成させる事は出来る。……………でも、それじゃあ『あの人』に届かない。……………それは、ダメなの。……………だから、ごめんなさい」

そう言ってくる更識さんの表情は『断腸の思い』という言葉がぴったり当てはまる苦悶に歪んだものではあったが、どこか学園編入直後のラウラと似た眼差しをしているようにも思えた。

「……………わかった。何か事情がありそうだし、今日のところは帰らせてもらう。このデータディスクも預かっておくから、使いたくなかったら言ってくれ」

「……………わざわざ持ってきてくれたのに、ごめんなさい」

一言そう告げてからデータディスクを持って退出しようとする、小さな声で更識さんが謝ってくる。

「気にしなくていい。ここで会ったのも何かの縁だ。何か手伝える事があるかもしれないから、その時は遠慮なく言ってくれ」

「……………ありがとう」

「それじゃあな」

更識さんの感謝の言葉を聞き、一言挨拶をしてから整備室を去る。

(それにしてもまさか受け取り拒否されるとは予想外だ。親父にどう報告するかなあ……………。それに、最後に事情を説明してくれた時の更識さんの眼差しが微妙に編入直後のラウラっぽいのも気になるんだよなあ……………)

編入してきた直後のラウラは周囲の人物を拒絶する気配を放ちながら他者を見下し、一夏の撃破に固執していたのでその眼差しはかなりキツイものだったが、受け取りを拒否した理由を話している時の更識さんの眼差しがその時のラウラを思い出させる眼差しをしていた事が気になった。

「あれ？ ういるだ〜。こんなところでどうしたの〜？」

そんな事を考えていると布仏さんの独特の話し方で声をかけられ、俺は少し遅れてその質問に答える。

「……ああ、布仏さん。今まで整備室に行ってたんだよ。布仏さんこそISSスーツだけど、今から自主訓練？」

布仏さんは珍しくISSスーツ姿であり、今から自主訓練に行くのだろう。

「いやいや〜。わたしはこれから整備室に用があるのだ〜」

「……整備室に？ 何のために行くか聞かせてもらっていいか？」

専用機を持っていない布仏さんが整備室に何の用事があるのか気になったので、ダメ元で聞いてみる。

「ん〜……専用機を持っていない専用機持ちの子がいて、その子の機体構築のお手伝い……かな？」

いつものほほんとしている布仏さんらしくない眉間に皺を寄せた表情でしばらく考え込んだ後、そう答えてくれた。

「……もしかして、その子の名前って更識簪って名前か？」

「あれ？ なんでういるがかんちゃんのこと知ってるの？」

もしかやと思って布仏さんに確認してみると、逆に更識さんのことを知っているのか問い返されてしまった。

「かんちゃん？……ああ、簪だからかんちゃんか。実は親父が倉持技研の技術者なんだ。昨日一夏の機体のデータ取りに学園に来てただけど、その時に一夏経由で親父から更識さん宛てに頼まれごことをされて、ついさつき断られたところだよ。」

そういふ布仏さんは更識さんとどういふ関係なんだ？」

その問いに答えるついでに布仏さんと更識さんの関係を聞いてみたのだが、布仏さんから返ってきた答えは大変失礼ながら到底信じられないものだった。

「わたし？ わたしはかんちゃんの専属メイドだから、少しでもかんちゃんのお手伝いしようと思って〜」

「……………そう……………なんだ……………」

布仏さんと更識さんの関係を聞き、俺はかろうじてそう答えるしか出来なかった。

「むう、その顔だと信じてないなあ。こつ見えてもそれなりに優秀なんだよ〜」

「……………すまない。知り合いで似たような人を知ってるから、布仏さんとその人の雰囲気ギャップがすごくてね」

むくれた表情でジト目になりながら俺を睨みつけてくる布仏さんに対して謝り、理由であるチエルシーさんと布仏さんの雰囲気ギャップを説明する。

「……………もしかして、せつし〜と一緒に帰ってきた時に話してたメイドさん？」

「正解。その人とも顔見知りだから、どうしても布仏さんとの雰囲気の違いがあつてね……………」

「むう。それじゃあ仕方ないねえ」

布仏さんの確認を肯定すると、少し悔しそうにしながら納得してくれた。

「そついえばついる、倉持技研にいるお父さんからの頼まれごとつて何か聞いてもだいじょぶ？」

あまり他人にホイホイ言っていないことではないと思うが、布仏さんは更識さんの専属メイドのようなので何か知っているかもしれない。

「ああ。それは教えても構わないけど、俺からも更識さんに関すること布仏さんに質問がある。お互いに情報交換といこう」

「わかったけど、ちょっとだけ待ってて。かんちゃんに今日は手伝えないって言うてくるから」

「ああ。俺もセシリアと予定の調整があるから、それが終わったら合流する形でいいか？」

「おつけーなのだ。それじゃあ、お互い用事が終わったら学園の食堂近くにあるカフェで合流しよ〜ね」

「わかった。それじゃあ、また後で」

合流場所だけを決めて、お互いに待たせている人物のところに向かう。

俺は私服に着替えてから寮のセシリアの部屋に行き、セシリアに更識さんに会ってから布仏さんと別れるまでの全てを話し、この後も布仏さんとの話し合いがあるので出かけるのが遅くなり、最悪の場合今日はデートが出来なくなることの説明する。

「……そういうことなら仕方ありませんが、なるべく早く済ませてきてくださいね」

「ああ、勿論そのつもりだよ。俺だって長い時間セシリアと一緒にいたいからな」

少し慚然とした表情でそう言ってくるセシリアに対して自分の気持ちを正直に話し、一度だけキスをする。

「っ！？……不意打ちは卑怯ですわ、アル」

「……ゴホンツッ！二人とも、私がいることを忘れないでもらおうか」

そう言っつてセシリアも俺にキスをしてくるので、もう一度俺からキスをしよつとしたところで篝さんが一つ咳払いをしてからそう言っ  
てくる。

「……それじゃあセシリア、行ってくる」

「待っていますからね、アル」

ジト目で篝さんが俺達を睨みつけてくるのでキスは諦め、セシリアにそれだけ言っつてから布仏さんを待たせているカフェへ急いだ。

俺がカフェに着いた時には布仏さんは既に到着していたので、少しだけ待たせてしまったようだ。

「すまない。少しだけ待たせたか？」

「そんなに待ってないから、だいじょうぶ」

「そりゃよかった。それじゃあ、情報交換タイムにしよう」

適当な飲み物を注文し、お互いに知りたい情報を教えあう事にする。

「うん。わたしから聞かせてもらうけど、ういるのお父さんのかんちゃんに対する用事って、いったいなんなの？」

「俺が親父から頼まれたのは、簪さんの専用機の開発データを彼女に渡す事だよ」

「え？ でも、倉持技研って今はおりむーの機体開発で手いっぱいって聞いたんだけど？」

普段はのほほんとした表情をしている布仏さんだが、俺に質問してくる眼差しは非常に真剣なもので、どこかチエルシーさんと似通った雰囲気を感じられた。

「そのことが。親父からの手紙にはこう書いてあったよ。」

布仏さんに更識さんへ説明した時と同じ事を伝えたと、布仏さんはなんともいえない表情になってからこう言ってきた。

「……………ういるが聞きたいことって、かんちゃんがデータディスクを受け取らなかった理由？」

「それもないわけじゃないけど、一番知りたいのは更識さんが何に固執をしているか……………かな？」

俺がそう答えると布仏さんは驚いた表情になり、微苦笑を浮かべながらこう言ってきた。

「ういるはすごいね……。……………どうしてわかったか、教えてもらっていい？」

「別にいいけど、感覚的な話になるからな」

はじめに一言注釈をつけてから、更識さんと話していた時の感覚を説明する。

「更識さんの眼差しがどこか学園編入直後のラウラの眼差しと似てる部分があるように見えたんだ。ただ、更識さんは周囲を拒絶する気配をしてなかったし、誰かを見下す眼差しもしてなかった。

そうなるかと消去法で何かに固執してるんじゃないかと思ったんだよ。『目は口ほどにものを言う』ってやつさ」「なるほど」

俺の説明を聞いて納得した表情をする布仏さん。

「俺が聞きたいのはさっき言ったとおり『更識さんが固執しているもの』についてだ。更識さんの専属メイドなら、何か知ってるんじゃないか？」

そう言いながら布仏さんに質問すると、布仏さんはしばらく考え込んだ後で俺に一つの質問をしてきた。

「ん〜、教える前に一つ聞きたいんだけど、ういるって兄弟いる？」「いや、いないけど。いきなりどうしたんだ？」

俺が正直にそう答えると、布仏さんは少しだけ落ちこんだ表情になつてから俺に告げた。

「そつか。それじゃあちよつと分かり辛いかもしれないね。……………」

…かんちゃんには双子のお姉ちゃんが1人いるの」

「姉妹、か。…………俺が分かり辛いつてことは、更識さんとお姉さんとの関係に何か問題があるのか？」



「うん。かんちゃんのお姉ちゃんってかなり優秀なの。年齢としては私達の一つ上だけど国家代表になってるくらいだし、その専用機も自分で組み上げられるだけの知識もあるから」

布仏さんの言葉を聞いてから、適当にアタリをつけて聞いてみると肯定の言葉が返ってきた。しかも、更識さんのお姉さんはかなりすごい人物のようだ。

「文武両道を地で行く才女、か。更識さんも大変だろうな」

兄弟姉妹で弟・妹が兄・姉と似た才能があった場合、兄弟・姉妹を理由にお互いが比較されるのはよくあることだ。

「そう。ういるの予想どおり、かんちゃんって大変なの。周囲の私たちはどうしても『かんちゃん自身』じゃなくて『優秀なお姉ちゃん』の妹』として見ちゃうから、何をやってもお姉ちゃんの影が付きまどってくる」

そこまで言われれば、あとに続く言葉が予想できる。

「当然それが長く続けば更識さんはお姉さんに対するコンプレックスを抱え込んでいく。……そのコンプレックスを少しでも解消するために、更識さんは何かに固執してるってところか？」

「うん、それで兼ね正解かな？ かんちゃんはお姉ちゃんと同じように独力で自分の専用機を組み上げようとしてるの。だから、ういるが持ってきたデータディスクを受け取らなかった。データディスクの中を見たら、『誰かの力を借りた』事になっちゃうから。」

……多分、ういるがかんちゃんの眼差しに感じた固執はこれだと思うな」

自分の予想を言ってみると布仏さんからほぼ正解と返事をされ、同時に俺が感じたものの正体を教えてくれた。

(つまり、更識さんは自分のコンプレックスを少しでも解消するために独力での専用機構築に固執してるのか……厄介だな)

更識さんには力を貸すと言ったものの、事情を知ると下手に動けないのがわかってしまった。直接作業を手伝うのもアウト、必要な知識を教えるのもアウトではやれる事が殆どない。

そもそも専用機を独力で構築できるだけの知識を有している時点で、更識さんのお姉さんはISの開発者である束さんほどではないが十分に『天才』の範疇に入る人物だろう。

「なんか考えれば考えるほどドツボにハマリそうだ。下手に手伝う事もできないんじゃない」

「そうなんだよねえ。私も手伝おうとすると拒否されちゃうし、困っちゃうよ」

布仏さんがテーブルに突っ伏しながら困った顔をする姿を見ながら、俺は誰に言うでもなく独り言として愚痴をこぼす。

「つつーか、更識さんのお姉さんってどれだけすごいんだ？ 独力で専用機を構築したって事は、専用機のコセプトを考えるとところから初めて、機体の完成までをプロジェクトチームすら組まずに全部一人でやったって事だろ？」

どう考えても年単位での時間がかかるぞ。それをあつさりやれるって、下手すれば束さんと同レベルの天才じゃないか」

「あれ？ アルバート君。珍しいわね、セシリアちゃん連れてないって。もしかして浮気？」

そうしているとまわす先輩が俺に話しかけてくると同時に、非常に不本意な事を言ってきた。

「先輩、いい加減な事を言わないで下さい。俺はセシリア一筋だし、布仏さんと一緒にいるのは同級生について少し話を聞いているだけです」

「そうなの？ 今、更識って聞こえたから、てっきり上級生のこと話してるのかと思ったんだけど」

「へ？ 上級生にも更識って苗字の先輩がいるんですか？」

先輩の発言はかなり意外なもので、『上級生の更識先輩』について質問してみる。

「ええ、更識楯無。この学園の生徒会長なんだから、覚えておいた方がいいわよ？ 1年に自分の妹がいるみたいだから、かなり頑張ってるみたいだし。あと専用機って言ってたけど、たっちゃんの専用機がそんなに気になる？」

たっちゃんってのは例によってあだ名だろう。そして、どうやらその楯無先輩が更識さんのお姉さんで間違いないようだ。

「そりゃ知れるものなら知りたいですけど、完全に独力で構築された専用機の情報ってそんなに簡単に手に入るものなんですか？」

「知ってるも何も、私、たっちゃんが専用機造る時に色々アドバイスしたから、資料がなくてもたっちゃんの専用機の事ならある程度は知ってるわよ？」

「それ、本当ですか？ 俺が聞いた話だと自分の専用機を独力で構築したって聞いたんですけど」

黛先輩の言葉が信じられなかったので自分が聞いた話を先輩に伝えると、意外な答えが返ってきた。

「たしかにたつちゃんは実際に作業する時は人手がいる時以外1人で作業してたけど、細かなパーツや開発レベルの話になると私や布仏先輩に色々アドバイス受けてたわ。それに、専用機自体も7割は完成してたみたいだし」

「つまり、楯無先輩は専用機の作成作業自体は1人でやっていただけ、開発レベルでは1人でやっていたわけではないんですね」

「ええ。それはよくアドバイスをしていた私と布仏先輩が証明してあげるわ。何なら、その時の写真見せてあげようか？」

黛先輩のその言葉を聞き、俺はデータディスクを更識さんに渡す方法を思いつく。

「いえ、それはまた今度の機会にさせてください。色々教えていただき、ありがとうございます」

「先輩、ありがとう」

布仏さんも黛先輩の言葉を聞いて何かを思いついたようで、俺達は席を立つてすぐに会計を済ませる。布仏さんは更識さんがいるであろう第2整備室へ行くために走りだったので、俺はそれに追走しながら布仏さんに話しかける。

「布仏さん。更識さんのところに行くなら、俺が行くまで整備室前で待っていてくれないか？」

「でも、今聞いたこと教えてあげればかんちゃんもお手伝いさせてくれるかもしれないし……」

そう言ってくる布仏さんには賛成したいところだが、話し方次第で

はこじれる可能性もある。

「確かにそうだけど、話し方を間違えると更識さん1人で機体を構築しようとするのを助長する可能性もあるから、俺が行くまで待つてくれ」

「じゃあ、ういるはどうするつもりなの？」

布仏さんが走るスピードを緩めながらそう聞いてくるので、俺は自分の考えを話す。

「俺はまず篝さんのところに行つて、協力を仰いでくる。更識さんも自分と似た境遇の篝さんの話なら聞いてくれる可能性は高いと思うから」

「たしかに、似た境遇の人と話すのはいいかもしれないね」

「だろ？ だから、俺が篝さんを連れて行くまでは整備室前で待っているか、俺達が到着するまで時間を稼いでいてくれ」

「そういうことなら了解だよ」

「ああ。頼むよ、布仏さん。なるべく早く篝さんを連れて整備室に向かうようにするから」

「了解なのだ」

布仏さんが了承してくれたので、俺は篝さんに更識さんを説得する協力を仰ぐために寮へ向かうため、再び布仏さんと別れて行動を開始する事にした。

### 33 頼まれごとと意外な事実（後書き）

そんなわけで簪登場回のはずがのほんさんメイン回になってしまいました。

それに今回で終わらせるはずだったけど收拾つけきれなかったし…

…多分次回でケリをつけられると思いますが……。

次回は簪と箒の会話がメインになると思います。

### 34 似たもの同士(前書き)

最新話、何とか1週間で出来ました。  
かんちゃん絡みはなんとか今回で一段落させることが出来ました。

### 34 似たもの同士

布仏さんと別行動を開始し、俺は寮へ全力疾走する。

寮内に入った後は他の人たちの迷惑にならないようにするのと呼吸を整えるために歩くスピードを落とし、呼吸が完全に整ってからセシリアたちの部屋の扉をノックする。

コンコン

「どちらさまでしょうか？」

「セシリア。俺だけど入っていいか？」

「ええ、どうぞ」

「失礼しまーす」

入室許可が出たので中に入ると、部屋の中いたのはセシリアだけで、  
篤さんは外出中のようなだった。

「あれ？ 篤さんはどこ行ったんだ？」

「篤さんなら剣道部の部長さんに呼び出されていきましたが、すぐ  
に戻ってくると思いますわ。……いったいどうしましたの？」

「ああ。さっき言った更識さんについて追加で情報入手したから、  
データディスク受け取ってもらえるように説得しようと思ったんだ。  
ただ、俺1人だと辛いかもしいれないから篤さんに協力を仰ぎに来た  
んだよ」

「……何故篤さんなのか、理由を聞いてもよろしくて？」



不機嫌な表情を隠そうともせず、セシリアが質問をしてくる。

「その前に謝らせてくれ。……たびたび不機嫌なマネをさせてすまない。セシリアは他の女子生徒のところに行ってフラフラしてると思つかもしれないが、今日の行動はあくまでも頼まれごとをこなす上で必要なんだ」

俺はその質問に答える前に一言告げてからセシリアに謝り、頭を下げる。正直に言えば俺もセシリアと一緒に過ごす時間を増やしたいが、その前にこなすべき事を全てこなし、邪魔が入ることなくセシリアと一緒にいたいだけだ。

「……他の人から頼まれたことは全力でやり通すその気概はわたくしも好ましく思っている部分ですから、そのことに対する不満はありません。……ただ、アルを占有できないのが悔しいだけですわ」「俺も出来る事なら一日中セシリアと一緒にいたいと思ってるさ。ただ、今日は少しだけ我慢してくれ。これが終わったら一緒にいるから……な？」

「……ええ、待ってますわ」

そう言っただけでセシリアが目を閉じるので、俺はその期待に答えるようにキスをしようとする。

「……アルもセシリアも、イチャつくなら他の場所でやってくれ」  
だが、あと少しで唇が触れ合うところで篤さんが部屋に戻ってきて、俺達に一言忠告をしてくる。

「「っ!?!? 篤さん!?!?」」

まるで気配を感じなかったこともあり、俺もセシリアも慌てて離れる。

「いつ、いつ戻ってきましたの!?!」

「ついさっきだ。ノックもしたし、外から声もかけたんだが。……部屋の鍵が開いたままで何の反応もなかったからもしやとは思ったが、やはりイチャついていたのか」

半ば呆れながらそう言ってくる篤さん。全く気付かなかった俺とセシリアは篤さんのその言葉に対して反論できなかった。

「……で? 何故アルがまた来ているんだ? 用事が終わってセシリアとイチャつく為に来たなら、別の場所に行ってくれると嬉しいのだから?」

俺達をジト目で見ながらそう言ってくる篤さんに対して、俺は自分の目的を話す。

「実は用事はまだ終わってなくて、それ絡みで篤さんに手伝ってほしいことがあるんだ」

「私にか? 一体何を手伝えというんだ?」

篤さんがどういった内容なのかを聞いてくるので、俺は篤さんに質問をする。

「その前に篤さんに一つ聞きたいんだけど、さっき俺が部屋に来たときにセシリアと話をしていた時の内容って聞いてた?」

「いや、聞いていない。……そもそもあの時は私にとっては関係のない事だったし、他人の話を盗み聞きする趣味もないからな」

「そっか。それじゃあ最初から説明するな。実は」

俺は昨日親父が一夏經由で俺にデータディスクを渡してきた事から始まり、更識さんについての説明をすると同時に、更識さんの専用機が一夏の影響をモロに受けてしまった為に未完成な事、更識さんにお姉さんがいる事、そのお姉さんが専用機持ちで、開発などでは他の人の手を借りたとは言え自分の専用機を独力で専用機を構築した事、

それだけ優秀なお姉さんが身近にいるため、更識さんはお姉さんに対してコンプレックスを抱えている事、少しでもコンプレックスを解消する為に更識さんはお姉さんと同じ様に未完成の機体を独力で完成させようとしている事を話す。

「。それで、偶然とはいえ多少境遇の似ている筈さんに更識さんの説得を手伝ってほしいんだ。……頼めるか？」

「……事情は理解した。確かに話を聞いてみると、私と更識に共通する部分がある事は認めよう。……だが、私はあまり他人と話しをするのは得意ではない。はっきり言ってアルが期待するとおりの説得が出来るとは到底思えん。そこはどうするつもりだ？」

協力要請を受諾してくれた筈さんだが、自分が話し上手でない事と思っているようで、俺の期待に添えることが出来るかわからないと言ってくる。

「そこは俺と布仏さんで何とかするさ。……とにかく、更識さんには自分と似た境遇でも違う選択をした人がいるって事を知ってもらいたいんだ」

更識さんと筈さんは、多少経緯は違えど『優秀な姉を苦手としている妹』という共通点がある。もっとも、筈さんは自らの専用機である紅椿関係で実姉の束さんを頼っている部分で違いはあるが、そこ

は話し方次第で何とかなる範囲だろう。

「わかった。すぐに向かうのか？」

「ああ。布仏さんを待たせてるから、すぐに向かおう。……場所が整備室だから、ISスーツだけ準備しておいてくれ」

布仏さんを待たせすぎたことで俺達に向かうまでの時間を稼ぎきれなくなってしまう可能性もないわけではないので、篤さんが準備できるように一度退出する。

「……アル、私も一緒に一緒にさせていただいてよろしいですか？ 先の説明を聞く限り、件の更識さんくだんとわたくしにもある程度共通点があるようですから」

だが、部屋の扉に手をかけたところでセシリアがそう言うってくる。

「……そうだな。確かに更識さんとセシリアにも共通点がある。一緒に来てくれるとありがたい」

確かにセシリアと更識さんには『幼馴染の専属メイドを持つ代表候補生のお嬢様』という点で共通点がある。話のバリエーションが増えればそれだけ説得しやすくなる可能性が高くなるので、セシリアにもついて来てもらう事にする。

「了解いたしましたわ。篤さん、早速準備をいたしましょう」

「ああ。そうだな、セシリア」

二人がISスーツの準備を始めようとするので、俺は合流場所を伝えておく。

「俺は先に更衣室行って着替えてるから、準備が出来たら第2整備室前で合流しよう」

「わかった。第2整備室だな」

「わかりましたわ。すぐに準備を終えて向かいます」

二人のその言葉を聞いた後、俺は今日男子が使える更衣室のある第3アリーナに走って向かい、急いでISスーツに着替えてから第2整備室まで向かうと、既にセシリアと篤さんが待っていた。

「二人とも待たせた。……一つ聞くが、二人が来る前に布仏さんはいたか？」

「いえ、おりませんでした。……布仏さんも説得に参加しますの？」

二人に俺が来る前に布仏さんがいたかどうかを確認すると既に布仏さんは居なかつたらしいので、中に入って時間稼ぎをしているのだろう。

「ああ。……ただ、頼んであるのは俺達が来るまでの時間稼ぎだから、もう中で更識さんと話してるんだと思う」

「そういうことなら早く入ったほうがいいな。行こう」

そう言いながら篤さんが整備室内に入っただけと整備室の扉の閉スイッチに触れようとするので、俺は篤さんに声をかける。

「待ってくれ篤さん、俺が先に入るよ。3人一緒に行動すると更識さんを警戒させる可能性もあるし」

「む……確かにその方がいいかもしれんな」

「そのとおりですね。……ですがその場合、どうやってわたくし達を説得に参加させるつもりですか？」

開閉スイッチに手が伸びた体勢のまま篤さんが同意し、セシリアも賛成ではあるようだが、どうやって自分たちを説得に参加させるのかを聞いてくる。

「まずは俺と布仏さんで更識さんと話をして、その後二人を呼ぶよ。そうした方が更識さんをいたずらに警戒させないと思うから」

「……そういうことならわかりましたわ」

セシリアも俺の説明を聞いて納得してくれたようなので、扉の開閉スイッチを押す。

「二人とも少しだけ待っててくれ。準備が出来たら呼ぶから」

「わかった」

「了解いたしましたわ」

篤さんとセシリアの了承の言葉を聞きながら、整備室内に入る。

「かんちゃくん。つぎはなにを手伝えばいい？」

「ほ、本音……それ以上、いじらないで……」

先程更識さんがいたあたりに行くと、布仏さんが更識さんの作業を半ば無理矢理手伝い、更識さんが若干涙目になりながら布仏さんを止める光景が繰り広げられていた。……布仏さん、確かに俺は時間稼ぎを頼みはしたが、その行動はマナー違反じゃないか？

「……更識さん、休憩がてら少し話をしないか？」

なるべく自然になるよう心がけながら、更識さんに声をかける。

「あつ……う、うん。……ほ、本音も休憩にしよう」

更識さんは俺の言葉がよほど助かったのか、あからさまに安堵の表情をしながら布仏さんに声をかける。

「りょうかゝい。かんちゃん」

上半身付近の装甲をいじっていた布仏さんも手を休めて俺達の方に向かってくる。それから3人一緒に整備室内の作業用ブースから少し離れた入り口近くに移動する。

「なあ、更識さん。……お姉さんの事、そんなに気になるのか？」  
「つつ！！？？」

俺がそう問いかけてみると、更識さんは驚愕の表情を浮かべながら俺を見てきた。

「な、なんの……こと？」  
「隠さなくていい。さっき話をした後、布仏さんから聞き出した」  
「本音！？」

更識さんは驚きの表情になり、席から立ち上がりながら布仏さんを睨みつけ、その眼差しで布仏さんに何かを問いかけていた。

「……あまり布仏さんを責めないでやってくれ。さっきデータディスクを渡そうとした時の更識さんの眼差しが気になったから、半ば無理矢理聞き出したんだ」

布仏さんはあくまで善意で行動してくれた結果なので、フォローを入れておく。

「そういうことならいいけど……勝手に話さないで、本音」

「ごめんなさい、かんちゃん」

それを聞いて更識さんも一応納得した表情を見せたが、布仏さんに一言注意しておくのも忘れていなかった。

布仏さんも素直に謝り、その言葉を聞いて一つため息をついてから再び席についた。

「……それで、何が言いたいの？」

無意識の内に先程と比較して話し方がつれなくなってきた更識さん。

「俺からはないわけじゃないけど、まずは更識さんに紹介したい人が二人いるんだ」

「紹介？……誰？」

俺の返事が意外だったのか、更識さんは少しだけいぶかしんだ表情になる。

「布仏さんから話を聞きだした後、俺なりに更識さんと共通点があると思っただよ。……篝さん、セシリア、入ってくれ」

そう言いながら俺は立ち上がって扉のスイッチを押し、入り口の扉を開けてセシリアと篝さんに声をかける。

「失礼いたしますわ」

「失礼する」



「更識さんは初めて会うよな？ セシリア・オルコットと篠ノ之箒。二人とも経歴的には更識さんと共通点がある」  
「経歴に、共通点？」

俺がセシリアと箒さんを紹介すると、更識さんは小首をかしげる。

「箒さんは苗字でわかるだろうけど篠ノ之東博士の実妹だから『優秀な姉を持つ妹』の部分が更識さんとの共通点だし、セシリアも『幼馴染のメイドがいる代表候補生』の部分が更識さんとの共通点になる。境遇が似てる人と話すのは結構気が楽になると思ったんだが……」

「篠ノ之箒だ。そちらの事情はアルから聞いている。似た者同士仲良くしよう、更識」

「セシリア・オルコットですわ。よろしくお願いいたしますわね、更識さん」

「……………よろしく」

箒さんとセシリアが話しかけると、更識さんは若干警戒を残しながら、二人に挨拶をした。

「しかし、話には聞いていたが更識はすごいな。未完成とは言え、ISを自力で構築出来るとは畏れ入る」

箒さんは作業用ブース内の整備ハンガーにセットされたIS 未完成のため一部の外装がセットされておらず、所々からケーブル類を覗かせている状態の機体 を見ながら、感嘆の声を漏らす。：  
俺も更識さんの機体『打鉄式』が更識さんの手に渡った時にどの程度完成していたかは知らないが、外装だけとはいえ1人でここまで仕上げたのは十分にすごい事だと思う。

「そんなことない。……時間をかければ、出来る事」

だが、更識さんは自分がどれだけすごい事をやっているかを自覚していないようで、謙遜している状態だった。

「そうだろうか？ 少なくとも私には無理だ。それに、ここまで造ったのなら完成までは後一步なのだろう？」

「……まだ外装部分の製作をしている状態だし、武装は全くの手付かず。……それに、稼動データも取れてないから…… 実戦参加はまだまだ先」

篤さんが完成まであと一步と言うと、更識さんは冷静に実戦参加がまだ先になることを告げる。

「それでも、ここまでほぼお一人でこの機体を造り上げたのでしょうか？ それは十分に素晴らしい事だと思います。何方どなたと比較しているかは知りませんが、謙遜のしすぎは相手に不快感を与えてよ、更識さん」

「……………ありがとう」

だが、その努力を認めるセシリアの発言を聞くと、更識さんは顔を赤くしながらうつむいてセシリアにお礼を言った。

「そういえば更識さん。未完成の機体を引き取ったつてのは親父から聞いたんだけど、その時の機体完成度つてどれくらいだったんだ？」

話が一段落ついたようなので、一夏の影響を受けて専用機を独力で構築しようとした時にどれ位機体が完成していたのかを更識さんに聞いてみる。

「え？ えつと……………機体の基礎フレームが出来てただけで、外装も全く手付かずだったから……………多く見積もっても1割から2割の間くらいだと思う」

俺の質問に対して更識さんは考え込む仕草をして機体を引き取った当初の事を思い出しながらそう返事をしてくれた。

「は？……………つまり、半年近くでここまで完成させたってこと？」

その返事を聞いて俺は呆然とさせられた。俺と一夏の事が初めて二ユースで報道されたのが2月の下旬なので、約半年という短期間

1人で作業を続けていた事を考えればこういっていいだろう

で更識さんは外装の殆どを仕上げたらしい。……………それは十分に優秀というか、『天才』の領域に足を突っ込んでると思うのは俺だけか？

「なん……………だと……………」

「半年で……………ここまで!？」

更識さんのその返答は篤さんとセシリアにとっても予想外で、二人とも驚愕の表情で固まる。

「でも、外装の組み立てなんて……………規模の大きなプラモデル。それに半年もかけてるようじゃ、遅い」

「……………更識さん。一つお聞きしますが、外装の製作をしている間に武装の試作などは行ったのですか？」

「当然。外装の組み立ての間にデータを取るのに必要な分は作ったから、外装が済めばすぐにでも試せる」

つまり、外装の製作と同時進行で作業を進めていたことになる。…

…何故そこまで可能な知識と技術力を有しているのに、自信を持っていないかが俺にはよくわからなかった。

「……私からも、質問させて」

「ん？ どうしたんだ？」

俺がその事に対して疑問を感じていると、更識さんから俺達に話しかけてくる。

「篠ノ之さん。あなたはかなり特殊な理由で専用機持ちになったのは知ってる。でも、どうしてお姉さんに頼ったの？……自分で機体を構築しようとは思わなかったの？」

それは理由の違いはあれど『優秀な姉を持つ妹』だから生じた疑問なのだろう。片や姉の力を頼り、片や姉の影を追いかけて同じ道を走っているからこそ『姉の力を素直に頼った』篤さんが信じられないのかもしれない。

「そう、だな。……それらしい理由をつけるなら、『手っ取り早く自分の力が欲しかったから』だろう。私には更識ほどの技術力と知識はない。ここに入学したのも『篠ノ之束の妹だから何かあるだろう』という政府の思惑が強い。元々ISはあまり好きではなかったから専用機を自力で構築できるだけの知識など持っていないし、あるとすれば剣の腕だけで、それすらもまだ未熟だ。

それでいて幼馴染の一夏とアルは時の人である男性IS操縦者であり、専用機という『力』を持っていたからな。正直言って二人が羨ましかったし、自分に『力』がないのが悔しかった。だから、手っ取り早く『力』が欲しくてあの人に頼った。我ながら現金なものさ。普段は苦手としているくせに、いざとなったら真っ先に頼っているのだからな。……理由としてはこんなものか」

そう言つて更識さんの質問に答える篤さんの表情はどこか自嘲している様に見えた。

「私からすれば更識は尊敬に値する人物だと思う。私と違って自らの実力だけで専用機持ちである代表候補生となり、理由はどうかあれ、自らの『力』だけでここまで専用機を造り上げられるだけの知識と技術力を持っている。はつきり言つて羨ましいよ。アルからは『優秀な姉を持つ妹』が共通点とは聞いていたが、私と更識では更識の方がよっぽどすごいと思うぞ」

「そ、そんなに褒められても………私は、そんなにすごくない」  
篤さんが素直に更識さんを賞賛すると、更識さんは顔を真っ赤にしながらうつむいてしまった。

「自分に持っていないものを持つ人物は自分より優秀に見える。……たしか、日本の諺で『隣の芝生は青い』でしたか？ 更識さん、あなたはお姉さんと比較するまでもなく十分に優秀ですわ。同学年の専用機持ちの中でも、『自らの機体に対する理解度』という点で比較すれば確実にあなたがトップです。それも、他の方より一歩や二歩では足りないほどに。そこは素直に誇つていいと思いますわ」  
「それに、元の機体完成度の事を考慮すると、ISに関する知識量と技術力は既にお姉さんを超えてる可能性もあるしな」

「え？ どういう……こと？」  
セシリアも更識さんに賞賛の言葉を送り、更識さんが既にお姉さんを超えている可能性を示唆すると、更識さんの表情が愕然とした物になる。

「さつき新聞部の黛先輩から聞いた話なんだけど、更識さんのお姉

さんの機体は元々7割方は完成してたらしい。それに、実際の製作作業は基本的に一人でやってた様だけど人の手が欲しい時には借りてみたいだし、開発部分になると先輩や布仏さんのお姉さんに色々アドバイス聞いてみたいだしな。

だから、『元々の機体完成度がお姉さんよりも圧倒的に低く、今まで開発部分も含めた作業を1人で行ってた更識さんの方が知識と技術力が高くなってる』可能性があるって

「そんなことない!!」

俺の発言を遮るようにしながら、否定の言葉を叫ぶ更識さん。その表情はありえない存在を見た直後のように恐慌状態となっているだけでなく、快適に作業をするために適温に保たれているはずの整備室内にも拘らず身体を大きく震わせながら自分の身体を抱いていた。

「かんちゃん!!」

そんな更識さんを布仏さんが抱きかかえ、子供をあやすように背中をさする。

「ねえ、かんちゃん。かんちゃんが1人で専用機を造ろうとしたのはどうしてだっけ？」

「え？ それ、は……」

慈母の様に優しく更識さんに語り掛ける布仏さんの姿はどこか身長よりも大きく見え、俺達に向けられている眼差しは自分に任せてくれと語っていた。

「お姉ちゃんより早く専用機を完成させて、見返したかった？ 私のほうがすごいって、自慢したかった？」

「……違う。……私は、ただ姉さんに認めてもらいたかった。……」

だから、1人でずーっと頑張ってきた」

「たしかに、1人でお姉ちゃんと同じ事をして、しかもお姉ちゃんより早かったらお姉ちゃんは『頑張った』って言って認めてくれるかもしれない。それは私も思うよ？ でも、それって悲しい事だと思う。友達も作らず、1人でずーっと開発作業をしてたら色々と誤解されちゃうかもしれないし、その事に気付かずに作業を続けてたらほんとに一人になっちゃう。それじゃあ悲しすぎるよ。」

それなら、いろんな人から話を聞いて、その人達から聞いたことで機体を造って、それで完成させよう？ かんちゃんは自分1人の力じゃないって思うかもしれないけど、みんなから貰った力で造った機体を見せたほうが、お姉ちゃんも『かんちゃんにはしつかり友達がいる』ってわかってくれると思う。それに、かんちゃんにもいっぱい友達が出来る。それって、いいことだと思っよ？」

布仏さんの言葉が終わると、更識さんは顔を上げて布仏さんの顔を見る。

「それに、今ならうにいるもいる、せつし〜もいる、篠ノ之さんもいる、もちろん私もいる。みんなで機体を造って、それをお姉ちゃんに見せてあげよ？」

「そうそう。今から全員でやれば来月末のキャノンボール・ファストにも間に合うだろ。幸い1年のレースは2年のレースの後だから、2年の先輩達も1年生のレースはまず間違いない観戦する。お姉さんに自分の専用機の活躍を見せつけるチャンスじゃないか？」

俺がそう言うと、更識さんは何かに気付いた表情になって俺を見る。

「更識さん、人間1人で出来る事には限りがありますわ。例え1人では無理なことでも、複数の力を合わせれば簡単に出来る事もあると思いますわ」

「私としても、自分と似た境遇の人物が苦しんでいるのは忍びないからな。手伝える事があるならば力になるぞ」  
「会ったばかりなのに……いいの？」

セシリアと篤さんがそう言うと、更識さんは恐る恐る二人にそう質問した。

「いいものにも、それだけの技術力と知識は見習わせていただきたいと思うほどですわ」

「私もセシリアと同意見だ。それだけの技術力と知識は見習うべきところだと思う。微力ながら力も貸そう」

だが、更識さんの危惧と反するように2人はあっさりとそう言った。

「それに、更識さんの事を心配してるのは俺達だけじゃないぜ？」

そう言いながら、俺は親父からのデータディスクを更識さんに差し出す。

「倉持の技術者の人達も心配してるんだ。……今度は受け取ってくれるだろ？」

「……うん。それと、お願いがある」

データディスクを手に取りながら、更識さんがそう言うてくる。

「……聞くまでもないと思うが、内容は？」

「機体の製作を、一緒に手伝って。オルコットさんも、篠ノ之さんも手伝ってほしい。……ダメ？」

要件を聞くと、案の定機体製作の手伝いの申し出だった。



「俺は手伝わせてもらう。半年でここまで造ったその技術力は多少なりとも盗ませてもらいたいしな」

「わたくしもお手伝いさせていただきますわ。ほぼ1から機体を構築した知識を学ばせていただきたくたいですし」

「私も微力ながら手伝わせてもらおう。知識はアルとセシリアには及ばないかもしれないが、力仕事は任せてくれ」

「当然私も手伝うよ」

「……よろしく、お願いします」

「『了解！』」「『』」

その一言を了承しながら、俺達4人はは更識さんの専用機『打鉄式』の製作に携わる事になった。

### 34 似たもの同士（後書き）

そんなわけで、この作品では一夏と簪の恋愛系フラグが折れました。原作だと打鉄式式が登場した時には外装は全て出来上がっていました。だが、拙作では1ヶ月近く他のキャラとの接触が早いこともあってそれすら未完成です。

原作だと倉持技研が簪に専用機を引き渡す際の完成度が描写されていなかった。こちらで勝手に決めました。

今回は夏祭りのお話になります。原作ではサブキャラのあの兄妹がやっと登場します。

### 35 夏祭りへ行こう(前書き)

夏祭り開始です。本来なら1話で終わらせるはずが長くなったので二話構成に。

五反田兄妹の登場も次回になります。

### 35 夏祭りへ行こう

俺・セシリア・篝さんの3人が簪さん 本人からファーストネームで呼んでいいと言われたので、名前で呼ぶようにした の専用機『打鉄式』の製作に関わる様になつてから数日が経過していき、あつという間に日付は8月中旬、日本では先祖の霊を供養するお盆の週となつた。

今まで1人で専用機を開発してただけあつて簪さんのISに関する知識量と技術力は目を見張る物があり、その中でもISの細かな設定に関係する話になるとそれが顕著に現れた。

篝さんは完全に話の内容についていけなくなり、セシリアも理解できて3割から5割程度、元々ISの研究職に就こうと思つて色々調べていた俺でも所々理解できない部分がある位高度な内容で、完全についていけるのは布仏さんだけだった。

その事は俺達3人を驚かせてくれたが、理由を聞くとあっさり納得できた。布仏さんは元々整備科志望らしいし、簪さんの役に立ちたいと思つて色々勉強していたらしい。

当然俺達にもそれぞれの予定があるので、毎日簪さんの機体構築の手伝いが出るわけではない。それでも1人で作業をしている時より作業効率は上がっているらしく、予想ではこのままのペースで作業を進めることが出来れば確実にキャンボール・ファストに間に合わせる事が出来るようだ。

その日は週末で、セシリアと篝さんは部活があるため作業に参加で

きず、俺も自分の訓練で少し遅れて作業に加わり、整備室が閉まる夕方5時近くまで作業を続けてから部屋に戻ってシャワーを浴びた後夕食を食べ終わり、部屋に戻ってきてからの一夏の発言が発端だった。

「そつだ。アル、今年は祭りどうするんだ？ やっぱりセシリアさんと一緒に行くのか？」

「祭り？……………もしかして、篠ノ之神社でやってたアレか？」

お盆の週末は毎年篠ノ之神社で夏祭りの花火大会が開催されており、俺も両親が離婚して転校する前は毎年顔を出していた。

「そつ、ソレ。俺は明日予定もないし、一人で部屋にいるくらいなら行くと思ってるんだけど」

どうやら一夏は元々行く気だったようだ。

「そつだなあ…………俺もセシリア誘って、久しぶりに行くか。一夏は誰か誘わないのか？」

「俺か？ 中学時代の同級生は多分予定組んでるだろうし、ラウラやシャルを誘っても受けてくれるかわからんしなあ…………」

相変わらずの鈍感さだった。ラウラやシャルロットを誘ってやれば、1も2もなく受けるだろうに。

「それならラウラとシャルロットの2人に花火に興味があるか聞いてくればいいだろ。花火に興味があるようだったらそのまま誘えばいいし、無いなら単なる話の種扱えばいいだけだ。違うか？」

一夏はラウラとシャルロットが自分をどう思っているか気付いてい

ないので、少しばかり2人を援護する事にしよう。

「あー、そうだな。聞くだけ聞いてみるか」

「そうしとけ。俺はセシリア達の部屋に行ってくるから、一夏もラウラ達に花火に興味があるか聞いてこいよ」

「ああ、そうするよ」

そう言っで一夏はラウラとシャルロットの部屋に向かっていったので、俺もセシリア達の部屋に行っ、明日の夕方から夜の予定を聞いてくることにしよう。

コンコン

普段と同じ様にセシリアの部屋の前に移動し、扉をノックする。

「はい。何方どなたでしょうか？」

「セシリア。アルバートだけど、入っていいか？」

「ええ。どうぞ」

「失礼しまーす」

許可が出たので中に入ると、この時間としては珍しく部屋の中にはセシリア1人だけだった。

「こんな時間にどういたしましたの？」

「ああ。実は明日近くで花火大会があるみたいなんだ。もし予定が空いてるようなら、一緒に行かないか？」

「……一緒に行くのは構わないのですが、服がありませんわ」

「服？ 別に今着てるようなカジュアルな服装でいいと思うけど？」

今のセシリアはTシャツにミニスカート姿で、普段の格好と比較するとかなりラフなものだ。

「そうなのですか？ 日本で花火を見る時は浴衣姿で見るのが礼儀と聞いたのですが……」

「それは微妙に間違い。確かに花火大会の時って女の人は大抵浴衣だけど、持ってなかったら普通の服装でいいと思うぞ。俺が子供の頃の話になるけど、女の人でも浴衣じゃなくてカジュアル系の洋服姿の人も多少はいたし」

流石に今までデートに行った時のような気合が入った服装だと場違い感がすごい事になるけど、それ以外の服装ならそこまで場違いにはならないだろう。

「そういうことでしたら、遠慮なく一緒に過ごさせていただきますわ」

「おう。それで、待ち合わせどうする？ 日本の夏祭りがどういったものかをじっくり味わいたいなら、夕方前に到着していた方がいいと思うけど」

「日本のお祭りがどういったものかは存じ上げませんので、出発の時間などはアルにお任せいたしますわ」

「ああ。そうだな……セシリアって日本風の舞は興味あるか？」

確か篠ノ之神社では夕方近くに舞があったはずなので、それを見るかどうかで出発時刻を調整する必要がある。

「舞？……日本舞踊ですか？」

「んー、それとはちよつと違うかな？ 俺も詳しくは覚えてないんだが、行き先の神社に伝わる舞が夕方頃にやってたはずだ。それを見るようなら少し早めに出発した方がいいと思う。……どうする？」

何せ6年近く昔の事だから記憶が曖昧だが、後で一夏に舞の始まる時間を確認しておけばいいだろう。

「そういつた純日本風の物を見ることが出来る機会は早々無いと思えますので、早めの出発でお願いしますわ」

セシリアは俺の言葉を聞いてすぐにそう返事をしてくる。……確か  
に希少価値と言う点ではかなり高いだろう。

「わかった。後で一夏に詳しい時間聞いておく事にするよ」

「では、詳しい時間が判明したらまた教えてくださいね」

「了解。一夏から時間聞いたらメールする」

「ええ。待っていますからね」

そうしてどちらから言うでもなくお互いにキスをしてから、気になったことをセシリアに聞いてみる。

「そういえば、篝さんはどうしたんだ？ いつもこの時間なら部屋に  
にいると思っただけだ」

「篝さんならアルが来る前に携帯電話を操作していましたから、ど  
こかに電話をかけている最中かと思えますわ」

「そうか。まあ、篝さんがいないからこうしてイチャつけるんだけ  
ど」

俺達がイチャついていると篝さんはすごい冷たい目で俺達を睨みつ  
けてくるので、堂々とイチャつけるとしたら篝さんが部屋にいない  
時だけだ。

「それは仕方ありませんわ。1年生の専用機持ちはわたくしと簪さ



んを除いて全員一夏さんとお付き合いを望んでいますからね」

「まあ、ある意味俺とセシリアだけ抜け駆けしている様なものだから、睨まれても仕方ないとは思うけどな」

それでも精神的には少しばかり辛いものがある。

「む。アル、また来ていたのか」

そう言っていると篤さんが戻ってきたので、何か言われる前に退散する事にする。

「ちょうど用事は終わったから、今帰るところだよ」

「それならいいが……」

どこか慥然とした表情の篤さんの隣を通過して、俺は山田先生のところに行つて外出許可の申請をしてから自分の部屋に戻る。

一夏はまだ戻ってきていないようで部屋の鍵が閉まっており、自分の鍵を使って部屋の中に入って一夏が戻ってくるのを待つことにする。

その間に作業の連絡を取りやすいようにアドレスを交換した簪さんに俺とセシリアは明日予定がある関係で製作作業に参加できない事を伝えておく。

だが、明日は簪さん自身に予定があったようで製作作業そのものを行えないと返信されてきたので、専用機を管制させる事を目標としていた簪さんの事を考えると珍しい事があるものだと思った。

15分後に一夏が戻ってきたので、祭りの日の夕方に行われていた

舞の時間を聞いてからセシリアにメールを送り、出発時間と待ち合わせ場所を決めた。

その後一夏にラウラとシャルロットの反応を聞くと、二人とも浴衣を持っていないことを理由に断ろうとしていたが、一夏も必ずしも浴衣が必要でない事を説明してなんとかしたようだ。

それから俺達は明日の準備をした後、順番にシャワーを浴び、就寝時間まで俺が転校してからの祭りの様子を話題にして盛り上がった。

明けて翌日。朝食を食べ終わった後普段どおりの基礎訓練を行い、それが終わってからは出かける時の服を選んで荷物を確認し、待ち合わせ場所である駅前 本土からIS学園行きのリニアが定期的に止まっている駅 へ向かう。

少し急ぎすぎたのか約束の45分前には到着してしまい、駅のホームで一人待っているのもむなしかったので改札口に移動する。

花火大会の見物客らしい浴衣を着た人達がそこかしこに見え、学園側からの改札口に注意を払いながら一般の改札口からどんな人達が降りてくるかを時間潰しに眺める。

「ここにお前がいるとは珍しいな、アルバート」

「セシリアと待ち合わせ？」

10分程度そうしていると学園側の改札口からラウラとシャルロッ

トがやってきて、俺に話しかけてくる。

「当然。ラウラとシャルロットは一夏と待ち合わせか？」

「うん。一夏が花火大会に行かないかって誘ってくれたんだ」

「花火がどういったものかは知らんわけではないが、嫁からの誘いは受けてやらんな」

相変わらずラウラの言動はどこかズレているが、2人とも想い人からの誘いを受けて嬉しそうだった。

「そついえばお祝いを言っていなかったね。アル、おめでとう。2人の仲の良さは知ってたけど、付き合い始めたってメールが来た時はびっくりしちゃった」

「そつだな。お前から告白とはよくやったではないか、アルバート」  
それから少し遅れてシャルロットとラウラが祝いの言葉を俺に送ってくれた。

「ああ。ありがとな、2人とも。……でも、ラウラとシャルロットの方がよっぽど大変だと思っぞ？ 競争倍率高いし、何より想い人が鈍感の上に唐変木だ。性別は違うが、心中察するよ」

俺も礼を言つと同時に、同性から見てもたまたまに度を越した鈍感さを見せて呆れさせる事がある一夏に惚れた二人をねぎらっておく。

「あつ、あはは……ありがとう」

「ふん、心配は要らん。必ず一夏は私の嫁にしてみせるさ」

シャルロットは俺の言葉に心当たりがあるのか苦笑しながら返事をしてくいて、ラウラは強気な表情で心配無用と伝えてくる。

それからは学園側の改札を気にしつつ、お互いに異性からのナンパ対策の一つとして適当な話題で話をする。

15分ほど経過すると次のリニアが到着したようで、学園側の改札から何人かの生徒が降りてくる。

「アル、お待たせしてしまったようですわね」

その中にはセシリアの姿もあり、俺を見つけて駆け寄ってくると一言謝ってきた。

「それほど待つてないからな。どういうわけかシャルロットとラウラがいたから話し相手に困る事もなかったし、話をしてればお互いにナンパ対策になるから不愉快な思いもしてない。何も問題ないさ。それに、たまには待つ側になるのも悪くない」

セシリアには秘密だが、ラウラとシャルロットに関しては俺から一夏にたきつけた部分があるので、一夏が来るまで2人が不愉快な思いをしないようにする配慮でもあったりする。

「……そのようですわね。どうやら、わたくしの杞憂だったようです」

セシリアはじっと俺の目を見てから一つため息をつくど、俺の言葉に嘘がないことを理解してくれた。

「……あんた達って相変わらず仲良いわね。付き合い始めたのは伊達じゃないって事？」

「「りっ、鈴さん!?!」「」

半ばうんざりした表情で突然鈴さんが声をかけてきたので俺もセシリアも驚いてしまい、慌てて鈴さんから距離をとる。

「いつ、いつの間に近づいておりましたの!？」

「いきなり話しかけられると驚くって!!」

「そりゃそうかもしれないけど、そこまで驚くことないじゃない。あとセシリアはいつの間にか言ってるけど、私もさっきのリニアで来てたのよ。多分乗ってた車両が違ったんでしょ。それで、改札を出たら見知った顔があったから声かけただけよ。」

俺達が抗議すると自分の非を認めつついつ到着したのかを説明してくれた。

「そつ、それよりどうして駅前に？ 何かの買い物ですか？」

「そつ、そうだな。こんな中途半端な時間にどうしたんだ？」

買い物ならもう少し早い時間に来ていなければおかしいように思うのだが、いったいどうしたのだろうか？

「私？ 一夏から一緒に花火大会行かないかって誘われたんだけど……………」

それだけ言っただけ鈴さんは自分の右手側にいるラウラとシャルロットを一瞥し、大きくため息をついた。

「こんなことじゃないかって予感してたのよねえ……………」

「ははは…………い、一夏らしいね」

「シャルロットと同時に誘われた時点である程度は覚悟していたが、ここまでとは……………」

一夏に誘われたラウラ・シャルロット・鈴さんの3人はそれぞれ一夏に対する思いを口にする。

「い、一夏さん……相変わらずのようですね」

「……ああ。一夏らしい気遣いの方法ではあるが、気遣いのベクトルが致命的に間違ってると思うのは気のせいじゃないよな？」

十中八九、一夏が鈴さんを誘った理由は『いつものメンバーで遊ぶ時に鈴さんだけ仲間はずれにしたらかわいそう』とか思ってた鈴さんにも声をかけたんだろが、『花火大会での2人っきりのデート』を望んでいた鈴さん達からすれば大きなお世話だろう。

「何？ アルバートは一夏が何を思ってこんな事したかわかってんの？ まさかアンタの差し金じゃないでしょうね？」

鈴さんがとても不名誉な事を言ってくるので、俺は自分の考えを伝える。

「前者は心当たりあるけど、後者は俺のせいじゃないぞ。多分一夏は『みんなで遊ぶ時に仲間はずれはよくない』とか思ってた鈴さんにも声をかけたんだと思う。多分今頃篤さんにも声かけてるんじゃないか？」

俺が自分の予想を鈴さん達に伝えると、3人は一斉にため息をついてこう言った。

「すっごい簡単にその様子をイメージできるんだけど、それ」

「うっ、一夏の唐変木……」

「一夏の考えはよくわからん……どうすればいいのだ」

3人ともどこか表情が暗くなり、ほぼ同じタイミングで肩を落としました。

「ですが、アル。篝さんは昼食を終わった後どこかに外出していきましたから、今頃一夏さんもその事を知ってこちらに向かっているではありませんか？」

セシリアが自分の予想を述べる。

「そうなのか？ まあ待ち合わせ時間まであとどれ位時間があるかは知らないが、一夏もそれに間に合うように来るだろ」

俺は一夏が何時に待ち合わせをしたか知らないのでそう言うと、シヤルロットをはじめとして表情が曇り始める。

「一夏、遅刻しなければいいんだけど」

「そこは心配せずとも大丈夫だろう」

「だといいいんだけど……あと15分よ？」

現在時刻が午後4時45分なので、一夏は俺達と同じく午後5時に待ち合わせをしたようだ。

「アル、わたくし達はそろそろ会場に向かいませんか？ ここで話をしているのは舞と花火を見る場所が取れなくなってしまっているのではな  
くって？」

「あー、そうだな。花火はよく見える秘密の場所知ってるから問題ないけど、早く行かないと舞の見物場所が埋まる可能性高くなるか……悪いんだけど俺達は先に会場に移動してるから」

「なんだ。あんた達も花火大会行くんじゃない。どこで花火見るつ

もりかは知らないけど、人目のつかない所で変な事しないようにね」  
鈴さんは俺の言葉から花火大会に行く事を察してくれたが、同時に余計な事を言ってきた。

「りっ、鈴さん！？いきなり何を言い出しますの！！」  
「いきなり変なことを言わないでくれ！！」

夕チの悪い冗談だとわかっていても、俺達にはショックが大きすぎる言葉だ。

「あはは、ごめんごめん。でも、どこかで会ったら一緒に回りましょ」

それは鈴さんも理解していたようで素直に謝り、祭りの最中に会ったら一緒に回る事を提案してくる。

「それは構いませんが、先程のような夕チの悪い冗談はおよしになつてください！！」

「俺もセシリアと同意見だ。いくらなんでも夕チ悪すぎだつての！」

「だから悪いって謝ってんじゃない。まあ、今の事は一夏にも言うておくから、いつものメンバーの内誰か見つけたら声かけて」

提案は受けておき、鈴さんも一夏にこの事を伝えておく旨をむね聞いてから、俺はセシリアと一緒に花火大会の現場である篠ノ之神社へ向かうことにする。

「そついえばアル。今まで聞いていなかったのですが、これから向かう場所はどのような所なのですか？」



「ああ、向かう場所の名前は篠ノ之神社。……名前でわかると思うけど篠ノ之東博士や篤さんの生家で、今はやってるかどうか知らないけど、篤さん達が引越すまでは剣術道場もやってた場所だよ。前にも話したけど、俺もその道場の門下生の1人だった」

もつとも、俺が通っていた時は千冬さんが師範代で、門下生が俺と一夏と篤さんの3人しかいなかったが。

「つまり、アルにとつても思い出の場所という事ですか」

「……まあな。今から行く花火大会も引越す前は毎年のように通ってた。花火を見ようとしてる場所も、俺を除けば場所を知ってるのは千冬さんと束さん、一夏と篤さんの4人だけが知ってる穴場だよ」

まさかもう一度ここに来る事が出来るようになるとは思ってもみなかったので、結構複雑な気分だったりする。

「後でその時の事、詳しく教えていただいても構いませんか？」

「おう。篠ノ之神社には入り浸ってたから、それなりの数のエピソードがある。臨海学校の時に話した事以外にも色々あるから、楽しみにしててくれ」

そう言いながら、神社に着くまでの間に昔の夏祭りであったエピソードの中でも比較的短い話をいくつかしながら移動する。

5時10分頃に篠ノ之神社に到着し、用意されていた案内板にしたがって舞の舞台へ移動する。

幸いといっていいのか舞の見物客はそれほど多くなかったので、俺もセシリアも隣り合って座ることが出来た。

「セシリア。今からやる舞って、俺が転校する前は毎年箒さんがやってたって言ったら信じるか？」

「箒さんが、ですか？………失礼な言い方になってしまいましたが、わたくしにはイメージできませんわ」

普段学園で生活している時の箒さんからはかけ離れたイメージのため、セシリアは正直にそう言ってくる。

「普段の箒さんからはイメージしづらいだろうけど、結構綺麗だったぞ。その時の箒さんは腕力が足りなくて刀が持てなかったらしくて、仕方なく扇だけで舞ってたんだけど、本来なら刀と扇の二つを使って舞うんだとさ」

俺も一夏も夏祭りは箒さんの舞を見ることから始まり、神社の鳥居で待ち合わせて色々な出店を回ってからいつもの場所で花火を見ていた。その時に箒さんがそんな事を言っていた気がする。

「しかし、刀と扇……どのような舞なのか見当が付きませんわ」

「俺も小さい時に箒さんの舞を見たのが最後だから、二つを同時に使った舞がどんな物かっつのは知らないんだよ」

箒さんはIS学園に在学しているが、現在は外出中との事なので今日のために練習をした巫女さんが舞を行うのだろう。

「それでももう少しで時間になりますから、待つことにいたしまし  
よう」

「それは構わないがただ待ってるのも退屈だし、ちょっとした腹ごしらえも兼ねて何か買ってくるか？」

いくつかの出店は開いていたので、買おうと思えば色々と買ってくる事が出来る。

「食べる物については何かがあるか検討が付きませんから、飲み物だけお願いしてもよろしいですか？」

「了解。ちよつと待っていてくれ」

立ち上がって神社から少し歩いた所にある最寄の自動販売機まで移動し、2人分の飲み物を購入してから舞台へ戻る。その際、遠目に一夏の姿が見えたので後で話しかけることにしてセシリアの元へ向かう。

「すまない、少し待たせたか？」

買ってきた飲み物を渡しながら一言謝っておく。

「周囲の景色を眺めているだけでもある程度時間が潰せますから、大丈夫ですわ」

だが、セシリアもそれなりに時間を潰していたようであまり気にしていなかった。

「さつき遠目に一夏の姿が見えたから、鈴さん達もこの舞を見てると思う」

「そうなのですか？ では、ある程度時間が経ちましたら合流するようにしましょう」

「賛成だ。2人で一通りまわったら、合流しよう」

それから舞が始まるまで、飲み物を飲みつつ昔の夏祭りであったエピソードをセシリアに話しながら時間を潰す。

カン！！ カン！！ カンカンカン！！ カン！！

そうしていると拍子木独特の音が周囲に鳴り響き、舞の始まりを告げる。

「始まるみたいだぞ」

小声でセシリアにそう伝えようと、セシリアも真剣な眼差しで舞台に視線を送る。

「っつ！？」

舞台袖から舞を踊る巫女さんがやってきたが、その人物は顔見知りであり、現在外出中のはずの箒さんだった。

純白の舞装束に身を包み、金の飾りを装った箒さんの姿はいつもよりずっと大人びて見え、知り合いが舞台に立っていることもあって、俺もセシリアも静まり返っている中で大声を上げそうになってしまった。

左手に閉じた扇を開き、それをかすかに揺らす。扇の両端に付けられた鈴が儼かな音色を奏で、舞が始まった。

昔見ていた舞が扇だけの不完全な物だった事を知らせるその動きは普段箒さんの持つ雰囲気と儼格さと静寂な舞と見事なまでに融合していて、『剣の巫女』という言葉がぴったりと合うように思えた。

「……すごかったな、篝さん」

「ええ。……あの姿は早々忘れられそうにありませんわ」

舞そのものは15分ほどで終了したが、その姿はすばらしい物だったため俺もセシリアもしばらくの間何を話せばいいかわからなかった。

「多分篝さん。俺達がいたことに気づいてないだろうな」

「そう、でしょうね。……後でお礼を言っておきますわ」

「俺もそうする。……それじゃあ、一緒に回るか」

「ええ。しっかりエスコートしてくださいね」

俺もセシリアも席から立ち上がり、まずは2人で祭りを楽しむ事にするのだった。

### 35 夏祭りへ行こう（後書き）

そんなわけで夏祭りの前半戦でした。

原作だといなかったラウラやシャルロット、鈴を出したのはこの夏祭りのエピソードが終わったら原作5巻の内容に入ろうと思っていたので、一夏宅訪問エピソードがない代わりです。

次回は夏祭りの後半戦。五反田兄妹初登場になると思います。

### 36 夏祭りの出来事 その1 (前書き)

ごめんなさい。夏祭りは3話構成になりそうです。orz  
書きたいことを書いてたらテキスト量が増える増える。  
五反田兄妹も次回登場になっちゃいます。

### 36 夏祭りの出来事 その1

祭りの始まりを告げる舞を見た後、俺はセシリアと一緒に一夏に話しかけようとしたのだが、一夏は舞を見終わった後すぐに移動をしたようで席にはいなかった。

仕方ないので俺はセシリアに一般的な日本のお祭りがどういったものかを説明しつつ、途中いくつかの店でソース焼きそばやかき氷などを買って腹ごしらえをしながら、花火が始まるまで篠ノ之神社内を案内して時間を潰す事にした。

「なんと言うか……日本のお祭りというのは誘惑が多いのですね」  
ある程度の場所を回り、はぐれないように手を繋いで移動しているとセシリアがそう呟いた。

「まあな。こういった祭りの屋台だけで楽しめる物もあるし、食べ物も色々と売ってるからな。気をつけないとあつという間に財布の中身が空になる」

前者は金魚すくいや射的、後者は焼きそば・焼きもち・りんご飴・綿菓子など多岐にわたる。特に前者は気をつけないとあつという間に所持金がなくなるなんて事になりかねない。

「それに、食べ物を買う時もカロリーを計算しないと恐ろしい事に……」

「確かに祭りの屋台で売ってる食べ物って基本的に高カロリー食品だからなあ……女性にとってはそこも敵か」

昨今の風潮で販売側もある程度はカロリーをカットするように心が



けているのだろうが、元のカロリーが高いから焼け石に水になっている可能性もある。

「そのとおりです。頭ではカロリーが高いとわかっているのに、漂ってくる匂いにおにつられて屋台の中に入りそうになるのを何度堪こえたことが……」

セシリアも腹ごしらえはしたが、食べた量としては少なめだったのは元のカロリーが高かったからだろう。

「あー……すまん。懐かしさを優先してそこらへんまで考えが及んでなかった」

「いえ。わたくしもアルの思い出の場所に来る事ができてうれしく思いますわ。……食べ物たべもののカロリーの高さに関しては想定以上でしたが」

「ぐっ……次は気をつけます」

反論の余地がないので素直に謝っておく。……今後この手の祭りに行く時は下調べはしっかりしよう。

「そうしていただけると助かりますわ。ところでアル、あの建物は何なのですか？」

そう言ってセシリアは巫女服を着た女性達がお守りの販売などを行っている場所を指差す。

「ああ。あそこは社務所しゃむしょって言って、社社の事務を行う場所だよ。篠ノ之神社はそこまで規模が大きいから、お守りやおみくじの販売などもあそこでやってる」

「なるほど」

「あ、アルとセシリアさんだ」

社務所の説明をしていると聞き覚えがあるシャルロットらしき声が背後からしてきたので後ろを向くと、一夏・鈴さん・ラウラ・シャルロットの四人が俺達に近づいてきていた。

「よう、一夏。待ち合わせには間に合ったのか？」

「ああ、何とか待ち合わせの時間には間に合ったよ」

「もっとも、かなりギリギリだったけどね」

一夏に待ち合わせの時間に合ったのか確認すると、一夏がそれに答えてから鈴さんが茶化すように待ち合わせぎりぎりに到着した事を教えてくれた。

「まあ、待ち合わせに間に合ったならいいさ。……それで、どうして話しかけてきたんだ？ 何か用事があるんだろ？」

十中八九、合流して祭りを一緒に回る誘いだとは思うが、違う可能性もあるので用件を確認する。

「用事って程じゃないさ。鈴からアル達に会ったら一緒に回るように話をつけてあるって聞いてたから、ちょうどいいと思ってな」

「まあ、時間的にも全員で色々まわってれば花火も始まるか。……セシリアはどうする？ もう少し2人で回りたいなら合流を遅らせてもいいけど」

「……わたくしは一夏さん達と合流することに異存はありませんが、一夏さんはその前に声をかけるべき人がいるのではなくて？」

セシリアに一夏達と合流するかどうかを確認すると、少し離れた社務所の方向を指差してそう言った。

「ん？……そうだな。みんなはちょっと待っていてくれ。箒に声かけてくる」

セシリアの指摘に疑問を感じ、俺を含めた全員が社務所に視線を向けるといつの間にか巫女服姿の箒さんが社務所の中でお守り販売の手伝いをしていた。

2番目にそのことに気付いた一夏は、一言俺達に次げてから社務所へ向かっていった。

「……セシリア、いつ箒がいると気付いた？」

一夏がお守り販売の列に並び箒さんに声をかけるのを待っている間、ラウラがセシリアにいつから箒さんが社務所にいたことに気付いたかを問いかける。

「アルと一夏さんが話をしている最中に社務所の方向を見てみたところ、箒さんが社務所、でしたか？ その中で販売をしている方の1人に話しかける姿があったものですから」

セシリアはその問いかけに正直に答えた。

「なるほどね。……でも、なんで一夏を向かわせたのよ？ 私達の中の話が向かっててもサプライズにはなっただと思っけど？」

セシリアの説明を聞いて納得した鈴さんだが、短時間とはいえ一夏と離れる事になったことは不満に思っていて、一夏を向かわせた理由を問う。

「そのことですか？ 箒さんも幼少の頃は生家せいかで行われていたこの

お祭りに参加していたでしょうし、一夏さんも地元で毎年行われているこのお祭りに参加して色々と勝手を知っているでしょうから、最低限の会話で篝さんを誘えると思ったのですが」

「それって、一夏と篝にとっては細かい待ち合わせ場所を決めたりしなくてもお互いにどこで待ってるかはお見通しって事？」

「ええ。わたくしはそう考えたのですが……実際はどうなのですか？ アル」

セシリアが鈴さんとシャルロットの質問に答え、同時にいつものメンバーの中で2人と付き合いの長い俺に実情を確認をしてくる。

「セシリアの考えでほぼ正解だよ。一夏も篝さんも祭りの時には昔から神社の鳥居前で待ち合わせしてたから、今日もそこで待ち合わせだと思っ」

「まあこの神社で待ち合わせするにはもってこいだから、花火が始まる直前の鳥居周辺って人工密集率がすごい事になるけど」

俺がセシリアの問いに答えると、ここで数年間過ごした経験のある鈴さんが補足説明を入れてくれた。

「待ち合わせ場所が予め決まっているならそれほど時間もかからんか。効率的だな」

「ただ、篝さんの準備に時間がかかる可能性もあるから具体的に何分くらいで来るかはわからないけどな」

それでも人を待たせている以上は手早く準備をして合流してくるものと信じた。

「みんな、篝誘ってきたぞ」

そうして話をしている内に一夏が戻ってきた。

「おう。ご苦労さん、一夏。……何かあったのか？」

だが、その表情は釈然としない物で何か問題が起きたようだった。

「ああ。箒に声かけたんだけど、ボーっとしたまま親戚の人に頭叩かれて母屋の方に連れてかれてた」

「……一夏、アンタあたしらと一緒にいる事箒に伝えた？」

「伝えようとしたんだけど、その前に親戚の人が箒連れて行ったんだよ」

鈴さんがジト目で一夏を睨みつけながらそう問いかけると、一夏は伝えられずじまいだと答えた。

「そつ、それなら仕方ないね。……でも、箒との待ち合わせはどうするの？ 流石にこの人数で一ヶ所にいると交通の邪魔になっちゃうと思うんだけど」

「そつだなあ……俺が待ち合わせ場所にいるから、みんなは祭りを回って楽しんでこいよ。ラウラもシャルもこついった祭りは初めてだろ？ 俺は箒と会ったら合流するからさ」

シャルロットが待ち合わせをどうするか問いかけると、一夏はあっさり自分だけ待ち合わせ場所に移動し、俺達は祭りを回るように言ってくる。

「あのねえ、私達はあんたに誘われてここまで来たのよ？ ホストが招待者放り出してどうするつもりよ」

「それは悪いと思ってるよ。でも仕方ないだろ？ 箒は鈴たちが祭りに来てること知らないんだから、俺が鳥居に移動して待つしかない

いだろ」

「それなら時間を何分までって決めて、その時間までに箒さんが鳥居に来なかつたら一夏が箒さんの携帯に連絡入れて母屋に迎えに行けばいいだろ。そうすれば一夏が待つ時間も鈴さん達が待つ時間も最低限ですむと思うけど?」

鈴さんの言い分も一夏の言い分ももつともなので、妥協案を提示する。幸い一夏も篠ノ之神社の母屋がどこにあるか知っているので、途中で迷う事はないだろう。

「その方法があつたな。……鈴、今アルがいった方法じゃダメか? せつかく箒以外全員いるんだから、1人だけ仲間はずれにはするのはイヤなんだ」

「……30分経つたら、すぐに戻ってきなさいよ」

一夏の説得を聞き、鈴さんは一言そう言っただけの妥協案に賛成してくれた。

「わかつた。30分経つたら結果はどうあれ一度連絡する。鈴達の事頼んだぞ、アル」

そうやって言われるまでもなく、一夏が鳥居に向かっていている間は鈴さん達と一緒に行動しようと思っていたので、俺はこう返す。

「言われなくてもわかつてるよ。そっちこそ待ち合わせに遅れたり、箒さんと行き違いになったりするなよ」

「それは十分に注意するよ。それじゃあ頼むな、アル」

俺の言葉を聞いてから一夏は鳥居前へ向かっていき、俺は携帯のバイブレーション設定のみをオンにしてから、鈴さん達に向き直って

一つ質問する。

「それじゃあ、一夏が篝さんと会って合流するまでどうする？どこに行きたい屋台とかあるか？」

「アルバート、移動する前に一つ聞いていいか？」

屋台のある方へ移動しようとする、ラウラが質問をしてきた。

「ん？ どうした、ラウラ？」

「一夏と屋台付近を回っていた時に一瞬ライフルらしき物が見えたのだが、あれはどういった店なのだ？ 一夏に聞く前にこちらに移動してしまったので何の店か皆目見当がつかんのだが」

ライフル……射的屋だろうか？

「多分それは射的屋だと思う。コルクをつけたおもちゃのライフルで的を狙って、撃った弾で的を倒したらそれを景品として貰う事ができるんだよ」

「ほお、それは面白そうだな。是非やってみたいものだ」

俺が射的屋について説明するとラウラの眼差しが訓練や模擬戦をしている時のものに近くなった。

「ああ、それじゃあ最初に射的屋に行こう。………ただ、本気出すのはなしにしないか？ 実銃とコルク銃の違いはあっても俺達全員射撃は慣れてるんだから、やるとしたらある程度は手加減しないか？」

本気でやったらここにいる全員で射的屋の景品である的を全て撃ち落す事など造作もない。射撃と聞いてやる気を出しているラウラを

抑える意味も含め、射的屋では手加減して撃つ事を提案する。

「確かにアルバート含めて全員一つは射撃武装があるんだし、本気出すのも大人気ないわよね」

「あくまで今日は遊びに来ているのですし、わたくしも鈴さんの意見に賛成ですわ」

「そうだね。それじゃあ、狙いのつけ方も甘くするように心がけないとね」

「……そうだな。私も手加減するでしょう」

俺の提案を聞いて鈴さん・セシリア・シャルロットの3人はあっさり俺の提案を受け入れ、ラウラもワントンポ遅れて提案を受け入れてくれた。

「よし、それじゃあラウラのリクエストどおり射的屋に」

「あのさあ、射的屋行くのもいいんだけど、その前に1件行きたい店があるんだけど」

全員で射的屋に移動しようとした瞬間に、鈴さんが先に回りたい店があることを告げてくる。

「行きたい店？ 何屋なんだ？」

「金魚すくいよ。射的屋行ったら絶対に誰かしらが景品取って荷物がかさばるから、手持ちが少ない今の内に金魚すくいやっておきたいんだけど」

確かに射的は的を落としたら景品が貰えるので、どうしても荷物がかさばる。その事を考慮すると射的屋の前に行った方が勝負を楽しむ事ができるだろう。



「キンギョスクイ……ですか？ アル、いったいどういった遊びですの？」

「キンギョって……魚の種類だよな？ どんな遊びなの？」

「言葉からは全く想像できんな。どういったものだ？」

IS学園に入学するまで日本とあまり接点のなかったセシリア・シヤルロット・ラウラの3人が金魚すくいについて説明を求めてくる。

「それは今から説明するよ。金魚すくいってのは」

俺は3人に日本の祭りの定番、金魚すくいがどういったものかを説明する。

「で、すくった金魚を貰って飼う事もできる。説明としては以上だな」

「ただ、本気で飼うなら色々と設備が必要だから貰うのはお勧めしないわ。設備がないとあつという間に死んじゃうから」

一通りの説明を終えると、鈴さんが最後に補足説明を入れてくれた。俺も昔すくった金魚を貰って飼おうとしたが、その手の知識が殆どなかったのであつさりとして死んでしまった覚えがある。

「た、確かにそれじゃあかわいそうだね」

「生き物ですから、飼う自信と設備がなければ貰わない方が良さそうですわね」

「しかし、面白そうなゲームではあるな。射的屋の前にそちらに行こう」

シヤルロットとセシリアがすくった金魚の扱いに関する感想を述べ、ラウラはルールを聞いて興味を持ったようだ。

「それじゃあ、鈴さんのリクエストを先にこなすとするか。セシリアとシャルロットはどこか行きたい店とかあるか？」

セシリアとシャルロットにもどこか行きたい店があるかもしれないので、今の内に聞いておく。

「僕は特にはないかな？　初めてだからどういったお店があるかもよく知らないし」

「わたくしも同じですわ。鈴さんやアルの方が詳しいと思いますので、どこに行かれるかはおふたりにお任せします」

だが、二人とも日本の祭りが初めてという事もあって、特にリクエストなどは無いようだ。

「了解。それじゃあ金魚すくいに行った後、射的屋に行くでしょう」

そうやって俺達5人は移動を開始し、まずは金魚すくいの屋台へと向かうことにした。

『外国人然とした美少女3人と中国系の顔立ちの美少女1名を連れ、た外国人然とした男』ということで店番をしていた人からかなり鋭い目つきで睨まれた。

その視線を無視しながら俺達5人が金魚すくいを初め、真っ先にすくう為のポイ　すくう時に使う道具の名前だ　として使用していたモナカがダメになったのが俺だったので、その視線が若干緩んだような気がした。

ついでに言うと、俺は金魚すくいが苦手だ。その理由は至極単純で、

小さな金魚をすくおうとするとどういわけか目的の金魚が逃げ、その代わりに水槽の中で一番大きな金魚が死角から近づいてポイに乗り上げ、その重量で紙やモナ力を勢いよく破っていくのが理由だ。篠ノ之神社で行われている金魚すくいはポイが一部でも破れたらそこで終わりなので、俺が数をすくおうとすると、ある程度の大きさの金魚をすばやく捕まえるしかなかったりする。

このジnkスのせいか調子がいい時はそれなりの数を救うことができるのだが、調子が悪いと1匹目をすくおうとして大物の突撃を受けてしまい、30秒以内で終わる事もある。

どうやら今日は調子が悪いらしく、15秒で大物が乗り上げてしまった。

すくった数だけ言えば経験者の鈴さんが一番多く7匹、次にラウラの4匹、シャルロットの2匹、セシリアの1匹と続き、俺が0なのでダントツの最下位だった。

「なんていうか、アルバートの金魚すくい……………すごかったわね」  
金魚すくいを終えて射的屋に向かう最中、鈴さんが俺の金魚すくいの様子を思い出してそう言った。

「個人的にはよくある光景だから気にしてないけどな」  
「そ、そうなんだ……………」

今日初めて金魚すくいをやったシャルロット・ラウラ・セシリアもまるで謀<sup>はか</sup>った様に死角から近づいてきた大きな金魚が俺のポイに乗り上げて勢いよく破っていく姿を見ていたので、全員微笑を浮かべていた。

）  
）  
）  
）  
）

そうしているとポケットに入れていた携帯電話が着信メロディを奏でながら震えたので誰からの着信かを確認すると、ディスプレイには一夏の名前が表示されていたので電話に出る。

「どうした、一夏。何か問題でも起きたか？」

『ああ。30分経つても筈が来ないから、何度か筈のケータイにかけてるんだけど繋がる様子がない。俺は今母屋の方に向かってるけど、最悪入れ違いになってるかもしれないから、一回鳥居の様子を見てきてくれないか？』

「わかった。様子見てくるから、一度切るぞ」

『おう、様子見終わったら一度連絡してくれ。母屋にも人がいると思うから、俺も事情を話して筈がどこにいるか聞いてみる』

「そっちも事情を聞き終えたら連絡よこせよ」

簡潔にそれだけ言って通話を終了すると、鈴さん達4人が俺を注視していた。

「今の電話、一夏よね？　なんて言ってたの？」

「ああ。」

不安そうな眼差しで鈴さんが問いかけてくるので、俺は一通りの事情を説明する。

「　　そういうわけだから、俺は一回鳥居近くを見てくる」

「それならいっそわたくし達全員で行きませんか？　わたくし達は

鳥居付近で待っていて、アルが1人で鳥居へ向かえばある程度は合流の手間も省けると思いますが」

一言伝えて鳥居に移動しようとする、全員で鳥居付近まで移動してセシリア達4人がそこで待機、俺のみ鳥居前へ移動する事を提案される。

「そうだな。ここでアルバートだけを行かせると再度合流する手間がかかる。私はセシリアの意見に賛成だ」

「僕もセシリアの意見に賛成かな」

「そうね。私もセシリアの言うとおりにした方が楽だと思う」

確かにセシリアの方法なら再合流の手間もある程度省けるので、丁度いいかもしれない。

「……わかった。ただ、下手するとナンパ野郎が声かけてくる可能性があるから気をつけてくれ」

「適当にあしらうから大丈夫よ。行きましょ」

セシリア達に一言ナンパに注意するように言うと、鈴さんがそう答えて鳥居方面へ移動しはじめるので、俺達もそれに倣って鳥居方面へ移動する。

鳥居から少し離れたところで鈴さん達4人が待機し、俺は筭さんがいるかを確認するために鳥居の周辺を探すが、それらしい人物はいないようだった。

〃  
〃  
〃  
〃  
〃

その事を連絡しようとするのと再び携帯が着信メロディを奏でるので、ディスプレイに一夏の名前を確認しつつセシリア達の方に移動しながら電話に出る。

「一夏。鳥居の近くには篝さんらしい人はいなかったぞ」

『こつちも今、母屋にいた人に事情を話したんだけど、篝はまだ風呂に入ってるみたいだ。もう少ししたら来るみたいだから、どこで合流するか決めないか？』

「俺一人で決める内容じゃないから、鈴さん達と相談してメールする形でいいか？」

『わかった。決まったらメールくれ』

お互い簡潔に報告を済ませて通話を終了し、俺はセシリア達と再度合流する。

「篝、いた？」

「いや、いなかった。どうも篝さん、まだ母屋にいるらしい。一夏から今の内に合流場所決めておいてくれて言われたけど、どこで合流する？」

シャルロットからの質問に答え、同時に合流場所をどこにするかを聞く。

「私は待ち合わせの目印になりそうな物を把握していないからな。アルバートに任せることにする」

「変な場所を指定して一夏さん達を困惑させるわけにもいきませんから、わたくしもアルにお任せしますわ」

「……僕も同じ意見かな。一夏達が来やすくて、僕達も移動しやすい場所って知らないし」

ラウラ・セシリア・シャルロットの3人は土地勘がないので、俺に任せると言ってきた。

「鈴さんはどこがいい？　今までの態度からすれば昔も参加してたようだけど」

流石に俺の一存で決めるわけにもいかないなので、参加経験のある鈴さんに意見を求める。

「そうねえ……舞の舞台近くでどう？　あそこだったら色々屋台も近いし、5人で待っても邪魔にならないと思うけど」

「確かに大人数での待ち合わせって意味だとちようどいいか。セシリア達もそこでいいか？」

任せてくれたものの、依存がないか確認しておく。

「ええ、わたくしは構いませんわ」

「鈴のいうとおり、あそこなら問題なさそうだね」

「私も同じ意見だ。すぐに向かおう」

「了解。それじゃあ一夏にメールしとくから、移動しよう」

3人とも賛成のようなので、待ち合わせ場所を記載したメールを作成して一夏に送信し、俺達は舞台へ移動することにした。

### 36 夏祭りの出来事 その1（後書き）

そんなわけで篤さん登場前で次回に続きます。

次回こそ五反田兄妹を出せると思います。

かなり筆が進んでいるので次は早めに更新できると思いますが、  
うでなかつたらごめんなさい。



### 37 夏祭りの出来事 その2（前書き）

元々8割は書けていたので、急いで書き上げました。  
やっと五反田兄妹が登場です。

### 37 夏祭りの出来事 その2

俺が鈴さん達と合流場所を決めて一夏にメールを送り、すぐに舞台に移動してから20分後、一夏と篝さんは若干息をきらせながら舞台にやってきた。

「みんな、本当に待たせた」

「ほ、本当に全員で来たのだな……」

合流場所にやってきた一夏が一言謝り、篝さんも一夏から俺達がいることは聞いていたようだが本当に全員いるとは思っていなかったようだ。

「まだ花火まで時間があるし、色々と屋台回ろうぜ。篝はどこか行きたい場所あるか？」

「い、いや……特にはない。一夏に任せる」

若干照れた表情で篝さんはそう言った。

「そうか？……そういえばアル、俺が1度目の電話かけるまでどこにいた？」

「射的屋行こうとして移動中だったけど、それがどうしたんだ？」

「もしアル達がどこかの屋台で遊んでたようなら、そこに行こうと思っただけ」

「ふん。それならば早く行くぞ、一夏」

先程から微妙にそわそわとしていたラウラが、一夏の手を引っ張って屋台のある方へ向かっていこうとする。

「おっ、おいラウラ！！ 放せてー！！」

一夏がバランスを崩しながらラウラに声をかけるが、ラウラは聞く耳を持たずに移動していく。

「……………しょうがない。まずは全員で射的屋に行くか」

その様子を若干呆れながら眺めつつ、俺は篝さん達にそう言う。

幸い反対意見は出ず、すぐに一夏とラウラの2人と合流して7人で射的屋へと向かうことにした。

「あれ？ 一夏……………さん？」

「お？」

7人まとまって射的屋へ移動していると初めて聞く声で一夏の名前が呼ばれ、一夏が声をかけられた右側を見る。

「おー、蘭か」

どうやら一夏の知り合いらしく、俺を含めた全員が見知らぬ声の主の姿を見るために俺を含めた6人が右を向く。

「き、奇遇、ですね……………」

「そうだなー。案外知り合いに会わないと思っていたらばったりだったな。弾は？」

「さ、さあ？ 家で寝てるんじゃないですか？」

地元の女子で一夏とは知り合いのようだが、初めて見る顔だった。

「一夏。話し込むのは結構だが、俺達にも紹介しろって」

後ろで篤さん達の雰囲気は怖くなりかけてるんだから、とつとと教えてもらわないと心臓に悪い。

「ああ。悪い、アル。こっちは五反田蘭。前に話した弾ってヤツの妹だよ。蘭、コイツはアル。前に話したイギリスに引っ越した同性の幼馴染」

ああ、ちよくちよく話をしていて出ていた『中学時代の男友達の妹だけど、未だに自分になつてくれない』って言ったのが彼女か。……視線が篤さん達と同じに見えるのは気のせいじゃないよな？

「はじめまして。アルバート・ウィルソンだ。よろしくな」

「五反田蘭です。よろしくお願いします」

そう言っつて蘭ちゃんは一礼してくる。

「一夏、僕達も紹介してほしいんだけど」

「そうだな。詳しい話を聞かせてもらおう」

「同感だ。どういった関係なのか、納得のいく説明をしてもらわねばな」

「皆さん、そんな目をしなくてもよろしいのでは？」

シャルロット・ラウラ・篤さんの順で一夏を軽く睨みつけながらそう言い、セシリアは3人を戒める

「えっと……一夏さん。こちらの方たちは……」

「ああ、学園のクラスメイト。今紹介するよ。眼帯をしてるのがウラで、短めの金髪がシャル、黒髪が箒だ。箒はファースト幼馴染ってのは、前に言っただけ？」

「いえ、お名前だけしか……」

「そっか。最後になるけど、長めの金髪がセシリアさん。さっき紹介したアルの彼女。鈴は紹介しなくてもいいよな」

そう言っただけで箒さん達が真剣な眼差しで自己紹介をする。どうやら鈴さんは蘭ちゃんの事を知っていたようで、お互い軽い挨拶程度で済ませていた。

その後蘭ちゃんの連れの人達が蘭ちゃんと合流したのでその人達とも言葉を交わし、連れの人たちが一夏と蘭ちゃんの間を見抜き、蘭ちゃんを残して去っていったため、なし崩し的に蘭ちゃんも一緒に祭りを回ることになった。

それからちょっとしたアクシデントもあったが全員で射的屋へ向かい、蘭ちゃんが凄まじい気迫で液晶テレビをゲットし、箒さんがセシリアに構え方を教わってペンギンのぬいぐるみをゲット、鈴さんはその隣にあっただるまのぬいぐるみをゲットし、セシリアは1ショットで二つの品物を撃ち落とす曲芸じみた離れ業を披露した。

ウラとシャルロットもそれぞれ目的の物をゲット、俺もセシリアへのプレゼントとしてデフォルメされたスズメのぬいぐるみをゲット、一夏も品物を撃ち落とし、射的屋の中にいた知り合いの中で最年少という事もあって蘭ちゃんにゲットしたものをプレゼントしていた。

射的屋としては大損だっただろうが、俺達はかなり楽しめたのでよしとしておく。

それからも8人で色々な屋台を回り、遊び、屋台の食べ歩き。もつとも、積極的に食べていたのは俺と一夏、篝さんと鈴さんくらいで他のメンバーはカロリーを気にしてあまり食べていなかったが、をしながら機密事項に抵触しない範囲で学園の生活について話をしていると、神社の水のみ場近くで蘭ちゃんが一夏に声をかける。

「あの、一夏さん。ちょっといいですか？」

「ん？ どうした、蘭？」

「さすがにコレをどうにかしたいので、一度席を外させてもらっていいですか？」

そうやって蘭ちゃんは自分が抱えて持っている液晶テレビとその上に乗っている一夏からのプレゼントに視線を落とす。

「そうだな。確かに花火を見るときには邪魔だしな」

「ええ。一度お兄にいに連絡入れて、取りにきてもらうことにします」

「わかった。花火が始まる前には戻ってくるよな？」

「そのつもりです」

「付き合つか？」

「いえ、皆さんに申し訳ないですから、1人で行きます」

そうやって早足で移動する蘭ちゃんだが、その足取りはどこか危なっかしく見えた。

「……それでしたら、わたくし達がご一緒いたしますわ。アル、よろしくて？」

早足で去って言った蘭ちゃんの姿を見てセシリアは何かを思ったらしく、蘭ちゃんについて行こうとする。

「ああ、構わないし、俺もついてくよ。ナンパ避けのためにも俺が一夏のどっちはついていった方がいいと思っただけだから」

俺もそれに賛成し、一緒についていくことを伝える。セシリア1人だとナンパ野郎をあしらうのがきつくなる可能性もあるし、個人的に蘭ちゃんに言っておきたい事もある。それに、時間を調整すればセシリアと2人つきりになる事もできるだろう。

「わかった。頼むな。アル、セシリアさん」

一夏は俺とセシリアの提案を受け、その姿を背にして2人で蘭ちゃんを追いかけることにした。

「蘭ちゃん、ちょっといいか？」

「急ぐと倒れてしまいますわ」

「え……アルバートさんに、セシリアさん。どうされたんですか？」

幸い距離はそこまで離れていなかったため、すぐに追いつくことが出来た。

「ああ。中学生1人でその重量は大変だと思ったし、蘭ちゃんにくつか教えておこうと思ってね」

「一夏のさんの事、慕っているのでしょうか？」

「……はい」

移動しながら一夏のことをどう思っているか指摘すると、若干の間

を空けて肯定の言葉が返ってきた。

「やはりそうでしたか。……大変ですわね、蘭さん」

「あ、いえ……その……どうして、わかつたんですか？」

何故自分が一夏に恋慕の情を抱いているかを察する事が出来たのか  
問いかけてくるので、俺達は正直に理由を答える。

「蘭さんの眼差しが篤さん達と同じように思えましたから、察する  
のは簡単でしたわ」

「俺達にとっては女子が一夏を見る時の眼差しの中で一番見慣れて  
るから、自然と察する事ができたんだよ」

「そう……なんですか？」

俺達の発言を聞いて、蘭ちゃんの声に怯えが混じる。……長年憧れ  
ていた男がモテまくり状態なのだから、無理もないか。

「ああ。IS学園にいる男子生徒で唯一フリーだからな。学園の性  
質上、どうしても人気が集中する」

俺も女子生徒からの人気度という意味では一夏と同じくらいあるが、  
セシリアと付き合いだしたことで純粹に異性として見てくる生徒の  
割合は減ったので、その分も一夏に集中している節がある。

「確か蘭さんはジュニアハイの3年生でしたね。進路はどうなさる  
つもりですか？」

「え、えっと……IS学園に進学しようと思ってたんですが……  
……その……」

そこまで言って、蘭ちゃんの言葉が若干震える。



「篤さん達の姿を見て、実際にIS学園に進学しようかどうか迷ってる?」

「……はい。皆さんすごく綺麗ですし、学園での生活の様子を聞いていると私がIS学園に通おうとしている理由がすごく不純な物に思えてしまつて」

「その言い方ですと、通おうとする理由は一夏さんと一緒にいる為ですか?」

「……………そのとおりです。でも、今日の皆さんのお話を聞いていて、そんな理由でこれから先の進路を決めてもいいものなのかも思いはじめてもいるんです」

確かに中・高の進路先は結構重要なので、しっかり考えて行動した方がいだろう。

「なるほどな。……………つかぬ事を聞くけど、簡易適性試験を受けた経験は?」

「適性がなければ入試の実技試験で落とされてしまいますから、もし受けた事がないようでしたら今の内に受けておいた方がよろしくてよ」

「あ、それは以前受けた事があつて、簡易適性試験ではA判定を貰つてはいるんですけど……………おふたりは私がこんな理由で受験する事は何とも思わないのですか?」

俺達が官位適性試験を受験しておく事を勧めると、蘭ちゃんは自分の受験理由についての意見を求めてくる。

「ああ、その事か。IS学園ではよくある入学理由だから、別に構わないと思つぞ」

もつとも、今年度に入学したのは千冬さんに憧れて入学した生徒なので、蘭ちゃんとはベクトルが違う部分もあるが。

「実際わたくし達のクラスにも蘭さんのように憧れて学園に入学した方もおりますから、さして珍しい理由ではないと思いますわ」

「へ？ そう……なんですか？」

それは蘭ちゃんからすれば寝耳に水だったようで、表情がきよとんとしたものになる。

「まあ、そういった『憧れて入学した人達』の中にも入試をパスしている人がいるから、蘭ちゃんも進学の理由で悩む必要はないと思うぞ」

それに、蘭ちゃんが受験するであろう来年度の入学試験は『男性IS操縦者に憧れて入学を希望する』人が大量にいるだろうから、そこまで気にする必要性はないだろう。

「むしろ、『自分がどういった技術を学ぶ学園に入学するか』を自覚しておいた方がよろしくてよ？」

「えっと……どういうことでしょうか？」

蘭ちゃんはセシリアの言った意味がよくわかっていないようだ。

「IS学園はあくまでも『現存する全ての兵器の頂点に君臨するISの操縦者』を育成する為の学園だ。言い方を変えれば『人を傷つける技術を学ぶ場所』だって事」

「IS学園で学ぶ技術は、振るべき時以外に使用したり、その使い方を誤れば自分だけでなく他人も容易に傷つける技術だという事です。そこを間違えると、待っているのは自己の破滅だけですわ」

「つつ！！？？」

俺とセシリアの説明を聞き、蘭ちゃんは俺達が言いたい事を理解してくれたようだ。

「少し怖い言い方になったけど、『IS学園に入学する』っていうのは、そういった面もあるって事は忘れないように」

「怖がらせてしまった事はお詫びいたしますわ」

「い、いえ……ありがとうございます。お二人から聞いた事、よく考えてみます」

そうやって話している内に境内けいだいを出たので最寄の道路に移動し、蘭ちゃんがお兄さんの携帯に電話をかけて迎えが来るのを待つ。

15分ほど街頭の下で3人一緒になって蘭ちゃんのお兄さんを待っている、遠くに同年代らしい男子が1人歩いてくる姿が見え、その男はある程度距離が縮まってお互いの顔が判別できるくらいの距離になるとダッシュしてこちらに近づきながらこう言ってきた。

「蘭から、離れる！！」

その言葉と同時に、俺の顔を狙った左フックが放たれる。

一般人の攻撃ということを考えれば十分『速い』部類だが、それでも千冬さんやラウラを始めとした代表候補生と比較した場合、パンチの体勢に甘い部分が多く隙だらけで受け止めるのは簡単だった。

「このっ！！」

「お兄ストップ！！いきなり何やってんのよ！！」

見知らぬ男は掴まれた手を振り払おうとするが、そこで蘭ちゃんから静止の声がかかる。

「へ？ 蘭、お前ナンパされてたんじゃないのか？」

その男がやけに気安く蘭ちゃんに話しかけると、蘭ちゃんは憤慨しながら男を睨みつけながらこう言った。

「このバカお兄！！ アルバートさんはそのナンパから私を守るためについてきてくれたの！！ とつとと謝る！！」

どうやらこの男が蘭ちゃんのお兄さんのようで、俺がナンパ野郎に見えたらしい。

「あー、すまん。俺の早とちりだった」

「いや、事情を知らなければそう見えておかしくないから構わないさ」

蘭ちゃんの説明を聞いて素直に謝ってくるので、俺も気にしていないことを伝える。

「いいやつだな。名前、聞いてもいいか？」

「ああ。アルバート・ウィルソンだ。名前は五反田弾、でいいんだよな」

「そうだけど、なんで俺の名前知ってんだよ」

いきなりフルネームを呼ばれた事で、五反田の表情に俺への警戒が混じる。

「一夏や鈴さんから色々と聞いたからな。そっちこそ一夏から『小

学3年の終わりまで一緒にいた同性の幼馴染』の話聞いた事ないか？ あれが俺だよ」

「ああ、聞いた事あるな。あと、一夏と同じ男性IS操縦者だった？ よろしくな、アルバート」

だが、ネタをバラすとあっさり警戒を解いて挨拶をしてくる。

「ああ。こっちこそよろしくな、五反田」

「蘭と間違えるから名前がいい」

失礼のないようにファミリーネームで呼ぶと、あっさりファーストネームで呼ぶように言われた。

「わかった。よろしくな、弾」

「まったく、お兄はとっとこれ持って帰ってよ!!」

「そりゃ構わんが、どうやってたらこんなデカイ物当てたんだよ」

女子中学生が持てるギリギリの大きさの液晶テレビを抱えながら、弾が蘭ちゃんに質問する。

「一夏さん達と射的やってたら当たっちゃったんだからしょうがないじゃない!!」

「一夏……達？ どういうことだ？ あと、そちらの外国人の方はどちら様？」

弾が一夏『達』と複数形で言った事に疑問を感じ、同時に今まで一言も口を開いていないセシリアの存在にも気付く。

「ああ、紹介が遅れたな。俺の彼女で、名前はセシリア・オルコックト。同じ学園に通ってる」

「へえ、よろしく願います。オルコットさん」

「ええ。よろしく願いますわ、五反田さん」

そう言ってお互いに自己紹介をするセシリアと弾。

「それで、さっき言った一夏『達』ってのはどついつことだ？」

「え、えっと……」

弾が先程と同じ質問を蘭ちゃんにすると蘭ちゃんはどつ答えればいか悩みはじめる。

「一夏が蘭ちゃん以外にも同じ学園の女子と一緒に祭りを回ってただけだよ」

「あ、あの野郎………帰るぞ、蘭」

俺が事実を伝えると、弾は少しの間呆れた表情をしてから蘭ちゃんと一緒に帰るように言った。

「私はこれから一夏さん達と一緒に花火見るの！！ お兄ひとりで帰ってよー！！」

「いいから来い！！ さもなくばそのテレビと一緒に抱えて帰るぞ」

蘭ちゃんがこれからの予定を伝えると、弾は有無を言わさぬ剣幕でそう言った。

「う………わかったわよ。帰ればいいんですよ、まったく」

弾のその気迫は伝わったらしく、苦々しい表情で了承する蘭ちゃん。

「お兄。帰ってもいいけど、その前に一夏さんに連絡入れとくから

ね

蘭ちゃんはそう言うと、ケータイをかけるために俺達から少し離れる。

「妹の想い人が友人つてのは大変だな、弾」

「……まあな。それより、一夏のヤツ何人惚れさせてんだよ」

蘭ちゃんに聞こえないように小声で弾を労ねぎらつと、ため息をつきながら一夏の現状がどうなっているのかを気にする発言をしてくる。

「俺の身近にいるだけでも同じクラスに3人、別クラスに1人の合計4人だな。学年を問わないんだったら、もっと増えるんじゃないか？」

「あ、あの野郎……」

正直に教えると、弾は頬を引きつらせながら何ともいえない表情になった。

「一夏さんの事ですから、この先増える事はあっても減ることはないと思いますわ。それはわたくしより付き合いの長い五反田さんが知っているのではなくて？」

「……はあ、気にするのがバカらしくなってきたな。とつと1人に絞り込めばいいだろうに」

ため息をついてそう言う弾だが、一夏が自分から告白する姿はどうやってもイメージできず、女子生徒からの告白をいつもの鈍感で勘違いして返事をする姿しか思い浮かべられなかった。

「……それは無理じゃないか？ 弾。なんたって一夏だし」

「……五反田さん、それは一夏さんに敵しすぎませんか？」  
「……うん、言った俺がバカだった」

三者三様に『自分から告白する一夏』の姿をイメージできず、一番最初に発言した弾が素直に謝った。

「お兄、一夏さんに連絡終わったよ」

「おう。それじゃあ帰るぞ、蘭」

そうしていると蘭ちゃんが通話を終えて戻ってきたので、弾は蘭ちゃんに一言言って帰ろうとする。

「そうだ、弾。ここで会ったのも何かの縁だし、アドレスだけでも交換しないか？」

「蘭さんも番号を教えていただけじゃないかしら？ もし本当にIS学園に入学するつもりなら、色々とアドバイスが出来るかもしれないし」

せっかく会えたのだから、お互いにケータイのアドレスを交換する事を提案する。

「ああ、それくらい構わないぜ」

「えっと、よろしくお願いします」

弾も蘭ちゃんもそれを快く受けてくれて、俺達はアドレスを交換しあった。

「IS学園でも一般の人達が参加できるイベントも少しはあるから、何かあったら招待するな」

「蘭さんは将来の後輩候補ですから、そういったイベントは是非来



てくださいね」

「一番近いイベントは学園祭なので、一般人の入場が可能なようだったら招待するでしょう。」

「おう。その時はよろしく頼むな」

「あ、ありがとうございます!!」

それは2人にとっても朗報のようで、兄妹そろって嬉しそうな顔をしていた。

「それじゃあな、アルバート、セシリアさん」

「今日は色々ありがとうございます」

そう言って五反田兄妹は帰っていき、最後に蘭ちゃんが俺達の方を向いて一礼して去っていった。

「……さて、花火が始まるまであと20分くらいあるけど、今からどうする?」

「せっかく二人きりになれたのですから、言うまでもありませんわ」

聞くまでもない事ではあったが、それでもセシリアの口から聞きたかった。

「それじゃあ、一夏に連絡入れておくぞ」

俺は一夏の番号に電話をかけ、花火開始までの残り時間と合流する手間を理由にセシリアと2人で行動する事を伝え、一夏もそれを了承してくれた。

その時ついでに一夏がどこで花火を見るつもりか聞くと、普通に会

場で見るつもりらしい。

「それではアルの言う『秘密の場所』に案内してくださいな」

「ああ。幸いといっていいのか、一夏達とかち合う危険性もないしな」

そう言いながらセシリアを俺達しか知らない『秘密の場所』へ案内する。

あまり距離が離れていない事もあって花火が始まる8時前には到着する事ができた。

「ここ、ですか？」

「ああ。ここの一角だけ木が閑散としてるから、花火がすごく見やすいんだよ」

四季折々の風景が楽しめる場所でもあるが、今日の目的は花火なので存分に楽しませてもらうおつ。

ド　　ン！！

そうして説明が終わると同時に花火が撃ち上がり、夜空に光の大輪が咲く。花火の光と音、周囲に自生する木々がマツチしていて、それで一つの芸術のように思えるほどだ。

「……………たしかに、素晴らしいですわね」

「だろ？　一夏と篝さんもここを知ってるけど、俺が案内した事は内緒だからな」

「ええ。これは秘密にしておきたくなるのも納得ですわ」

そう言ってセシリアが腕を絡めてくるので、そのぬくもりを感じながら俺は花火を見続ける。

「綺麗だな、セシリア」

「ええ。来年も来ましょう、アル」

「ああ。そうだな」

花火と花火の間を見計らってどちらからともなくキスをしながら、俺達は花火を存分に楽しんだ。

花火が終わってから再び一夏と合流し、7人で寮に戻ってその日は眠ることにした。

それからは各種訓練と模擬戦を定期的に行い、日によっては簪さんの専用機の製作作業の手伝いを行っている内に日付はどんどん過ぎていき、夏季休暇はあつという間に最終日となり、その日も特に問題なく一日を終えた。

明日からは始業式の後通常授業なので、夏休みボケをしないように気をつけるとしよう。

### 37 夏祭りの出来事 その2（後書き）

珍しく1日2回の更新になりました。

地味に蘭と弾の2人が初登場。五反田兄妹は今後各種イベントでちよくちよく出番があるかもしれません。

今回で原作4巻のエピソードは終わりにして、次回からは原作5巻の内容に入っていくつもりです。

次回はおそらく会長が登場してくると思われます。

アルバートは既に簪と接触しているので、そこらへんで原作との違いを出すつもりではいますが、上手くいかなかつたらごめんなさい。

### 38 新学期開始（前書き）

今回から原作5巻の開始です。ほとんど原作の焼き直しになっちゃってますがご容赦ください。

### 38 新学期開始

9月3日。2学期最初の実戦訓練は、2組との合同で始まった。始めにそれぞれのクラス代表同士で対戦を行い、そちらの試合は俺の勝利で終わったので、今度は専用機持ち同士で模擬戦を行う事となった。

「随分と勢いがなくなったな、一夏！！ 珍しくペース配分を間違えたか？」

くじ引きの結果一夏と戦う事になったのだが、どういうわけか今日の一夏は序盤にエネルギーを大量に使った攻撃を続けていて、第二セカ次形態移行前の戦い方とは全く違っていた。

序盤はエネルギー消費を考えないビームクローヤや荷電粒子砲を使用した怒涛の連続攻撃に押され気味だったものの、中盤に入ってからは一夏もエネルギーを使いすぎたのか攻め方が消極的になってきたため何とか巻き返す事ができたが、一夏らしくないその戦い方がどうにも釈然としなかった。

「くっ、ここから巻き返してやるさ！！」

そう言っつて雪片式型を振るう一夏だが、シールドエネルギーもかなり消費しているのか零落白夜を使う気配が全くなかった。

「その割には攻めてこないじゃないか。まあ、こっちとしては好都合だがな！！ エッジ、GO！！」

マルチプル  
多目的ビット8機全てを展開し、全方位からBTビームの一斉射撃で攻撃する。

「くっ!？」

全方位から襲いかかる飽和射撃の回避を試みる一夏だが、序盤に荷電粒子砲と瞬間加速イグニッションブーストを使いすぎた為、武装用エネルギーを殆ど消費していた事で満足な回避行動を取ることができず、

回避行動中にバランスを崩した事で飽和射撃がヒット、それが決定打となって模擬戦は俺の勝利で終わった。

午前中の実戦訓練が終わって片づけを終えた後、いつものメンバーで昼食を食べながら、今日の模擬戦が全敗だった一夏に声をかける。

「今日は2戦とも負けつても珍しいな、一夏。いったいどうしたんだ？」

その後2組の専用機持ちである鈴さんと一夏が模擬戦を行ったのだが、俺の時と同じように序盤は一夏有利、中盤から巻き返されて後半では一夏のジリ貧状態だった。

各々の専用機持ちの機体特性を完全に把握してからは第二次形態移行セカンド・シフトする前でも零落白夜という高攻撃力を誇る白式のスペックと、剣術の勘をそれなりに取り戻していた一夏自身の地力もあって1勝1敗か2勝のどちらかだったので、今日の一夏の戦績は珍しかった。

「ああ、その事か。臨海学校で第二次形態移行セカンド・シフトしただろ？ あれで雪羅が出てきた事で機体特性が変化したから基礎戦術から練り直してみたんだけど、今日のパターンはダメみたいだな」

「今日のパターンっていうと、序盤から全開で瞬間加速イグニッションブーストしたり、荷

電粒子砲撃つてた事か？ 俺や篤さん相手ならまだしも、鈴さん達相手にそれは無謀過ぎだつての」

同じ専用機持ちと言っても、俺・一夏・篤さんの3人と鈴さん・セシリア・ラウラ・シャルロットの4人の間には地力の差がそれなりに開いていて、その差を機体のスペックで強引に埋めている関係上、進化した白式のスペックでのゴリ押しが通じるのは地力の差が少ない俺と篤さん位だろう。

「そうだよなあ……進化してさらに大メシ喰らいになったから、エネルギーが潤沢な内に決着付けようつてのはさすがに安直過ぎたか」  
「大メシ喰らいつて……どれ位になったんだ？」

元々白式は第二形態<sup>セカンド・シフト</sup>移行する前から零落白夜を搭載している関係で燃費に関して問題を抱えており、そこを工夫して並の第二世代ISと同等か少し劣る程度にしていたのだが、話を聞くとさらにエネルギー消費が増えたらしい。

「ああ。<sup>イクニッションブースト</sup>瞬時加速のチャージ時間は3分の2、最高速度は1.5倍になったけど、それに伴ってエネルギー消費が1.4倍近く増えるから、継戦能力に支障が出てるんだよ」

「消費エネルギー1.4倍つて……ほぼ別物じゃねーか」

最高速度の上昇と瞬時加速<sup>イクニッションブースト</sup>のチャージ時間が短縮されているとはいえ、進化前なら同じエネルギー量で瞬時加速<sup>イクニッションブースト</sup>を7回出来たのが5回に減っているのは近接戦闘メインの一夏にとっては辛いところだろう。今までの感覚で使っていたら即エネルギー切れになってしまう。しかもそこに雪羅という多機能<sup>アームド・アーム</sup>武装腕が追加されているので、当然そちらでもエネルギーは消費する。今までの白式では武装用のエネルギーは全てブーストに回す事が出来ていたので、総合的に見ると、



燃費の悪化が凄まじい事になっていた。

「倉持技研がデータ取りしたんだろ？ まだ整備用マニュアル届いてないのか？ 今のままだと燃費が最悪だぞ」

倉持技研が白式のデータ取りをしたのが8月第2週の頭なので、既に3週間近くが経過している。それだけあれば整備マニュアルくらいは作れるだろう。

「ああ。それは今朝織斑先生から受け取った。実を言うと今日の放課後に機体の調整方法聞こうと思ってたんだよ」

「……教えてやってもいいが、やり方は覚えるよ？ 俺だって色々予定があるんだから、常に調整に立ち会えるとは限らないからな」

幸いといっていいのか今日は簪さんの機体製作の手伝いは入っていないので、どういったところをチェックすればいいかきっちり教えておこう。

「それはわかってるよ。俺だってアルに頼りっぱなししておく気はない」

「それがわかってるならいいさ。放課後になったら本格的に教えてやるけど、白式の現状知りたいから後で整備コンソール見せてくれ」

「了解」

「ちよつと一夏、何男ふたりで辛気くさい顔してんのよ」

放課後の予定を決めていると、鈴さんが俺達に話しかけてきた。

「ああ、鈴か。アルと第二次形態移行した白式について話してたんだよ」

「白式ねえ……進化して遠距離攻撃能力獲得してたし、最高速度は

上がったみたいだけど、燃費さらに悪くなつてない？ 特に雪羅だっけ？ あのシールドモードは使い時の見極め厳しすぎよ。零落白夜をシールド状に展開してでエネルギー系の攻撃打ち消せるのはいいけど、それでシールドエネルギー消費してちゃ本末転倒じゃない」

そう。鈴さんとの模擬戦で初めて使ったところを見たが、白式が第<sup>セ</sup>二次形態移行した際に出現した多機能武装腕・雪羅には4つのモードが搭載されているようだ。

一つが近・中距離攻撃用のクローモード及びブレードモード、一つが遠距離攻撃用の荷電粒子砲モード、最後の一つが対エネルギー防御用のシールドモードだ。

前者二つは通常武装扱いなので武装用エネルギーを消費するが、最後の一つのシールドモードは白式ワンオフ・アビリティの単一仕様能力・零落白夜を膜状に展開する事でエネルギー系の攻撃を完全に無効化することが可能という非常に強力なシールドではあるが、零落白夜はシールドエネルギーを消耗する為、頻繁に使用すると普通にダメージを受けているのと同様かそれ以上のシールドエネルギーを消費してしまう危険性がある。

そうなつては意味がないので、相手のエネルギー攻撃の出力がどれ程の物かを見極め、『多少の被弾を承知して回避行動を取る』か『シールドモードを発動して最低限のシールドエネルギー消費で打ち消す』かを選択する必要がある。

相手のエネルギー出力が低ければ前者の方が結果としてシールドエネルギーの消費が少なくなるし、逆に高ければ後者の方がシールドエネルギーの消費は少なくて済む。

そういつた相手に合わせた回避・防御行動の選択も学ぶ必要性が出てきたため、基本戦略から練り直した方がいいだろう。しかも一夏は今まで射撃武装を使用した経験が殆どないので、射撃訓練も行う必要がある。

「そうなんだよなあ……そこらへんの見極めもしなきゃいけないし、雪羅には荷電粒子砲モードがあるから射撃訓練もしないといけないんだよなあ……」

「射撃訓練ならラウラに頼めばいいだろ。教え方はかなり厳しいが、1週間もあれば射撃戦の基礎的な戦闘機動は殆ど覚えられるぞ」

「ああ。そういえばアルってラウラから色々教えてもらってたな。ラウラ、俺も明日から射撃戦について色々教えてもらっていいかな？」

一夏がラウラに向かってそう言うと、ラウラは顔を赤くしながらこう言った。

「と、当然だ。今日の模擬戦を見ていたが、あんな動きでは当たる物も当たらん。基礎からきっちり教え込んでやるわ」

「おう。よろしく頼むな。……でも、ここまでエネルギー消費するとなると、いつその事戦闘中にエネルギーを回復したくなってくるな」

確かに機体の整備・調整で消費するエネルギーを効率化できるとはいえ、大本の消費がここまで大きいとそう考えなくなるのも理解できる。

「そ、それならば私と組め、一夏。紅椿には『絢爛舞踏』があるのだから、お前の言う『戦闘中のエネルギー回復』も容易に行うこと

ができるぞ」

一夏が自分の機体のエネルギー問題を口にする、ある意味最も簡単な対処方法を持つ篤さんが一夏のパートナーに立候補する。

「ああ、そう言われればそうだったな。確かに紅椿と組めばエネルギー問題は解決するけど、ペアトナーメントでもないのに紅椿に頼りっぱなしっていうのも悪いだろ。何か手を考えないと……」

篤さんの提案に対して一定の理解を示すも、一夏は眉間に皺を寄せながら何かいい手段はないものかと考え始める。

「何を難しそうな顔をしているか。私の嫁なら訓練して使いこなすくらいの事を言ってみせる。それから私とペアを組めばエネルギー回復などせずとも勝たせてみせるさ」

一夏の右頬を指で押しながら、仏頂面で冗談めかしてそう言い自分もパートナーへ立候補するラウラ。

「ざーんねん。一夏は私と組むの。幼馴染だし、甲龍は近接も中距離もこなすから白式と相性いいのよ」

だが、鈴さんも篤さんとラウラに対抗するように甲龍と白式の相性の良さをアピールしながらパートナーに立候補する。

「そういった事ならば元々白式はかなりピーキーな機体なのですから、ここにいる全員の機体とは一定の相性の良さを持っているのではなくて？」

「俺もセシリアと同意見だな。白式自体が高速近接格闘戦メインだから、ある程度の射程距離を持つ射撃武装を搭載している機体なら

相性はいいと思うぞ。

パートナーに中・遠距離戦を任せて、白式は瞬間加速イクニッションブーストなりで相手に肉迫、零落白夜で相手を切り伏せるのが一番手っ取り早い戦術だろうな」

これはある程度遠距離戦に対応している紅椿にも適用可能だし、なにより紅椿には『絢爛舞踏』を使った味方へのエネルギー補給が可能なので白式が零落白夜での攻撃を失敗した時でも即座にリカバリが聞く。そこはラウラや鈴さん、話に参加していないシャルロットがペアの場合では行えない紅椿ならではの利点だろう。

「ぬ……」

「それは……」

「確かに……」

俺とセシリアの指摘を聞いてラウラ・篝さん・鈴さんの3人は悔しそうな表情をしながらも納得した様子だった。

「でも最近はやア参加のトーナメントとかなないからなあ……」

「何かの弾みでいきなりやる可能性もあるでしょうが」

「その時は シャルと組むかなあ」

「へっ!?!? 僕?」

鈴さんがペアトーナメント開催の可能性を示唆すると一夏はシャルロットとペアを組むといい、急に話を振られたシャルロットが食事の手を止めて驚くが、どうせ理由はろくでもないものだろう。

「え、えつと、ど、どうしてかな?」

フォークとスプーンをおいて両手をもじもじと組み合わせながら、

何かを期待して一夏に自分をパートナーに選んだ理由を問うシャルロット。

「前に組んだから」

簡潔に返事をする一夏だったが、やはり理由としてはろくでもないものだった。

「あ、そう……………」

『特別な理由』を期待して瞳を輝かせていたシャルロットだが、一夏の理由を聞いて一瞬でその輝きはなりを潜め、うつろげな視線で食事を再開した。

「どうせそんなことだろうと思ってたよ……………。はあ……………」

シャルロットはそう言ってため息をつき、一夏の唐変木さに怒りをにじませながら食事を続ける。当然その理由を聞いてラウラ達は一夏を避難すると同時に全員でシャルロットを慰め、そうしている内に昼休みの時間も残り少なくなってきたこともあり、午後の実習に備えて更衣室に向かうことにした。

「たまに思うけど、2人だけでこの広さってのもすごいよなあ……………」

更衣室に到着してお互いISスーツに着替えると、一夏が男2人で広大な更衣室を占領している現状を呆れの言葉と共に呟く。

「それより授業まで時間ないんだから、まずは整備コンソール見せろ」

「ああ、わかってる」

一夏が整備コンソールを呼び出すのでそれを覗き込み、そこに表示される白式のデータを見ながらエネルギー系の効率化をどう行うかを考える。

(……まずは機体全体の出力とスラスターのバランス調整して、それから雪羅周りだな)

そうして整備プランを考えていると、突然目の前が真っ暗になってコンソールが見えなくなる。

「……!?」

「だーれだ？」

それと同時に見知らぬ女性の声が背後のすぐ近くから聞こえてくる。同級生の声よりも若干大人びて聞こえた。そのくせ、声の中にしゅうもないイタズラを楽しむ子供らしさを含んでいる女性など知り合いいにはおらず、心当たりが全くなかった。

「はい、時間切れ」

そうやって今まで俺達の目を塞いでいたらしい手を放してくれたので、いったい誰かと思って後ろを振り向く。

そこにいたのは見覚えのある水色の髪をした上級生　　リボンの色

から判断した　　の先輩がイタズラっぽい笑みで俺達を見ていた。

「誰？」

一夏も俺と同じく目線を塞がれていたようで、同じように後ろに振り向いて目隠しをした犯人を見るが、全く心当たりがないようだった。

（簪さん……じゃないな。初めて見るけど、たぶん簪さんのお姉さんか）

幸いといっていいのか俺には心当たりがあつたが、授業開始直前にこんなイタズラをしてくる人だとは思わなかつた。

「あの、あなたは」

「いったい何の用でしょうか？　更識先輩」

「ふふつ、ひ・み・つ。それより、急がないと織斑先生に怒られるよ」

「「え？」」

チエシヤ猫のような笑みを浮かべて更識先輩そう言い、俺も一夏も部屋の時計に目を向けると授業開始から3分が経過していおり、言訳の必要がないくらい遅刻していた。

「だあああつ！？　や、やばい！！　まずい！！」

「言ってる暇があつたらグラウンドに急ぐぞ一夏！！」

俺達が慌ててグラウンドに向かう頃には更識先輩の姿は霧のように消えていて、俺も一夏も織斑先生からのお説教が確定した瞬間だった。



俺達がグラウンドに到着した時には当然織斑先生が俺達を待っていて、遅刻の理由を聞いてきたので素直に理由　更識先輩との一件を話す。

「……遅刻の言い訳は以上か？」

あふれ出る怒気を隠そうともせずにそう言ってくる織斑先生は非常に怖い。

「はい。私的な理由で授業に遅れたのですから、どのような罰を受けても仕方ないと思っています」

どのような申し開きをしたとしても授業に遅れたことに変わりはないので、どんな罰をやられても仕方ないだろう。

「……できれば、穏便なヤツで頼みたいけど」

一夏は織斑先生から若干視線を外しながら小声でそう言つと、織斑先生が一夏を睨みつけてからこう言った。

「デュノア、ラピッド・スイッチの実演をしる。的はその馬鹿者共で構わん」

……きついと言えはきついだが、『フレキシブル偏向射撃の連続回避』なんていう無茶を言われただけまだマシと思っておこう。

その後しばらくはシャルロットのラピッド・スイッチの的役をやることになったが、6：4で若干一夏の方に弾雨が集中していた分ほんの少しだけ回避が楽だった。

それが済んでからは普通に授業を受けているとあつという間に放課後になり、一夏に機体整備の方法をレクチャーすると同時に、エネルギー効率の改善作業を行う事にした。その結果、ブーストや雪羅のエネルギー消費を15%ほどカットする事ができた。

ただ、整備室の使用時間ギリギリまで粘っていたので夕食を取るのが若干遅くなってしまった。

「一夏。学園祭絡みで俺達に関係する話があるんだが」

「学園祭で俺に関係する事？ 何なんだ？」

夕食を済ませてから、俺は一夏に明日から本格的な準備を始める学園祭に関する事で相談をする。

「実は夏季休暇の時から学園祭での出し物を少しずつ考えていたんだが、それについての意見が欲しいんだよ」

「そういうことなら構わないぜ。データ見せてくれ」

「予め言っておくが、クラスの女子が出てくるであろう意見を予想して考えた物だからな」

「？ わかった」

部屋に備え付けのPCに保存してある学園祭の出し物候補リストのファイルを呼び出し、一夏に見せる。

「……………なあ、アル。これ、マジか？」

長い沈黙をはさんだ後、一夏が恐る恐る俺に確認をしてくる。

「…………俺達のクラスのノリを考えると、それくらい出てきてもおかしくないだろ」

正直言つて俺も個人的には破棄したい意見がいくつかあるし、学園祭でやるべきではない公序良俗に反する物もいくつかあったりする。

「それにしたつて、俺達を売りにした出し物ばかりつてのはおかしいだろ」

呆れと恐れが混ざつた声でそう言ってくる一夏。8月の終わりがけから今まで、暇つぶしを兼ねて『学園祭の出し物でクラスの女子が出してくるであろう意見』を予想して書きとめておいたのだが、そのどれもが『俺達男子生徒を売りにした』出し物というのは、一夏としても納得しきれないのだろう。

「だよなあ。でも、他に出そうな意見つてあると思うか？」

「……………なさそうだな」

一夏は心底うんざりした表情でそう言うが、それは俺も同じだ。だが、女子達が出してきそうな物を予想すると俺達の人気にあやかつた物ばかりとなつてしまい、結果として今見ているような物ばかりになつてしまつていた。

「で、アルはこのデータを見せて俺に何の意見が欲しいんだよ？」

「この手の意見を完全封殺し、なおかつ出てくるであろう女子の要

望を満たせるような出し物って何があると思う？」

「そうだなあ」

俺達はそれから1時間近く様々な意見を交し合うが、どの意見も俺達の保身を優先した物かの外的外れに近い感覚の物ばかりになってしまい、決め手にかけるモノばかりだった。

「……不毛だし、もう止めにしておかないか？ 明日になれば実際の意見が出てくるだろうから、それで考えればいいだろ」

「……そうだな。革新的で俺達への心的被害が少ない意見が出ることを期待しよう」

一夏が先にギブアップとなり、俺もそれに賛成する。こうなったら明日の特別HRに賭けるしかないだろう。

そんな事を考えながら順番にシャワーを浴び、この日は就寝することにした。

### 38 新学期開始（後書き）

そんなわけで今回はここまで。次回は全校集会とクラスの出し物関係のお話になると思います。

しばらくの間原作焼き直し系のお話が続くと思いますが、少しずつ違いを出していきたいとは思いますが、よろしくお願いします。

### 39 メイド喫茶と生徒会長（前書き）

最新話です。今回は学園祭の出し物決定と報告関係のお話です。いくつかの部分は原作と同じなので大幅にカットしています。今まで描写をしていませんでしたが、夏休みにシャルロットとラウラは原作と同じ理由で@クルーズで1日バイトをしています。プールイベントと同じ日に起こった出来事だったので、描写のタイミングを完全に失っていました。なので、『シャルロットとラウラは夏休みにメイド喫茶で1日バイトを経験している』という前提でお読みください。

### 39 メイド喫茶と生徒会長

一夏と文化祭で行うクラスの出し物について話しあった翌日。朝のSHRと1限目の半分を使用して、今月中旬に開催される学園祭についての全校集会が行われた。

まだ全校集会が始まっていないこともあって、そこかしこで雑談を交わす声が混ざり合って非常にざわついているが、集会が開始されれば静かになるだろう。

「ただいまから全校集会を開始します。始めに、生徒会長から今年の学園祭について説明をさせていただきます」

生徒会役員の女子生徒らしき先輩が壇上に立ってそう言うと、ざわつきの声が引き潮のように消えていく。

「やあみんな。おはよう」

「!?!」

壇上で挨拶をしているのは更識先輩で、俺の隣にいた一夏が声をあげそうになっていた。

どうやら一夏は更識先輩が生徒会長だと知らなかったらしい。俺も夏休みに黛先輩から更識先輩の事を聞いていなければ驚いていただろうから、その気持ちはわからないでもないが。

「ふふっ」

更識先輩は一瞬俺達に視線を向けて笑みを浮かべると、自己紹介を





「静かに。学園祭では毎年書く部活動ごとの催し物を出し、それに対して投票を行って、上位組には部費に特別助成金が出る仕組みでした。しかし、今回はそれではつまらないと思い」

そこまで言つと更識先輩は扇子で俺達を指してこう言った。

「男子生徒二名を一位の部活に強制入部させましょう!」

更識先輩がそう言つと、再度雄叫びが上がると同時に、そこかしこで俺達を入部させるために意気込む声で騒がしくなる。

……俺も一夏もそんな事は一言も聞いていないのに周囲の女子は完全に火がついてしまい、ここで下手な事を言ったら大ブーイング間違いないなるだろう。

若干の怒りと共に理由の説明を求めて更識先輩を見上げる。

「あはっ」

何故か無邪気な笑顔と共にウィンクを返された。……しょうがないので、後で生徒会室に行つて理由を聞きだすことにしよう。

かくして当事者である俺と一夏が初耳&未承諾というのまま、学園祭は各部活動による男子生徒の争奪戦となつてしまった。

それから普通に授業を受けて言つて訪れた昼休み。俺も一夏も生徒会室へ行つて更識先輩に何故あんな事を言ったのか理由を聞きに行

こうとしたのだが、全校集会で発表された更識先輩の発言の裏付けを取ろうと大量の女子生徒が来たため身動きを取る事ができず、半ば公然の事実と化していた為、否定する事も出来ない状態になってしまった。

そんなことのある放課後。全学年・各クラス共に、学園祭での出し物を決めるための特別HRが開かれていた。

担任の織斑先生は今後の予定の調整などがあるのかHRが始まってすぐに職員室へ行き、これが終わった後で俺が報告する手はずになっている。その為、今は山田先生がクラスの片隅で俺達の話し合いを見ている状態だ。

俺はクラス代表なので意見の取りまとめやHRの進行をする必要があるのだが、当たってほしくない予想が当たってしまった。

(ホストクラブ、ツイスター、ポッキー遊び、王様ゲームetc…  
…予想どおりではあるけど、実現させようとする色々厳しいよなあ……)

何せ男子生徒は俺と一夏の二名しかいないのだから、圧倒的なまでに手が足りない。これらを採用した場合、クラス前に行列が並んで凄まじい量のクレームが発生するのは間違いないだろう。

「うん、却下。俺も一夏もある程度は協力するつもりではあるけど、今挙げられた候補の内いくつかは公序良俗的にも問題あるし、なにより女子の視点で見た場合どれも『男子とやらなきや意味がない』モノだ。」

そうなる間違いなく俺達2人だけが接客担当って事になる。ただ、ある程度はお客さんを入れないと意味がないからお客さん一人

あたりへの接客時間は極短い物にせざるをえない。そうなると最悪2時間待つて接客時間が5分以下とかになるよ？ 当然寄せられるクレームが凄まじいものになると思っけど、そこは何か対策を考えであるのか？」

中にはそれでもいいという剛の者もいるかもしれないが、そういった人物は少数派だろう。そうやって考えると、今挙げられている候補はどれも問題があると判断するしかないだろう。

「……………ぐっ！？」

俺から指摘をされて初めて気付いたらしく、反論しようとした女子達が一斉に押し黙ってしまった。

「俺達を看板にするのは構わないけど、俺達だけに負担がくる様な出し物はなしの方向にしてくれ。……他に何か意見がある人はいるか？」

「メイド喫茶はどうだ？」

何か意見がある人がいるか確認すると、ラウラがそう言ってきた。

「客受けはいいだろう。それに、飲食店は経費の回収が行える。確か、招待券制で外部からも入れるのだろう？ それなら休憩所としての需要もあるし、一夏やアルバートが接客に入ればかなりの売り上げが見込めれると思うが」

いつもと同じ淡々とした口調で本人のキャラにそぐわない発言を連発するが、その中で発せられた言葉の中にクラス的女子全員の食指が動きそうな物があった。

「……ボーデヴィツヒさん。織斑君やアルバート君が接客ってたけど、二人にもメイド服着せるの？」

田島さんが恐る恐るといった表情でラウラにとんでもない事を質問した。ラウラがそれをイエスと言ったら、本当に女装するハメになるかもしれない。……そうになったら何が何でも拒否しよう。

「そんなわけないだろう。執事服を着せて接客させるつもりだ」

発案者であるラウラがそう言った瞬間、沈黙に支配されていた教室内が一気に騒がしくなる。

「織斑君とアルバート君の執事！！ いい！！」

「それでそれで！！」

「メイド服どうする！？ 私、演劇部衣装係だから縫えるけど！！」

騒がしくなりながら、既に『俺と一夏の執事&メイド喫茶』という方向性は固まったらしく、衣装やメニューをどうするかで話が盛り上がる。

「メイド服ならツテがある。執事服も含めて貸してもらえるか聞いてみよう」

ラウラがまたも意外な事をいったので、俺を含めたクラス全体が目を丸くしてラウラを呆然と見る。

「ごほん。シャルロットが、な」

その眼差しを受けて居心地の悪さを感じたラウラは一つ咳払いをし、それからそう言った。顔を僅かに赤らめており、注目されたのが照れ

くさかったようだ。

「え、えっと、ラウラ？ それって、先月の……………？」  
「うむ」

シャルロットが困惑した表情でラウラに問いかけると、ラウラは簡潔に一言肯定した。

「き、訊いてみるだけ訊いてみるけど、無理でも怒らないでね」  
「……………怒りませんとも！」「……………」

シャルロットが不安げにそう告げるが、テンションが上がりきっている事もあってあっさり肯定された。

こうして俺達1年1組の出し物はメイド喫茶改め『ご奉仕喫茶』に決定し、そのテンションのまま各種役割を決めていくことになった。

そうして1時間も話しあっている内に『ご奉仕喫茶』での各員の役割 俺と一夏は当然ながら接客係だ やどういったメニューにするかなどの細かな部分も決まっていたのだが、決まるのが難航したものもいくつか存在する。

その一つが『俺と一夏が接客中に行くゲームでお客様さんが勝った場合の景品をどうするか』だ。

最初は『ゲームを担当した執事 俺が一夏のどちらかを予め選択してもらおう とゲームの勝者がツーショットで写真を撮る』というものだったが、『彼女である自分ですらした事のないツーショット写真が景品なのは気にいらぬ』という理由でセシリアが猛反対 俺もプライベートでセシリア以外とツーショット撮影されるつもり

はないので反対したものの、クラスの皆から『ならば他に景品として相応しいものがあるのか』と言われてしまった。

俺もセシリアもそこを言われると辛いものがあつたが、少し考えた後『材料費がかさむ事になるが、そこそこ多めの量の手製の焼き菓子詰め合わせを渡す』事を提示したところ、意外とウケが良かったので、俺に勝った場合の景品はそちらが採用された。

一夏の場合は表面上特定の相手がいないこともあつて『勝者とのツォーショット撮影』案がそのまま景品として採用となり、他にもいくつか後回しにしていた懸案事項を話しあつた。

一通りの役割分担が決まつたので俺は織斑先生への報告を行う為職員室へ向かい、一夏も自身の特殊極まりない立場 専用機持ちにも拘らず、特定の企業・国家へ帰属していない に関係する事で先生に呼び出され、俺達は職員室へと向かうことになった。

一夏にお互いの用事が終わつたら職員室前で合流する旨を伝え、俺は織斑先生へ学園祭で行う出し物の詳細と、ラウラの意見を基にした執事&メイド喫茶だと織斑先生に報告 報告を聞き、自分がドイツで訓練を施していた時のラウラの態度と今現在のギャップが凄まじかつたらしく、珍しく織斑先生が爆笑していた。普段笑わない織斑先生はその姿に職員室にいた先生達はきよんとした表情をしていたのが非常に印象的だった し終えた。

使用する機材や食材に関する申請書類の受け取りなども済ませたので、一夏を待つ為に職員室を出てすぐのところに移動すると、1人

の女子生徒が待ち構えていた。

「やあ」

「……………更識先輩、何か用ですか？」

どういう意図があるのか更識先輩がにこやかな笑顔で待ち構えていた。授業の遅刻の原因であり、俺達の承認なしに景品に仕立て上げれくれた事もあって、必要以上に警戒してしまっても仕方がないだろう。

「ん？ どうして警戒しているのかな？」

「俺達にした行動を省み<sup>かえり</sup>てくれればわかると思いますが？」

第一印象からあまりいい印象を持っていなかったのも、どうしても言葉に棘を含んでしまう。

「ああ、最初の出会いでインパクトがないと、忘れられると思って

あっさりとその答えを返してきた更識先輩の表情は涼しげな顔で俺を眺めていて、その余裕がどこから来るのか不思議に思った。

「あまりインパクトが大きすぎても問題があるのでは？」

「あら、手厳しい。妹への態度とは大違いね」

「……………黛先輩から話だけは聞いていましたが、やっぱり簪さんのお姉さんですか」

それでもこんな常識はずれの行動を取るとは聞いていなかったし、今まで取られた行動がかなりすごかったのもどうしても警戒してしまっ

「ええ。簪ちゃんの問題解決を手助けしてくれたことは純粹に感謝しているわ。ありがとう」

そう言つて更識先輩は今までの話し相手をからかうような表情ではなく、『妹を心配する姉』として真摯な表情で感謝の言葉を告げてきた。

「……………感謝の言葉は素直に受け取っておくと思います。俺個人としては、何故あんな事をしたのか理由の説明を求めたいところですが」

「アル、待たせた……………な……………」

俺が更識先輩へ理由の説明を求めた瞬間に一夏も職員室から出てきたが、同時に更識先輩を発見した事でその表情が驚きに染まる。

「やあ」

「……………何か？」

更識先輩が一夏に挨拶をするが、一夏も更識先輩には振り回されたので自然と警戒する。

「アル、とつととアリーナ行こうぜ。ラウラも待たせてるし、射撃について色々教えてくれ」

「あら、つれない。それに、ISの自主訓練をするなら私が2人まとめてコーチをしてあげてもいいけど？」

「いや、俺はコーチがいっぱいいるんで」

既に一夏には俺・セシリア・篝さん・鈴さん・シャルロット・ラウラと6人のコーチがついているので、教わる側としても先導が多すぎるだろう。



「俺も遠慮しておきます。基礎フィジカル体力面や直接的な操縦方法はラウラに鍛えられてますし、ビットのコントロールについてもセシリアに教えてもらってますから」

「うーん。そう言わずに。」

「覚悟おおおっ!!」

どういう意図があるのかは不明だが、更識先輩が俺達のコーチになるかと説得を開始したところで、俺達の進行方向から粉塵をあげる勢いで女子生徒が竹刀片手に俺たち3人に襲い掛かってきた。

「迷いのない踏み込みは素晴らしいのだけど、もう少し待っていてほしかったかな？」

更識先輩が前に出て襲撃してきた女子生徒と対峙すると、どこからか扇子を取り出して竹刀の一撃を受け流し、左手の手刀で襲撃者の意識を刈り取った。

そこから更識先輩は続けて起こった『弓道部に所属しているらしい女子生徒が行った和弓での狙撃』と『ボクシング部に所属する女子生徒の不意打ち』の二つをあっさりと返り討ちにしてしまい、その戦闘能力の高さに俺達は驚かされた。

「……で、これはどういう状況なんですか？」

「さすがにいきなりすぎて理解が追いつかないんですが」

「うん？ 見たとおりだよ。か弱い私は常に危機キケンに晒さらされているので、2人に騎士になってほしいの」

絶対に嘘だ。なぜなら

「更識先輩、国家代表でしょう。お姫様より弱い騎士を2人も連れてたら逆に足手まといになると思うんですけど？」

「あら、アルバート・ウィルソン君は知ってたのね」

「アル、それ本当か？」

俺が嘘を指摘すると、更識先輩は楽しそうに笑いながらそう言うてくるし、先輩が手際よく襲撃者を撃退した姿を見て呆然としていた一夏も驚きの表情で俺に質問をしてくる。

「ああ。更識先輩はロシアの国家代表だよ。後でロシアの国家代表を調べてみればわかる。……もう一度聞きます、何故こんな状況になったんですか？」

「まあ、簡単に説明するとIS学園の生徒会長、即ち『全ての生徒の長たる存在は最強であれ』と決まっすなわていて、いつでも襲っていいのさ。そして勝ったなら、その者が生徒会長になる」

俺も一夏も更識先輩のその言葉を聞いて、驚かされると同時にその無茶苦茶さに呆れるしかない。

「はあ……、無茶苦茶ですね」

「つまり、更識先輩が全校集会で俺達の強制入部とか言ったから、1位になれそうにない部の人達が先輩を負かせて失脚させ、俺達の景品化をキャンセル。おまけで自分達の部活に入部させようとか考えたんですかね？」

「まあ、そんなところでしょうね。その事で二人に話があるから、一度生徒会室に来てちょうだい。お茶くらいなら出すわよ」

どうやら俺達の承認を得ずに景品にした事情を説明してくれるらしい。

「そういうことなら一緒にしましょう。まあ、生徒会室に向かう前にセシリア達へ一度連絡を入れたいところですが」

「……どうしてあんなことをしたのか説明してくれるなら、俺も行きませす」

「織斑一夏君もアルバート・ウィルソン君も素直でよろしい。そういう子はおねーさん好きだよ」

俺達が素直に同行することを伝えると、更識先輩はそう言ってきた。

「い、一夏でいいですよ」

「俺も名前で呼んでもらって構いません」

「そうか。では私も楯無と呼んでもらおうかな。たっちゃんでも可」

そんな事を言う楯無会長の表情はイタズラが成功した子供のような顔で、俺も一夏も上手い具合に誘導された事を表していたが、その手際の良さを省みると到底かないそうにないと思った。

俺達3人が生徒会室へ向かうと、そこには布仏さんと見知らぬ上級生　リボンの色が赤かったので3年生だ　の先輩がいたので自己紹介をもらったところ、布仏さんのお姉さんだった。

虚先輩うつぽ　苗字が同じ布仏なので、先輩は名前で呼ばせてもらおう事にした　が俺と一夏に紅茶とケーキを出してくれたことで話し合いの準備が整い、楯無会長が全校集会で起こした行動理由の説明を始めてくれた。

「一応、最初から説明するわね。一夏君とアルバート君が部活動に入部していないことで色々と苦情が寄せられていてね。生徒会はキミ達をどこかに入部させないとまずいことになっちゃったのよ」

「それで学園祭の投票決戦ですか」

「俺も一夏も自分の訓練で精一杯で、正直部活動をやっている余裕は無いですし、正直言って女性ばかりの部活に男が紛れ込むのは色々とまずいと思うんですが」

普通に部活へ参加するだけでも、男子の俺達が参加するとなると事前に色々と準備する必要があるだろう。特に運動部では更衣室やシャワー使用の問題など色々と問題があるだろうし、時間を間違えて着替え中に更衣室に入ってしまったら目も当てられない。

似たような理由でマネージャー業務などもってのほかだし、部活動で俺達がやれること自体が少ない気がする。

「んー、そこは入部する事になる部活の部長さんと話し合いの機会を設けるということで何とかしましょう。それで2人には不愉快な思いをさせてしまったお詫びとして、これから学園祭の間まで私が特別に鍛えてあげましょう。ISも、生身もね」

「遠慮します」

「……………」

更識先輩の提案を一夏は即座に断り、俺はその提案に沈黙を返す。

「一夏君、そう言わずに。アルバート君も答えを聞かせてくれない？」

楯無会長が返事を求めてくるので、俺はこう言っしかない。

「……………返事をする前に質問があります。何故、このタイミングなん

ですか？ 俺や一夏への指導を申し出るなら、1学期が始まってすぐが時期としては最良のはずです。でも、楯無会長は1学期の間は俺達に全く関わってこなかった。それどころか2学期が始まってすぐという今の中途半端な時期での指導を申し出た。理由を教えてください。

「ん？ 理由は簡単。君達2人が弱いからよ。もつと言うと、私が想定していたよりも1学期の間に君達が成長しなかったから、ここでテコ入れをしようと思ってね」

「……………それなりには弱くないつもりですが」

楯無会長の理由を聞き、声に怒りを潜ませて一夏が反論をする。……しかし、想定していたより成長しなかったね。

「うつん、弱いよ。無茶苦茶弱い。だから、ちょっとでもマシになるように私が鍛えてあげようというお話」

「じゃあ」

「落ち着け、一夏。楯無会長のペースに乗せられてるぞ」

そこまで言われて一夏は我慢の限界を超えたらしく、席を立ち上がって楯無会長に何かを言おうとしたので、その肩を掴んで無理矢理席につかせる。

「だが、アル！！ 楯無さんは」

「お前の怒りももつともだし、あれだけボロクソに言われて頭にくるのもわかる。実際俺も多少は頭にきてるからな」

だが、会長は意識をしてか無意識かは知らないが、ヒントをくれた。怒りをぶつけるのはその後でもいいだろう。

「その割には随分と冷静ね」

「ええ。どうやら楯無会長には『学園祭までに自分が想定するレベルまで俺達に強くなってもらわなければならぬ理由』があるみたいですからね。ここで怒って会長に無謀な勝負を挑み、勝負に負けて強制的に指導されると、会長の知る事情全部を聞かせてもらって指導を受けるのなら後者の方が『いずれ俺達の元に来るであろう手練れの襲撃者』に対する精神的な心構えも出来ると判断しました」

「『いずれ君達に来る手練れの襲撃者』…ね。どうしてそう思ったのか、理由を聞かせてもらっていいかしら？」

そう言ってきた楯無会長の瞳は今まで見せた事のない冷たい氷のようだった。

「ええ。会長は初めに『学園祭までの間俺達を鍛える』と言い、その理由を『自分が想定していたよりも1学期の間に俺達が成長しなかった為のテコ入れ』と言いましたね。後者の言葉は裏を返せば『ある程度俺達2人が強くなっていなければ困る事態が発生する』事を意味すると読み取る事もできますし、前者の言葉で『その事件は遅くとも学園祭までに発生する可能性が高い事を楯無会長は知っている』と判断しました。

で、『生徒会長が困る俺達に関係する厄介事は何か』を考えると、思い浮かぶのは2つ。『男性IS操縦者の拉致・監禁』か、『第4世代技術である展開装甲を使用した俺と一夏の専用機の強奪』のどちらかと判断しました。そのどちらも敵からすれば『俺達を襲撃する』必要がある。そこまで考えると、『楯無会長は何らかの手段で俺達が襲撃される可能性を知り、あえてそれを伏せて俺達を鍛えようとしている』となります。

しかも、楯無会長は国家代表ですから、その襲撃者は『現在の俺や一夏では到底太刀打ちできない操縦技量の差が存在する、国家代表に匹敵する手練れ』と考えたんですが。……どうでしょう？」

これで外れていたら、凄まじくマヌケだ。

「……………残念!! 私には純粋に君たちの操縦技量の低さを嘆いているだけよ。アルバート君、ちょっと自意識過剰よ?」

扇子には大きく残念の文字が達筆に書かれていた。……………うん、恥ずかしい。

「……………わかりました。そういうことなら俺と1対1で勝負してください。それで負けたらそちらの提案を受けましょう」

「俺も勝負です。アルと同じく、俺が負けたら従います」

「ええ。それじゃあ行きましょうか」

そう言って、俺・一夏・楯無会長の3人で柔道部などが主に使用している畳道場へ向かうことにするのだった。

### 39 メイド喫茶と生徒会長（後書き）

そんなわけで、久々にアルバートの推察シーンという名の長台詞をやらせました。

ラウラとシャルロットの描写不足については完全に自分の責任です。申し訳ありませんでした。

今回は楯無先輩との生身でのバトルになります。



39・5 幕間 楯無の思惑 (前書き)

1日2回更新になります。今回は幕間の更新です。本編にはあまり関係ありませんので、読み飛ばしてもらっても構いません。

### 39・5 幕間 楯無の思惑

生徒会室を出発し、アルバート・一夏・楯無の3人で畳道場へと向かった。

時間としては放課後なので本来ならば柔道部などが練習を行っている時間帯だったが、楯無が告げた『学園祭各部対抗男子生徒争奪戦』の催し物を決めるため、どこの部活も軒並み部室棟にある各部の部室で全部員が集まっている事もあって、畳道場にいるのは3人だけだった。

すぐに勝負を始めるためお互い別々の着替える事にしたのだが、楯無は更衣室に入ると大きく一度深呼吸をする。

（何とかこちらのペースに持ち込むことは出来たけど、少しでも対応を間違えていたら本当に全て教える事になっていたかもしれないわね……）

制服を脱ぎ、スポーツバックの中に用意しておいた胴着と袴に袖を通しながら、楯無は本来のプランと現状の差異を頭の中で反芻する。

（本来なら彼らを同時にけな貶して怒らせ、その怒りが収まらない内に2人を負かせてのコーチをするつもりだったけど、かなり予定が狂っちゃったわね。確かにあれだけの思考能力を持っているなら織斑先生が福音との戦闘時に彼を作戦立案に協力させ、前線指揮を任せたいのも頷けるわ）

2ヶ月前に発生した『シルバリオ・ゴスベル銀の福音暴走事件』についてはアメリカ・イスラエル両国では最重要機密事項とされ、IS学園内でも緘口令が

敷かれているが、そこは『対暗部用暗部』という特殊極まりない家柄の力を使い、全ての情報を入手している。

その報告書の中に『アルバート・ウィルソンが作戦立案に協力し、不測の事態に対しての前線指揮を任された』という記述があった時には今とは別のベクトルで驚かされた。

突如として現れた男性IS操縦者と言う名の特異ケースは性別の違いさえ除外してしまえば『一般人がIS学園へ入学してきた事』と大差がなく、それぞれの国の都合でアルバートが代表候補生となっていたため、つい先程まで楯無はアルバートの事を『多少マシな事前教育を受けてきた勤勉な新生』と認識していた。

そんな生徒に作戦立案への協力を要請し、前線指揮を任せたといい織斑先生の行動は楯無には理解できず、蛮勇を通り越して無謀の域だと思つたし、同じ事をするならば代表候補生のラウラ・ボーデヴィツヒの方が経歴としては適任ではないかといつ先程まで思っていた。

だが、今なら織斑先生の采配の妙を理解せざるを得なかった。

（私の言動と行動だけでほぼ正確な情報を推察しきつてみせたあの洞察力があれば、確かに作戦立案に関わる事も前線での指揮を取る事も十分に可能ね。簪ちゃんを含めた1年生の専用機持ちとも仲がいいし、それぞれの機体特製も理解しているでしょう。あの作戦、何割が彼の案なのかしら？）

ISの操縦技量に関してはもう1人の男性IS操縦者である織斑一夏と大差ないが、発想力や推理力と言った思考能力全般は一般生徒を含めた1年生の中で間違いなくトップだと楯無は判断する。

何せアルバートが述べた推察は楯無の持っている情報　男性IS  
操縦者を狙ってとある組織が動き出した事　と大差なく、僅かな  
ヒントでその事実にとどり着いた事は驚嘆に値する。

（確かに彼の言うとおり、全ての事実を話せば君も一夏君も黙って  
私のコーチを受ける事を了承してくれるでしょうし、それは私とし  
ても大いに助かる。そこは否定しないわ。

でもね、私は『対暗部用暗部』更識家の当主、十七代目楯無であ  
ると同時に、君たち生徒の長なの。人気者の君達が普段と生活リズ  
ムを変え、普段以上に真剣に訓練を行い、常に緊張感を持って生活  
している事は間違いなく他の生徒へ不信感を与える。

そんな状態で本当に襲撃者が来たら、パニックが起こるのは必定  
だし、君たちの評判も確実に悪影響が出る。それは生徒会長として  
許容できない。

ごめんなさいね、アルバート君。確かに君の言う案は素晴らしい  
ものである事は否定しないし、もしも男性IS操縦者が類稀な思考  
能力を持つ君1人だったら隠し通すことも十分に可能だったんでし  
ょうね）

だが、もう1人の男性IS操縦者である織斑一夏が存在がそれを許  
さない。彼はどう考えても腹芸が出来るタイプではないし、彼の今  
までの家庭環境の影響もあって『何かを守ろうとする』事に対して  
は人一倍敏感だ。

その彼に襲撃者の来訪を伝えた場合、普段の行動に違和感が発生す  
る可能性が高く、もしかしたら他の生徒達を守るために望んで人気  
のない場所に移動し、襲撃者を炙りだすくらいの事をやりかねない。

そうなったら最悪の場合彼は命を落とすことになってしまう。

それは国際情勢としても、更識家の当主としても、IS学園の生徒会長としても到底許容できる物ではない。

むしろそういった危険分子の存在を考慮して普段の生活を送ることが出来る可能性を持つアルバートの方が同じ年代としてどこかおかしいのかもしれない。

（だから、たとえ正確に情報を推察できたとしても今回の件が全て済むまで教える事はできないし、これから何度も起こるかもしれない。そうなった時の為にもあなた達には強くなってもらわなきゃいけない。だから　　）

そうやってアルバートと一夏の事を考えながらも手は動かしていたので着替えは終わり、姿見で自分の格好を一度確認してから決意を口にする。

「手加減は、抜きでいかせてもらっわ」

自分に言い聞かせるようにそう呟き、気を引き締めて楯無は道場へと向かうのだった。

39・5 幕間 楯無の思惑 (後書き)

そんなわけで楯無さんの思惑説明でした。

前回は楯無さんが素直に真実を伝えなかつた理由の説明でもありません。

この作品では一夏だけではなくアルバートも男性IS操縦者なので、2人とも学園内ではかなりの有名人です。そして、楯無さんは一夏とアルバートだけではなく一般生徒へ配慮した結果『真実を伝えてコーチをする』よりも『真実を伏せてコーチをする』方がよいと判断しました。

あくまでこの作品内ではそう考えただけなので、原作でもこう思っ  
て行動したとは限りませんのであしからず

#### 40 勝負とその結果(前書き)

最新話です。内容としてはVS楯無さん(生身)のお話になります。

#### 40 勝負とその結果

畳道場に併設されている更衣室は本来ならば人がいるはずの時間帯だったが、今頃どの部活も学園祭の催し物を決める為に部室で話し合いをしているだろうから、勝負を行う場所に併設されているこの場所を使うことが出来るのは移動の手間をかなり省く事が出来る。

「一夏、わかってると思うが手を抜いたりするなよ。楯無会長の實力は未知数だが、あの人は国家代表だ。間違いない今俺達より強い」

「……ああ、それはわかってるさ。最初から全力で行くつもりだよ」  
お互いに胴着と袴に着替えながら、一夏に一言忠告しておく。

幸いといっていいのか、今日の授業で武術の実習訓練があったので胴着も袴もバツクの中に入れてあった。

「剣と同じように昔と比べれば錆び付いてるだろうけど、勝つつもりでやるさ。アルこそ大丈夫なのか？」

「なめんな。イギリスに引越しても一通りの訓練は続けていたから、少なくとも技能は錆び付いていない」

それでも国家代表である楯無会長を相手に同じ条件で勝てる確率は5%もあればいい方だろう。

「ならいいさ。……しかし、どういった条件で戦うんだ？」

「知らん。楯無会長の采配にもよるが、今のところ言えそうなのはルール上はある程度ハンデがつくくらいだな」



何せ生身での戦いとはいえ国家代表と初心者に毛が生えた程度の操縦者が戦うのだから、ある程度勝負を公平にするためにも何らかのハンデをつけてもらわないとやってられない。

「まあ、なんにしても頑張ろうぜ」

そんな雑談をしながら俺達は着替えを済ませ、部活動で更衣室に入ってくるであろう女子生徒さん達への配慮として更衣室の扉に俺達の荷物があるメモを貼り付けておく。

「お待たせしました、楯無会長」

「勝負の方法はどうするんですか？ 楯無先輩」

「方法としては1対1で、私を床に倒せたら君達の勝ち。君達が戦闘続行不能になったら私の勝ちということ」

笑みを浮かべたまま楯無会長から提示された勝利条件は俺達に有利に設定された破格のものだったが、同時に楯無会長の自信の表れでもあるようだった。

「……随分と自信があるみたいですね？ それは暗に『俺達程度では会長を床に倒せない』と言ってるんですか？」

「あまりなめないでほしいですね」

「あら、ハンデとしてはこれくらいでちょうどいいでしょう？ 国家代表の実力、見せてあげるわ。どちらから戦うのかしら？」

そう言って笑顔のまま構えを取る楯無会長。

「俺が先に行く。一夏は待機していてくれ」

「……わかった。負けるなよ、アル」

そう言つて一夏は壁際へ移動し、俺は構えを取つていつでも始められるようにする。

幸いと言つていいのか篠ノ之道場では刀が折れた時の事を想定して素手での武術を教えていたので、俺も一夏も普通の女子生徒よりは武術経験がある。

(……わかつちやいたけど、隙がないな)

それだけに楯無会長の構えに隙がないことに否応なく気付かされ、『こちらから攻める』方法が思い浮かばなかった。

「ん？ 来ないの？ それじゃあ私から 行くよ」

どんっ、という踏み込みの音と共に俺達の目の前にすり足で急接近してきた。

「っ!？」

こちらの意識の空白を利用するように一瞬で間合いをつめてきた方法に関しては心当たりがあった。

人間というのは様々なリズムを持つ。例を挙げるなら心臓の鼓動や呼吸のタイミングといった具合に、身体は意識せずとも何らかのリズムを刻んでおり、その無意識下でのリズムは個人個人で違うリズムを奏でている。

武術の技の一つにそういつた個人が持つリズムを意図的に調整して相手の攻め手を崩したり、攻撃のリズムそのものをコントロールする方法がある。

前者を『打ち拍子』、後者を『当て拍子』というのだが、その二つの上に『無拍子』と呼ばれる技法が存在する。

これは無意識下での呼吸のリズムや各々の行動に伴う意識の空白を意図的に利用する技術なのだが、当然これをやるには相手の無意識下でのリズムを読み取る必要がある。

普通ならばある程度時間を用いて相手のリズムを読み取り、把握する事ができてから使用可能な技術であり、初見の一撃目から使うのは至難の業だろう。

だが、楯無会長はそれをあっさりとやってのけた。

「このっ！！」

踏み込みの時間すら惜しく思い、威力の籠らない掌底を楯無会長の顔面目掛けて放つ。

「残念」

だが俺の放った掌底は楯無会長が振りかざした右腕に絡め取られ、肘先が描く螺旋の動きに合わせる様にしてあらぬ方向に受け流されて体勢を崩される。

「まずは一回」

その言葉と同時に腹部へ二度衝撃が襲い掛かる。

「しっ！っ！？」

その衝撃で思い切り吹き飛ばされ、受身を取る暇もなく背中から畳みに叩きつけられると同時に意識が飛びかけ、おまけに受けたダメージの影響で胃の内容物を吐きかける。

「まだやる？」

「……ごほつ、当然…ですよ」

吐きかけた物を無理矢理飲み込み、その酸っぱさで意識を繋ぎとめ、咳き込みながら続闘を伝える。

「それは重畳」

楯無会長は先程と変わらずニコニコと笑みを浮かべたままで、先程の攻防を繰り返し広げた後だとその表情が薄ら寒い物に感じてしまう。

「今度は、こちらから行きます」

俺は一度だけ深く呼吸をした後、意識を冷たく低く集中する。

(撃ち…倒す!!!)

対戦相手の『静』を崩壊させる『動』の攻め 昔何度か偶然発動させ、最近やっと形だけとはいえ任意に発動させる事ができるようになった篠ノ之流の技、相手の一拍子目より早く仕掛ける『零拍子』で楯無会長に接近する。

「!!!」

その早さに驚いた楯無会長が距離を合わせるために半歩下がる。

(取った!!)

そう思いながら身体を動かそうとした刹那、楯無会長が肩・肘といった間接に軽く掌打を打ち込んでくる。その衝撃で反射的に間接が強ばり、強制的に動きを止められてしまった。

「がはっ!!」

おまけとばかりに両肺に双掌打を叩き込まれ、強制的に肺の空気を排出させられて一瞬だけ意識が飛びかける。

「足元ご注意」

ついでに背中から思い切り畳に倒されてしまう。しかも、投げ飛ばす時に指の『貫き』で間接数ヶ所を攻撃され、身体の節々が軽い麻痺状態になっていた。

「これで2回。まだ続ける？」

「まだ、余裕ですよ。楯無会長こそ、油断していると痛い目見ますよ」  
麻痺した身体を無理やり起こし、構えを取る。

「ん。がんばる男の子って素敵よ」

「そりゃどうも」

そうして戦闘を再開したのだが、その後2度床に叩きつけられた事で身体の方がダメージに耐えられる限界を超えて気絶してしまった。

もともと、俺としては一夏に楯無会長がどういった技を使うのかわ見せるのが目的だったので問題ない。ただ、一夏の腕の錆び付きが

どの程度なのか確認していないのが不安ではあったが、何とかなるだろう。

当然気絶した時点で戦闘不能扱いとなり俺の負けが決定。楯無会長の指導を受ける事が確定した。

「~~~~~」

近くから聞こえてくる鼻歌を聴きながら、俺は次第に意識を取り戻していった。

「うっ……」

眩しさに顔をしかめると、ちょうどよく光が遮られた。

「目を覚まされたようですね、アル」

「セシ……リア？ どうしたんだ？」

何故かセシリアの顔が間近に迫っていた。

「どうした？ じゃありませんわ！！ いつまでたつてもアリーナに来ないから心配になって探してみれば、布仏さんから生徒会長と勝負をするために道場に行ったというではありませんか！！ 遅れるようなら一言連絡してくれてもよろしいのではなくて！？

それと、どういう経緯で勝負をする事になったかを後で聞かせていただきますからね！！」

それこそ俺から顔を動かすだけでキスが出来るのではないかと思えるほどに顔を近づけながら、セシリアは怒った様子でそう言った。

「ああ、それは純粹に俺が悪かった。ところでセシリア、今の体勢つてまさか……」

「ひざまくらよ。彼女さんにもらってるんだから、嬉しいんじゃないの？」

もしやと思つてセシリアに何をしているのか問いかけてみると、近くにいるらしい楯無会長がそう言ってきた。………先程からいい匂いと共に頭の後ろに柔らかい何かがあると思つていたが、やはりひざまくらだったようだ。

「え、えーつと……ありがとな、セシリア」

顔が赤くなるのを自覚しつつ、恥ずかしさからセシリアにお礼を言つて身体を起こす。

「かなりのダメージがあるようですから、最低でも一夏さんが目を覚ますまでこうしていてください」

だが、セシリアの両手が俺の肩を押さえたので身体を起こす事ができず、再度膝枕の状態にさせられた。

「ここは……保健室か？」

「ええ、部活棟の1階にある保健室ですわ。わたくしが道場に着いた時にはアルも一夏さんも気絶されていたので、会長と一緒にここまで運びましたの」

「苦労させたみたいだな、セシリア。重かつただろ」

「それなりに鍛えてますから、心配には及びませんわ」

そうしてセシリアが膝枕してくれる事に感謝しながら、普通に動く事が出来るようになるまで回復するのを待つことにする。

「それで、アル。何故会長と勝負をすることになったのか説明してもらってよろしいかしら？」

20分ほどして身体の痺れも殆どなくなった頃、セシリアが俺が無会長と勝負することになった理由を聞いてくる。

「ああ。それは今から説明するよ。膝枕、ありがとな。」

名残惜しいが膝枕から身体を起こしてセシリアに向き直ると、勝負のいきさつである楯無会長からの挑発とそれに伴う俺の考察、楯無会長の返答についてを説明していく。

「……ってわけで1対1で勝負する事になって、それで負けたから学園祭までの間楯無会長がコーチにつくことになったんだよ」

「……なるほど、事情は理解しましたわ。更識会長、一つ質問をさせていただいてもよろしいですか？」

一通りの事情を説明し終わると、セシリアが楯無会長へ声をかける。

「私の事は楯無でいいわ、セシリアちゃん。……それで、質問というのは何？」

「わたくしが聞きたいのはアルの考察についてですわ。会長はアルの考察を的外れと仰やじつたようですが、それは本当ですか？ 何かしらの理由があつてそう答えたわけではなく、アルの考えが本当に間違っていたからそう返事をした。それで間違いないのですね？」



「ええ。間違いないわ」

セシリアが楯無会長を見ながらそう問いかけると、会長もセシリアに目線を合わせてすぐに答えを返してきた。

「……わかりましたわ。では、訓練の際にわたくしも一緒にさせてよろしいですか？ 今までアルや一夏さんには様々な事を教えてきましたので、色々とお手伝いできると思いますが」

「そうね。お願いしようかしら」

楯無会長からの返事を聞き、セシリアが俺達の訓練への協力を申し出ると会長はあっさり了承した。

「う……っ」

それと同時に一夏も目を覚まし、少し遅れてラウラが保健室へとやってきた。

ラウラは保健室へやってくるとすぐに怒りをあらわにして一夏に襲い掛かるつもりだったが、楯無会長があつという間に鎮圧して俺達5人は自主訓練をするために第3アリーナへと向かうことにするのだった。

途中で着替えを済ませてから第3アリーナのアリーナ・ステージに到着すると、ピットや観客席へ移動する為の階段付近にISスーツ姿のシャルロットがいた。

「あれ？ 一夏、今日は第4アリーナでラウラと一緒に射撃訓練するんじゃないの？ それに……」

予定と違うアリーナに来た事を不思議に思いながらシャルロットが俺達ひとりひとり視線をめぐらせていき、楯無会長のところで視線の移動が止まり一夏に向かってこう言った。

「どうして生徒会長がいるの？」

今まで俺達とは全く接点のなかった人物が突然現れたので、シャルロットの疑問はもつともだ。

「そのこと？ 私はこれから2人のコーチをするから、今後也會う機会があるわね」

「え？ どういうこと？」

「一夏、貴様……!!」

さらりと楯無会長が爆弾発言を告げ、それを聞いたシャルロットとラウラが一夏に詰め寄りながら事情の説明を求めた。

「ぎゃあっ!! 待て待て!! これは、その、勝負の結果なんだ

!! うん!!」

「負けたら言いなりっていう、ね」

「正確には俺達の操縦技量の低さを嘆いた楯無会長と格闘戦で1対1の勝負をして、それで負けたら会長のコーチを受けるっていう条件だけだな。……結果としては俺も一夏も負けたから、会長のコーチを受ける事になったんだよ」

一夏が若干焦りながら要点だけを伝え、そこに楯無会長が微笑を浮かべたままシャルロットとラウラが誤解するような発言をしたので、

勝負するにいたった理由とその結果を伝えておく。

「そ、そうなんだ……」

「……そういうことなら仕方あるまい」

シャルロットもラウラも納得しきっていないものの事情は理解してくれたようだ。

「じゃあ、まずは一夏君から始めましょうか。最初は経験者の真似と技量の再確認を兼ねて、アルバート君とセシリアちゃんに『シューター・フロー』で円環状飛翔サークル・ロンドをやってもらいましょうか」

「了解」

「射撃系の基本動作ですから、射撃能力を得たばかりの一夏さんにはもってこいですわね」

「ええ。射撃能力で重要なのは面制圧能力だけど、連射ができない大出力荷電粒子砲はどちらかといえば一撃必殺の突破力を持つスナイパーライフルに近い。けど一夏君は射撃武装を得たばかりでその扱いに慣れていない。だから、あえて」

そこまで言われれば楯無会長が何を考えているかは察しがつく。

「近距離でぶち込むってわけですか。まあ、射撃武装を得たばかりならそっちの方が当てやすいですね」

「正解。それじゃあ早速お願いしようかしら」

扇子を勢いよく開いて楯無会長がそう言うってくる。『残念』と達筆で書かれていたはずの扇子は達筆で『見事』と書かれていて、いつの間にか交換されていた。

楯無会長が扇子を交換したタイミングを考えつつ、俺もセシリアも

「一夏達からそれなりに距離をとってから自分の機体を戦闘状態へ移行させて向かい合う。」

「二人の準備も出来たみたいだから、しっかり見ていてね」

楯無会長は手を叩いて一夏達の気をひきつけてそう言う姿をハイパーセンサーで確認しながらお互いの射撃武装を展開し、開放回線オープン・チャンネルでセシリアに話しかける。

「じゃあ、始めます」

「一夏さん、しっかり見ていてくださいね」

慣性制御装置慣性制御装置 P I C をマニュアル操作モードに変更してからお互い右方向に旋回し、それぞれの砲口を向け合ったまま壁に背を向けて円軌道を描きながら飛翔し、相対速度を同期させる。

「始めるぞ、セシリア」

「構いませんわ」

そこからお互い徐々にスラスタスラスタ出力を上げながら射撃を開始し、不定期な加速を行ってセシリアからの射撃を回避しながら自分からも射撃を返し、減速せずに円軌道を行うスピードを速めていく。

「上手くなりましたわね、アル」

「教官二人が優秀だからな。これくらい出来なきゃまずいだろ」

射撃の激しさを上げていきながら話をしつつ、お互いに射撃の回避と円軌道飛行のスピードを上げていく。この訓練はお互いの相対速度がつりあっていないといけないので、ブルー・ティアーズの最高速度ギリギリまでそれを続ける。

「2人ともありがとう。止まってちょうだい」

そうして訓練を続けていると楯無会長から静止の号令がかかるので少しずつスピードを落としていって地面に着地して機体を待機状態へ移行シフトさせ、一夏達のところへ戻る。

「2人ともお疲れ様。アルバート君もこれくらいは出来るのね」

「ラウラからきっちり仕込まれましたからね。それに、基礎を疎かにするような事はしませんよ」

「確かにそのとおりね。それじゃあ一夏君は早速やってみてもらおうかしら」

「わ、わかりました」

「アルバート君のほうも確認しておきたい事があるから、悪いんだけどセシリアちゃんは少しだけ一夏君の事を見てもらってもいいかしら？」

「……わかりましたわ。ただ、一段落ついたら教えてくださいね。」

「一夏さん、行きましよう」

楯無会長からの要請を受けてセシリアが一夏を伴って移動し、シャルロットとラウラも一夏が気になるのか2人のあとに続いて移動していった。

「それで？ 次は俺の方を見るつもりなんでしょうけど、何をさせるつもりですか？」

「たしか君の機体はイメージインターフェイスと制御システムが篠ノ之博士謹製の物になっていたわね？ それ抜きでビットのコントロールがどれ位出来るかを確認させてもらおうわ」

つまり、最低限の補助でどれくらいのコントロールが出来るかの確

認ってことか。

「わかりました。設定いじるんでちょっと待っててください」

整備コンソールを表示してビットのコントロールサポートを一時的に全て停止し、セシリアと同じように完全マニュアルコントロール状態にしておく。

「準備完了しましたけど、コントロールする数は改修前と同じ数でいいですか？」

「たしか同時制御できるのは2機までだったわね。……もう一機追加しようか。で、私が言ったモードで指定したターゲットを攻撃してもらおう」

楯無会長のその言葉と共にながりの数のバーチャルターゲットが展開されるので、俺もウイング・バインダーからビットを3機パージしていつでも始められるようにする。

「了解。いつでもどうぞ」

「ええ。それじゃ始めさせてもらおう。まずは」

楯無会長からの指示が飛び、それに合わせてビットにコマンドを送る。

言葉にするだけならかなり簡単なことだが、指示がかなり複雑な事と改修前よりもコントロールしている数を増やした事で精神的な負担はバカにならず、サポート有りのときと同じ精度のコントロールを保つ事ができたのは最初の10分だけで、

そこからコントロールの精度が落ちている事を自覚できるようになるまで5分かかり、最初の指示を受けてから30分経つ頃にはビッ

トにコマンドを送る事が出来なくなるくらい疲れきっていた。

「ふむ、ここいらが限界みたいね。コントロールをする時にちょっと力みすぎよ、アルバート君。セシリアちゃんからマニュアルコントロールのコツを聞いておきなさいな」

「りょう……かい、です」

システム側のコントロールサポートを今まで最大限に受けていた事もあって、それと同程度の精度を保ってコントロールするのはかなりきつい。この際だから徹底的にビットのコントロールを学ぶとしよう。

一夏の訓練が一段落ついてからやってきたセシリアは俺が疲労困憊状態になっていた事に驚かれたが、事情を説明したらあっさりと納得してくれた。同時に明日以降の自主訓練でマニュアルでのビットコントロールのコツを教えてもらうように頼んだところ、すぐに了承してくれた。

こうして楯無会長の指導の下、俺も一夏もキツイ特訓を行う事になるのだった。

#### 40 勝負とその結果（後書き）

そういうわけで、一夏は原作と同じく射撃のノウハウを学ぶこととなり、アルバートはマニュアルでのビットコントロールの精度向上を目指す形になります。

以下本編の補足説明になります。

楯無さんがアルバートとの対戦中にやったのは中国拳法の『化剋』と』

連環腿』のつもりです。原作でも軍隊格闘技・古武術・カポエラとやっていたので、『色々な格闘技を経験している』という考えの下、中国拳法の技を使わせました。

それとアルバートが零拍子を使っていますが、形だけといっている理由はアルバートは直感頼りで戦っていた時に打ち拍子・当て拍子・無拍子の3つを修めないまま偶然零拍子を使い、今のバトルスタイルに変更してからも何度か零拍子を使い、イギリスに引越してからも練習していたと思ってください。

わかりやすく言ってしまうえば、原作最初期のBLEACHの主人公・黒崎一護の斬魄刀と似た状態で、『技としての体裁は整っているが中身が伴っていない』と思ってください。ついでに、この事はアルバートも自覚しています。いずれはそこらへんの解消イベントもやるかもしれません。

今回は訓練風景と会長が巻き起こすカオスの描写になると思います。



#### 4 1 特訓と同居（前書き）

1時間ほど更新が遅れました。最新話、特訓風景と同居についてのアレコレです。

## 4 1 特訓と同居

あれから2日が経過し、俺は第3アリーナで一夏達から十分に距離を離し、セシリア立会いの下ビットのマニュアルコントロールの訓練に励んでいた。

楯無会長がこちらに来ていない理由は二つあり、一つはビットコントロールについてはセシリアの方が経験豊富なので餅は餅屋とばかりにセシリアに丸無げした事、もう一つがそれぞれの特訓内容に違いがあることだ。

俺がやっているのは『特殊兵装のコントロール習熟』で、一夏がやっているのは『ISの基礎的な操縦方法の習熟』なので、一夏の方が詳しく教える必要があるからだ。

「アル、コントロールの精度がまた落ちてますよ!! 長時間回避行動とビットコントロールを両立させるのが辛いのはわかりますし、慣れていないとかなり疲れることもわかりますが、最後のターゲットであるつと最低限のコントロール精度は保つようによしてください  
!!!」

「わかっ……てるよ!!!」

ビットをマニュアルコントロールしている間は制御にかなり集中する必要があるので、装備の改修を受ける前からわかっていたことだが、一度にコントロールするビットの数を1機増やすだけでここまで精神的な負担が増えるのは予想外だった。

しかもより実戦を想定した訓練をするためにそれなりの頻度でセシリアからの射撃 当然ながら回避できるように偏向射撃フレキシブルは使っていない かくるので、3機のビットに意識を集中しながらセシリアの行動にも注意を払い、その上でビット個別にコマンドを送り、

指定されたターゲットを撃ち抜くのはかなりキツイ。当然それだけ気を張っていると自分では気付かないほどに集中力を消費し、時間が経過するほどにセシリアからコントロールの精度が落ちていく叱責を聞くことになってしまう。

「いつ、けえー!!」

展開中の3機のビットの内、2機をレーザービットモードへ切り替えてそれぞれの場所から一番遠くにあるバーチャルターゲットへBTビームを発射し、今までレーザービットモードにしていた1機をビームサーベルモードに切り替えて一番近くにあるターゲットを攻撃する。

だが、ビットから放たれたBTビームはターゲット中央から大幅に外れてかろうじてヒットした事を示すレッドゾーンへ着弾し、ビームサーベルモードにしたビットも中央からかなりずれたイエローゾーンへのヒット判定だった。

「はあ……はあ……どうだ？」

このバーチャルターゲットを使った訓練は予め設定しておいた数着弾率に対する最終得点をわかりやすくするために1セット100回に設定してある。ターゲットを攻撃し終えたら着弾率と攻撃がヒットした際のゾーン。中央が100点、その周囲6マスが75点、それを囲う12マスが50点、50点ゾーンの左右両端に25点が2マスずつ設定されている。によって異なる得点が表示されるようになっていく。

『着弾率……48% 最終得点……3700P』  
「くそつ、また失敗か……」

楯無先輩からは着弾率60%・最終得点5200Pをノルマに設定されているので、まだまだ先は長い。

「それでも初日と比較すれば確実に伸びていますから、自信を持ってくださいな」

初日の結果は着弾率43%・最終得点3100Pだったので、セシリアの言うとおり少しずつ伸びてはいる。

「まあ、そうだけだな。」

「やあ、どうだったかな？」

セシリアの励ましに返事をするのとはほぼ同じタイミングで楯無会長がやってきた。

「48%の3700Pで、ノルマクリアはまだまだ先になりそうです」

「そう、でも頑張りなさい。マニュアル操作でノルマが達成できれば実戦でかなりイイ線いけるから」

「それは承知してますよ。今日は時間もありませんし、少し休憩したら再開するつもりですよ」

「ええ、そうしなさいな。私は一夏君を見てくるから指導よろしくね、セシリアちゃん」

「お任せください」

それだけ言って楯無会長は一夏の訓練へと戻っていった。

「それにしても、セシリアはすごいよなあ。武装の改修前にも少しは思ってたけど、この訓練始めてからなおの事それを実感させられる」

「何がですか？」

楯無会長の後姿を見送ってからここ2日で思ったことを口にする  
とセシリアが小首をかしげる。

「ビットのコントロール精度だよ。慣れてるってのもあるんだろうけど、通常射撃とビットコントロールを両立しながら高精度を保っているってのは感心させられる」

これだけの事を全てマニュアルでやっているんだから、通常射撃とビットでの攻撃を同時にできないのも頷ける。

「そのことですか。わたくしも初めは辛かったです、すぐに慣れましたわ。それに、最近アルのおかげで少しだけ負担を減らすことができましたし」

「俺のおかげ？　今までブルー・ティアーズをいじった覚えはないけど」

そこまで言っつて、どういふことが察しがついた。

「もしかして、スカイ・ブレードのコントロールサポート用プログラムか？」

「ええ。フレキシブル偏向射撃への影響を考えてごく一部ではありますが、データを解析して得ることが出来たスカイ・ブレードのビットコントロールプログラムをブルー・ティアーズ用に組み替えて搭載いたしましたの」

「なるほど、そういうことなら納得だ」

そんな事を話しながらアリーナ閉館ギリギリまで訓練を繰り返し、その日の最終結果は着弾率49%の3900Pだったので、上手く

いったほうだろう。

「あ……」

「あれ？ 簪さんも今帰り？」

「今日は作業をする日ではなかったと思いましたが、どうしましたの？」

特訓を終えて疲れきった身体を引きずりながら制服に着替え、セシリアと共に寮へ帰る最中に簪さんと会った。

「えっと……二人ともしばらく手伝えないって言ってたから、その分の作業をしたの」

「あ……その件に関してはすまなかった。急な決定だったから、製作作業にも影響出てるよな。……自分勝手に本当にすまない」

「申し訳ありません、簪さん。わたくしとしてもお手伝いできないのは心苦しく思っているのですが、アルの特訓の補助と機体製作補助の両立はかなり難しいものがありました……」

簪さんの言葉を聞き、俺もセシリアも謝ることしか出来なかった。

俺もセシリアも簪さんの専用機である打鉄式式の製作を手伝っている関係上、楯無会長の特訓を受ける事が決まってから特訓を受ける敬意も含めて真っ先に話を通しておいた。

「ふたりとも、そんなに気にしないで。……もう9割近く完成してるから3人でも何とかなるし、いざとなったら整備科の先輩達に頼るから」

たしかに簪さんの言うとおり、打鉄式式の製作はかなり進んでいる。具体的には本体と近接戦闘用武装の薙刀は既に完成し、俺とセシリアが連絡する前は8連装ミサイルポッドと速射型荷電粒子砲のデータ収集とそれに伴う調整が残っているだけの状態になっていた。詳しく言うともミサイルポッドのマルチロックオン・システムも倉持技研でベースが組まれているので後は実機に合わせた調整をするだけなのだが、速射型荷電粒子砲については倉持側にサンプルデータが無かった関係上、細かなデータ取りと調整が必要になっている状態だ。

「それはそうなんだが、ここまで関わっておいて機体の完成に立ち会えそうにないってのが少し悔しいんだよ」

「打鉄式式がどういった物かは知っているつもりではありますが、ここまで関わった以上最後まで関わりたいのが本音ですわ」

「あ、ありがとう。……でも、アルバート君は姉さんの特訓があるし、セシリアさんもその補助がある。機体が完成する時には呼ぶから、ふたりとも、頑張って」

「ああ、そうしてくれると助かる。まあ、学園祭が終われば楯無会長もそこらへんを考慮してくれると思うけどな」

「よろしくお願いいたしますね、簪さん」

「うん、任せて。……特訓、頑張って」

そうして激励を受けてから簪さんと別れ、再びセシリアと共に帰路に着くと、その途中でやけにげんがりしている一夏を発見する。

「よう、一夏。やけにくったりしてるけど、そんなに特訓が堪えたか？」

「ん？ なんだ、アルか。……なれない特訓の疲れもあるけど、ついさっき虚先輩からすっげえ不吉な忠告をされたんだよ」

そう言つて一夏はため息を一つつくと同時に肩を落とす。

「……具体的に何を言われたのか、聞いてもよろしいですか？」

「ああ。『警戒しても予防しても絶対振り回されるから、体力だけはしっかりしておけ』つて言われたし、どうも楯無先輩の振り回し方は『食事が喉を通るかどうか』のレベルで振り回すらしい」

「……………不吉すぎて嫌な予感しかしねえ。つていうか、虚先輩がそう言つて事は過去何度か先輩もそのレベルで振り回されたつてことか？」

「……………つまり、部屋に戻つたら何かされてる可能性もあるつてことか？」

「多分。何されてるかまでは想像できないけどな」

特訓で精神・肉体共に疲れきっている時に振り回されたらとてもではないがやっつてられない。

「それは色々な意味で辛いつらいですね。……………何かあった時のために、わたくしも部屋まで一緒に一緒させていただいてよろしいですか？」

「是非頼みます、セシリアさん」

「すまないが頼む、セシリア」

その事はセシリアも察してくれたらしく同行を申し出てくれたので、俺も一夏も即答でその申し出を受ける。

「ええ、おまかせください」

そうしてセシリアを伴い、その途中で俺が持つ1025号室の鍵を



預けてから、俺と一夏は自室へ移動する事にした。

「それでは、開けますわ」

室内から俺達の姿が見えないように扉から少し離れた位置に俺と一夏が移動し、位置につくとセシリアが俺達にそう伝えてくる。

ガチャ

「お帰りなさい。……………ご飯にします？ お風呂にします？ それとも」

「まずはそのような格好をしている理由を含めて詳しくお話を聞かせてもらいますわ、更識先輩。……………一夏さんもアルも、申し訳ないのですが部屋に入るのは少しお待ちになっていてください」

そう言つてセシリアは俺に部屋の鍵を放り投げると、そのまま部屋に入っていつて鍵をかけてしまった。

「……………なあ、アル。もしかして楯無先輩がしてた格好つて……………」  
「多分、一夏が想像しているとおりの格好だろう。ベタベタな台詞も口走つてたみたいだし……………そりゃセシリアも怒るつて」

理由はどうあれ、（おそらく）裸エプロン姿で出迎えた更識会長は他人のオトコにコナをかけようとしたりと判断されてもおかしくない……………セシリアにやられたら俺も理性が欠片も残らず吹き飛ばさるだろうけど、好きでもない女性にやられたら正直言つて疑問しか感じない。

「しかしアル、今からどうする？ セシリアさんの怒りっぷりから

すると結構時間かかりそうだけど」

「しばらく待つしかないだろ。楯無会長については知らないが、セシリアは俺達が疲れてること知ってるんだからそこまで待たせることはないと思うがな」

「そうだな。セシリアさんの説得が終わるまで待つか」

お互い壁に背を預けて5分ほど待っていると、部屋の扉が開いてセシリアが顔を出す。

「アル、一夏さん、お待たせいたしました。入ってきてください」

「わかった」

「わかりました」

俺も一夏も返事をして部屋の中に入ると、俺の物でも一夏の物でもない私物がいくつも見られた。

「えっと……この見た事がない私物は楯無会長の物か？」

「そのとおり。これから学園祭が終わるまでここに住むから、2人ともよろしくね」

「……ここ、1年生寮ですよ？ どうやったんですか、楯無先輩？」

「生徒会長権限を使ったようです。つまり、学園も認可しているという事ですわ」

セシリアの顔を横目で見るとかなり悔しげな表情をしていたし、俺も一夏も真っ先にジョーカーを切った楯無会長の行動にため息をつく。

「……随分と思いきりましたね。何故こんな事をしたのか、理由を聞かせてもらってもいいですか？」

「ええ。しばらくの間2人の特別コーチをする事にしたから、寝食

を共にして波長を合わせようと思ったの  
「マジですか」

一夏は楯無会長の説明を聞いてげんなりするが、俺としてはどうもそれだけではないような気がしてならない。

「……まあいいでしょう。かなり疲れてるんでこれ以上の追求はしません、俺も一夏も年頃だって事は忘れないでくださいね」  
「それについてはご安心を。先程楯無先輩とすっかりとお話しておきましたから。そうですね、先輩？」

そう言つてセシリアが楯無先輩に微笑みかける。

「えっ、ええ、そのとおりよ。おねーさんもふたりを無闇に刺激するような格好をするわけないじゃない」

「ありがとうございます、セシリアさん」

「助かるよ、セシリア」

Tシャツにショートパンツという他の女子と同じような（不本意ながら見慣れてしまった）ラフな格好をした楯無会長が少しもってそう答え、俺も一夏もセシリアに一言礼を言っておく。……セシリアの言葉に返事をする時にどもったように思えたが、気にしないでおこじ。

「さて、それじゃあ着替えるんで、セシリアと楯無会長には」

コンコン

「　　って来客？　どなたですか？」

『アル、私だ。ふたりに差し入れを持ってきたぞ』

どうやら篝さんのようだった。

「げっ！！　篝！？」

一夏は篝さんが来た事で驚きの声をあげる。

「一夏さん、落ち着いてください。わたくしが説明してまいりますわ」

セシリアはそう言って篝さんへの事情を説明するために部屋の入り口へ移動していく。

『なっ、セシリア！？　どうしてお前がここにいるのだ！！』

『篝さん、一夏さんもアルも特訓が終わったばかりなのですから、

少し静かにしてください』

『特訓？　ラウラの教え方はそんなに厳しいのか？』

『いえ。今日コーチをしたのはラウラさんではなく生徒会長ですわ。今からその事情をお話いたしますから、一夏さん達を責めないであげて下さいね。』

そう言ってセシリアは篝さんに俺達が特訓を受ける事になった経緯をかいつまんで説明していく。

『　　そういうわけで今部屋の中には生徒会長の楯無先輩がおりますが、一夏さんを怒らないであげて下さい』

『わかった。そういうことなら仕方ないな。……中に入れてもらっていいか？』

『アル、一夏さん、よろしいですか？』

箒さんも事情を聞いて納得したらしく普段と変わらない声色で入室許可を求め、セシリアが俺達に確認を取ってくる。

「ああ。箒、入ってくれ」

「箒さん、どうぞ」

『失礼する』

そう言っつて部屋に入ってきた箒さんの手には重箱が握られていて、その中に差し入れが入っているようだった。

「差し入れありがとう、箒さん」

正直かなりありがたい申し出だった。特訓を終えてかなり腹が減ってるし、夕食まで1時間30分近くあるので何か摘みたかったところだ。

「おお、サンキュな箒。特訓やってかなり腹減ったから、何か食べたかったんだよ」

「そ、そうか。ならちようどいいな。いなり寿司を作ってきたから、存分に食べるといい」

いなり寿司とは懐かしい物が出てきた。

「へえ、懐かしいな。昔は道場での鍛錬が終わったら箒の母さんが持ってきてくれたっけな」

「一夏さん。それは、アルが日本にいた頃の事ですか？」

「ああ。千冬姉が師範代で教えて、俺と箒とアルの3人で色々な鍛錬をしてたんだよ」

「昔母さんに教わっていたから、それを思い出して作ってみた。食べてみてくれ」

「ああ、貰う貰う。かなり美味いから、楯無先輩とセシリアさんも食べてくれよ」

一夏はそう言いながら早速重箱に手を伸ばし、いなり寿司を食べ始める。

「昔道場でこれが出た時に一夏は無心で自分の分を平らげて、結構好きだったから一つ一つゆっくり味わってた俺の分にまで手を出そうとしてよく喧嘩になったな」

「そんな事がありましたの？」

「ああ、そんなこともあったな。二人とも最初から全開で戦い出して、千冬さんに止められて没収されたのもいい思い出だ」

「へえ、そんな事があったんだ」

「昔の一夏さんは随分とわんぱくでしたのね」

そんな昔の話などを肴さかぬにして4人でいなり寿司を摘んでいると、篤さんがこう言った。

「そういえば楯無先輩、失礼を承知で一つ訊いてもいいでしょうか？」

「ん？ 何かな？」

「実姉との確執がある私が訊けた義理でないのは重々承知していますが、簪と仲直りするつもりはあるのですか？」

「っ！？」

篤さんの質問を聞いた瞬間、楯無会長は驚いた表情を少しだけすると、どこか納得した表情で篤さんにこう返事をした。

「まさかその質問を篝ちゃんにされるとは思わなかったけど、簪ちゃんのお手伝いをしてくれてるなら知っていて当然か……」

「なあ篝、楯無先輩、簪つてのはいいわ」

「すぐに事情を説明してやるから少し待て、一夏」

この中で一人簪さんの事を知らない一夏が篝さんと楯無会長に質問するが、俺個人としても聞いておきたい事なので事情を説明する旨<sup>むね</sup>を伝えて黙らせる。

「わかった」

一夏もそれを聞くと、一言返事をして黙る。

「そうね。アルバート君とセシリアちゃんも知りたいたろうからはずきり言うわ。私も簪ちゃんとは仲直りをしたいと思ってる。けど、その仲直りの方法が思いつかないの」

そう言う楯無会長の表情は今まで見せた事のない物憂げな表情で、本当にどうすればいいかわかっていないようだった。

「……あの、楯無先輩。その簪さんのことを何も知らない俺が言うのもおかしいかもしれませんが、一度腹をわって話をしてみたらどうでしょう？ 隠し事とかをせず話をするれば、仲直りのきっかけくらいは掴めると思いますわ」

「たしかに、それが一番いいのかもしれないわね。よく考えてみれば、簪ちゃんと本音をぶつけあった事なんて今までなかったし」

「ならそうした方がいいですよ。もしかしたら、ただすれ違ってただけかもしれませんしね」

「うん。ありがとう、一夏君」

そう言つて一夏に礼を言う楯無会長の笑顔は訓練中に見せるものは違つていた。

「きつ、気にしないでください。……それよりアル。簪さんについて説明してくれ」

その笑顔を見て顔を赤くしながら、一夏は簪さんについての説明を求めてくる。

「わかつてる。簪さんつてのは一言でいうと楯無会長の実妹で、お前の間接的な被害者だよ」

「俺の、間接的な被害者？ どういうことだよ？」

自分の間接的な被害者と聞き、一夏はいぶかしげな表情をする。

「少しお待ちになってください。……アル、そのことまで言いますの？」

一夏がどういうことか黙つて考え込む間に、セシリアが俺に何故簪さんの専用機の事情を話すのかを問いかけてくる。

「しょうがないだろう、セシリア。一夏も簪さんもお互いに同じ学園にいる以上、接触する機会はおのずと訪れる。事情を知るのが早いか遅いかの差だと思つぞ」

「たしかに……そうですわね」

だが、俺の説明を聞いて少し苦しげながら納得した表情になる。

「……セシリアさんもその簪さんの事知ってるのか？」

「ああ。簪さんもセシリアも簪さんの事は知ってるからな」



「そうか。じゃあ、俺の間接的な被害者ってのはどういうことなんだ？」

「簡単だよ。簪さんは日本の代表候補生で、その専用機を造っていたのは倉持技研だ」

「倉持技研？ たしか白式の開発元だよな？」

元々ISに興味を持っていなかった一夏も、さすがに自分の専用機の開発元は覚えていたようだ。もっとも、倉持の内部事情までは知らないらしい。

「ああ。今倉持技研では上層部の決定で白式の開発に研究員を全員使ってるらしい。その影響をモロに受けた結果、元々倉持で造った簪さんの専用機の開発が凍結されたんだよ」

「その影響で簪さんは専用機持ちの代表候補生という立場ながら『専用機を持っていない専用機持ち』という非常におかしなものになってしまいましたの」

「……それで、『俺の間接的な被害者』って事か」

俺とセシリアの説明を聞き、一夏の表情が暗くなる。……まあ、責任感の強い一夏の事だから、自分のあずかり知らないところでそんな事になっていたのだから無理もない。

「もっとも、その専用機も完成までかなり近づいてる状況だがな」

「そう、なのか？」

「ああ、そこらへんも説明してやるよ。」

落ち込みかけていた一夏に夏休み中旬から今までの簪さん絡みの出来事をセシリアと簪さんの言葉を交えて説明していく。

「そういうわけで簪さんの専用機『打鉄式』も9割方完成し

ているから、一夏もあまり思いつめなくて大丈夫だぞ」

「そうか。………残っているのってミサイルポッドと荷電粒子砲の開発なんだよな？」

「ああ。ただ、荷電粒子砲の開発はサンプルデータが倉持技研になかったことで1から作る必要があるから、正直言ってキャノンポールファストに間に合うか微妙なところだ」

「白式の荷電粒子砲のデータって使えないのか？ 大元の機体を倉持技研が造ったんだから、もしかしたらサンプルデータとして使えるかもしれないと思ったんだが」

「……っ!?」「」

一夏のその発言は打鉄式式の開発に関わっている俺・セシリア・篝さんにとって盲点だった。

「……たしかにその可能性はあるけど、サンプルデータとして使うのなら白式の荷電粒子砲自体の稼動時間が足りないかもしれないわ」

そして、一夏の発言を裏付けるように楯無会長がサンプルデータとして使う場合、雪羅自体の稼動時間が不足している可能性を提示する。

「じゃあ、稼動時間を増やせば使えるんですね？」

「あくまで可能性よ。簪ちゃんの機体に一切関わってない私じゃ判断できないわ。3人とも、そのところはどうかなの？」

楯無会長が確認してくるのとはほぼ同じくして、俺達全員はそれぞれの表情を確認してから返事をする。

「たしかにもう少し稼動データがあればサンプルデータとして使える可能性はあります」

「最近燃費も少し上がったから、普通の大出力荷電粒子砲より少し効率が悪い程度だし」

「簪がデータを受け取るかどうかは別の問題として考えれば、雪羅のデータはサンプルとしてもってこいだろう」

「3人とも、教えてくれてありがとな。……アル、悪いけど一度簪さんと合わせてくれないか？ 知らなかったとはいえ迷惑かけちゃったし、雪羅のデータについても話をしたいんだ」

そう言ってくる一夏の目は真剣そのもので、とてもではないが断れそうになかった。

「わかったよ。ただ、そういう事をする人じゃないが殴られるくらいの覚悟はしておけよ」

「それくらいで済むなら安いもんだよ。アル、もし知っていたら簪さんの部屋まで案内してくれないか？」

どうやら一夏は早速簪さんの元に向かうつもりのようなのだ。

「残念だが俺は簪さんの部屋番号は知らん。……が、山田先生に事情を話せば教えてくれるんじゃないか？」

「そうだな。悪いけど、一緒に来てくれ」

「了解、それじゃあ行くか。簪さん、いなり寿司美味しかった。結果は部屋に報告に行くよ」

「わかった。頼むぞ、アル」

「一夏さんもお気をつけて」

「簪ちゃんによろしくね」

簪さん・セシリア・楯無会長の励ましを受け、俺と一夏は簪さんの部屋番号を聞くためにまずは山田先生のところへ向かうことにするのだった。

#### 4 1 特訓と同居（後書き）

そんなわけでアルバートの特訓風景と楯無会長の同居、原作より一足以上早い一夏と簪接触についてのに関するアレコレでした。

今回の補足説明として、アルバートが使っていたバーチャルターゲットというのはアニメ版ISで一夏がシャルロットに使用許諾と銃の使い方を説明していた時に出てきたターゲットと違ってください。

今回は一夏と簪の接触がメインになると思います。

## 42 邂逅・招待・学園祭準備（前書き）

最新話です。一夏と簪の邂逅と、学園祭の招待関係のお話がメインに成ります。

今回は一部独自解釈がありますので、そういったことが嫌いな方はご容赦していただけると助かります。

## 42 邂逅・招待・学園祭準備

簪さんの部屋番号を聞くため、俺と一夏は教員室にいる山田先生の元へ向かう。

コンコン

「山田先生、ウィルソンと織斑です。一つお聞きしたい事があるのですが、入っても大丈夫でしょうか？」

『はい。すぐに行きまーす』

扉越しに声をかけると、すぐに返事が聞こえて扉が開く。

「はい、お待たせしました。それで、聞きたい事ってというのはやっぱり部屋割りについてですか？ たしか今日から上級生の更識さんと同居する事になってましたよね？」

「それについては自分達で何とかしたんで、聞きたいのは別の事です」

山田先生が楯無会長との同居の件で来たと思ったようだが、一夏が即座に否定する。

「実は夏休み中から同級生の更識さんの専用機の製作を手伝ってるんですが、それ絡みで一夏と一緒に簪さんへ伝えたい事があるので、簪さんの部屋が何号室かを教えてほしいんです」

「そうだったんですか。……わかりました。更識さんの部屋番号は

」

山田先生へ簡潔に事情を説明すると、先生は簪さんの部屋番号を教えてくださいました。

「わかりました。わざわざ教えていただき、ありがとうございます  
た」

「ありがとうございます、山田先生」

俺と一夏は山田先生に一言お礼を言ってから、教えられた簪さんの部屋へ向かうことにした。

コンコン

『誰?』

「簪さん、アルバートだけど、打鉄式式について少し話があるんだ。入ってもいいか?」

『っ!?!?.....ちよつと待つてて』

簪さんがそう言うので、俺は扉の前で入室許可が出るのを待つ間、簪さんに気付かれないように少し離れた場所にいる一夏に声をかけておく。

「俺が紹介するまでは入ってくるなよ」

「それくらいはわかってる。まあ、人目につくから早くしてほしいのが本音だけだ」

「わかってるよ、すぐに本題に入るつもりだから、それほど待たせる気はない」

『お、お待たせ。入って』

そうして一夏と話していると入室許可が出るので、俺は部屋の中に入る。

「失礼します」

部屋の中に入るが中にいたのは簪さん1人だけで、ルームメイトの人は部活動に参加しているからかまだ戻ってきていないようだった。

「えっと……打鉄式式についてって事だけど、どうしたの？」

「ああ。一つ聞きたいんだが、開発に難航している速射型荷電粒子砲のサンプルデータを打鉄式式が開発凍結された原因である一夏が持っているとしたらどうする？」

「え？……それ、どういうこと？」

「ああ、順を追って説明するよ。ことの始まりは一夏の白式の第二<sup>セカ</sup>次形態移行だ。実は簪さんが休んだ臨海学校で起こったちよつとした出来事の最中、白式が第二<sup>セカンド・シフト</sup>次形態移行したんだ。

その時に多機能武装腕<sup>アームド・アーム</sup>が出現して、その多機能武装腕<sup>アームド・アーム</sup>の機能の一つに遠距離攻撃用の荷電粒子砲モードが設定されている。

それで、大元の白式を倉持技研が造った関係で多機能武装腕<sup>アームド・アーム</sup>の構造そのものや稼働データを打鉄式式の速射型荷電粒子砲のサンプルに使えるんじゃないかって話が出たんだ」

俺の説明を聞いて簪さんは驚いた顔をするが、すぐに冷静さを取り戻してこう言った。

「……実際にデータを見てみないと何ともいえないけど、かなり厳しいと思う。確かに機構的な部分では参考に出来る部分はあるかもしれない。ただ、稼働時間としては1ヶ月少ししかないから、データサンプルとしては、微妙なラインだと、思う」



「その言い方だと、データを受け取る気はあるってことか？」  
「うん。……正直に言つと受け取りたくないけど、残り時間も少ないし、目的のためなら手段を選んでられないから」

ここで言う目的というのはまず間違いなくキャノンボール・ファストだろう。今が9月7日でキャノンボール・ファストの開催が9月27日なので、遅くとも前日の26日の夜には機体を完成させなければならぬ。

日数的な猶予は19日だが、13日の土曜日、学園祭当日は各整備室やアリーナは基本的に様々な部活や各クラスがそれぞれの出し物で使用するので実質的には18日が猶予となる。

残り3週間で切ってしまうので、確かに簪さんが言うとおり手段を選んでいる暇はないだろう。それに、一夏は打鉄式式の開発を凍結させた直接の原因だから簪さんが一夏に対していい印象を持つていないのも理解できる。

「確かにキャノンボール・ファストまで残り3週間切ってるからな。データの事について本人と直接話してみるか？ それに、簪さんとしても一夏に言いたい事があるんじゃないか？」  
「……………うん。出来る事なら、話してみたい」

少しの間簪さんはどうするかを考え、一夏との話し合いに同意してくれた。

「了解。今から一夏を呼んでくるから、少し待っていてくれ」  
「……………わかった」

簪さんの返事を聞き、俺は一度部屋を出て一夏がいる辺りに移動し、声をかける。

「一夏、簪さんが話したいって言ってる。ついて来い」  
「……おう」

こういった事は初めてらしく、一夏は微妙に緊張しているようだった。

コンコン

その状態の一夏を伴ってもう一度簪さんの部屋へ向かい、扉をノックする。

「簪さん、一夏を連れてきた。入っていいか？」

『……どうぞ』

「失礼します」

「し、失礼します」

入室許可が出たので再び部屋に入るが、先程と違って何ともいえない緊張感が簪さんから発せられていて、俺も一夏もその気配に圧され気味になってしまふ。

「は、初めまして……織斑一夏です」

「……知ってる」

一夏が自己紹介をするが、簪さんはいつもより2割ほど冷たい声色でそう返事をした。

「えっと……」

「私には、あなたを殴る権利がある。……けど、疲れるから、やら

ない」

膝に当てていた右手をほんの少しだけ動かした簪さんだが、すぐに元の位置に戻した。……簪さんの性格を知っているから言えることだが、本当に疲れるからやらないだけだろう。

「あ、あのさ。」

「あなたの専用機、白式の荷電粒子砲が私の機体の開発に使えるかもしれないってアルバート君から聞いた。見せて」

一夏が何か言おうとしたが、そこに被せるようにして簪さんが自分の用件を簡潔に伝える。

「お、おう。少し待ってくれ」

一夏も知らなかった事とはいえ自分のせいで迷惑をかけてしまった相手という事もあり、ぎくしゃくしながら白式の整備コンソールを表示して雪羅のデータを表示させる。

「えっと、これがそうなんだけど……使えそうか？」

「……………これなら、サンプルデータとして使える。コピーさせてもらって、いい？」

一夏が恐る恐る雪羅のデータを簪さんに見せ、簪さんはそのデータを一通り見てから一夏にデータのコピーについて問いかけたので、現状でもサンプルデータとしては使えるようだ。

「元々そのつもりで持ってきてるんだから、遠慮せずに使ってくれ。それと、知らない内に迷惑をかけていてすまなかった」

「別に、いい。……これで、チャラにしてあげる」

そうやって簪さんはモバイルPCを起動させ、白式の待機形態のガントレットにコードを繋いで雪羅関係のデータをコピーする作業を始める。

「ありがとな、更識さん。もし他に手伝える事があるようだったら言ってくれ、出来る限り力になる。機体製作の時に呼んでくれたって構わないからな」

「……わかった。手が足りなくなったら、声をかけさせてもらおう」

「ああ。またその時がきたら言ってくれ、待つてるから」

「……完了」

話をしながらも簪さんは手を動かし続けていたので、あっという間にデータのコピーが終わる。

オリジナルデザインのカスタマイズキーボードを使っていることを差し引いても、この手の情報処理速度は整備科所属の先輩達にもヒケを取らないと思うのは俺の気のせいだろうか？

「そうなのか？ もうちょっと時間がかかると思ってたんだけど……まあいいか。あんまり長居するのも悪いから、部屋に戻るよ。更識さん、またな」

一夏からの申し出を簪さんは了承し、その言葉を聞いて満足したらしい一夏は一言挨拶をして去っていった。

「……………少し、意外」

一夏が部屋を去っていった後、モバイルPCを片付けながら驚きの表情を浮かべて簪さんがそう言った。

「意外って、何が？」

「彼の事。本音から女性関係でとんでもない勘違いをする事があるって聞いてたから。……あそこまで素直に謝られると、こっちが戸惑う」

「あー……確かにそうなる時があるのは認めるけど、それが起きるのは主に一夏に好意を寄せてる相手に対してだから、普段はそこまで酷くないぞ」

布仏さんがそう思うのも仕方ないが、いつものメンバーと話している時以外に一夏が変な勘違いをしたところは見た事がない。

「そうだったんだ。……なら、関係なかった」

簪さんが一夏をどう思っているか詳しく聞くつもりはないが、話していた時の態度を見るだけだと恋愛感情やそれに近いものを抱いていないと思うので、一夏の勘違いが起こることはまずないだろう。

「さて。俺も用件が済んだし、部屋に戻ることにするよ」

「あ……うん。また、機体に関して何かあったら教えて」

「おう。それじゃあな」

一夏が自室に戻っていったし、一応は付き添いと事前説明という形で一緒に行動していたので俺も自室に戻る旨を伝え、お互いに挨拶を交わしてから簪さんの部屋をあとにした。

俺が部屋に戻つてくると夕食の時間になったので、楯無会長を含めた3人で1年生用の食堂へ向かい、3人で雑談をしながら夕食を取っている。楯無会長がある事を聞いてきた。

「そういえば一夏君、アルバート君。ふたりは学園祭の招待チケットってどうするつもりなの？」

楯無会長が言う招待チケットというのは、生徒ひとりひとりに対して学園側から外部の人間を招待するためのチケットのことだ。これがあれば学園祭の日限定だが外の人も1日だけES学園の中に入ることが出来る。

「あれですか？ 俺は中学時代の友人に送るつもりですけど」

「俺はどうしようか迷ってるんですよ。イギリスの知り合いに送ってもいいですけど相手に面倒をかける可能性もありますから、それなら誰にも送らない方がいい。いろんな方面で角が立たないんじゃないかとも思いますし」

俺を含めた海外からの留学生にとっては基本的に故郷から日本までの移動手段を何とかした上で招待する必要がある。そのため招待チケットを知り合いに送る事ができない人も中にはいたりする。

もつとも、代表候補生に限ってはその限りではないが。

「あら、日本には知り合いっていないの？」

意外そうな顔をして楯無会長がそうやって言ってくるので、俺はすぐに連絡がつきそうな人物がいるかどうか想像してみる。

「……いないわけじゃないですけど、すぐに連絡取れそうなのが夏

休みに会った弾ってやつくらいしかいないんですよ。そもそも弾がIS好きかどうか知らないですし」

「アル、それなら心配要らないぞ。弾のやつ、前にIS学園の招待券あるならよこせて言ってた位だから、少なくともIS学園には興味を持つてると思う」

「そうか。それなら大丈夫そうだけど」

蘭ちゃんを誘って実際にIS学園がどういったところかを見せておくのも悪くないだろうから、後でセシリアに相談するでしょう。

「けど、どうしたんだ？」

「いや、なんでもない。それより、俺が弾を誘った場合、一夏は他の中学時代の友人を招待するつもりか？」

「そうするつもりだけど、それがどうかしたのか？」

「単なる確認だから気にするな」

そう言っただけ俺は食事を再開し、程なくして食事を終えてから先に食事を終えて自室に戻ろうとしていたセシリアの元へ向かう。

「セシリア、少しいいか？」

「どうしました、アル？ まさか、楯無さんが何かいたしましたか？」

「違う違う、ちょっとした確認だよ。セシリアは招待チケットを誰に送るつもりか聞いておきたかったんだ。さっき一夏と話をしている、日本にいる知り合いで俺がすぐに連絡取れそうなのが蘭ちゃんかそのお兄さんの弾しかいなくなってるな。」

弾にチケット送るか蘭ちゃんにチケット送るかで迷ってるんだよ。一夏は元々弾にチケット送るつもりだったらしいけど、俺が弾にチケット送るなら別の友達にチケット送るみたいだし、そこらへんの調整を兼ねてな」

セシリアも海外留学組だから故郷であるイギリスの知人を呼ぼうとすると距離の問題があるのだが、そこは代表候補生ならではの問題解決法がある。

代表候補生はどの国でも自国に所属する国家公務員に準じた扱いのため、一月ごとに結構な金額を給料という形で貰っている。その為日本との往復の航空券を買ってそれと一緒に学園の招待チケットを送ってしまえばいいだけなのだ。

もつとも、とある理由で代表候補生の中でも専用機持ちとなつている人物がこの手段を使う事は殆どないのが実情だ。

「なるほど、そういう事ですか。わたくしの分のチケットは既に蘭さんへ連絡して郵送してありますから、アルが蘭さんへチケットを送る必要はありませんわ」

「そうか。それなら俺は弾にチケットを送ることにするよ。……正直言つとイギリスの男友達誘いたいところだけど、今回はかりは諦めてもらうしかないか」

「そのほうが懸命ですわ。いくら専用機持ちの代表候補生といえど、故郷の友人の安全のために物々しい警備をつける余裕まではありませんね」

その理由はいたつて簡単。下手をすれば移動中の友人を狙った大規模テロや国から自分に預けられている専用機を奪うための交渉材料とする目的での誘拐事件が発生する可能性があるため、友人を守りつつ周囲に迷惑をかけないためにこの手段を使うことは殆どない。

そういつた事情もあり、専用機持ちの代表候補生が本当に知人IS学園へ招待したければ航空券の代金に加えてセキリュティサービスへの依頼料を追加する必要がある。



「だよなあ。……まあ、あいつの事だからキャノンボール・ファストには自力で来そうなイメージあるし、後で確認しておくか」

だが、まずは弾へ連絡して本当にIS学園へ来るかどうかを確認する事にしよう。

「教えてくれてありがとな、セシリア」

「気になさらないください。それと、五反田さんにもよろしくお伝えください」

「わかってるよ。それじゃあ、また後でな」

そう言っつてセシリアと挨拶をした後、俺は弾へ連絡を取るために一度部屋へ戻ることにした。

ブルルルル……ブルルル

『もしもし。どうした？ アルバート』

「よう、弾。ちょっと聞きたいことがあるんだが、時間大丈夫か？」

『ああ、問題ない。それより、改まってどうしたんだ？』

「実は今度IS学園で学園祭をやるんだよ。その時、生徒1人につき1名を招待できるようになってるんだ。それで、一夏からIS学園に興味があるって聞いたからもし避ければ招待券を送りたいんだが、どう」

『是非送ってくれ、頼む！！』

こちらの言葉を全て言い終わらない内に返事をしてきた。余程妹の蘭ちゃんの進路先でもあるIS学園が気になっているのだろう。

「わかった。チケットは郵送するから、悪いが住所を教えてください」  
『おう。メモの準備しとけよ？ 住所は 』

そう言って伝えてきた住所をメモする。

『 。 わかったか？ 』

「ああ、大丈夫だ。遅くとも前日には着くように手配しておくから、学園祭当日はその招待券を忘れずに持ってきてくれ。そうしないと学園の敷地内に入れないからな」

『了解了解。ありがとな、アルバート。まさかお前が誘ってくれるとは思わなかったぜ』

「気にすんな。当日は俺もクラスの出し物があるから一緒に行動できないかもしれないが、時間が合うようだったら一夏と一緒に学園内を案内させてもらうよ」

『その時はよろしく頼む。でも、アルバートっていいやつだな。会って間もない俺にチケットくれるって、早々ないと思うぞ』

「そこらへんは俺の都合も入ってるから気にしなくていい。それじやあ、学園祭当日に会おうぜ」

『おう。それじゃあな』

お互いに挨拶をしてから通話を切ってから時間を確認すると午後7時5分と表示されていた。

日本とイギリスは9時間の時差があるし、今はサマータイムなのでイギリスの現在時刻は午前11時頃。どう考えても授業中だろうから、メールでキャンポール・ファストについての事を聞いておく。

その後、弾へ招待券を郵送するための封筒を買いに寮の購買へ向かうことにした。

その後楯無会長は大浴場へ向かい、俺も一夏も楯無会長が入浴している間に手早く順番にシャワーを済ませて少しでも身体を休めるためにとつと眠ることにしたのだが、俺も一夏も楯無会長のイタズラ好きな部分を侮っていた。

翌日から寝る時はYシャツに下着姿という超ラフな格好で俺と一夏を無駄に刺激し、中間テスト対策でそれぞれの言語圏で必修科目の学習が終わったばかりのクラスに乗り込んできて自作の弁当を俺に振舞おうとしてセシリアを刺激しながら周囲の生徒におかずをプレゼントしていた。

しかもそんな事をしながら特訓は厳しいので疲れだけがどんどん蓄積されていき、疲れを取るためにシャワーを浴びていても身体を洗うという名目でシャワールームに侵入してきて余計に疲れさせてくれるので、少しばかり就寝時間を早めても焼け石に水状態だった。

当然疲れが溜まれば食欲も減退し、物を食べる事も億劫おっくうになるのだが、少しでも食べておかないと身が持たないので無理矢理食べて戻しかけたことが何度かあった。

そんな無理をしながらも特訓の成果は実を結び、学園祭前日の12日には着弾率61%の最終得点5225Pとかなりギリギリのレベルだがノルマを達成する事が出来た。

ちょうどよく楯無会長が俺の様子を見に来た時にノルマが達成できたので、楯無会長からの賛辞の言葉もそこに俺は学園祭に向けた最終準備である焼き菓子　ちよつと手の込んだクッキーをメイソンにするつもりだ　作りをするために寮のキッチンへと向かい、事前の申請どおりにキッチンの一角を利用させてもらって焼き菓子作りを始めることにした。

クッキー用のタネを大量に作り、様々な型を使ってそれぞれの形に抜いてからトッピングを乗せて焼き上げ、種類と個数を合わせて簡単なラッピングをする。言葉にすればそれだけの単純な作業だが、何度も同じ事をしていると集中力や注意力が落ちてくる。

現在時刻は午後10時30分を過ぎていて、ここ数日だったら既に疲れ果てて眠っている時間だった。

途中で眠気覚ましのコーヒを飲んだ時以外ずっとキッチンで作業をしていた甲斐もあり、今焼き上げている分でラストなので頑張るとしよう。

(さて、どのオーブンも後5分で焼き上がりつつトコロだろうから、今の内に出来る後片付けはしておくか)

そう思いながら洗い物をするためにシンクの近くへ移動すると、見慣れたバスケットにメモが張っており、そこにはこう書いてあった。

【アルへ。 夜遅くまでお疲れ様です。今までずっと作業をしていてお腹がすいているでしょうから、サンドイッチを作っておいたので食べてください。空になったバスケットは明日の朝渡していただければ結構です。具や味付けに関しては夜遅く、しかも特訓で疲れていることも考慮してあっさりめにしておきました。これを食

べて元気を出してください。

セシリア】

セシリアの気遣いがありがたく思いつつ、俺はサンドイッチを一つずつ味わって食べたつもりだったが、かなり腹が減っていた証拠というべきか15分もせずにバスケット内にあったサンドイッチは全て食べ終えてしまった。

しかもタイミングよく最後のクッキーが続々と焼き上がっていったので、天板から焼き上げたクッキーを外して荒熱を取る。

その間に使っていたボウルなどを全て洗い、それが終わる頃にはほとんど冷えていたのでそれをラッピングしていく。

全ての作業が終わったのは11時30分頃だったので、俺は作り終えたクッキーを全てひとまとめにして運搬用のケースに入れる。

「アルバート君、お疲れ様」

「お疲れさん、アル」

全てのクッキーをケースに入れ終えて部屋に戻ってくると、普段は寝ているはずの一夏と楯無会長がおきて俺を出迎えてくれた。

「随分と遅い時間まで起きてるんですね、楯無会長。一夏も特訓で疲れてるだろ」

「そこはほら、アルバート君が何をしてるのか気になってね」

「特訓で疲れてるのは事実だけど、今日は夜更かししたかったんだよ」

確かにそう言う日があるのは認めるが、何も学園祭前日の今日でなくてもいいだろう。

「……まあいいけど。一応確認するけど、一夏はもうシャワー浴びてるよな?」

「ああ。シャワー浴びてないのはアルだけだ。ゆっくりしてこい」

「何ならおねーさんが身体洗ってあげましょうか?」

「遠慮します」

そうやって俺は着替えの準備をして、とつとつシャワーを浴びる事にする。

「そう、残念。それじゃあ一夏君、アルバート君も戻ってきたことだし、私達も寝ましようか」

「ええ、そうですね。……ラウラみたいに忍び込んだりしてこないでくださいよ?」

そうやってじゃれあつ楯無会長と一夏を見ながら俺はシャワールームでシャワーを浴び、さっぱりし終えた頃にはふたりともぐっすりと眠っているようだったので、俺も眠ることにする。

(学園祭か……今までイベント事の度に何かしらの事件が起きてたから、今回はその手の事と無縁であつてほしいなあ)

今までのイベントで起こったアクシデントを思い出しながら、俺は睡魔に抗うのを止めて眠りにつくのだった。

## 42 邂逅・招待・学園祭準備（後書き）

そんなわけで次回からは学園祭当日のエピソードに入ります。

専用機持ち代表候補生が一般人を招待するときの注意云々は完全に捏造設定です。なので、原作でもそうだとは限りません。そこは承知しておいていただけると助かります。

### 43 開幕、学園祭(前書き)

今回からは学園祭のエピソードになります。



### 43 開幕、学園祭

9月13日、土曜日。IS学園では学園祭が行われる。一般開放はしていないこともあって開幕の花火などは上がらないが、お祭りムードで生徒のテンションが上がっていることに加え、生徒一人一人に渡された招待券でやって来た一般の人達が学園内を回っている事もあってIS学園の敷地内は普段よりも賑わいを見せていた。

その中でも俺達のクラスである1年1組の『ご奉仕喫茶』は俺と一夏が執事服で、クラスの女子全員がデザインの違うメイド服を纏い、優雅な仕草できつちりと仕事をこなす姿は言いようのない高揚感を覚え、その中でもセシリアの姿はいつそう輝かしく思えた。

普段の生活で俺達に接点のない女子生徒達にとっては俺と一夏に公然と接する事ができる機会ということもあり、俺達のクラスは周囲のクラスに対して申し訳なさを感じるくらいに繁盛している。

なにせ学園祭開幕から30分と経たずに生徒及び招待客に手渡されているパンフレットを見てその事を知った女子生徒達の列が教室前に形成されていき、1時間が経過する頃には長蛇の列を作り上げていた。

覚悟していた事とはいえ指名率は俺と一夏が圧倒的に多く、接客班のほかのメンバーであるシャルロット・ラウラ・セシリア・篝さんの4名による接客を指名するのは外来の招待客の人達が殆どで、各々の指名率については想定範囲内だ。

クラス内の3分の2を接客用ホールとして使い、残り3分の1をバ

ツクヤードとして調理スペースなどに使っていることもあって、ホールスタッフは連携が取りやすい様にいつものメンバーから鈴さんを除いた6名で回しているのだが、  
どという伝手を使ったのか接客班用にシャルロットが借りてきたメイド服と執事服は駅前にあるメイド喫茶・@クルーズの制服で、かなり驚かされた。

調理班や雑務班のメンバーも全員メイド服を着ているのだが、@クルーズ側も今日の営業があるためシャルロットが借り受ける事が出来たのは接客班用のメイド服4着と執事服2着だけで、他のメンバーの服装に関しては自力で解決する必要があった。

その為ホール内を移動する雑務班のメイド服は接客班との統一感を出すために事前に借り受けた@クルーズのメイド服をクラスの有志メンバーで複製した物を使用し、調理班と列整理班のメンバーは実用性を重視した結果、セシリアの実家で使用しているメイド服のペアを送ってもらい、それぞれのサイズにあったものを使用させてもらっている。

当然接客班と雑務班はデザイン的には同じ服装なので混同してしまいがちだが、接客班は首元に調理スペースへの連絡用にブローチ型マイクをつけているのでクラス内のメンバー限定で判別しやすいようにしている。

そうした教室内のメンバーも大変だが、一番大変なのは雑務全般を受け持っている中でも列整理のスタッフが一番だろう。一番多い待ち時間に関するものを含めた各種クレームにも対応し、同時に列の整理も行っているため仕事量は一番多い。

当然その事は当初から予想されていたので列整理班には人当たりが

よく、それでいて体力のあるメンバーを選出しておいたし、ある程度の長さの列が出来る事も想定していたが、ここまでの長さになるのは正直言って予想外だった。

「一夏、列の長さが気になるのはわからんでもないが、廊下の混雑度合いが増して列整理班の仕事が増えるから、顔出すなよ」

接客中の僅かな空き時間を利用して一夏が廊下の様子を見ようとするので、それを制する為に声をかける。

「おっ、おう。……しかし、すごい行列だな」

廊下側の窓に設置されたカーテン越しに見える女子生徒の行列を見ながら、一夏がそう呟いた。

「ああ、最後尾は2時間待ちって報告がきてるからな。一夏も休める時にはしっかり休んでおけよ」

当然ながら接客班・調理班・雑務班共に営業に差し障りのない範囲で休憩時間を設定してあるが、どの班にも僅かでも休める時間があるなら休んでおくように言っている。

「ちよつとそこの執事達、とつととテーブルに案内しなさいよ」

そうしていると次のお客様が来店したのだが、口調や声のトーンに聞き覚えがあった。

「…俺は次のお客様を対応するから、一夏は鈴さんの相手を頼む」  
「ああ……。鈴、お前なんでそんな格好してるんだ？」

振り返ると声の主は鈴さんだったが、その格好は普段の制服姿ではなく真っ赤な生地に龍をあしらひ、金色のラインが入ったチャイナドレスを纏っていた。

「うっ、うるさい！！　うちは中華喫茶やってんのよ！！　それでこのあたしがウエイトレスやってるっていうのに、隣のアンタ達のクラスのせいでぜんぜん客来ないじゃない！！」

そうやって怒りをあらわにする鈴さんだが、そこは出し物のチョイスが悪いとしか言えない。

原則的にクラスの出し物はそのクラスの教室でやることになってるので、カテゴリーが被れば看板の大きさと実際に出す物の味がモノを言うことになる。

俺達のクラスは学園に二人しかいない男子生徒という巨大な看板があるし、材料費が一番金額を割り振ってあるので相応に美味しい物を出すことが出来る。まず間違いなく他の喫茶店系の出し物をやっているクラスのお客さんを吸収しているだろう。

当然材料費ばかりに金額を割り振って内装がお粗末になるような愚は冒していない。それどころか金額的にみれば一番高いのは内装に使っている調度品や茶器・食器の類なのは火を見るより明らかだ。その理由はいたって簡単。今回の『ご奉仕喫茶』の内装に使っているテーブルやイス、茶器・食器類はセシリアの実家にある使っていない物を厚意で利用させてもらっている。

だが、セシリアの実家はかなりのお金持ち故、普段使っていない物とはいえ一つ一つが厳選されていて、それぞれワンセットでかなりの値段をするのは間違いない。

これらの物を提供する際にセシリアは『実家で使っていないもので

すから、自由に使っていただけで構いませんわ』と普段と同じ微笑で言ってくれたが、食器や茶器が発する高級感に気圧されてしまい、調理班の面々は手が震えないように必死だという報告が上がっている。

「アルバート、4番テーブルでゲームセットのオーダーだ。向かってくれ」

「了解。すぐに向かう」

鈴さんの接客を一夏に任せて次のお客様を席へご案内すると、ラウラからゲームセットのオーダーが入ったことを伝えられるので4番テーブルへ向かう。

ゲームセットはその名のとおり俺が一夏とゲーム　じゃんけん・神経衰弱・ダーツの中から一つを選んでもらい、それで勝負をするをして、女子側が一夏に勝てばツーショット写真の撮影、俺に勝てば手作りクッキーをプレゼントする形になっている。

昨日夜遅くまで俺がクッキーを作っている姿を1年生の女子が物珍しそつに見ていたのだから上級生にも話が飛び、俺も一夏もオーダーの半分はゲームセットで女子生徒の相手をする形になっている。

ついでにここ1週間近く似たような事をしていたからかダーツを投げることに慣れてからは命中率がやけに高くなっていて、変なところで特訓の成果を理解させられてしまった。

「……わたくしの負けですね。こちらをお納めください」

今回選ばれたゲームは神経衰弱で、相手の記憶力が高かった事もあ

って接戦で俺の負けしまったのでクツキーを渡す。

「ありがとう、アルバート君!!」

満面の笑みを浮かべて女子生徒が席を立ち、会計へと向かっていった。

「どうもー、新聞部です。話題の男性執事を取材に来ましたー」

そうして接客が一段落したところで何度も俺や一夏の写真を取りに来て顔馴染みになった黛先輩が現れた。

「あ、薰子ちゃんだ。やつほー」

「わお!! たつちゃんじゃん!! メイド服も似合うわねー。あ、どうせなら織斑君とツーショットちょうだい」

そうやって黛先輩は早速一夏にシャッターを切り始めているのだが、つい先程までいなかったはずの人物がそこにいた。

「……なんているんですか、楯無会長。しかもそのメイド服はどこから持ってきたんですか?」

いつの間にか楯無会長がやってきていて、接客班及び雑務班と同じメイド服姿でピースサインをしながら一夏とツーショット撮影をしていた。

「これ? 君達のクラスの子から型紙貸してもらって、自分で生地を買ってきて生徒会室で作ってたの。上手くできてるでしょう?」

そう言いながら一夏に腕を絡ませたまま俺にも腕を絡ませて、楯無

会長は半ば強引に自分が中央にいる3ショットの状態にしてしまう。

「……まさか生徒会の経費使ってませんよね？」

「当たり前じゃない。全部自腹よ。それに、作ってる間も面白かったしね」

自己の才能をフルに発揮するならTPOを考えた方がいい気がするが、俺が言ったところで場を引つ掻き回すのが上手い楯無会長の事だから有耶無耶にされてしまうのが関の山だろう。

「……なら何も言いませんよ」

言ったところで無駄でしょうし、聞き入れてもらえとも思えないですから。

「うーん……やっぱり女の子も写らないとダメねー」

「私写ってるわよ？」

「そりゃ3ショットも悪いわけじゃないけど、たっちゃんにオーラありすぎて印象代わっちってるし………試しに織斑君やアルバート君達にとつてのいつものメンバーに来てもらおうかな」

「そういう事なら仕方ないわね。……それじゃあ私は薫子ちゃんが撮影している間、お店のお手伝いをしてあげるわ」

「うんうん、それでいきましょう。それじゃあ、写真撮るから集まってもらおうかな」

(別に学園祭で新聞部が写真を撮る事に異存はないが、もう少し店内のことを考えてほしいと思うのは贅沢なのだろうか?)

接客班全員が集まって写真撮影が始まりながら、俺はそう思った。

「まずは……校内唯一のカップルからいってみようか」

「了解です」

「わかりましたわ」

黛先輩が早速俺とセシリアを指名してくるので、俺達は自然と腕を絡めあつて笑みを浮かべる。

「アル。つかぬ事をお聞きしますが、わたくしの格好をどう思いますか？」

そうしていると、セシリアが俺にそう訊いてきたので、自分が感じた事を素直に伝える。

「言つまでもなく最高。出来る事ならこのまま持ち帰りたくらいだけど？」

「もっ!?! もちかつ…ええっ!?!」

そうしたらセシリアが顔を真っ赤にして俯いてしまった。

「……そっ、その……持ち帰ってくれて、構いませんよ？」

「っ!?! ほ、本当か？」

それから少ししてセシリアがそう返事をしてきたので、俺は本気でセシリアを寮の自室へ持って帰りたい衝動に駆られる。

「はいはい。甘い空気を出してくれるのは構わないんだけど、周りの人達の間も気にしようね」

だが、黛先輩の一言を聞いて周りを見回してみると教室内にいた全員が顔を赤くしながら何とも言えない視線で俺達を見ていた。



「んんっ！！ まあ、それは次の機会にしましょう。お騒がせしてすいませんでした、黛先輩」

「いえいえ。アルバート君も男の子ってところを見せてもらったから、それでチャラにしておくよ」

それを聞いて俺も自分で何を口走っていたか自覚させられてしまい、気恥ずかしさで何も言う気が起きなかった。

それから一夏が篝さん・ラウラ・シャルロットの3人とそれぞれツィショットで撮影をして、黛先輩は非常に満足したようだった。

「一夏君、アルバート君、セシリアちゃん。私もうしばらくお手伝いするから、校内を色々見てきたら？ 特にアルバート君とセシリアちゃんは頭冷やすか徹底的にイチャついてきた方が接客の効率も上がると思うけど？」

黛先輩の写真撮影が一段落すると、楯無会長がそう言ってきた。

「あー……メニューで俺達担当のやつがあるんですけど、大丈夫なんですか？」

「でも、いいんですか？俺もアルもいなくなると色々とまずい気が……」

「それに、わたくしも抜けるとなると篝さん達の負担も増えると思うのですが」

「そこらへんは私が適当にごまかしておくから大丈夫。おねーさんの優しさサービスなんだから、受け取っておきなさい」

確かに対人能力がかなり高い楯無会長なら何とか出来る可能性も高いだろう。

「じゃあ、ちょっとお願いします」

「混んできたら携帯を鳴らしてくれればいいんで、それまでよろしくお願いします」

「それでは、お言葉に甘えさせてもらいますわ」

「うん。行つてらっしゃーい」

俺達3人は楯無会長にお礼を言い、3人で一度バックヤードに向かう。

そこで俺と一夏は執事服の上着を脱いでから簡易ロッカーに閉まつてある自分の携帯電話を持って廊下に出ると、相変わらず長蛇の列が並んでいた。

「あ、織斑君とアルバート君だ。オルコットさんもいる」

「ねー、3人ともどこ行くのー？ 休憩？」

当然俺達の姿は列に並んでいる女子生徒達の目に付くので、彼女達から声がかかる。

「そんなところ」

「なるべく早く戻るつもりでありますので、お待ちくださいな」

「悪いけど、待っていてくれると助かる」

その人たちに返事をしながら、俺達は校内を見回るために移動する事にした。

「そういえばセシリア。蘭ちゃんってもう到着してるのか？」

クラスの仕事をしている間に招待した弾から着信があったかどうかを確認しながら、セシリアに蘭ちゃんが既に学園の敷地内に到着しているのか聞いてみる。

「少々お待ちください。……既に到着しているようですね。時間があるようなら案内をしてほしいとメールが来ていますわ」

「そうか。こっちにも弾から似た用件のメールが来てる。一夏の方はどうなんだ？」

「ああ。俺のところにも中学自体の友達で数馬っていうんだけど、そいつからメールが来てる。どうせなら数馬や弾たちも含めた6人で一緒に回るか？」

どうやら既にそれぞれの招待者は学園の敷地内に到着しているようで、一夏から一緒に学園祭を回る提案がされる。

「ちょっといいですか？」

だが、階段の踊り場に差し掛かったところで正面から声がかかる。

「はい？」

「どちらさまでしょう？」

「えっと……業者の方ですか？」

声をかけてきたのはビジネススーツを着たロングヘアの女性で、どこかの企業の営業担当らしい雰囲気纏っていた。

「失礼しました。私、こういっ者です」

そう言っつてその女性は最初に一夏に名刺を渡し、次に俺とセシリアにも名刺を渡してきた。

「えつと……IS 装備開発企業『みつるぎ』 渉外担当・巻紙礼子……さん？」

一夏が名刺に書かれている事を口ずさみ、同時に巻紙さんの目的も理解できた。

「はい。織斑さんにはぜひ我が社の装備を使っただけなかいかなと思っまして」

一夏は所属の決まっつていない男性IS 操縦者なので、夏休みにもたびたび企業の人との面談の機会があつた。

俺の場合はイギリス政府がかなり強引な手段を使っつて自国の代表候補生にしたので、接触してくる人もIS 系企業の渉外担当の人ではなくイギリス政府の高官や代表候補生管理官が主だ。

当然、たつた二人しかいない男性IS 操縦者の占有という事もある。世界各国からかなりの非難を浴びたが、俺の機体で得た各種データおよび新技術は世界各国のIS 研究所で共有する協定が結ばれているのでこういっつた企業の人との会っつ機会は殆どない。

もつとも、一夏への装備提供を申し出る企業が後を絶たないのは無所属の専用機持ちという特異性だけが原因ではなく、白式の公的な開発企業である倉持技研が白式用の後付武装イコライザーを開発できていない事も原因の一つではないかと思っつている。

他のIS開発に関わっている人たちに申し訳ない言い方になるのが心苦しくあるが、白式は東さんの手がかかっているISなので余人に理解できるような造りをしているとは到底思えない。

しかも白式のコアは一夏いっわ曰くかなりわがままな性格らしく、射撃武器は取り込む気が最初からないかのように受け付けず、盾も嫌がり、雪片式型以外の格闘武器も受け付ける気配がないらしい。

セカンド・シフト  
第二次形態移行して出現した雪羅も学年別トーナメント中に一夏がマニュアル操作でシャルロットのアサルトライフルを使った経験から生み出したらしい。

そうした経緯で出現した雪羅と第一形態ファーストフォームから使っている雪片式型以外に装備が欲しければ何とかして東さんに連絡を取って装備を造ってもらえないだろう。

そういった点から見れば俺の専用機であるスカイ・ブレードのコアは特にえり好みをする性格ではないのだが、実のところ別の問題があったりする。

この事はセシリアを含めた研究所関係者以外だと元々スカイ・ブレードの所有者になる予定だったサラ先輩くらいしか知らないのだが、スカイ・ブレード本体に設第3世代機として標準的装備されているパッケージインストール量子変換用の拡張領域バスのロット以外に使用する後付武装用の拡張領域バスのロットの容量がかなり少なくなっているのだ。

これは零落白夜を擬似再現したライジングブレードの弊害で、制御バスのロットにかなりのリソースを割く必要性があるため、拡張領域を犠牲にするしかなかったのだ。

もつとも、東さんの手によって装備を一新された結果、新しいライジングブレードも制御リソース用に多少拡張領域用の容量を使っているようだが以前ほど圧迫しているわけではなく、後付武装も追加しようと思えば2〜3個は量子変換可能だ。  
ところが東さんが作った多目的ビットの存在があるので距離を問わずに攻撃する事ができるため、現在スカイ・ブレードの後付装備用拡張領域にはスターダストmk？が量子変換されているだけだったりする。

それは使い手である俺が思うまでもなく有効利用するべきだと研究所側も判断し、間近に迫ったキャノンボール・ファストに用いる強襲用パッケージの再設計と製作が終わり次第、余った後付装備用の拡張領域を使った装備を造る事になっている。

「あー、えーと、こういうのはちょっと……とりあえず学園側に許可を取ってからお願いします」

当然白式の事は使用者の一夏が実質的な製作者である東さんに次いでよく知っているので、一番差し障りのない断り方をする。

「そう言わずに!」

だが、巻紙さんは見た目とは裏腹にかなりアグレッシブで一夏の腕を掴んで交渉しようとするので、彼女に腕を掴まれる前に一夏の体を押して腕の位置をずらせながら、とつととお引取り願うためにこう言う。

「巻紙さん、でしたっけ？ 俺達人を待たせてるんで、また今度にしてもらえませんか？ カタログくらいは受け取っておきますから、何かあったら一夏から連絡するようにしますんで」

「本当ですか！？ では、こちらが我が社のカタログになります。何かあるようでしたら、我が社までご連絡を」

そう言つて巻紙さんは一定の理解を得られたと思つて俺達にカタログを差し出すのでそれを受け取り、少し早足で階段の踊り場から離れる事にした。

「おい、アル。あんな事言われても、白式の実体はお前も知ってるだろ？」

「それでも口約束であそこまで言つとけば、あの手の企業は一度引き下がる。こつちから連絡しなければそれで大丈夫なのは経験済みだ」

初起動からIS学園に入学するまでは俺も訓練の合間を縫つて各企業の渉外担当や営業担当、場合によっては社長とかの幹部クラスと面談していたので、ああいった手合いの引き時は多少なりとも弁えわきまているつもりだ。

「そうなのか？ まあ、俺もああいった人達は苦手だから、最終的には白式の事を伝えて諦めてもらうつもりだけど。……………それより、弾たちの事はどうする？」

「申し訳ありませんが、わたくしは蘭さんと別行動を取らせていただいてもよろしいですか？ こういった機会でなければIS学園の中をゆつくり案内することは出来そうもありませんし」

確かにIS学園の中を見るなら色々な意味で注目される男子生徒である俺達とは別行動の方がいいだろう。

「わかった。俺は一夏や弾達と一緒に色々見て回る事にするから、合流するような事があつたら連絡してくれ」

「それじゃあセシリアさん、蘭に会ったらよろしく言っておいてくれ」

「承知いたしましたわ。それでは、一足お先に行かせていただきますね」

そう言ってセシリアは走るスピードを速め、俺と一夏はゆっくりした歩調で弾達のいる正面ゲート前へ移動する事にした。



### 43 開幕、学園祭（後書き）

そんなわけで学園祭の始まりとあの人の登場まででした。

今回戦闘描写は一切ありませんでしたが、近いうちに戦闘に入ると  
思います。

遅くとも3話先までには戦闘に入ると思いますので、戦闘シーンを  
お待ちの方は申し訳ありませんがもうしばらくお待ちください。

#### 43・5 幕間

#### 五反田兄妹のこんなやりとり

(前書き)

幕間更新です。今回は3人称視点から弾と蘭のちょっとしたやりと  
りを書いてみました。

本編の方もある程度書き進めてある状態なので、近日中には公開で  
きると思います。

## 43・5 幕間 五反田兄妹のこなやりとり

9月10日水曜日。その日、五反田食堂に2通の封筒が届いた。

宛名はそれぞれ娘の蘭と息子の弾宛になっていることもあって、郵便に気付いた2人の母親、五反田蓮はそれぞれの封筒を部屋の机の上に置き、学校から帰ってきたら二人にその事を伝えることにするのだった。

共学の公立高校に通っている弾が早く帰宅し、俗にお嬢様学校とよばれるような私立の中学校にか揺籃が送られて帰宅してくるのが五反田家にとってのいつもどおりであり、それはこの日も代わる事はなかった。

当然蓮は2人が帰ってきて早々にそれぞれに宛てられた郵便が来ていることを伝え、それぞれの私室の机上にその封筒を置いてある旨を伝える。

五反田家は食堂を営んでいる事もあり、夕食をとる時間は世間一般の家と比べて少しばかり遅い時間になることが圧倒的に多い。

その日もいつもと同じように祖父・両親・蘭と弾の5人で夕食を食べていたのだが、いつもと違う点が一つだけあった。

「お兄、やけに機嫌がいいみたいだけど何かあったの？」

「ん？ 前にダチに頼んでたものが今日やっと届いたんだよ。気にすんな」

「ふーん。まあ、よそ様に迷惑かけないでね」

「大きなお世話だっつーの」

食事をしながらそうやって弾と蘭がちょっとした事で言い合つのもここ数年でよくあることだったので、2人の祖父・五反田蔵も両親も特に気にする事はなかった。

（蘭にアルバートからIS学園の学園祭の招待チケットを買ったって教えたら、一夏と会いたいからって言って一力ずくでチケット奪いにくるだろうからな。当日までは内緒にしといたほうが難か）

（お兄にセシリアさんからIS学園の学園祭の招待チケット貰ったって言ったら、多分学園祭に行くの反対してくるだろうから、教えない方がいいよね）

お互いに別の人物からIS学園の学園祭招待チケットを受け取っている事を知らないため、事情を知っているアルバートやセシリアが知ったら苦笑しそうな事を考えながら、弾も蘭も学園祭当日までその事を秘密にしておくのだった。

それから日が経ち9月13日、IS学園の学園祭当日。弾は気合の入った格好をして、蘭はIS学園の中にも恥ずかしい思いをしないようにしっかりとおしゃれをして、いざ出発しようと裏口に移動したところでお互いに出くわし、その格好の不自然さに気付く。

「お兄、やけに気合入ってるみたいだけど、どうしたの？ まさか、ナンパ？」

「ちげーよ。そういう蘭こそやけに気合入ってんじゃないか。どう

したんだ？」

お互いの上から下まで見て気合が入った服装をしていることに気づき、その理由を問いかける。

「私は今日出かける場所のことを考えてこの服装にただけよ。向かう先ではナンパされる危険性とかもないし、別にいいでしょ。そういうお兄こそ、ナンパじゃないならなんでそんな気合入れてんのよ？」

「俺だつて行く場所によつては服装にも気を使つての。どこに行くつもりかは知らんが、遅くなんなよ」

そう言つて弾はさつさと靴を履いて自分と同じくIS学園の学園祭に招待されている友人、御手洗数馬みたらい かずまと合流するために駅前に向かう。

「よう、弾。今日はお互いに頑張ろうぜ」

「当然。なんとかしてケータイのアドレス交換できるくらいまで仲良くなりたいたいもんだ」

駅前の改札口で合流した直後にそんな事を言いあいながらIS学園行きモノレールのチケットを購入し、モノレールが来るまでの時間を駅のホームで適当な雑談をしながら過ごす。

「あれ、お兄！？ 何でこんなところにいるのよ!？」

だが、その最中に聞き覚えがある声が響く。

「っ、蘭!？ そういうお前こそどうしたんだよ!?! ここはIS学園行きのモノレールだぞ?」

「それは私のセリフ!?! 今日はIS学園の学園祭だけど、チケット

ト持っていないお兄が行ったところで門前払いされるだけじゃん！」「俺はアルバートからチケット貰ってるっつーの！！　そういう蘭こそ一夏に会いたいからってチケットなきや入れないっての！！　言っとくけど、俺の分は渡さんからな！！」

「私はセシリアさんからチケット貰ってるし、今日行くのはIS学園の見学が主で一夏さんと会うのはついでよ！！」

「あー、弾も蘭ちゃんも一回落ち着いた方がいいぞ。目立ってるから」

普段はあまり使用されないIS学園行きのモノレールだが、この日はやはり弾達と同じように招待チケットを持った一般人が利用するためホームにはそれなりの人数が集まっていた。

「「つつ！！???」」

兄妹での口げんかに夢中になっていた二人は数馬の指摘でそのことに気付く。

「んんっ！！　とにかくそういうわけだから、お兄もそこまで怒らないでよね」

蘭は往来で大声を出してしまった事に羞恥を感じ、咳払いを一度してから小声でそう言う。

「……わかったよ。純粹に見学っつーなら文句はない。しっかり見てこいよ」

弾も妹の真剣な言葉を聞き、一定の理解を見せる。

「それは言われなくてもわかってる。お兄もわかってると思うけ

ど、IS学園の中でナンパしないでよね」

兄のその言葉に返事をすると共に、蘭は一言注意をしておく。

「へいへい。……そろそろモノレール来るみたいだな」

その言葉に弾が生返事をするのと同時にホーム内にアナウンスが流れ、弾達はモノレールに乗ってIS学園へと向かうのだった。

43・5 幕間

五反田兄妹のこなやりとり

(後書き)

アルバートでの視点以外では基本的に3人称視点になるので、その書き方を忘れないために急遽書いてみました。

本編もある程度は書いているので、早ければ明日の日付変更付近で更新できるかと思われます。



#### 44 学園祭での一幕(前書き)

初めての連日更新になります。多分早々ないと思いますが、今回の前半は3人称視点、後半はいつもどおりのアルバート視点になります。

#### 44 学園祭での一幕

IS学園正面ゲート前。学園と本土を結びニアステーション前のちよつとした広場に、それなりに気合の入った格好をした2人の少年がいた。

「弾、来たな」

「そうだな、数馬」

少年達の名前は五反田弾と御手洗数馬<sup>みたらい かずま</sup>。2人とも織斑一夏の友人であり、弾はアルバートとも顔見知りだった。

「ついに、ついに、ついにっ！！ 女の園、IS学園へと……来たあああっ！！」

学園の校舎内に入っていないにも拘らず、弾も数馬もテンションは振り切れていて、ふたりとも広場で大声をあげる。

弾はアルバートからの、数馬は一夏からの招待券を持っていて、学園の事情に詳しくないふたりはアルバートと一夏が自分達を迎えに来るのを待っていた。

弾も数馬もISその物については割とどうでもよく、どちらかといえば異性との出会いを求めてIS学園にやってきていて、招待チケットを手配してくれたアルバートと一夏には非常に感謝していた。

げっ！！！！

だが、そんなテンションが上がりまくっている男子2人の内、弾の尻に勢いよく蹴りが入る。

「お兄うつさい！！ 他の人達もいるんだから、静かにしてよね！  
！ 数馬さんも、少しは人の目を気にしてください！！」

身内の仕出かした事という事もあって若干顔を赤くしながら、弾の妹である蘭が兄とその友人に注意をする。

「あはは……蘭ちゃん、ごめんごめん。つい嬉しくてね」  
「いきなり蹴る事ねーだろ蘭」

数馬は素直に謝罪し、弾は蹴られた部分をさすりながら非難の視線を妹に向ける。

「あのねえ、お兄がバカな事すると招待者であるアルバートさんの評判にも傷がつくんだから、さつきみたいな変な真似はしないでね。いい！！」

ギロリと自分を睨みつけてくるその目は本気そのもので、弾も招待者の顔に泥を塗る気はなかったのですぐに返事をする。

「そりゃわかってるっつーの」  
「どうだか。あと、数馬さんもお兄と似たような事をした場合は一夏さんの評判に傷がつくんですから、気をつけてください」

それから蘭は兄の悪友にも一言注意をしておく。

「ああ、それは肝に銘じておくよ。蘭ちゃん」

数馬としても一夏の評判を悪くする気はないので、素直にその言葉を受け入れる。

「ああ、そうだな数馬。一夏には当然として、アルバートにも感謝しとけよ。そうじゃなきゃ多分お前の分のチケットはなかっただろうからな」

妹からのお小言が終わると、弾は数馬にチケットを融通してもらった一夏とアルバートに礼を言っておくように伝える。

「言われるまでもねーよ。そこらへんの事情は一夏からも聞いたから、実際に会ったら一言礼を言うつもりだよ」

それは数馬としても思っていたことらしく、弾から伝えられるまでもなく礼を言うつもりだった。

数馬が学園祭に招待されたのは3日前。少しでも異性にモテたいと思っていた数馬は弾と共に楽器を弾けるようになるかと去年の今頃からベースの練習をしていて、

その日も弦の張替えやアンプの調整をしている最中に一夏から連絡があり、数日後に開催されるIS学園の学園祭に来る気はあるかと問われた瞬間に即答で行く事を伝えた。

その時に一夏からIS学園にいるもう1人の男子生徒が既に弾を学園祭に招待している事を伝えられ、数馬が仮に一夏1人が男子生徒だった場合自分と弾のどちらを招待していたのかを問いかける。

その質問に対して、一夏は以前弾がIS学園に興味があると言っていたので、もしもアルバートがいなければ弾を優先して誘っていたのではないかと曖昧に答えた。

数馬としても一夏がIS学園に入学してからは会う機会が殆どなかったので一夏の話聞いて一応の納得を見せたのだが、どうやって弾がもう1人の男子生徒と知り合ったのかを疑問に感じた。

幸い弾は数馬と同じ部屋にいたこともあって数馬のIS学園行きをリアルタイムで知ったのだが、一夏との電話が終わった数馬からどうやってアルバートと知り合ったのかを問いただされた。

弾としても特に隠すべき理由ではなかったので夏休みに篠ノ之神社でやっていた夏祭りでの顛末を語り、同時に一夏のもてっぷりと相変わらずの鈍感さを間接的に聞いてきた事を話し、2人してため息をつくことになった。

そんな風に雑談をする弾と数馬だが、共学の高校に通う2人は女子高といつて差し支えないIS学園における自分達の特異性をほとんど理解していなかった。

IS学園はその性質上女子生徒が圧倒的に多いため、学園祭などのイベントで人が招待される場合圧倒的に女性の割合が多く、一般人の十代男子がいるだけですぐに噂になる。

理由はいたって簡単。学園に招待される男子という事はIS学園の中にコネクションがある事を意味していて、女子生徒の誰かが自分の彼氏を招待した可能性が一番高いからだ。

さらにこの年頃の女子はそういつた噂話に目がないため、正面ゲート前に到着して数分で弾も数馬も招待者を迎えに来た女子生徒やその友人達を発信源として噂になり始めていた。

「あそこの男子達、誰かの彼氏かな？」

「どうだろー。ちよつといいよね」

「えー。私は織斑君がいいなー」

「私はアルバート君派かな？」

「あつちの赤毛の子はお兄とか言ってたから、赤毛の人の妹さんかな？」

姦しく騒ぎ立てる女子の声に弾も数馬も気付き、二人とも心拍数を上昇させる。

(うおお、注目されている……。こ、こ、これは、新たな出会いの前触れか!?)

「そのあなたたち」

「はい!？」

図らずとも同じ事を考えていた弾と数馬だが、不意に声をかけられて2人とも同じタイミングで背筋を伸ばす。

振り向いた先に立っていたのは生徒会役員であり、入場者整理の指揮を執っていた虚で、いつもどおりのメガネにファイルを片手に持っている姿はいかにも堅物然としたイメージを見た者に与えていた。

「あなた達、誰かの招待？ 一応、チケットを確認させてもらっていいかしら？ 悪いけど、そつちの子も一緒にチケットを見せてもらえる？」

正面ゲート前にいる以上誰かが招待した可能性が高いが、違っている可能性もあるので確認のために虚は招待チケットの提示を求める。

「は、はいっ!!」「」

「あ、わかりました」

弾も数馬も焦りながら強く握りしめてくしゃくしゃになってしまった招待チケットを虚に差し出し、蘭も財布の中に入れておいたチケットを取り出して虚に差し出す。

「配布者は……あら？ 織斑君にアルバート君、それにオルコットさんね」

招待チケットに書いてある配布者の欄を見て、虚は意外そうな顔をする。

「え、えつと、一夏の事、知っているんですか？」

「ええ。ここの学園生でこの3人のことを知らない人はいないでしょう。はい、返すわね」

虚の反応を見て一夏の事を知っている事に驚いた数馬がそのことを質問すると、虚は学園内での3人の知名度の高さを簡潔に答えてから、それぞれのチケットを返却する。

(こ、この人、むちゃくちや美人……いや、可愛い!! 数馬にコナかけられる前になんとかお知り合いにならないと!!……話題、話題……)

一目惚れに近い状態で虚のことが気になった弾は、数馬が話しかけ

る前に何か話題になるような事がないか頭の中で探し出そうとする。

「あ、あのっ！！」

だが、特に気の聞いた言葉が浮かばない状態のまま、弾は虚に声をかける。

「？ 何かしら」

「い、いい天気ですね！！」

「そうね」

しかし、てんぱった状態で告げた言葉は虚の興味を特に引くことなく会話が途切れ、自分のセンスのなさに落ち込む弾を不思議そうに眺めながら虚は去っていった。

「あー、まあ、あれだ、弾。元気出せ」

「お兄、いきなりナンパなんかしないでよね……」

数馬の励ましと蘭のあきれ声を聞きながら、弾はおとなしく一夏達が来るのを待つことにした。

「それにしても、一夏のやつ少し遅くないか？ 到着時間知らせたのに来る気配ねーぞ。弾、何か知らねーか？」

弾が落ち込みはじめて5分が経過した頃、数馬が自分の招待者である一夏が迎えに来ないことに疑問を感じ始め、弾に確認をする。



「あれ？ 数馬さん、一夏さんから学園祭でやるクラスの出し物の影響で迎えに来れないかもしれないってメール、着てないんですか？」

だが、落ち込んでいる弾に変わって蘭が数馬に迎えに関するメールの着信を確認する。

「俺のところにはそんなメール着てないぜ？ 蘭ちゃんのところにはそういうメール着てるん？」

数馬は自分のケータイにそういったメールの着信がないことを伝え、蘭に迎えに関するメールがあるかどうかを確認する。

「ええ、私のところには来てますよ。なんでも」

「蘭さん、お待たせしてしまったようですね」

そうして蘭が数馬の疑問に答え、その理由を伝えようとしたところで蘭にとっては既知の、数馬にとっては未知の音が背後からかかる。

「セシリアさん、お久しぶりです」

「めっ、メイドさん！？」

「なにっ！？」

蘭がセシリアに挨拶し、数馬は見知らぬ美少女がメイド服を着ていることに驚き、メイド服と聞いて落ち込んでいたはずの弾がテンションを上げる。

「弾さんもお久しぶりですわ。それと、一夏さんのご友人の方ですね？ わたくし、セシリア・オルコットと申します」

そう言って自己紹介をしてから、セシリアはスカートの裾をつまみ、優雅に一礼する。

「あ……えつと……御手洗、数馬です。よろしくお願いします」

「お、お久しぶりです。オルコットさん」

その仕草を見た数馬と弾は若干顔を赤くしながら自己紹介と挨拶をする。

「あの、オルコットさん。アルバートや一夏が今何をしているか知りませんか？ いざとなれば数馬と2人で回りますけど、勝手を知らないので案内役がないことには……」

弾はセシリアとも顔見知りなので、一夏やアルバートがどうしているかを問いかける。

「それならご安心ください。アル達ならばすぐにこちらに来ると思いますわ。ただ、学園内を案内するならアル達と一緒に行動すると余計な注目を集めてしまいますから、わたくしだけ一足早く蘭さんを迎えにきましたの」

「な、なるほど」

「お気遣い感謝します。セシリアさん」

蘭としては一夏と会って少しでも話をしたかったが、今日の主な目的である学園内の見学をするなら学園内で注目されているらしい一夏やアルバートよりもセシリアのほうが周囲の目が自分に向かないので、確かに案内役としては適任だった。

「それでは蘭さん、行きましようか」

「わ、わかりました」

若干緊張しながら蘭はセシリアについていき、IS学園の内部を案内しようと広場を離れようとする。

「あ、あの、オルコットさん!!」

「どうされました？ 御手洗さん」

だが、その直前に数馬がセシリアに話しかける。

「あ、あの……蘭ちゃんのご案内が終わったら、俺ともう一回会ってくれませんか？」

「あら、ナンパですか？ 申し訳ありませんが、わたくし心に決めた男性がおりますので、そういったお誘いは断るようになっておりますの」

「わかりました。いきなりこんな事言っただけで申し訳ないです」

「わかっていただければ幸いです。それでは、失礼いたしますわ」

だが、誘いをやんわりと断られてしまい、しつこく声をかけて学園内に入れなくなっても困るので数馬はセシリアに謝罪をしてから落ち込みはじめ、挨拶をして広場を去っていくセシリアと蘭を見送るしかなかった。

「あー、数馬。いまさら遅いかもしれんが、オルコットさんは俺を招待したアルバートの彼女さんだ」

「本当にいまさらだな。……一夏達が来るのを待つか」  
「だな」

そうやって弾も数馬もいきなりのナンパ失敗に気を落としながら、一夏とアルバートが広場に来るのを待つことにした。

俺と一夏が正面ゲート前の広場に到着すると、そこには弾と見知らぬ同年代の男がそろって落ち込んでいた。

「よう、弾。待たせたな」

「数馬も落ち込んでるみたいだけど、どうしたんだ？」

どうやら弾と一緒にいる男子は一夏の中学時代の同級生のようにだ。

「おー、アルバートと一夏か。ちょっと自分のセンスのなさに落ち込んでたんだよ」

「なんだそんなことが」

弾が素直に落ち込んでいる理由を話すと、一夏はあっさりと流してしまった。

「そんな事って、お前なあ！！」

「弾、怒りたい気持ちはわからんでもないが落ち着け。暴れると最悪の場合追い出されるぞ」

当然自分の悩みを流された弾は怒りをあらわにするので、一言声をかけて注意しておく。

「くっ……。ここはおとなしくしていよう」

俺の忠告を聞いて渋々といった感じではあったが弾は怒りを鎮めてくれた。

「それで、さつきから黙りっぱなしだけど、どうしたんだ？」

「ん？ あー……。いきなりナンパ失敗しただけだから、気にせんでいい」

「チャレンジャーだな、数馬。……弾は知ってるみたいだけど、数馬は知らないだろうから紹介しとくな。俺と同じ境遇のアルだ。アル、こいつは御手洗数馬。俺の中学時代の同級生だ」

一夏が俺の事を紹介したので、御手洗に自己紹介をする。

「アルバート・ウィルソンだ。よろしくな、御手洗」

「ああ。よろしく、アルバート」

そう言ってお互いに握手をしてから4人でこれからの予定を話し合う。

「なあ弾、数馬。鈴のところ行くつぜ。あいつ、お前達が来てるって知ったら驚くだろ」

「あー、鈴かー。元気？」

「何？ 鈴ちゃん、IS学園にいるん？」

一夏が2人とも面識のあるらしい鈴さんのクラスに行く事を提案すると、弾は鈴さんが元気なのかを気づかうが、御手洗は鈴さんが学

園にいる事すら知らないようだった。

「ああ。元気すぎるくらいだよ」

「あれ？ 御手洗は鈴さんが代表候補生だって知らないのか？」

「そうなん？ 初めて知った。一夏はあんまり連絡くれんし、元々 IS に興味ないから国の代表候補生が誰かって知らんしなあ」

どうも御手洗は今珍しい代表候補生を含めた IS 全般に興味がないタイプのようだ。……なら、どういった意図でここに来たのだろう？

「そうなのか。まあ、IS については多少なりとも知っておいた方がいいと思うけどな」

今の社会を作り出した元凶といっても過言ではないのだから、知っておくに越したことはないと思う。

「ところで2人とも、一つ聞いていいか？」

「ん？」

「どうした？」

「何その格好」

御手洗に一言言つと、弾が俺達の格好について質問をしてきた。

「これか？ クラスの出し物で『ご奉仕喫茶』って名義の執事&メイド喫茶やってるから、その接客用に駅前にある執事&メイド喫茶の@クルーズって店からクラスメイトがコネを使って借りてきた執事服だけだ」

「おい、アル!!!」

特に隠す必要もないと思ったので素直に話すと、一夏は俺に非難の視線を浴びせてくる。

「執事&メイド喫茶って…儲かるん？」

「一夏が執事ねえ……想像でみんな」

「うっ……これが出し物の中では一番マシだったんだよ!」

付き合いの長い二人に知られて一夏は若干居心地が悪そうな表情をするが、『ご奉仕喫茶』の意見がラウラから出なかつたらもつときわどい事をしてきた可能性があるのは否定できない。

「そうなのか？ アルバート」

「執事姿でマシって……どういった意見が出たんだ？」

「御手洗や弾は羨ましいって言うかも知れないが、1日中やることを念頭において聞いてくれよ？」

そう言うって注意してから特別HRで出た意見を一つずつ言っていく。

「、以上の中から一つ選んで1日中、何十人とやることになるんだから、拷問に等しいぞ」

「た、確かに」

「羨ましいけど、自分がやるとしたら勘弁してほしいなあ」

「そう考えれば執事が一番マシってわかるだろ？」

一夏が御手洗と弾に確認すると、二人は無言で首を縦に振る。実際にあがった候補は特定の彼女がいない御手洗や一夏と弾が2〜3度やるだけなら普通に羨ましい物かもしれないが、1日中ぶっ続けでやるとなると『羨ましい』レベルを乗り越えて『拷問』レベルだと二人も理解してくれたようだ。

「それで、鈴のところに行くか？」

「んー？ すぐじゃなくてもいいや。せっかくだし、色々見て回らせてえなあ」

「俺も弾と同意見。どんな出し物があるんだ？」

「俺達のクラスみたい飲食店もあるし、色々な占いとかやってる部活もある。中にはIS学園ならではの物もあるんじゃないか？」

自分のクラスの出し物をまとめるのに忙しくて他のクラスや部活がどういった出し物をやっているか詳しく見ていないので、結構楽しみだったりする。

「俺も全然見れてなかったし、とりあえず行こうぜ」

そうして一夏の先導で4人まとまって移動を開始する。

当然と言っていいのか迷うところだが、俺と一夏は行く先々で女子に声をかけられ、俺も一夏も手を振ったり返事をしたりと忙しい。

「お前ら、無茶苦茶人気あるじゃねーか……」

「羨ましいなあ」

その姿は御手洗と弾から羨望を向けられるのに十分だったようで、校舎に着く頃にはふたりからジト目で睨まれる事になった。

「いや、皆して珍しがってるだけだぞ」

「話の内容にも結構気を使うから日々の苦勞が絶えないし、ISの訓練もあるからかなり忙しいぞ」

IS学園に入学してから約半年が経過してこの生活にも慣れはしたが、それでも見えない部分で苦勞していたりもする。



それでも俺や一夏と入れかわりたいと言った御手洗と弾だったが、ISの実戦では死の危険性があることを知ってしり込みした様だった。

それから一番近くにあった美術部の出し物のクラスに4人そろって入ってみる。

「『芸術は爆発だ！』』という格言の元、美術部では爆弾解体ゲームをやってまーす」

「ああ、織斑君とアルバート君だ！！」

「しかも男友達も一緒だ！！」

「さあさあ、爆弾解体ゲームをレッツ・スタート！！ 男友達には織斑君かアルバート君が解体方法を教えてあげてね」

そう言って部長の腕章をつけた女子が一夏と御手洗に一つずつ爆弾を渡し、タイムカウンターが動き始める。

「えっ、あっ、あの！！」

「落ち着け御手洗。解体方法は俺が指示するから、まずはモノを見せてくれ」

いきなり爆弾もどきを渡された御手洗が慌てるので、落ち着くように声をかける。

「わっ、わかった」

そう言って恐る恐る御手洗が爆弾もどきを見せてくれるので、俺は授業で習った知識を元に切るべきコードや残すべきコードを指示していく。

ピーッ!!

だが、途中で御手洗の手元がくるって切るべきではない配線を切っ  
てしまい、解除失敗と爆発を意味するアラームが鳴り響いてしまう。

「うおっ、何だ!? どうなったんだ、これ!!」

「御手洗、解体失敗。ゲームオーバーだ」

そう言いながら御手洗の手から爆弾もどきをあずかり、美術部の人  
に渡すとあっという間にアラームが止まる。

「な、なんていうか、物騒なところなんだな、IS学園って」

「まあ、場所が場所だからしかたないって部分もあると思うけどな」

何せIS操縦者を育成するための学園なのだから、身近に迫った危  
機にも柔軟に対処する必要があるので、爆弾解体技術もその一環と  
してカリキュラムに組み込まれている。

それから参加賞の飴玉を貰い、程なくして一夏も解体に失敗したよ  
うでアラーム音が鳴り響き、弾の一言で鈴さん達のクラスに行く事  
になった。

「あ、悪い。その前に一回これをクラスに置いてくる」

そうして1年2組に向かう最中、巻紙さんから貰ったみつるぎ社の  
カタログを置いてくることを一夏達に伝える。

「ああ、さっきのカタログか。先に入って席取ってるから、直ぐに  
来いよな」

「わかってるよ」

そう言っただけは一人で1組の教室に向かう。

「あー！ アルバート君だー！！」

「ホントだー！！ ゴメン、直ぐに接客に入っただけー！！」

だが、教室内に入る直前に列整理班の相川さんと谷本さんから接客  
に入るように言われてしまった。

「えっと……何か問題発生？」

「織斑君とアルバート君はどこだっただけお客さんのクレームがすごい  
ことになってるの」

どうやら看板不在がばれてしまったようだ。こうなったら直ぐに接  
客に入るしかないだろう。

「了解。ヘルプに入ってた楯無会長はどうしたかわかる？」

「それが5分前くらいに生徒会の方があるって言うてどこかに行っ  
ちゃったの。そしたらいきなりクレームの件数が増えて……」

「あー、そこまでいいや。とにかく俺は直ぐに接客入るから、一  
夏とセシリアのケータイ鳴らして二人に連絡を」

「そっちはデユノアさんとラウラちゃんが連絡してるから、直ぐに  
ふたつ戻ってくると思う」

「わかった。列整理の人員の中から人数決めて、今店内にいる人た  
ちが会計する時に、俺とのゲームに勝った時の景品用にストックし  
てあるクッキーをクレームのお詫びに無料配布して」

二人からの報告を聞き、俺は相川さんと谷本さんに指示を出してからすぐにバックヤードに入って上着を着なおしてホールに入り、ひたすら接客をしていた篤さんと一緒にホールの中を駆け回る。

すぐに連絡をしていたラウラとシャルロットもホールに入り、それに遅れて一夏とセシリアもホールに入ってきたので6人全員で1時間ほど慌ただしく接客をする事になってしまった。

「お疲れ様、アルバート君」

「鷹月さんもお疲れ様。どうかした？」

クラスの中ではしつかり者と認識されていて、今日もホール内整理の班長を務めてもらっている鷹月さんが話しかけてくる。

「ええ。皆でクレームに対応しながら動き回ってたから、一度お店の体勢を整えたいの。それに時間がかかりそうだから、ホールメンバーにも休憩に入ってほしいんだけど」

確かにここ1時間ばかり忙しく動いていたので一度体勢を立て直すべきだろう。奇跡的に今はお客さんが入っていないので、この機を逃すとまずいだろう。

「わかった。体制整理の指示は任せても構わないかな？」

「ええ。アルバート君達にはこのあと頑張ってもらわなきゃいけないし、どの道作業に1時間はかかると思うからセシリアさんとおゆっくりしてきて」

「それじゃあ、お言葉に甘えさせてもらうよ」

既に鷹月さんは列整理班とも話をつけていたらしく、俺の言葉を聞くと同時に列整理班の元に向かって行き、クラス前に集っていた女

子生徒達をあっという間に解散させてしまった。

「セシリア、お疲れ様。今の内に休憩しながらどこか回らないか？」

「アルもお疲れ様です。わたくしもそれは考えておりましたので、早速移動しましょうか」

そう言っただけでセシリアはクラスから出て休憩をかねた学園祭散策に出かけることにした。

#### 44 学園祭での一幕（後書き）

そんなわけで五反田兄妹に加え、原作ではほぼ出番がない御手洗君にも学園祭に来てもらいました。

次回は学園祭デートは確実に入りますし、上手くいけばシンデレラの闘争とISバトルにも入るかもしれません。

## 45 演劇に出よう!! (前書き)

最新話、学園祭デートとシンデレラ出演に絡んだアレコレです。  
ここまで来たので次回は確実に戦闘シーンが入ります。

## 45 演劇に出よう!!

「まずは腹ごしらえしようと思うんだけど、セシリアは行きたい場所とかあるか？」

時間としては午後1時近くになっているし、昼頃から1時間近くずーっと動きっぱなしだったので腹が減ってしょうがない。

「そうですね……料理部が調理室で日本の伝統料理を作っているようですから、行ってみませんか？」

生徒一人一人に配布されているパンフレットを見ながらセシリアがそう提案してくる。

「ああ、行ってみるか。それにしても、日本の伝統料理って何をやってるんだろうな？」

昔は日本に住んでいたので俺もある程度は日本食を作ることは出来るが、伝統料理という触れ込みが気になる。

「確かに気になりますわね。それと、わたくしとしても作る事が出来る料理のレパートリーを増やしたいですから、早速参りましょうか」

そんな話をしながら、料理部が出し物をやる部屋として使用している調理室へ向かうことにした。

どういった料理を売っているのか期待しながら調理室の中に入ると、そこでは確かに日本の伝統料理を売っていた。



(……確かに日本の伝統料理ではあるけど、少し言葉が足りてないんじゃないか?)

もっと正確にいうなら、『日本の伝統的な惣菜料理』が一番合っているように思えた。

だが、その販売品数はかなり多い。ずらーっと並べられた大皿には肉じゃがやおでんをはじめとした煮物や、白和えなどの和え物、魚の塩焼きといった焼き物など、様々な種類の惣菜が豊富に取り揃えられていた。

「すごい種類ですわ。いくつかの品はそれなりに手が込んでいます。うですし、日本の家庭料理も奥が深いようですね」

「それもそうだけど、ここまでの品数を仕込むのはかなり大変だと思うぞ。料理部にどれくらいの部員数があるかは知らないが、一品あたりの調理時間を考えるとかなり手際よくやらないとこれだけの品数を出すのは難しいんじゃないか?」

大皿に並べられている料理の種類の高さに驚いているセシリアに自分の意見を伝えると、料理部の部長らしき人が俺達の前にやってくる。

「おおつ、ウイルソン君と彼女のオルコットさんだ!」

「どうも、はじめまして」

「えっと、お邪魔させていただいております」

「ふたりでデート? 執事とメイドの逢い引き? っていってもミンチじゃないわよ? 合挽だけに!! なんちゃってなんちゃって」

顔は知られているようなので挨拶をすると、一夏と同程度のギャグ

が飛んできて俺達は閉口させられた。

「……あはは……」

「さあさあ、食べていってよ。特別にタダでいいわよ？ その代わり、写真取らせて。あとうちに投票して？」

どちらかという面白くないギャグを聞かされて苦笑しか浮かばない俺達に不正勧誘をしてくる料理部の部長さん。どうやらかなりイイ性格をしているようだ。

「いえ、代金はお支払いしますので、写真撮影も投票も遠慮させていただきます」

部活動系の出し物を対象にした投票はある意味で俺の今後を決める大事な物なので、謹んで辞退しておく。

「むう、仕方がないね。どれにするのかな？」

「それじゃあ、肉じゃがを一つ。セシリアはどれにする？」

「わたくしも同じ物をいただけますか？」

「はい、どうぞ」

そう言っただけ部長さんは保温装置で出来立ての温度を維持した大皿から1人前ずつ盛って俺とセシリアに渡してくれたので、早速食べてみる。

「……しつかり中まで味がしみてるな。うん、美味しい」

ジャガイモをはじめとした具の中心にまでしつかり味がしみこんでいて、それでいてくだい部分が全くない。ご飯があれば2〜3杯はぺろりといけそうな味だ。

「素晴らしい味ですわ。何かコツがありますの？」

「それは俺も気になるな。これだけしっかり味がついてるのに、具の煮崩れが殆どない。どうやったんですか？」

「これ？ 煮崩れの少なさと味のしみこみ具合は圧力鍋を使って作ってるんだ。味付けの具体的なコツは秘密よ。知りたければうちに入部してね!!」

学園祭の景品になっていなければすぐにでも入部したいところだが、ここで勝手に入部したら色々な意味でまずい事になりそうなので諦めるしかないだろう。

「料理部が1位になることを祈ってますよ」

「くっ、テニス部に入部していなければすぐにでも入部届けを提出いたしますのに……」

セシリアは既にテニス部に入部しているし、IS学園は部活の掛け持ち不可なのでその表情は非常に悔しげな物だった。

「部活関係の手続き、めんどくさいからなあ。仲間の誰かが入部する事に期待するしかないんじゃないか？」

「こうなったらしっかり食べて味を覚え、研究あるのみですわ!!」

そうして意気込みながら肉じゃがを食べるセシリアの姿を見ながら、俺も味の秘密を探るためにゆっくりと食べることにする。

1皿食べ終わってから代金を支払い、調理室を出て他のクラスを見ることがした。

吹奏楽部の楽器体験コーナーではセシリアが演奏するバイオリンの

メロディを楽しみ、俺もつたないながらホルンを吹いてみたが曲を演奏するほど手が動きそうもなかった。

その他にも色々なクラスや部活動の体験コーナーなどを回り、営業再開時間に間に余裕を持って間に合うようにしながら学園祭でのデートを楽しませてもらった。

営業再開まで残り10分ほどしかないので教室に戻り、巻紙さんから貰ったみつるぎ社のカタログをバックヤードで見ながら時間を潰す。

（ん？ これってみつるぎ社のカタログだよな？ 武装のスペックおかしくないか？）

一通りカタログを流し見てみたが、どういうわけか記載されている武装のスペックがデュノア社を含む有名メーカー数社の主力武装と全く同じスペックをしていたし、武装そのもののデザインもほぼ同じように思えた。

家電製品などでは有名な販売メーカーが独自製品を作ることがあるのはTVか何かで見たが、IS系の企業でそういったことをしているのは聞いた事がない。

そのことが気がかりになったのでカタログに記載されていたアドレスを入力し、ネットでみつるぎ社について軽く検索してみたが、その結果を見て少しばかり驚かされることになった。

（…………コイツはもしかするって事か？）

不自然なカタログとネットでの検索結果を見て否定されたはずの考えが再び頭に浮かんでくると同時に、人が良さそうな笑顔を浮かべていた巻紙さんの表情が胡散臭く思えてきた。

「アル。そろそろ営業再開するみたいだから、ホールまで来て」

「…ああ、わかった。すぐに向かう」

だが、そのことを詳しく考える前に営業再開時間になってしまい、シャルロットが俺を呼びに来たのでホールに向かって目の前の仕事に集中する事にする。

相変わらずご奉仕喫茶は盛況で、俺も一夏も引っぱりだこになって1時間近く接客をする。

(こういうのも悪くないな。クラス一同頑張ってるし、セシリアとも一緒にいることができるから、いい事づくめだ)

誰かと一緒に頑張るといふのは悪い気分じゃないし、恋人と一緒に仕事をしているといふのは色々な意味で励みになるので、モチベーションが落ちることなく接客に集中できる。

(よし!! 今日もしっかり仕事するぞ!!)

ホールの中を見回してみると一夏もやる気みなぎらせているようだし、このまま学園祭終了までいい気分でき接客できるような気がしてきた。

「じゃじゃん、榎無おねーさんの登場です」

だが、そうしてやる気を漲らせている俺や一夏の目の前に職場放棄人間せいとがいが現れた。  
人間ちやうが現れた。

コマンド      戦う      話す      逃げる

「……いったい何の用ですか？      職場放棄人間楯無会長」

逃げようとする一夏の進路妨害をする楯無会長に呆れながら話しかける。

「あら、アルバート君は逃げないのね。……今の呼び方、おかしくなかった？」

「気のせいですよ、職場放棄人間楯無会長」

あなたからは逃げようとしても無駄だって事はここ数日で学習したつもりですからね。

「……まあいいわ。時にふたりとも。君達の教室手伝ってあげたんだから、生徒会の出し物にも協力しなさい」

「……別に特訓のお礼って事で協力しても構いませんが、俺達のクラスの出し物はどう收拾をつけさせるつもりですか？      今でもそれなりの人数が接客待ちをしているはずですが」

さすがにクラスの出し物を放り出してまで協力しようとは思わないので、代案を提示されない限りは断るつもりだ。

「それに関してはご心配なく。既にこのクラス以外に生徒会の出し物に関しての校内放送を流してあるから、学園生の殆どは会場の第4アリーナに向かっているはずよ」

「そ、そういえば……先程から新しいお客様の来店がありませんわね？」

楯無会長の指摘を受けて偶然会長の近くにいたセシリアが廊下の様子を見に行こうとする。

「あ、アルバート君！！ 今校内放送で男子生徒2名とのふれあいを主にした観客参加型演劇を30分後に開始するってアナウンスが入って、列に並んでいた人達の殆どが会場の第4アリーナまで移動しちゃっただけど！！」

だが、その直前に相川さんが慌てた様子でホールに入って報告してくる。……どうやら逃げ道は完全に塞がれているようだ。

「……わかりましたよ。どうも俺達の参加が前提になってるみたいですし、時間も惜しいですからね。一夏もそれでいいか？」

本人とその周囲以外への根回しを完璧にこなした後でやられたら、断ることすらできやしない。

「っていつか、俺に拒否権あるのか？ 今の相川さんの報告を聞くと俺も演劇に参加するようになってるみたいなんだが」

一夏に確認を取ると正論を言われてしまった。確かに一夏にも俺にも拒否権がないのは明白だ。

「更識先輩。このような事をされるとアルやわたくし達だけでなく、

クラス全体にも迷惑がかかるので止めていただきたいのですが」「んー。その意見ももつともではあるんだけど、私が見た時には学園祭終了までの残り時間で捌ききれぬお客さんの量じゃなかったから少しは感謝してほしいなあ」

楯無会長が得意げな顔でそう言ってくるので、セシリアは相川さんに一つ質問をする。

「相川さん。更識先輩はああ言っておりますが、実際のところはどうでしたの？」

「えっと……会長さんの言うとおり、かな。放送がかかる前でもかなりの人数が並んでたから、接客を受けられないお客さんが10人単位で出た可能性は十分にあると思う」

「……そういうことでしたらありがたく思っておきますが、今後こういった事は自重していただけるようお願いいたしますわ」

若干怒りながらそう言うセシリアだが、言い分としては至極全うなものだ。今から行う演劇は俺や一夏が直接関わる事だけに、事前の連絡が一切ない状態で関係者の間で話を進められ、本番直前になって俺達に急遽詳細を伝えられるのでは周囲への影響もバカにならない。

「あら。サプライズとしては上々だと思ったのだけど、お気に召さなかったかしら？」

「そのサプライズの方法にもよりますわ」

「そう、それじゃあ驚いてもらえそうね。実は」

「つつっ！！？？ 本気ですか！？」

そう言って楯無会長はセシリアの耳元で何かを囁くと、セシリアは顔を真っ赤にしながら楯無会長に向かって大声を出す。



「ええ、本気よ。セシリアちゃん個人としても、アルバート君ともしっかり仲良くなるチャンスじゃない？」

チエシヤ猫を連想させる笑みを浮かべてそういう楯無会長をセシリアは全力で睨みつけていた。会長の言ったセリフの詳細が気になっ  
てしまう。……いったいなにを言われたのだろうか？

「えっと……どうしたの、セシリア？」

「……何でもありませんわ。申し訳ありませんが、急用が出来ましたので失礼させていただきます」

普段のセシリアならまずしないような行動をしたことを不思議に思いシャルロットが話しかけるが、セシリアは明らかに不機嫌な声でそう言っ  
てどこかに行ってしまった。

「楯無先輩、セシリアに何を言ったのですか？ あそこまで不機嫌な態度をしたセシリアは見た事がないのですが」

「それに関しては秘密。箒ちゃん、ラウラちゃん、シャルロットちゃん。あなた達もアルバート君や一夏君と一緒に演劇に出てみない？」

箒さんが楯無会長に向かってセシリアの態度が豹変した理由を問いかけるが、楯無会長はその問いに黙秘を返した上で箒さん達にも演劇への出演を要請する。

「うーん……誘ってもらえるのは嬉しいけど、アルや一夏がいなくなっ  
たとしてもクラスの仕事があるから、僕は辞めておこうかな」

「私もシャルロットと同意見だ。いくら一夏やアルバートがい  
ないとはいえ、少しでも客が来る可能性がある異常クラスでの仕事を放



た一夏が何とも言えない表情をしながら楯無会長の近くにいた。箒さん達に聞こえないように小声で俺に話しかけてきた。

「…なんだ、一夏」

「さつきから嫌な予感がしてしょうがないんだが……」  
「奇遇だな、俺もだよ」

この分だと箒さんやセシリア達と同じ専用機持ちである鈴さんにも話は飛んでいるのは間違いないだろう。

「あの、楯無さん。演目っていったい何をやるつもりなんですか？」  
「それは俺も気になりますね。観客参加型の演劇ってことは、結構動きのある演目なんですよな？」

俺と一夏が何をやるか問いかけると、楯無会長は勢いよく扇子を開きながら演目を教えてくれた。

「演目？ IS学園風にアレンジしたシンデレラよ」

そう言った楯無会長の扇子には『迫撃』の二文字が書かれていて、アレンジされたシンデレラが物騒な事になりそうだと俺達に思わせるのに十分だった。

観客参加型演劇に出演するために第4アリーナの更衣室へ移動し、楯無会長から渡された衣装に着替え始める前に一夏に話しかける。

「一夏、人目がない今の内に言っておく事がある」  
「ん？ 急にかしこまってどうしたんだ、アル？」

一夏は執事服の上着を脱ぎながら用件を聞いてくるので、俺は自分の考えを正直に話す。

「早いか遅いかの差はあるだろうが、あの巻紙って人が俺達に襲い掛かってくる可能性があるから、しばらくの間ISスーツは常時着用していた方がいいと思うぞ」

「巻紙って……今日の昼頃に俺と商談しようとしてた会社の人だよな？ その人が襲ってくるってどういうことだ？」

「簡単に言っちゃえば、あのみつるぎって会社は俺達男性IS操縦者を利用してあくどい事を考えようとするやつらがでっちあげた架空企業の可能性があるんだよ」

一夏も数時間前に会った涉外担当の女性の事を思い出しながら詳しい理由を聞いてくるので、簡潔にそう答える。

「架空企業って……マジか？ カタログだってあつたし、名刺にはちゃんとホームページのアドレスも載ってたじゃないか」

「ああ。だが、カタログに関してはIS系企業の有名メーカーが販売している主力武装と全く同じスペックだったし、ホームページはアドレスそのものが存在しなかった」

襲撃をかけようとしているくせに随分と間抜けな話だが、事実だった。

「でも、理由は？ 俺達を襲う理由は何なんだよ？」

「楯無会長の特訓を受ける事になった理由を思い出せ。俺が考え付く理由はその時に言ったぞ」

そう言いながら俺はここに移動する時に密かに持ってきておいたクルアの個人用ロッカーに置いてある予備のISスーツを取り出し、手早く執事服を脱いでISスーツを着込む。

「……わかった。ただ、今から寮に戻る暇はないから、いざとなったら直接変換を使うつもりだ」  
ダイレクトフォームチェンジ

一夏も何が目当てかはつきりしたようで、戦闘時の眼差しに近くなる。

「だが気をつけるよ？ わかっているとかが直接変換は通常展開と比べて余計にエネルギーを食うからな。燃費のキツイ白式だと戦闘可能時間がかなり短くなる事は忘れないようにしとけ」

「それはわかってるさ。……でもアルの考えが会っていると仮定すると、なんで楯無さんは俺達にその事を教えてくれなかったんだろくな？」

お互いに演劇用の衣装に着替えながら、一夏は楯無会長が襲撃を俺達に知らせなかった事を疑問に思っているようだ。

「……普段のあの人の行動を考えるとありえないし、かなり好意的な解釈をするならって前置きがつくが、俺達が事実を知り、焦って敵をおびき出そうと普段と違う行動をして、その結果、周囲に無用な被害が及ばないようにしたってところじゃないか？」

「周囲を含めて思いつきり引つ掻き回す楯無さんの性格を考えるとありえないな、それ」

楯無会長に対してかなりボロクソな言い方をしているが、そこは自業自得として諦めてもらうほかないだろう。

「まあ、巻紙さんが怪しいって事を覚えておけばいいさ。それより早くしないと楯無会長が呼びにくるぞ」

「そうだな、急ぐか」

そう言っただけで俺達は着替えのペースをあげて2分ほどで着替えを終える。

「アルバート君、一夏君、ちゃんと着たー？」

「ええ、しつかり着替えましたよ」

その直後に楯無会長が扉越しに声をかけてくるので、着替え終わった事を伝える。

「なんだ。おねーさんがっかり」

「……………なんでですか」

本当に着替え終えている俺達を見ながら少し面白くなさそうにする楯無会長。

俺達の演劇用の衣装は童謡などで語られている王子様の格好そのもので、他の演目にもそのまま利用できそうだった。

「はい、王冠」

楯無会長が王冠を渡してくるのでそれを受け取るが、箒さん達があつさり掌を返して出演した事を考えると優勝者には絶対に何かしらの特典があるはずだ。

「あの、楯無会長。教室では聞きませんでしたけど、これって参加者

に何かしらの特典用意してありますよね？ いったい何で尊さん達を釣ったんですか？ あと、セシリアはこの演劇に出演してるんですか？」

セシリアは教室で楯無会長がこの劇に関する説明中に急用があるといつてどこかに行ってしまったが、この演劇に出演しているかどうか気がなったので、その事を知っているであろう楯無会長に聞いてみる。

「それに、俺達脚本や台本を一度も見てないんですけど。それはどうすればいいんですか？」

「一夏君の質問だけど、基本的にはこちらからアナウンスするからそのとおりにお話を進めてくれればいいわ。もちろん台詞はアドリブでもいいね。アルバート君の質問だけど、セシリアちゃんも出演してるけど、特典については秘密にさせてもらうわ。ただ、運がよければ君にも悪い話じゃないとだけ言っておくわね」

俺と一夏が質問をすると、楯無会長はそう答えてきた。その言葉を聞いて言い知れぬ不安を抱きながら、第4アリーナのアリーナ・ステージ全域を使って作られたセットの舞台袖に移動する。

当然ながら観客席は立ち見を含めて満員で、観客の人たちは劇の開始を今か今かと待ちわびているようだった。

「さあ、幕開けよ！！」

楯無会長のその言葉と共にアリーナ全体にブザー音が鳴り響き、観客参加型演劇『シンデレラ』が開始されるのだった。

#### 45 演劇に出よう!! (後書き)

そんなわけで次回はシンデレラバトルとあの人との戦闘になります。今回のアルバートの考察についての補足説明は次回以降にさせていただきます。

途中アルバートと一夏が楯無先輩をボロクソに言ってますが、楯無さんは場や人間関係を引つ掻き回すタイプの人間なので、周囲への影響を考慮した結果とはいえ、引つ掻き回される側の人間からすればどうしても印象は悪くなると思います。



#### 46 演劇出演と襲撃者退治（前書き）

先週の突然の冷え込みで体調を崩し、執筆が遅れた関係で投稿が遅れてしまいました。申し訳ありません。

そしていつの間にかお気に入り件数が200件を超えていました。登録していただいている皆様、ありがとうございます。

今回はシンデレラ・バトルとオータム戦になります。

## 46 演劇出演と襲撃者退治

「むかしむかしあるところに、シンデレラという少女がいました」

楯無会長がナレーション役を勤めているらしく、いたって普通の出だしで演劇が始まる。

観客参加型ということだが、エキストラ役あたりで観客の皆様近くで踊る事になるのだろうか？

それにシンデレラ役をはじめとしてキャストの一切を教えてもらっていないのでどう動けばいいのかさっぱり見当がつかないし、IS学園風のアレンジというのがどういった方向で施されているのかも気になる。

もともと、劇は既に始まっているので俺も一夏も自分の出番が予想される舞踏会系のセットが設置されているエリアへ移動する。

「否、それはもはや名前ではない。幾多の舞踏会を抜け、群がる敵兵をなぎ倒し、灰燼を纏うことさえいとわぬ地上最強の兵士たち。彼女らと呼ぶに相応しい称号……それが『灰被り姫』……！」

……は？

「今宵もまた、血に飢えたシンデレラたちの夜が始まる。双子の王子の冠に隠された隣国の軍事機密を狙い、舞踏会という名の死地に少女達が舞い踊る……！」

ちよっと待て……！ アレンジ方法が先鋭的過ぎて理解できん……！

その上設定が物騒すぎる！！

「は、はあっ!?!」

「わけわからねーっての!?!」

「もらったあああ!?!」

物騒極まりないナレーションが終わると同時に叫び声を上げて舞台に現れたのは、白地に銀のあしらいをしたシンデレラ・ドレスを纏った鈴さんだった。篝さんやラウラ、シャルロットが釣られていたので、鈴さんも相乗効果で釣られてしまったようだ。

「のわっ!?!」

「よこしなさいよ!?!」

反射的に攻撃をかわした一夏を睨みつけながら、飛刀と呼ばれる中国で使われる手裏剣を一夏目掛けて投げる。

「ぬおっ!?!」

当然一夏はその攻撃を防ぐために近くのテーブル上あったティーセットのトレイをひっくり返し、その底面で飛刀を受け止めて攻撃をしなく。

「危ねえだる鈴!! 殺す気か!?!」

「死なない程度に殺すわよ!?!」

「意味がわからん!?!」

そう言いながら鈴さんは一夏に攻撃を続行し、一夏が防具代わりに使っていたトレイを吹き飛ばす。

「よっ…と」

トレーは勢いよく俺の顔面目掛けて吹き飛んでくるので、万が一の事に備えて顔の位置を調整しながら受け止める。

(鈴さん、いつにも増して気合入ってんなあ……。いったい何に釣られたんだ?)

受け止めたトレーから飛刀を引っこ抜き、護身用の武器として拝借しておく。よく見るとトレー自体がかなり磨きぬかれています、鏡のような使い方もできそうだった。よってトレーをこまめに動かして襲撃してくる可能性のある巻紙さんやセシリアがセット内のどこにいるのか探しながら孤立しないように一夏達の近くにいるように意識しつつ、鈴さん達が惹きつけられた景品についても考えてみる。

手持ちの情報だと『セシリアが景品の詳細を聞いて真面目に怒る代物』でありながら、楯無会長から見て『運がよければ俺にも悪い話ではない』物。それでいて『篝さんをはじめとした一夏を好いているメンバーも一緒になって釣り上げる事が出来、それでいて一定の参加者を募ることが可能な価値を持つ景品』ということになる。

(単純に考えれば『男子生徒との一日デート権』あたりだろうけど、それじゃあ俺にも悪い話じゃないって点が合わないんだよなあ…)

そうなると『男女の中を進展させるデート以上の出来事』となる。しかも恋愛事に関しては唐変木が一夏を相手にして王冠を得た女子生徒との仲を進展させる事が可能な物はおのずと限定される。

(ペア旅行…ないな。今の時期だと日程的にかなり短い物になるし、何より一夏の恋愛関係限定スルースキルで悉くスルーされるだけだ

ろう。となると……男子生徒との同室・同居権あたりか？)

これなら篤さん達があっさりと掌を返した事にも納得しようと思えば出来ないわけではないが、個人的には勘弁してもらいたい。見知らぬ女子生徒と同室になったら気まずいし、何よりセシリアに申し訳ない。それにセシリアと同室になったら理性を維持できるかどうか正直怪しい部分もあるので、どちらにしても遠慮したいところだ。

「アル」

そうして景品が何なのか見当がついたのとはほぼ同じタイミングで、背後からセシリアが声をかけてくる。

「……………」

振り返ると鈴さんと同じ白地に銀のあしらいをしたシンデレラ・ドレスを纏ったセシリアがいたのだが、その手にはしっかりと拳銃が握られていたし、表情にやる気が満ち満ちていた。

「……………何か言ったらどうですか？ 無言ではこちらとしても困ってしまうのですが」

「……………すまん。あまりに似合ってるものだから、何を言えばいいか迷ってた」

その手に握っている拳銃がなければもつとよかったのだが、こんなハチャメチャな演目でそれを望むのは虫が良すぎる気がしないでもない。

「そ、そういうことでしたら不問としておきます。……………それよりその王冠、わたくしに頂けませんか？」

若干頬を赤らめながらセシリアは王冠を要求してくるので、おそろく予想は合っていると判断していいだろう。

「あー……うん、持っていてくれ。山田先生、織斑先生、恨むならこの企画を立てた楯無会長を恨んでください」

十中八九迷惑をかけることになる担任と副担任に一言謝ってからその場で膝立ちになり、セシリアが王冠を手に取りやすいようにする。

「ええ。それでは頂きますわ」

セシリアはそつと俺の頭から王冠を取り、その直後に王冠の内側にあったスイッチを押した。

「おおつと!! ここまで王子様が一人王冠を奪われてしまった!! 同時にフリーエントリー組の参加も始まったので、残った王子様の王冠目指して皆さん頑張ってください!!」

楯無会長の気合が入ったアナウンスが聞こえると同時に、地響きらしき音がだんだんと近づいてくる。

「織斑くん、おとなしくしなさい!!」

「そいつを……よこせええ!!」

「アルバート君は無理でも、織斑君となら希望はある!!」

50メートルほど離れた位置に20〜30人程度のシンデレラ・ドレスを纏った女子生徒達が各々武装してこちらに走りよってきていて、シンデレラというよりはジャングルを題材にした動物の大移動を連想させた。

「待ちなさいよ、一夏!!!」

「その王冠、貰い受ける!!!」

「いつ、一夏待つてえ〜!!!」

「王冠をよこせ、一夏!!!」

当然というべきか、鈴さん・篝さん・ラウラ・シャルロットの4名も一夏を追い掛け回して、草食動物を追いかける肉食動物の群れのように思えた。

「か、勘弁してくれー!!!」

「……ここにいると巻き込まれそうだな。セシリア、逃げよう」

「賛成ですわ」

当然一夏は全速力で逃げ出し、俺もセシリアも巻き込まれないように逃げる事にする。もっともセットの大きさが限定されているので逃げる事ができる方向が限定されてしまい、一夏と同じ方向に逃げるしかないのが辛いところだった。

「こちらへ」

だが、突然足元から声が聞こえるのと同時に足を引っ張られてしまい、俺と一夏はセットの上から転げ落ちてしまった。

「あ、あの……」

「静かに。今安全な場所までご案内します」

突然の事で一夏はここまで引き込んだ相手に何か言おうとしたが、一言注意されていた。

もつとも、今までライトアップされていたステージにいたこともあって相手の顔がよく見えなかったし、今セットの上に出たら一般参加者のシンデレラ役の女子生徒さん達に追い掛け回される可能性もあるので俺も一夏と一緒に行動する事にした。

「着きましたよ」

「はあ、はあ……。ど、どうも」

「一応お礼は言っておきます、巻紙さん」

俺も一夏も誘導されるまま、セットの下を通って第4アリーナの更衣室までやってきた。今朝執事服に着替える時にもここを利用したので、制服をはじめとした一通りの着替えもそろっている。

セットの下を出てから更衣室に移動する僅かな距離で気付いたが、俺達をここまで誘導したのは怪しい涉外担当・巻紙礼子さんだった。相変わらずニコニコと笑みを浮かべているが、この人の妖しさに気づいてからでは微笑まれても胡散臭いだけだ。

「ところで巻紙さん。一つ訊きたいのですが、あなたの背後にいる組織について洗いざらい教えてもらえませんかね？」

俺がカマをかけながらそう言うと巻紙さんは微笑んだ表情のまま一瞬動きが止まり、次の瞬間には表情は先程までと変わっていないにも拘らず纏っている表情が刺々しい物に変わる。

「ちっ、いつ気付きゃがった、ガキ」

おまけに礼儀正しかった言葉遣いすら豹変し、言葉尻から俺達を見



下しているのが丸わかりだった。

「本気で言ってるなら襲撃対象のリサーチ不足じゃないか？ 一夏は騙せるかもしれないが、あんな急造仕様丸わりのカタログ渡されてホイホイ騙されるほど俺は甘くない。記載武装のスペックが全部有名メーカーのそれと同じなんて疑って下さいと大声で言ってるようなもんだ。元ISマニア舐めんな」

「……そうかい、そうかい。バレてるってんなら、こいつを使ってもいって事だよなあ……！」

そう言っつて巻紙と名乗っていた女のスーツを引き裂いて背後から鋭利な爪が8本飛び出し、俺のいる位置目掛けて襲い掛かってくる。

「くっ、ブレード……！」

後退しながらそれまで纏っていた演劇用の衣装を量子変換して拡張領域へ格納しつつ、スカイ・ブレードを緊急展開して襲撃者の女へ向き直る。

「どうすんだよ、アル」

一夏も女がISを展開した時点で白式を展開したようで、どう対処するのか俺に問いかけてくる。

「とにかく攪乱して畳みかけるぞ」

悠長に作戦を考える暇を与えてくれることはないだろうから、視線操作でコントローलサポートをオンにしつつ簡潔に返事をする。

「わかった。背中任せろぞ、アル」

「……話し合いは終わったか？ ガキ共」

女は余裕の表れかISを完全に展開しきっても嗜虐的な笑みを浮かべたまま襲ってくる素振りすら見せなかった。

「ああ、待たせたみたいだな。ついでにそのまま手ぶらで帰ってくると個人的には嬉しいんだけど……！」

黄色と黒で染められた8本の装甲脚が目を惹くISを纏った女に対してそう言いながら、スカイ・エッジmk<sup>マルチプル</sup>?の多目的ビットを全機展開して攻撃を開始する。

「そいつは出来ねえ相談だ!! 帰るとしたら teme からのISを頂いた後だからなあ!!」

その言葉と共に8つの装甲脚の先端が割れるように開き、内蔵されていた銃口がビット目掛けて実弾射撃を開始する。

「なんなんだよ、アンタは!?!」

一夏も白式を狙われているので、雪片式型で目の前の女に接近して斬りかかりながら何者なのか問いかける。

「ああん？ 知らねーのかよ、悪の組織の一人だつーの!!」

「ふざけん」

「ふざけてねえつーの!! ガキが!! 秘密結社『亡国機業』が1人、オータム様って言えばわかるかあ!?!」

その女、オータムは一夏の斬撃を展開したカタールで受け止めながら自身の所属組織の名を言った。

「そうか。自己紹介もしてもらったことだし、とつととお帰り願おうか!！」

ビットを半自律モードで操作しながら厄介な装甲脚を破壊するためオータムの背後に回りこみながらそう言い、装甲脚の基部ユニットに攻撃を加えるためにスカイ・ブレードmk?を展開する。

「はっ!! 今言ったばっかだろうが!! テメエらの機体を頂くまでは帰らねえよ、ガキ共!！」

だが、斬りかかる直前に空いている左手にマシンガンを構築しながらISの全方位視界を利用して脇の下にマシンガンを構えて連射し、俺の接近を阻んでくる。

当然タダで当たるつもりもないのでその射撃を円状制御飛翔で回避しながらビットにコマンドを送って装甲脚の基部を破壊しようとするが、オータムの装甲脚の制御能力は俺のビットコントロール精度より上のようでこちらがビットを背後に移動させてもすぐに装甲脚が追いつがってくるので装甲脚の基部には満足に攻撃が出来ていない状態だった。

(こっちは仮にも第4世代機だぞ!? それに第2世代機で追いつがるってどんだけ強いんだよこの女!?)

使用しているISはカラーリングと細かなディテールの差はあるが、アメリカ製第2世代ISの一つ『アラクネ』で間違いないだろう。そして、その操縦者であるオータムの技量は間違いなく国家代表クラスと考えていい。その理由の一つとして、アラクネの装甲脚は制御するのにビット以上に高度な遠隔操作武装の制御能力を要求され

る事があげられる。

理由はいたって簡単。アラクネは第2世代ISに分類されているので、第3世代ISでは標準装備されているイメージインターフェースを搭載していない。そのため似たような遠隔操作武装であるビット類とは比較にならないほど制御が難しく、細やかなコントロール能力が要求される。

当然その動きも本来ならばビットとは比べ物にならないほど直線的かつ機械的な動きしか出来ないはずだが、一夏と通常戦闘を行いなから装甲脚を有機的にコントロールして最新式の制御システムとイメージインターフェースを使用した俺のビットと射撃戦を繰り広げているこの光景がオータムの操縦技量の高さを如実に物語っていた。

「ハハハ、やるじゃねえかよガキ共！！　だが、テメエらの機体は過ぎた玩具だ、私にとつと渡すんだな！！」

オータムが白式とスカイ・ブレードを渡すように言ってくるが、俺も一夏も返事は決まっていた。

「誰が渡すか！！」

「ふざけんな蜘蛛女！！」

正直言つて障害物の多い更衣室内での戦闘は初心者からやっと抜け出した俺と一夏にとって不利と判断せざるを得ないが、状況としては何とか拮抗している。

その要因はここ1週間の特訓で身についた技術のおかげと言っている。一夏の場合はPICのマニュアルコントロール、俺の場合は一夏のそれに加えてビットのマニュアルコントロール特訓のおかげだ。

普段は場を引つ掻き回すだけの楯無会長だが、特訓を提示してくれた事には感謝しておくべきだろう。

だが、それでもオータムを退けるには足りない。敵の目的は俺と一夏の機体を奪取する事にあるらしく、撤退させるには『敵の奪取方法』を確実に叩き潰した上でこちらの最大攻撃を当てる必要があるのだが、問題の奪取方法がわかっていないのでどう対応すればいいかわからない。そのため半分手詰まりになりかけていた。

『一夏、タイミング見計らって零落白夜でアイツをぶった切れるか？』

『……タイミングさえ何とか出来れば出来ると思うが、正直一人だと厳しい。援護頼む』

『わかった。動く直前に教えてくれ』

オータムからの射撃を円状制御飛行で回避しながら秘匿通信で一夏サークル・ロンドに零落白夜を使えるか確認すると頼もしい返事をしてきたので、タイミングなどを全て一夏に任せて援護に徹する。

「そうそう、ついでに教えてやんよ白いの。第二回モンド・グロツソでお前を拉致したのはうちの組織だ！！ 感動のご対面だなあ、ハハハハハ！！」

「！！！！」

このタイミングでそんな話をきりだすのか、この女！！

俺は一夏を止めるためにあわてて近づこうとするが、ハイパーセンサーには憤怒の表情を浮かべた一夏の顔が映っていて言葉では止まりそうにない。

「だったら、あの時の借りを返してやらあ!!」  
「ちっ!!」

怒りの表情のままオータムに突っ込もうとする一夏だが、このタイミングでの突撃は罠にはまりに行くような物なので無理矢理にでも止めるしかない。

俺は突撃しようとしている一夏の目の前に接近するとそのまま回し蹴りを腹に叩き込んで強制的にオータムとの距離を離させるが、一夏の代わりにオータムの目の前に突っ込む形になってしまった。

「ハッ、まずは一丁上がりだあ!!」

そう言ってオータムはエネルギーワイヤー製の塊を投げつけてくる。

「くっ、エッジ!!」

「おせえんだよ、ガキが!!」

ビットにコマンドを送ってエネルギーワイヤーを切断しようとするが、その前に塊の形が網状に変化して全てのビットごと俺を包み込み、数秒でがんじがらめになってしまう。

「くっ、アル!!」

ロッカー二つ分は吹き飛ばされた一夏が俺を助けようと近づこうとするが、ビットの対処をする必要がなくなった装甲脚先端から連続射撃の弾幕が張られ、しばらくの間接近を許すつもりは無いようだった。

「ハハハ!! 楽勝だぜ、まったくよお!! それじゃあお別れは

済んだか？ 金髪のクソガキ！！」

オータムがそう言うってくるだけで何をしようとしているか察しがついてしまう。

「ちつ、機体を奪うつもりか。……後学のために何をするか教えてほしいものだな？」

ビットごとエネルギーワイヤーでがんにがらめにされているので、下手にコマンドを送ると機体だけを傷つける事になりかねないので抵抗しようがなく、オータムに何をすることもりか問いかけるのが精一杯だった。

「ハッ、そんなに気になんなら教えてやんよ」

そう言うってオータムは拡張領域バースロットに格納していたらしい40センチほどの四本脚の装置を展開すると同時に、駆動音を響かせて4本の脚が開いて機体の胸部に接触し、俺の身体を固定した。

「コイツは剥離剤リムーバーつつつてな、ISを強制解除できる秘密兵器だ。今からたっぷり味あわせてやるよ！！」

（剥離剤リムーバー？ どっかで聞いた事があるような……）

オータムが自慢気に言った剥離剤リムーバーの名前に聞き覚えがあり、どこで聞いたか思い出そうとした瞬間に電流に似たエネルギーが流され、激痛が全身に襲い掛かってきた。

だが、襲い掛かる激痛の最中さなかだろうと思いが中断する事はなく、電流が治まると同時に俺は剥離剤リムーバーの存在をどこで聞いたかを思い出した。

「そうするよ。………そういえばアル、これ知ってるか？ 剥離剤<sup>リムーバー</sup>って言うて、ISを操縦者から強制的に排除する装置があるんだとよ。ただ、2度目以降はコアに剥離剤<sup>リムーバー</sup>に対する耐性が出来る関係上一つの機体に一度しか使えない上に、専用機のパーソナライズを解除するわけじゃないから一度使われれば遠隔コールが出来るようになるっていう弱点がある物なんだが、そういう物があるって事はIS学園で習ったのか？」

そう、夏休みにイギリスへ帰省した際、同好の士でもある友人・エドから剥離剤<sup>リムーバー</sup>の詳細と弱点を全て聞いていた。あの時は何気に危ない橋を渡っていた友人を注意する意味合いが強く、兵器そのものについては身を入れて聞いていなかったが、何とか思い出すことが出来た。

（助かったぜ、エド。お前からコレの事を聞いたおかげで、何とかなりそうだ！！）

両手を上げて降参のポーズをしている一夏とそんな一夏に近づこうとしているオータムを見ながら、心の中でエドに感謝の言葉を述べて立ち上がる。



「はっ、そつちの金髪も突然立ち上がってどうした？ オトモダチのISを奪われるのをそんなに見たいのかねえ？」

左手に新しい剥離剤<sup>リムバー</sup>を、右手にスカイ・ブレードそのものである空色の球形コアを手にして哄笑を浮かべたオータムがそう言ってくる。

「白式を渡す必要はないぞ、一夏。今スカイ・ブレードを捕り返すからちよつと待ってる」

「どうするつもりだよ、アル！！ 白式を渡せばそれで済むだろ！！」

「はっ、大きく出たなクソガキが！！ 生身でISの反応速度に勝てるわきゃねーだろが！！」

生身で突撃して機体を取り返そうとと思っている一夏とオータムを尻目に、左手を突き出してオータムの手にあるスカイ・ブレードのコアに意思を集中しながら一言こつ言つ。

「戻って来い、スカイ・ブレード！！」

その一言にスカイ・ブレードのコアが反応し、オータムの手から逃れるようにその姿が消失し、次の瞬間には俺の左手にコアが召喚されていた。

「緊急展開と同時に出力80%でライジング・ブレード起動！！」

その言葉と共にスカイ・ブレードは戦闘形態へ移行<sup>シフト</sup>し、左手にスカイ・ブレードmk?を構築すると同時に刀身を展開してほぼ全てのエネルギーを使用した真紅のビームサーベルが発生する。

「なあっ！？ て、てめえ、いったいどうやって」

「教えてやらねえよ！！ くらえ！！」

突然の出来事にオータムは未使用の剥離剤リムーバーを手から落として動揺している。その隙に瞬間加速イグニッションブーストで距離を詰める。当然オータムは防御のために装甲脚を全て前面に集めて斬撃を防ごうとするが、高密度BTビームを利用したビームサーベルでその防御ごと切り裂く。

「がああっ！！」

どういいうわけか溶断された装甲脚を挟んで見えるオータムの姿がやけにのろく、機能停止直前の機体を瞬間加速イグニッションブーストの勢いを乗せた蹴りを叩き込む。

「ぐえっ！？」

オータムは勢いよく壁に叩きつけられ、その衝撃で壁にヒビが入る。

「一夏、拘束するぞ！！」

「お、おう！！」

「く、くそ……ここまでか……！！」

ガゴッ！！ バシユッ！！

そうやってオータムはヒビの入った壁を攻撃して即席の逃走経路を作ると、圧縮空気の音を響かせてその場に期待を放置してオータム本人が逃走を開始する。

「何！？」

「逃がすかよ!!」

生身で逃げたオータムを追おうとする一夏だが、部屋の奥にいた関係上突き崩された壁面へたどり着くのが遅れ、一夏が壁面へ到着した直後にオータムが使っていたIS・アラクネが光を放ち始める。

「っ!? 待て、一夏!! シールドモード!!」

それを慌ててスカイ・エッジmk?のシールドモードで包み込むと、直後に防御用エネルギー・フィールドの中で使用者のいないISが大爆発を起こす。

「なっ……助かった、アル」

「構わん。それより」

「一夏君、アルバート君、無事!？」

生身で逃げたオータムを追撃しようとした瞬間に見覚えのないISを纏った楯無会長が更衣室の中に入ってくる。

「ええ、俺も一夏も何とか無事です。一夏、俺はオータムを追うから、楯無会長に事情の説明を頼む」

「確かに最高速はそっちの方が速いからな。任せた」

「ラウラちゃんとセシリアちゃんに追撃を頼んであるからアルバート君が動く必要はないわ。二人とも襲われたばかりなんだし、他の組織が便乗して襲ってくるかもしれないからここにいてちょうだい」

珍しく真剣な表情で楯無会長がそう言ってくる。確かに消耗した状態で追撃して増援に返り討ちにされたら元も子もない。ここは素直に従うしかないだろう。

「……わかりました。追撃はセシリア達に任せることにします」  
そう言いながらISを待機形態へ移行させ、散らばった瓦礫の一つの上に腰掛けて一息つく。

「そうしてちょうだい。ただでさえ敵が仕掛けたシステムロックの解除にかなり手間を取らされたんだから、こうして二人そろってるのが確認できただけでよしとさせて」

俺達を心配している楯無会長の姿はIS学園の生徒会長らしくはあったが、普段からそういつた姿勢を見せてほしいと思うのは悪い事なのだろうか？

ダイレクトフォームチェンジ

直接変換を解除して元の王子様衣装に戻った一夏があつという間に楯無会長に王冠を奪われ、篝さんをはじめとした女子生徒達が躍起になって王冠を求めていた理由 本当に王冠を奪った女子生徒と奪われた王子様の同居権が景品だった を知って驚く姿を見ながらそう思った。

同時にセシリアとの同居生活に関して理性が持つか不安を感じるが、どうにでもなれと思いつながらその場に寝転がり少しでも寝て体力を回復することにした。

#### 46 演劇出演と襲撃者退治（後書き）

そんなわけで今回はここまでです。

V S オータム戦はこんな結果になりました。原作と違って男性 I S 操縦者が2名いるので剥離剤も2つ用意していて、片方は未使用のまま落としてしまいました。

今回は今回の戦闘の後始末が主になると思います。

おそらく来週の更新も同じ曜日になると思いますが、これからもなにとぞよろしく願います。

#### 47 学園祭結果発表と今後の対策（前書き）

今回で原作5間の話は終了。次回からはキャンボール・ファスト編に入るつもりです。そして、累計PV数が45万を超えています。皆様、ありがとうございます。

ラウラとセシリアの追撃は原作とほぼ変わらないので、描写はカットさせていただきました。エムの本格登場はもう少しお待ちください。

## 47 学園祭結果発表と今後の対策

俺と一夏の専用機を狙って現れた襲撃者・『亡国機業』のオータムを退けてからしばらくして学園祭は終了時刻となり、一般の招待客の皆様は満足しながら本土との定期リニアに乗って帰っていき、(学園内の教師の方々や、俺と一夏・楯無会長といったごく一部のを除いた)生徒達にとっては今年度初めてといえる問題らしい問題が発生することなく終わった学校行事となった。

織斑先生をはじめとした教師側も対外的には『学園祭は問題なく終了した』という事にしたいようで、俺も一夏もクラス対抗戦リーグマッチの時や臨海学校の時ほど事情聴取に時間を取られる事なく比較的短時間で終わったので、夕食開始の時間にいつもの専用機持ちメンバーで食事をする事ができた。

「セシリア。今日の事で話しておきたい事があるから、悪いが後で俺達の部屋に来てくれないか？」

セシリアとは今後ある程度の期間を演劇の景品である同居権を使っ  
て一緒に部屋で暮らすことになるだろうから、共同生活を送る上で  
の細かいルールなどを決めておく必要があるし、あのオータムの追  
跡を任せてしまったのでそのお礼も言いたかった。

「今日の事で、ですか？ わかりましたわ。わたくしとしてもアル  
に伝えておく事がありますから、後で部屋に伺わせていただきます  
ね」

「ああ、頼むよ。……あと、個人的に一つ訊いてみたい事があるか  
ら、悪いけどラウラも一緒に来てもらっていいか？」

「わ、私もか？……わかった。後でそちらの部屋に行かせてもらお

う」

セシリアとラウラにオータム追撃の礼を言うために別の話題をふって部屋に来てもらえるか確認を取ると、二人とも事情を察してあっさりと俺の提案を受け入れてくれたが、返事をしてきた時のセシリアの眼差しは何かを決意したもののように思えた。

それから雑談をしながら食事をしていると、唐突に鈴さんがこう言ってきた。

「そういえばアルバート。あんたセシリアに王冠渡す時に何か言ってたけど、何言ってたのよ？」

「え？ これから恋人同士の男女が同じ部屋に同居するんだから何かしらの迷惑かけるのは目に見えてるだろ？ だから、山田先生と織斑先生に恨むなら企画立案者である楯無会長を恨んでくれって言っただけだよ」

「えっと……その言い方だと、アルはセシリアに王冠を渡す時には景品が何か気付いてたって事？」

鈴さんとの話題に食いついてきたシャルロットが若干表情を引きつらせながら景品の詳細について質問をしてくるので、正直に答える。

「ああ。確信はなかったが、俺達のクラスに俺と一夏が演劇出演する通達をしてきた時の楯無会長の言葉からある程度はアタリはつけてた。それがどうしたんだ？」

「それならそれで疑問はある。景品に気づいていたのなら何故あの時逃げなかったのだ？ 又聞きだが、臨海学校の時にはセシリアにサンオイルを塗るだけでアルはかなり緊張していたというではないか。劇が終わるまで逃げできれば今の部屋割りはそのまま維持されるのに、何故セシリアに王冠を渡した？」



篤さんも俺の考えを聞いて続けざまに質問をしてくる。

「その事？ あの場ではああするのが一番だと思ったんだよ。確かに篤さんの言うとおり劇が終わるまで逃げることが出来ればベストだったんだろうけど、状況的にはまず不可能だ。なにせ王子様役の俺と一夏は丸腰なのに、シンデレラ役の皆は武装してたからその時点で王冠を失う可能性はかなり高くなる。

で、王冠を奪われれば奪った女子生徒としばらく同居することになる可能性が高い。それは個人的に嫌だったし、何よりセシリアに申し訳ない。それならセシリアに王冠を渡して実際に生活する時に色々細かい事を決めればいいと思ったんだよ」

「ふむ、道理ではあるな」

「っていつか、景品が何かわかったならその場で教えてくれよ」

俺の説明を聞いてラウラが納得し、一夏が不満を口にしてくる。

「一夏。そう言ってくる気持ちはわからんでもないが、景品だけ教えたところで篤さん達をはじめとしたシンデレラ役の人達がどうして王冠を欲しがるかまでわかるのか？」

「え？ それは皆物珍しさと他の女子に自慢したいからじゃないのか？」

一夏の不満に対して質問をすると、一夏は相変わらず的を大きく外した答えを返してくる。当然その答えは篤さん達を呆れさせる結果になったのはいうまでもない。

「……別の可能性を考える。自分の視点だけじゃなくて、相手からの視点や第三者から見た場合、あとは性別の違いを考慮すればおのずと答えは見えてくる」

直接答え　篤さん達が一夏に惚れている　を言ってしまうばいいのだろうが、それは一夏自身で気付くべき事なので多めのヒントを与えておく。

「そうなのか？……んー……わからん」

しばらく頭をひねっていた一夏だがお手上げ状態のようで、相変わらず恋愛事に関しては筋金入りの鈍感さだった。

「まあ、自分がどう思われてるのかよく考えてみるんだな」

「ああ。考えてはみる」

一夏のその言葉でこの話は終わり、程なくして全員が食事を終えたのでそれぞれの部屋に戻るようになった。

俺達が部屋に戻って15分ほどすると楯無会長も後始末が一通り終わったように部屋に戻ってきた。

「うーん、疲れた。一夏君、悪いんだけどマッサージしてくれない？」

「えっと……それは後にしてもらってもいいですか？　もう少ししたらラウラ達が来ることになってますから、今始めるのはちょっと……」

楯無会長からマッサージを求められる一夏だが、いつセシリア達が

来るかわからない状態でマツサージをするつもりはないようで後回しにしてもらおうように伝える。

「ラウラちゃん達が？……しょうがないわね。それじゃあマツサージは後でしてもらおうことにして、おもてなしの準備をしちゃいませうか」

「そうしましょう。どの道俺も会長に訊いておきたかったこともあるので、その時に答えてもらえると助かります」

「……わかったわ。アルバート君もそうだけど、一夏君もおねーさんに色々と訊きたい事や言いたい事があるでしょうし、全部答えてあげるわ」

真剣そうな眼差しでそう言ってくる楯無会長と共に、3人でセシリア達を迎える準備を開始する。

コンコン

「アル、入ってもよろしいですか？」

「一夏、入るぞ」

それから10分ほどで扉をノックする音がすると同時に、セシリアとラウラの声が部屋の中に聞こえてくる。

「ちようどよかったわ。ふたりとも、入ってちようだい」

「失礼いたしますわ」

「……失礼する」

楯無会長が入室許可を出すとセシリアはそのまま部屋に入ってきた

が、ラウラは慚然とした表情で部屋に入ってきた。相変わらず楯無会長の事が苦手なようだ。

「ふたりとも来てくれてありがとな。まずは礼を言わせてくれ。今日は俺と一夏の代わりにオータムを追撃してくれて助かった」

「ありがとな、ラウラ、セシリアさん」

俺も一夏もラウラとセシリアに一言礼を言い、頭を下げる。

「き、気にするな。亡国企業に関しては本国でも懸念事項の一つではあったから、その構成員の姿を記録できただけで十分だ。今さら礼を言われるまでもない」

「気になさらないください。アルを襲った彼らの存在は許せませんし、個人的にも因縁が出来ましたから」

ふたりとも礼を受け取りながらもそれぞれの思惑を満たすことが出来たと言ってきたが、セシリアの物言いが少し気になった。

「でも皆無事でよかったわ。亡国機業が現れた事以外はこれといった問題も起こらなかったし、今年度の学校行事としては初めての成功と言ってもいいんじゃないかしら？」

確かに1学期ではこういった行事が起こるたびに何かしらの横槍や襲撃が入ってイベントそのものが悉くご破算になっていたもので、そういう意味では楯無会長の言うとおりだった。

「二人に来てもらったのは追撃のお礼を言いたかった事もあるけど、お互いに訊きたい事があるんじゃないかと思って話し合いの場を設けたんだ。幸い楯無会長も質問に答えてくれるって言ってるから、故郷への報告もしやすくなると思うけど」

ラウラも今日の追撃に関しては本国へ報告する必要があるので、こういった機会はあった方がいいだろう。

「なるほど、それはありがたいな。私も亡国機業やこに関して持っている情報はあまり多くない。色々と聞かせてもらおうことにしよう」

「わたくしとしても更識先輩には訊いておきたい事がありますから、参加させていただきませう」

その懸念は合っていたらしく、ふたりとも参加を承諾してくれたのでそれぞれ席につき、早速話し合いを始めることにする。

「それじゃあ話し合いをはじめのけど、まずは何から聞きたいのかしら？」

「……じゃあ俺から。楯無会長っていったい何者なんですか？」

楯無会長が何から訊きたいか問うと、一番最初に質問をしたのは一夏だった。

「あら、優しいおねーさんよ？」

「楯無会長、冗談でごまかさないで下さい」

「そうねえ……私の実家、更識家は昔からこの手の裏工作に関して強いよ。暗部ってわかる？」

暗部 裏の実行部隊の通称だが、楯無会長がその暗部の一員というのは普通の動きがそういった所属の人間にしては派手すぎているので、あまり納得がいかない部分がある。

「そういった所属の割にはかなり派手に動いているように思えますが？」

「更識家は対暗部用暗部……お家柄と思ってちょうだい」

あははと笑いながら扇子を開く楯無会長。今回扇子には『常在戦場』と書かれていた。……裏で動く暗部の人間をおびき寄せるために表で派手に動く事を暗喩しているのだろうか？

そこからは各々が疑問に思ったことを答えていき、話し合いは1時間近く続いた。その時にわかったことだが、楯無会長が襲撃者の存在を伝えてこなかった理由は一夏に言った好意的解釈の予想が当たってでかなり驚かされ、同時に楯無会長がかなりの食わせ者だと理解させられた。

「他に何か聞きたいことはないかしら？」

一通りの質疑応答を終え、楯無会長が他に聞きたい事があるか確認するが特に意見はあがらない。

「それじゃあこれで」

「あの、質問ではなくお願いなのですが、しばらくアルと二人きりにさせていただけませんか？」

楯無会長が話し合いの終了を宣言しようとした時にセシリアから一つの提案がされる。

「私は構わないけど、一夏君はどう？」

「俺も構いませんよ。セシリアさん、休憩室にいるんで終わったら声をかけてください」

「これ以上話す事がないなら私は失礼させてもらう。奴らについて

色々と知ることが出来た。感謝する」

セシリアの提案を一夏と楯無会長は了承し、ラウラも一言礼を言っ  
て3人そろって部屋を出て行く。

「急にふたりきりになりたいだなんて、どうしたんだ？ やっぱり  
同居の件で何か不安があるのか？」

「そちらに関しては不安はないのでご安心ください。……………今日  
の追撃に関する事です」

恋人同士とはいえ異性なので何か不安があるのかと思って質問をす  
ると、即座に返答が帰ってきた後しばらく何かを言いよどんでから  
本題を話し始めてきた。

「追撃に関して？ 何か問題があったのか？」

「はい。アルはサイレント・ゼフィルスの事は覚えていますか？」

「当然覚えてるが、なんで奪われた機体の話が……………」

そこまで言っつて、今日の襲撃者・オータムが使用していた機体がカ  
スタマイズされたアメリカ製第2世代機であることを思い出し、あ  
る可能性が思い浮かぶ。

「まさか、亡国機業に奪われていたのか？」

「はい。細部は記憶と違っておりましたが、あれは間違いなくサイ  
レント・ゼフィルスでした」

そう言っつてセシリアは空間ディスプレイを展開して今日の追撃時の  
データを見せてくれた。

「確かにこれはゼフィルスだな。しかも、今日の襲撃者と同じく機

体に何かしらのカスタマイズがかかっている」

パーソナライズをかけると機体のディテールが変化する事は周知の事実だが、映像内のサイレント・ゼフィルスはパーソナライズをかけただけでは変化しない部分 具体的には頭部前面から目元までを覆うバイザータイプのハイパーセンサーがそれだ も代わっていて、何かしらのカスタマイズをされているのは明白だった。

「っ！？ コイツー！！」

だが、次の瞬間には別の意味で驚かされてしまった。何故ならセシリアが撃った偏向射撃フレキシブルをゼフィルスの操縦者がセシリアと同じように偏向射撃フレキシブルを使用して迎撃したのだ。

「ええ。公的にはわたくししか存在しない精神感応制御サイコ・シンパシーによるBT偏向射撃フレキシブルの使い手が亡国機業にも存在する事になります」

「そうか……かなり厄介だな」

サイレント・ゼフィルスを簡単に説明すると、『ブルー・ティアーズを実戦想定仕様に発展させた機体』と言うのが一番正確だろう。

何せブルー・ティアーズはイギリス製第3世代ISの中でもビットとBTビームの理論実証用実験機としての側面が強いので、搭載されている武装は近接格闘用ショートブレード・インターセプターを除けば全て光学兵器となっているため、白式をはじめとした光学兵器への対抗手段を持ち合わせている機体と戦う場合、光学兵器オンリーというのは弱点に成りうる。

その弱点を理論上可能と言われていたBT偏向射撃フレキシブルでの変則攻撃で補っているのだが、サイレント・ゼフィルスの場合はスカイ・ブレ



ードに搭載されているマシンガン・スターダストmk?と同じように実弾とBTビームモードを切り替えることが可能な可変ライフル・スターブレイカーを搭載し、ビットもブルーティアーズのビットと同じ射撃タイプのビットでありながらそれぞれがエネルギーアンブレラというBTビームを膜状に展開するエネルギーシールド展開能力を有していて、そこに偏向射撃能力も加わっているとかなり厄介な存在と言えた。

「はい。もしもゼフィルスが襲撃してきた時はアルに前衛をお任せしてもよろしいですか？」

「当たり前だ。この映像を見る限りどちらか1人で戦おうとすると分が悪い。絶対に俺に声をかけてくれよ？ セシリアが墜とされるところなんて見たくないからな」

「わたくしとしてもその言葉をそのまま返しておきますわ。アルも1人でゼフィルスに挑もうとしないでくださいね」

無策の状態で強敵に挑むことの愚かしさは和解前のラウラと戦った時に身を持って味合わされたので、やる気は毛頭ない。

「わかってるよ。分断されたら何とかして合流するさ」

「ええ。お互い無茶はしない方向で行きましょう」

そうしてサイレント・ゼフィルスと戦う際の方針を決め終わると、不意打ち気味に訪れた同居という大問題？を前にしている事もあって話題は自然と限定されてくる。

「……なあ、セシリア。これから、一時的とはいえ同居するだろ？」

それに関係して、一つ聞いておいてほしい事がある」

「えっと……何でしょう？」

当然今からする話もその同居に関する事になってしまつのは仕方ないことだと思いたい。

「その……非常に情けない話になるのだが、同居中、俺は自分を抑えられる自信がない。もしかしたら一線を越えることを求めるかもしれないんだ……」

「え、えつと……それって……」

俺の言葉を聞き、どういった意味かを理解したセシリアは顔を赤くしながら続きの言葉を言いよどむ。

「うん、セシリアの想像通り。当然自制の努力は最大限するつもりだけど、もしかしたら求めるかもしれない。当然セシリアが嫌なら拒否してもらつても構わない。下品な言い方になるが、一人で済ませられることでもあるしな」

「……えつと……わたくしは、構いません……よ？　あまり我慢しすぎるのも身体に悪いですし……わたくしも、その……そういう事に興味がないわけではありませんから」

セシリアからの返答を聞き、俺は同居が始まる前から理性の箍が外れそうになるのを必死で抑え込む。

「そ、そうだよな。お互い年頃だから、仕方ないよな、うん」

「えつ、ええ。しかたのないことでしょう」

お互いに微笑しながらそう言ってしまったのも無理はないと思うし、それからしばらく自分達が口走った事の恥ずかしさで黙り込み、真っ赤になっていた事も仕方ないことだろう。

「わ……わたくし、そろそろお暇させていただきますわ……」

お互い気まずい沈黙に耐えられなくなった頃にセシリアが部屋に戻  
ることを告げてきたので、俺もそれを見送る事にする。

「あ、ああ。帰りに一夏と楯無会長を呼んできてくれ」

「ええ、わかっております。それでは、また明日お会いしましょう」  
顔を真っ赤にしたままセシリアは部屋を去っていき、俺も頭を冷や  
すために一度顔を洗う事にする。

それから程なくして楯無会長と一夏が戻ってきた。その後楯無会長  
は入浴のために大浴場へ向かい、俺と一夏はその間に交代でシャワ  
ーを済ませてその日は就寝した。

その直前に楯無会長からこれから大変と言われたが、それは十分自  
覚しているつもりなので特に気にすることなく眠りに落ちていった。

学園祭後の休日を挟んだ月曜日の1時限目は全校集会となっていて、  
学園祭での部活動男子生徒争奪戦の結果が発表される事になってい  
た。

「皆さん、先日の学園祭ではお疲れ様でした。それではこれより、  
投票結果の発表をはじめます」

今後の放課後を決める意味合いを兼ねているので、俺や一夏を含め  
た体育館にいる全校生徒がつばを飲む音が聞こえた気がした。

「一位は生徒会主催の観客参加演劇『シンデレラ』!!」  
「……………え?」

全校生徒がぼかんと口を開けて呆けると、数秒後に正気に戻った女子生徒の一言を皮切りにブーイングが入る。

だが、それを予め設定していた条件である『演劇参加希望者は生徒会に投票する事』を理由にブーイングを封殺し、生徒会所属となつた俺と一夏を適宜各部活動に派遣することを伝えたとそのブーイングは一転して賞賛の言葉に変わっていた。

同時に楯無会長が『これから大変』といていた本当の理由を理解させられ、逆らおうとしても無駄だという事を否応なく理解させられてしまった。

その日の放課後。楯無会長、布仏さん、虚先輩といった生徒会役員の面々から俺と一夏の生徒会就任を祝うちよつとしたパーティをやるうとしたところで織斑先生と山田先生が現れ、俺とセシリアは寮長室に呼び出された。

「ウィルソン、オルコット、何故呼び出されたかは言わなくてもわかるな?」

「はい。演劇の景品である同居に関してですよね?」

「やはり、一夏さんの場合とは勝手が違いますか」

「当たり前だ。お前達が言つまでもなく一夏の恋愛事に関する鈍感さは知っているからな。同居程度でその女子の思惑に気付く事はないと信賴しているが、お前達が同居するとなると話は別だ。相応の

対策はさせてもらおう」

まあ、校内唯一のカップルを素直に同居させるほど学園も甘くないか。

「まずオルコット。お前の部屋にあった大量の私物に関しては登校中に全て新しい部屋に運び入れておいた。ウィルソンの私物も同様だ。それと、今お前たちが持っているルームキーを新しい物と交換しておけ」

「「……へ？」」

織斑先生のその言葉は、学園側が全力で俺達の同居をバックアップする体制のように思えてくる。風紀を重んじる織斑先生らしくない采配に俺もセシリアも困惑するしかない。

「えっと、驚いているところすいませんが、新しい部屋割りの関係もありますのでルームキーの交換をお願いしますか？」

「「はっ、はあ……」」

山田先生に促されるまま俺とセシリアはそれぞれ元の部屋のルームキーを山田先生に渡し、新しい部屋のルームキーを受け取る。

「新しい部屋については実際に行つて確認してこい。この階の一番奥の部屋がお前達の新しい部屋だ。言うまでもなくわかっているとと思うが、節度を持って弁えておけよ」

「え、えっと……何故こうなったか訊いても大丈夫ですか？」

「どうしてここまでの待遇を？」

いきなりここまでされると俺達としても困惑してしまい、つい織斑先生に問いかけてしまった。

「今回の襲撃事件を考慮した結果だ。ウィルソンと織斑が専用機持ちとはいえ、お前達二人は学園内のほかの専用機持ちと比較すれば技量は低い。それならいつそ部屋割りを変更して他の専用機持ちと一緒に過ごさせた方がいいと判断した。それに所属国家が同じなら連携も取りやすいだろう。まあ、盛大に風紀を乱すようなら元の部屋割りに戻すがな。演劇の景品はおまけと考えておけ」

「これは学園がお二人の事を信用している証とでも思ってください。当然生徒さんにもプライベートがあるので部屋の中での行動に制限をつけるつもりはありませんが、おふたりとも専用気持ちであるのと同時に学生である事も忘れないでくださいね」

「り、了解です」

「了解いたしました」

どうやら学園としても今回の襲撃事件に関しては何か思うところがあったようで、先生達のバックアップつきで俺達の同居は認可される形になった。

「連絡事項は以上だ」

「はい。織斑先生、山田先生、失礼しました」

「失礼いたしました」

俺もセシリアも一言挨拶をしてから、寮長室を去る。

「そうそう、言い忘れていた。夜に大騒ぎして他の生徒の睡眠を邪魔するなよ。それと、あまりシーツを汚さないように」

ドガン！！

扉を閉める直前に織斑先生がしゃれにならないこと言ってきた。その意味が理解できないほど馬鹿ではないので、足の力が抜けて頭を打ちながら寮長室の扉を閉めてしまっても仕方ないだろう。

「おつ、織斑先生！！いきなり何を言い出すんですか！！」  
「なに、ちよつとした注意だよ」

扉越しに慌てた山田先生の声と笑っている織斑先生の声を尻目に、俺とセシリアは新しい部屋へ向かい、学園のバックアップを受けた状態での同居が始まる事になった。

#### 47 学園祭結果発表と今後の対策（後書き）

セシリアとラウラの追撃も本来だったら書くべきなのでしょうが、どう頑張っても原作の焼き直しにしかならないために重要な部分以外はカットさせていただきました。ダメな作者で申し訳ありません。一度幕間を挟み、次回からは波乱含みの同居&原作とそれなりに違うキャンボール・ファスト編になります。多分バトルシーンが多めになると思います。



## 47・5 幕間 報告 (前書き)

幕間更新です。今回は原作ほぼ焼きなおしに近くカットするべきか迷いましたが、アルバートがいることと楯無さんが対オータム戦で活躍していないため、出番増強の意味もあります。それでもよろしければお読みください。

## 47・5 幕間 報告

アルバートとセシリアが学園のバックアップを受けて同居を開始して数時間が経過し、夜の帳が辺りを包み込んだ頃、楯無は1人で学園町室に趣いていた。

「失礼します」

「ああ、更識くん。ちょうどよかった」

重厚なドアを開いて楯無を出迎えたのはISS学園内では珍しい穏やかな顔をした初老の男性だった。

顔に年齢相応の皺が刻まれたそう白髪の男性の名は轡木十蔵。普段はISS学園の用務員として働き、表向きはその妻が学園の理事長を勤めている。

もっとも、実務に関しては全て十蔵が取り仕切っていることもあり、この初老の男性が実質的にISS学園を運営しているといっても過言ではなかった。

「それでは報告をお願いしますね」

立派な机に組んだ両手を置きながら、楯無に言葉を促す。

「はい。まず織斑一夏君についてですが、彼のISS訓練については順調です」

楯無も学園責任者の前ということと普段の茶目っ気を微塵も出さず、真剣な表情で報告をはじめめる。

「正直、驚きました。一度教えた事を数回の反復で覚えるところや、理解の早さなどは今まで見てきたどんな女子より上ですね」

「そうでしょうね。あの織斑先生の弟ですから」

どこか深い意味のあるような言葉だったが、楯無はあえて訊かずに報告を続ける。

「次にアルバート・ウィルソン君に関してですが……こちらは驚くを通り越して呆れましたね」

一夏の報告を終えた楯無はアルバートの報告に入るが、どう伝えるべきか迷った結果自分が思ったままを口にする事にした。

「初めて会った時から接触機会の不自然さを指摘されましたし、私の存在と意図せず漏らしてしまった一言だけで襲撃者の存在とその技量、襲撃予想時期を正確に予見しましたからね。私見になりませんが、思考能力全般に関しては1年生の中ではトップと言っていると思います」

これは楯無の偽らざる本音だった。あれだけの思考能力を持っていて、この先もその能力に磨きをかける事が可能ならば前線だろうと後方にいようと重宝される人材になるのは間違いないだろう。

だが、彼の男性IS操縦者という特異性がそれを許すことはない。楯無は考えてもいた。

「なるほど、それはいいことです。ISの操縦技量に関してはどうですか？」

十蔵が楯無の報告を聞いて相槌を入れ、ISの操縦技量について問

いかけてくるのでこちらも報告する。

「そちらについても特に問題はありません。元々入学前から操縦の基礎を学んでいた事もありますが、物事の理解の早さもかなり高いですね。彼のビット操作適性から考えればかなりシビアに設定しておいたノルマを僅か1週間で達成していますから、操縦技量についてもかなりの成長が期待できると思います」

「それは重畳」

アルバートに対しては純粹にその成長を喜んでるように思えたが、報告すべき事柄はまだあるため楯無は言葉を続ける。

「次に亡国機業ですが、確認出来ただけでも2機のISを保有しています。内、一機はコアを抜き取っていたので再度行動するまではある程度時間がかかるものと思われます。そして、もう一機はイギリス製第3世代機である事がわかっていて、もしかしたら厄介な事態になる可能性があります」

「……具体的にはどのような事ですか？」

学園責任者としての立場だけでなく、楯無の理解者の1人としてその『厄介事』の内容を問う十蔵。

「この機体、開発責任者の名前がアリス・ウィルソン……つまりアルバート君の母親名義になっているんです。彼の性格上ありえないとは思いますが、再び学園関係者を襲ってきた時に機体を取り返そうとして無茶をする可能性もないわけではありません」

「なるほど、事情はわかりました。更識くんには苦勞をかけますが、念のために彼の動向には注意を払うようにしておいてください」

「これぐらいはなんとも。今日は間に合いませんでしたが彼らはまた襲撃してくるでしょうから、私の機体を実戦経験を積ませる事も

できるかと」

そう、先日の襲撃者・オータムに対して、楯無は何もしていない。これはオータムが仕掛けたシステムロックの解除に時間がかかった事もそうだが、一夏とアルバートが楯無の到着前にオータムを退けた事の方が大きかった。

これは生徒会長としての楯無の立場からすれば嬉しい誤算だったが、同時に機体の実戦経験を積む機会を奪われた事を意味していて両手放しで喜ぶわけにもいかないのが国家代表としての立場を併せ持つ楯無の辛いところだった。

「ああ、ロシアの。何とか完成しましたか。一時はものになる心配でしたが、君に預けて正解でした」

「仕様については開発室の人間からいくつか指摘を受けましたが、当面は現状のまま使おうと思います」

「はい。それについては任せます。あなたの思うようにしてください」

それから学園について二、三伝え、楯無は報告を終える。

「以上です」

「よくわかりました。相変わらず更識くんは人気者ですね」

「うふふ、生徒会長ですから」

そう言うのにこりと微笑む楯無と、人のいい笑みを浮かべる十蔵。つい先程まであった張り詰めた空気は霧散して消えさる。

「さて、お茶にしましょう。そうそう、いいお菓子があるんですよ。君の口に合えばいいんですけど」

十蔵のその言葉で始まった2人だけのお茶会は、ふたりの関係を全く知らない大人が見れば人のいい祖父と仲のいい孫ではないかと思えるほどの温かみが溢れるもので、とてもISS学園の経営者と生徒会長とは思えないものだった。

47・5 幕間 報告 (後書き)

そんなわけで楯無さんと重蔵さんのちよつとしたお話でした。  
次回からはキャノンボール・ファスト編になりますが、原作と違い  
簪ちゃんの公式戦デビュー編でもあります。上手く書けるかはわか  
りませんが、これからも拙作をよろしく願います。

47・75 幕間 束の思惑 (前書き)

本編更新前にもう一度幕間を更新します。

連続で幕間ということもあってナンバーもかなり細かくなっています  
がご容赦を。

リアル事情に絡んで来週からは更新日が週末になると思いますが、  
これからも可能な限り最低週一更新は続けるつもりです。



47・75 幕間 束の思惑

暗闇に包まれた室内に複数の空間投影型ディスプレイが表示される。煌々と輝くその明かりに照らされて用途不明の機械の数々が浮かび上がり、同時にその部屋の主の顔もぼんやりと浮かび上がる。闇の中に浮かび上がってきたその顔は篠ノ之束だった。

空間投影ディスプレイに表示されているのはIS学園内を定期的に監視するために用いている対IS用ステルス処理を施した偵察用小型端末から送信されてくる映像で、そこにはIS学園内に存在するアリーナの壁を破壊してから纏っていたISを除装して逃走する女性とISを纏った二人の少年の姿が映っていた。

「……………とうとう現れたんだ、『亡国機業』」

普段浮かべている良くも悪くも無邪気な笑顔はそこにはなく、一目見るだけで何かを悔やみ、心苦しく思っているのがわかってしまうほどにその表情を歪めていた。

「いつくんもあーくんも今回は何とか退ける事はできたみたいだけど、この程度で諦めるほど連中は甘くないからなあ……………」

まるで何度も経験した事があるような物言いで独り言を呟きながら、束は真剣な表情でこれからどうするかを考える。

「……………こうするしかないか……………ちーちゃん、怒るだろうなあ……………。最悪あの子を持ち出してくる可能性もあるし、ますます誤解される可能性も高くなっちゃうけど……………しょうがないね。まさかあの時のた

「とえ話が私を疑っていたとは思わなかったよ」

そう言つて束は自嘲的な笑みを浮かべる。長年友人として付き合い合っているだけに、今自分が考えている事を実行した場合千冬は間違いなくIS学園を騒がせた事件のいくつかを起こした犯人が束であることに気付くだろうし、自分の事を確実に『敵』と認識するようになるのは容易に想像できる。

それに、自分の性格を熟知している千冬がたとえ話として自分の考えを述べてきた理由もわからないではない。自分よりもよっぽど『大人』な千冬は束の行動で被害を受ける人々のことを考えているのだろう。

「……まあ、そうなつてもあーくんがいればなんとかなるかな？」

ちーちゃんはミスリードに惑わされるっぽいけど、篝ちゃんは私への負い目で気付かないだろうし、いつくんは失礼だけどそつち方面の働きは期待できない。望みがかけられるのはあーくんだけだね」

そう言いながら束は用途不明の機械類に空間投影キーボードを操作して様々なコマンドを送り、機械をフル稼働させてある物の製作を開始すると同時に追加でディスプレイを表示し、そちらである物の設計図を描きながら、束はアルバートに期待をかける。

洞察力や推理能力といった思考能力全般に磨きをかけた今のアルバートならば、情報さえ揃えば真実にいたることが出来ると思つているからだ。

「…もしかしたらあーくんもミスリードに惑わされる可能性があるけど、そうなつたら私とくーちゃんだけで奴らと戦争か……寂しいなあ……」

だが、アルバートがミスリードに誘導されてしまう可能性がある以

上過度の期待を寄せるわけにもいかず、束は身近な者達に恨まれようと『亡国機業』と戦う決意を決めると同時に、つい数ヶ月前まで亡国機業の危険性を知らなかった自分を罵倒したい気分になった。

ISを発表してからも世界各国の諜報機関をはじめに自分の身柄を確保しようとする輩はあとを絶たず、その中には『亡国機業』のエンジニアも混じっていたが、束はそれほど『亡国機業』を敵視してはいなかった。

だが、数ヶ月前に起こった事件が原因となり束の中で『亡国機業』の危険性が一気に増した。

『亡国機業』自身すら気付いていない『ソレ』の存在は束が作ったISにとって致命傷になり得る物で、『ソレ』を『亡国機業』が意図して使用すれば亡国機業に奪われたISを含めた全てのISが使用物にならなくなる可能性が高い。

そうなった場合ようやくISという超技術の産物を受け入れ、安定しはじめた世界経済へ与える影響も大きいため、束としてはなんとも『ソレ』の存在を抹消しなかった。

「ちーちゃんからやりすぎるなって言われたけど、そのとおりだね。奴ら自身自分で作り出した『アレ』に気づいてないってのがまだ救いだけど。……まあ、頼れるのがいっくんたちだけってのは私自身の落ち度だね。反省反省」

束は自分が声高に亡国企業が所有する『ソレ』の存在を注意したところで世界各国がすぐに動く事はないと思っっている。

何せISを造り上げ、発表した時ですら自分の発言を信じず、あまつさえ白騎士事件の結果を見てあっさりと掌を返し、その圧倒的戦闘能力に惹かれて兵器として利用する事を考えた為、ISは当初の宇宙探査目的から大きく外れて兵器として用いられるようになる有様だったのだから、『ソレ』の存在をばらしたところで簡単には信

じてもらえず発言の裏付けがどうのこうのと話し合いだけが長引き亡国企業側だけが『ソレ』の存在を切札にしてしまうのがオチだと予想している。

その点一夏達なら事情を説明すれば動いてくれる可能性があるのですが、束としては一夏達4人に頼らざるを得なかった。

「こんなことは束さんとしてもやりたくないんだけど……今後の事も考えるといつくん達には強くなってもらわないと」

一夏やアルバートはこの先も亡国機業に狙われる可能性があるし、それは純然たる第4世代ISである紅椿を持つ筈にも言えることだった。

今考えている事は束なりの一夏達を心配した行動ではあったが、元々束は他者の存在をあまり認識しない事もあって自分が間違いを犯していることに気づいていない。

その間違いは引き起こす騒動に巻き込まれる一般生徒の避難に対するものだったり、一夏・筈・アルバートの3名以外の専用機持ちに対するものであった。

「時期は……この分だと来月だね」

稼働を開始した機械群の作業状況を見ながら束は作業の終了時期を頭の中で計算していつ行動を起こすかを決めると、ディスプレイに表示されている機体の設計作業を続ける。

実際の組み立てにかかる時間も考慮しても、その時期ならばIS学園で学校行事が行われる予定はないので、安心して一夏達だけに狙

いを絞ることができるだろう。

そんな事を思いながら、束は一夏達の錬度上昇のための襲撃計画を進めていくのだった。

47・75 幕間 東の思惑 (後書き)

そんなわけで亡国機業出現の影響、東さんサイドのお話でした。あからさまな伏線貼りまくりですね。

原作だと無邪気な悪意によるラスボスポジションっぽい東さんですが、拙作での東さんはこんな感じですよ。

『ソレ』と千冬が引っかけたミスリードに関しては今のところ秘密で。

次の更新で本格的に6巻の内容に入りますので、お待ちください。

それと一つ連絡を。いつもは週頭の更新でしたが、次週以降リアルな事情で週末更新になると思います。楽しみにされている方々には申し訳ありませんが、お待ちいただけると幸いです。

#### 48 同居開始。

あるいは理性崩壊のカウントダウン

(前書き)

大変お待たせしました。今回から原作6巻の内容に入ります。ちよっとスランプ気味だったので、いつもに比べると文がおかしいかもしれませんがご了承ください。

専用機持ちの保護を名目にした俺とセシリアの同居生活が始まり、真つ先に行った事は予め新しい部屋に搬入されていたそれぞれの私物の荷解きだった。

それぞれ元の部屋から運び込まれた私服を用意されたクローゼットに収め、それ以外の私物を室内に配置するのが主な仕事になるのだが、二人分の荷解きが終わるのにはそれなりの時間がある事は容易に想像できた。

何故なら俺は私服を除けばPCとモンド・グロツソの映像ソフトくらいなので荷解き自体短時間で済ませる事が出来るが、セシリアの場合はそうはいかない。

何せ私服の量からしてそれなりの数があるし、インテリアや家具をいくつか持ち込んでいたのでその配置も手伝わなければ夜遅くまで時間がかかるのが明白だった。

「よし、こっちは終了。セシリア、そっちの荷解きも手伝っけど何をすればいい？」

なので、自分の荷解きを30分程度で終わらせてからセシリアの荷解きを手伝う事にする。

「ありがとうございます、アル。そうですね……それでは家具やインテリアの配置をお願いしてもよろしいですか？」

「了解。前の部屋での位置は俺もなんとなく覚えてるけど、どこに動かせばいいか教えてくれると助かる」



部屋が変わったことで別の位置にする可能性もあるので、インテリアをどこに動かせばいいか訊いておく事にする。

「ええ。お任せください」

どうやらセシリアはインテリアの配置を変えるつもりのもりで、それから30分ほどかけてインテリアの配置を決め、それが終わってからは（お互いに恥ずかしくない範囲で）私服の収納を手伝わせてもらった。

そのため夕食開始前には荷解きと部屋の整理が終わったので、悠々とセシリアと共に食堂へ向かうことが出来た。

「あ、あのさ。皆は部屋割り変わったんだよね？ 新しい部屋割りってどうなったか教えてくれない？」

当然食事中の雑談の内容は専用機持ち保護の緊急措置として取られた新しい部屋割りの話になり、シャルロットが部屋割りがどう変わったのか訊いてくる。

「そのこと？ あたしはあの生徒会長と一緒にあったけど、腹立たしい事に劇の景品の権利使って一夏の部屋に泊まるって行ってるからしばらくは1人よ。……確かラウラとシャルロットは元から同じ部屋よね？」

鈴さんが想い人である一夏と他の女子生徒が同室であることにイライラしながらそう言っただけで麻婆豆腐を一口食べてから、ラウラとシャルロットに元から部屋割りが同じだった事を確認する。

「ああ。今回私達のみ部屋割りの変更がなかったが、演劇の景品で

一時的にセシリアやあの女と同居している一夏やアルバートもそうだろう。部屋割りの変更があるとすればセシリアと箒、後は4組の専用機持ちくらいだろうからな。どうなったのだ？」

寮内の特別規則　男子生徒の部屋に女子を泊めてはならないがあるのでラウラは俺と一夏の部屋割りが変わることがない前提で話を進めてくる。

「ちょっと待ってくれラウラ。俺が部屋に帰ってきた時にはアルの私物は全部移動してたぞ。それって演劇の景品以外でアルも部屋割りが変わったってことじゃないのか？」

「そうなの？ それじゃあアルは箒さんか4組の専用機持ちの人と一緒に部屋になったってことでしょ？ セシリアとは恋人同士だし……その…問題が起きる可能性もあるし、ね？」

ラウラの発言を一夏が即座に否定し、シャルロットがごく一般的な意見を言ってくる。

「だが私は簪…4組の専用機持ちと一緒に部屋になったぞ。そうなら……まさか……！」

シャルロットの言葉の後すぐに箒さんが自分の新しいルームメイトの事を言い、必然的に残っている専用機持ちである俺とセシリアが同室であることに気付き驚愕の視線で俺とセシリアの顔を見てくる。

「なんだと!?!」

「ウソでしょ!?!」

「えっと……いいのかな?」

それはラウラ・鈴さん・シャルロットも同じで、箒さんの発言を聞

いて驚愕の視線を俺達に向けてくる。……4人が驚いているのは『年頃の男女を同室にしている』からなのか、『専用機持ちが意中の人物ではないにしる男性IS操縦者と同室になっている』からか気になるところだ。

「連携をとりやすいよう同じ所属国家の代表候補生をまとめただけのようにし、何より学園からの指示では仕方ありませんわ」  
「それに織斑先生からも注意されたからな」

もつとも、注意を受けた事と理性が持つかは全く別の問題ではあるが。

「……つまり、二人は本格的に同居してるって事で」

「……えええええつつつつつ！！！！！！？？？？？」

一夏が俺達に同居している事を確かめようとした瞬間、いつの間にか周囲で聞き耳を立てていた女子生徒達が一斉に驚きの叫び声を上げ、その大音量で物理的に食堂が揺れる。

「お前達は静かに食事をする事が出来んのか！！ 大方ウィルソンとオルコットの事だろうが、騒ぐのならあとにしる！！」

当然それだけの大声を出していれば1年生用食堂の外にも声が聞こえるため即座に織斑先生の注意を受ける事になるのは明白だったが、騒動の中心にいた俺達は全員大音量を間近で聞いて酷く耳鳴りがしていたので上手く聞き取る事ができず、それが治まるまで食事に集中するしかなかった。

俺を含めた7人全員の食事が終わった頃に耳鳴りも治まってきたので、そのまま食後の一服も兼ねて雑談をする。

「そういえば一夏。お前の誕生日って確か今月下旬だと思ったけど、詳しい日付っていつだったけ？」

IS学園に入学するまで一夏とは年単位で連絡を取っていなかったので誕生日もすっかり記憶の彼方に消えていて、かるうじて思い出せたのは9月下旬に祝い事をした程度なので改めて訊いておく。

「えっ!?! 一夏の誕生日って今月なの!?!」

「お、おう」

今まで一夏の誕生日を知らなかったシャルロットが大声を上げながら立ち上がる。普段温厚なだけにその姿は珍しいものだった。

「い、いつ!?!」

「9月の27日だよ。ちよっ、ちよっと落ち着けて」

「う、うん」

それは一夏も同じらしく、日付を教えながらシャルロットに落ち着くように言つと多少落ち着きを取り戻し、返事をしながら席に着く。……しかし、27日だったか。一夏も忙しい時期に誕生日を迎えるものだ。

「一夏。お前はどつしてそついうことを黙っているのだ」

「え? いや、別に大した事じゃないかなーって」

ラウラも想い人の誕生日を祝いたい気持ちがあるようでぶすつとし

た口調で一夏を非難するが、当の本人は自分の誕生日をあまり重要視していないようだった。

「……ふん、まあいい。知っていて黙っていた奴よりは余程マシだ」  
ラウラも一夏の鈍感さに振り回される事に慣れてきたらしく、すぐに自分の中で折り合いをつけたようだが、元から誕生日のことを知っていたであろう鈴さんと篝さんを結構本気で睨みつける。

「「うっ!!」」

鈴さんと篝さんは思うところがあるようでラウラが発する非難の視線から逃れるように明後日の方向に顔を動かして視線をそらす、すぐにこう言い返した。

「べ、別に隠していたわけではない!! 聞かれなかっただけだ」  
「そっ、そっよ!! 聞かれもしないのに喋るなんてKYになるじゃない!!」

反論する二人だがその言葉は言い訳じみっていてあまり説得力がなかったのだが、そのことに気づいていないのは当人達だけだろう。

「やはり当日は何か行つのですか？」  
「ああ。一応中学の時の友達が祝ってくれるから俺の家に集まる予定なんだが、みんなも来るか？」

一夏がそう言つてホームパーティーに参加するかどうかを聞いてくる。俺も出来る事なら参加したいが、当日はキャノンボール・ファストがある関係上迷つところだ。……まあ、篝さん達の答えは決まっているだろうが。

「当然行かせてもらおう」

「私も行くわよ!!」

「当たり前だ。嫁の誕生日を祝わんでどうする」

「も、もちろん僕も行く!! 何時から!？」

4人とも参加を告げ、シャルロットが開始時間を確認する。

「えーっと、当日はアレがあるから4時くらいに開始かな? レースの結果次第ではもうちょっとずれ込むと思うけど」

「どうやらパーティはキャノンボールが終わってから行うつもりらしい。」

「騒ぐこと自体嫌いじゃないし、その時間に開始なら俺も参加させてもらおう」

「その時間ならばわたくしも参加させていただきますわ」

これでキャノンボール前日にパーティという事なら参加を辞退させてもらうところだが、終了後なら多少疲れが残っていても問題はないだろう。

「全員参加って事だな。……そういえば明日からキャノンボール・ファストに向けた高機動調整を始めるらしいけど、あれって具体的には何をやるんだ? 誰か教えてくれ」

「ふむ。基本的には高機動パッケージのインストールだが、お前の白式には無いだろう」

「その場合はスラスタを増設して対応するか、エネルギー分配とスラスタ出力の調整で対応する形になるね」

一夏が明日からの高機動調整について聞いてくるので、ラウラとシヤルロットがやるべきことを伝える。

「なるほど。確か高機動パッケージってセシリアさんのブルー・テイアーズにはあつたよな？」

その話を聞き、一夏はいつものメンバーで唯一高機動パッケージを使用した経験のあるセシリアに質問をする。

「ええ。ブルー・テイアーズには強襲用高機動パッケージ『ストライク・ガンナー』が搭載されています」

もつとも、現物は臨海学校がらみの事情で現在セシリアの手元になっているのだが、そこまで言う必要はないだろう。

「臨海学校の時に使ってたパッケージの事だよな？ 装備の面だとセシリアさん有利ってところか。今度超音速機動について教えてもらえないか？」

「……申し訳ありません。それはまた今度。ラウラさんをお願いしてくださいな」

セシリアはその問いかけを聴いてからしばらく考える仕草をしてから真剣な表情で断る。今後起こりうる対ゼフィルス戦のことを考えれば妥当な判断だろう。

「そっか、わかった。じゃあラウラ、教えてくれ」

「いいだろう。最近はその女ばかりにかまけているお前を、私が教育してやるっ」

ここでラウラが言うあの女とは十中八九楯無会長の事だろう。どう

いうわけか会長とラウラはあまり相性がよくないので、真面目な話し合いの場面以外だとラウラが押されっぱなしになることが多い。

そこからは約2週間後に迫ったキャノンボール・ファストに向けたそれぞれの国の対策に関する話になっていった。

話を聞く限りで予想すると、今のところわかっているだけで一夏と篤さんは機体出力を調整する事で対応するつもりで、シャルロットはブースターの増設で対応、ラウラは本国にあるレーゲンの姉妹機用高機動パッケージを調整して使うかブースターの増設で対応するらしい。

鈴さんは当日までに高機動パッケージが間に合えばそれを使用し、間に合わなければブースターを増設するつもりとの事。

「そつえばアルバート。あんたの機体はどうするつもりなのよ？」  
当然機体に関する質問をされるのは俺も例外ではないので、今のところの予定を答えておく。

「俺？ 高機動パッケージは再ロールアウト待ちだからそれが間に合えばそつちを使うし、間に合わなければ出力調整で何とかするさ」  
「再ロールアウトって…あんた今までパッケージ使ったことないじゃない」

鈴さんがもつともな意見を言ってくるが、言葉としては再ロールアウトであっているのだ。

「でも臨海学校の時にもう高機動パッケージは完成してたんだよ。それが束さんから新しい武装に換装してシステム調整した事で使えなくなつたから、今本国でそれまでの高機動パッケージをベースに



して各種調整とシステム周りの再構築をやってるんだよ」

「なるほど、それで再ロールアウトという事が」

「そういうことなら納得だわ」

俺が使った事のないパッケージの再ロールアウトに関する説明をすると、鈴さんとラウラはあっさりと納得してくれた。

その後は今後行われる俺と一夏の各部活動への派遣業務について少し話をした後解散し、それぞれの部屋に戻っていった。

~~~~~

部屋に戻ると充電中だったケータイが着信メロディを奏でていたのでディスプレイを確認すると、本国の管理官からだったので急いで電話に出る。

「お待ちせしました、管理官」

『アルバート・ウィルソン代表候補生。研究所からスカイ・ブレード用高機動パッケージの再ロールアウトが完了したと連絡がありました。それに伴い、週末にそちらへ向かい各種実装作業とトライアルと行います。予定を空けておくように』

どうやらパッケージの完成と実装に関する連絡のようだった。超音速機動に慣れる事を考えれば非常にありがたかったが、ある意味でタイミングが悪いと判断せざるを得ない。

「了解しました、予定を空けておきます。……管理官、一つ報告があります」

『報告？ 聞きましょう』

亡国機業が俺と一夏を狙って現れた以上奴らが再度襲撃を仕掛けてくる可能性があるのです、この間の事を報告して何かしらの対策を立てておいてもらった方が無難だろう。

「4日前に『亡国機業』と名乗る組織の人間から襲撃を受けました。幸い私自身軽傷で済みましたが、機体も守ることができました。襲撃者のコードネームはオータム。目的は私の機体を使用されている第4世代技術との事ですが、男性IS操縦者の抹消も含まれているかもしれません。」

それとオルコット代表候補生から聞いた形になりますが、本国で奪われたBT2号機、サイレント・ゼフィルスが亡国機業の戦力として利用されているとの事です。いずれ奪還を試みるつもりではありますが、亡国機業から再襲撃の可能性がある以上パッケージ搬入の際には何かしらの対策をお願いします」

『っ！？ 了解しました。サイレント・ゼフィルスについてはこちらでも対応を考えますから、独断専行は控えるように。他に報告事項はありますか？』

「いえ。報告は以上です」

先日の報告をすると管理官も驚いていたが、奪取された最新鋭機を敵の戦力として利用されている以上仕方のないことだろう。

『わかりました。自覚しているとは思いますが、くれぐれも無理はしないようにしてください。それでは』

管理官のその言葉を最後に通話が終了する。

「管理官からのようでしたが、予定を空けておくと言っていました」

よね？ どういった連絡でしたの？」

「ああ、高機動パッケージ再ロールアウト完了の連絡。週末に実装作業やるから、予定空けとけって言われたんだよ」

セシリアが不思議そうな顔で何があつたか聞いてくるので、正直に答える。特に隠すべきことでもないし、同じ国の代表候補生なので情報を共有していた方がいいだろう。

「なるほど、そういうことですか。わたくしの方はストライク・ガンナーのオーバーホール終了の連絡がまだ来ていませんから、困っていますわね」

そう。実を言うとストライク・ガンナーは臨海学校での銀の福音シルバリオ・ゴスベルとの戦闘で大破してしまつた事と初めて偏向射撃フレキシブルを使用した装備という事情が複合した結果、本国の研究所で偏向射撃フレキシブルの詳しいデータを蒐集・解析する傍らでオーバーホールを受けている関係上、現在ブルー・ティアーズから量子変換解除アンインストールされている。

「どうする？ 母さんに連絡すればストライク・ガンナーのオーバーホールの状況も」

ピリリリリ！！ ピリリリリ！！

母さんと個人的に連絡を取るかセシリアに確認しようとする、無機質な着信音が室内に響く。

「あら？ 少しお待ちになつていてください」

どうやら着信音の正体はセシリアのケータイらしく、一言断りを入れてからセシリアは通話を開始する。

「はい。……はい、そのとおりです。亡国機業が独自のカスタマイズをかけた形跡がありました。あれは間違いなくBT2号機のサイレント・ゼフィルスでした」

ゼフィルスの事を報告しているようなので、電話の相手はまず間違いなく管理官だろう。セシリアは追撃時の詳細を管理官に報告していく。

「はい、わかっております。……そうなのですか？ わかりました。そちらも心得ておりますわ。それでは」

その言葉と共に通話が終わったようで、セシリアはケータイを閉じる。

「お待たせしてしまいましたね。それと、アリス博士に連絡をする必要はなくなりましたわ。先程管理官がストライク・ガンナーのオーバーホールが終わったと言っておりましたから、アルと同じ様に週末にこちらで再実装を行うつもりようです」

「ゼフィルスの事も話していたようだけど、そっちは追撃時の報告か？」

「ええ。あとはアルほどではありませんが、わたくしも機体の強奪には気をつけるようにと注意を受けましたわ」

「それは仕方ないだろうな。誰だって時間をかけて作った新型を奪われることは避けたいだろうし」

その点、管理官の懸念は当然と言っていいだろう。第4世代技術である展開装甲は夏に存在こそ明示されたものの、現物に関しては白

式、紅椿、スカイ・ブレードの3機にしか使用されていないので、一夏と筈さんという『所属の決まっていない専用機持ち』2名を自国に引き入れることは次世代技術である展開装甲を得る事と同義であり、様々な国が外交手腕を駆使して2人を引き入れようと躍起になっている。

当然本国でも展開装甲の技術開示を求められているだろうし、『普通の技術者が作り出せる今のところの最高品質』である第3世代機も本来ならば強奪の危険は十分にあるだろう。

「まあ、亡国機業についてはいずれ本国からも何かしらの報告があるでしょう。わたくし達は目先のキャノンボール・ファストに絡んだ超音速機動の習熟と更なる技量の向上に努めることにしましょう」「それが一番だな」

お互いに今後の事を思いながらそう結論付けた後、部屋着に着替えてから明日の授業に関する準備や雑談をしているとあっという間に時間は過ぎていく。

「あら、もうこんな時間。アル、わたくし大浴場に行ってきましたね」「ん？……おお、そうだな。俺もシャワー浴びる事にするよ」

突然セシリアが大浴場に向かうと言い出して入浴準備を始めたので時計を見てみると女子の入浴時間になっていて、俺も少し早いがシャワーを浴びるための準備をする。

「あ……」

だが、その途中でセシリアの呟きが聞こえた。

「ん？ どうした、セシリア」

「えっ、えっど……その……これを見てくださいますか？」

そう言つてセシリアが顔を真っ赤に染めながらおずおずと俺に見せてきたのは凄まじくセクシーなネグリジエだった。

「……えーつと……普段、それを着て寝てたのか？」

この日のために買ってきたと判断してもよかつたが、長年の家事経験のおかげで使用された形跡を発見してしまい、普段からの使っているものと判断するしかなかつた。

「は、はい。今までは篤さんと同室でしたから気にしていませんでしたが……その、アルと一緒にだど……」

「ああ、抑える自信がない。つていうか、そんなの見せられたら逆に促進される」

「ですよねえ……。どうしましょう？」

風呂あがりでその姿を見せられたら本気でマズイので正直に答えると、セシリアも予想していたらしく苦笑を返してくる。

「あー……普通のパジャマはもってないのか？」

「……その、こういつた事態は想定していなかったなので、持っておりません」

「時間も見事にアウトだし……。しょうがない。今日はこれ使つてくれ」

一縷の望みをかけて問いかけてみるが見事にはずれ、寮内の購買も既に閉店している時間帯なので新しくパジャマを買ってくるという選択肢を取れないこともあり、自分で寝巻き用に使っているジャージのスペアを投げ渡す。

「えっ！？　ですが、アルはどうするのですか？」

当然セシリアは俺が寝巻きをどうするのか聞いてくるので、簡潔に答える。

「俺か？　渡したのはスペアの方だから遠慮せず使ってくれ。そっちは昨日の夜洗濯から戻ってきたところだから汚れてないし」

「そ、そういうことなら使わせていただきます。……行ってきますね」

顔を赤くしたままセシリアは大浴場に向かっていき、俺も手早くシャワーを浴びる。

「も、戻りましたわ」

しばらくしてセシリアも入浴を追えて部屋に戻ってきたが、どこか疲れた表情をしていた。

「おう、お帰り。……何かあったのか？　随分やつれてるよう思うんだが」

俺が貸したジャージはサイズがあっていないこともあって手と足の袖口をまくっていたが、やけにジャージがよれているように思えた。

「その…アルからジャージを借りた事を言ったところ、皆さんごぞつて触るうとしてきたので…申し訳ありませんわ」

「なるほど、それじゃあ仕方ないか。……今日は色々あったし、とつとと寝ようぜ」

今日一日だけで色々な事があったので、早めの就寝を提案する。

「……………そうさせていただけますわ。お休みなさい、アル」

それはセシリアも同じだったらしく、就寝の挨拶をしてからすぐに自分のベットに潜りこもうとするので、俺もベッドに潜りこむことにする。

「あ、寝る前に一つ忘れていましたわ」

「ん？ どうしたセシリ　んぐっ！？」

ちゅっ

だが、その直前にセシリアの言葉を聞いて振り返ると、セシリアが不意打ち気味にキスをしてきた。

「お休みのキスを忘れていましたわ」

「……………なるほど、確かに忘れ物だ」

普段のセシリアらしくない茶目っ気に溢れた笑顔でそう言うてくるので、俺も御礼に一度キスをする。

「ええ。お互いよい夜を。お休みなさい」

「ああ。お休み、セシリア」

そう言うってお互い挨拶をしてから電気を消し、俺達は本当に眠りにつくのだった。

48 同居開始。

あるいは理性崩壊のカウントダウン

(後書き)

何とかできましたが、前書きでも言ったとおりどうにもスランプ気味です。もしかしたら次回の更新は遅れるかもしれません。1週間経っても投稿がなかったら『ああ、スランプか』と思って気長に待っていただけなら幸いです。

49 完成、打鉄式式（前書き）

大変お待たせいたしました。最新話、打鉄式式の完成に関するエピソードになります。何とか年を越す前に更新できました。

マジメにスランプだったので、今まで投稿が遅れてしまいました。申し訳ありません。

そして、いつの間にか累計PV数が50万を超えていました。読者の皆様には大変感謝しています。

これからも拙作をよろしく願います。

それでは、本編をどうぞ。

49 完成、打鉄式

セシリアとの同居を開始して5日が経過して既に土曜日。お互いに相手を無闇に刺激しないよう心がけているものの、風呂上がりのちよっとした仕草やお互いの寝起きの顔をふいに見てしまつて少しドギマギすることはあるが、特にこれといった問題が発生することもなく過ごせている。

今日もいつものように弁当を作るために6時頃に起床すると、ほぼ同じタイミングでセシリアも目を覚ます。

「おはようございます、アル」

「ああ、おはようセシリア」

お互いに朝の挨拶を交わしあつてから身支度を整え、キッチンの一部を利用してもらつて昼の弁当を二人で作る。

セシリアも料理にはかなり慣れてきたので、今月初めからレパートリーを増やすために洋風弁当に必要なレシピだけでなく和風の弁当に必要なメニュー作成に挑戦している。

この日もおにぎり・だし巻き卵・ほうれん草のおひたし・鳥肉の唐揚げといった純和風の装いになっていた。

最初の内は上手におにぎりを三角形に握れなかったセシリアも3週間近く和風の弁当を作り続けていたこともあつて、一つ一つ多少時間をかければしっかり握ることができるようになつたし、見た目もすっかり三角形になってきている。

「……こんなところですか。やはり、アルのようにスムーズにはいきませんね」

自分の分のおにぎりを握り終えたセシリアが俺の作ったおにぎりを見ながら少し悔しげにそう言うが、こればかりは慣れの問題なので数をこなしてもらおうしかない。

「それでも初めて作った時より一つ一つの所要時間は短くなっていくから、あとは慣れていくだけだよ」

それに、あっさり抜かれたら立つ瀬がないし、セシリアは料理の腕で俺を抜こうとしているようなので俺もうかうかしてられないだろう。

「やはりそう簡単にはキャリアの差は埋まりませんか。……それならば、精進あるのみです」

「その意気その意気。まあ、簡単には抜かせる気はないけどな」

「でも、いずれは抜かせていただきますわ」

そんなことを言いながら弁当を作り終えると、一度部屋に戻って作った弁当を置いてから食堂で朝食を取る。

昼食と夕食はいつものメンバーで集まって食べることが多いが、朝食に関しては起床時間などが個人で違っていることもあってそれぞれのルームメイトと一緒に食べることのほうが多い。

「む、アルとセシリアか。いつも早いんだな」

「おはようございます、篝さん。そういう篝さんはいつもより早いように思えますが、どうかありませんでしたの？」

「おはよう篝さん。そういえば朝で一緒になることって少なかった

な

だが、たまには朝食でもいつものメンバーの中から何人かが集まることもあり、今日は食堂に入って列に並ぶ前に篤さんと合った。

「確かにそうだが、今日は私一人ではない」

「ほ、篤さん。待って……」

篤さんの言葉の意味がよくわからず小首をかしげる俺たちだったが、後ろから簪さんが早足で篤さんを追いかけてくる姿を見て同居初日に篤さんが簪さんと一緒の部屋になったと言っていた事を思い出した。

「おはよう、簪さん」

「おはようございます、簪さん」

「う、うん。おはよう、二人とも」

お互いに挨拶を交わしあってから4人で列に並び、それぞれ注文と受け取りを済ませると空いている席に座って食事を始める。

「あ、あの……アルバート君とセシリアさんは、今日の放課後、自主訓練以外に何か予定ある？」

雑談をしながら食事を進めている最中、それまで黙々と焼き鮭をほぐして食べていた簪さんが話しかけてくるので、少し考えてからこう答える。

「各部活動への出張は来週からになってるし……俺は特に予定はないな」

「わたくしも自主訓練以外の予定入れておりませんが、どうしまし

たの？」

「えっと…機体の完成に立ち会ってほしいんだけど、いいかな？」

どうやら簪さんは俺たちが楯無会長の特訓に励み、亡国機業の襲撃の影響で同居を開始してからも打鉄式式の未開発武装の制作を続けていたようで、いつの間にか完成間近になっていたようだ。

「そういうことなら構わない…っていうか、制作補助をさせてもらった身としては言ってくれないと困る。自主練は開始時間を少しずらせばいいだけだしな」

土曜日の授業は午前中で終了し、午後は基本的には夕方まで自主訓練を行うことになっている。

もつとも、部活に参加している生徒は自主訓練を早めに切り上げて部活に向かう人もいるし、上級生の中でも整備科に所属している先輩達は整備技能の向上や個人的な研究に時間を割く人もいるので、土曜午後の時間の使い方は人それぞれだ。

俺やセシリアをはじめとした専用気持ちの場合は訓練機の貸出を受けた一般生徒相手や他の専用機持ちを相手に模擬戦をしたり、各機体に搭載されている特殊兵装の習熟・運用能力向上訓練を行ったりするので事前に示し合わせない限り訓練内容に違いが出てくる。当然訓練に使用するアーリーナが同じでない限りはほかの専用機持ちと会うこともない。

そういった経緯があるので土曜午後の自主訓練時間に関しては一夏達と別行動を取っていてもなんらおかしくないし、夕食の時間に話題となることも少ないので自主訓練の開始時間をずらしてもよかったです。

「そうですね。わたくしも色々と手伝わせていただいたので、機体の完成は教えていただけないと困ってしまいます」

「二人とも。簪は昨日夕食の受付終了ギリギリまで作業を続けていたのだからそう言っただけでやるな。それに、機体完成の立ち会い以外に頼みごともあるようだからな」

篤さんが俺達に忠告をしてくる。……確かに少しばかり意地が悪い言い方になってしまった。

「おっと、失礼。それで、その頼み事ってのは何なのか聞いてもいいか？」

「わたくし達に出来ることでしたらなんでもお手伝いさせていただきますわ」

「じ、実は…機体が完成したら模擬戦の相手をしてほしいんだけど、いいかな？」

打鉄式式の模擬戦か。……製作補助をさせてもらっていた関係上ある程度スペックは把握しているつもりだが、実際に戦ってどういった機体になっているかを確かめるのも悪くない。

「いいぜ。打鉄式式の強さを直接確かめさせてもらおう」

「そういうことでしたらわたくしも参加させていただきますわ。打鉄式式の力、確かめさせていただきます」

「……二人とも、ありがとう」

俺もセシリアもその申し出を快諾すると、簪さんは少し照れながらお礼を言ってきた。

「特にお礼を言われるってほどじゃない。いろいろなタイプの機体

と戦うのはこっちとしても助かる形になるから気にしないでいいさ」
「わたくしとアル、どちらと先に戦うかは簪さんにお任せいたしますわ。あとで教えてくださいね」

「うん、わかった。……簪さんも、よろしく」

「わかっているさ。戦うからには全力でやらせてもらおう」

どうやら簪さんはあらかじめ簪さんにも模擬戦の申し込みをしていたらしく、一言そう言って簪さんも返事をする。

そうして会話が一段落すると各々食事を再開し、朝食を食べ終わると部屋に戻って荷物を確認したあと俺はセシリアと一緒に登校する。土曜日は一般教養系の授業を含めた座学メインになっているので黙々とそれをこなし、HRが終わってから昼食をとったあと布仏さんと簪さんと合流して5人で打鉄式式の主な製作場所として使用している第二整備室へ向かう。

「おいで、打鉄式式」

整備用ハンガーの前でそう呟く簪さんの中指にはクリスタルのあしらわれた指輪がはめられていて、それが打鉄式式の待機形態だった。その指輪を基点に簪さんの身体全体が光に包まれ、打鉄式式を戦闘形態に移行^{シフト}させてから機体をハンガーにセットして、簪さんはコクピットから出てくる。

「それじゃあ、始める。……手伝って」

「ああ。もう一度確認しておくけど、残っているのは速射荷電粒子砲の搭載だけなんだよな？」

「そうだよ。ミサイルポッドの搭載は、もう終わってるから」

「わかりましたわ。ダミーパーツを外すところから始めていきましよう」

布仏さんから残っている作業の状況を聞き、俺達は最後のくみ上げ作業に入る。

打鉄式は本体が完成した段階だと武装は一切搭載できていなかったため、機体の重量バランス維持とP I C効果範囲の再調整の手間をある程度省くために肩部ウイング・スラスターの8連装ミサイルポッド『山嵐』とバックパックに装備する速射型荷電粒子砲『春雷』を搭載する部分は通常時の重量にあわせたダミーパーツを取り付けていた。

なので、武装そのものが完成した場合そのダミーパーツを外してから武装を搭載し、システム周りとP I Cの効果範囲を微調整する必要がある。

バックパックに取り付けられていたダミーパーツを外し、そこに造られたばかりの速射荷電粒子砲『春雷』をパーツ固定用のアームで保持する。

今まで機体製作だと力仕事は主に俺が担当し、布仏さんはパーツ同士の細かな接続作業をはじめとしたハードウェア関連を担当、篤さんは布仏さんや俺のサポートで整備ブース内を走り回ることが多く、簪さんは製作の陣頭指揮とソフトウェア関係を一手に引き受け、セシリアは簪さんのサポートで各種制御システムのバグチェックを担当している。

そのため今までは全員が慌しく整備ブース内を歩き来ることが多かったのだが、今日はそういった慌しさとは無縁で、他の整備ブースから聞こえてくる声を背に静かに作業を進めていく。

「コードの接続終わったよ。ういゝ、アーム動かして完全にくつつけちゃって」
「了解」

布仏さんからの報告を聞き、固定アームを操作して『春雷』二門をバックパックに完全に接続すると、布仏さんが最終装甲の再接続作業に入る。

「……接続確認。マツチング作業開始。……セシリアさん、サポートよろしく」

「ええ。お任せください」

接続された『春雷』を打鉄式本体が認識し、それを受けて簪さんがシステム面での接続作業を開始する。

カスタマイズキーボードを使用して凄まじく速い速度でソースコードを打っていく簪さんと、通常の空間投影キーボードを使用して一般からすれば十分に速い速度でバグチェックをするセシリア。

この手のソフトウェア調整は普段自分の専用機での調整作業中によく行っているので俺も手伝おうと思えば出来るが、整備ハンガールの固定用アームの操作はそれなりに力が要るので、製作補助を始めたばかりの時から力仕事は俺の担当となり、システム周りのサポートはセシリアに任せるようにしている。

「……出来た」

「……こちらも完了しました。バグは存在いたしませんわ」

簪さんはPIC効果範囲の調整を含めて10分ほどでシステム回り

の調整を終え、それに続くようにセシリアもバグチエックを終了させる。その作業が終わる頃には布仏さんも最終装甲の再接続作業を終了させていて、打鉄式式が完成した事を意味していた。

「つまり、これで完成ということか？」

「形状としては、だけど。あとは実際に飛んでみて、細かな調整をする必要がある」

第6さんが完成かどうかを問いかけると、簪さんは冷静にそう返事をしながらコクピットに乗り込むと、打鉄式式を待機形態へ移行^{シフト}させた。確かに今まで同じ重量のダミーパーツでバランスを取っていたとはいえ、実際の装備との違いが出る可能性がある以上は慎重に行動するべきだろう。

「それじゃあ、アリーナに行つて調子を見てみよう。私は機体がないから、第6アリーナのコントロールルーム行つてそつちでサポートしてる」

第6アリーナは超音速飛行訓練を行うために高度制限を施されていないアリーナなので飛行訓練にもってこいの場所になっていて、主にキャノンボール・ファストの訓練にも利用される形になっているのでこの時期はコース取りに多少苦労させられることになるが、ルートをしっかりと考えれば問題はない。

「それじゃあ、機体のある俺達は簪さんに随伴していざつて時のために備えておこう」

「そうですね。そうしましょう」

「そうだな。では、移動しよう」

第6さんのその言葉で布仏さんは第6アリーナのコントロールルーム

へ向かい、俺達4人は第6アリーナへ向かうことにした。

第6アリーナに到着すると案の定上級生の先輩達が学園の中央タワー周辺を超高速で飛び回りながら、キャノンボール・ファストの実戦を想定した訓練を行っていた。

『かんちゃくん。こっちはいつでも始められるよ』

それぞれの機体を戦闘形態に移行シフトさせた状態でその姿を見上げる俺達に、コントロールルームに到着した布仏さんフライベートチャンネルから秘匿通信で通信が入ってくる。

「それじゃあ……先輩達が戦ってる中を突っ切るのは自殺行為もいところだから、メインタワーを外れた飛行ルートで行くか」

「目見るだけで純粋な操縦技量に開きがあることを理解させられ、一番無難な行動を提案してみる。」

「そちらの方が無難だろうな。いくら空が広いとはいえ、流れ弾のことを考えればある程度離れていた方がいいだろう」

「それに、打鉄式は完成したばかりですし、飛行テストは障害物は少ない方がいいでしょう。……簪さんもそれで構いませんか？」

「……そうする。あの中を無傷で突っ切る自信は、さすがにない」

それは簪さん達も感じたようで、あっさりと提案を受け入れてくれた。

「布仏さん。そういうわけだから少しサポートがし辛くなると思うけど、大丈夫か？」

『りょうか〜い。なんとかやってみるよ〜』

相変わらず間延びした布仏さんの声を聞きながら、打鉄式式の飛行テストを開始する。

「それじゃあ俺は上空で待機してるから、そこで合流する形にしよう」

「私は途中でトラブルがあったときに備えて簪と併走していくことにする」

「それでしたら私は簪さんを追いかける形にいたします。こうしておけばより安全に飛行できるでしょう」

「わかった。……みんな、よろしく」

それぞれの役割を決め、まずは俺が一番最初に偏向重力カタパルトから飛び出して超高速戦闘を行っている先輩達からの流れ弾が来ないように中央タワーの頂上から少し離れた場所まで移動する。

そこでハイパーセンサーの感度を上げて簪さん立ちの動きをより把握しやすくすると同時に簪さんがカタパルトから飛び出してきた、そのあと少しして同じように箒さん、セシリアと続いてカタパルトから飛び出してくる。

複簪さんは数のディスプレイを表示させて各種パラメータをチエックしながら高度を上げていき、その最中に空間投影キーボードで各パラメータを最適値に調整していく。

当然併走している箒さんは簪さんの邪魔にならないようにしながら

も何かあったらすぐに近づけるだけの距離をとっているし、セシリアもいざという時の備えは怠っていない。

上空待機の俺も問題が発生したらすぐに駆けつけるつもりではあったが、その前に簪さんは俺のいる場所まで上昇してきた。

「機体の調子はどうだった？」

「PICをはじめとした各種システムに問題は見られないから、大丈夫」

「下から見ていた限りでもスラスタ類に異常は見られませんでした」

「飛行時の姿も特に問題はないように見えたぞ。布仏、そちらはどうだった？」

『こつちでの観測も、問題なしだよ』

使用者の簪さんをはじめとして全員の意見をまとめると、問題なく上昇することが出来たようだ。

「それじゃあ、あとは下降だな。通常戦闘と同じくらいの速度で降りていこう」

高度を上げる時は問題らしいものは見当たらなかったが、万が一の可能性もあるので通常戦闘時と同じくらいの速度で降りることを提案する。

「わかった」

「紅椿のハイパーセンサーならより詳細に観測できるだろうから、私は先に行かせてもらおうぞ」

紅椿は束さん謹製の第4世代機なので、ハイパーセンサーの感度や

精度も専用機の中で頭一つ以上飛びぬけている。こついつたチエックを外から計測するにはもってこいだろう。

「ええ、お願いいたしますね、箒さん」

「箒さん、よろしく」

箒さんとセシリアに見送られて箒さんが一足先に紅椿で地上まで急降下していき、着地するのを見届ける。

「それでは今度はわたくしが併走いたしますわ。箒さん、いつでもどうぞ」

「それじゃあ、行ってくる」

箒さんはセシリアに一言告げてから箒さんのいるあたりに向けて急降下していき、セシリアもそのスピードに追随しながら降下していく。

俺は3人が地上付近まで降下する姿を見て問題の有無を確認してから高度を下げていく。幸い上昇時と同じように下降時も外から発見できる問題は見られなかったので、ハード・ソフト共に問題はないと思いたい。

「どうだった？ 外から見ていた限りでは特に問題があるようには思えなかったけど」

「……エラーも出てないし、システムダウンとかの不具合もない。ハード・ソフト両方とも問題は出てない」

『こつちの観測でも上昇中・下降中ともに異常なし。打鉄式、か〜んせ〜い！〜！』

箒さんが降下中のシステム周りをはじめとした機体全体のチェック

の報告をすると、布仏さんも結果を報告してくると同時に打鉄式式の完成を告げた。

「布仏さんがそう言ったって事は、武装関係のチェックはもう済ませてあるんだよな？」

『そうだよ。荷電粒子砲は昨日の内に試射して、エラーやバグがないことは確認済み』

「それなら大丈夫ですわね。……これで目標に一步近づく事ができましたね、簪さん」

「そうだな。後はキャノンボール・ファストで結果を出すだけだ」

製作補助をしている俺達4人の中でもっとも時間を割いている布仏さんの報告を聞き、セシリアと篤さんが簪さんを激励する。

「うん。……でも、ここまでこれたのは本音も含めた4人が手伝ってくれた事と、倉持技研の研究員の人たちが用意してくれたデータのおかげ。多分、私1人じゃキャノンボール・ファストには間に合わなかったと思う。……今まで色々と手伝ってくれて、ありがとう」

「別に気にしないでいいさ。元はオヤジから頼まれた事をこなしただけだし、制作補助をやらせてもらって色々勉強できたから、俺の方こそお礼を言いたいくらいだよ」

「そうですね。年代でもこれだけの技術力を持った人と出会えたことは今後の励みになります。それにISの事をより深く知ることが出来ましたし、わたくし個人としても助かった部分もありますからそこまで気にする必要はありませんわ」

「私もアルやセシリアと同じだ。それに、この作業を手伝ってISに対する見方も少し変えることが出来そうだからな。こちらの方が感謝したいくらいだ」

『わたしはかんちゃん専属メイドだから、気にしないでいいよ』

簪さんのお礼の言葉に四者四用の言葉を返す。

「まあ、持ちつ持たれつつ考えておいてくれ。……さて、武装のチエックが終わってるなら移動して模擬戦といこう。ここだと通常のアリーナと違ってどこまでも上がれるから、流れ弾とか心配だし」

第1から第5までのアリーナは普通のドーム状なので流れ弾は各種遮蔽シールドで防御されるが、第6アリーナは高度制限がない関係で攻撃を外してあらぬ方向に流れ弾を飛ばしてしまい、変な被害を出してしまう可能性がある。なので他のアリーナへの移動を提案しておく。

「う、うん。……わかってる。それで、模擬戦は、誰からやる？」

それは簪さんも感じていたらしくすんなり提案を受けてくれたが、模擬戦を誰からやるかを決めていなかった。

「え、えつと……誰からにしましょう？」

「じゃあ、一番手行かせてもらっていいか？打鉄式式みたいなタイプと戦ったことなかったし」

セシリアが若干焦りながらプライベートチャンネル秘匿通信で誰から戦うか話しかけてくるので立候補する。ブルー・ティアーズやラファール・リヴァイヴC？も遠距離攻撃メインの機体ではあるが、打鉄式式とは別系統の機体なのでどういった動きをするか気になるのだ。

「そうか？ では二番手は私が行かせてもらおう」

「それでしたら、わたくしが最後に相手をさせてもらいますわ」

「俺から相手をさせてもらおうよ。場所は第3アリーナでいいか？」

簡潔にそう言っ
て模擬戦の順番を決めると、簪さんに俺から戦う事を伝える。

「わかった。それじゃあ、移動しよう」

『それじゃあ、私も第3アリーナに行ってるね』

アリーナのコントロールルームに居る布仏さんのその言葉を聞き、俺達5人は打鉄式初の模擬戦をするために第3アリーナへ移動する事にした。

49 完成、打鉄式式（後書き）

そんなわけで、キリがいいので今回はここまで。

次回は打鉄式式VSスカイ・ブレードの模擬戦をメインにしていきます。

登校を開始して約10ヶ月でPV数50万を超える事が出来、感無量です。

奇しくも今日は大晦日。来年もInfinite Skyをよろしくお願いします。

皆様、よいお年を。

50 スカイ・ブレードVS打鉄式式（前書き）

最新話、アルバートVS簪のエピソードになります。

勘も戻ってきたので何とか1週間で出来ました。

途中で紅椿の絢爛舞踏に関するウンチクがありますが、あくまでこの作品内での弱点なので原作でもそうだとは限りません。

50 スカイ・ブレードVS打鉄式

第6アリーナで打鉄式式の動作チェックが終わり、模擬戦をするために第3アリーナに移動して模擬戦が出来る程度のスペースを確保すると俺と簪さんはそれぞれの専用機を戦闘形態に移行させる。

「うそっ!?!?.....あれ、4組の更識さんじゃない?」

「えっ、更識さんって専用機持ちだけど機体がないって話聞いたけど?」

「でもアレってどう考えても専用機だよな? どうなってんの!?!」

ハイパーセンサーを通して遠目で俺達を見ている女子生徒達の会話が一つ一つ聞こえてくるが、その内容は全て専用機を纏って戦闘を始めようとしている簪さんについて話しているのが丸聞こえだった。

「さて簪さん。準備はいいか?」

そう言いながらスカイ・ブレードmk?を展開して、簪さんに問いかける。

「当然」

俺の問いに簡潔に答えてくる簪さんだったが、その眼差しはいつも以上に真剣ではあるもののどこか殺気立っているようにも見える。

.....まあ、ここまで堂々と陰口を言われているのだから仕方ないことだろう。

「それじゃあ、れでい〜、い〜」

ある程度離れた場所から布仏さんの間延びした声で開始の合図がかかる。

俺はブーストしながら前に出るが、簪さんの機体は遠距離型なので後ろに下がりながらバツクパツクにセットされている速射型荷電粒子砲『春雷』二門を起動させ、砲身を脇の下からくぐらせながら正面に向けて射撃体勢に入っていた。

（くっ、間に合え！！）

白式の多機能武装腕・雪羅の設計データを利用して造られている以上、《春雷》の出力の高さはある程度保障されているだろう。直撃したら大幅にシールドエネルギーを削られるのは目に見えているので、最小出力で瞬時加速を発動して回避を試みる。

「くっ!？」

俺の行動は簪さんからすれば予想外だったらしく、本来ならば直撃するはずだった荷電粒子砲は非固定浮遊部位を掠めて俺の背後で爆風を巻き上げ、その勢いそのまま掬い上げるようにスカイ・ブレードmk?を左から切り上げる。

「くっ!！」

簪さんとはつさにPICと補助用小型ジェットブースターを併用した急速後退を行って回避行動を取るが、斬撃は回避しきることが出来なかったようで左わき腹の装甲に僅かな傷が出来ていた。

「少し浅かったけど、初撃は入れさせてもらったぞ」

どれくらいか、感じ
た手ごたえからするとそこまで多くのシールドエネルギーは減らせ
ていないだろう。

「……確かにそうだけど、もらった分はすぐに返す」

簪さんがそう言うと同時に打鉄式式の肩部ウイング・スラスターに
ある6ヶ所のミサイルポッドが火を噴くためにパネルを開き、1ヶ
所につき8発、合計48発のマルチ・ロックオン・ミサイルが一斉
に発射された。

「ただし、3倍返して」

「ちよつと待て!! その攻撃はくらったら3倍で済まねえっての
!! エッジ、撃ち落せ!!」

ミサイルポッドのパネルが開かれた瞬間にスカイ・ブレードmk?
を格納してすぐにスターダストmk?を2丁展開してエネルギー消
費を抑えるために実弾モードに切り替え、それと同時にウイング・
バインダーにセットされている多目的ビットマルチプル8機と腰部に接続され
ているミサイルビット2機を起動させる。

多目的ビットマルチプルの内4機は俺から離れた位置で、もう4機はいつでも
エネルギーシールドモードへ切り替える事が出来るように至近距離
でBTビームを連射し、ミサイルビットからも近接信管にセットし
たミサイルを撃ちながら実弾モードでスターダストmk?を連射し
て複雑な3次元機動を行いながら急速接近してくるミサイルの数を
少しでも減らす。

もつとも、打鉄式式のマルチ・ロックオン・ミサイル『山嵐』は通
常直線的にしか動かないミサイルにイメージインターフェースを利

用したマルチ・ロックオン・システムを使用することで複雑な3次元機動を行うことが出来るようになっていたため撃ち落とす事ができたのは半分程度で、残りの半分は迎撃することが出来なかった。

「くっ、シールド!」

迎撃をある程度のところで中断して至近距離で待機させておいた4機のビットをエネルギーシールドモードに切り替えて少しでも爆炎を遮蔽することでダメージを減らす。

ドドドドッ!!

絶対防御である程度遮蔽された爆炎の熱と衝撃が襲い掛かってくる中で反撃をするために簪さんの位置情報を調べ、同時にどれ程のダメージを受けたのか確認する。

5. バリアー貫通、ダメージ265。シールドエネルギー残量33
5. 実体ダメージ、レベル中

ある程度迎撃と防御をしたはずだったが4割以上のシールドエネルギーを持っていかれており、意図せずとも打鉄式式の攻撃力の高さを思い知らされることになってしまった。

おまけにミサイルの爆炎で防御に使用したビット4機は破壊されてしまったし、残り4機のビットも爆炎でそれなりのダメージを受けている状態なので無理をさせられないので非常に痛い。

(それでも本人の位置はわかったし、ここまで高威力のミサイルなら誘爆で自分が巻き添えになる可能性がある以上近距離より内側では使えないはず。……近接戦で仕留める!!)

近接戦でも『春雷』があるので一定以上のダメージをくらう恐れがあるものの、『山嵐』が全弾直撃するよりはマシなのでスターダストmk?を格納してスカイ・ブレードmk?を再展開後、イグニッションブースト瞬時加速を使用して上空にいる簪さんに最大速度で突撃する。

「そつやって接近してくるのは想定済み。その速度で、避けられる?」

簪さんは先程と同じように『春雷』を構えていて、接近される前に撃ち落すつもりらしい。

「そつちこそ、当てられるなら当ててみな!!」

半ばその挑発にのりながらもう一度イグニッションブースト瞬時加速を使用してさらにスピードを上げ、残っている武装用エネルギーの30%を使用してライジングブレードを発動させると同時に残っている4機のビットへ簪さんの目の前でエネルギーシールドを展開するようにコマンドを送る。

「もらっ、っ!?!?」

当然コマンドを受けた4機マルチプルの多目的ビットは爆炎の煙の中から飛び出して指定された場所でエネルギーシールドを発生させるので、既に引き金を引きかけていた簪さんは展開されたエネルギーシールドに向けて荷電粒子砲を発射する形になってしまい俺に攻撃が当たるこ

とはなかった。

「もらったのはこっちだ!!」

エネルギーシールドでの妨害が成功した時にはもう斬撃が届く範囲内だったので自分のビットを巻き込まないよう注意しながら全力での左薙ぎを簪さんに叩き込むが、攻撃が当たった手ごたえとしてはいつもの半分程度だった。

(攻撃が当たる瞬間に飛び退かれたか。……なら、追撃!)

ここで再び距離を開けられて『山嵐』をくらく事になったら目も当てられないので、ブーストして簪さんとの距離を再び詰める。

「そう何度も同じ手はくわない。…行って!!」

だが簪さんは左の非固定浮遊部位アンロック・ユニットにある『山嵐』の内2ヶ所から先程と同じように高威力ミサイルを発射してこちらの動きを少しでも阻害するつもりのようなのだ。

数としては先ほどの3分の1なので足を止めれば迎撃は十分に可能だしダメージを気にせず突撃することも出来る。だが前者の行動を取ればミサイルの再生成時間を与える事になるし、後者はシールドエネルギーを消費する事になるのでどちらにしても簪さんが有利になる。

「それなら、こうするまでだ!!」

スカイ・ブレードmk?を両手持ちから左手持ちに持ち替え、空いた右手にスターダストmk?を展開して進路上にあるミサイルの内、

直撃コースの物だけに狙いを絞って撃ち落とす。

ストダガガガッ！！

マシンガンの発射される音と撃ち落とされたミサイルの爆発音が混ざり合って普段聞いたことがないような音が周囲に響き渡らせながらミサイル弾雨の只中を直進する。

直撃コースではないミサイルは放置してあるので一定の距離を進んだあと方向転換して俺めがけて飛んで来ているが、その前に打鉄式式のシールドエネルギーを0にするつもりだ。

(あとは直接叩くのみ！！)

必要最低限の迎撃行動を取り終えてミサイル爆発の黒煙を突きぬけると、先程までいたはずの場所からかなりの距離をとった場所です。度目の『山嵐』発射体勢を整えている簪さんの姿が見えた。

「なっ、いつの間に！！」

「秘密。これで、私の勝ち」

淡々とそう言って『山嵐』全弾を撃ってくる簪さんの姿を見ながら再度ミサイルの迎撃行動を取るが、1度目の時と違ってビットの数が減っていた事と迎撃途中でスターダストmk?にミサイルが当たって壊された事、さらには発射されたミサイルの数の多さが決め手となって迎撃が追いつかなくなり、

最後のダメ押しとばかりに至近距離から『春雷』を叩き込まれた事でこちらのシールドエネルギーが0となり、簪さんとの模擬戦は俺

の負けとなった。

全身のISアーマーから機能停止の証である白煙を上げながらアリーナ・ステージに着地する。

「くっそー、俺の負けかよ。いけると思ってたんだけど……簪さん、強いんだな」

「当然。忘れてるかもしれないけど、私も代表候補生。簡単には、負けてあげない……でも、アルバート君も強かった。シールドエネルギー、あと80しか残ってなかったから」

少しだけ無然とした表情で簪さんはそう言ってくるが、次の瞬間には対戦相手の俺を褒めてきた。……もつとも、打鉄式式のシールドエネルギー残量を聞くと余計悔しさがこみ上げてくる形になったが。

「あと80!? ライジングブレードの消費エネルギー多く突っ込んでりゃ俺の勝ちだったのかよ!!! くっそー、判断ミスった〜!」

スカイ・ブレードを待機形態に移行させながら頭を抱える。
シフト

「う、うん。そうだけど……どうしたの?」

「……一夏とセシリアを除く専用機持ちとの模擬戦、今まで初戦全敗なんだよ」

気を落としながら簪さんに説明をする。いつもの1年生専用機持ち

メンバーとは定期的に模擬戦を行っているが、実を言うと一夏とセシリアを除いて『他の専用機持ちに初戦で勝った事』は一度もない。しかも初戦で勝った事のある一夏とセシリアに関して、『単一仕様ワンオフ・タイプ能力の詳細を知らなかった事による自爆』と『機体スペックだけでなくどういった攻撃を行うかの戦闘パターンを事前に知っていた事』による物なので勝ち方としてはあまり褒められたものではない。

ISの実機に触れていた時間を考慮すれば当然と断言していいのかもしれないが、『初見の相手だから勝てませんでした』という考えは甘えでしかない。

そのため何とかして勝ちたかったのが本音だが、また負けてしまった上に残りのシールドエネルギー残量を考えれば十分に勝ちを拾えた可能性があるだけに余計悔しい。

「ア、アルバート君達はISに触れた時間が他の専用機持ちに比べて短いんだから、仕方ない部分もあるんじゃない……」

「確かにそうかもしれないけど、これからは初見の相手にも勝てるだけの力量を身に付けたいんだよ」

この間のオータムの襲撃のように『男性IS操縦者を狙った襲撃者』の存在が明らかになった以上、よりいつそこの操縦技量向上は急務とあっていい。打鉄式との模擬戦はそういつた意味でももってこいだっただが、負けてしまった以上はこの結果を受け止めるしかないだろう。

「そう、なんだ。……でも、初めての相手にここまで出来ただから、あと少し。頑張って」

「ああ、そうするさ。……それにしても、やけに騒がしいな？」

今まで気にしていなかったが、観戦をしていた女子生徒達がやけに騒いでいて何があったのか気になってしまふ。

「簪さん、今まで整備室に籠っている事が多かったですし、訓練する姿もあまり見せていなかったようですから、その技量の高さに皆さんに驚いているだけですわ」

そうしているとセシリアが俺たちに近づいてくると同時に、簡単に事情を説明してくれる。

「皆、簪の存在を知ってはいたが、今まで技量を披露する機会がなかったこともあって代表候補生であることに疑問を持っていたようだ。……まあ、この分なら問題はないだろうがな」

「なにせ戦ったのがういるの機体だからね。第4世代機の使用相手にあそこまで戦って、しかも勝つてれば知らない人達は驚くよ」

同時に簪さんと布仏さんが説明を補足してくれた。……意図していなかった事とはいえ、簪さんの評判を上げる手助けが出来たようだ。

「さて簪。機体の応急処置が終わり次第私の相手をしてもらおう。打鉄式式の力、味あわせてもらおうぞ」

「……うん。純第4世代機・紅椿の力、見せてもらおう」

簪さんの言葉をかんざしさんは真っ向から受け止め、機体の応急処置を開始する。

「アル、簪さんと戦ってみた感想はいかがでしたか？」

「さすがは代表候補生。あと一歩だったとはいえ負けは負け、初見じゃ歯がたたん。……最後に相対距離を思いっきり開けられなけれ

ばまだやり様はあったかもしれんが、簪さんはどうやってあそこまでの距離を開けたんだ？」

セシリアが簪さんと戦った感想を聞いてくるので素直に自分の気持ちを告げ、同時に疑問を口にする。

「それに関しては簡単です。簪さん、アルや一夏さんの十八番である瞬間加速イケンニッションプーストを補助用ジェットブースターと併用して発動させたようですよ。打鉄式式は高機動タイプの機体ですから、観戦をしていたわたくし達も一瞬その姿を見失ってしまったくらいです」

それに対してセシリアが答えを教えてくれてすぐに納得する事ができた。設計段階から高機動型として造られている打鉄式式イケンニッションプーストで瞬間加速を行えば、かなりのスピードで相対距離を離すことが出来るだろう。

「なるほど、それなら納得だ」

「ええ。それに学園内でアルは注目的ですから自主訓練や模擬戦の様子を個人的に記録している方もいるようですよ、そういった方々から映像をコピーすれば模擬戦前にある程度戦術を知られてしまうことにもなります。ある程度は不利になるのも仕方ない事かと」
「だよなあ……。学園中、ひいては世間の注目的なのが戦闘時に足を引く張るのも考えものだな」

ある程度自覚しているものの、学園内外を問わずに注目されている事の負の側面に絡むこの事柄は襲撃者の存在を考慮すると非常にま

ずい。

（マジメに隠しワザのひとつやふたつ考えた方が無難かもしれないな）

そうでもしないと今後現れる襲撃者に遅れをとって死にかねない。

「ある程度は仕方ないとはいえ、各種戦術の運用技術を高めていくほかないでしょう。わたくしもできる限りはお手伝いをさせていただきますわ」

「そうしてくれると助かるよ、セシリア」

「ういゝゝ、せつしゝゝ、かんちゃん達の模擬戦はじまるよゝ」

ある程度の方針が決まると同時に布仏さんから簪さんと篝さんの模擬戦が始まることを伝えられ、俺もセシリアも試合の観戦に集中する。

打鉄式と紅椿の模擬戦は結果だけ言ってしまうえば紅椿の勝ちだ。

だが、この勝負結果は紅椿の単一仕様能力ワンオフ・アビリティ『絢爛舞踏』に依る部分
が大きいのは紅椿の操縦者である篝さんが一番理解しているだろう。

何せ一度の戦闘で『絢爛舞踏』を5回以上発動させたのは簪さんが初めてなのだ。

篝さんが任意で『絢爛舞踏』を発動させるように出来るようになったから定期的に行われた専用機持ち内での模擬戦の結果、エネルギー増幅機能を持つ『絢爛舞踏』にも今のところ2つの弱点があることがわかった。

『絢爛舞踏』は発動時点で紅椿内に残っているエネルギー全てを増幅させることでシールドエネルギー・武装用のエネルギーを問わずに回復させることが出来る脅威の単一仕様能力だが、発動させてからエネルギーを増幅させるまでほんの少しだけタイムラグがある事

にラウラが気付いた。

そのためその隙をつく事が出来ればエネルギー消滅能力を持つ零落
白夜でなくとも紅椿を落とすことが出来ると証明されたが、この方
法で紅椿に撃墜判定を出す事ができるのは今のところラウラだけだ。

何せそのタイムラグは0.8秒。絢爛舞踏の発動を確認してから0
8秒以内にトドメの攻撃を叩き込めるのは視覚信号の伝達速度と動
体視力を爆発的に上昇させる越界の瞳を解禁したラウラ以外には到
底不可能な絶技なので、もう一つの弱点を突くことになる。

もう一つの弱点とは、『一撃で紅椿のシールドエネルギーを削りき
られる事』だ。

こちらも並大抵の事では達成できそうにないと思えるかもしれない
が、こちらの方法に関しては『絢爛舞踏』と真逆の性質を持つ単一
フ・アヒリテイ仕様能力『零落白夜』を持つ一夏を除くと、俺・セシリア・鈴さん
の3名が成功している。

俺の場合は8割以上のエネルギーをつぎ込んだライジングブレード
で、セシリアの場合は偏向射撃フレキシブルによる一点集中攻撃で、鈴さんの場
合は褒められた方法ではないが格闘戦の最中に圧縮率をかなり高め
た衝撃砲を至近距離で叩き込む自爆もどきの攻撃で一撃の下にシー
ルドエネルギーを削りきって『絢爛舞踏』発動のヒマを与えずに倒
す事ができた。

そのため対紅椿に限定するとシャルロットのラファール・リヴァイ
ヴC?が一番相性が悪く、何度か勝った試合も偶然『絢爛舞踏』発
動の隙をつくことができたことによるものだったりする。

そして簪さんも紅椿の『絢爛舞踏』の存在は知っていたようで、は

じめはエネルギーが尽きかけた紅椿が一瞬のうちに元の攻撃力を取り戻す様に驚かされたようだが、3回目以降はシールドエネルギーを含めたエネルギー類を僅かな時間で回復させることを念頭に置いた戦術を取るようになった。

篤さんが6度目の『絢爛舞踏』を発動させる前に『山嵐』によるミサイルの一点集中着弾でシールドエネルギーを削りきろうとしたが、ミサイルのタイミング同期に失敗してシールドエネルギーを回復された結果、それまでの長期戦の間に細かく受けていたダメージで打鉄式式のシールドエネルギーが0になり簪さんの敗北となった。

「うっ……『絢爛舞踏』は、ズルすぎる……」

アリーナ・ステージに戻ってきてきて簪さんの呟いた第一声は紅椿と戦った経験のある誰もが思うところで、俺もセシリアも苦笑を浮かべるしかない。

「その『ズルすぎる』能力が無ければ私が負けていたのは明白だ。

『試合に負けたが勝負に勝った』と思ってくれていい」

「あれだけできれば、じゅうぶんによいよ」

「そうそう。初見であれだけ粘ってたんだから、次は一撃でシールドエネルギーを削りきれよ」

「機体スペックの差を考えれば十分に素晴らしい結果と言えますわ。一度休憩を取ってから、わたくしと模擬戦をしましょう」

紅椿の操縦者である篤さんからお墨付きを貰い、模擬戦の一部始終を見ていた布仏さん、俺、セシリアも自分の考えを述べる。

「うん……そうする」

機体を一度待機形態に移行させ、簪さんはアリーナ内の休憩所へ向

かっっていく。

「あ、あの……アルバート君。ひとつ、訊いていい？」

「ん？ どうかした？」

簪さんがアリーナ・ステージからいなくなると、それまで模擬戦を観戦していた女子生徒の一人が俺に話しかけてくる。

「その、どうやって更識さんと知り合ったの？ アルバート君とはクラスも違うし、接点がないように思えるんだけど」

「ああ、そのこと？ 実は」

俺と簪さんがどうやって知り合ったのか不思議に思ったらしく、知り合った経緯を聞いてきたので夏休みから今までの事を簪さんのプライベートな部分は上手くぼかしながら説明していく。

「それで今に至るわけ。わかってくれた？」

「そうだったんだ。……教えてくれて、ありがとう」

そう言っつてその女子生徒はどこかに走っていき、それと同時に簪さんがアリーナ・ステージに戻ってくる。

「セシリアさん、お待ちせ。……始めよう」

「ええ、全力でいきますわ」

そう言っつて二人はそれぞれの専用機を戦闘形態へ移行させてから上空へ飛翔し、遠距離型の機体どうしの模擬戦が始まる。

その模擬戦は素晴らしいものだった。

片やマルチ・ロックオンシステムによる三次元機動を行うミサイル。片やイメー징インターフェースによるコントロールで上空を縦横無尽に駆け回るビットと、双方空中で複雑な機動をする誘導兵器を持つ者同士による模擬戦は観る者を飽きさせず、それでいて操縦者の真剣味を感じさせるISバトルの理想系と言っても過言ではない試合となった。

ビットから放たれるBTビームがセシリアの精神感応制御で複雑な軌道を描き白煙を上げるミサイルを撃ち落そうとすると、ミサイルはそのBTビームから逃れながらも操縦者であるセシリアを狙う軌道を白煙で描き、セシリア本人のBTビームライフルで撃ち抜かれ爆発。

セシリア本人の足が止まった刹那を狙った簪さんの速射荷電粒子砲が火を噴き、その攻撃を回避するセシリアとそれを追う簪さんの操縦者同士がドッグファイトに突入し、一進一退の攻防を繰り返していく。

その戦いは30分以上続き、ラスト5分は双方武装用のエネルギーが尽きたために近接戦闘用武装による空中格闘戦を繰り返す形になった。

普段は遠距離戦に徹しているセシリアもブルー・ティアーズとスタライフルライフルのライトmk?のエネルギーが尽きた時のために近接格闘戦の修練は怠っておらず、ショートブレード《インターセプター》と打銃式の超振動薙刀《夢現》を使用したその格闘戦は非常に見ごたえのある物だった。

模擬戦の結果だけならば最後の1撃が同時にヒットした事によるダブルKOという物だったが、模擬戦が終わった時には拍手喝采がア

リーナ内のそこかしこから上がりセシリアと簪さんがびっくりしていたのが非常に印象的な試合だった。

この日の打鉄式式の戦績は1勝1敗1引き分けとロールアウトしたばかりの機体としては上々で、簪さんも驚いていた。

ちなみにこれは余談だが、この時行われたセシリアと簪さんの模擬戦は直接戦闘を行っていたブルー・ティアーズと打鉄式式の他、第3アリーナ内にあった専用機であるスカイ・ブレードと紅椿、訓練機である打鉄とラファール・リヴァイヴ6種のログデータのなかからベストアングルからの物を抜き出して繋ぎ合わせた映像が一般に発売される事になり、ISバトルの面白さを伝える一大ヒット商品になる事はまだ誰も知らなかった。

50 スカイ・ブレードVS打鉄式式（後書き）

そんなわけで丸々一話バトルでした。

途中で出てきた紅椿の絢爛舞踏。効果そのものシールドエネルギーごと回復するチートスキルですが、何事にも付け入る隙はあると思うので拙作ではこんな弱点？を抱えています。

次回に関してはアルバート用高機動パッケージのお披露目か、簪とラウラやシャルロット、鈴ちゃんとのファーストエンカウントに関するエピソードのどちらかになると思います。

投稿が遅れないよう努力しますが、遅れてしまった場合は気長にお待ちください。

5 1 専用機持ちどろしの邂逅(前書き)

最新話、簪とラウラ、シャルロット、鈴の3名との初邂逅に関するあれこれです。

5 1 専用機持ちどろしの邂逅

セシリアと簪さんが観戦していた生徒達全員を歓声の渦に巻き込んだ模擬戦を行ったあと、俺達5人は第2整備室まで戻ってきた。

簪さんは代表候補生ではあるがメディアに顔を出した経験が殆どなかったらしく、セシリアとの模擬戦終了後に観戦していた一般生徒達からもてはやされまくった結果気疲れを起こしてしまい、夕食開始の時間ギリギリまでここで過ごす事にした。

「うう、……ひどい目にあった」

「かんちゃん、おつかれさま」

簪さんは整備室内のベンチに寝転び、布仏さんがいたわりの言葉をかける。

「やっぱりISバトルって面白いわ。学園内でここまでいい戦いが観られるとは思ってもみなかった」

「確かにあの戦いは見事な物だった。あれだけの戦闘を行える事は誇りに思っているのではないか？」

「あ、あんまり褒めないで……恥ずかしい」

俺と篝さんが自分の感じた事を素直に口に出すと、俺たちの方を向いていた簪さんは顔を背けるために寝返りをうちながらそう言ってきた。

その姿に微苦笑しながらため息を一つつくと、セシリアの方を向いて簪さんと同じように素晴らしい試合を見せてくれたことのお礼を言うておく。

「セシリアもお疲れ様。それと、いい試合を見せてくれてありがとうな」

「そう言っていただけなのなら幸いですわ。それにわたくしとしても得るものがありましたから、先ほどの戦いは非常に有意義な物となりました。簪さん、模擬戦の相手をしていただき、ありがとうございました」

「も、元々こちらから頼んだことだから、気にしないで」

セシリアも俺の言葉を素直に受け止めた上で先程の戦いで何かをつかめた事を教えてくれたし、それに関してお礼を言うと簪さんは俺達に背を向けたまま謙遜しながら膝を抱くようにして身体を丸めてしまった。

どうも簪さんは褒められる事に慣れていないようで、先程から小さくなりっぱなしだ。

「まあ、あれだけの戦闘をやったら疲れてるだろうからしばらく休んでいてもいいけど、今から機体の調整作業で少し煩くするけどいいかな？」

「別に……大丈夫。本音、悪いけど夕食の時間が近くなったら起こして」

機体の調整作業はどうしても大きな音が出るので一言ことわりを入れると簪さんはあっさりとして承してくれた。その後布仏さんに時間になったら起こすよう伝えると、さして間を置かずに眠り始めた。

「セシリア、模擬戦で疲れているところ悪いんだけど調整作業を手伝ってもらえないか？」

「わたくしもティアーズの調整をしようと思っていましたから構いませんわ。夕食までは1時間近くありますし、しっかりと調整して

おきましよう」

簪さんを起こさないように小声でセシリアに話しかけるとあっさり了承してくれたので、俺達は作業用ブースに向かうことにする。

「私は一夏達のところに行ってくる。アル、セシリア、夕食の時にまた会おうしよう」

篤さんも小声で俺達にそう言ってから整備室の出入り口に向かつていき、俺達は作業用ブースで明日のパッケージ受領に備えてそれぞれの機体修復と調整作業に入る。

幸いスカイ・ブレードもブルー・ティアーズも機体に深刻なダメージは受けておらず、本国から定期的にIS学園へ納入されている予備パーツを使って修復作業を行う事ができた。

俺達が修復作業を終えると着替えなどの時間も含めて夕食開始時間ギリギリになっており、簪さんを起こしてそれぞれ更衣室に向かって制服に着替えて寮へと戻る。

「そついえば簪さん。今日の夕食ってどうするんだ？ やっぱクラスの誰かと一緒にとるつもりなのか？」

「いつもどおり一人で食べるつもりだけど……どうしたの？」

ふと気になって簪さんに夕食の時に誰かと一緒に行動するのか確認すると、一人で食べることを告げながら小首をかしげる。

「かんちゃん、今日だけは誰かと一緒に夕ご飯にした方がいいと思

うよ？ あれだけ派手な模擬戦してたから、かなり目立ってると思うし」

「布仏さんの言うとおりですわ。簪さんは今までご自分の實力を示す機会を辞退しておりましたから實力を疑問視する方も多かったですかもしれません。ですが先の模擬戦で代表候補生としての實力は十分に示しましたから高い確率で目立ってしまうでしょうし、接点を持つとうとする方が続出するかもしれません」

「あつ……目立つのは、好きじゃないのに……」

布仏さんとセシリアの説明を聞いて簪さんは一言そう呟くと、若干顔を赤くしながら俯いてしまう。

「それならいつそのこと私達7人と一緒に夕食を取ったらどうだ？

簪も専用機が完成したのだからある程度は他の代表候補生と顔を合わせておいたほうがいいだろうし、私達と一緒になら干渉も少しは減ると思うのだが」

「簪さんの言うとおりかもしれないな。簪さんも鈴さんやラウラ達と会っておいた方が後々面倒も少ないだろうし、夕食の時って基本的に仲がいい人どうしで食べる事が多いから一人で食べるよりはいいと思うけど……どうする？」

簪さんが簪さんに俺達専用機持ちグループに加わることを提案してくるので、俺はその案に賛成を示す。

「わたくしも賛成ですわ。多少なりとも今日の模擬戦のことを聞かれるとは思いますが、おひとりでするより周囲の目を気にする必要はないと思いますよ？」

「……じゃあ、そうさせてもらおう」

セシリアも俺たちの意見に賛成すると、簪さんは少しの間黙考して

から俺たちの意見を聞き入れてくれた。

着替えを終えたら部屋に迎えに行く事を伝え、それなりのスピードで寮に戻って手早く着替えを済ませてからセシリアと共に篤さんと簪さんの部屋へ向かい、食堂前で一夏たちと合流する。

「遅かったな、アル。自主練遅くまで続けてたのか？」

「いや、そういうわけじゃない。いつもより多めに機体調整やってたから、それで遅れたんだよ」

「それならばいいが、その女子生徒は誰だ？ 初めて見る顔だが…どこかで見たような気もするな？」

一夏が遅れた理由を聞いてくるのでそれに答えると、ラウラが簪さんの姿を見て首をかしげながら問いかけてくる。

「更識、簪。よろしく」

「うん、よろしくね。名前で呼ばせてもらっていいかな？」

「構わない。私もそうさせてもらうから」

「ちよつと待って。今更識って言ったけど、生徒会長の親類なの？」

簪さんが自己紹介をするとすぐにシャルロットが簪さんに話しかけ、鈴さんが簪さんに楯無会長の親類かどうかを確認してきた。

「い、妹だけど……姉さんが、何かした？」

「いや…あの女の妹にしてはおとなしすぎると思ってな。それにアルバートとも仲がいいようだが、どうやって知り合ったのだ？」

簪さんが楯無会長の妹である事を話すと、ラウラが簪さんにくっつかの質問をするのでこう答える。

「それはすぐに教えるから、まずは注文して席につかないか？　ずつとここで立ちっぱなしってのも他の人たちに迷惑だろ」

「む…そうだな。まずは移動してしまうか」

俺の言葉を受けてラウラは注文の列に並び始めるので、俺達もそれに続いて列に並び夕食の注文と受け取りを済ませて空いている席につく。

「それでラウラ、俺と簪さんの仲がいい理由だったな」

「ああ。確か更識は4組の代表候補生と記憶しているが、どういった経緯で知り合ったのだ？」

近くで接していると忘れてしまいそうになるが、さすがはドイツ軍特殊部隊隊長。そういった調査は怠っていないようだ。

「ああ、それは今から話すよ。」

俺は注文したクリームパスタを食べながら簪さんと知り合う直接的な要因である倉持技研に勤めるオヤジの説明から始まり、夏休みのアレコレから今までの事をかいつまんで説明していく。

「　　そういうわけだから、この場にいるメンバーで初めて顔を合わせるのには鈴さん、ラウラ、シャルロットの3人だけなんだ」

「なるほどねえ。用事がないはずの整備室にマメに向かったのはそういうことか」

「そんな短期間で専用機の組み上げが出来るなんて、簪ってすごいだね」

「その技術力は素晴らしいな。どうだ、国家代表の選考に落ちたら私の部隊にこないか？」

説明を終えとりんさんたちは思い思いのことを口にする。その中でもラウラは将来的な勧誘まで始めるくらいだった。

「え、えっと……ありがとう。あと、今勧誘されても答えようがないから、保留で。……私からも質問させて。さっき姉さんの名前が出たけど、何かあったの？」

「そ、それは……」

「あ、あの女は何かあるたび他人であるの部屋に侵入してきては私をくすぐって玩具扱いだぞ！！ 一体どついう教育をされているのだ！？」

「ラウラなんてまだマシじゃない！！ あたしなんて一緒の部屋よ！？ ちよつと気を張ってるとすぐにくすぐってくるんだから堪^{たま}ったものじゃないわ！！」

簪さんが楯無会長について質問をするとシャルロットは何かを言いよどみ、主な被害者らしいラウラと鈴さんが怒りをにじませながら簪さんに苦言を漏らす。……楯無会長の場を引つ掻き回す悪癖に関しては俺も心当たりがあるが、いつの間にか鈴さんとラウラも被害を受けていたらしい。

「あ、あう……姉さんが迷惑をかけてるみたいで、ごめんなさい」

鈴さんとラウラの証言を聞いて簪さんは素直に謝った。まあ、身内がそんな事をしていれば代わりに謝りたくなるのもわからんでもない。

「い、いや……更識は悪くないから気にするな」

「そ、そうよ。いざとなれば我慢すればいいだけなんだから、気にしなくていいわ」

だが簪さんのショックを受けている表情を見てラウラと鈴さんも冷静になり、すぐに気にする必要がない事を告げた。

「そ、そういえば今日第3アリーナで専用機どうしがすごい模擬戦をやったって聞いたんだけど、簪は何か知ってる？」

微妙に重苦しい空気になったところをシャルロットが第3アリーナで行われていた模擬戦について簪さんへ問いかける。

「……それ、私とセシリアさんのこと。模擬戦が終わったらいろいろ話しかけられたから、かなり疲れた」

「え、そうなの？ よくセシリアの偏向射撃フレキシブルに対応出来たね」

簪さんの答えを聞いて感想を述べるシャルロット。そこから今日第3アリーナで行われた模擬戦の話題がメインになっていき、簪さんの紅椿に絢爛舞踏を6回使わせたことを聞いた瞬間にシャルロット達はかなり驚いていた。

「簪ってすごいんだね。紅椿に『絢爛舞踏』をそこまで使わせたのは初めてのはずだよ」

「それだけの操縦技量を持ちながらIS開発の技術力も持ち合わせているとは……本気で我が部隊に欲しいところだ」

「保留って言うってんだから我慢しなさいよ、ラウラ。でも、本気ですごいわ」

「簪さんってすげえんだな。今度コツとか教えてくれないか？」

第3アリーナでの顛末を知らなかった4人が思い思いの事を口にするが、一夏が簪さんに戦闘時のコツを聞こうとすると簪さんを含めた4人が示し合わせたわけでもないのに全く同じタイミングで無言のまま一夏を睨みつけるが、すぐに疲れた表情のため息をつく。

一夏の事だからその強さの秘訣を知りたいからそう言っているだけで他意はないと理解したのだろう。

それからは食事をしながら適当な話題で盛り上がり、簪さんをはじめて会った時にはあまり仲が良くなかったように思えた一夏だけでなく、鈴さん、ラウラ、シャルロットの3人ともうちとける事が出来たようだ。

食事が終わると早々に簪さんが部屋に戻ることを伝えてきたので付き添いの形で簪さんも部屋に戻っていき、二人を見送った後も食堂で少しの間雑談をしてから俺もセシリアも自分達の部屋に戻る。

「明日はパッケージ受領が主だけど、キャノンボール・ファストに向けた超高速戦についても色々と教えてくれないか？」

高感度ハイパーセンサーを利用した超高速戦は授業以外だと『銀の福音』との戦闘経験しかないので、正直言って不安要素しかない。

「わかりましたわ。……でも、わたくしのヒップに釘付けになって操縦ミスをしないように注意してくださいね」

「……了解。肝に銘じておくよ」

セシリアなりの冗談だとわかっているが、それでも実際にやってしまつ可能性がある以上は気をつけておくべきだろう。

~~~~~



会話が一段落するとケータイが着信メロディを奏でるので誰からの着信か確認すると、珍しいことにエドからの電話だった。

「はいもしもし。どうした、エド？」

『よう、アル。今大丈夫か？』

「そりゃ構わないが、いつたいどうしたんだ？」

『9月の27日って日本でキャノンボール・ファストの試合たる？その試合観戦チケット、何とかして手配できないか？』

どうやらエドはキャノンボール・ファストを生で見ようと思いい俺を頼ってきたようだ。

「そりゃお前1人分の観戦チケットだけなら用意できるけど、日本までの移動手段はどうするつもりだ？ さすがにそこまでは面倒見きれんぞ」

『ああ、それに関しては心配ない。バイトして航空券その他は既到手配済みだ。キャノンボールの試合チケットだけ手配できなかったから、そっちで何とかできないかと思つてな』

どうやらこちらが気にするまでもなかったようで、実際の試合観戦チケットを除いて既に準備を終えていたらしい。

「わかったよ。後でそっちのケータイにチケットデータ送付してやる。メールアドレス変更してないだろうな？」

『当然。やっぱ持つべきものは友達だよな』

「言ってる。当日は会えるとしたら試合後だからな」

『そりゃわかつてるって。試合、頑張れよ』

「ああ。それじゃあな」

『おう、また会おうぜ』

エドの励ましを受けてお互いに挨拶を交し合い、通話を終了する。

「本国の方のようでしたが、どなたですか？」

今まで通話の邪魔にならないよう黙っていたセシリアが誰からの電話か訊いてくるので、用件も含めて教えておく。

「告白した時にちょっと言ったと思うけど、本国の親友。アイツもISに興味持つてるから、キャンポール・ファストのチケット手配できないか電話してきたんだよ」

「それでしたらちょうどよかったのでは？ 今朝の通達で学園内のサーバーを経由して生徒全員にチケットデータが配布されましたから、それを送付するだけでしょう」

今朝のSHRで学園内のサーバーを経由して生徒全員の個人用PCが携帯電話にキャンポール・ファストの観戦チケットデータが送付されてきたので、誰かに送る場合学園祭の時よりも簡単に相手へ送る事ができる。

「ああ。そういうわけだから、メール打たせてもらうな」

セシリアに一言断りを入れてから学園から送られてきた観戦チケットデータを添付したメールを作成し、エドのケータイへ送信する。

コンコン

「どちらさまでしょうか？」

それが終わると同時に部屋の扉がノックされるので、セシリアが扉の先にいる人物に声をかける。

「セシリアちゃん、楯無だけど入っても構わないかしら？」

「楯無さん？……どうぞ、お入りください」

ノックをしてきたのは楯無会長らしい。夜も更けてきた時間の来訪なので、何か緊急事態でも起こったのだろうか？

「二人とも、こんばんわ。お邪魔するわね」

「この時間に来るってのも珍しいですね。何かあったんですか？」

「ええ。ついさっき一夏君にも教えてきたんだけど、例の組織の動きについてね」

「『亡国機業』ファントム・タスクの？ 一体何を掴みましたの？」

さすがに一度襲ってきた『亡国機業』絡みの情報ということならば聞き流すわけにもいかない。しっかりと聞いておこう。

「非公式な情報だけど、先刻アメリカのIS保有基地が襲撃されたらしいわ。十中八九狙いはIS本体でしょうから、ふたりとも自分の機体を奪われないように気をつけて」

ISの本体か。学園で本体を破棄した『アラクネ』のコアを使いまわすために必要なパーツ類を強奪しようとしたのか？

「了解いたしました。注意して行動いたします」

「了解。……」

「アルバート君、歯切れが悪いわね。どうかしたの？」

楯無会長が質問をしてくるので、訊いてみる事にしよう。

「楯無会長、襲撃された基地に保有されていたISに関する情報つてありますか？ 基地の襲撃理由はおそらくオータムが使っていたISコアを再使用する為の部品取りないしは新ボディの確保だとは思いますが、もしかしたら別の可能性もあります。詳細な情報があるようなら教えてもらいたいんですが」

オータムが使用していたIS『アラクネ』はアメリカ製第2世代機なので、ISを保有している基地に補修用パーツがある可能性は高い。コアがボディになじむまで時間はかかるだろうが、機体だけ先に修復しておく可能性も無いわけではないだろう。

「んー、その情報に関しては私も持ってないわね。でも、連中が何の目的で基地を襲撃したかも含めて調べておくわ」

「よろしくお願いします」

「一つ楯無会長に頼みごとをすると、会長はあっさりと請け負ってくれた。」

「と、ところで二人とも。ひとつ訊きたいこととお願いがあるのだけど」

その後楯無会長はかなり緊張した表情でそう言ってきた。

「訊きたい事とお願い、ですか？ どういったことでしょうか？」

「俺達に答えられることや叶えられる事ならやりますけど、どういった内容ですか？」

楯無会長には対オータム戦の特訓で世話になったので、その程度の

事なら何も問題はない。

「ホント！？　じゃあ、今日やった簪ちゃんとの模擬戦の感想と、その時の記録データを頂戴！！」

「……………は？」

だが会長の頼み事は予想の斜め上をいつていて、俺もセシリアも少しの間呆けてしまう。

「えつと……………理由を聞いてもいいですか？」

「そんなの簪ちゃんの勇姿を見たいし聞きたいだけよ！！　むしろ初の模擬戦相手を務めたいくらいだったわ！！」

普段周囲の人物を煙に巻くような飄々とした表情に見慣れているだけあって、本気で悔しそうな表情をする今の楯無会長の姿はギャップがありすぎた。

「そういうことでしたらお渡ししても構いませんが、あまり変なことに使わないでくださいね」

「あくまで私的利用の範囲で使ってくださいよ」

俺もセシリアも楯無会長が無意識に放つ凄みにあてられながらそう言い、それぞれ待機状態のISとPCを接続して簪さんに行った模擬戦の記録データ抽出をする傍らで模擬戦をして思った事を話し、データの抽出が終わるとそれを記憶媒体に保存して楯無会長に渡す。

「アルバート君もセシリアちゃんもありがとね。さあ、簪ちゃんの勇姿を見るわよ」

記憶媒体を受け取った楯無会長は俺達にそう言って、浮かれたまく

った表情で自室へ戻っていった。

「……楯無会長って、実はシスコン？」

「……あの姿を見ると、否定意見を述べる事が出来そうにありませんわ」

あとに残されたのは呆然としながら楯無会長を送る俺達だけで、リアクションが帰ってくることはなかった。

「……大浴場行って、さっぱりしてくる」

「……ゆっくりしてきて下さい。わたくしもその間にシャワーを浴びておきますわ」

今日はちょうどよく男子生徒が大浴場を使える日なので、色々な意味で疲れを癒すにはもってこいだった。

ゆっくり大浴場で1時間ほど入浴して部屋に戻ってくるとセシリアもシャワーを浴び終えてパジャマ姿 当然寮内の購買で売っていたいたって普通の物だ になっており、少しだけ明日の話をして半ば現実逃避をするように眠りにつくのだった。

## 5 1 専用機持ちどろしの邂逅（後書き）

そんなわけで、今回は日常系のエピソードでした。

今回はアルバートの高機動パッケージお披露目とキャノンボール・ファストに向けた訓練のエピソードになります。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7606q/>

---

Infinite Sky

2012年1月14日01時02分発行